# 龍眼族の異世界魔剣鍛冶

祐夢猫世乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
龍眼族の異世界魔剣鍛冶

【Ｎコード】
Ｎ８８６５ＢＷ

【作者名】
祐夢猫世乃

【あらすじ】
戦いの中で命を失った少年は、神々に選ばれて違う世界で新しい人生を歩むことを許された。
同時に手に入れたのは、【魔剣】を自由自在に創る力と、力の向きを変えられる力。
龍人の姿と特徴的な「眼」を手に入れた少年は、生前満足して送れなかった学園生活を、再び送ろうと決意する。

「魔剣は、護る力の権化だ」

信念を宿しながら学園生活をおくる少年だったが、とある双子姉妹を救ったことで少年の人生は、２度ひっくりかえることになる。

それを支えるのは、一人の小さな少女だった。

【魔剣】を創り、後に「天才魔剣鍛冶師」と呼ばれるようになる若き才能の芽生えが。

そして【龍眼族】が歩む、物語が今――始まる。

# ００１　別れ

武器と武器がぶつかり合う音、怒号、叫び声。戦いの音が耳の鼓膜を叩くように繰り返されていく。

同時に、自分の体が今、どんな状態であるのかも理解している。

腹は刃で貫かれて臓物が漏れ出し、血を流しすぎているせいか意識も朦朧としている。

いわゆる、死にかけ……といったところか。

もう、何をしようが手遅れであることはわかっている。

そう、すべては死に向かっての片道切符。

……しかし、あきらめたくなかった。

死ぬ、という『運命』に対して何か、足掻きたかった。

遠くで、少女の叫び声が聞こえる。

本当は近くで叫んでいるはずなのに、遠く。

意識を手放せば、楽になれる。頭ではわかっていること、だが。

無理だった。

守るべき人を守れたのだろうか。

ここであきらめてしまって、本当にいいのだろうか。

それは否だろう。誰にも望まれずに迎える結末など、認められない。

「情けねぇ声出すなよ……。」

麻痺して感覚のない手を無理矢理動かし、俺は少女の頭に手を置く。

燃える業火のような色をした髪の毛は、不安そうに揺れ。

いつもなら苛烈ではないものにしろ、確実な火焔が宿っている、金眼はすでに涙(えきたい)で何も見えない。

「……俺の分も、頼んだぞ。世界を、変えろ。……そして俺たちの名前を永遠に刻め。」

視界は闇に閉ざされ、少女の泣き顔も、もう見えない。

これでいいのか、そんなはずがない。

あと数秒だけでも長く、この世界に……。

「やくそく、まもってね」

生きていたかった。

数年後、とある石碑がそこに建てられた。

《ダウンファール・ゼロ・デスムーン、享年１８歳。

世界を守る戦士として生きた彼は、戦場で命を落とした》

# ００２　神と魂

『……ァール……ウンファール……』

声が聞こえた。

『……でしょう、……からを……』

『しか……けん……』

『さいあ……うん……ない……』

声は複数。

確実に複数だと判断できるのは、それが四方から……俺を取り囲むようにして声の発生源があるからだ。

…ちょっと待て。

俺は生きているのか？　なぜ、意識がある？

自問自答という、終わりのないループに耐えきれなくなり、俺は

目を開けた。

「お。目を覚ましたか、魂」

「……たま……しい？」

意識ははっきりとしているはずなのに、視界がはっきりしない。
そもそも、ここが何処かすら不明。
光が充満しているような感覚。無臭。音も人の声だけであり、詰まるところ。

不鮮明な事項が多すぎる。
そして、数秒後に視界がはっきりしたあと。
目の前には……。

「ちょっと、その言い方はないですよ」

背の低い金髪碧眼の美人。特にそれといった特徴はなく、ただただ美人であることが伺える。

「はぁ、めんどくせぇ」

機械的な身体にスロットマシーンがついたような、独特の容姿をした銀色のロボットらしき物体。ロボットにしては声に違和感がなく、人間臭い印象を持つ。

「うむ、意識は取り戻したようじゃの」

深く栄え渡る、緑に染まった髪の毛の、巨大な杖をついた老人。
巨大な杖の先には緑色の、金に換算すればどのくらいになるのか検討もつかないほど巨大な宝玉が。

「これで、少しは早く転生させられるね」

竜と人を融合させたような、人型で耳の後ろに角が生えた、青い髪の毛の青年。しっぽのようなものもチラチラと覗かせているあたり、普段想像する亜人類、といったイメージだ。

その４人が、俺を取り囲むようにして立っていた。

それぞれがそれぞれを、牽制し合っているような、また、綺麗に調和がとれているのかは定かではないけれど。

「状況が把握しきっていないようだの。お主、儂の声が聞こえるか？」

最初に口を開いたのは、黒い着物に身を包んだ老人だった。そう、巨大な杖を手にした老人である。

俺は発せられた言葉に対して頷く。

……と、ここで俺は違和感を覚えて自分の身体を見下ろした。

最初に思ったことは、傷がない。

俺は戦場で命を落としたはず。自分の腹が引き裂かれ、臓物が飛び出た状態で俺は意識をなくした。

もちろん、戦場で死亡したため傷も多いはずだ。

しかし、腹に手を当てても臓物どころか傷すらない。
痛みがない、という時点で気づくべきだったか。
何年も前の、戦闘なんてしていなかった頃の綺麗な身体である。
服も戦闘服ではなく、白いローブのようなものだった。
いったい俺はいつの間に、教会の関係者になってしまったのだろうか。

「儂の名前はヘーハイス。神じゃ」

神ぃ？
俺は突然【神】を名乗った老人を見上げ、ため息をつきそうになる。
場所は場所でそれらしいが、もう少しマシな、現実味のある嘘はつけないのかと、自称神ヘーハイスの身体を観察して……。

俺は息を吐きかけた口をひっこめた。

気づいてしまったのだ。
この老いぼれと判断していた老人から、隠そうにも隠し切れていない圧倒的なプレッシャーを。
光も届かないような深淵の森、そんな極限の環境ですら生き残るような火焔の獣如き風格を。

「うむ、緊張感ある張り詰めた、いい顔になったの」
「……神ですか」
「そうじゃ。武器の担当じゃ」

武器神ヘーハイス、と言ったところだろう。
老人ではなく、老神である。
……神に年齢があるのかすら疑わしいが。

「ところで……」
「はい、独り占めは禁止です」
そこに横槍。
龍人……ではあるんだけれど、この場所に居ると言うことは……。
一歩引くようにして身体をそちらに向ける。
そこには、青年の姿をした龍神が、いた。
手の甲には青い鱗。一つ一つがナイフのように鋭く、ギラギラと輝いている。
「初めまして。龍神のアグレスだ、よろしくね？」
イメージを一言で言い表すと、爽やか系。顔は笑顔を崩さず、目は細く。
しかし、俺の目には。
巨大な虹色の龍が、彼を中心に蜷局を巻いているような。その目から、光線が放たれているような……。
そんな風に思えてしまった。
あまりにも強大な存在に、俺は無意識に顔を背けてしまう。ヘーハイスを越えるオーラだ。直視してしまうと熱線で溶かされそうになる。
「その判断が正しいと思うよ。……見ほれて熱線に目をやられた魂は後を絶たない」
思い切り物騒な神だった。

はぁ、結局俺はなぜこんな場所にいるのだろうか。
理由がわからないまま、時は流れていく。

「……俺の名前はスロツ＝トール。運命を司っている」

心底面倒くさそうな口調。天を仰ぐような首部分の傾け角度。
銀色のボディに、どこか丸みを帯びているのか角張っているのか分からない形状の人型機械人形。
…結構精巧に作られているな、と思っていたら神だったという衝撃が、俺の背中を走り抜ける。

しかし、この神。
一切の威圧感を感じない。
前の二柱と比べると、一見無害のようにも感じられるほどだ。

「見くびらない方がいい。彼の胸部分で運命を本当に操作するんだから」

龍神様からの偉大なる忠告。
俺はなにも映し出されていない、胸部分の機械に視線を合わせる。
項目、という欄と、決定という欄が存在していた。
なるほど、運命をランダムに決定させていくわけか。
……適当だ。

ところで、いつの間に自己紹介合戦が始まったんだろう、俺には覚えがないんだが。

「あの……。あの！」

金髪の少女……おそらく彼女も神だろう。

長い髪の毛を膝の下、それこそ踝近くまで伸ばした彼女が、口を開いた。

「私を無視しないでください！」

# 003　アビリティ

「私の名前はホープ。『地球』で英語圏内にいれば分かりますでしょう？」

ほかの3柱を遮るようにして俺に話しかけた金髪の女神は、俺を見上げるような地点に移動する。

歩いている、と言うよりは滑っている。足はほぼ動かしていないのに、場所だけを移動しているような感じだった。

「初めまして！」

「……は、初めまして？」

元気いっぱいにそんな事を言っているところ申し訳ない。

この女神、かなり頭悪いんじゃないかと思った。初めましてっていうか、今初めてあったわけではないだろう。

魂としてさまよっていた俺を、この場所まで誘導したのはこの神たちではないのか？

「お前は黙ってろよ、ホープ」

「何を言ってるんですか、スロツ。貴方は適当に魂の運命を決める、アグレスは最終的に自分の利益になるように企んでいる、ヘーハイスは利用する気満々。この状態で制止させる何かがないと最終的に困るのは彼です！　その為にこの希望神ホープが！」

ビシィ！　と俺を指さす女神。

希望神って、名前そのままじゃないか。もっと一捻り入れてくれよ。

俺がそんなことを考えているのも知らないのだろう、希望神ホープは「ふふん！」と得意げに無い胸を張っていた。
……俺の要望を聞いてくれるのかと思ったが、別にそうでもないような気がする。

「マジかよ……」

神だったら、俺の思っていることくらいは分かっているのだろう……と、ホープの方を見たらきょとんとされた。
周りの男神3柱が笑いをこらえるように震えているのを見るに、どうやらほかの神は俺の本心を分かっているらしい。
……なんだか、ホープが可哀想に見えてしまった。

そもそも、他の人が俺に何をしてくれているのかすら知らないんだけど？

「ホープ……さん？」
「私は貴方に何でも、一つ欲する特殊能力（アビリティ）を与えましょう！　ぽいっ」

……今、「ぽいっ」って言った？
と、俺が思ったすぐに、上の方から何かが飛来してくる風を切るような音が聞こえ。
俺が身体を動かそうとする前に、それは頭に直撃した。

同時に、悶絶してしまいたくなるような痛みが後頭部に走る。

「ってぇ！」
「キャッチしない貴方がいけないのです！」

断言された。
……仕方がないため、そのまま落ちてきた物体の方に目を向ける。
何かの本のようだ。
六法全書よりも恐らく分厚く、さながら鈍器に使えそうである。
題名は。
「……【特殊能力一覧】？」
「そうです。……その中に書かれている特殊能力、全３０００のうち一つを貴方に与えます！　よく考えてお決めください！」
「ちょ、ホープ。今は俺たちが話をしているんだ、面倒なことを絡ませるな！」
ついに怠慢ぎみの運命神、スロッ＝トールがキレた。
胸の部分のスロットマシーンが目まぐるしく回転し、対象である希望神ホープの運命を決定する……が、特に変化は起こらない。
「貴方は忘れたのですね。希望神には如何なる手段を用いようとも、神はその行動を阻害することが出来ないのです」
「……普通の神なら、な」
スロッ＝トールが憎々しげにそう呟いた後、すごすごと引き下がる。
ホープは何も無かったかのように俺に向き直ると、その本を開いて説明を開始する。
「大きな文字で書かれているのが能力名、その下に羅列されているのが特殊能力の説明です。明記されていない部分もありますが、十分参考に出来ると思います。あと、言語は貴方の理解できる言語になっておりますので！」

ぺらぺらと俺は数ページ、その本をめくってみた。
アイウエオ順ではなく、アルファベット順だから少し探しにくいか。

【見捨戻し（アバンドン・リバース）】、『一度諦めた選択肢を、後々に利用できるように使うまで脳内保存される能力』。
どこに使うのかねぇ、こんな能力。

やはり、戦闘に使えるものだけではないようだ。

「……しかしここまで好き勝手していいのか」
「貴方には言われたくないのですよ、飴の裏に猛毒を隠したヘーハイス？」
「ぐっ」

……まあ、そんなものだろうと思ったけど。
鍛冶神ヘーハイスは、気まずそうな顔でホープから目を逸らしつつ、特殊能力の一覧に手をかざす。

「儂が与えようと思うのは、これだ」

本が勝手にめくられ、【魔武具創造（マギア・クリエイト）】という欄までページがすっ飛んだ。
これなら、長い時間をかけて一枚一枚めくらなくとも一気にめくった方がよろしいかと。

【魔武具創造（マギア・クリエイト）】、『魔武具鍛冶の絶対的才能と、自由自在に魔武具を創造し、使用する能力を得る』。

……なんだこれ。

# ００４　交渉内容

「気に入ってくれたかの？」
「いや……なんですかこれ」

プレッシャーに気圧され俺が後ろに一歩下がると、鍛冶神ヘーハイスは唇を片方だけつり上げた何とも言い難い笑みを浮かべた。

「儂との交渉に乗ってくれるというのなら。儂はこの能力を授ける」
「代償は？」
「もう一度、人生を全うできたのなら。魔剣の神となって儂の補助に入れ」

これだけを聞くと、俺に対してはメリットしかないようなイメージだ。
自由に武器・防具を作れる。
死んだら神になれて、永遠の命を手に入れる。

メリットしかないような気がするが恐らく、能力もそんなに最強ではあるまい。何処かにデメリットか制約が存在するだろうし、恐らく神となってからは年中無休だ。
この世界、白いなにもない世界に時間が存在するのかは分からないが。

「じゃあ、次は僕からの交渉内容だね」

爽やか系イケメン、龍神アグレスがその髪の毛を掻きあげながらヘーハイスの存在をどこかに押しやって進み出た。
俺はもう一歩、後ろに下がる。

「僕との交渉に応じてくれるのなら、君にこれから送る世界の中で一番力ある種族として送り出す」
「……俺が行く世界には、複数の種族が？」

若き容姿をした龍神は、俺の質問にうなずきで肯定を示した。
虚空に向かって手をのばすと、何かのモニターらしき、半透明の四角い板のようなものが生成される。

映し出されているのは、８つほどの紋章。
それがどう言った意味を表しているのかは分からないが、六角形の頂点に６つの紋章が位置し、その内側に残った２つの紋章が入り込んでいる。

「世界：『アルカイダス』には、基本的な種族として６つの種族が存在する。エリシュ・ウェイカー・サイコル・サミュリ・ケレイジ・フライドの６つだ。」

外側を囲んでいる６つが淡く光る。

「魔法に秀で、膨大な魔力許容を持つ知勉族（エリシュ）。
瞬発力に秀で、秘められた潜在力を解放する醒眼族（ウェイカー）。
無詠唱魔法、『魔能力（サイキック）』を使いこなす魔能族（サイコル）。
機械の身体を持ち、多彩な仕掛け（ギミック）を身体に宿す機刃族（サミュリ）。
最強の敏捷力を持ってして、臨機応変に状況を把握する腕獣族（ケレイジ）。
翼を持ち、三次元的な行動を可能とする翼羽族（フライド）。
これを『アルカイダス』は【６大種族】と呼んでいる」

……途中から聞くのを放置していた。
こういうのは苦手だ。生前はあまりしていなかったが、ゲームの

ような説明は苦手だ。
訳も分からない機械の、取扱説明書の朗読を聞かされているようでいらいらする。

「……ちゃんと聞いていたかい？」
「途中までは」
「ははっ、素直だね」

龍神アグルスはそういって笑うと、光る紋章を中央の2つに変えた。
1つは煌めく光のような紋章で、1つは……。

「ここからは僕と、これからの君に関係する事を説明するよ。突然変異種族の謎法族（カラミタ）と、古代伝統族の龍眼族（レザール）をね」

# 005　引斥制御

「……という訳なんだ。次はちゃんと聞いてくれたかな？」
「……とりあえず、龍眼族（レザール）が神話にも登場するほどの種族で、世界『アルカイダス』の最初を生み出したって言うのは分かった」

これまた龍神の話は長い。
自分の管轄である種族なのかどうかは分からないが、体感時間はだいたい1時間くらいだろうか。
長い。とにかく長い。

「ふむ、魂なのに意識をとばせるなんて、君はおもしろい存在だね」
「知りませんよ」

簡単に要約してしまえば、龍眼族（レザール）は8種族のなかで一番膂力が強く、耐久力もある。
魔法も使えるが、それは普通の魔法とは違う古代魔法と言うものを好んで使う……と言うことらしい。
魔法の「ま」の文字も前の世界にはなかった俺に、普通の魔法と古代魔法の違いなど分かる筈もないのだが。

「まあ、説明も終わったところで俺の交渉条件を。差し出すカードは『転生後の種族を龍眼族（レザール）にする』こと。代わりに『龍眼族（レザール）の存在を、アルカイダスの確固たる地位に定めてほしい』」
「生きている間に？」
「生きている間に」

俺が疑問を持ちながら訊くと、龍神は頷いた。

「もちろん、食物連鎖の頂点に君臨しろとかっていう意味じゃないよ。龍眼族（レザール）は一般的には知られていない、簡単に言えば隔離されている種族なんだ。一応データは残っているが、住処に誰も用事がない限りは寄り付こうとしないし…。そんな状況を打開してほしい」

……正直言ってもいいだろうか。

恐らく、この交渉はハイリスク＆ハイリターンを極めていると思う。

……と。

「そちらは？」

「私？　私は魂が、幸せに次の人生を送れるというのなら何だって構いませんよ」

希望神は理想的な返事をしてくれた。

どうやら、運命神のスロツ＝トールは無関心。

鍛冶神のヘーハイスと龍神アグルスは条件を飲んでほしい。

そして、希望神ホープは俺のことを考えている……といった感じらしい。

さて、これからどうするかが問題だ。

そもそも、条件を出した2柱のリスクが俺には分からない。

死ぬ前は、誰かの指示に従って動いた。

それは親でもあり、親友でもあり、はたまた教師でもあり、権力であり。

しかし、この神たちは、俺に自由をくれるという。

自由、それが一番怖いものだと俺は聞かされていた。

自分はなにをしてもいい、しかし、責任は自分で取らなければな

らない。

「……どうするんです？」

俺は、ホープの顔を見つめて我に返り、自分の探していた能力を求めて一覧をめくった。

「……これでお願いします」

「……【引斥制御（グラビシオン・コントロール）】？　こんな能力、なにに使うおつもりなんですか？」

俺が選んだ能力を希望神ホープは、訝しげな顔で反復した。

こんな物なにに使うのか、とでも言いたげな目。

実際に口に出して訊かれたが。

その能力は、読んで字のごとく『引力と斥力を自由自在に操る能力』だ。

「俺にとっては一番使いやすい物なんですよ」

前世は、この能力を使っていたのだから。

とはさすがに言うわけにも行かず、不敵に笑いを浮かべることでそれ以上の質問をシャットアウトする。

希望神は困ったように考え込んでいたが、数分後に頷いた。

「分かりました。貴方が純粋な力の使い道を選び、正しく能力を使ってくれるのを信じましょう」

と、不意に。

希望神は、俺の心臓あたりに手を置いた。

思った以上に小さな手だ。

きめ細やかな肌の指先が、金色に光ったと感じたその瞬間。

「はい、終わりました」

パッと手を離される。

特に違和感などは身請けられなかったが、ほかの神たちも渋々ながら頷いているところを見ると、どうやら譲渡は完了したらしい。

「……特に変わったことはなさそうだが」

「そうですね、こんな場所で引力を生み出されると困るので、転生するまでは封印です」

どうやら、ここで魂だけの存在である俺に好き勝手されたら困るらしい。

そんなことを考えていると、いつの間にかほかの2柱は俺に詰め寄っていたようだ。

口には決して出さないが、無言のプレッシャーが生前で感じたどんなことよりも重く俺にのし掛かる。

「……わかりましたよ。……どちらの条件も飲みます」

「はっ？」

「はっ？」

鍛冶神ヘーハイスと龍神アグレスが同時に、虚を突かれたような顔をした。

# 006　異世界へ

「どちらにも最善を尽くしますよ」

俺はそうやって話し終わると、運命神スロツ＝トールの顔をみた。
相変わらず面倒くさいといったような顔。その表情に変化はないが、目がかすかに光ったような気がした。

もっとも、気のせいだったらしくその後は何の反応も見せてくれなかったが。

「そうか、それなら楽しみだね」
「それなら構わん」

2柱も納得してくれたらしい。
俺がほっと息を吐くと、2柱の神は俺に手を差し出す。

「俺のは魂の構造を作り替えるから、少し痛むかもしれないが我慢してくれ」

物騒なことを言ったのは、龍神だった。
どうやら、神の力という超常現象で魂の情報を改竄してくれるらしい。

「失礼」

龍神の差し出した、鱗付きの手が俺の腹に食い込む感触がした。
ぐっと息が詰まるその間に、銀色の光が閃く。
これ、差し出す威力ではなく完全に殴られている気がする。

まず、最初に胃の中をミキサーでかき回されているような、別次元の違和感を覚えた。
痛みはないが、とにかく気持ち悪い。魂に嘔吐する機能がついていないのは不幸か幸いか。

次に、身体を抵抗に電気を流しているような一瞬の痛みに何度も襲われた。
断続に続く痛みは、頭から足のつま先に及ぶ。
さらに、回数を重ねるほどそれは威力を増し。

「……っ！」

心臓が貫通したかと錯覚するほどの痛みが走り、思わず息を詰まらせる。
一体これは何なのか。ふらつく頭を振って意識をはっきりさせると、ぼやけた視界の先で龍神と鍛冶神が驚いた顔をしていた。

「……耐えられるとは予想外だな」
「そうじゃな、儂も驚いた。……魂が欠けるかと思っていたのじゃが。まさか……」

何の話をしているのか、さっぱり分からないという。
そして龍神は俺を見やり。

「うん、おけ」

なにがＯＫなのか、はたまた神がそんなに軽い言葉を発していい

のかと疑問が渦巻く中、彼は笑った。
その顔は、誇らしげでどこか眩しかった。
変なむず痒さを感じ、俺は首を振って鍛冶神ヘーハイスの方に向き直る。

ヘーハイスは、何か困ったようなそれで居て驚いたような顔をして俺を見つめていた。

「そうじゃな、……龍眼族(レザール)で鍛冶師は一般的な職業の一つでもあるから、中々にラッキーかもしれん。……しかし、魂にいっさい欠けがないのは……」

と、なにを言っているのかさっぱり分からない内容をブツブツと呟き、俺の頭に杖をかざす。
緑色の宝玉が、柔らかな光を放つ。

「そうじゃな、欠けを補完する方法ではなく……魂をコーティングする方法にしようかの。アグルスもそれで良いな？」
「しかし、その場合だと能力が強くなりすぎないか？」
「構わんじゃろ。龍眼族(レザール)の未来を背負う者だからのぉ？」

結局この神たち、俺のことを思っているのかどうなのかよく分からない。
人間を超越した何かであることは確かなのだが、神にもやはり個性という物はあるのだろうか。

「む、終了したぞ」
「おけ。後は転生するだけだね」

やっと終わったらしい。

俺はここを離れてもう一つの人生を歩むだけか。

「俺たちは、君に対して何かを強制することはないだろう。ただ、世界『アルカイダス』では君の思い通りにならないことが多々ある」

それは分かっていた。

前の世界でも、俺は理不尽な戦いの最中にいたのだから。

「正義」と「正義」が衝突しあう、そのような戦いに従わされてきた。

その中で生き残れなかったのは、俺の心残りだろう。

好きな人を、あの世界に残したままだということも。

「しかし私たちは、貴方が大人しく世界に順応するなど期待してはいないのです。【掟破り(アウトサイダー)】な存在として、貴方を送り出す。最後に、何か必要な物などはありますか？」

ホープにそう言われ、俺はしばし頭の中で考える。

しかし、特に見つからなかった。

何とかなるさ、の精神が動きだし。気づけば俺は、首を振っていた。

それを見て４柱の神々はうなずき、俺を取り囲むようにして立った後に目を閉じて何かの呪文を唱える。

次の瞬間、視界が真っ暗になって俺は重力を感じ。

地面に落とされていくような感覚がした。

# 007　雪原

「ぐっ」

空から降ってきて、地面にたたきつけられたような感覚がした。
目をあけて周りを見ると、距離感がつかめなくなるほどの白一色だった。

どうやら、雪原の真ん中に落下したらしい。
そこまで考えて、俺は自分の呼吸を確認した。
身体を作り変えられているとは言え、ここは異世界『アルカイダス』。
空気はあるか、または空気に有害物質は含まれていないか。

どうやら大丈夫らしい。何か胸につっかえている感覚もあるが、それも徐々に消えていった。

「よし、と」

俺は次に自分の身体を確認した。
顔などは確認できないが、身体に目立った変化は……。
あった。

手の甲に、黄緑色の鱗が数枚張り付いていた。
これが、龍眼族（レザール）の特徴か。さすが龍人、といったところ。
尾などは見あたらないが、どうなんだろう。
龍神とは、流石に仕様が違うのだろうか。

立ち上がり、周りを見回す。

特に先ほどと変化はなく、津々と雪は降り積もっていく。
不思議なほどに、寒さは感じられなかった。

「と。……とりあえず、歩いてみるか」

独り言のように呟き、俺は前に歩き出す。
広大な、先の見えない雪原の、出口を目指して。

数時間後、俺は座り込んでいた。

「……終わりが見えねぇ」

地平線まで真っ白。すでに5時間ほど歩いたのだろうか、体力を消耗はしていないようだが、心が飽きたのだろう。
一度座り込むと、立ち上がる気持ちもなくなってくるのが人だ。
俺は食糧問題を考えることにした。

「……周りにはなにもなし。……いや、あれは何だ?」

俺は、白い塊がこちらに向かってくるのを視認して、身体が震え

るのを感じた。
決して怖さからのふるえではないことは、分かっていた。
武者震い、という前世の東洋地方の言葉を思い出す。
俺だって、そこには3年間通っていたのだ。その国での言葉も、現地の人と大差ないくらいにまでコミュニケーションはとれるだろう。

……いや、今の俺にこのような思考は必要ない。
必要な物は、たった一つだけだ。

素手と手に入れた特殊能力で、どのようにアレに打ち勝てるか、ということだ。

目の前に現れたのは、壁かと錯覚するほど巨大な熊だった。
いや、熊っぽい生き物と判断した方がいいだろうか、白い毛は氷で出来た針山のように逆立ち、目は赤い。
牙は肉食動物のそれであり、血で赤く染まっているのが迫力を際だたせている。
体長は3メートルだろうか。のし掛かられたらひとたまりもないだろう。

……戦えと？

「……悪いが、俺も腹が減っているんでね」

無意識に、そのような言葉が口から漏れ出た。
異世界の動物が、どれほどの物なのか、調べるにはもってこいだ。

「グルゥ……」

その熊擬きは、涎を垂らしていた。

「今すぐお前を食らいつくしたい、骨も残さない」とでも言っているかのようだ。

実際、前世で俺は……武器を使っていたとはいえ、猛獣を殴り殺したこともあったような気がする。

……何年も前のことだ、それがライオンだったか豹だったか、それすら忘れかけているが。

軽くジャンプして、俺は身体がいつも通りに動くことを確認する。

身体に今までの疲労は殆ど残っておらず、空腹が目立ってきたこと以外は問題なく全回復している。

そして俺は。

うなり声をあげる巨大熊に向かって、拳を構えた。

# 008　戦闘

とりあえず、俺は自分の膂力（りょりょく）がどれだけ強化されているのか、確かめることにした。
動かない巨大熊の懐に走ってもぐり込み、左足に負荷をかけて右手を振り切ってみる。

ちなみに、拳で殴るのではなく手のひらを固めて殴った。
相手の硬さが分からない以上、手が折れてしまうと大きな損失になる。
龍が熊に負けるとは思いたくないが、俺はこの世界に降りたって1日もたっていない。
それどころか、半日もたっておらず力の使い方が分からない。
そのため、今までの殴打で有効なのかまったく見当がつかないのだ。

「……あり？」

パリン、とガラスが割れる音がした。
しかし熊は、俺を見下したように見つめるだけだった。
手を上に振り上げ、銀色に光る爪が閃く。

俺は横にローリングしてそれを避けるしかなかった。
スローモーション再生されたかのように、爪が俺の右横をすり抜けるのを感じた。
一瞬の判断。雪原に深い爪痕が残ったのを考えると、避けなければ即死だったと背中に寒気が走り抜ける。

さて、どうするべきか。

熊は本格的に俺を、狩りの対象に入れたのか。
目は爛々と光っているように感じられ、その視線は俺をはずれることがない。

熱い視線は、女の子のみにしてほしいところだが。

それならば、俺は【引斥制御（グラビシオン・コントロール）】を試すしかなさそうだ。
やり方は希望神ホープが宣言していたように、記憶の中に勝手に埋め込まれていた。
幸いにも記憶を辿ることが困難なほど複雑と言うこともなさそうだ。

『引力、または斥力を付与する対象を指定し、どこに作用するのかを指定し、力のレベルを指定する』

対象は俺かそれとも俺の前に立っている巨大な熊か。
作用地点は、どこを力の起点にするか。
レベルは、斥力引力のレベル０を基準として、起点に対してどれほどの強さで押しとばすか、はたまた引っ張るか。
レベルは３０まで。３０（リミット）に近ければ近いほど、その力は強い。

という、たった3ステップの記憶。
一見すると簡単そうに見える。しかし……。

「……やはり、起動しないか」

俺は、あの巨大熊の正式名称を知らない。
対象の本名、または正式名称が必要らしい。
つまり、ある程度は相手のことを知らなければならないと言うこ

と。

そう、それを知らない限り、俺は……。

《対象：自分　作用地点：上空１０メートル　レベル：引力（グラヴィティ）１０》

完全に自分を動かす方向に思考を移し替えていた。

翼を持った感覚が、身体を心を走り抜ける。

同時に俺は宙を舞っていた。

《対象：自分　作用地点：前方９メートル　レベル：引力（グラヴィティ）１５》

風が、心地よく俺の身体をすり抜ける。

加速しつつ、俺は拳を握り込んだ。

威力は、速度によっても上昇する。

なら、重力で加速させればそれこそ、威力は何倍にも増大されていくのではないか。

目の前に、白い壁が迫る。

氷という毛に覆われた巨大な熊が接近する。

獣の目線と、俺の目線が交差する。

ドサッと音がした。
俺は血で濡れる手と、その手の中に握ってある心臓を握りつぶして、巨大な、白い亡骸を見やった。

引力により加速した拳は、氷のように氷結していた毛を突き破り、皮膚も突き破って。
俺は、無意識のうちに心臓を抜き取っていたのだ。

「……はぁっ！」

俺は心臓を雪に捨てた。そこから、血が流れて雪原が桃色に染まっていく。
無感情。獣を殺めたことに罪悪感も何も湧かない。
感じたことは、ただ一つ。

俺は、前世よりも弱肉強食の世界に来てしまったらしい。

# 009　気配

熊の生肉は、食った瞬間身体がさらに冷えた。
体毛に覆われていて、前の世界なら比較的筋肉が疲労しないように暖かいはずなのに、この熊の動力源はいったい何だったのか。
体毛が、体毛の役割を果たしていないような気がする。なるほど、ここが異世界か。

「……まあ、食えないわけではないからな」

とりあえず、俺の命を長らえてくれたこの生肉には感謝をしよう。
残ったガラスのように透き通った骨と、役割を果たしていないように思える体毛を見て、次に自分が引っ張り出した心臓を見た。
……これ、どうしようか。

心臓はすでに活動を停止しているため、その辺の雪の中に埋めてやることにした。
周りの雪の重力をなくし、そこに対象外の心臓を投げ入れてから引力・斥力バランスを自然の状態に戻す。
この白い物資は雪であっていたらしい。

埋葬完了。

「……はぁ」

俺はため息をついて、周りを見回した。
一応食する時も周りの気配に気を配ってはいたが、どうやらハイエナのような獲物の横取りをするような生物は、雪原に居ないらしい。

むしろ、……この巨大な熊だった物が雪原の生態系の頂点だったというのはあり得るだろうが。
まあ、流石に繁殖していないわけは無かろうし、特に問題がなければいいのだが。

しかし、方角を見失ってしまった。
周りをいくら見回そうが、地平線上に何もない雪原にたいして何を目印にしろと言うのか。
太陽も、うっすらと雲の外側に見えるが。
それが果たして太陽なのか、仮に太陽として必ず地球と同じ方角に沈むのか分からない。
転生する前に、『この世界の知識』を要求しておけばよかった、と今更後悔した。

知識とは、力だ。
生きるための力だ。
なのに、俺は……。

自分が悔しくなった。
俺は、前の世界の戦闘に破れ、この世界で何を求めたのか。
すべてが無駄になったような気がして、そばにちょこんと座っていた女の子に気づいた。

「……は？」

まて。
いつの間にここまで接近してきていた？
俺は数分前まで全方角、地平線のあたりまで何も居ないことを確認してから考え事を始めたのだ。
そもそも、考え事をしながらも無防備に索敵をやめたわけではな

く、物音や気配があればすぐにでも対応できるはずだったのだ。
しかし、この少女はその索敵をかわして、ここまで来たというのか？
気配を遮断し、さらに足音もたてずに？

「……なるほど、中々のことを私はしたようですね」

少女が穏やかな口調でそう言った。
どうやら、俺に対して話しかけたらしくそれに気づいた俺は肩を竦めてしまう。
おかしいのは、少女が殺気も何も発していないということだろうか。
違和感しかない存在と、数秒視線を交わして俺は呟く。

「……あんた、一体何者なんだ……？」

人間離れした美しさ、と形容すればいいのだろうか。
女神のような出で立ち、と例えれば合点がいくのだろうか。
とにかく、美しかった。

雪を一つ一つ紡いで毛にしたような銀髪。
煌々と燃える、生命の炎を連想させる灼眼。
すらりと伸び、きめ細やかな真珠を思わせる肌。
女神に祝福されたレベルではなく、それこそ女神のような端正な顔立ち。

俺の質問に対して、その少女はにこっとはにかんだ。
そして俺に近づいて一言。

「私の名前はイデア。……調和（バランス）と調整を司る神です」

……神が、
文字通り、
降臨した。

# ００９　気配（後書き）

# 010　腕輪

「そんなに警戒しなくてもよろしいのですよ？　私は貴方に試練を与えに来たわけではなく、今回は転生会議に参加できないことへのお詫び及び、それについての品を持ってきただけです」

と、目の前の少女は言った。

それにしても人間離れした美しい容姿だ。女神だから仕方ないだろうが。

それにしても、転生会議ねぇ。

あれを会議というのか、ただの交渉場所のような気がするけど、どうなんだろうか。

「へーハイスとアグルスに好きなように身体を改造されて、どこか不満なところはございませんか？」

「……特にないです」

力に代償があるのはどこの世界でもあることだからな。

龍眼族（レザール）というおそらくこの世界『アルカイダス』最強の種族はもらっているのだし、いちいち気にすることもないというか。

俺が首を振るのを確認すると、女神イデア微笑んで。

懐から何かを取り出した。

「……腕輪？」

「今さっき。知識が必要だと願いませんでしたか？」

一瞬のけぞりそうになったが、相手が女神だということに気がつ

いて何とかそれは回避できた。
俺の思考を読みとることくらいは容易なのだろう。

差し出されたのは白と黒の腕輪だった。
リストバンドほどの大きさで、それぞれ右手と左手に装着すると手にフィットするように固定される。

「……っ！？」
「心配なさらずとも、問題はありません。白い方を『アルバ・アルミリア』、黒い方を『ニーガ・アルミリア』と呼びます。」

任意ですので、展開と心の中で唱えてください、とイデアは言った。
その通りにすると、目の前に半透明のディスプレイのようなものが広がった。
大きさはタブレット端末程度だろうか。視界を遮るほど大きいというわけではなく、逆にあってもなくても変わらないほど小さいわけでもない。
「……なにこれ？」
「今はなにもありませんか。とにかく、それを装着したまま色々な場面で展開を繰り返してください。あなたがこの世界で生きるための知識を与えてくれるでしょう。では」

キラキラ、と女神イデアは輝いたかと思うと、次の瞬間には居なくなっていた。
俺はしばしの間、放心したように突っ立ってそのあと我に返る。
そして両腕に二つの腕輪があることを確認し、今さっき起こったことが夢でも何でもない、現実だと言うことを認識して。

「結局、どっちにいったらこの雪原から抜け出せるのか、聞くの忘

れた。……知識をもらっても、現状把握をするのを忘れてるじゃないか……」

と、しても意味のない後悔をすることになってしまったのだった。

# 011　推測

三日三晩さまよったあげく、ついに俺は雪原から抜け出した。
やってられなかった。しかし、目の前に木が生えたときの感動というものは、この世界にきて初めて喜んだ瞬間だろう。
巨大な熊を殺したのは自分が生き残るためであり、殺したときには達成感もなにも感情はわかなかった。
女神イデアから『知恵』という道具をもらった時も、そこまで喜ぶことはなかった。

雪原で一生を暮らしていく気はないからだ。実際、左右の『アルミリア』は確かに役に立っている。白いほうは生物の正式名称などの情報を俺に与えてくれ、黒いほうは……未だに機能した覚えはない。

「言語はどうなってるんだ」

遙か遠くに、確かな人影を視認して俺はつぶやいた。
イデアたちは神だ。もちろん、どんな言語でも理解し、その言語で話しかけることはできるのだろう。
しかし、俺はあくまでも人だ。いくら神々に体を再構築されて最強の種族を得ても、記憶がなくなっていない限り脳まで再構築されたというわけではないだろう……。

とも思ったのだが、よくよく考えてみれば【引斥制御（グラビシオンコントロール）】の使用方法を記憶の中に埋め込まれているため、言語も適応されていると判断。

人影に向かって歩いていったのだが、どうも様子がおかしい。

少年が三人に少女が一人。
しかし、どうも様子がおかしい。

何度も言うが、どうも様子がおかしい。

少年の方が、少女を壁に追いつめているような構図になっているのだ。
なんだか、どうなっているのかいまいち良くわからない。

「とりあえず……」

今の俺とは関係のないことだが、こんな場所を見逃すほど俺も人は悪くないつもりだ。
同時に、だからといって無償で助けるほどお人好しでもないのだが。

助けることにメリットは見いだせなさそうだが、この世界の少年の一般的な戦闘能力を測るのには便利そうな状況（シチュエーション）である。
であるからにして、好戦的にいかない理由は見あたらない。
だから、叩こう。

「よっこらせっ」

俺は少年たちが少女を追いつめている家屋の壁を指定し、そこに向かって【引斥制御（グラビシオンコントロール）】を発動。
数秒とたたないうちに、数百メートルはあった距離が一気に縮まる。

『展開』

……なるほど、名前はアルフ、アリベ、イルダ……か。

この腕輪、その性能が優秀すぎて相手のプライバシーにも踏み込めるのは、果たしてどうなのか。

俺はそんな小さなことには目を背け、唖然としている3人の少年と……うずくまって何もいわない少女を見下ろし。

「……楽しそうだな。俺も混ぜろよ」

と、十中八九悪いと思われる顔を浮かべながらそう言ったのだった。

# 012　会話

「な、なんだよお前！」

超高速で迫ってきた謎の人物に、その3人は度肝を抜かれたのか。
こちらから聞けば失笑が漏れ出てしまうような、情けない声で必死に威嚇する。

そして、俺の手の……甲に生えている、鱗に目をやって。

「れ、龍眼族（レザール）……！？」

と、3人全員のけぞった。
アグルスの説明によると、龍眼族（レザール）というのは大変珍しい種族で、ほぼ限られた地域にしか生息していないという。
つまり、この3人は話に聞いたことしかないのだろう。
そう考えると、納得もいくと言うことだ。

作戦変更。戦闘は不可能であると断定して、俺は3人を散らせることに専念する。
……いや、そんなことも必要なかったようで3人は悲鳴を上げながら走り去っていった。

「……大丈夫か？」
「……は、はひっ」

とはいえ、この少女も相当怯えているようで、声も震えている。
容姿が悪いのか、はたまた人相が悪いのか。
どちらも同じような気がするけど、あまり気にしない方針で。

「……家は？」
「あっち……ですっ」

少女の指さす先には、数軒の……煉瓦造りの家が建っている。
本当に数件で、村や町というよりは集落のような印象を受けた。

「あれは……村なのか？」
「……はいっ。えっと、お名前は……？」

そういわれて初めて、俺は自分が名前を名乗っていないこと。
そして、今さっきの情報展開のなかに、少女の名前が入っていなかったことに気づいた。

さて、この場合俺はなんて名乗ればいいのだろうか。
生前に使っていたダウンファール・ゼロ・デスムーンの名前はもちろんのこと、使えないだろう。
俺は戦士でも皇族でも無くなったのだ。
それなら、いっそのこと自分で名前を付けるか……。

「シルバ」
「ひぅ？」
「シルバが、俺の名前だ。よろしく頼む」

はい、と少女はほほえむ。
よく見ると、少女は金髪だった。
頭の上にちょこんと小さなとがった耳が、顔の隣にある耳とは別にあることを考えれば確か……腕獣族（ケレイジ）か。
思ったよりも端正な顔立ちで、希望神ホープや女神イデアとはジャンルの違う、どこか愛くるしさを含んだ美しさ。

麗しいというよりは、おそらく可愛いの分類に入るのだろうその容姿に。

俺は数秒、言葉が発せなくなっていた。

「あ、私の名前はエスペランサ。家までお連れしますね、シルバさん」

「いいのか？」

「はい」

当然だと言いそうなそんな顔で、彼女は笑う。

その顔に、警戒心という3文字がないことに気づき、俺は頭を抱えそうになった。

どうやら、このエスペランサという少女は……すぐに人を信用する性質らしい。

犯罪に真っ先に、巻き込まれるタイプの人物だと知った。

さっきの事態もあり、少し不安になってしまった。

# 013　進入

「エペ！　どこに行ってたんだ！？」

エスペランサが、村の家のうち特に大きな、赤煉瓦の前に迫るとそこから中年の男が出てきた。
どうやら、その風貌から察するに彼女の父親らしい。

エペ父は俺のことに気づき、訝しげな顔を見せたが即座にエスペランサが説明をしてくれた。

「このお兄ちゃんが、私を守ってくれたんです！」
「そうなのか？　……れ、龍眼族（レザール）だと！？」

この人にも驚かれた。
どうやら、今回は俺の手ではなく……目？
今まで鏡がないため把握できなかったが、俺の容姿にも多少差異が生じているようだ。

…こまったな、このままだと自分の容姿が確認できないのだが……。

「こ、言葉はふつうに通じるのか……？」
「通じますよ……。お父さん、龍眼族（レザール）をなんだと思ってるんですか」

へぇ、この世界の一般的な龍眼族（レザール）の立場がわかったぞ。
正直、このこそこそ話も聞こえているからな。恐らく隠す気がないのか、耳を傾けなくても聞こえていたけれど。

「うーむ」
「なに悩んでいるんですか。一旦家に入らせるのですよ！」

家に入れるかどうかで悩まれても。
どうでもいいが速くしてくれると助かるんだが。
なにより、近隣の方々の目が痛い。
興味半分、畏れ半分の目が容赦なく突き刺さってくる。

「そうだな。一旦中に入れるか」
「というわけですシルバさん。ようこそ」

頷き、エスペランサに連れられて家の中へ。
中は石造りに近い、ごつごつとした印象を受ける。
しかし、真冬だというのに家全体が暖かいのはいったい何故なんだろう。
竈は確認してみたが、リビングのような場所にも存在していなかった。

「そこの椅子に座っていただけると有り難いです」
「お、おう」

なんだかな……。
これまでにないほど下から言われた気がする。
なんというか、なんて言えばいいのやら。
とにかく、俺のことを人として扱っていないような感覚がして寒気がした。
龍眼族（レザール）とは、こういう種族なのかと。
先ほどの少年らも、俺が龍眼族（レザール）だと言うことに気づくとにげていった。しかも、まるで怪物をみたような顔でだ。

思ったよりも、この種族はやっかいなのかもしれないと思ってしまった。
むしろ、厄介なのだろう。
最強の種族というのも、やはり弊害があるようだ。

「……どうしたんですか、難しい顔をして」
「いや、エスペランサは俺のことを怖がらないのか？」
「出会ったときは怖かったですが、今は全く。龍眼族（レザール）って、怪獣みたいに凶暴で、神のように気高い存在かと思っていましたが、全然違いましたし」

それは俺が違うだけで、ほかの同種族も同じかどうかはわからないがな。

と、そんな話をしていると、エペ父が部屋に入ってきた。

# 014　状況説明

「……初めまして。私がエスペランサの父であるエパアルだ」
「シルバと申します」

俺が一礼するとエペ父は安堵したように息をつき、俺の正面でエスペランサの隣に座る。
その態度から警戒心がある程度ほぐれたのを感じるに、俺という……いや。
龍眼族（レザール）という存在を目の当たりにして戸惑っていたという印象を受けるが。

「……ではシルバ君。今回何故エスペランサと一緒にいたのか、説明してくれるかな」
「え」

俺は正直戸惑った。
あの状況説明するとなると、十中八九俺は「エスペランサが少年3人に追いつめられている」という言い難いものになってしまう。
どうすればいいのか。俺は斜め前にいるエスペランサに目配せをしたが、エスペランサは困ったように首を感じられるかの微妙な動きでふるふるっと振っただけだった。

というわけで、俺はでっち上げることにした。

「暴漢にエスペランサが襲われていたから、助けただけだ」
「そうか。……最近はこの辺も治安が悪くなりつつある。……信じることにしよう」

どうやら、でっち上げたはずの事は結構あり得る話だったらしい。
俺はこの場を逃れたなら、その暴漢たちも叩き潰そうと決めた。
既成事実というものを作成しておかなければ。

「……ここからどこかに行くという予定はあるのか？」

なんだこの、ゲームでよく言う勇者みたいな扱いは。
ちなみにここがどこか分からない。
村の正式な入り口ではないようなところから……雪原の方から飛んできているものな。

「特にない」
「そうか、それならエペを救ってくれた礼だ。ここで寝泊まりするといいだろう。……失礼だとは思うが、金はなさそうに見える」

巨大な熊：ノーザンベアーの毛皮は持っているけどな。
そばに商店があったら、そこに売り払うのも手だと思った。
まあ、エスペランサに迷惑をかける事にはなるだろうが。

「分からないことがあったら、エペに聞いてくれ。エペ、シルバ君をゲストルームへ連れて行ってくれないか？」
「はい」

エスペランサが立ち上がったのを見て俺も立ち上がる。
俺はエペ父に一礼をし、クスッと笑ったエスペランサの後ろをついて行った。

「一礼だなんて、しなくても良かったのに」
「でも、礼は必要だろう」
「別に、結婚の話をしてきたわけではないのですから」

……この世界、前いた世界とは文化が違うのか。
いや、俺が東洋の文化に毒されてきているのか。
……でも、礼儀が大切だというのは万国共通だとおもっていたのだが。

「何か、お困りになっていることなどはございませんか？」
「……そうだな……」

俺は、窓の外から商店らしき建物を見やり、看板を探す。
特に普通の商店。看板はやはり読め……。

……る……だと……？

「どうなされましたか？」
「……あの商店、万屋って書いてあるのか？」
「ええ。この村唯一のお店で、自由に売り買いが可能ですよ？　どういたしましたか？」

発見。
この世界の文字は、少々崩れているものの。

……英語でも何でもなく、日本語である。

# ０１５　身分証明

エスペランサと町を歩くことにした。
日は暮れかけていたが、彼女の返事は。

「シルバさんがいるなら大丈夫でしょう！」

とのこと。
この元気さ、転生前のとある神を連想させたが……その考えを振り払い、俺は町並みをきょろきょろと眺め回した。

町というか村だが。

「……少ないんだな」
「建物がですか？　そりゃあ、こんな辺境の村ですからね」

辺境の村、確かにエスペランサの言うとおりだろう。
看板をみる限り、宿屋すら配備されていないらしい。
あるのは小さな商店と、役所のみと言うことか。

「シルバさんがどこから此処に来たのかは分かりませんが、一般的に寄る町と言えば此処ではなく、およそ２００キロメーティラ離れた町に寄るべきです」
「寄るとか寄らないとかじゃなくて、エスペランサがなんかされてたから俺は立ち寄っただけだが……」

しかし、助かったのは事実である。
さすがに何日も野宿というものは何処か辛いものがあり、現に数日間その状態だった俺は何とも言えない微妙な気分であった。

そのときに、エスペランサを見つけたのは幸いだったのか、今日はゆっくり眠る場所を確保できそうだ。

「先ほどは誠に有り難うございました。お陰様でこれからの生活が少しずつより良いものに変化していきそうです」

「そんなに大層なことをしたつもりはないけども」

シルバさんにとってはそうではなくても、私にとっては大きな事なのですとエスペランサ。

その真意はいったい何か、俺には判断できなかった。

「その毛皮は、あそこの商店を介した方がいいでしょう。パスポートカードはお持ちですか？」

「なんだそれは」

俺が素で返事をすると、彼女は訝しげに俺を見つめた。

どうやら、そのパスポートカードとやらは身分証明書のようなものらしい。

……俺、神々にそんなものを貰っていたっけ？

『アルミリア、展開』

俺が唱えると、その指輪からなんと。

粒子が流れだしてカード状に広がり、俺の手に何かが生成されたではないか。

「……なんですかそれ？」

「うん……、パスポートカードだ」

「ちょっ、見せてください！」

引ったくるようにエスペランサは、俺のパスポートカードを取って中を確認する。
あっという間のことであり、俺が不意をつかれて思考を元に戻す頃にはすでに返すように戻されていた。

「どうしたんだ?」
「いえ、犯罪歴がないか確認しただけです」
「そうか。なかっただろう?」

そうですね、とエスペランサ。
そして一点を指さして俺に話しかける。

「あの、膂力が基準値を突き破って赤文字になっているんですけども」

# ０１６　能力数値

「え？」
「説明するので」
エスペランサが説明をしてくれる。
ここの数値は個体のその分野における才能を数値化したものらしい。
それぞれの種族には、基本的に１から１００までで示された数値のうちでの基準値があるという。
１００を超えることは、ありえないということか。
「俺の膂力は、だいたいどのくらいなんだ？」
「そうですね、基本的に筋肉質で骨も丈夫な獣腕族（ケレイジ）でも加減を間違えたら骨折させそうです」
……バカにならない言葉が返ってきた。
獣腕族（ケレイジ）、とはたしか龍神（アグルス）の話によるともっともスタミナに優れている種族だ。
獣の耳がある、ということはエスペランサも獣腕族（ケレイジ）なのだろう。
それが折れると言うことは、それこそ酷いくらいに自分の力を制御しないといけなくなると言うこと。
力を制御できなければ、結局は宝の持ち腐れになってしまう。
「ほかにも魔力が龍眼族（レザール）の基準値を飛び越えて知勉族（エリシュ）よりもすこしだけ少ないくらいですかね、数値７８。それ以外のは今のところ、龍眼族（レザール）の基準値と大差ないようです」

確認してみたが、膂力が１００を超えていた。実に１０８。
……エスペランサは驚きすぎて口調が一周し、逆に冷静になっているっぽかった。

「役所に後で行って、数値は非公開にした方がよろしいかと思われます。有名人でも、そこまで高い方はいません」
「そ、そうだな」

しかし、これを逆に公開することでほかの人を寄りつかせないという方法も取れるだろう。
この世界の仕組みが分かっていない俺は、そうエスペランサに提案する。

「何を考えているのですか。こんな規格外のものを晒していたら、四六時中決闘の申し込みが止みませんよ」
「決闘？」
「えっ、決闘を知らないのですか？」

……決闘って、あの……中世ヨーロッパで行われていた正式な殺し合いというイメージしかない。
もしくは、俺の一度目。前の人生で行われていたこれまた人を殺しかねない戦闘訓練のことか。

「あの、顔が少々青いですが大丈夫ですか？」
「ああ」

生前に自分がやっていたことを反芻していたら、思ったよりもリアルに思い出せて気分が悪くなった。
体感時間はすでに分からなくなっているが、転生してからまだ数

日。

そうやって考えると、数日前に俺は腹を開けられたんだな。

勿論、それが俺にとっての致命傷なのだが。

「あの、シルバさん？」

「大丈夫だ。……早く商店へ行こう」

記憶を心の奥へと振り払い、俺は目の前の少女を見つめる。

……雪が降ってきた。徐々に白雪は地面に、白い絨毯を構成していく。

雪国のようなそんな雰囲気の小さな村。

それこそ村、集落とも言えないような場所で。

俺の二つ目の人生は始まるのだろうか。

## ０１７　商店（前書き）

ｐｔが何倍にも膨れ上がっている状態で、私自身一番驚いています。

誠にありがとうございます。これからもよろしくお願いいたします。

# 017　商店

この世界の通貨は、『イデア』といわれるものらしい。
俺は真っ先に女神が浮かび上がったが、それも結構関係しているようで、女神イデアはこの世界でも有名だったとか。
英雄を導く美しい少女の姿で降臨し、とかうんたらこうたら。

俺、本人に会っているんだが。
いや、この場合相手は人ではないから本神か？

「いらっしゃい」

取り敢えず、エスペランサが指示するとおりに。
手を差し出す商店の主にパスポートカードを提示する。

店主は健康的な褐色の肌をした人だった。
片方の手がメカメカしいあたり、械刃族（サミュリ）だと思われる。

「見なれない顔だな」

店主は不機嫌な顔でパスポートカードを見、次の瞬間に大きく身体を仰け反らせた。
訳が分からず俺が困惑していると、エスペランサは俺の耳元に口を近づけて。

「やっぱり、龍眼族（レザール）というところに目が最初に行くんでしょうね」
「……」
「で、……買い取りか……？」

俺のパスポートカードをおそるおそるといった動作で返してくる店主。
それを受け取り、逆に俺はノーザンベアーの毛皮をカウンターの上に乗せた。
マジマジとそれと見つめ、俺を見つめ。
店主は、俺を食い入るように見つめていた。

「……これ、お前が倒したのか？」

指し示しているものは、ノーザンベアーだろう。
俺はうなずく。それが事実であり、現実であるから。

すると、店主は奥に引っ込んだかと思うと。
宝箱のような、そんな形のものを持ってきたかと思うと、俺に。

「何かいれるものはあるか？」
「ない」
「ならこの箱ごとやろう」

と、そのまま投げて寄越してきた。
俺はそれを受け取り、呆然としたまま中身を開く。

中身は、とんでもない量の硬貨とこれまたとんでもない枚数の紙幣だった。
店主の方を見返すと、彼も困惑したような顔で俺を見つめている。

「あそこの雪原で狩ってきたのか？」
「生きるために仕方なく」
「そうか。……正直、俺の店にある金では足りない」

俺は一体、何をやってしまったんだろうか。
自分が何をしでかしたのかと考えていると、その店主は紙を一枚俺に差し出した。

推薦状のようなものだ。

「『カエシウス聖王国（せいおうこく）』にある龍眼族（レザール）の自治区に行くといい。これを渡せば充分な資金は得られるだろう」
「これは？」
「此処にある店の８０％だ」

は、８０％。
倒産したいのかこの店主は。
店主の話によると、龍眼族（レザール）の自治区にコネがあるからそこで残りの売値をもらえと。
なるほど、ならこんなに金は要らないということになるな。

俺は箱から半分ほどの紙幣・硬貨を差し出して、店主に返すことにした。

「取り敢えず、地図」
「はいよ」
「次に、着替え」
「はいよ」
「それらを入れる入れ物」
「はいよ」

次々に必要なものを購入し、俺は息をつく。
実に…使ったのはさきほど返した分を除いても５％ほどだろう。

と、まあこれで何とかなりそう……か？

俺の服、袖をぎゅっと握る感触がした。

「どうした？　エスペランサ」

「さっきの……人たちと……」

彼女の声が震えている。

通りの方に目を向けると、ニヤニヤと嫌らしい顔で笑いながらこちらに近づいてくる人影があった。

数は６人。通りの真ん中を闊歩しているあたり、この人たちがエペ父の言っていた暴漢で間違いはないだろう。

６人のうち、３人は先ほど俺を見て逃げたアルフ、アリベ、イルダだった。

ほかの人の名前はそれぞれ、ニャモ、ルーピー、タチュレン……か。

なかなか……、なかなかユニークな名前をお持ちで。

# 017　商店（後書き）

ふぁ…。

読了誠にありがとうございます。

## ０１８　年齢（前書き）

現在目が点になっております。
日間総合１１位。読んでくださっている方、読んでくださる方は誠にありがとうございました。

これからもよろしくお願いいたします。

# 018　年齢

俺がまず考えたことは、エスペランサの安全の確保でも俺の賞賛でもなく、『ここでやらかしてもいいのか』ということだった。
理由は簡単、龍眼族（レザール）の運動能力は、この前の巨大な熊『ノーザンベアー』を倒したときに把握できている。
明らかに、前世とは格違い。身体がイメージ通りに動くというのは便利なことだ。

ただ、猛獣に向かってその身体能力を把握せずに攻撃を仕掛けた結果、心臓をつかみ取るという惨事を起こしてしまった。
これを人相手にやってはいけない、絶対にいけない。

しかし俺の予想に反して、男たちはそのまま通り過ぎていった。
さっきまで笑っていたニャモ、ルーピー、タチュレンのユニークネーム3人組が真顔になっているところを見るに、さきほどまで少年3人の話を真面目に受け取っていなかったのだろう。

「エスペランサ……、ちょっと逆にまずいかもしれない」
「……どうしたんですか？」

俺がエスペランサのそばにいる間、エスペランサに彼らが手を出すことはないが……。
恐らく明日にはこの村をでる。
そのとき、エスペランサの安全は保障できないということを俺は説明した。

「あぅ。……それは今日中に私が考えますから」

「考えられるのか？」
「大丈夫ですよ」

まあ、今俺に出来ることは何もない。
強いて言えば、夜にせっかく貰ったはずの睡眠時間を……暴漢抹殺に使うくらいか。
抹殺という表現は悪いかもしれない。……処刑？　私刑？
どれも大差なかった。

「取り敢えず、おっさん有り難う」
「誰がおっさんだ」

俺は械刃族（サミュリ）の店主を指さした。
が、どうやら俺の思っていたよりも店主は若かったらしい。
……まあ、俺の前世の見た目通りに成長していたらの問題だが。

「まだ４１歳だ！」
「え？」

充分おっさんだと思うんだが。
だいたい、年齢で線を引くと３５歳頃からおっさんだと俺は思っている。
この世界では、基準がやはり違うのか？

「すまない。ここの人で、平均寿命は何歳くらいだ？」
「ここでは少々短いが、都市となると冒険家にも何にもならずに健康でいた場合は１０５歳ほどだ。……何故そんなことを訊く？」

訝しげな顔をされたが、俺はそれを無視する。
１０５歳？

遙かに長寿だな、一体どうなっているんだ。

本当に寿命が長いのか、それとも……。

俺は自分の中で閃いた、一つの答えをエスペランサに訊いた。

「もしかして、ここは1年9ヶ月周期か？」

「はい、そうですけど……。どうしたのですか？　常識だと思いますけど」

「……世間知らずですまない」

「今日中であれば、何でもお聞きくださいね？」

エスペランサは優しかった。

彼女の優しさに心を満たされながら、俺はもう一度考えに耽る。

そう考えれば、自分でも納得できるが。

しかし、それでも平均寿命が８０歳。

なかなか長寿だ。先進国なのだろう。

と、なると……。

ここは……結構医学も発達しているのか……？

## ０１８　年齢（後書き）

御読了感謝いたします。

## ０１９　行動決定（前書き）

……開いた口が塞がりません。

最後まで読んでいただければ光栄です。

# ０１９　行動決定

店主のおっさんから必要なものを買い終えた後、俺はエスペランサから情報を得ることにした。
おっさんに訊いたら「情報料」とでも言われそうだったからやめて、基本的な事だけをエスペランサに教わる。

よさげなおっさんだったけど、何を考えているか知らん。
そもそも、なぜ何も知らない俺に対してノーザンベアーの価格を下げようとしないのか。
確かに、この箱の中に入っている金がそれ相応なのかすら俺は分からないが。
８０％とか言っていたりしても、もしかしたら……という考えもあるが、疑心暗鬼になっているような気がして自分が嫌になった。

「取り敢えず、店主さんの言っていた『龍眼族（レザール）自治区』ですが。此処よりもさらに過酷な場所にあると思います」
「なぜそれが分かるんだ？」
「北国の山奥ですからね。さすがに一年中雪が降っているとは考えられませんが、寒いですし。ここからかなり遠いです」

ちなみにここは『都市国家ポラリス』の最北部、『カエシウス聖王国』の国境間際だということを聞いた。
……都市国家とは、こんなにも離れた集落が存在するものだったのか。
俺は頭を傾げたが、この世界の定義が前世から離れているのだろうと思いこむことにより、その質問をぶつけるのをやめた。
そもそも、この少女に国家のことが分かるのか結構怪しい。

「ここからその……『カエシウス聖王国』に向かうのは、何か手続きが必要なのか？」
「私はここから出たことが数えるほどにしかないので、分かりかねますが。ないと思います」
ない？
欧州連合のように、加盟国の自由な移動が出来たりするものなのか？
それとも、この村があまりにも隣国に近づきすぎているため免除されているのか。
……おそらく前者だろう。
思った理由は勘である。
何を根拠に、と訊かれると困るがそう感じた。
「そこととここの、通貨単位は？」
「同じです」
なら安心。
正直、ここで得た金が向こうでは両替しなければならなくなり、手数料やなんやかんやでごっそり取られては元も子もない。
そして先ほどの勘が当たっているような気がした。
勿論、この『都市国家』と『カエシウス聖王国』が連合を組んでいるという勘である。
と、エスペランサが空を見上げた。
「そろそろ日が暮れますね」

周りを見回したらそのとおり、あたりはオレンジ色に染まっている。

……太陽はあった。

それを太陽と呼ぶのかには疑問があるが。

「日没までには家に入りましょう。夜は何が起こるか、予想がつきません」

「そんなに治安が悪いのか？」

確かに、周りに出歩いている人は少なかった。

元々少なかったが、すでに商店も閉まっているし、外には俺とエスペランサしかいない。

「先ほどの６人。実際はもっといますが、あの人たちが夜に出歩いている人を片っ端から襲っていくので、今では誰も夜は出歩きません」

「この村に警察はいないのか？」

「警察がこの前襲われて……。ここは小さな村ですし……応援なんて来ません」

逆パトロールみたいな、はた迷惑な行動を繰り返しているのか。

……察した。

俺は元々、正義漢などという存在とはほど遠い人柄だった。

自分と関係のない出来事などは無関心。

己の身に降りかかってくることだけに興味を持っていた。

……転生したのだし、『自分』というのを作り直すのも良いのか

もしれない。

俺は今夜の『行動』を、決めた。

睡眠時間なんて3時間あれば充分だろう。

……そんなに時間をかけるつもりもないが。

## ０１９　行動決定（後書き）

読了感謝いたします。

なにやら凄いことになってますね……。

# ０２０　夜（前書き）

最後まで読んでいただければ光栄です。
よろしくお願いします。

# ０２０　夜

俺は何故か、早く寝かせていただけることになった。
確かに、客人をゆっくりと休ませるのは当たり前かもしれないが、正直やりずらくなった印象である。

もしエスペランサが、もしくはエペ父が俺を確認してきたら……と思うと。
心配をかけてしまうという状態にはしたくないため、なんとか言い訳をつけて部屋に入ってこないことを約束させる。
エスペランサは訝しげな顔をしていたが、エペ父は「龍眼族（レザール）には龍眼族（レザール）なりの慣習が～」などといってエスペランサを無理矢理に納得させているあたり、なんか申し訳ない。

正直、俺は龍眼族（レザール）の慣習とか何一つ知らないのだが。

とにかく、寝たふりをすることは出来た。
ベッドは少々硬かったが、この村では良いものなのだろうと推測できる。
土台の木は黒く、丈夫だ。

この世界、普通にエスペランサが「シルバさんは、明日の正午１２時に出発ですか？」などと聞いてきたお陰で２４時間周期だということが分かった。
時間感覚は前世とそんなに変えなくても良いようだ。

ちなみに、文明はかなり発達している。
電気は通っていたし、テレビもあった。
……こうなった場合、魔法は必要ないのではないかと思うほどだ。

「とりあえず……」

抜け出すか。

しかし、抜け出すのも一苦労。

ここは、とにかく寒いのだ。

窓を開けっ放しにしたら帰ってきたときにとんでもないことになりそうでもある。

取り敢えず、俺は【引斥制御（グラビシオンコントロール）】で音を立てないようにこびりついている雪、または氷を剥がし、ゆっくりと窓を開ける。

……寒い。

雪原の方が暖かかったのではないか、と勘違いするほど寒い。

どうなっているんだ。

ここの家の住民の心が温かい分、外の気温が冷たく感じられるのか。

んなことあり得るのか。

俺の心理がそうさせているのか。

……分からないな、さすがに。

「よっと」

俺は窓の枠に足を掛け、一気に外へ。

そして【引斥制御（グラビシオンコントロール）】を使用して宙に浮き、窓を閉める。

最後に地面への重力を調節しながら、音を立てずに着地した。

何処か不気味な雰囲気を感じた。
街灯もないらしく、町は暗闇に包まれている。
窓から僅かに漏れる光、そして月のような星のひかり。
そして、田舎だと感じさせる満天の星空。

「……」

こう言うときは、どうすればいいのだろうか。
まあ、適当に歩いていたら遭遇するだろう。

この小さな村だ、入れ違いにぐるぐると回らない限り、普通に……。

あ、遭遇した。

## ０２０　夜（後書き）

読了誠にありがとうございます。
よろしければ、感想などもお待ちしております。

## ０２１　喧騒（前書き）

うわぁシルバ酷い。

最後まで読んでいただければ光栄です。

# 021　喧騒

俺の目の前に現れたのは、午後の3人だった。
獲物を見つけたような顔で、俺の方をみる。

ちなみに、俺は手袋をして鱗を隠し。
マフラーをして顔の下半分を隠している。
まあ、怪しい人であることは充分に自覚しているからにして、特に問題はない。

「夜は危ないって、ママに教わらなかったかい？」

ぎゃはは、と下品な笑いをあげる3人に嫌悪感。
いや、最初から嫌だったのだが、それが別の方向に、憎悪に変わっているような気がした。

「ほら、何かいったらどうだ？」
「……」

取り敢えず黙った。
別に意図はないが、どうやればこの人たちを暴力に持ち込ませられるのか分からない。
自分からいきなり殴りかかるのもなんか、違うような気がする。

ここは自己防衛に見せかけたほうが良さそうだ。

などと考えている間に、3方向を固められていた。
相手を怖がらせる方法をきちんと熟知しているようだ。
筋肉隆々の男が、ニヤニヤしながら取り囲んでいるという状況は、

恐怖心をわかせるどころか、噴き立たせるものなのだろう。

無論、それは普通の人に対してのものであり、こちらからしたら全く脅威を感じない。

こんな……、警察に勝った『程度』の実力で俺に勝てると思うな。

「失せろ三下」

「はぁ！？　お前、この状況分かっているのかぁ？」

いちいち小さい『ぁ』をつけないでほしいが。

鬱陶しい。こんな頭の悪そうな話の仕方しかできないのだろうか。

そのうち、タチュレンが我慢できなくなったのか。

「こいつウゼぇ！」

と、殴ってきた。

狙いは顎か。下からすくい上げるように殴るとき、ほかの部位をねらおうとしてもただただ動きが無駄なだけだ。

正直、顎を狙うのもどうかと思う。

俺はタチュレンの殴りかかった左腕を強引にたぐり寄せ、１２０度の方向にいたルーピーの方に投げ捨てた。

人一人分の体重を受けたルーピーは突然のことに全く反応できず転倒する。

……この人たち、本当に警察を潰したのだろうか？

ここの警察がとてもとても弱いのか、それとも俺が異常なのか。

おそらく、俺が異常なのだろう。

「この野郎っ！」

誰がこの野郎だ。

まあ、確かに野郎ではあるが。

俺は包囲を抜けると、そばにあった樽を力任せに持ち上げ残りの人に投げつける。

さすがに反応された。

樽が避けられ、地面にたたきつけられたそれは大きな音を立てながら中身の水をまき散らす。

「くそっ、タチュレン！　仲間を呼べ！」

「お、おう！」

お、相手の加勢がくるのか？

しかし、そんな事をやらせるわけなかろう。

俺は背中を向けて走り出したタチュレンの足に、作用点を地面にしてレベル１０の引力をかける。

勿論、それで彼が動くのは限りなく困難になったはずだ。

「一人残らずぶっ飛ばす。そしてとっととこの村から消えろ」

「誰だお前は……！」

なんか、映画とかでよくある悪役の台詞だよなそれ。

……しかし、俺も善であるかと訊かれると、否と答えるだろうが。

## ０２１　喧騒（後書き）

御読了誠にありがとうございました。

やはりバトル描写というのは苦手ですね…。

# ０２２　教育（前書き）

最後まで読んでいただければ光栄です。

# ０２２　教育

「……はぁ」

俺はため息をつくと、目の前で山積みになっている十数人の男たちを見つめた。

全員で１４人。

なかなか、大仕事だったとは思っている。

時間経過は１時間ほどか、そんなに時間は経っていない。

最初からそんなに時間をかけるつもりはなかったのだが。

俺は手を払いながら立ち上がると、タチュレンの頭を強引に掴んでそばの壁に押しつけた。

「さっさとこの村から出て行け。わかったな？」

「うぁぁ……」

口の中は血であふれていることだろう。

【引斥制御（グラビシオンコントロール）】と膂力に物を言わせて殴ったら、水平に１０メートルほど吹き飛んだ。

そのときは、自分の力に驚いた。

そして、それで貫通しない相手の身体にも戦慄してしまう。

「分かったかと訊いているんだが？」

「ひ、ひぁい」

顔面を蒼白にし、何度もこくこくと頷いたタチュレンを離し、俺は男たちに背を向ける。

早く部屋に戻ろう。
そして俺は、夜の村を引き返したのだった。

「……です！　なんで……！」
「ダメだと言って……！」

窓から進入。
すると、下の階からなにやら言い争う声が聞こえた。

エスペランサがエペ父となにやら喧嘩しているようだ。
途切れ途切れにしか聞こえないが、エペ父がエスペランサの何かを許可しないような内容だった。

詳しいことは分からないが、なるほどエスペランサもなかなか頑固なところがあるようだ。
明日までの、たった1日のつきあいだが、初めて出会ったこの世界の住人である。

このことは、一生忘れないだろう。

「すー……はぁ」

俺は深呼吸をすると、血の附着した手袋を今日買ったバッグの中

に隠しベッドに倒れ込む。
身体は洗っていないが、明日の朝に風呂場を貸して貰えばいいだろう。
さすがに、今音を立ててはいけないことくらい分かっているからだ。

それにしても……、思うことがある。
先ほどの戦闘の中で、あの人たちは魔法を使っていないが、どういうことなのだろうか。
魔法というのはこの世界にはないのか？　神々の説明という物は間違っているのか？
生活に応用されているわけでもなく、また戦闘などにも使用されていない。

この世界の魔法というのは、どういう目的で使われているのだろう。

「情報が少なすぎるな」

結局、俺は考えるのをやめた。
旅が始まれば、きっと理由は分かってくるのだろう。

それなら、来るべき時まで悠長に待っているべきだ。

「……いち、学校はどうするんだ？」
「来年からです！　それも何とかします！」

……【学校】？

俺は聞こえた単語に、思考を一瞬停止させた。

この世界にも学校はあるのか。
それもそうか。

……俺は、前世で満足するような学校生活というものを経験したことがない。
世界一、と呼ばれる基準の『超能力を訓練する』教育機関に通っていたのは2年だけ。

学校、か。

しかし、そんなことを考えるうちに……。
俺の意識は、いつの間にか眠りへと誘われて行っていた。

## ０２２　教育（後書き）

御読了誠にありがとうございます。

感想欄の指摘点につきましては、この章が終了次第修正いたします。

## 023　旅立ち（1）（前書き）

ついに旅立ちですね。

最後まで読んでいただければ光栄です。

# 023　旅立ち（1）

日差しがまぶしい。
俺はベッドから起きあがると、大きく伸びをした。

昨日の疲れはないに等しい。
相手側がそれほどに低レベルであったことが幸いしたのか、無傷に等しい状態で帰還したからだ。

俺は部屋から出て下の階に向かう。
と、やはりエスペランサがいた。
泣きはらしたような顔で俺を見つめるも、すぐに顔を俯かせてしまう。

「おはよう」
「……おはよう、ございます」

そういえば、昨日父と喧嘩していたな。
しかし、そのような言葉を俺が出すことはない。

エスペランサは顔を俯かせたまま、俺に話しかける。

「今日、もう旅立たれるんですよね」
「そうだな。……とりあえずもう一度商店に向かって、必要になりそうな物をそろえるつもりだ」

しゅん、とするエスペランサ。
……俺、何かしてしまったか？

「1日だけだったが、世話になったな」
「……はい」

聞き取れるか聞き取れないかの境目。
そんな声でエスペランサは呟くと、立ち上がる。

「そうですね、……朝ご飯は何に致しますか？」
「……何でもいいよ」

客人の分際で朝ご飯を指定するなんざ、図々しいにもほどがあるだろう。
そもそも、この世界にどんな料理が存在するかすら知らないのだ。
蒸かした馬鈴薯（ジャガイモ）だったっけか。それと米っぽい粒状の穀物。
この世界にジャガイモが存在することすら、俺にとっては新発見だったが。

……正直、旨かった。

「……出来ました。パントーストで申し訳ないです」
「ありがとう」

パンすらこの世界に存在するのか？
四角い食パンにしか見えないのだが。

「小麦とジャガイモを混ぜ合わせたパンです。……口に合いますか？」
「……おいしいよ」

少々塩辛さがあるような気がするが。

パンの上には小さな魚が乗せられており、一見するとニシン。

「……貧しい村で申し訳ありませんでした」

「いや、こういう家庭料理を食えるっていうのも。いいものだな」

その一言で、エスペランサは顔を真っ赤にしてしまった。

はて、変なことを口走ったか？

「おい、聞いたか？　暴漢が全員いなくなったらしいぞ？」

商店に向かったら、店主に馴れ馴れしく話しかけられた。

まあ、昨日の『教育』が効いたのだろう。

取りあえず、俺は無関係を装う。

「そうなのか？　……まあ、それは良かったな」

「本当に大助かりだ。一体誰がやってくれたのか、それともあいつらが見切りをつけてくれたのか……。昨日の夜、結構騒がしかったんだが……」

「昨日は結構早くに寝たから知らんな。……保存食のようなものはないか？」

俺は肩を竦ませ、次の件へ話を移す。

そう、必要なのは保存食である。次の目的地へ行くには、最低で

も徒歩3日だと聞いた。

医療も生活も充実しているこの世界なら、交通機関も発達しているのかと俺は考えたのだが、違ったらしい。

どうも、この田舎だと徒歩で抜け出すしかないという。

まあ、道も舗装されていないところを見るに予測はしていたが。

馬はある程度、整えられている道の方が走りやすいと聞いたことがある。

「保存食は……これだな」

「高すぎないか？」

「田舎の村だ、我慢してくれ」

冗談にならないほど高い。

此処近辺の地図が１０００イデアに対し、一食分の保存食はそれに迫るほど。

それなら、この村はどう飯を食べているのかと思えば畑があった。

なるほど、ベリーハードだ。

「もう少しやすくできないか？」

「……無理！」

数分考えた後に拒否がでるとは思わなかった。

……仕方ないか、買うのはあきらめよう。

正直、狩りをすればいい話なのだ。

「ナイフのような、武器はないか？」
「５０００イデアから。短剣ならあるがどうだ？」
……なるほど、相場がわからない。
しかし、この短剣は……質が悪いな。
何年も放置されたように刃は欠けているし、さびている部分も見える。
「……いや、いいよ」
「そうか？　残念だな」
……やはり拳で狩りをするか……。
「……旅立つのはいいんだけど、なぜエスペランサが？」
「……家出します！」
いや、するなよ。
今は村のはずれである。
今さっき、エペ父とエスペランサに別れを告げたはずなのだが。
なぜ、着いてきているのだ？

「ダイナミック反抗期です」
「……それで責任を俺に押しつけるな」

此処から先は、この前の雪原とは変わって針葉樹林。
正直、エスペランサを守りながら此処を抜けるのは一苦労しそうだ。
……いつの間に、俺はエスペランサを連れて行くことに脳が切り替わっているのやら。

「私がいれば、シルバさんのわからないこととか……」

必死だな。
とても必死だな……。

「……わかった。ただし」

俺はエスペランサの身体を逆に向けた。

「親に納得して貰ってこい」

## 023　旅立ち（1）（後書き）

旅立てず！

御読了ありがとうございました。

# ０２４　旅立ち（２）（前書き）

最後まで読んでいただければ光栄です。

# ０２４　旅立ち（２）

エスペランサがすごすごと、親に許可を貰いにいく間。
なんの予定もない俺は、商店へ再び。

「旅立ったんじゃなかったのか？」
「……野暮用で」

さすがにダイナミックすぎる反抗期だ。
この世界、通信技術がどうなっているかわからないが、前世の世界よりは低いと思われる。

ところで、エスペランサの年齢を聞いていなかったような気がするな。
昨日の『学校』という単語（ワード）と、彼女の背丈を考えて１４くらいだと予想するが、よく考えてみれば彼女の種族もわからないため何がどうだかわからない。

「……龍眼族（レザール）は、防寒具も必要ないのか？」
「確かに昨日の夜は寒かったが、凍え死ぬというレベルではなかった」

そこまで言って、俺は気がついた。
……エスペランサを、許可さえ出てしまえば連れて行くと決めているあたり、何か防寒具も必要だろう。

「いくらぐらいで売ってくれるんだ？」
「何を？」
「仮拠点として数分で展開が出来るもの、またはそれに準ずる防寒

具」

まあ、簡単に言えばテントと毛布である。
俺には必要ないだろうが、持っていて問題はないだろう。
幸いなことに、昨日ここで買ったバッグは空きがある。

「……テントは5万でどうだ？　毛布は2万」

……えらくふっかけてきた気がする。
俺は首を振ることで否の態度を見せ、口を開いた。

「二つ併せて3万5000なら買おう」
「ぐっ」

やはりふっかけてきていたか。
予想通りだ。

しかし、俺も結構引き下げた気がするな。
……少なくとも、昨日貰った箱の中には15万イデア以上入っていた。
あのときいろいろ買った後の話である。

「……それは店がつぶれちまう。……昨日の買い取りでとんでもないことになっているんだ、手数料も無償にしてやっているというのに」
「4万が最大額。それ以上でなら買わない」

ここは田舎だ。
そんなに質の良いものは取り扱っていないと見える。

商品をみた限り、実際そんなに質は良くなかった。

「……じゃあ４万で。まいどあり……」

日も暮れる頃、やっとエスペランサがやってきた。

もこもこの白いコートに、茶色のこれまたもこもこブーツ。

……本気で森を抜ける気はあるのか。

「やっと許可が取れましたぁ……」

その顔は疲れ切っており、これ以上の移動も困難と推測する。

俺は肩にバッグの紐を掛け、エスペランサを背負った。

「ひぁ？」

間の抜けたような声を発したエスペランサを無理して、俺は走り出した。

「ちょ、ちょっとシルバさん？」

このくらいの重量、特に気にならない。

俺はすこしだけ考えた。

「……この林を抜けるぞ」

「はい！？」

こうして、俺は。

いや、俺たちは。

最初の村を抜けた。

## ０２４　旅立ち（２）（後書き）

御読了誠にありがとうございました。

この話で、第２章は終了になります。

重ね重ね、なかなか学園に向かわない件についてはお詫びを申し上げます。

次の章で、学園に入学する準備をすべて終わらせます。

## 025　0・1・2章のまとめ（前書き）

ストーリーとは一切の関係がないため、読み飛ばしても問題はありません。

あ…でも、後書きは読んでほしいです。

## 025　0・1・2章のまとめ

シルバ・エクアトゥール　【Ｓｉｌｖａ＿Ｅｑｕａｔｏｒ】

主人公。転生者。

前世の名前は
ダウンファール・ゼロ・デスムーン【Ｄｏｗｎｆａｌｌ＿Ｚｅｒｏ＿Ｄｅｓｍｏｏｎ】。

よく【ｄｅａｔｈｍｏｏｎ】ととらえられて痛い名前のように感じられるが、【ｄｅｓｍｏｏｎ】である。そのままでも充分痛い。
前世の名前である『ゼロ』は百姓から成り上がって貴族になったため、言葉通り『ゼロから這い上がった』という意味を差す。
それは『ゼロ地点』を指す『エクアトゥール』にも反映されている。

種族は龍眼族（レザール）。
特殊能力は【引斥制御（グラビシオンコントロール）】と【魔武具創造（マギア・クリエイト）】。

『関連語句』

【引斥制御（グラビシオンコントロール）】

シルバのもつ特殊能力の一つ。作用させる物と、作用の発生地点を指定し、引力斥力どちらか、またはその強さを指定することで限定的にし是炎の摂理を乱すことが出来る。

【魔武具創造（マギア・クリエイト）】

シルバのもつ特殊能力の一つ。『魔剣』を作る技術を与える。

【アルバ・アルミリア】【ニーガ・アルミリア】
女神イデアから受け取った、特殊な白と黒の腕輪。
任意で展開でき、シルバにこの世界で必要な知識を与えていく。

希望神ホープ

シルバを転生させた神の1柱。
背の低い金髪碧眼の美人という姿をしているが、シルバ曰く『ほかに特徴がない』。
転生する人に、特殊能力を与える役割を持つ。

運命神スロッ＝トール

シルバを転生させた神の1柱。
機械的な身体にスロットマシーンを取り付けたような、特徴的な容姿をしている。つまりはロボット。
しかし声にはとぎれたような違和感がない。
胸の部分にあるスロットマシーンで転生者のスペックを決定することが出来る。基本的には神へも有効だが、希望神には効かなかった。

武器神ヘーハイス

シルバを転生させた神の1柱。
深緑の髪の毛をした、老人の姿をしている。
【魔武具創造（マギア・クリエイト）】の力をシルバに与えた神である。

龍神アグレス

シルバを転生させた神の1柱。
龍眼族（レザール）の姿に尾と角を付け足したような、竜と人間の中間のような姿をしている。
シルバに種族を与えた。

エスペランサ

名字不明、種族はケレイジ。
情報を【アルミリア】から取り出せなかったため、シルバはエスペランサの言うことを信じるしかない。
少年ら3人から壁に追いつめられている時、シルバに助けられた。
その後、シルバとともに旅に出ることになる。

## 025　0・1・2章のまとめ（後書き）

感想など、よろしくお願いいたします。

挿絵・魔剣アイデアも募集しております。

是非参加してくださる方は、感想かメッセージに書き込んで頂ければ光栄です。

では、また明日お会いしましょう。

## ０２６　樹林前進（前書き）

第３章開始。

最後まで読んでいただければ光栄です。

# ０２６　樹林前進

雪の国で、侵入者を拒むように成り立つ巨大な針葉樹林。

などと言うことはなく、普通に日の光も月明かりも届く普通の森。

そんな場所を、俺はエスペランサを背負いながら歩いていた。

「此処を歩いていくとして、何日くらいで出られるんだ？」

俺が後ろに話しかけると、少女は眠そうな声を上げながらむにゃむにゃと返事をした。

今さっきまで寝ていたらしい。

「３日です、ふぁぁ……」

俺が一歩進む度に、彼女の金髪はさらさらと揺れる。

そしてとんっ、と俺の肩をたたいた。

「どうした？」

「自分の足で歩きます」

一応、エスペランサが歩き疲れたら俺が背負うことになっているのだが、俺は彼女を背負っていようが背負っていまいが特に変化はない。
商店のおっさんから買った荷物も、どういうわけかそんなに重さを感じないのだ。

「戦えるのか？」
「はい？」
「たとえば、猛獣が出たときとか」

そうですねぇ、と地面に着地したエスペランサは首を傾げながら考える。
その顔から、不安は見つからなかったが。
逆に笑みも見つからなかった。

「魔獣（モンスター）が出た時でも、ある程度の対処は出来ると思います」
「モンスター？」
「あれ？」

知らないんですか？　とエスペランサ。
何も知らない俺は、おとなしく首を縦に振る。

「昨日、シルバさんがノーザンベアーを倒したじゃないですか？あれです」
「へ、へぇー」

あれも魔獣（モンスター）って呼ぶのか。
そもそも、なぜそう呼ぶんだ？

とか思っていたら、それもエスペランサが説明してくれる。

「はぁ、なぜそんなことも分からないのですか？　この世界に魔法が存在するのはご存じですよね？　さすがに」
「おう」
「魔法に属性が存在するのは？」
「えっ」

それは知らなかった。
……そもそも、【腕輪（アルミリア）】もそんな説明はなかったし。

神から授かった道具とはいえ、それに頼り切ってしまう俺も俺だが。
俺は悪くない、だなんて言い訳にしかすぎない。

「魔法には、【火】・【氷】・【風】・【地】・【光】・【闇】という6つの属性があってですね」

基本的に、人は1属性しか扱えないらしい。
そして、属性を持つ獣のことを魔獣（モンスター）と呼ぶのだそうだ。

ノーザンベアーのみならず、この一体にいる魔獣（モンスター）はみんな【氷】属性なんだとか。
あまりよく分からない。

「とにかく、そういう訳なのですよ」
「お、おう」
「どこまで無知なのですか。これでよく雪原をわたってこれたものですね」

生命力だけが取り柄なのですか？　と罵倒してくるエスペランサ。

俺はその話を素直に聞くしかなかった。

……それにしても、口調は丁寧だというのに話す言葉はキツイんだな。

出会った時はそんなイメージ、全くなかったというのに。

「態度が変わったよな」

「……そうですか？」

何でもなさそうに、エスペランサは俺の方を向く。

その目には、一体何が写っているのか。

「……そうですね、少々調子に乗っていた部分もあるのかもしれません。……せっかく助けていただいたのに」

そもそも、魔法を使えるのならなぜあのとき自分で対処できなかったのか。

そんな疑問を抱きつつも、前に進む。

考えるのは苦手だ。

人の話の真意を探ろうとするのも苦手だ。

何でも、自分の手で物事を解決しようなんて……。

俺には、出来なさそうだな。

# ０２６　樹林前進（後書き）

御読了感謝いたします。

# 027　最南の町『アイリス』（前書き）

町到着です。

最後まで読んでいただければ光栄です。

# 027　最南の町『アイリス』

「……はぁ」
「どうしたのですか、シルバさん」
森を抜け、国境を通過し。
俺とエスペランサがたどり着いたのは、『カエシウス聖王国』。
エスペランサによると、ここは立憲君主制の国らしい。
絶対王政ではないところは、俺やエスペランサみたいな外から来た人からすれば、都合のいいものではあるけれど。
「此処は大丈夫ですよ。かなり外交的な国ですし、そもそもここに『龍眼族（レザール）自治区』があるのですから」
「いや、学校って良いなぁと思って」
俺たちが今いる場所は、最南の町『アイリス』。
エスペランサの出身地と比べると、ずいぶんと規模は大きいが。
水色の、石で造られた家が数十、町の真ん中には商店街のような通りもあった。
行商人が奇妙な姿をした馬の引っ張る車を走らせているし、道路らしき場所は謎の乗り物が宙に浮きながらホバークラフトのように走ってゆく。
乗り物は、【Δ】に【×】を重ねたような車体に、バイクの上部分をくっつけたような形だった。下へ、下へと色とりどりのガスのようなものをっふきだしている。
近未来っぽくてロマンがある。

「学校、ですか？」
「行ったことが、ないからな」
少なくとも、この世界では。
前世では……ハイスクールの最後、年の始めに戦争が起こって『卒業』出来ないまま戦死した。
正直、今考えてみればとても悔しい。
「そうですか……」
うーん、とエスペランサは額に手を当てて、何かを考える素振りを見せた。
俺のことを考えてくれているのか、それとも別の件か。
「そうですね、取りあえず『自治区』にいってからそれは考えましょうか。……あちらにも学校はあるのかもしれません」
いや、自治区だからあるだろ普通。
特に今向かっている自治区、雪山の山奥に存在すると聞いている。
個別の学校がなければどうしろと言うんだろうか。
「そんなことよりも、今日の寝床はどうするのですか？」
「もう何日も身体洗っていないんだろう？　ちゃんとした宿を取ろうか」
こくっ、とエスペランサは顔を赤らめながら頷いた。

この娘、俺について行くというくらいだから俺に気があるのかと思ったら。
おそらくそれも少しあるのだろうが、ガードはとても堅かった。
無理に関係を要求する、というのも性に合わないためしなかったが。

「お風呂……ほぁぁ……」

エスペランサの家には湯船がなかった。
極寒の地だ、湯船に浸かるという文化はないのかと疑問に思う。
前世で、極東の地『日本』と最北の地『ロシア』では湯船に浸かって体を温めるという共通の文化があった。
この世界の文化は、やはり異世界ということで違うんだろうか。

俺は風呂、という単語を聞いて嬉しそうに獣耳をぴこぴこさせているエスペランサの頭に手を置いた。
俺にとっては謎だらけの彼女だが、悪い人ではないだろう。

「どうしましたかっ？」

戸惑ったような顔で俺を見つめるエスペランサ。
心なしか、目尻が濡れているような気がして俺はなんだか申し訳ない気持ちになってしまう。

俺は首を振って、何でもないと笑った。
そして、彼女に尋ねる。

「さて、宿屋はどこがいいんだ？　一番高いのでかまわない」

エスペランサは『風呂』という単語に過剰反応を示したのか、本気で一番高い宿屋を選んだ。

まあ、そんなことを言ってしまっても結局はこの程度の町だ。

値段は高が知れていたため、何のことなく払い終わり俺はベッドのに倒れ込んだ。

「……あの、お先に入ってもよろしいでしょうか？」

「んー、ゆっくり休んでおいで」

ベッドが思う以上に柔らかかったため、俺は薄れゆく意識と戦いながらエスペランサに許可を出す。

別に気遣わなくてもいいのだが、どうやらエスペランサには『金を払って貰っている身』という意識がどうしても拭いきれないらしい。

いい子すぎる。

それにしても、ベッドが気持ちいい。

今まで雪の上に寝袋を展開して寝ていた反動が、今すべて来ている。

俺は身を委ねてしまいそうになる感覚から、必死に逃れて俺は起きあがった。

少しでも耳を澄ませば、隣の風呂場からシャワーの音が聞こえてしまいそうだ。

……まあ、だからどうという話なのだが。

## ０２７　最南の町『アイリス』（後書き）

御読了感謝いたします。

次回は明日に。

## ０２８　衣服選択（前書き）

はぁ、早く自治区についてくれないかな（すっとぼけ）

最後まで読んでいただければ光栄です。

# 028　衣服選択

朝、俺は妙な息苦しさを覚えて目を開けた。
胸を圧迫されているような、そんな息苦しさだ。
俺がうつ伏せに寝ているのか、それとも……。
……やはり、エスペランサが抱きついていたのか。
今、エスペランサは両腕を俺の腰より少し上に回して布団の中に前進を入れていた。
勿論、腰なんかに手を回しているということは、頭は俺の胸あたりにあるということ。
……息苦しさはこれか。
金髪が太陽の光を浴びてきらきらと煌めいている。
獣耳は、彼女が息をする度にぴくぴくと動く。
……なんというか、可愛らしいな。
「ん、んぅ……？」
考えているうちに、起きたようだ。
まどろんだような顔で俺を見つめ、次の瞬間エスペランサは飛び上がった。
「はぅあ！？」
「抱きついてきたのはエスペランサだからな？」

しかし、俺の言葉を無視して彼女は起き上がり、服の乱れを確認した。

……いや、俺何もしていないんだが。

特に怪しい場所が見つからなかったのか、エスペランサは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

そして、俯かせた真っ赤な顔のまま、一言。

「……す、すみませんでした」

気にするな、と俺は首を振って立ち上がる。

そして、彼女に声をかけた。

「出かけるぞ」

俺はこの世界に転生してから、下着をのぞいて1着の服しか持っていない。

白いローブ状のあれだ。

さすがにこれで旅を続けるのもどうかと思ったため、俺は新しい衣服を購入することにした。

この世界、エスペランサや商店のおっさんが前世と遜色ない衣服を身にまとっていることからファッションの文化が俺と変わらないことを認識した。

後は、俺好みの服が見つかるかどうか……だが。

「……こんなものでいいんですか？」

「ん？」

「真っ黒、ですけど」

エスペランサは、俺のファッションセンスに文句を言いたいらしい。

黒はすばらしい色だ。俺自身を夜の黒い闇に溶かしてくれる。

どこに問題があるって言うんだ。

「……言い方は悪いですけど、完全に不審者です」

正直、一緒に歩きたくない……とエスペランサには大不評だった。

さすがに、それは一大事のため。

黒を基調に、エスペランサにコーディネートして貰った。

「動きやすさを最優先に頼む」

「はぁーい」

はいはい、とため息をつきながら彼女は一着一着選んでゆく。

その姿を見て、俺はふと疑問に。

「そういえば……」

「どうしましたか？」

「エスペランサは、学校とか行かないのか？」

ぴたっ。
エスペランサの動作が止まる。
そして俺のほうを向いて、申し訳なさそうに。
「いえ、私は……。確かに推薦書は来ましたが、それはシルバさんの用事が終わってからでいいかなと」
「どういう意味だ？」
さっぱり意味が分からない俺に、エスペランサは一言。
「つまり、途中から編入するという意味です」
「は？」
全く話が頭の中に入ってこない。
ここまで分かりづらい話があっただろうか。
「詳しい話は部屋の中でお話ししますよ。……それよりも、こんな感じでいいですか？」
なんか、うまくはぐらかされた気がするが。
気のせいであればいいのだが。
もし俺のせいで、ということなら俺はどうすればいいのだろうか……。
「取りあえず、『龍眼族（レザール）自治区』に到着したら俺はどこか通える学校を探す……」
「……シルバさんの能力値なら、通えない教育機関なんてないと思います」

ないのか。

……いや、でもさすがに女子校は無理だろう？

## ０２８　衣服選択（後書き）

御読了感謝いたします。

ご感想などよろしくお願いいたします。

# ０２９　鍛冶用事（前書き）

鍛冶屋につく。

# 029　鍛冶用事

取りあえず、衣服を買い終わったら次は鍛冶屋である。

え。自分で創れと？

残念ながら、俺は『作る技術』というものは与えて貰ったがそれに必要なものは自分で揃えなければならないのだ。

取りあえず、『魔剣鍛冶』に必要なものは剣の基になるもの……主に金属と魔石と呼ばれる宝石、そして魔法だ。

この場合、俺にはどれもないような気がするが、最悪魔石はなくてもどうにかなるらしい。

魔法の技術は基本的なものをエスペランサに教えて貰うとして、ほかは？　金属は？

……これればかりは、自分で調達するしかあるまいて。

「どうしたんですか？」

「いや、なんでもない」

俺は首を振ると、きょとんと目を点にしたエスペランサの頭をなでた。

……いやあ、可愛い。

そして最後、大前提として存在するのは『魔剣鍛冶用の作業台』だ。

まず、これがないと話にならない。

『魔武具』とは、魔法で武器を打って作る武具の総称であり、作業台が魔法に耐えれなかったら粉砕するらしい。
ちなみに、この知識は最初からあったわけではなくこの町の図書館から得た。

この町の図書館、『パスポートカード』さえあれば誰でも自由に立ち入りできるという。
さすがに、前科者とかは制限されるだろうが、驚きこそすれ龍眼(レザール)族の俺を拒否はしなかった。

拒否したら拒否したで、何か問題になるのかも知れないが。

「あの、取りあえず鍛冶屋の前までつきましたけど」
「……おう」

煉瓦作りの建物。そこはほかの建物と何ら変わりなかったが。
……ほかの建物が比較的明るい色で構成されているのに、なぜ鍛冶屋だけ真っ黒なのか。

「……いいセンスをしているな」
「自分と趣味が同じだからといって、センスが優れているかなんて分かりません。少なくとも私はいいと思いません」

全否定である。
俺は肩をすくめ、重い鉄製の扉を押して開いた。

「おう、いらっしゃい」

そんな気の軽くなりそうな声とともに、建物の中は動き始めたような気がした。

絶え間なく鳴り続ける、鉄を叩く音。

その間に流れる、高温のものを水に突っ込んだような音。

鍛冶屋のカウンターには、一人の青年と。

その後ろに、所狭しと並べられた武器の数々。

「……龍眼族（レザール）か。何がほしいんだ？」

青年は、驚きこそすれ戸惑うような素振りは見せなかった。

少し新鮮だ。エスペランサの父とか、あそこの村の店主とか、はたまたごろつきなど、今まで俺をみて動揺した人は数多くいるのに。

「龍眼族（レザール）には、どんな武器が扱いやすいんだ？」

「それはデータにないね。むしろ俺も龍眼族（レザール）を見かけたのが今日初めてなもんで」

ああ、自己紹介を忘れていたな、と青年。

青い瞳、そして長い白髪。

「俺の名前はアイゼル。アイゼル・ベラギオス。種族は醒眼族（ウェイカー）だ」

そう彼は、名乗ったのだった。

# 029　鍛冶用事（後書き）

御読了感謝いたします！

## ０３０　武器吟味（前書き）

そろそろ入学だよー（汗

長らくお待たせいたしました…。

# ０３０　武器吟味

「俺の名前はシルバ・エクアトゥールだ」
「いい名前だね」

白髪の青年アイゼルは、そう呟くとニカッと笑った。
ちなみに、【腕輪（アルミリア）】で確認して偽名ではないことは判明している。
少し遣りすぎかも知れないが、これはこれでかまわないだろう。

許せ。

「そこのお嬢さんは？」
「エスペランサと申します」

……こいつ、名字言わないんだな。
俺は疑問に思ったが、アイゼルは特に何とも思わず頷くと。

「誠に申し訳ないんだが、身分証明を」

……二重に検査があったから、問題はなかった。
俺は自分のパスポートカードをみる。

ステータスは膂力（りょりょく）以外非公開にした。
鍛冶屋に来る前に役所に行ったのだ。
まあ、膂力を開示しているのも、鍛冶屋に来る前提でしていたことだし。

一方ところでエスペランサはというと、凄く嫌そうな顔をしてい

た。
虫を触るような、そんな顔でパスポートカードを持つとアイゼルに渡す。
「……」
うわぁ、とアイゼル。
何が「うわぁ」なのかは分からないが、彼は俺たちに返すと難しい顔をした。
何か問題でもあったのだろうか？
「取りあえず、シルバ……君は武器なら何でも持てると判断した。金さえ払えば何でも持って行ってよし」
膂力値１０８ってなんだよ……、とアイゼルは呟く。
俺の能力値だ、それ。
で、とアイゼルは次に、エスペランサの方を向いた。
難しい顔をしているあたり、何かあったらしい。
エスペランサの方をみると、「やっぱり？」というような顔で開き直りつつあった。
「……自分の名前と、種族、ステータスの一部以外非公開ってどういうことかな？」
「その通りです」
名字も確認できなかったらしい。
犯罪歴は非公開にできないことから、前科者ではないことは分か

っているもののそれ以外は本当に、誰にも分かることのないという。

ああ、役所は除く。

「まあ、良いか」

ずいぶんと適当だった。

エスペランサは表情を変えず、俺の方を見つめる。

俺は特に気にしていないことを頷くことで示し、適当にそばにあった剣を握ってみた。

片手剣の類、むしろ刺突剣の類だろう。

フェンシングで使う……エペ？

そんな感じだ。

「軽いな」

「それは軽いだろうな。……ちょっと待て」

アイゼルはそういうと、金属の音がする奥へと引っ込んでいった。

何が起こったのか、と顔を見合わせる俺と彼女（エスペランサ）。

……アイゼルが、誰かを連れてきた。

一言で表せば、髭の生えている初老の老人だ。

白い髪の毛と、白い髭。

その二つの境界が分からないほど、生え茂っている。

「俺の祖父のベルナルドゥス・ベラギオス。ここの鍛冶長だよ」

「話は聞かせて貰った。……シルバ・エクアトゥールといったな？」

俺が頷くと、老人はニヤッと笑った……ような気がした。

「お前、『クレアシモニー魔法学園』に入りたくはないか？」

## ０３０　武器吟味（後書き）

御読了感謝いたします。

次回、「クレアシモニー魔法学園」の説明になります。

## 031　学園詳細（前書き）

まさかの本日2話目。

最後まで読んでいただければ光栄です。

# 031　学園詳細

「は？」

『クレアシモニー魔法学園』を知らない俺は、そう聞き返す。
するとベルナルドゥス鍛冶長は、何かに納得したように頷いた。

さっぱり現在の状況がつかめないんだが。
アイゼルが俺の能力値を見て、俺がそばにあった刺突剣のエペを振って「軽い」と言って、そうしたら鍛冶長を呼んできた。

そこからいきなり、『クレアシモニー学園』に入らないか？　だとよ。

話が飛びすぎて何を言っているのか分からないな。

「クックックッ、まさか『クレアシモニー魔法学園』を知らないとでもいうのか？」
「いや、そのまさかなんだけど……」

名前から、その学園が魔法を教わる場所だというのは知った。
しかし、これ以上は……。

そんなことを思っている間に、興奮したのか顔を真っ赤にしたエスペランサと鍛冶長（ベルナルドゥス）が説明してくれた。

ほう、『都市国家ポラリス』の……実に4分の1を占める敷地を持つ、超巨大学園か。

学費無償って、どうなってるんだろうな。
で、身分などで入学を決めるのではなく、実力で……か。

なるほど。
悪くはないな。

「入りたいという気持ちはあるが、俺には入学許可もなにもないぞ？」
「儂が持っている」

はっ？
俺が呆気にとられていると、アイゼルが説明してくれた。

「ここ、確かに町は辺境の地にあるけどさ。結構国際的にも有名な鍛冶屋の一つなんだ。だから、その鍛冶長である祖父は、入学候補者の指名権があるんだよね」
「候補、ということは試験があるんだな？」
「そうだね」

ちなみに、俺も候補者だからねとアイゼル。
同時にパスポートを見たら、魔力が赤数字だった。
エスペランサによると、醒眼族（ウェイカー）として考えたらあり得ない数字だと。

アイゼルは簡単にその仕組みをあかす。

「俺、親が醒眼族（ウェイカー）と知勉族（エリシュ）で混血だから。でも、残念なことに混種族にはならなかったってわけ」
「あぅ、シルバさんには全然分かっていないようなので、私が一度説明します」

と、俺に説明してくれるエスペランサ。

「種族の違うもの同士が子供を産むと、ほとんどの場合はその片方の種族の姿を引き継ぎ、能力値が少々混合された子供『混血（ハーフ・ブラッド）』が産まれます。しかし、非常に稀なケースですが両方の種族の姿を混合して受け継ぎ、能力値も完全に混合され【いいとこ取り】された子供『ハーフ・レイス』が生まれるのです」

ちょっと待て。

エスペランサ、お前何で知ってるんだ。

田舎の秘境の町に住んでいなかったか？　数日前まで。

「む、図書館で読んだんですよ。……一度読んだものは忘れませんので」

「な、なんか済まない」

とにかく、アイゼルが普通ではないことは分かった。

と、鍛冶長（ベルナルドゥス）の方に向き直る。

「どうだ？」

「……それがもし、可能なら」

「そうか。なら、これを渡すから学園に行ってこい」

次こそ、俺は叫んだ。

「はぁぁぁっっ！？！？」

「いや、俺たち今から『龍眼族（レザール）自治区』に行かないと」
「しかし、それは急の用事なのか？」

……そういわれれば、どうなんだろうな。
金か学校か。

……うーん、学校かな！

「確かに、龍眼族（レザール）だからそちらに行くという意味も分かるが、それは世界一と名高い学校に行くことと対価として平等なのか？」
「……さぁ？」

結局、幾らくらい貰えるのか……。
……３０万は確定だがな。

ここは、とことん悩むことにしよう。

# 031　学園詳細（後書き）

御読了誠にありがとうございました！

# 032　Uターン（前書き）

そろそろ学園…

そろそろ…

# 032　Uターン

「ところで、もし俺がその……クレアシモニー？　だっけ？　そこに入学決定したら、エスペランサはどうするんだ」
「私ですか？　私のことはお気になさらず」
明日返事を聞くと言われ、俺とエスペランサは宿屋に戻ることにした。
龍眼族（レザール）の鱗というものは、嫌でも目に付くため俺は手袋を装着した。
それでも、鏡を覗いてみたら目が変質していた。
瞳に、金色の線で六芒星が描かれている。
……今まで視界に問題がなかったことを考えると、別に大丈夫だということか。

「気にするなって？」
「私は、すでに入学許可を持っているので」
「はぁ？」

驚くほどハイスペックだった件について。
正直、シルバさんの旅につきあうことになったので、入学に間に合うか不安でしたが、とエスペランサ。
そうならなぜ着いてきた。

「エスペランサは、その『学園』のことを何か聞いているのか？」
「一般的な家にすむ私にも入学許可が下りるくらいですからね、すばらしい場所だと思いますよ」
「工房はあるか？」
「工房？」

鍛冶するための、と俺は付け加える。
すると、エスペランサは目を細め、可愛らしく笑ってみせる。

「勿論、あそこには何でも揃っていますよ」
「なら安心だな」
「なにがです？」

エスペランサは頭を傾げていたが、まあ気にしない方向で。
取りあえず、宿屋に戻って寝よう。

入学試験に行くのは決定。
取りあえず、長期休暇もあるとエスペランサが言っていたから、
そのときに行けば問題はない……はず。

「……そうなると思っていた」
「一緒にいける人がいて助かった。一人じゃあ不安だったんだよね」

勿論、アイゼルも着いてきた。
予測はしていた。しかしまさか本当に来るとは思わなかった。
俺は悪くない。

ただ、何かしそうでいろいろと怖い。

「……構わないが」
「やったね！」
「……エスペランサニ、テヲダシタラコロス」
そう言ったら、顔面真っ青にして首が取れるくらいに縦に振ってくれた。
さすが。
いや、これは俺がエスペランサに恋をしているとかということではなく。
一応、彼女の命を預かっている身だからだ。
……学園に入学できたらその先は知らないが。
……と言うか、エスペランサって同い年だったんだな。
「よろしくね、エスペランサちゃん」
「よろしくお願いします」
取りあえず、入学したら魔剣を創ってみよう。
この世界に、どのような鉱物があるのかは知らないが。
きっと、前世では考えもしなかったものが創れるに違いない。
……えっと、確かに前世では前世でとんでもないものが創れていたような気もする……が。
「えーと、よろしくシルバ」
「よろしく頼む」

さて、次なる旅立ちへ。

……俺とエスペランサは、Uターンではあるが。

## ０３２　Ｕターン（後書き）

御読了感謝します。

長すぎる序章。正直言って学園に入るまでが序章。（３０話以上）

これが作者に足りないといわれる構成力。

## ０３３　優遇条件（前書き）

１話１話の文章を長くできなくて申し訳ありません。

# 033　優遇条件

「え、もしかしてこの森を通るのか！？」

Uターンを初めて1日の夜。

俺は、俺たちは来た道に戻ってきた訳なのだが。

森はやはり……不気味だな。

アイゼルは目を点にして唖然気味に、俺に問いかけると。

「……ちょっとハードすぎるだろ……」

と嘆いていた。

何がハードなのか全く分からない。

この森、特にエスペランサのいう魔獣（モンスター）というのもあまり生息していないように見える。

それとも、本能的にエスペランサや俺を避けたのかどうかは知らないが。

「この程度ですものね？」

「……俺に背負ってもらってよく言う」

エスペランサ、腕獣族（ケレイジ）だからもう少し体力を付けような？

いや、獣耳のある種族は全員、体力のあるものだと思ってはいけないな。

ふむ。

「あのときは、まさか獣道を歩くとは思っていなかったので歩きに

くかったんですよ。今回は新しいのを買ってきましたので！」

靴の問題なのか。

なら、今回は背負って遣らなくても大丈夫だな。

俺は未だ「無理無理……」と首を振っているアイゼルを見やり、一言。

「じゃあここでお別れだな」

「いいえ着いてきますすみません！」

やはり一人というのも怖いのか？

しかし、醒眼族（ウェイカー）はもう少し……ガチムチのイメージがあったんだが。

不屈の戦士、のようなイメージだったのだが違うのか？

……やはり個人差か。

「もう少し頼りがいのある奴であったら……。できることは何かないのですか？」

「うーん。ないかな！」

「帰れ」

連れてくるべきじゃなかった。

俺とエスペランサがため息をついて呆れていると、アイゼルは慌てたように、「ジョークだよ！　ジョーク！」と繕った。

正直、何もできないんだと思うのだが。

「い、一応小さい頃から各地を飛び回ってたからね。知らないものはないんじゃないかな！」

筋肉隆々なのに知的キャラ？
いや、知識を蓄えるのはエスペランサだけで充分なのだが。
隣でエスペランサの目が、燃えるように光ったのは別の話だ。
「俺が聞いているのはそういう話じゃないんだが。自分を守る能力はあるのか？」
「甘いね。俺はウェイカーだよ？」
アイゼルの話によると、ウェイカーという種族は昔から戦闘種族で通っているらしい。
魔法は不得手だが、武器を使ったり拳を使ったりということは得意なのだそうだ。
「……魔法が存在する世界というのは、戦いにおいて魔法が最強なのではないか？」
「その認識は違います。ここ『アルイカイダス』の基本的魔法詠唱は知勉族（エリシュ）を除き省略できません。つまり、詠唱している途中で攻撃を仕掛けられれば魔法が不得手な種族でも充分に勝機はあるのです」
俺の意見に対して、何ともまあ分かりやすい突っ込みをしてくれるエスペランサである。
そして、彼女の口調に面食らいながらもアイゼルは補足を加える。
「俺、親にエリシュも含まれているからね。魔法も純粋なウェイカーよりは得意なんじゃないかな」
「そうなのか。……ところで話は変わるが」
うん？　と俺の方を向くアイゼル。

俺は昨日から感じていた、違和感をぶつけることにした。

「なぜ、君の祖父は俺を選んだんだ？」

「うん？　龍眼族（レザール）って、鍛冶が得意だって有名なんだよね。鍛冶に限らず、技術系全般」

だから、と彼（アイゼル）は続けた。

「だから、祖父の考えとしては『クレアシモニー学園』に行った後、店で働いてほしいんだと思うぞ」

「面倒だな」

俺はため息をついた。

まあ、独り立ちを結局はさせてくれるんだろうけども。

「貸し一つ、というわけか」

「まあ、ある程度手伝ってくれたら解放してくれると思うけどな」

……取りあえず、魔剣を創ったらそれを贈ればいいか。

この世界で魔剣、というものは非常に貴重なもので、価格は億を越えるのも少なくないと聞くから、すぐに解放してくれるだろう。

ちなみに、俺の創れる武器は魔剣に限らず、魔法で打った武具全般らしい。

# 033　優遇条件（後書き）

御読了感謝いたします

## ０３４　狼群迎撃（前書き）

今日より、この作品ともう一つの作品である「異世界に転生したと思ったら、身体を再構築されｔ（以下略）」の更新ペースをそれぞれ交互にすることにしました。

毎日更新を楽しみになさってくれている方々、申し訳ありません。

かわりに、少しずつ文章の量を長くしていきます。

では、よろしくお願いします。

# ０３４　狼群迎撃

「……何で、こうも襲われるんだ！」

森に入って１日目の夜。
現在。
絶賛、被襲撃中である。

敵は体の所々に木の枝っぽいものが生えている狼だ。
数は……１０匹といったところだろうか。

「おかしいですね……」

エスペランサも首を傾げている。
俺は彼女を背後に庇いながら、目の前にいる狼型の巨大な魔獣（モンスター）を見つめた。

【白神腕輪（アルバ・アルミリア）】を展開し、「それ」が『ジルバ・ウルフ』という名前だと分かって少し嫌悪する。
自分と名前が似ている……。

まあ、そもそも俺が名乗った『シルバ』という名前も、元々は前世で友人の侍女（メイド）から取った名前であるからにして、特に特別な意味はない。

一番嫌だったのは、理由はどうあれ前世の名前だ。
何に対しても痛い。凄く幻想臭（ファンタジー）がしていた。

何故わざわざ女から取ってきたかと言えば、ただ真っ先に思いつ

いたという理由だけ。
恋仲だったということもない。

「シルバさん！　まえっ！」
「はいよー」

牙が見えた。
その大きく開き、俺の喉を噛みつかんとするその口。
俺は顔の横を拳で捉え、左に吹き飛ばす。

こういうとき、【引斥制御（グラビシオンコントロール）】…を使えばいいような気がするのだが気にしない。

ふと、アイゼルの方を見ると、剣で首をはねていた。
……剣は扱えるのか。何もできないと言うのは冗談か。

当たり前だ。

「エスペランサ、何か俺に強化魔法みたいなものはかけられないのか？」
「そんなに高度なもの、出来ませんよ！　私が出来るものと言えば、簡単な発火魔法くらいですっ」

この世界の、魔法のレベルがいまいちつかめない。
何かを発現するよりも、そもそも存在するものを強化する方が高度なのか？

いや、もしかして誰かに効果を譲渡することが高度なのかも知れない。
……考えるのはもうやめよう。

「アイゼル、何匹殺した？」
「そうだねー。首は４つあるね」
半分近く殺している。
まあ、俺の吹っ飛ばした『ジルバ・ウルフ』の首を切断しているだけだと考えればそこまでの労力ではないと……考えても無理か。

「はぁ、疲れた」
夥(おびただ)しい数の死骸。
襲撃が失敗に終わった『ジルバ・ウルフ』の死骸を後目に、俺はテントの準備をした。
なんだかんだ、風上の方に立てて血の臭いはこちらに来ないようにする。

って考えても、３人でテントの中に全員が入るというのは狭いな。
アイゼルには外で寝てもらおう。

「と、アイゼルは何をしているんだ？」
「ん？　『ジルバ・ウルフ』の牙はアクセサリーの材料になるからね。取っておいて損はないと思って」

まあ、首をはねたのはアイゼルだから俺は文句を言ったりしないが。
ところで、テントの件である。

「アイゼルは外で構わないな？」
「うん、いいよ。ってえ？」

アイゼル、ノリで返事して自分の不遇を招く。
これでまあ、エスペランサの安全は確保できた。
彼（アイゼル）には犠牲になってもらおう。

「ちょっと待って。何で俺が外なの？」
「さっきそれで良いって言ったから」

いやいや！　と手と首を振るアイゼル。
必死だな。潔く認めろよそのくらいのこと。

「俺危なくね！？」
「エスペランサは女子だからテントの中。俺は、エスペランサを守らなければならないからテントの中。正直どうでも良いアイゼルは外」
「でも、君がエスペランサちゃんをどうこうしないという可能性もないだろ！」

……もう何日も二人で野宿しているのに、何も起こっていないのだから何も起こらない、というのも納得できない話か。
正直、俺の好みじゃないんだがなぁ。
だって、出会った頃は何歳年下なのか考えていたし、……背丈が圧倒的に足りない。

「それを考えるなら、アイゼルを中に入れた方がどう見ても危険だろう？」
「えっ」

図星……なのか？
信用できなくなってきたな。

俺は立ち上がり、そばにあった『ジルバ・ウルフ』の首から牙を引っこ抜いて彼に渡す。
ちなみに彼が集めていたのは所謂犬歯。

「これは好きなだけ遣るから、エスペランサに近づくなよ」
「いや、何でもしないってー？」

だめだ。
アイゼルは信用出来ない。
エスペランサ関係では信用できない。

「そもそも、長旅になるというのに何も用意しないアイゼルが悪いとは思わないか？」
「そりゃあ、そうだけども。……そもそも、思い立ったらすぐ行動する君たちも君たちだと思うけど！」

確かに、返事をいう前日に準備する買い物はすべて終わらせていたからな。
そもそも、その時はアイゼルが着いてくるなんて思ってもいなかったし。
一生店番をしていたら良かったのに。

「とにかくだ。……防寒具は最低限やるから」
「……『ポラリス』の最初の町に着いたら、自分で買うからな」
「じゃあ、別行動かな？」
「ひぃ！」

## ０３４　狼群迎撃（後書き）

御読了感謝いたします。

本日は、前日より１ｋＢ分長くしました。
これからもよろしくお願いいたします。

## 035　レジリナ（前書き）

また短くなってしまった…。

次回、長くします！

## 035　レジリナ

俺は、夢の中にいた。

目の前に浮かび上がるのは、前世の記憶。
戦場の、記憶。

守りたかった人が発した、銃声がする。
仲間の、叫び声が聞こえる。

そして目の前に現れたのは、深い紅髪の毛に同じく赤い翼を生やした、一人の女性。

血塗られた赤い剣。
斬った人の血を吸い取り、剣の力とする規格外の剣。

『守ろう、ではなく。守らなければならない、と人を認識しない人は弱いわね』

口が開き、そう告げられる。

俺は、何かを言おうとする前に……。

腹が、切り裂かれた。

「……シルバさん？」

目を開けると、そこには心配そうな顔をして俺の額に手を当てるエスペランサと。

「大丈夫かい？　随分とうなされていたようだけど」

同じく、心配そうな顔をしているアイゼルの姿があった。

俺は頭を振って、自分に何も問題がないことを確認して起きあがろうとする。

……が、エスペランサに止められた。

「少しは安静にしてください」

「いや……水浴びにでも行こうと思ってな」

確か、テントからそう遠くない場所に河川があったはずだ。

昨日襲いかかってきた魔獣（モンスター）も、真っ昼間からは襲ってこないだろう。

とりあえず、周りを詮索するもおかしな部分は見つからない。

静止していたとしても、明らかに形状がおかしいものは分かる。

幸い、ここに針葉樹は前世とそう変わらない形をしている。

「……エスペランサ。大丈夫だから」

「でも……」

しかし、俺がもう一度大丈夫だということを伝えると彼女は不本意ながら、という顔でうなずいた。

起き上がり、アイゼルの方を見る。

彼はというと、微妙な顔で俺を見つめていた。

「やっぱり、ふつうの道路を歩いた方が良かったんじゃないか？」

「地図を見たが、この森を突っ切る方法が一番早い」

なるほど、と納得した様子のアイゼル。

これで納得できたことに俺は驚きだ。

「早いことに越したことはないからね。ところで、町には何時着くんだい？」

森を抜けて４時間。

空も紅く染まりかけた頃、俺たち３人は町に到着した。

今回は最北の村ではなく、それよりも少し大きな『町』である。

……大きさは、『アイリス』よりも少し大きいくらいか？

町の名前は、『レジリナ』。

整地された石畳の道に、白い建材で建てられた家々が並ぶ。

「ここは雪が積もっていないんだな」

「地面から熱を感じますね」

地下にパイプで配管されて、熱を与えているのか？

それとも……魔法か？

どうでも良くなってきた。
快適に過ごせればそれでいい。

「ここから、『クレアシモニー魔法学園』まで歩いて2日ほどですが、どういたしますか？」

シルバさんの体調を察するに、休むことをお勧めしますとエスペランサ。
テントとか買わないと……シルバが中に入れてくれないし……、とアイゼル。
俺はうなずいて、宿屋を確保する事に決めた。

「エスペランサ、どうする？」
「何をです？」

頭の上にハテナマークを浮かべたエスペランサに、選択肢を提示する。

「俺と同室か、アイゼルと同室か、個室か」
「シルバさんと一緒でお願いします。何かあったとき、私一つでは何ともなりませんし」
「ねえねえ、俺は？」

アイゼルが悲しそうな顔でつぶやくが、エスペランサは首を振って俺の影に隠れた。
おお神よ、だの呟くアイゼル。

正直、俺もこんな短期間でどれだけの信頼を得ているのか分かる言い物だったと実感。

エスペランサは、安全も確保できた。

一石三鳥である。

突っ込むな。

# 035　レジリナ（後書き）

御読了感謝します。

## ０３６　学園到着（前書き）

やっとだ…。

最後まで読んでいただければ光栄です。

# ０３６　学園到着

「全員、準備できたか？」

二人に確認すると、アイゼルもエスペランサもうなずいた。
アイゼルは一人用のテントと武器の手入れ用具。
エスペランサは衣服や調理器具やその他諸々。

俺は？

……俺は、着替えと食料を少々。
基本的に、鍛冶を始めるまで拳を武器にするつもりだが。
いったい、どうなることやら。

「ここから学園まで、徒歩でさらに２日かかります」
「えー。いい加減何かに乗ろう？」

いや、むしろ後たった２日でつくんだから、このまま歩いていきたいんだが。

「あの、私もさすがにここからは普通に道で行った方がいいと思います」
「それで、幾らくらいかかるんだ？」
「５０００イデアも行きませんよ？」

……野宿するよりはマシか。
正直、昨日までは直線距離できた方が速かったが、今回は大人しく二人の意見を聞くとしよう。

……でだ、アイゼルが指さしたのは。

「……なんだこれは」

「【デルエクス】っていう乗り物なんだけど、知らないのかな？」

「いや、名称は知らなかった」

アイゼルの町で初めて見かけた、近未来的な雰囲気を醸し出している謎の車両だ。

……正直、すでに車両と言って良いのかすら危ぶまれるほどの物である。

車輪がなく、代わりにホバークラフトのごとく紫色の何かを下へ噴き出したアメンボのようなものがそこにはあった。

「……なんだこれは」

「事故率も、【デルエクス】が開発されてから激減したし、これだったら速いしどうかな？　ちょうど学園前までの運行もあるし」

まあ、これで構わないか。

俺はうなずいて、二人について行くことを決めた。

正直言うと、凄く不便だと納得。

【腕輪（アルミリア）】よ、目の前にその説明したい物が現れないと知識を披露してくれない仕様は実に不便なのだが。

どうかならないのだろうか。今は、【腕輪（アルミリア）】を展開する前にエスペランサとアイゼルが説明してくれるから必要がなくなってくるのだが。

「で、学園に5時間ほどで着いたってわけか。日没前……」
「ほらね、歩くよりも速かっただろ？」

アイゼルが、してやったり顔で俺を見つめていた。
……まあ、今回は俺の間違いだったため、肩をすくませてそれを回避する。

とはいえ、日没前とはいってもさすがに遅いだろう。
巨大な門の先には、ただただ広い草原と、一本の道。
そして、その奥に遠目で見ても巨大と分かる建物があった。

「すんませーん」

俺がエスペランサに、周りを散策して宿を探そうかと話しかける前に、アイゼルがインターホンを押した。

『はい？』

そして応答。たしか、エスペランサの説明によると全寮制……だっけか。
常に構内に人が居るんだな。同時に寮も敷地内らしいし。

そもそも、都市国家の4分の1を敷地として持つって、どれだけ大きいんだと。
どうなっているんだ。

「入学候補者なんですけど、この時間って試験やってます？」
『はい、２４時間受け付けております。少々お待ちください』
えっ。
２４時間受付って、どこのフリーダイヤルだ。
試験、何時の時間に来ても良いってそんなに定員割れが激しいのか？
俺がこの世界の、学園の対応に困惑していると、アイゼルが俺の方にやってきた。
見れば、彼も驚いていた。
「この学園、凄いな」
「……まったくだ」
楽しみですねー、と入学がすでに決まっているエスペランサは気軽だった。
……これから、どんな試験が課されるかこちらは知らないからかなり緊張しているというのに。
知識問題とかなら、完全敗北だろう。
と、誰かがやってきた。
走ってきたらしいその人の種族は……腕獣族（ケレイジ）。
「こんばんは」
「……こ、こんばんは」
朗らかに笑ったその男性は、俺たちを見て。

興味深そうにうなずく。

「龍眼族（レザール）、醒眼族（ウェイカー）、腕獣族（ケレイジ）ですか。……今年の候補者は、面白い人が多い」

「いえ、私はすでに決定しております」

エスペランサが、金色のカードを提示した。

もちろん謎だらけ、非公開だらけのパスポートカードもだ。

しかし、その男性は特に驚いた様子もなく「かしこまりました」と一言。

そして俺とアイゼルを見やって、「着いてきなさい」と。

アイゼルが俺を見つめる。

俺は目を閉じて首を振り、男性について行く。

どんな試験だろうと、成るようには成るだろう。

# ０３６　学園到着（後書き）

御読了感謝いたします。

# ０３７　学園進入（前書き）

最強、現る。

最後まで読んでいただければ光栄です。

# ０３７　学園進入

学園内は、とにかく広かった。
俺とアイゼル、そして着いてきたエスペランサはただ、それにまずは驚かされる。

そして俺たちの前にて先導してくれている、初老の男は朗らかに笑いながらこの学園について説明してくれた。

「この学園は、約１００年前から始まる比較的新しい学園です。同盟国各国が、将来国を背負う人たちを養成する……というのが、元々の目的だったのですが」
「ん？」
「現在の状況としては、冒険者を志願する人が多く、それぞれの将来にあわせて教育をする場となっております」

もちろん、そちらの方が評判は良くなりましたがと男性はうなずいた。
……まあ、この調子だと俺のしたいこともできるかも知れないな。

「ところで、試験の内容は何ですか？」

俺たちがどこに向かっているのか見当がつかないのだろう。
アイゼルが首を傾げながら、彼に尋ねる。

「そうですね、在校生のうちもっとも平均的な生徒と【決闘】をしていただきます。見事勝利することができれば、入学を認めます」

そんなに単純な物なのか。

……緊張していた分、なにか物足りない気がするが。

「まあ、シルバ・エクアトゥールさんは大丈夫でしょう。この学園初、龍眼族（レザール）の生徒となることができるでしょう」

「……はぁ」

「申し遅れました。ルギアル・ルート・ルーベルと申します。ここの学園の長をつとめております」

あ、この人が長か。

ちなみに、隣を見るとエスペランサもアイゼルも口を開けていた。まったく、どういうドッキリなのか。こういう企画が最近ははやっているのだろうか。

「こちらですね。……第一闘技場です」

案内されたのは、中規模な円形闘技場（アンフィテアトルム）だった。

前世でいう……ローマの観光地でもある有名なコロッセオだろうか。

しかし、それほどの大きさはなく数分の1といったところだろう。

「第1？」

「ええ、ここには第1闘技場から第15闘技場までありますよ」

中身は、……近未来だな。

砂のフィールドではなく、……白い何かで覆われている。

なんだろう、あれは。

俺が床の材質に気を取られていると、闘技場の観客席で待機している一人の少年と、そのそばに座っている少女が目に入った。

少年の方は……ちょっとキラキラ輝いていると錯覚してしまうほどのイケメンである。顔の作りどうなっているんだこいつ。
筋肉は、あるにはあるんだろうな。正直言って。
ただ、オーラが凄い。なんだろう、酷い。

隣で、こんなにも距離が離れているのにアイゼルが口をパクパクさせているんだから、怖い。

少女の方は、知勉族（エリシュ）だろう。
黄緑色の髪の毛に、長めの耳。
美少女だな、この子。

「あそこにいるのは？」
「ああ、今さっきここへの入学が決定したラン・ロキアス君ですね」

ラン・ロキアス……か。
……心の中にとどめておこう。

「シルバさん、まずは決闘の方法を教えますね」
「たのむ。分かりそうにない」

エスペランサがうなずいて、俺に簡単な説明をする。

とりあえず、今回のものは競技での決闘だからにして簡易的なもので構わないらしい。

まず対峙したら審判の指示に従って【異名】を名乗り……。

「まて、その【異名】とはなんだ」

「一部の人が手にすることのできる【通り名】のようなものですよ。主に権力者や政府から与えられることが多いです」

ほう、簡単にいったら自分では名乗れないため【何かを成し遂げた人】という特別な意味が出てくるのか。

なるほどな。

で、【異名】を名乗った後に自分の本名を名乗り。

準備の合図とともに武器を取り出す、と。

なるほど、何とかなりそうだな。

「勝つ条件は、相手の戦意消失ですね。降参（リザイン）もありです。……ただし、何度でも立ち上がってきた場合、立てなくなるまで決闘は続行します」

「よし分かった」

「あと、魔法も有りなのでそこだけ気をつけてください！」

……そういえば、俺まだ魔法未経験か。

## ０３７　学園進入（後書き）

御読了感謝いたします。

明後日もよろしくお願いします！

## ０３８　入学試験（前書き）

バトル描写、やはり苦手です。

最後まで読んでいただければ光栄です。

# 038　入学試験

「君が入学候補者かな？」

俺の前に現れたのは、青い髪の毛をした人だった。
驚きの青さである。
腰には剣の鞘。長さからして、長剣の類だろうか。

はて、俺はここの学園長から「平均的な」人が対戦相手に選出されると聞いているのだが、相手のこの余裕は何だ？
……はてと思い、俺は自分の手をよく見たところ納得がいった。

……種族を隠したまま、というのも悪くないか。
先ほど、学園長は龍眼族（レザール）が初といっていたあたり、今まで龍眼族（レザール）がこの学園にいたことはないのだろう。

俺は所詮はぐれである。龍眼族（レザール）になったのも成り行きだし、種族のしきたりなんて知る由もない。
俺は俺の戦い方を進めていくだけだ。簡単なことである。

『両者、名乗りを。入学候補者から』

試験官だろうか。腕に黄色い腕章をつけた男にそういわれ、俺は名乗る。

「シルバ・エクアトゥール」

横目で観客席を見ると、興味深そうな顔でこちらを見つめている

ラン・ロキアスの姿が目に入った。
隣の少女が彼の肩をつつき、「帰ろう」というように不満げな顔で見るも、ラン・ロキアスは首を振ってそれを拒否した。

……そんなに俺の戦いが見たいか。
そうかそうか。放っておいてくれよ。

「……アレクエ・エイレイン。よろしくね、ちなみに2年」

……いっさい年上か。
油断さえしなければ……問題はないっ！

『では、はじめ！』

試験官の声がしても、俺と相手……アレクエ・エイレイン先輩は動かなかった。
俺はただ、相手の動きを見てから次の行動を決めようと思っていたのだが。
相手は武器を持たず、俺の方向に左手をつきだして……。

「【風】属性初級遠距離魔法、《翠弾（グリウス・バレット）》！」

と叫んだではないか。

先輩の左手から野球ボールほどの球体を撃ち出したではないか。
色は濁った黄緑色。常に攪拌されているかのように色は安定せず、
それが素人の投げたボールほどの速さで飛んでくる。

俺は手を地面について体を倒す。
何か、ナイフが体の側面を通り過ぎたような悪寒。

なるほど、それが魔法か。

速度もそれほどない、比べてこちらが接近すれば……。

まず間違いなく、負けることはないだろう。
詠唱を完了されて初めて、魔法は機能するようだ。

つまり、詠唱が完了するまでに俺が接近できれば勝ちというわけだ。
……【引斥制御（グラビシオンコントロール）】？　そんな子しらない。

「【風】属性中級……」
「遅い！」

俺は一目散に先輩へダッシュする。
先輩はというと、一時詠唱を中断し腰から剣を抜く。
だが、遅い。

俺は右手で拳を握ると、先輩の顎を下から殴りあげた。
少々よろける先輩。宙に浮かなかっただけでもまだマシか。

俺はその一瞬を逃さず、次は左足で腹を蹴る。
次こそ横に吹き飛んだ。

しかし、吹き飛ばされてもたっていられるのは、魔法の効果なのか？

それとも、ここの人は体が丈夫にできているのか？

# 038　入学試験（後書き）

御読了かんしゃです！

## ０３９　試験結果（前書き）

バトル描写は…もう…。

最後まで読んでいただければ光栄です。

# 039　試験結果

俺は【腕輪（アルミリア）】を展開して、わずかな時間の愛だ、先輩の体を調査することにした。
幸い、先輩が使う魔法はそれほど早くなく、所詮は試験なのか追撃もこない。

しかし、神に与えたもらったといえ…。
この【腕輪（アルミリア）】、信用度はあまり高くない。
白い（アルバ）ほうは基本的な物を教えてくれるが、調べたい対象が目の前になければいけないという条件付きであり、俺が直前までここ『クレアシモニー魔法学園』を知らなかったのはこれが原因だ。
何かの制限があるのか、表示されるところと表示されない物がある。

しかも、未だ黒い（ニーガ）ほうは全く動かない。
機能していないのか、それとも故障しているのか。
何か理由があるのか、今のところはとりあえず放置である。

「どうしたのかな？」
「……」

先輩の言葉は、おそらく本気で心配しているのだろうが。
何か、あおっているような気がして腹が立った。

俺はボール状の遠距離魔法をかわしつつ、彼の情報を探る。
どうやら、この世界の人というのは物理攻撃にたいして少し耐性を持っているようだ。

殴って吹き飛ばされても、種族によってはもう一度立ち上がれるくらいに。
さすが異世界。

「結局は、相手の戦意を喪失させれば……っ！」

俺は先輩に向かって殴りかかろう、そう思った瞬間に虚空を指さした。

「あ」
「ん？　ぐふっ！？」

先輩が俺から目を離した瞬間、同時に俺は拳に【引斥制御（グラビシオンコントロール）】で付加をかけそのまま腕を振りきった。

拳は先輩の腹に、吸い込まれるように激突し。
先輩は宙に吹き飛んだ。

しかし、耐性があるのだからこれで終わらせる気はない。
俺は再度、【引斥制御（グラビシオンコントロール）】を発動。
緩やかに回転しながら壁に激突せんとする先輩の背後へと高速で移動して、再度アタックを仕掛ける。

こんな至近距離で魔法を唱えられたら一発ダウンもあり得る。
そのため、絶対に一回もそんな隙を与えてはいけない。

「【風】属性……！」
「遅い！」

本当に遅い。

俺は空中で一回転しながら踵落としを浴びせ、先輩は地面にたたきつけられる。

そして、ピクリとも動かなくなった。

『ご、合格……』

俺は簡単に、試験官へ頭を下げるとすでに合格したらしいアイゼルと、祈るように手を組んでいたエスペランサのところまで歩いていく。

２人とも、安堵したような顔で俺を見つめていた。

「合格しましたね。……これで一安心です！」

「ありがとう、エスペランサ」

彼女に礼を言い、アイゼルの方をみる。

アイゼルはというと、余裕の顔で剣を肩に乗せていた。

「……すごかったね。圧倒的だった」

「魔法って、口で詠唱といけないんだな」

「ん？　……うん、そうだね」

少し俺の言葉に疑問を持ってしまったようだが、仕方がないだろう。

……しかし、これで帰れるのだろうか。

観客席のほうから視線を感じ、そちらを向くと未だラン・ロキア

スが俺を見つめていた。
身を乗り出すようにして俺を見つめているんだが、いったいどういうことだろうか。
俺は何かしたんだろうか。何もしていない気がするのだが。
――入学後を、楽しみにしているぞ――
口が動き、そんな声が聞こえているような、気がした。

# 039　試験結果（後書き）

ありがとうございました。

## ０４０　休息（前書き）

そろそろ次章。入学に入りたいですね。

最後まで読んでいただければ光栄です。

# ０４０　休息

「…いったい、何だったんだあの男は」
「どうしたんです？　シルバさん」

３人で、学園近くの宿屋を探す。
学園から少し歩けば、なんと高層ビルである。
この世界、ファンタジー世界だけというわけではなさそうだ。

「しかし、何故国によってこんなに……いや、都市部とその周りで違いがあるんだ？」
「『都市国家ポラリス』は、学園と国家中枢部を一気に開発しましたからね。私の村は、本当に小さな辺境の地にありますし……」

あるいみ、『カエシウス聖王国』に似ているのかもしれません、と自信なさげに呟くエスペランサ。
俺は彼女の頭をなでて、アイゼルの方を向いた。

アイゼルは、呑気に鼻歌を歌いながら俺たちに着いてきている。
入学試験を通り抜けたのがそんなにも良かったのか、俺には少し理解できかねるが。
まあ、彼（アイゼル）は出会った頃から軟派な人だったな。

「それにしても……」
「ん？」
「ラン・ロキアスについて知らないのか？　あの人、ずっと俺を見ていたんだが」
「僕もエスペランサちゃんも聞いたことがないんだったら、無名なんじゃない？　隣の女の子はかわいかったなぁ、知勉族（エリシュ）の女の子っ

て、如何にも女の子って感じがするよね。細いし白いし……」

と、アイゼルの脳内で話題が切り替わったところで俺は彼を放置することにした。

時間がもったいない。早く宿を探さなければ。

「この近くの宿で良さげなのを頼む」

「はいっ」

後ろから、「えー俺は？」とのセリフが聞こえたような気もするが気にしてはいけない。

結局、アイゼルはシングル部屋になるのだから。

「ごろごろー」

「エスペランサ、キャラが変わっていないか？」

すっかり緊張を解いた状態で、エスペランサは俺の隣にいた。

ベッドの上でごろごろしては、物悲しそうに俺を見つめる。

それだけでなく、頬は桜色に染まっており心なしか目尻も潤んでいるように見えて仕方がない。

いったい、彼女にどんな心境の変化があったのか知らないが、気にしてはいけない。

この娘に、異性としての魅力は感じないからである。

「気のせいなのです！」
「そうか、気のせいか」

気のせいにしては彼女の声が明るい。
頭の上、獣耳もぴくぴくしていた。

エスペランサって、なんのケレイジなんだろう。
…ケレイジは、耳でそれぞれ氏族がありそうだものな。

いや、でもこの時代にはないのか？
この世界の文明レベルが、地域によって大きな隔たりを持つのは少し……判断に困るな。

「明日からはどうするのですか？　やはり、一回『龍眼族（レザール）自治区』に行きますか？」
「それは長期休暇で良いような気がする。それよりも、試験の時にもらったパンフレットをじっくりみたい」
「シルバさんっぽくないですね何か。もっとこう、『なんとかなるだろ』思考の人かと思っていました」

それは偏見だと思うんだ。
どうなっているんだ、俺のイメージって。

と……、ドアがノックされてアイゼルが入ってきた。

「おいこの野郎、返事が来てからあけろよ」
「あ、ごめん……って！　何か変なことでもしていたのかい！？」

何もしていないが、もし着替え中だったとかしたらどうするんだろうか。

俺は構わないが、エスペランサとか一生彼を恨むんじゃないだろうか。

エスペランサは、学園でほかの男とよろしくやっていればいい。

俺とエスペランサの間柄は、何か微妙なものであればいいのだ。

「いや、何もしていませんけど……。どうなさったのですか？」

エスペランサの顔色は……いつも通りの落ち着いたものに戻っているな。

「剣の手入れ道具買ってくるから、ご飯は先に食べておいて」

「分かった」

アイゼルは俺が了解したのを確認すると、部屋を出ていった。

俺はエスペランサと見つめ合い、同時に笑う。

「飯にするか」

「はい！」

## ０４０　休息（後書き）

御読了感謝です。

前回出てきたラン・ロキアスは重要なキャラなので注目！　です。

## ０４１　説明疑心（前書き）

次回から新章です。よろしくお願いします。

最後まで読んでいただければ光栄です。

# 041　説明疑心

それから何か月か経った。
俺たち3人は食っちゃ寝食っちゃ寝を繰り返して生きていた。
異世界の生活とは何だったのか。
堕落の日々である。

「入学まであと何日でしたっけ？」

エスペランサの言葉に、俺はそばにあったパンフレットをのぞくことによって把握する。
こうやってゆっくりできるのも残り数日、と言ったところか。

「残り3日、といったところかな」
「それ、結構慌てないといけないのではないですか？」

エスペランサの言葉に、俺は首を振る。
たしか、明日に寮への案内が届くはずである。
明日からは寮生活、そういうわけだ。

前世での寮生活は、それはもう混沌に満ちていたような気がする。
当然のように男子寮と女子寮が分けられていなく、自由を通り越していたような気がする。
今回はちゃんと分けられていることを期待しよう。なんだかんだ、この世界もぶっ飛んでいる節があるからな。

「同じ寮になれるといいですね！」
「はぁ？」

俺は梟のように首を回し、エスペランサの方を向いた。
この娘、いったい何を言っているのか。
理解できかねるのだが、どうすればいいんだろうか。

しかし、俺のそんな顔に少女（エスペランサ）はたじろぐこともなく、当然だというように笑ってパンフレットを俺に見せてきた。

「ほら、ここに書いてるじゃないですか？　寮はシェアハウス方式だと明記されていますよ？」
「……そこは全くもって興味がなく、読んでいませんでした」

俺は言い訳をするように頭を下げると、エスペランサからパンフレットを取り返して中身を確認する。

『寮は、１０人での同居とする』

しっかりと表記されていた。
驚愕の事実である。

こんなの聞いていない。
決してこんなもの聞いていない。
まあ、今が初見なわけなのだが。

「そういうわけなのですよ。わかりましたかシルバさん」
「……あまり考えたくはなかったが、事実だということは把握したよ」

前世よりもカオスになる可能性がある。
この学園、大丈夫なのだろうか。

「アイゼルー。おいアイゼルー」
「何だいシルバ」
理由は特にない。
強いて言えば、暇だったということだろうか。
「この世界、何故銃を見かけないんだ？」
「ん？　それを知らないって、無知にもほどがあると思うんだが、どうかな？」
俺は肩をすくめることで、その質問をスルーする。
アイゼルははぁ、とため息をついて俺を見つめて……。
説明をし始めた、
「簡単に言うと、魔法に銃弾が負けるはずがないと言うことだ」
「いや、でも銃弾の方が速いだろう？」
「……君は、本当にこの世界の人かな？」
……俺は再び、肩をすくめた。
アイゼル、思っていた以上に察しがいいな。

エスペランサは簡単に信じてくれたというのに……というより、別に隠さなくてもいいのだろうか。
隠しても、ろくなことが起こらないような気がするが。

今のところは、多くを語らない方がいいのか、それとも言ったほうがいいのか。

「……来たるべき時に話す。すまない、今は言えないんだ」
「そんなに、俺が信用できないのか？」

信用とか、そういう問題ではない気がするのだが。
アイゼルの顔を見ると、彼は怪訝な顔を隠そうともしなかった。

信用を得るというものは難しいものである。
そもそも、俺が何かを語らないと相手も信用してくれないんだろうが。
今、正直信用できるのかと訊かれたら俺は首を横に振るだろう。

「まあ、君にも何か事情があるんだと思って今回は普通に説明するよ。君が今回戦ったのは、あの『クレアシモニー魔法学園』の平均的なレベル。つまり、あれよりも実力のある人なんて腐るほどいるのさ」

……腐るほど？
俺がそう聞き返すと、たとえばと彼（アイゼル）は指を立てた。

「例に挙げるとすると、例えば銃弾よりも遥かに速い速度で遠距離魔法を撃ち出す人がいる。魔法で自分を強化し、【デルエクス】よりも移動速度を速くすることのできる人がいる。そんな人に対して、銃は効かないといっても過言ではないと思うけど」

あまり俺には理解しがたい説明ではある。
……この世界の文明レベル、銃がそれほど発達していないというのもあるんだろうが。

そもそも、魔法が脅威を揮ってきたこの世界のことだ、魔法ばかりが発達しているというのもあり得るのだろう。

「じゃあ、剣は？　ならなぜ剣が発達するんだ？」
「ここの剣は魔法と融合させやすいからね」
「融合？」
「剣に魔法を取り入れ、魔法が使えるようにするということさ。常に魔法を宿した剣を【魔剣】と言い、魔法で創造した剣を【魔法剣】というんだよ」

……なるほど理解できない。
俺が理解するには、かなりの時間が必要かもしれない。

「まあ、君が何か情報が必要だというのなら、オレはいくらでも教えてやる。信用出来たらオレにすべて教えてくれればいいさ」
「……恩に着る」

まあ、そろそろエスペランサのことも心から信用する必要があるんだがな。
とりあえず、明日の寮を楽しみにしよう。

## ０４１　説明疑心（後書き）

御読了感謝いたします。

明後日もよろしくお願いいたします。

# ０４２　寮群衆地（前書き）

最後まで読んでいただければ光栄です。

# ０４２　寮群衆地

「……これ、どう見ても寮というイメージが湧いてこないんだが」
「奇遇ですね、私もです」
俺たち三人は、目の前の光景に動揺していた。
目の前に広がるは、一戸建て。
パンフレットに書いてある番地からするに、ここで間違いはないのだが……。
おかしいな、俺は市街地に迷い込んだのだろうか。
今、目の前には3階建て白塗りの立派な『別荘』が建っている。
確かに、シェアハウス形式であることが理解できるが、これはやりすぎではなかろうか。
さらに、ここだけではなく隣もである。
道路を挟んでも、あるのは同じような形・大きさをした建物。
高級住宅街か何かか、ここは。
「で？　オレ達の割り当ては？」
「一括で3人届いているよ。これが……アイゼルの、これが俺の、これがエスペランサのだな」
封筒に入っていたのは紙切れ、3枚。
俺は一人ずつにそれを配り、番地を確認した。
「これって、男女を分けないんだな」

「まあ、コミュニケーションを図る目的もあるのでしょうか？　……『クレアシモニー魔法学園』というのは、少なくとも４つの国から生徒を集めてるんでしょうし」

エスペランサのいうことも確かに……なぁ。

たしか、ここ『都市国家ポラリス』を囲むように３つの国があり、そこから優秀な生徒を募集しているんだっけか。

たまにほかの国からも入学生はいるんだろうが……、うーん。

「ところで、私は１０３－２だったのですが、シルバさんはどうでしたか？」

彼女に訊かれ、俺は自分の紙切れに初めて目を通した。

解散してから見るのかと勘違いしていて、今さっきまで興味がわかなかったためである。

そしてちらりと目を通す。

どうやら、俺もエスペランサと同じ……らしい。

「ああ、俺も一緒だよ」

「えっ」

隣で呆気にとられたような声。

それを発したのはアイゼルだろう。少しだけ困ったような、万ウケたような顔をしている。

「俺、１０３－１なんだけど」

「まあ、そこは……」

気にするな、と俺は諭すように彼の肩を叩く。
アイゼルは、頬を膨らませてこういった。

「……おお神よ」

……別に神が決めたわけでもなかろうに。

ということで、半泣きのアイゼルを取り残して俺とエスペランサは少々離れた【１０３－２】番地まで歩いていく。
確かに寮という施設の中では結構豪華な方なんだろう。

しかし一つ重要な欠陥がある。
……どれも同じ造りで目新しさがまったくない。

少しくらい、芸術的建築物を置いてくれてもよかったような気がするのだが、一体どういう趣味なんだろう。
もしかして、何も考えずに建築したとかないだろうな。

「一体、同居人はどんな人なんでしょうねー」
「俺は、あの人がいないことを祈りたい。切実に祈る」

ラン・ロキアスがいると、俺の学園生活はろくなことにならないと予想した。

予想しただけ！

そもそも、龍眼族（レザール）に普通の学園生活が遅れること事態が不可能だろうし、魔法学園ということもあってまず俺の考える日常のイメージとは違うような気がするのだ。

まあ、おそらく俺の前世というのも……普通かと問われれば、首を即座に振るレベルではある。

正直、この魔法学園のほうが平和なことを祈るばかりだ。

「シルバさん、何十面相するおつもりですか？」

「してたか？　すまないな」

「まあ、いいですけどね！」

エスペランサ、なんか今日は元気だなぁ。

何かうれしいことがあったのだろうか、頬は桜色に上気している。

俺は彼女の反応に首をひねりつつ、寮の窓を覗き込む。

白いカーテンが閉められており、詳しく見ることはできないが数人中にいるようだ。

本当にかすかな影しか見えず、男か女かすら判別ができないほどのものだったが、まあ何とかなるのだろう。

「……そろそろ、中に入ろうか」

「そうですね、入りましょう」

俺は相も変わらず、雪のように白い寮のドアを見据える。
……さ、1年間の生活が決まる扉だ。

「もう、遅いですよこういう時は早く開けてください！」
「あっ」

# ０４２　寮群衆地（後書き）

御読了感謝いたします。

## ０４３　氷焔双子（前書き）

遅れて申し訳ありませんでした！

最後まで読んでいただければ光栄です。

# ０４３　氷焔双子

俺はノックも程々に、ドアをあけた。
白い扉は、少しも音を立てずすぐに開き、俺とエスペランサを部屋の中へといざなおうとしているようだった。

「……ふみゅ」
「いや、怖がらなくてもいいからエスペランサも中に入ろうか。別に大したことないだろ」
「……本当に大丈夫ですか？」

さっきの人影を、幽霊とか何とかに勘違いしたのだろうか。
普通に話し声もするから、幽霊ではないような気がするが。

「普通の生体反応がするから、エスペランサの考えているようなものはないと思うが」
「人だとしても、私……仲良くなれる自信がないです」

コミュニケーション障害かな？
俺は少し考えた後、音が一時中断された奥の部屋を目指して歩き出した。

「こんにちは」

中にいたのは、女子が二人。
どちらも銀髪で髪の毛は長く、少々高級そうなキャリーバッグをそばに置いて。
興味深そうな顔で、俺とエスペランサを見つめていた。

「……んぅ？」

あざとい表情を浮かべ、微笑を浮かべるのは二人のうち背の低いほう。

今近づいてわかったが、思った以上に背が低い。１５０センチあったらいい方だろうか。

髪の毛は長く……というよりは長過ぎてくるぶし程まである。

焔（ほのお）のように紅い瞳、そしてきめ細やかで雪のような肌。

「君も、ここの住民になるの？」

「……ああ」

きゅるん、とした目で下から見つめられるのは……いったいどうなのか。

エスペランサのほうが身長は高いんだ、と確認した後俺は紙切れを少女に見せた。

ちなみに、声もどこか幼げである。

「……ふーん。私はリンセルスフィア・フレイヤ・レイカー。よろしくね」

名前が長い。覚えられるのか、と考えて俯いたところで「リンセルって呼んでくれると嬉しいなっ」と声をかけられた。

リンセル……か。どこか、気品をうかがわせる凛としたイメージの名前である。

「俺の名前は、シルバ・エクアトゥールだ」

「……エスペランサ、です」

俺とエスペランサが名乗る。
と、リンセルと名乗った彼女はふふっと微笑を漏らし、俺ではなくエスペランサの方を見た。

「苗字、はないの？」
「ひ、非公開です」
「……事情があるのかな？　ごめんね」

気遣うようにエスペランサの顔を覗き込むリンセルさん。
と、彼女の隣にいた女の子が、リンセルさんの肩を叩く。

「どうしたの？　お姉ちゃん」
「……関わらないことが時にいい結果になる可能性もあるから、……あまり興味を持っちゃだめ」

涼風の吹くような声だった。
見渡す限りの雪原のなか、粉雪混じりに吹くそよ風のような声。

声も美しかったが、顔も同様に美しかった。
氷の彫刻を眺めているような、鋭利ではあるが神秘的な美しい顔。
妹同様透き通った、しかし南国の海を思い浮かべさせるような深くさらに鮮やかさも兼ね備えている青い瞳。

「アンセリツティア・フレイヤ・レイカー。アンセルって呼んで」

そう呟くと、アンセルさんはため息をついてソファに座った。
なにか、気を害してしまうようなことをしてしまったのかと、俺とエスペランサが首をひねっているとリンセルさんが慌てたように弁解した。

「お姉ちゃん、こんな性格だから……ごめんね？」
「いや、性格……なのか？」
「……貴方とは関係ないでしょう？」

アンセルさんは、そういうなり本を取りだしてそれを読み出した。
なるほど、……クールを取り違えている性格だということはよく分かった。

リンセルさんの話によると、双子らしいが。
なぜ、ここまで似ていないのか。

「……むぅ」

頬を膨らますリンセルさんに、俺は大丈夫だと告げた。
こういう物は、おそらく時間がすぎていけば自然となじんでいくだろう。

……しかし、これで４人か。
確か、一つの寮で１０人が同居するんだったか。
こうやって考えてみると、予想以上に多いような気がした。

「あ、よく見るとシルバ君って龍眼族（レザール）なんだねー」
「……ああ」
「私たちは魔能族（サイコル）なの。ふふ、初めて龍眼族（レザール）をみたっ」

初めて俺を見て驚かない人を見た。

と、たわいもない話をしているとドアが開く音がした。
……なるほどねぇ。

声は男子が1人、女子が1人。
……人影からするに……。

「やっはろー」

ほら、やっぱりラン・ロキアスだろ？

# ０４３　氷焔双子（後書き）

ありがとうございます！

# ０４４　寮内散策（前書き）

最後まで読んでいただければ光栄です。
よろしくお願いいたします。

# ０４４　寮内散策

件（くだん）のラン・ロキアスは、俺を見ると口角の端を吊り上げた。
しかし、そんなことをしてもまったく顔の良さは失われないというのだから驚きである。
正直、腹が立って仕方がないが、俺はさも初見のように挨拶をした。

「……うっす」
「何日かぶりだな、龍眼族（レザール）の人」
「シルバ・エクアトゥールだ」
「おっと、ありがとう。俺の名前はラン・ロキアス」

すでに知っていたが、俺は頷く。
ところで、俺は野郎よりも後ろにいる緑髪の少女に気があるのだが。
と、俺の視線に気が付いたのか少女が一歩前に進んで名乗った。

「リンナアイデル・パン・リーフだよ。リンって呼んでねっ」
「……はーい」

それにしても既に６人か。
こう考えると、この寮はそんなに広くない。

しかし、問題なのは圧倒的男女の比率差である。
現在、男２に対して女は４。
少し、男子が少なすぎないだろうか、大丈夫なんだろうか。

しかも、まさかラン・ロキアスっていうのがな……。

リンセルさんやアンセルさん、それにエスペランサが自己紹介をしてロキアスは輝くばかりの笑顔を女子陣に向ける。

「この1年間、よろしく。……俺、健忘で記憶がないから、色々教えてくれると助かる」

記憶喪失……ねえ。

胡散臭いな、信憑性に欠けていそうだが。

「ところでシルバ、お前はどこからの出身だ？」

いきなり呼び捨てか、馴れ馴れしいな……。

コミュニケーション能力があることは認めよう、顔もいいことは認めよう。

……自分で言ってて、腹が立ったんだがどうすればいい？

俺はとりあえず、エスペランサの出身地をこたえた。

さすがに『地球』という異世界から転生してきました、なんて言えるわけがないだろう？

それにしても、エスペランサ。

謎が多い割に、俺の言うことを簡単に信じる……。

何かが心のどこかに引っかかっていて、うまく言葉にできないが、なんだろう。

……本当はとんでもない存在なのではないか、という疑問がなぜか芽生えた。

つまり、勘である。

「ああ、言い忘れていたけど俺は醒眼族（ウェイカー）だ。そこんところよろしく」

何が宜しくなのかよくわからないが、ラン・ロキアスはそういうとリンさんと部屋を出て行った。

リンセルさんの方に視線を戻すと、何かアンセルと話し込んでいる。

どちらも深刻そうな顔をして額を寄せ合い話し込んでいるところを見ると、俺たちには関係のなさそうな話しである。

……俺に関係ないことには極力首を突っ込まない、それが先決だろうか。

まあ、実際こうやって同居人になっている時点で、俺と関係はあることになってしまうのだが。

「俺たちも少し寮を回ってみるか、エスペランサ」

「そうですね、おそらく部屋は決まっていないでしょうし、その辺も考慮したほうがいいかもしれません」

「それにしても、広いですねこの部屋……」

「そうか？　別にそんなことはないと思うが」

特に何の変哲のない部屋が１０部屋。それが各個人の寝室になるんだろう。

1階には3つの個室、そのほかにリビングやらダイニングキッチンやらが備え付けられている。

この寮、というか『都市国家ポラリス』の中心部は前世の世界、その生活と変わらない。

寝室の中も、机が一つとベッドが一つの簡素なものであり、その他は自由に持ち込みが可能だそうだ。

「私の部屋よりは明らかに広いですよー」

「……俺はどう反応すればいいんだ？」

俺が返答に困っている間に、彼女（エスペランサ）は部屋に入るとベッドの感触を楽しんでいた。

確かに、柔らかそうな感触だ。エスペランサがキラキラと目を輝かせているくらいなんだから、相当肌ざわりはいいんだろう。

新品のシーツのにおいがする。確かに、ここなら大丈夫そうだな。

「あの、今日から別々の部屋ですね……」

「……そうだな」

エスペランサが顔を俯かせたため、俺は彼女の頬を両手で挟んで俺の方に顔を向かせる。

少しだけ驚いたような顔をするエスペランサに、俺は話しかけた。

「流石に、今までの行為は結構マズかったと思うんだが？」

「でも、……シルバさんは私に手を出しませんでしたから」

別にそういう訳ではないんだが。

ああいう感じのことが他の大人に知られたとき世間体が悪くなる

と思うんだが。
そうか、エスペランサは気にしないか。
「……でも、精神的に俺に依存してしまっても困るだろう」
「そうですね、それもそうですけど……」
エスペランサは、この数週間俺と旅をしていた時に思っていたことを口に出した。
何か安心できたこと、暖かい気持ちでずっと居れたこと。
そして、いつの間にか俺を慕っていた、ということ。
「……まあ、正直そんな気持ちを語られても困るが……」
「え……？」
「エスペランサは俺の命の恩人だからな、エスペランサが居なかったら、俺は路頭に迷って今頃は死んでいたかもしれない」
「でも、シルバさんがあの時助けてくれたから……」
あのとき……か。
なぜ、俺はあの時エスペランサを助けようとしていたんだろう。
「あの時は……身体が勝手に動いてた。別に助けようと思ったわけではない」
「……それが、シルバさんの本質ではないのですか？」
そう俺に訊いたエスペランサの目尻には、わずかにだが涙が溜まっていた。

# ０４４　寮内散策（後書き）

御読了感謝いたします。

# ０４５　正体判明（前書き）

最後まで読んでいただければ光栄です。

# ０４５　正体判明

６人、たしかに集まったものの、一つ問題がある。
残りの４人が、何時まで経っても来ない。
このまま、男２人その他女子でこれから生活していくのかと考えると考えただけで少しめまいがしてきた。
しかも、もう一人の男子生徒はまさかのラン・ロキアスである。
精神的なにかこう、来るものがあるんだがどうすればいい？

「とりあえず、夕ご飯にしましょうか」

エスペランサの言葉に、リンセルさんは「そうだねー」と微笑み、女子はキッチンへ。
俺とロキアスは、リビングで微妙な空気のまま黙りこくっていた。
。

「シルバ、君はなんでこの学園に来たんだ？」
「特に理由はないが。強いて言うなら、まともな学園生活というものを過ごしてみたかった、というのが一番大きいんじゃないだろうか」
「まともな学園生活？」

俺はおうむ返しのように聞き返してきたロキアスを見つめ、頷く。
まあ、嘘はついていないが本当のことも言っていないという感じだろうか。

「でも、君はこういう教育機関にきちんといたんだろう？」
「……教育機関と呼べるかすら怪しい場所ではあったが」

俺の前世通っていた学校は、厳密に言えば学校ではなかった。
一般の学校と同じカリキュラムを組みながらも、前世持っていた『超能力』を育成させるような場所だったからである。

「へー」
「逆に聞くが、ロキアスは何故この学園に？」

ランでいい、と男の俺が腹を立たせるようなさわやかな顔で彼は言った後、一言。

「成り行き」

彼の話によると、さっきまで一緒にいたリンナアイデルさんに誘われたらしい。
しかしこの男、この世界のことを知らないって言ってたな。

……俺と同じにおいがする。

「お前、転生者か？」

俺は特に悩むこともなく、単刀直入に聞いてみることにした。
正直、俺はそこまでの頭がない。

前世はただの戦闘狂だった。戦闘狂と自分で自覚していながらも、戦いに敗北してしまったというのは恥ずかしい話である。

「ああ、それそれ。……あ」

口を滑らせた、とでもいいたげにロキアスは口を手で覆った。

なんか似ている気がしたら同類だった。

「頼む、誰にも言わないでくれ！」
「目立ちたくないんだーとかって言いたいのか？」
「それ」

断りたい気分だが、正直面倒なことに巻き込まれそうである。

「この事実を知っている人は？」
「リンだけじゃないかな。あとはシルバ、君」

事実を知る人は3人か、まあ、大丈夫だろうが。

「はいはい」
「本当！？　助かるよありがとう！」

輝くような笑顔で言われても何とも思わないんだが。
どうなんだ一体。どうなってるんだ。
むしろ腹が立つ。

「シルバさん、ロキアスさん。ご飯出来ましたよ」
「お」

ロキアス、こいつ駄目だわ。
何がダメって、色々と駄目だった。

## ０４５　正体判明（後書き）

御読了感謝いたします。

申し訳ありません、今回投稿から、少しの間この作品は休載いたします。

理由は環境の変化です。大学に進学するため、その準備をしなければなりません。
しかも加えて今回はアルバイトまで探さなければならないので、アルバイトが探し終わるまで休載という形を取らせていただきます。

かならず、戻ってきます。この物語を未完成で放置することは絶対にございません。

というわけで、私がいない間ですが
ｈｔｔｐ：／／ｃｈａｔ．ｋａｎｉｃｈａｔ．ｃｏｍ／ｃｈａｔ？ｒｏｏｍｉｄ＝ｘｅｎｏｖｅｒｓｅ
チャットルームをよろしくお願いいたします。

本日でたったの４日目だというのに、多くの人でにぎわっております。
皆さんの交流の場になればと思って開設いたしました。
よろしくお願いします。
（本当は、この場では言えないような大物さんもいらっしゃいますが）

## ０４６　侵入者（前書き）

長らくお待たせいたしました。

とりあえず。数日間は不定期で更新していこうと思います。

大学に入ってから毎日更新は多分できないので、週３くらいを予定しています。

# ０４６　侵入者

寝室の場所も決まり、俺は自分の部屋に設置されているベッドに倒れこむ。
決して身体的に疲れたという訳ではないが、いろんなことがありすぎて困った。
ラン・ロキアスの正体や、この寮にどう見ても女子の方が多いこと、残り４人のことなど。

ベッドの感触は最高で、少しでも気を抜いたら眠れそうだった。
俺は明日の行事を確認し、眠りについた。

目が覚めたのは早朝だった。
早朝、というよりは未明に近く、太陽すら昇っていない。
窓の外を見つめても薄暗く、特に何か特別なものがあるという訳でもない。

俺は起き上がると、着替えを済ませて１階に降りる。
誰もいないはずの静かリビングだが、何かが動いているような気がする。
なんといえばいいのだろうか。気配がする。

「……誰だ？」

もしくは「何だ」か。俺はそんなことを考えながらも決してその

気配のする方向から目をそらさなかった。
まさか、入寮2日目からなにかトラブルが起こるだなんて予測できないだろう。

幸い、俺は戦うのに何か武器が必要という訳で半句、拳さえあれば何とかなる。
他は、【腕輪(アルミリア)】の個人特定情報があれば、腕力的にかなわない相手だとしても【引斥制御(グラビシオン・コントロール)】でとりあえずは何とかなる。

この世界の魔法概念にはそれほど詳しくないが、とりあえず龍眼族(レザール)という種族の能力と、神々から与えてもらったいくつかの能力でこの場はやり過ごせそうだが。
ピタッ、とその何かの動きが止まった。
こちらがいることに今になって気づいたらしい。
もう少し、警戒を強めたほうがいいと思ったのはおせっかいか。

「……んぅ」

声が聞こえた。押し殺しているのか、普通の人には聞こえないような小さな、蚊の鳴くような声だっただろう。
しかし、俺はその声が聞こえた瞬間、「それ」に飛びかかっていた。

それが危険なものならば、即処分するつもりでいた。
その暴れる何かを組み伏せ、自分の目が薄明かりに適応できるまで待つ。

「んっ!?」

しかし、俺は。

その組み伏せた対象を視認すると共に、驚きで何も言えなくなっていた。

きめ細やかな白い肌。

すらりと伸びた肢体。

起伏ある体つきに……。

紅蓮のように真っ赤な髪の毛。

髪の毛はツーサイドアップにまとめられており。

そして猫のように吊り上がり、金色に光った眼。

俺は目の前に広がる光景を、信じられなかった。

夢に違いない、と思わざるを得なかった。

ありえない。こんなことがあるはずないと自分に言い聞かせたい。

しかし、目の前。

灼髪金眼の少女は、俺を見て戸惑ったように笑った。

その笑い声は、ほんの数週間前。

俺が前世で聞いていた、もう聞くことのない声。

「……華琉（はる）……？」

俺は、自分の目の前で、俺を見つめる彼女を口を開けたまま見つめていた。
彼女の名前は南雲華琉（なぐもはる）。

前世での俺の……関係は何だったか。
いわゆる友達以上恋人未満のような関係だった。

「なんでこんなところにいるんだ？　なぜこの世界にいる？」
「特に意味はないけれど。……そうだね、ダウンファール君のことが気になった、って言ったらダメかな？」

あ、名前が変わってシルバ君になったんだっけ、と彼女は朗らかに笑う。
その笑顔は一切の屈託なく、しかしどこか儚げだった。

「べつにかまわないが、やはり気になるな」
「うん、それは知っているけど、私が話すわけにはいかないし。……ミステリアスな女の方が……きゃっ？」

本当に無意識だったが、俺は彼女を押し倒していたらしい。
彼女の吐息が顔に当たり、理性の箍（たが）が外れてしまったのか。
それとも、この胸の内に秘めていた、自分でも把握し切れていない気持ちが爆発してしまったのか。

とにかく、気が付けば俺は彼女の手を拘束したまま彼女の上にいた。

「……ふふ、シルバ君ったら」

華琉は、一瞬だけ戸惑ったように瞳を揺らしたが、すぐに落ち着いた様子で俺の手を払う。

そして何をするのかと思えば、俺の首に手をまわして引き寄せたではないか。

「シルバ君は、本当にさみしかったのね」

「……さあな」

ふふ、と彼女は笑う。

「シルバ君のこと、私が分かっていないとでも思っていたのかな？」と、彼女は言葉をつづける。

「本気で、まだ強がっているつもりなの？」

「……っ！」

次の瞬間、俺は彼女の唇を奪っていた。

彼女の柔らかい感触を、啄むように吸う俺を彼女は無言で受け止めていた。

「……っはぁ。……満足できた？」

「……何とか、かな？」

自分で決めないと、と彼女は笑う。

「自分の気持ちはあなた自身が決めるものなんだよ？」

上気した頬は桜色。しかしその目の煌めきを、彼女は一切失わな

いまま俺を見た。

美しかった。

「……で、いつこの世界からいなくなるんだ？」

「気分かなぁ？　……そんなさみしそうな顔をしないの。……貴方は顔もいいし、性格もいい。すぐに私なんて忘れて新しい彼女ができるでしょう？」

物わかりの悪い弟を諭すような目線で彼女は笑う。

すこし恥ずかしくなって、俺は顔を俯かせた。

が、彼女に頭を抱えられ、その豊満な胸に押し付けられた。

「……本当、姿かたちは変わっても中身は変わってないね」

「余計なお世話だ」

「ふふ、そういう貴方も貴方らしい……」

と、何かを口の中に放り込まれた。

楕円形でわずかな匂い。

何かの錠剤だ。俺が慌ててそれを吐き出そうとするも、水を口に含んだらしき彼女に唇を塞がれ無理やり呑み込まされた。

「……そろそろ行かなきゃいけないから、ごめんね」

「なんだよ……これ」

「ただの催眠薬だよ……？　大丈夫、何もしないから……」

彼女の声は、震えていた。

泣きそうな声で、そういって。

俺は、意識を失った。

## ０４７　朝目覚め（前書き）

急ピッチで書かねば。

でも、クオリティは落としたくない。

変なジレンマに囚われているゼノです。

最後まで読んでいただければ光栄です

# 047　朝目覚め

「……ルバ君。……大丈夫？」

眼を開けると、そこに華琉はいなく。
代わりに、リンセルさんがいた。

寝ぼけた頭で周りを見回すと、何のことのない下宿先のソファの上である。
はて、意識がなくなる前のあの感触は本当に夢だったんだろうか。
夢でも仕方のないことだとは思うが。

……世界を超越することが不可能だと俺は思っているため、特に問題なくそう感じた。
と、そこでリンセルさんの存在を忘れていたことに気づく。

「……おはよう」
「おはよ。……何か体調でも悪いの？　大丈夫？」
「特にそんなことはないが、……俺がここに居ると気づいたのはいつごろだ？」

リンセルさんは俺の眼を、その紅い目で見つめると。
不意に目を反らし、何処かに立ち去った。

と思ったら戻ってきた。
どうやら、朝飯を準備してくれていたらしい。

クリーム色の何かが乗った、パンを手渡されて少々戸惑う。
いや、実際はその存在がパンであるかパンでないかなんて知った

こっちゃないのだが。
少なくとも、そんな感じの食物を前世では「パン」と呼んでいた。

「パンは嫌いなのかな？」

パンでした。
この世界、もしかして……。

ないと思うが。
……まさか、なぁ？

「いや、ちゃんともらう」
「そっか。……ふふっ」
「？」

彼女の笑った意味が解らず、俺は彼女を見上げる。
リンセルさんは、にこやかな顔で俺を見つめていた。

……もっとも、背丈は低く俺の肩に届くか否か、というところだったのだが。

「……首痛い」
「それは俺に屈めということか？」

こく、と頷くリンセルさん。
仕方がないためソファに座ると、彼女は満足したようにこくっと頷くと無遠慮に身体を触ってきた。

「はっ？」
「そんなに威圧しないで。……龍眼族（レザール）って、体つきがいいんだね」

遠慮なくぺたぺたとさわってくるあたりで俺が威圧しないと思うのはどうかと思うんだが。

リンセルさん、常識が欠如していたりとかするんだろうか。

……名前が妙に長かった気もするし、どこかの金持ちの娘だったりしてもおかしくはなさそうだが。

「シルバ君は、龍眼族（レザール）だからやっぱり鍛冶を学びにここにきたの？」

「……一番の目的はそうなるな」

一番の目的は、ここで鍛冶の材料を整えることにあるが。

そう、鍛冶神ヘーハイスからもらった【魔武具創造（マギア・クリエイト）】の能力は技術の伝授のみという微妙なものである。

……材料も無尽蔵に作り出せるとかならいいんだが、流石にそれは話がうますぎるといったところか。

「そかそか。私はどうしようかな？」

リンセルさんはそういうなり、悩んだように首を傾げる。

俺はそんな彼女にかまわず、思ったことを聞くことにした。

「……ラン・ロキアスをどう思う？」

「えっ？」

聞いたとたん、彼女の頬は桜色に染まった。

真っ白といってもいいほどの肌にわずかな赤が注す、というのはそれはそれで非常に秀麗なものがあったが、どうやら恋慕の意かど

うかはわかっていないようだ。

しかし、……男の俺からいうのもなんだがあの顔である。

……初対面から堕ちるか？　普通。

朝ごはんも程々に、俺たち6人は学園校舎へ向かった。

今年の学年色は黒らしく、そんなにいい色でも悪い色でもなさそう。

俺は好みであるためそこまで気にはならなかったが。

「その学年色を基調とした服を着ておけば問題はないっていうことか？」

「そうなりますね」

エスペランサに洋服をコーディネートしてもらいながら、俺は早朝の出来事を思い返す。

今でも感覚として残っている。

彼女の感触は、本当に夢だったのだろうか？

「どうしたんですかシルバさん。顔色が優れませんよ？」

なんだかんだ、朝はソファで寝ていたってリンセルさんもいっていましたよとエスペランサ。

……まあ、夢だとすると俺は寝ぼけたままあそこにいたという訳になるが……。

その可能性もあるのか……？

まあ、気にしない方向で行こう。

気にしない方が……絶対にいい。

彼女とはもう会えないと思っていたのだ。

鮮明過ぎる夢であれ……出会えたということでいいんじゃないか。

「あら？　シルバさん、これ……」

「……薬莢（やっきょう）？　銃って……」

アイゼルの説明では、たしかにこの世界には銃は存在する。

使っている人が少ないというのは、銃は弾数が有限であることに対して魔法には弾数はないようなものであるから。

勿論、俺たちの体の中には魔力をためる場所があり、それが底をつくと危ないらしい。

しかし、俺は今まで会って来た人の中で銃らしきものを持った人を見かけることはなかった。

「……しかも、本などで読んだものと色も形も……全然違いますね」

長さは１５センチほど、太さはそれほどではないが先端から末端にかけて白から赤にグラデーションを彩っている。

……はは。……夢ではなかったということだ。

「エスペランサ。それ貰ってもいいか？」

「はい。どうぞです」

エスペランサにもらった薬莢を俺はそっと握りしめ、自分の胸ポケットの中に入れる。

この薬莢は、華琉のものだ。

# ０４７　朝目覚め（後書き）

ありがとうございました。

## ０４８　入学（前書き）

とても短い。
今日は大学の初授業で疲れたんです、勘弁してください。

# ０４８　入学

入学式については割愛をさせていただこう。
特に前世と変わらないふつうの入学式だ。

新入生の人数が、５０人強しかいなかったことが唯一の特異点だったようなきもするが。

「終わりましたね」
「終わったな」

入学式が終わったとともに、俺はこの学園生活も終わったような気がした。
まず、誰も龍眼族（レザール）に近づこうとしないのだ。
手の甲にある鱗をみては道をよけ、俺の目を見てはその変質した幾何学模様に驚く。

それは上級生も同じで。
入学前に学園長がいっていたとおり、龍眼族（レザール）は史上初のものであり、それだけ大きな存在だということなんだろう。

「まあ、シルバさんは同じ寮の方もいらっしゃいますし大丈夫ですよ」
「エスペランサだって結構評判よかったじゃないか」

エスペランサは、贔屓目にみなくてもかわいいことは十分わかっている。
そのため、……うーむ。

彼女は照れたように笑うと、新しくできたらしい友達に呼ばれてどこかにいってしまった。

……まあ、俺とずっと一緒にいるよりはそれの方がいいか。
俺は自分で納得すると、視線の向きを変えてロキアスの方をみる。

……孤立していた。
あっちは、顔がよすぎて逆に敬遠されているような気がする。
俺とは大違いで、一部の女子は目がハートになっていた。

なにそれうらやましい。
だからといって、その位置にいようなんて俺は思っていないが。
なんだか大変そうである。

「シルバぁー！」
「……は！？」

ロキアスに気づかれたらしい。
大声で名前を呼ばれ、俺が戸惑うのと。
なにあの人、と女子が一斉に俺を見つめるのがほぼ同時であった。

いや、そんな顔で見つめられても。

「どうしたんだ？」

それに対して、ロキアスは満面の笑みで俺を見つめていた。
……なんだか、面倒なことになりそうな予感だ。

……実に何か起きそうで怖い。

## ０４８　入学（後書き）

御読了感謝です

明日からちゃんと書きます…。

## ０４９　優しい氷（前書き）

文章リハビリ中
少しずつ長くしていきたい。

最後まで読んでいただければ光栄です

# ０４９　優しい氷

「どういうつもりだよ、ロキアス」
「いやー、どうがんばっても男友達ができないひと同士じゃないか」
かなり失礼に感じているのだが、いったいどうしたものだろう。
この人、殴っても問題ないような気がする。

しかし、俺の内に秘めた怒りなど関係ないと言いたげに、ロキアスは笑っていた。

「俺の友人ができない理由と、ロキアスの友人ができない理由は全く持って別だと思っているのだが」
「そうかな。君は種族が龍眼族（レザール）なだけであって、ほかに何か異常が見受けられないけれど」

俺は違うね、とロキアスは息を吸う。

「……俺は転生者であり、ほかの人とはちょいと違うらしい。能力値が異常に高かったり、なんやりと」
「へー」

俺は興味なさそうに呟くと、窓の外から校庭の方を見つめた。
校庭は庭、というより競技場である。
芝生の上にラインが引かれており、そこで男子生徒と女子生徒が戦っていた。

派手に炎や氷を召喚しては相手に向かって射出しているあたり、魔法……をつかっているんだろうが。

……俺は、それよりも女子生徒の方に目をとられていた。

「……どこみてるんだよ……。と先輩の披露戦闘か」

「……ああ」

リンセルさんやアンセルさんのような銀髪。

しかしその髪の毛は何かで無理矢理固定されたように、セミロングのツインテールになっている。

顔はなんて表現したらいいのだろうか、『柔らかい氷』……のような。

尖っていて冷たい、しかしどこか繊細さを匂わせるような雰囲気だった。

とにかく、美しい。

「って、戦闘よりも先輩の方をみているのか？」

「あの人の名前を知っているか？」

ロキアスは首を振った。

「おい、俺は新入生だぜ？」

「……お前なら俺と違って女の子にいくらでも聞けるだろ」

「え？」

こいつ、まさか自覚なしか？

ロキアスは、きょとんとした顔で俺を見つめている。

「でも、お前さっき自分は男友達ができないって」

「そりゃあ、こんな気味悪い醒眼族（ウェイカー）と一緒にいたら嫌だろ？」

ああ、確か種族ごとに紋章があるんだっけか。
ちなみに、龍眼族（レザール）は目にある。
幾何学的な模様がそれだ。

「醒眼族（ウェイカー）は二の上に鎖のようなものがあるんだが、俺は残念ながら鎖骨部分にも太陽のような物があってね……。知勉族（エリシュ）の物らしいんだが」

うわ、確かに確認できた。
どうやら、彼は混種族の人らしい。
新入生を見回しても、ロキアス以外に異常な気配を醸し出している人はいなかった。
……リンセルさんたちが異常だというのならそれもそうだが。俺は否定しない。

「シルバはその先輩が好みなのか？」
「いいや？」

好みというか、興味があるというか。
華琉（はる）とにているというか…。

「シルバって、何か悩みでもあるのか？」
「なぜそう思う？」
「勘……かな？」

俺にそんな能力使うなよ…。

# ０４９　優しい氷（後書き）

ありがとうございました！

# ０５０　似て異なる者（前書き）

最後まで読んでいただければ光栄です！

# ０５０　似て異なる者

主に精神的な意味で疲れて、俺は寮のリビングに設置されているソファに倒れこんだ。
ほとんどの人は俺を龍眼族（レザール）という特異な点を挙げてはさけ、ラン・ロキアスは絡みが唐突過ぎる。

……なんていうか、前世の時でもこんなに疲れる学園生活ではなかったような気がする。
結局、どうすればいいんだろう……。

と、キッチンの方から何かを焼くような匂いが漂ってきた。
それはいったい何なのか、わからないが香ばしいあたり、料理であることはうかがえる。

「……帰ってたんだ」
「……ああ」

俺は頷くと、目の前の少女は興味のなさそうな顔で何かを呟き。から揚げのようなものをのせた皿を、俺に差し出した。

「……食べる？」
「いいのか？」
「良くなかったら、わざわざ差し出さないと思うけど？」

言い方は腹が立つが、ごもっともである。
俺は素直にから揚げらしきそれを親指と人差し指で摘まむと、口の中に放り込んだ。

……から揚げだ。
肉は鶏肉だろうか、それほど塩辛くもなくちょうどいい塩味。

「おいしかった？」
「……ああ」

よかった、とアンセルさんは少しだけ微笑んだ。
しかし5秒もたたないうちに彼女の顔は元の無表情な、そして無機質な美しさにかわっていた。

それはそれで人形のような美しさがあるのだが。
結局、美少女というものは何をしていようが美少女である。

「……どうかした？」
「いいや、何でもないけど」

俺を見つめるその視線には何も感情は込められていない。
ただ、「見つめている」という描写が最適だと思わせるかのように、俺の方を向いていた。

「貴方には、ラン・ロキアス君と似て異なる気配がする」
「は？」
「本質的には違う、でも何かが一緒。貴方も自分で感じ取っているはず」

確かに、転生者っていう部分では同じなのだろうが。
……しかしアンセルさんも勘が鋭いな。いったいどうなってるんだよ。

「まあ、だからという話にはなるのだけれど」

「そうだな。……アンセルさんには一言だけ言っておこう」
「ん？」
流石に彼女も気になったのか、少しだけ俺の方に興味を示したのか。
俺の方を向き、困惑したような顔を見せた。
「ラン・ロキアスはラン・ロキアス。俺、シルバ・エクアトゥールはシルバ・エクアトゥールだ。それ以上の何物でもないし、それ以下でもない」
「どういうこと？」
「誰かと比較することはよくないということだ」
俺は言いたいことを言うだけ言うと、「御馳走様」と彼女に一言告げて自分の部屋に戻る。
アンセルさんは、しばらくそのままの状態で動かなかったと、俺は後にエスペランサを介して知った。

――――――――――――――――――――

「結局、俺は寝ることなく朝を迎えてしまったのだが」

朝、学園生活2日目。
俺は、ベッドの上で寝ているエスペランサを睨みつけながら一人でブツブツと呟いていた。
理由は簡単、昨日寝ようと思ったらエスペランサが涙目で入ってきて。
何かあったのかと訊いてみれば、「寂しくて眠れない」と言い出して。
結局、添い寝してやったら俺が寝心地悪くて眠れなかったという話だ。
別に、俺じゃなくてもいいような気がするんだが。
ロキアスは除外としても、ここにはリンセルさんもアンセルさんもいるし、リンさんもいるだろう。
なぜ俺。まあ、一番長いこと一緒にいたというのが一番の理由なんだろうが、それでも世間体的にもうやめろといったはずなんだが。
「……うにゅ……？」
と、エスペランサはあざとい声を漏らしつつ、うっすらと目を開けた。
まだ寝ぼけているのか、目はゆっくりと右往左往している。
女の子特有のにおいがするが、そこは今回度外視である。
そもそも、眠気が酷くてそれどころではない。
「シルバさん、寝不足ですか？」
「誰のせいで眠れなかったと思っている」
「……私ですか？」

俺が頷くと、エスペランサは笑った。
罪の意識がないか、そうかそうか。

「今日は授業選択の説明会ですよ、元気に来ましょうよ！」
「……分かった分かった。……そのかわり、今日は絶対にもぐりこんでくるなよ。さみしかったらリンセルさんかアンセルさん、リンさんに頼むんだ。ロキアスでもいい」
「ロキアスさん……は、遠慮しておきます」

でしょうねー。
ロキアス、優しい顔してどう見ても肉食系だからな。
正直、毎日違う女と寝ていてもおかしくないほどである。

男の俺から見てもとんでもないほど顔は良いし。
醒眼族（ウェイカー）？　だっけか、運動能力……とりわけ瞬発力に秀でている種族で、しかも知勉族（エリシュ）の種族も身体の中に宿っているらしく、魔法もそこそこ使える。
この時点で規格外である。
……すでに超人なのだが。どうすればいいんだろうか。

これで転生者だ。女には人気があり、男には畏れられる。
そんな人物像が最初から出来上がっているようなものではないか。

「あいつには本当に勝てそうにないよ、俺は」
「そんなことはありませんよ、シルバさんにはわた……きっと特別な力がありますから！」

わた？　……何のことを言っているのかはわからないが、妙に引っかかる。
しかし俺がそれを感じ取る前に、エスペランサは俺の背中を押し

た。

「早く行きましょう。朝食が私たちを待っていますから！」

「……ああ、そうだな……」

それにしても「わた」……とは、いったい何だったんだろうか。

引っかかるな、まるで……。

いや、そんなことはさすがにありえないか。

夢を見過ぎ、というのが関の山だろう、さすがに……。

ないよな、エスペランサ？

## ０５０　似て異なる者（後書き）

御読了感謝です。

とりあえず、盛大に伏線っぽいものを配置してこの章は終了になります。

次章……に行く前に、閑話を書こうかな、と思っていたり。

絵をいくつか貰っているので、それをのせましょうかね（；'∀'）

## ０５１　３章のまとめ（前書き）

先日のものから加筆いたしました。
すぐに画廊の方も更新します。

## 051　3章のまとめ

アイゼル・ベラキオス　【Ｉｚｚｅｌ＝Ｖｅｒｕｑｕｉｏｔｈｅ】
種族は醒眼族（ウェイカー）、男。
カエシウス聖王国最南の町『レジリナ』にある、鍛冶屋の受付をしていた。
シルバに出来た初めての友人ともいえる。

容姿は青い瞳、長い白髪。
醒眼族（ウェイカー）故に、武器術は中々のものだが魔法は不得手。

ベルナルドゥス・ベラギオス　【Ｂｅｒｏｕｎａｒｅｕｄｈｔｈｅ＝Ｖｅｒｕｑｕｉｏｔｈｅ】
種族は不明。男。
アイゼルの祖父で、鍛冶屋の店長をしている。

ルギアル・ルート・ルーベル　【Ｌｏｕｇｅａｒｌｅ＝Ｌｕｔｅ＝Ｌｏｕｂｅｌｌ】
種族は獣腕族（ケレイジ）、男。
クレアシモニー魔法学園の学園長。

ラン・ロキアス　【Ｒａｎ＝Ｌｏｃｙａｓ】
種族は現時点で醒眼族（ウェイカー）と知勉族（エリシュ）、男。
混種族であり、同時にシルバと同じ転生者。

髪は黒。男であるシルバがみても驚くような、整った容姿をしている。

醒眼族（ウェイカー）であるにも関わらず、知勉族（エリシュ）の種族も身体に混じっているため、魔法も使える。

リンナアイデル・パン・リーフ　【Ｒｙｎｎａｅｙｄａｌｕ｜Ｐａｎｅ｜Ｌｉｅｐｈ】
種族は知勉族（エリシュ）、女。
ランと基本的にいっしょにいることが多い。

緑色の髪の毛をしている。

リンセルスフィア・フレイヤ・レイカー　【Ｒｉｎｓｅｒｔｈｕｐｈｙａｒ｜Ｆｒｅａｊａ｜Ｒａｋｅｒ】
種族は魔能族（サイコル）、女。
アンセルの双子の妹。

踝まで伸びる銀色の髪の毛と、燃えるような赤い眼を持つ。
身長は小さく、シルバの胸にも届かない。

アンセリツティア・フレイヤ・レイカー　【Ｕｎｓｅｌｙｚｔｅｉｅｒ｜Ｆｒｅａｊａ｜Ｒａｋｅｒ】
種族は魔能族（サイコル）、女。
リンセルの双子の姉。

太ももまで伸びた銀髪と、深海に澄み渡る水のような青い眼。
双子の片割れとは対照的に、背は高い。

## 051　3章のまとめ（後書き）

ありがとうございました。

## ０５２　画廊（いただいたイラスト）（前書き）

自分のイメージでキャラを描きたい方は、見ないことをお勧めします。

## ０５２　画廊（いただいたイラスト）

このページでは、読者の方からいただいたイラストなどを飾っていきたいと思います。
イラストをいただいた方、読んでいただけた方に感謝を。
そして、これからも「龍眼族（レザール）の異世界魔剣鍛冶（ユニソードバース）を、よろしくお願いいたします！

＜ｉ１０１６０４－８７１０＞

おいちゃんさんから頂いた、デフォルメ調のシルバ。

＜ｉ９９７３６－８７１０＞

高戸優さんからいただいたシルバ。

＜ｉ９８９０３－８７１０＞

高戸優さんからいただいたラン。

＜ｉ１０１１１２－８７１０＞

霧明さんからいただいたリンセル。

イラスト、ただいま絶賛募集中です。
よろしくお願いいたします。

## ０５２　画廊（いただいたイラスト）（後書き）

明日から隔日更新になります。とりあえず、１０万文字になる迄書かなければ！

## ０５３　工房棟（前書き）

新章の始まりです！
よろしくお願いいたします！

# ０５３　工房棟

この学園、授業はすべて自由選択によって自分の好きなように組み替えられる。

前世でいう大学のような方式だ、だから1週間の間は体験授業のために2・3年生に混じって受けようと思った授業に仮参加する事が出来る。

「シルバさんは、鍛冶系列の希望ですよね？」

「そうだな、……さすがに模擬戦闘とかっていう実技には顔を出すつもりだけど、基本的には座学になると思うぞ？」

俺はエスペランサに対してそう答えると、彼女は少しだけ不安そうな顔をした。

なんだかんだいって、1年の間にいきなり「剣を創るぞー」なんていう授業はしないだろうし、一年の間は座学がほとんどを占めるだろうと思われる。

……そもそも、俺が必要なのは「魔剣鍛冶を行うにあたって必要な材料」である。

鍛冶の一通りの仕方というのは、鍛冶神ヘーハイスによって脳にインプットされている。

しかし、鍛冶というのは職人のすることであり、さすがにマニュアル通りにやったら必ず成功するということもないだろう。俺みたいな論理だけをつっこまれた若造が職人の手を越えてしまったら、職人は必要なくなってしまうような気がする。

「エスペランサはどうするんだ？」

「私はですね、私は魔力の込められたアクセサリーを、戦闘の合間

につくりたいなって思ってます」

エスペランサの考えているのは、軽度の魔具だろう。

たとえば魔力の込められた手袋。それを装備することでたとえば自分の魔力を使うことなく、その手袋に炎をまとわせたり出来るということだ。

醒眼族（ウェイカー）や龍眼族（レザール）、獣腕族（ケレイジ）にはほぼ必要のない物だ。

しかし、女性や知勉族（エリシュ）などという弱い人にはそれが命図なになることだってあり得る。

「シルバさんにも、何か創ってあげたいです」

「おう、そのときは頼むよ」

俺が返事を返すと、エスペランサはぽっと頬を桜色に染めた。

しかし、そうなると俺とエスペランサは授業がほとんど被らないのか。

寮であえるからかまわないきもするが、少し寂しいような気がする。

「シルバさんは、早く自分の世話をしてくれる人を探してくださいね」

「え」

にゃ、と彼女は笑うともう少しだけ頬の色を朱に染めた。

その顔は、気になる人が出来た顔だな。

まあ、この学園は生徒の学力、戦闘力のレベルもかなり高いどころか、容姿のレベルもなかなか高い。

なんだかんだ、神は2つも3つも人に与えるものである。

……俺も【引斥制御（グラビシオンコントロール）】、【魔武具創造（マギア・クリエイト）】、龍眼族（レザール）という3つを与えられているものなんだがな。

俺に至っては、本当に神に与えられたものであるし。

「好きな人でも出来たのか？」

「……まだ数日しか経っていないので、好きかどうかはわかりませんけど、いっしょにいたいと思った人ならいます」

「はやいな」

……まあ、エスペランサのシルバ離れといった感じか。

「これからも、よろしくお願いしますね」

「ああ、よろしく」

さすがに……ねぇ。

俺も気になる人が出来たことだし、それもちょうどいいかもしれないが……。

俺は学園校舎内を散策することにした。

『クレアシモニー学園』の校舎はいくつもあり、そして部屋の数も多い。

そのため、その中でも使う予定のありそうな校舎を捜し当てるの

も一つの仕事だろう。
正直、どうなるのかなんて予想すらつかないのだが、まあ気にしてはいけない。

少し歩くと、赤煉瓦の校舎が見えた。
厳かな雰囲気で、雰囲気の重みを感じる。
そこから漂うのは炭の臭いだ。

「第3号館、工房棟……ねえ」
「新入生か？」

突然。
気配を悟られずにかなりの近距離で話しかけられたため、俺は反射的に後ろを向きながら拳を振りかぶり……。

その涼風の吹き付けるような声と、太陽の光を浴びてギラギラと反射する髪の毛。
……数日前、入学式でみた先輩である。

「驚かせてしまったのなら申し訳ない」
「いや……大丈夫です」

俺は頭を振って、彼女の姿を改めて見つめる。
至近距離でも、細かいところもすべて精練されたような美しさだ。
決してこびていないというのに、何だろう。

「どうした？　何か私についているのか？」
「いえ。見ほれていただけですよ」
「……そうか」

ぽっ、と先輩は顔を赤くする。
が、すぐに顔をクールな物に戻して俺に向き直る。

……意外とチョロいな、この先輩。
高嶺の花こそ、堕落するときはしやすいのかもしれない。

「案内しようか？　……君の名前は？」

そういって、先輩は俺の目を下から見上げるようにわざわざ腰を低くした。
……あざとい。

「シルバ・エクアトゥールです」
「ああ、噂の龍眼族（レザール）か。……私の名前はヴァーユウリンス・ヴァン・フロガフェザリアスだ。少々長いからヴァーユでいい」

いきなり略称で人に呼ばせるか。
これはチョロすぎるのかもしれない。

お堅いどこかのお嬢様かと思っていたんだが、ただ名前が長いだけか？

「さぁ、いこうか？」
「あ、よろしくお願いします」

校舎、大きいな。
1階が主に工房の実習室。そのとなりが座学室。
2階が魔剣鍛冶専門の工房。そしてその隣はやはり座学室。

大丈夫なんだろうか、工房の隣がすぐ座学室。
うるさくないんだろうか、ヴァーユ先輩の話によると朝から昼にかけてはずっと稼働していると聞いたのだが。
完全防音？

さすがというべきか何か、完全防音なのかここは？
さらに座学室をみると、工房の方に巨大なガラスの壁があるではないか。
丸見えなのか……。

失敗したらただの公開処刑みたいになりそうだな。どうなんだろうか。

「先輩は、ここの授業を何かとっているんですか？」
「いや？　私はただここで剣を買っているだけだ」

買う？
普通ではあり得ない言葉に俺が首を傾げると、先輩はそれも説明してくれる。

「ここで創った武器や防具は、成績用に提出するのとは別に、取り引きできるんだよ」
「でもそれって……」

たとえば、魔剣が出来た場合は……俺は価値をそれほどしらない

が、たとえば数千万を越えるものだってあるんだろう？
どうやって値段を付けるのかとか、俺は全く持って理解が出来ないのだが。
もっとたとえばだ、自分が嫌いな人がきたときに超高額で売りつけたり、仲がいい人にはタダで渡したりすることも可能なわけだ。

「そこはコネクションだな。すべては人間関係だろう。いい鍛冶担当を手に入れることとはもちろんだろうし」
「……もしかして……」

俺は感づいたように先輩を見つめると、ヴァーユ先輩は首を振った。

「そういう関係を求めて私は、君に声をかけたんじゃないからな」
「んなこと言われましてもね」
「信用するかしないかはシルバが決めることだろう。……私は、少なくともそんな人じゃない」

カマをかけてみたら相手が涙目になった。
……こまったな、思ったよりも純粋そうだ。

これが別にあれだったら別なんだが。
どうなんだろう、もしかしてわざととかないだろうな。
……エスペランサのことは簡単に信用できたのに、なぜヴァーユ先輩にはそんなになんだろうか。
……もしかして俺、エスペランサのこと好きだったりとかないだろうなぁ。
自分のことを理解出来ずに、他の人のことに関わろうとするなんて愚の骨頂だとおもうが。

「いや、少し気になっただけです、ごめんなさい」
「こちらこそ、変に気を使わせてすまない……」
ありゃりゃ、結構本気で落ち込んでいるようだ。

……俺はとりあえず、彼女の機嫌を直そうとヴァーユ先輩の頭の方に手を伸ばした。
先輩の身長は、女として考えると比較的に考えて背の高い方だろう。
俺とさほど変わらない。

「……ん」
「大丈夫ですから。信じてますよ」
「……んん、ありがとう」

どうやら機嫌を直してくれたようだ。
めでたしめでたし、俺はこのタイミングを逃がさない。

俺は振り返りながら、走り出した。

「では。俺はここで帰るんで」
「あ……」

そんなキャラじゃないだろ、本当に。
何でそんなキャラになってるんだよ。

工房棟に入る前のキャラと違うぞ、キャラがぶれているぞ。

……かく言う俺も、こんなことを叫んでいる時点でキャラはブレブレなんだがな。

# ０５３　工房棟（後書き）

ありがとうございました！

## ０５４　ソファ（前書き）

短い。
次回長くします

# 054　ソファ

「へえ、結局あの先輩の名前も連絡先も手に入れたってことか」
「そういうことになるな」

ランに寮で捕まった。
そして強制的にソファに座らされ、興味津々といった顔で見つめられる。

そして根ほり葉ほり訊かれた。全く迷惑だ何とかしてくれ。

「へえ、俺もあの先輩について情報を仕入れていたんだけど、フロガフェザリアス先輩ってかなり高嶺の花らしいな」
「お前は何してるんだよ……」

情報収集かな？　とラン。
ロキアス、と呼んだらさっきしつこく「ラン」と呼べと言われたため……仕方なく名前で呼んでいる。
しかし、こいつなかなかフレンドリーだな。

「そういえば俺も風の便りに聞いたんだが、もうリンセルさんに手を出したって訊いたぞ」
「……うぇ、そこまで流れてるのかー。実はそうなんだー」

認めやがった。
ちなみに、この話はエスペランサから手に入れた情報である。
エスペランサの気になる人は、ランなのかと思えば違うらしい。
別にいるのか。それは少し気になるな。

……別におれとエスペランサにそんな、特別な感情なんてないんだろうが。

数週間の間、いっしょにいたせいか俺が変な認識を持ってしまっているということもあり得る。

……自分の気持ちに区切りをつけなければ、後々面倒なことになるかもしれないな

「あれ、シルバ君？」

「リンセルさんか……」

さんか、って何？　と彼女は軽くしょげながら俺に近づいた。

その顔は微妙に上気しており、すこしだけうれしそうに頬を赤く染めている。

「なにか良いことでもあったのか？」

「えへへ……。ラン君とデートしてきたの」

……だと思った畜生。

リンセルはランの方にいくのか、まあ俺はこんなに背丈の低い女は……。

リンセルさんの美しさでそこのところは補っているようだけど。

「そういえば、今日リンさんが泣いていたけれどどうかしたのか？」

「あ……ちょっとね」

気になるんだが、いったいどういうことだ。
そもそも、俺はそういう性格ではなかったはずだ。
あくまでも自分のことにしか関心を示さない人だったはずなのだが。
いつのまに、こんなことになっているんだ。数週間で俺の性格も確実な変化を遂げているということか。

「どうかしたのか？」
「……今、彼女はデリケートな時期だからもうすこしまって」
「おう」

俺がうなずくと、リンセルさんはふふっとほほえんで俺の隣に座った。

「……ラン君ね、昔の想い人に凄く似てるんだよ。顔も性格も、そのオーラまで……すべて」

その顔はどこかはかなげで、今にでも溶けてなくなってしまいそうな雰囲気。
それをなぜ俺に話をする？　まあ、俺とラン以外にこの寮は男子がいない、か。

「それをどうしろと？」
「貴方の目から見て、ラン君ってどうなの？」
「今のところはどうともいえないな」

俺は隠すこともなく、ストレートにそういった。
そもそも、まだつき合いが短いしほとんどいっしょにいる時間が極端に少ない。
そのため、判断材料が少なすぎるのだ。

「そっか……もう少しいっしょにいていい？」
「ああ、かまわないが」
リンセルさんはほっと息を吐いて話を始めた。

# ０５４　ソファ（後書き）

すみませんすみません。

# ０５５　戦闘狂（前書き）

シルバは戦闘狂ではございません。

# 055　戦闘狂

「へえ、そのリュー・ウルガっていう人とラン・ロキアスは似てるのか」
「めちゃくちゃ似てるの。顔もそうだし、性格も、種族さえいっしょだから……」
そう俺に打ち明けたリンセルさんの顔は、実に明るい笑顔をしていた。
しかし、それもすぐに萎んでしまって泣きそうな顔になる。
燃える炎のような、そんな目が涙で揺れている。
じわじわと目尻に涙がたまっていくのをみて、俺は……。
彼女の涙を、親指で拭った。

「……シルバ君は、優しいね」
「そのセリフは俺に対していう言葉じゃないだろ？」
「ううん、ちゃんとシルバ君にもいうよ？　……ラン君はまだ私の彼氏じゃないし……、お姉ちゃんにまたとられるかもしれないし……」
取られる？
俺は鸚鵡返しのように彼女に質問をした。
リンセルさんは、こくっと頷いた。
顔はどこか寂しげ。俺ではなく、その先を見つめているように少し虚ろ。
「正しくは、私が譲ったんだけどね……」

「今、そのリュー・ウルガとやらはどこに？」

彼女は、何もいわず俺の首に手を回した。
女の子の手の、柔らかさ。彼女の体の細さ。
石鹸だろうか、髪からのこれまた柔らかい匂い。
そして、驚くほど起伏のない体つき。
何歳児だ。本当に17歳か、この子は。

俺は条件反射的に彼女を押しのけ、「すまない」と謝った。
正直、俺に抱きついてリンセルさんにメリットは何もない。
ここはリビングだ。ランに見つかったらリンセルはランに嫌われるだろうし、俺は……。

……俺は、今日あって名前を知ったばかりの先輩に、どういう感情を抱いているんだろう？

「ご、ごめんね……」

リンセルさんが、自分のやったことに気づいたのか申し訳なさそうな顔で謝る。
俺はいい、と彼女に断ってリンセルさんの頭に手を乗せた。

きょとん、とした顔で俺を見つめるリンセルさん。
俺は彼女に笑いかけると2、3回なでて耳元でささやく。

「何かあったら、協力はしてやるから。……そういうことはランにすべきだろうが」
「ご、ごめんなさい」

話は終わった。

俺はそう判断し、立ち上がる。

さて、今日は早く寝て。

……明日から体験授業か、面倒なことだな。

小鳥のさえずりで目が覚めた。

目を開けると、昨日カーテンを閉め忘れていたらしい、日光が降り注いでいる。

「……んく……」

俺は起きあがると、私服に着替えてリビングに向かう。

まだだれも起きていないようで、廊下から各部屋の動きはみられない。

「……ッ？」

と思ったら違った。ランがリビングでなにやら動いているな。

リビングに入ってみると、ランはハッとしたように俺の方を向く。

「何やってたんだ？」

「……何も」

怪しいな。
まあ、どうでもいいか。

俺はソファに座ると、立ったままのランを見つめた。

「な、なんだよ」
「座らないのか？」
「……あ、ああ」

何を隠しているのかわからないが、とりあえず落ち着け。
それにしても、とんでもない筋肉してるんだな。
それで、なんでそんなに細い身体なんだ。

「龍眼族（レザール）って、何か俺たちと違うのか？」
「知らん」
「はっ？」

そりゃあ俺も転生者だもの、知るわけがなかろうよ。
俺は隠すのも面倒になったため、彼に同類だということを伝える。

「え、死因は？　俺は事故死」

鉄骨に貫かれて即死、とランは呟いた。
自分からいいたくなかったら、そもそもそんな話にしなければいいというのに。
しかし、鉄骨に貫かれてか。でも痛みもなくて良かったような気がするぞ。

俺は腹を切り裂かれて、というのを伝えた。
簡単にいえば戦死である。

「地球出身だろう？　シルバも」
「お前の考えている地球とは違うと思うぞ……」

アルカディア王国って聞いて、ランは理解できなかったらしいから俺と彼は同じ用で違う地球からの出身だと判明。
ちなみに、彼の行っている国は俺がすべて理解できた。
シーランド公国も理解できた。

「戦争のある世界なのかよ……」
「まあ、そうなるわな」
「じゃあ、俺は平和ぼけしてきたってことか……」

そこまで気を落とす必要はないような。
しかし、俺とランでどちらも地球なんだな。
……まあ、そんなことは関係ないか。

「なんだかんだで、ランってこの世界に1年近くいるんだろう？」
「そうだけど？」
「なら、この世界をどうみる？」

俺の問いに、ランは数分迷ったのか何もいわなかった。
ぐぬぬ、と悩んだ後彼は口を開く。

「そうだな、この数十年はまだ平和だって聞いた。……詳しいことはわからないな。この一年間、ほとんどが戦闘に明け暮れていたかっら」

このことばで、俺は。
この男が、戦闘中だということを知った。

「戦闘狂かよ……」
「そうだな、そうかもしれない。なんせ、この身体は前世の俺よりも良く動く」

そういったランの顔は、キラキラと輝いていた。
本気で戦闘が好きなのだ、この男は。

「そういえば、シルバはどうするんだ？」
「俺は両刀を目標に、鍛冶も戦闘もやるつもりでいるが」

そうか、とラン。
その顔は、じつに野性的である。

「なら、問題はないな」
「なんの問題だよ…」

俺はこの後の答えを予測できる。
きっとこう言うはずだ。「ならやり合えるな！」と。

「なら、やり合えるな！」

……ほらね？

# 055　戦闘狂（後書き）

ありがとうございました。

# ０５６　親衛隊（前書き）

シルバ無双、始まります。

# 056　親衛隊

「フロガフェザリアス先輩」

体験授業もそろそろ終了と言ったところで、俺はヴァーユ先輩を見つけた。

ここは『武器鍛冶基礎』という座学の授業。もちろん工房棟で行われており、この前先輩に案内された教室の一つである。

さすが履修系の学園、やはり上級生下級生関係なく受ける授業がかなり多い。

ちなみに、友人は未だ0。ランを友人と呼ぶとしても1人。

逆にヴァーユ先輩には囲いのような男子生徒が十数人と、これまた麗しい女子生徒の友人が2人ほど。

いろいろな意味で惨敗している気がするが、履修登録の登録方法をしらないのだ。仕方がない。話しかけられる先輩なんてヴァーユ先輩くらいだろうし、話しかけないと今年の単位は0になってしまう。

「ああ゛ん？」

話しようとして少し近づいたら、囲いの中でも頑丈そうな、ガチムチの狼人ににらまれた。

獣腕族（ケレイジ）だろう、頭の上にはとがった狼の耳に、筋肉質な身体。

肌は黒く、牙とのコントラストが激しい。

「お前誰だ？」

名乗りを上げるとき、前後どちらかに種族名を言った方がいいら

しい。
これはリンセルさんから聞いたが、礼儀なんだとか何とか。
正直、こんなに種族入り交じって通っている学園だ、種族争いなんて起こりそうにないが。

「名乗れよ？　オォ？」

露骨な挑発。しかし、この学園の本質を俺は知っている。
超実力主義。上級生だろうが下級生だろうが、強い人が上の地位を勝ち取ることが出来る。
『力』を持つ人こそ。

と、ここで先輩も俺に気づいた。
話しかけようか、無視しようか悩んでいるのだろう。
……悩む必要などないのに。

「……シルバ・エクアトゥール。……種族は、龍眼族（レザール）だ」

「ーーッ！？」

ほうら、驚いただろう？
俺には他の人にはない「種族」のアドバンテージという物がある。
それだけで普通の人は浮き足立つ。

「龍眼族（レザール）……っ！？」
「ていうことは！　こいつが噂の……！」

周りの囲いがざわめき出す。
しかし、狼の先輩はあわてなかった。

「そうか、ならちょっとこっちに来てもらおうか？　なぁ？」
「……はっ」
馬鹿馬鹿しくて笑ってしまう。
俺は心配そうな顔でこちらを見つめているヴァーユ先輩と、引き気味の友人を見やって。
先輩方に押されるようにして、体育館裏まで連れて行かれた。

なんともまあ、古典的な呼び出し方法である。
相手は２５人。そんなに居たかと思えば、途中で肥大していくのを捕らえることが出来た。
目測では、そこまで強くなさそうだな。もっとも、【腕輪（アルミリア）】を使っている俺には関係のない話だが。
まあ、使わなくても勝てるだろう。

「オマエ、お嬢に何のようだったんだよ？」
「それを答える義務はありますか？」

相手の目が険しくなった。
そりゃあそうだ、挑発したんだからな。
そもそも、ヴァーユ先輩のことをお嬢って呼ぶのか。
……こりゃあ、先輩は中々良いところの出なのかもしれないな。
俺は拳を握り込み、それを一つの武器に仕上げる。

「オォ？　やるつもりか？」
「自分からは手を出さないがなー」

先輩方は、お互いに目を見合わせている。
俺をやるかやらないか、それの確認をしているらしいが。
……確か、テレパシー的な魔法もあったんだっけ？　よくわからない。

「まあ、良いだろうお前ら。……落ち着いていたぶれ」
「はいっ、バラヌさん……」

狼男の名前はバラヌ、か。
なるほど、厳かな雰囲気のあるいい名前だな。
……あー、表示されてた。

俺は【腕輪（アルミリア）】を確認しながら、襲いかかってくる二人を見据える。
なるほどー。名前も覚える必要はなさそうだな。

「うぐっ！？」

遅い。
俺は一人目のボディーに膝でけりを浴びせ腰を折り、追った反動で降りてきた頭に殴りかかる。
骨が折れる変な音がして、一人目が地面に崩れ落ちる。

とつぜんのことに唖然とする二人目の顎に跳び蹴りをかまし、一撃ＫＯ。
……膂力（りょりょく）最強というのはあながち嘘でも何でもないらしい。
なるほど、筋肉の力が強い……さらに【引斥制御（グラビシオンコントロール）】も兼ね備えていると、こう言うことは難なく出来るというわけか！

「ぐっ……」
「あいつ……化け物だ……」

１０分後。体育館裏は、阿鼻叫喚の図と化していた。
正直、俺は技術も何も筋肉の力に任せて殴り続けただけなのだが、それではいろいろと弊害が起こる。
やはり、【引斥制御（グラビシオンコントロール）】とのかねあいは必要だ。

「バラヌ……先輩でしたっけ」
「あん？」
「残りは貴方一人ですけど、やりますか？」

その言葉にハッとしたのか、バラヌ先輩は見回す。
そこにあるのは、俺に手を出そうとして返り討ちにあった先輩方が全部で２４人。
ほとんどは口から血を吐いて倒れている。

バラヌは、それらを見やって俺を、剣呑な視線で見つめた。
何を考えているか、少しだけわかったような気がする。
この先輩の考えていることは、仲間のことではなく自分のことだ。
おそらく、これだけの相手と戦って、俺に彼と戦う体力が余っているのか今はかろうとしているのだろう。

さすがに２４人と戦うのは疲れた。まさか魔法を使わないとは思わなかったが、なぜなんだろう。

……ああ、魔法には口で詠唱しなければならない分……そちらに意識がそがれてしまうんだろう。

その間に俺に攻撃されたら元も子もないと考えたのか。

「……こいつらと俺は違う」

「そうですか？　で、結局どうするんですか？」

「俺は良識のある腕獣族（ケレイジ）だ。無駄な争いは好まない」

どこの口が言うのか、そんな言葉を。

さきほど、俺を襲わせたのは先輩自身だろう。

先輩の姿が見えなくなったのを確認してから、俺は自分の顔を確認する。

……口の中が少し切れて、血が流れているが気にするような傷ではない。

……と、その前にどうやってエスペランサにいいわけをしよう……？

## ０５６　親衛隊（後書き）

明日から毎日更新にしないと間に合わないレベル（／ω＼）

頑張ります

## ０５７　魔武具（前書き）

ついに来た。と。

よろしくお願いします。

# 057　魔武具

「ヴァーちゃん？　あの龍眼族（レザール）の後輩は知り合いか何かなの？」

この学園に龍眼族（レザール）、そういえば今年が初めてなんだっけ、とアイラが私に話しかける。

私とシルバ・エクアトゥールは、私とどんな関係なんだろう？

「……数日前工房棟を案内しただけだ。……それ以外は何の接点もない」

「でも、明らかにヴァーちゃんをよんでたよね？」

ふるふるっ、とアイラは女の子にしては短く、荒削りな赤い髪の毛を揺らしながらこちらを向いた。

その紅玉（ルビー）のような目には「助けにいかなくていいのか」という表情が含まれている。

……私は、親衛隊など望んだ覚えはないのだが。

いつの間にか私を崇拝する人が出来て。

バラヌが、すべて勝手に……ッ！

といけないいけない。自分の感情を制御しなければ……。

「……顔が、凄いことになってるけど大丈夫？」

「ああ……、一応様子だけ見に行くことにしよう……」

そうだね、それが最善っ！

アイラはそういうと、私を引っ張って彼等の後ろをついて行った。

アイラの追尾能力というのは、すごい。

簡単にいえば、『自分と自分にふれている人の気配を完全に消す』というもの。

それは彼女の技術ではなく、彼女の特殊能力なんだとか。

ちなみに、この世界で特殊能力を使える人を。

人々は、【卓越者(ゼニス)】と呼ぶ。

「こっちこっち！」

どうやら、体育館の裏まで連れて行ったらしい。

クレアシモニー学園の体育館の裏は、少しばかり大きなスペースがある。

普通は何かを行う、ということはないが大体ならず者がそこで不正行為を行ったりする場所だ。

「……ッ！」

「がっ……！」

さすがにここまで近づくと、多くの男の怒号と身体に何かがぶつかる音が聞こえた。

奥がどうなっているかは分からないが、アイラはここで止まってと私に指示した。

「ここから先は、ヴァーちゃんを連れて気配を消すのは無理」
「……分かった。……しかし、すでに喧噪は収まっているぞ？」

アイラがしまった、とでも口に出しそうな顔をした。
あわてて私を引っ張り、さらに遠ざける。
私はエクアトゥールがどうなっているのか知りたいだけなのだが。

「このままバラヌのプライドを傷つけたら、ヴァーちゃんが襲われるかもしれないじゃない」
「そんなことはしないと……思いたいが」
「男はみんな獣なんだから！」

それ、腕獣族（ケレイジ）と掛けて言っているのだろうか。
確かに、バラヌは狼族の腕獣族（ケレイジ）なんだけれども。
少なくとも、野蛮なことはしないと……思いたい

……それにしても、エクアトゥールは大丈夫なのだろうか。

「……バラヌが出てきたみたいだね」

アイラの言葉を聞いて、体育館裏の方をのぞくと。
確かに、驕り高ぶった顔をゆがませた、狼族の腕獣族（ケレイジ）が逃げるように歩き去って行っていた。
彼自身に怪我は見受けられないが、そのプライドの塊のような顔は屈辱に歪んでいる。

「ありゃま、これは新入生が勝っちゃったのかな？」
「……とりあえず、もう彼の姿も見えなくなったことだろうし。現場に向かってもいいか？」
「いいんじゃない？　……でも、万が一のことを考えて武器は取り

だしたほうがいいかもね」

万が一のことって、例えば何なのだろう？

龍眼族（レザール）が暴走したり、とかか？

私は気になってアイラに訊いてみる。しかし帰ってきたのはため息。

「無かったらいいんだけど……、本当は、貴方に果たし状を渡しにきた……とか？」

……さすがに、無いなとは思った。

「……何これ……」

アイラが、目の前の惨状に絶句していた。

それもそうだろう。

２４人の倒れた血だらけの男と、一人の口を押さえた龍眼族（レザール）。

何が起こったのか、明確には分からない。

分かるのは、目の前にいるシルバ・エクアトゥールが勝ったとい

うことだ。

「……ヴァーユ先輩、来ちゃったんですか」

「……エクアトゥール……その手に持っているのは……？」

彼は、奇妙な物を手にしていた。

大きさはナイフ程度の物、しかしその刃は虹色に輝いており、どこか輝かしさを、そしてどこか恐ろしさをまとっている。

しかし、彼の意志なのか何なのか、それはカタンカタンと折れたりまっすぐになったりしていた。

「これ？　……魔剣鎌（まけんそう）【刹那（ピリオド・エターナル）≠無限】っていうものです。急造で創ってみましたが、うまく行ったようで何より」

魔剣を……専用作業台無しで作り出す……だと？

しかし、私があり得ないと叫ぶ前に、アイラが叫んだ。

「そんな……ッ！　あり得る訳ないでしょう！　ここには魔剣を創るための作業台も、材料も魔力もないのに！」

そう、ここには作業台がない。

魔剣の材料である金属も、魔剣を創るために必要な備蓄した魔力もない。

さらに言えば、目の前のシルバ・エクアトゥールには技術がない。

理論が分かっていたら簡単に作れるというわけではないのだ、魔剣鍛冶を始めた職人が一生のうち5本は出来れば一生遊んで暮らせるといったような貴重な物なのだ。

それを、喧噪が収まって数分で創るなんて……。

アイラが叫ぶのも分かる。
しかし、彼（シルバ）は笑っていた。

私たちの反応が、面白いというように微笑んでいる。

「作り方は簡単ですが、残念なことに秘密です。……ただ」

ただ？

しかし、私が首を傾げる前に、彼は糸が切れたように地面に崩れ落ちた。

「……まさか……自分の体に蓄えられている魔力を……！？」

## ０５７　魔武具（後書き）

創り方についてはまた後日、しっかりと作品の中で説明します。

魔剣鎌の能力も…（；' ∀' ）

ありがとうございました！

今日は夜にももう１話更新します！

## ０５８　保療室（前書き）

保健室ではございません。

最後まで読んでいただければ光栄です。

# ０５８　保療室

目を開けると、そこは白い天井が映し出されていた。
周りを見回してみると、簡易カーテンに……白いパイプベッド。
……保療室（ほりょうしつ）らしい。薬品のにおいがわずかに確認でき、無性にむなしい気分になった。
と、俺は自分の手が誰かに握られていることに気づく。
「……エスペランサ？」
「っ……！？　シルバさん、起きたんですね！？」
うとうとしかけていたのだろう、弾かれるように起きあがったエスペランサは俺が起きたことを確認するなり、保療師を呼んできた。
この学園、前世で言う保健室の先生ではなく、プロを呼びにこれるあたりどのくらいの金を国がかけているのか分かると言うものだ。
連れてきた保療師さんは、俺の体調を確認しながらいくつかの質問を。
俺の、喧嘩が終わってからの記憶が曖昧なことを確認すると。
俺に簡単な説明をしていく。
ヴァーユウリンス・ヴァン・フロガフェザリアス先輩とアイライーリス・ホムラ・アマテノヴァル先輩が俺を連れてきたこと。
どうやら、体の中の魔力を使い果たしたせいで俺が意識を失ったこと。
……何よりもまず、先輩方の名前がとても長い。

次に、魔力を使い果たすと意識を失うんだな。しらなかった。

「彼女たちの話では、魔武具を数分で創ったそうだが、本当か？」

俺は首を振って「勘違いじゃないですか？」と答えた。

実際、あのときダメ元で創った魔剣鎌（まけんそう）はポケットの中に入っている。

大きさは本当にナイフだ。４段階に折り畳め、それによって能力が変わる。

処女作が急造、というのも中々だがまあ良いだろう。

創ってみただけだし。正直半信半疑だったからな。

【魔武具創造（マギア・クリエイト）】……確かに恐ろしい力だ。

俺には職人の手馴れなど必要ない。

鉄はそばにあったパイプで代用、作業台は打ち捨てられた学習机で代用。

必要な魔力は自分の身体から。やはり魔武具の大きさによって使用する魔力は変わってくるため、ぎりぎり身体の物だけで間に合った。

しかし、それで枯渇してしまったせいで意識が飛んだのだろう。

俺は、ヴァーユ先輩と何を話していた？

意識が飛んでいて、思い出せないが……。

彼女の隣には、活発そうなイメージを受ける少女が何かを叫んだような記憶がある。

しかし、誰かは分からない。説明によるとアイライーリス先輩なんだろうが、何を言っていたのか思い出せない。

「君は、自分が異常だと分かっているのか？」

「それは重々承知しております。……龍眼族（レザール）ですから」

俺は無理矢理立ち上がり、そのまま保療室を出て行く。
後ろから抱きしめられ、俺の足はしかし止まる。

エスペランサだ。

「……やめろよ、エスペランサ。好きな人が別にいるんだろう？」
「そんなこと。……今は関係ないです」

今はシルバさんが心配なんです、とエスペランサは言い切る。
俺は少し困った。　うれしい、という心と申し訳ない心。
そして、少しの訳の分からない怒り。

決してその感情はエスペランサに伝えてはならない。

「約束してください、もうこんな無理なことはしないって」
「無理なことって……？」
「正規の方法で魔剣鍛冶を行ってください。無理にやって体をこわしたら元も子もないのです」

俺は頷いた。
さすがに今回のやり方は少々まずかったかもしれない。
素直にそう考え、俺は彼女に同意の意を示す。

と、手が緩められて俺は振り返ることが出来た。

エスペランサは、泣いていた。
俺の顔を見て、頬をさわって。

弾かれたように俺から手を離して。

「ごめんなさい」

少女は謝った。俺に対してか、何に対してか分からない。
しかし、ただただ彼女は悲しそうに笑っていた。

「本当は私……」
「シルバくん大変大変！」

声がして、リンセルさんがこちらに走ってきた。
その顔は必死そのもので、かなり焦っているようにも見える。

そして、その間にエスペランサは俺から離れていた。
リンセルさんは、はぁはぁと息を切らせながら俺を見上げる。

「ラン君が……ラン君が……！」
「ランがどうしたって？」

息も絶え絶えながら、リンセルさんは言葉を紡ぎ出す。

「ギリス・ランレイに決闘を申し込まれた」

俺にはそのギリス・ランレイがどういう人か知らない。
しかし、リンセルさんの口調とその焦りようで、事態が緊急であ

ることは知った。

「あのさ、俺その人のこと良く知らないのだが」

「械刃族（サミュリ）で金持ち。自分の手に入れたい物はすべて手に入れる性格。……どんな手を使ってもね」

その「どんな手を使っても」が、底冷えするような声で発せられるのをきいて、俺は背筋が凍りそうになった。

そもそも、なぜそんなことになったのか聞いてないんだが。

「それは私も分からないの。でも、ほら！」

俺がリンセルさんに引っ張られた場所は、入学試験の時に戦った闘技場だった。

……って、席が半分以上埋まっているばかりか学園長までいらっしゃる。

そんなに大きな物なのか？

……ああ、決闘か。

「決闘のルールって、龍眼族（レザール）と私たちで違ったりする？」

「一応説明を頼む」

俺は何も知らない。

知るはずがない。

知っていたらそれでも結構問題？

いや、やはり本を読むことで得られる知識とかわいい女の子から聞く知識って違うと思うのだ。

……あれ、何の話をしていたんだっけ。

「わかった、説明するから聞いてね？」

リンセルさんは、そういってため息をはき、話し始めたのだった。

## ０５８　保療室（後書き）

御読了感謝です。

シルバは勝手に歩かせてるので時たま作者である私の想像に反して暴走する場合がございます。暖かい目で見て、暴走し始めたと思ったら感想欄で優しく注意をしてあげましょう。

よろしくお願いします。

## ０５９　戦闘開始（前書き）

段々書けなくなってきた感じがします

なんていうか、戦闘シーンはやっぱり苦手です

ＭＦには間に合わせます、よろしくお願いします

# 059　戦闘開始

「なるほど」

俺はリンセルさんの話を聞きおわってから、俺は対峙する二人をみた。

ランの顔は緊張すらしているものの、その出で立ちは整っておりむしろ戦いへの楽しみを表情に表し始めている。

怖い。いろいろとランが怖いんだが。

対して相手は余裕の表情で腕をかきむしる。

自虐行為か、と思いながら見つめていたら、驚くべきことに手がチェーンソーに様変わりしていたではないか。

ちなみに、構造は全く分からない。

「あ、もしかして械刃族（サミュリ）をみるのは初めて？」

「……そうだな」

どんな時でも役に立つ、知恵袋リンセルさん。

簡単に言えば、械刃族（サミュリ）は生まれたときから身体のどこかが武器になったり防具になったりするらしい。

それは先天性のもので、械刃族（サミュリ）は腹の中からサイボーグとして生まれる、という。

帝王切開か？　いや、そもそも母胎の中でどうなっているんだろうか。

さすが異世界、と言うべきトンデモ種族だなおい。

そもそも、俺も言ってみればトンデモ種族なんだがな。

基本的なことを知識として脳の中にたたき込んだ後、俺はリンセルさんから目を離してふたたび対峙している二人をみやった。
チェーンソーになってエンジン音がしても、ランは驚いたような顔を見せない。
静かに拳を握って構えていた。

「……醒眼族（ウェイカー）、ラン・ロキアス」
「械刃族（サミュリ）、ギリス・ランレイ」

二人が名乗り、審判の合図を待つ。

静寂。

「両者……っ！　はじめ！」

最初に動いたのはランレイだった。
ランに向かって単純に、腰を低く落としながらダッシュする。
そして横に一閃。エンジン音を鳴り響かせながら獰猛な牙を回転させたチェーンソーは、ランの身体を抉るべくして突き出される。

ランはそれを一歩後ろに飛んだだけで避け、次のめちゃくちゃな軌道を完璧に読む。
ランレイは、避けられたことに対して歯ぎしりしながら攻撃を加えていく。
が、一つも当たる気配を見せない。

それにしても、この二人名前が似ていてわかりづらいな。
どちらか解明してくれないか。さすがにランレイのことを名前読みはしたくないし。
ロキアス、って今頃彼のことを言うのも中々抵抗がある。
どうしようか、気にしない方向でいこう。

そんな無駄なことを考えている間にランは飽きたようだ。
何かを唱え、魔法を発動させる。

すると、黒い剣が生成されて行くではないか。
光すら反射しない、ただの黒い剣。

「……上級魔法の……《闇魔剣（アビス・ブレード）》……？」
「なんだそれは？」
「普通、醒眼族（ウェイカー）では扱えない魔法……なの」

ああ、確か最初の授業で教養科目として「種族論」があったな。
醒眼族（ウェイカー）は魔法が種族的に増えてであり、魔法は初級までがせいぜいだという。

そして、俺は魔法にも階級があることをその授業で初めて知った。
我ながら、本を読んでいる意味が分からなくなってくる。
こう言う基本的なこともちゃんと知識としておかないと、まずい

というのに。
どうなんだろうか。
つまり、ランが醒眼族（ウェイカー）であるのに上級魔法が使えるのは、彼が知（エ）勉（リシュ）族の種族も持ち合わせているからなのか。
なるほどな。やはり混種族は便利、という結論になる。
「ところで、龍眼族（レザール）はどこまで使えるんだ？」
「私は知らない……ていうか、データにもほとんど残っていないんじゃないの？」
そりゃあ、滅多にほかの種族と交流しないらしいしなぁ。

## ０５９　戦闘開始（後書き）

ありがとうございました

明日は数話更新すると思います

## ０６０　狂（前書き）

バトルは指がとまります、まさか一話に１２時間かかるなんて思いませんでした

# 060　狂

……ランが完全に、ランレイをなめていた。
二つの黒い剣を持っても、全てを防御していっさいの攻撃を与えない。
それにはもちろん、ランレイもいらだちを募らせているようだ。
ここからでもよく見える。

「なぜ攻撃しないんだ!?」
「なら、攻撃しようか?」

ランがにやっ、と笑った。
な!?　とランレイが驚くとともに。

ランは、とんでもない速度でランレイにタックルをかます。
チェーンソーで防御しようと試みるが、間に合わず吹き飛ばされるランレイ。
観客席の下の壁、そこまではね飛ばされたランレイにランは容赦なく追撃を与える。

魔法で生成した剣を彼に向けて投げつけたのだ。
ひるんだ一瞬の隙、そこにタイミングを合わせた投擲。

それに対して、ランレイは崩れるようにして倒れ込む。
それにより、投擲はねらいが外れ彼(ランレイ)の頭のあった場所に突き刺さった。

形勢は一気に逆転した。
たった、一連の動作によって次はランの圧倒的攻勢になってしま

ったのだ。

うわぁ、ラン手抜きしすぎだろう……。

「え？　え？」

「リンセルさんどうした？」

「え、ラン君ってそんなに強かったの？」

この子、さっきまでランが本当に防戦一方だったと思いこんでいるらしい。

必要最低限の動きだけで避けているのをみるに、どうみても面倒くさがって、同時に相手を甘くみているんだろう。

俺も正直、ランレイくらいになら勝てそうだ。

「これで終わり」

ランは、最後に一回ランレイの腹を殴りあげるともう戦いは終わったとでもいうように闘技場を後にした。

「何で最初のほう手加減してたんだよ」

「初手でやったら全く面白くないだろうよ。最初の方は俺も相手の強さが分からなかったし、正直言えば最初チェーンソーが出てきたときはさすがにビビった」

今、俺とランは寮に向かう道を歩いていた。
彼は無傷だ。傷一つついていない時点で、あのときどれだけ彼が相手似たいして手加減していたか分かると言うことだろう。

「正直、そんなに強くなかったな」

そうやって呟くランの顔は、実につまらなそうなものだった。
戦闘狂……なぁ。
この人、戦争にいったら笑いながら人殺しそうで怖いな。

……1人殺したら殺人犯、1000人殺したら英雄、か。
力でねじ伏せても……まあ、この人が正常な人格者であることを祈ろう。

「今度、シルバとも戦ってみたいんだけども」
「……ああ……」

やはり……この人は戦闘狂だ。
怖い。

「へえ、ラン君が圧勝したんですね」
「怖いな、あの人」

夜。寂しいから話をしにきたと真っ赤な顔で呟いたエスペランサと、俺は話をしていた。

エスペランサは伏せ目がちで、今日はなんだか顔も赤い。
何か、面倒なことに巻き込まれていなければいいが、いったいどうしたのだろう。

「どうしたんだ？」
「いえ、シルバさんに言うのは少し抵抗があるので……」

俺にいえないことか、まあいいか。

# ０６０　狂（後書き）

今から急ピッチでもう一話書きます！

## ０６１　眼光（前書き）

よろしくお願いします。

# 061　眼光

「……ねえ、リンセル？」

夜。

ラン君や他の人が寝静まった頃、私はお姉ちゃんにリビングへ呼び出された。

呼ばれた意味は解ってる。……あのことが、お姉ちゃんにはお見通し、というわけ。

「……なに？」

「……今日の行動は何？」

お姉ちゃんは相変わらず無表情。

でも、静かなる怒りが胸の奥に潜んでいるのは、分かってた。

「ラン君やシルバ君と一緒にいたらいけない？」

「……また、同じことを繰り返すの？」

そうお姉ちゃんは私に、目で語りかけていた。

その無表情に隠される、本心を。

「……あの人は、本当にリュー君に似てる。顔も、性格も。……あの強さも」

「でも、ラン君はリュー君じゃない！」

思わず、声を荒げてしまう。

彼と、ラン君は違う。

たとえ、すべてが酷似しても……。

「リュー君じゃないから、お姉ちゃんを選ぶとは限らない。……あのときだって、私が引いたのに……。」

目尻に涙が思わず、溜まってしまった。

こう言うとき、私はムキになってしまう。

……本気だから、よけいに。

「……確かに、リュー君には勇気がなかった。……でも、今回のラン君に勇気はあると思う？」

双子の姉妹、両方を選ぶか、ということを私に聞いていた。。

そう、一夫多妻制が許されている。

リュー君は、片方だけ選んだ。私を見捨てて……。

お姉ちゃんのプレッシャーに負けて。

そして……醒眼族（ウェイカー）に殺された。

「……私は、彼は両方とも選ばないと思うけど？」

無言で、目を細くして私に引けと言っていた。

……今回ばかりは嫌だった。

……絶対に引きたくないという気持ちが、私の中で沸騰しかける。

「そのときは、そのとき。……今年があの年だって分かってるからこそ、私は後悔したくない。」

お姉ちゃんが、目をさらに細くした。

「……そう。……なら、また勝負しましょうか。」

静かにそう呟き、お姉ちゃんは自分の寝室に戻った。

私は、放心状態になってソファにもたれ掛かる。

「……ラン君……？」

そして、ソファの上で睡魔に負けた。

特に何の理由もなく、俺は起きてしまった。

目を開けても、カーテンから零れるような光は感じられず、月の明かりすらないに等しい。

この学園に入ってからは初めてのことだろうか、夜中に急に目が覚めるというのは俺の中で結構珍しいことである。

「……はぁ」

自分の息が、心なしか浅いのを感じて起き上がり、簡単に上着を

羽織ってキッチンに向かう。
ここは一度、水を飲んで気を落ち着かせるべきだろう。

しかし、リビングに差し掛かったところで俺は。
毛布を掛けてもらってソファーで目を閉じているリンセルさんと。
彼女の頭に手を置いたまま、まるで子供をあやすような態勢で寝ているランを見かけたからだ。

リンセルさんの美しさは、寝ていても健在だった。
むしろ、目を閉じていることによって幼げながらもわずかな色気と、それを包み込むような愛くるしさが新たに生まれているような気がした。

ランは……相変わらず腹の立つ、イケメン。
とにかくイケメン。何とかしろ誰か。
今殴って顔面を凶器に変えてやろうか、と思いたくなるくらいにイケメン。
……思いっきり殴りたくなった。今度こいつと戦う。
今決めた。

「……人の色恋沙汰に付き合うほど、俺の容量（キャパシティー）も範囲が広いわけじゃないんだよなぁ」

とりあえず、ランのところにも毛布をかぶせておく。
風邪をひかれたら困る。
戦闘狂のことだ、風邪をひこうが何だろうが戦いだそうとするだろうし。

色々と面倒なんだろうし。暴走とか、さすがにしないよな？
狂戦士（バーサーカー）になったりとかはしないのかね？

そんなことを考えながら、俺はリビングを後にした。
普通に水のむだけだったら数分とかからないのに、……やはり、人にお節介を焼くのは俺の性に合わないどころか。
時間の無駄だな。

「あ、あの……。大丈夫だった、のか？」
「気を失う前の記憶がないんですが、先輩」

俺、何かしてました？
そうヴァーユ先輩に聞く。

今は例によって工房棟。今は授業が終わり、囲いを作っていた男子生徒は先日俺が全滅させたためいない。
そのおかげというかなんというか、その結果俺と先輩の会話がこうやってして成り立っているのだから結果オーライ、という訳か。

正直、魔剣鎌（まけんそう）を創ったところで記憶は途切れている。
あの時、何故俺は思い切った行動に出たのか。
全くもって不明。

「いや、何も？」

「そうですか？」

俺は疑問に思う。

先輩の目に、わずかな怯えが映り込んでいるのを感じ取って。

そのまま、口に出すことにした。

「ではなぜ、怯えているんです？」

「……うぐっ」

こっちは本音。別に意地悪をしようなどと思ってやったわけではなく、正直に思ったことを口にしただけである。

しかし、それに先輩が答える。

その前に。

アンセルとリンセルが、同時に俺を引っ張って彼女から遠ざけた。

「どうしたんだよ！？」

「シルバ君、自分の目をちゃんとみて！」

俺は、リンセルに渡された手鏡を覗き込み……。

「――ッ！？」

自分の目の、鋭さに思わず仰け反りかけた。

六芒星が白く映り込んだ黒かったはずの目は。

真っ赤に染まり、六芒星は金色に輝いていたのだから。

## ０６１　眼光（後書き）

ありがとうございました。

前半部分は、拙作「異世界に転生したと思ったら、身体を再構築されｔ（以下略）」の物となっております。

## ０６２　龍眼（前書き）

ちょっと説明多めかもです、申し訳ないです。

でも、この物語のあとに絡んでくる話なのです。

# 062　龍眼

「え、これをどうしろって？」

俺は鏡に映った自分の眼を見つめ、俺は呆然としたままリンセルさんたちに訊いた。

しかし、彼女たちが首を動かすことはない。

知らないのだろう。この現象のことを。

俺も本で龍眼族（レザール）についての資料を集めようとしていたが、いかんせん謎な種族だ。

外見から見ればわかるようなことしか資料として持っていないし、知っている人なんてほとんどいないのだろう。

と、俺が途方に暮れていると。

リンセルさんが、何かを思いついたようにぽんっと手を叩く。

「担任の先生に訊いてみたらどうかな？　カレル・アテラット先生！」

「誰だそれ」

ひっどーい、とリンセルさんは大袈裟に驚いたふりをすると。

むすっ、と可愛らしく頬を膨らませて俺の手を引っ張る。

同時に引き寄せるようにしてアンセルさんの腕を引き寄せ、どこかに向かって走り出した。

「うぁ！？　おい！」

「……リンセル……！？」

しかしリンセルさんは止まらない。
このまま、俺とアンセルさんを引っ張ったままとある教室へ。

それにしても、少し強引過ぎるような気がするが。
気にしないほうがいいんだろうな。

【授業準備室】。
そう書かれた教室の前で、リンセルさんはやっと立ち止まった。
外から見ると普通の部屋だが……もしかして中身はとんでもなかったりするのか？

「っておい！　ノックもしないで入っていいのか？」
「べつにいいんじゃないの？」

随分と適当な言い方である。
そんなに面倒なことなんだろうか。
まあ、いいけど。

「カレル先生いますかー？」
「……うぃー」

間延びした声が、奥の方から聞こえてきた。
同時に、何やら騒がしい声も一緒に聞こえてくる。
この声を聴く限り、ランがいることは絶対のようだ。

「あれ？　シルバじゃん」
「お、おう」
「どうしたその目？」

お、おう。

ランは俺の目の異変にきちんと気づいているらしく、怪訝な顔だ。

エスペランサは、静かに先生の私物らしき本をそこら辺にあったソファで黙々と読んでいた。

部屋は広い。おそらく目測だが、準備室ではあるのに普通の教室よりも1．5倍ほど大きいような気がする。

他の先生と関わったことがないため、準備室は皆そうなのかどうなのかわからないが、準備室というのは普通狭いものだと認識しているため、この先生が何か特別な権限を持っているという考えても間違いはないと思う。

「あ、この人がランの言っていた人か」

と、俺はランの向かい側にいる人物のことを認識した。

腕獣族（ケレイジ）だ。尖った耳からして、オオカミか何かのだろうか、随分といい意味でも悪い意味でも野性的な顔をしている。

肌の色は少々浅黒い。日焼けした、というのもあるのだろうがほぼ生まれつきのような気もする。

「紹介するよ、この人はウスギリ・ゲン」

「よろしくー」

フランクな人だった。常に自然体で話をしているような人だ。

ランとは違う意味で凄い人だと思うが。

しかも。ランとは違うが特異なオーラを放っているような気もする。

そして……だ。

奥の方から、ガタッと音がして誰かが立ち上がる。
そして俺の方に近づいてくる。

奥の方は暗く、よく顔が分からない。
しかし……この何者かは、ランと同じ匂いがした。

「リンセルスフィア嬢にアンセリツティア嬢、そしてシルバ・エクアトゥール君。僕に何か用かな？」

カレル・アテラット。フルネームはミドルネームに「ゼウス」が入るらしい。
顔は確実に平均以上。気障なセリフがよく似合いそうな顔をしている。
そして、鎖骨部分に太陽の紋章。
耳も少々とがっているところから、知勉族（エリシュ）だと予想はついた。

何よりも、この人……オーラがやばい。
何が怖いって、転生前の神々……その人たちとほぼ同格のオーラを放っている。

「ところで、僕に何の用かな？　この雰囲気じゃ、どうみても授業の予習復習についての質問ではなさそうだけど？」

事情はリンセルさんがカレル先生に説明をしてくれた。
カレル先生は、すこし悩み徐(おもむろ)に。
そばにあった本を一冊。
手に取った。

「エスペランサさん」
「はい？」
「この本の中身、覚えたほうがいいよ」

話をしているのは俺なのだが。
俺がイライラしていると、カレルは一言。

「龍眼の覚醒、だね」
「なんだそれ」
「シルバ君。君は何故、龍眼族(レザール)が龍眼族と呼ばれるのか、わかるかい？」

俺は勿論、そんなこと知る由もないため首を振った。
周りの人も知らないらしく、エスペランサですら読書をやめて聞き入っている。

カレル先生が、口を開く。
その目は、新しいものを発見したかのようにキラキラと煌めいていた。

「種族の名前には、一つずつきちんとした意味が込められている。
龍眼族は、その【眼】が。【龍眼】(レザリガルズ・アイ)が、理由だ」

カレル先生の話によると、龍眼族（レザール）と醒眼族（ウェイカー）は似ているようで似ていない種族らしい。

龍眼族（レザール）は、「龍の目を持ち、龍に目醒める」種族。
醒眼族（ウェイカー）は、「醒める目を持ち、覚醒する」種族。

正直、何を言っているのかさっぱりわからないが。
結局、何を言いたかったのか全く分からないが。
本当、何をすればいいんだろうな。

「えっとつまり、何が言いたいんだ？」

ランが混乱していた。
まあ、色々とつながっているのか同かもわからない情報を流されたら、そりゃあ混乱する。
俺も何が何のことやら。

「うーん。ありていに言えば、覚醒する能力を使えるのは【特別な】龍眼族（レザール）と醒眼族（ウェイカー）だけ。【龍眼（レザリガルズ・アイ）】は、その一環に過ぎないこと」

それに……とカレルは言葉をつづけた。

「君の【龍眼（レザリガルズ・アイ）】は、【威圧の龍眼（レザリガルズ・アイ）】だ。能力を発揮すれば、どんな人でも自分を恐れおののかせることができる」
「へー便利じゃん」
「いやいや……」

カレル先生の返答に、ランが面白いものを見つけた、というような顔をした。
いや、俺の目はおもちゃでも何でもないんだが……。

「これからは、シルバ君の意思で能力が使えると思うよ。……決して、使いすぎはダメだけどねー」
「……お、おう。……ってあ」

さっきあのまま、先輩の存在を後回しにしてたけど……。
……大丈夫？　やっちまった感が半端ないんだが。

## ０６２　龍眼（後書き）

ありがとうございました。

今日はもう一話更新できたらいいなー

# ０６３　魔剣鍛冶（前書き）

いつもと比べて、少々長いです。

最後まで読んでいただければ光栄です！

# ０６３　魔剣鍛冶

カレル先生の準備室を出て、俺はわき目もふらず工房棟に戻った。
ヴァーユ先輩がどこにいるかなんてわからないが、彼女のオーラは幸いなことに他の人と違う。

いや、この学園はそもそも特異なオーラの人が多すぎる。
さっきカレル先生の部屋にいたランやウスギリ・ゲンやリンセルさんアンセルさんまで、全員が何らかの違うオーラを放っている。
例にもれず、エスペランサまで。

「仕方がない……」

とりあえずは工房棟だな。
今俺がいる座学棟、そこから工房棟へは距離が遠く、代わりに全ての階には連絡用通路が設けられている。

ここは2階だ。勿論連絡用通路はあるから大丈夫だろうが。

それよりも心配なことは、そこに先輩がいるかどうかということなのだがな。
正直、リンセルさんたちに引っ張られてから３０分以上たっている。
しかもその時、すでに本日の最終授業は終了しているのだ。
帰っていてもおかしくないし、この学園でどんな集団クラブ活動が行われているのか俺にはわからない。
おそらくは入学式、しいてはほかの説明ガイダンスなどで紹介はされているんだろうが、俺は全て頭の中に入れていなかったのだろう。

あの時は入る気がないから不必要なのかと思ったのだが、今考えてみると必要みたいだ。

一見無駄な知識だとしても、思わぬ時に必要になるか……。

しかし、もし彼女がそれらに関与していないとしたら、この公開も必要がなくなるのだが……。

と、俺は工房棟の前で忙しなくあたりを見回している一人の少女を見つけた。

女の子にしては短く、荒削りな赤い髪の毛。

烈火のごとく噴き上げるような赤い眼。

ヴァーユ先輩はおしとやかな女の方だとすれば、差し詰めこの少女は野性的（ワイルド）過ぎる。

俺を視認したらしいその少女は、こちらへずんずんと近づき。

不意に俺の胸ぐらをつかんだ。

「ヴァーちゃんをどこにやったの！？」

声はワイルドな外見に反してとてもかわいい。

いや、そんなことを考えている場合ではなく、一体どうしたのだろうか。

おそらく、彼女の言っている「ヴァーちゃん」というのはヴァーユ先輩のことなんだろうが。

「えーと。誰？」

「……はぁ。私の名前は【アイライーリス・ホムラ・アマテノヴァル】。この前名乗ったよね？」

半分呆れ気味に彼女は名乗った後、「で、ヴァーちゃんは？」と鋭い目を向けてきた。

ああ、先日倒れた俺をヴァーユ先輩と保療室に運んでくれた先輩らしい。

しかし、一体どうしたというのだ？

「……現在の状況が判断できない」

「は？　とぼけないでよ」

「いや、今さっきまでカレル・アテラット先生の準備室にいた。なんなら確認をとってもいい」

そもそも、リンセルさんが俺の異変に気付いて無理やりヴァーユ先輩と引き離したのを、彼女は見ていたのではなかったのか。

彼女は少し戸惑ったようだが、思い出したように髪の毛をガシガシと掻いた。

髪の毛が傷つくことを気にしていないあたり、相当焦っているらしい。

「ヴァーちゃんが、行方不明なの」

「は？　でも、連絡とかとれないの……んですか？」

「取れたらこんなに慌てないでしょう！？」

アイライーリス先輩がヒステリックに叫ぶ。

と、俺の手を引っ張って工房棟の方に歩き出した。

……今日は美少女に腕を引っ張られることが何だか多いな。
流行りか何かなのか？

カレル先生の部屋の次は、工房棟内の工房へと連れてこられた。
【龍眼（レザリガルズ・アイ）】でオーラは感じ取れないのだろうか、【白い腕輪（アルバ・アルミリア）】を展開して説明を見るに、可能なようだ。
しかし、アイライーリス先輩もかなり特殊だからな、彼女の影響を受けて……とかでは面倒なことになる。

そもそも、なぜここまで連れてきたのかも聞かなければならないし。

「……剣を一本、打ってほしいの」
「はい？」
「私に、ヴァーちゃんを守る力がほしい」

俺、1年なんだが。

「技術も何もない、無名の俺に頼むんです？」
「……たった2分弱で魔剣を一本創り出したあなたが、技術がないなんて言わせないわよ？」

……やっぱり覚えてるのか。
でも、創るべきなんだろうか。
そもそも。魔剣を創れるほどの材料はここにあるのだろうか。

前回俺のやった方法は、あくまでもやっつけでしかない。
普通そんなことをしていたら、失敗する確率は１００だろう。
俺が【魔武具創造（マギア・クリエイト）】の能力を使っていたからこそ、あの時は可能だったのだ。

「お願い、創って。魔石ならここにあるから……」

取り出されたのは、手のひらほどの巨大な赤い宝石だった。
魔石、という限りは魔力が中に含まれているのだろう。
魔剣、は魔法で打った剣全般をさす。

仕方がない、今ヴァーユ先輩がどうなっているのか、無事なのかわからないから、創って万が一に備えたほうがいいのだろうか。

「わかりました。……剣材は自由に持ってきてください」
「はい」

差し出されたのは、なぜかわからないが脈動している真っ赤な金属だった。
手で持っていると分かる。中でどく、どくと動いているのだ。
まるで、生きているように。

「【脈動赤金（ヴァルカナイト）】」
「……とりあえず、創ります」
俺が言うのと同時に、アイライーリス先輩が一枚の紙を差し出した。
どうやら、取引確認票らしい。
そこに書かれていた取引値段は、２００，０００，０００イデア。
２億である。零が８つも並んでいるのが確認できた。
「いやいやいやいや！」
「いいから！　今はそんな時間ない！」
彼女に急かされ、俺はそばにあった一つの魔剣鍛冶用作業台に【脈動赤金（ヴァルカナイト）】のインゴットをセットする。
そして傍に合った棚から、蓄魔器のチューブを作業台と繋げる。
これは頭の中に埋め込まれた記憶を頼りにやっている。
そのため、魔剣鍛冶用の作業台、それの各機能はしらないし、蓄魔器はいったいどんなものなのかは知らない。
まあ、後者は名前からして魔力を溜め込んでいるのだろうとは想像できたが。
魔剣鍛冶には、剣を鑿で叩く必要がない。
魔力で形を作る。
魔力で能力を宿す。
魔力ですべてを、創り出すのが【魔剣】なのだ。
作業台には、正五角形の模様。頂点部分には小さな穴。

五角形の真ん中に大きな窪みがあり、適当な場所にインゴットを入れると同時に、蓄魔器から魔力が流れ出す。

そして、頂点の小さな穴から少しずつ青色の魔力が流れ出し、インゴットを溶かしていく。

すべて融け終わったら、次は魔力が黄色に変わった。

真っ赤な【脈動赤金（ヴァルカナイト）】に、黄色い魔力が振りかけられると同時に、わずかな虹色の火花が散る。

「……綺麗……」

となりで、アイライーリス先輩の感嘆した声が聞こえた。

確かに、美しい光景だ。

しかし、美しい薔薇（バラ）に棘があるのと同じで魔剣はそもそも危ない代物である。

この後が俺の仕事だ。

頭の中で思い浮かべた魔剣の形を、５つの穴から流れる魔力の量を調整することによって少しずつ調整していく。

まあ、この場合先輩が望んでいるのは両刃剣であるから、多少ざっくばらんに作ってしまってもいい。

緑色の魔力が、俺のやった少々荒削りな魔剣の形を整えていく。

ゆっくりと、しかし目に見える変化を先輩は惚けたような顔で見つめていた。

「……これが、魔剣鍛冶」

形が整うと、次に俺は先輩から受け取った真っ赤な魔石を作業台

の上にのせるごとく、落とす。
魔石は落下の途中で減速し、完成途中の魔剣から上に5センチメートルほど離れた空中で静止した。

魔力の色が赤に変わる。

紅い魔石を、これまた赤い剣の柄部分に融合するよう、ゆっくりと降りていく。
柄の部分が僅かに広がり、魔石が剣に触れると周りの部分が包み込むように動いた。

融合したのと同時に、魔剣から火が噴き出し、魔剣が宙に浮いた。
朱色（ヴァーミリオン）の焔が龍のように。
二重螺旋（ダブルスパイラル）を形作る。

そして、二重螺旋は全て魔石に取り込まれ。
5つの穴から流れ出す魔力は紫に代わった。

「完成した……な」

俺は宙に浮いたまま、紫の魔力に支えられて鎮座している魔剣を手に持ち、重さを確認する。
女性の腕にも馴染みそうな柄。

全体的に紅い、というよりは全てが赤だった。

俺はそれを、アイライーリス先輩に渡す前に。

形に合いそうな鞘を選び、収納して不備がないか確認する。

不備はない。完成である。

「どうぞ」

「……できた？」

俺が頷くと、先輩は少しだけ心配そうにそれを受け取り、鞘から抜き放った。

煌々と燃え上がる聖火を、掲げているようなイメージが頭の中に湧き上がる。

「この魔剣の名前は？」

「……【守護者の炎（ガーディカナル・アブレイズ）】」

さあ、魔剣は完成した。

はやく、ヴァーユ先輩を探すとしよう。

# ０６３　魔剣鍛冶（後書き）

ありがとうございました！

## ０６４　種族無双（前書き）

龍眼族は強い。強いてはシルバが強い。

最後まで読んでいただければ光栄です。

# ０６４　種族無双

「先輩、ここらへんで……」

アイライーリス先輩は、魔剣を恍惚とした顔で見つめて、俺の話など聞いていないようだ。

まあ、使ってみるまで魔剣の能力なんてわからないのだが、俺の考えた能力は「発火現象」である。

それがどこまで反映されているか。ヴァーユ先輩がいる平和なときであればゆっくり検証したいところなのだが。

今はそんな暇がない。

俺はアイライーリス先輩の肩に手を置き、乱暴に元の世界へと叩き戻す。

「ひゃっ！？」

お、思ったよりも可愛い声が出たな。

「そんな場合じゃないですよ。早く探しましょう」

「あ、はい！」

まったく、どっちが先輩なのやら。

「……いた」
「え？」
「いました」

俺は体育館の中を指差した。
たしかに、ここからヴァーユ先輩と同じオーラの気配がする。
中にいるのはまたもや２５人か。バラヌもこの調子ではまず間違いなくいることだろう。

「まさかこれって、もしかして……」
「どうしました？」

何かに感づいたようだ。アイライーリス先輩は、不安げな顔で俺を見つめると、その考えを口にする。

「これって。もしかしてエクアトゥール君を一方的に痛めつける為の物何じゃ……」
「ああ、それなら大丈夫ですよ」

俺には自信がある。
俺には龍眼（レザリガルズ・アイ）がある。
使い方は分からないが、戦闘中はそれを起動させておけばいい。
全てを恐れさせる、この視線があればおそらくは大丈夫だ。

「念のために、先輩は外から様子を見てください」
「でも……」
「そうですね、俺がピンチだと思った3分後に突入をお願いします」

それでも不安げな先輩に、俺は魔剣を指さしながら言った。

「それがあれば、大丈夫です。貴女の、守りたいという心が貴女の強さになる」

俺はそれだけを言うと、体育館のドアを蹴って吹き飛ばした。

奥の方で驚いた声。あたりらしいな。

俺は魔剣鎌【刹那＝無限（ピリオド・エターナル）】を取り出し、ペンのように持つと中に突入した。

体育館には、ガラの悪そうな先輩からインテリ系で不敵な笑みを浮かべている先輩、その他諸々。

その一番奥に、焦ったような顔で俺を見つめているヴァーユ先輩の顔があった。

縛られてもなければ、特に拘束されていないようだが、なぜ逃げ出さないんだ。

「……来たか」

バラヌだ。ウスギリ・ゲンとは違い、微妙なオーラを放っている彼。

簡単に言えば、「その他」の分類だ。

「先輩、何をしているんですか？」

「ここで、決闘をしようかなと思ってな」

決闘、と言うよりは無双になるかリンチになるかのどちらかだと思うのだが、どうだろうか。

あながち間違ってはいないだろう。

「俺たちの勝利条件は、お前の戦意喪失。お前の勝利条件は……」

彼女にふれることだ、とバラヌは言い放つ。

おそらく、そこ全員を蹴散らさないといけないんだろうな、と理解した。

簡単な話である。ここにいるひとの個人情報から本名を抜き出す。

次に、【引斥制御（グラビシオンコントロール）】を使う……のは後だ。

「合図はこちらからでいいか？」

「どうぞー」

いつでも発動する準備はできている。

しかも、この【引斥制御（グラビシオンコントロール）】の能力。

魔法と言うよりは超能力の類だ。

「はーじめ！」

……すでに囲まれてました。

先輩方が雄叫びをあげて突っ込んでくる。

大体が「うおおおおお！」とか「しねぇぇぇぇぇ！」とか。

たまに「きしゃぁぁぁぁ！！」とか訳の分からない声も聞こえるが。

《【引斥制御（グラビシオンコントロール）】発動》

「えっ！？」
「がっ！」
「うっ？」

先輩方は、さぞ驚いたことだろう。
走っていたら、足と地面が縫いつけられたのだから。

正しくは、重力が足に強くかかっているのだが、いきなりだったらそんなに変わらない。
動いてなかったインテリ系の先輩1人と、仰け反るように座っているバラヌ以外は地面に縫いつけられ動けなくなる。

まあ、インテリ系の先輩の名前は……イエロ。
ふむ、どうでもいいか。

俺はイエロ先輩に向かってダッシュすると、そのままの体勢から殴りかかった。
それを首を動かし避ける先輩。

俺はいったん引き、イエロ先輩の両手を壁に縫いつける。

「はっ！？」
「とどめ！」

四肢の自由を奪われ、抵抗の出来ない先輩の顔面をなぐって気絶

させ、【引斥制御（グラビシ・オンコントロール）】を解除。

崩れ落ちる先輩1人目を最後までみること無く、次の標的へ。

「やっぱり、あのときに一発殴っておけば良かった」

「ほぅ……その拳がぐほぁ！？」

当たると思ったら大間違いだ、とでもいいたかったのだろうか。

いきなり当たっているんだが、どうだ？

まあ、龍眼族（レザール）の膂力だ。

やりすぎたら死ぬため、もちろんある程度の加減はしているつもりだが。

「【地】属性上きゅっ！？」

【龍眼（レザリガルズ・アイ）】、発動。

先輩の顔に目を向けると、、一瞬でその先輩は喉を詰まらせる。

そこまでに恐ろしい目なのか、この【龍眼（レザリガルズ・アイ）】というのは。

俺はその威力に感嘆しながら、今し方魔法を詠唱しようとした先輩の頭を蹴り上げた。

「……はぁ」

俺は、倒れて動かなくなった先輩たちを背にしてヴァーユ先輩に近づいた。

もちろん、振り向くときに【龍眼（レザリガルズ・アイ）】は動作を解除している。

さすがにもう一度彼女を怖がらせるわけには行かない。

「強いな、シルバは……」

ヴァーユ先輩は、俺をみて泣いていた。

真珠のような涙が、頬を伝って堕ち、服にしみこんでいく。

こう言うとき、普通はどうするのだろう。

しかし、俺は普通が分からなかった。

だから。俺は……。

彼女をそっと、抱きしめた。

「……？」

一瞬戸惑ったのだろう、ビクリと先輩は身体を震わせ。

ちょっとして、恐る恐ると言ったような顔で、俺の腰に手を回してきた。

柔らかい。そしてどこか儚げな体つきである。

出ているところもしっかり出ているが、その腕は細い。

完璧、という言葉が一番あうようなそんな体つきだ。

少なくとも、俺の好み的には完璧である。

「……落ち着きました？」

「……ん。もうちょっとだけ……このままでも……」

「大丈夫ですよ」

か細い声を出す先輩というのも、これまた一興あっていいものだな。

「――――はぁっ！」

敵前の生徒を、エクアトゥール君から買い取った魔剣で薙いで吹き飛ばす。

やっぱりバラヌは見張りをつけてた。

彼は、このこともちゃんと分かっていて私に外で待つように言ったに違いない……とおもう。

二人して入って、もし外から見張りの襲撃があったら元も子もな

いからね。

この魔剣は、最初から私の為に創られていたかのようにとっても手になじむ。

自分の好きなタイミングで念じればそのとおりに強さを発揮してくれる。

最高だ。これ、思ったけど２００，０００，０００イデアでは払いきれない代物かもしれない、と思ってしまうほどだ。

この強さの秘密は私自身の力じゃない。だからといってこの魔剣がすべての強さを司っているとも思えない。

私がいて、この魔剣が存在しているからこそ。

最強の力を示すというのは、本当に私が望んでいた剣だ。

……それにしても、私は「こんな魔剣がほしい」なんて一言も言っていないのに。

なぜ、あの後輩生徒は知っていたんだろう？

……まあ、いいや。

こっちも終わったし、ヴァーちゃんとエクアトゥール君もいい雰囲気だから、もう少しここで待っていよーっと！

## ０６４　種族無双（後書き）

ありがとうございました！

さて、ラストスパートです！

## ０６５　平安（前書き）

やっと、やっとここまで到達できました！

## 065　平安

「ヴァーちゃん、無事だったんだね！　よかったぁー！」

ヴァーユ先輩とアイライーリス先輩が抱き合っている。

ここは体育館から少々離れた中庭だ。俺はバラヌ先輩共々これ以上何もしないようにしっかりと釘を刺し、二人を連れてここまできた。

これから何もなければいいが。

「エクアトゥール君、ありがと」

「む、アイラ。なんだその剣」

アイライーリス先輩が、俺にウインクをしてからヴァーユ先輩の質問に答えた。

もちろん、その剣とは俺がさっき創った赤い魔剣である。

「エクアトゥール君から買ったの」

とたん、先輩はみて分かるくらい顔を曇らせた。

俺の方を向いた先輩の顔は、心なしか泣いているように見える。

俺、何かしたのか？

「……幾らで？」

「２００，０００，０００イデアで」

その値段を聞き、納得したようにヴァーユ先輩は頷いた。

よかった。安すぎるとか言われたらどうしようかと考えていた…
…ところである。

「この魔剣、本当に使いやすいんだよ！　エクアトゥール君の創る魔剣は本当に最高だね！　まさか2作品目だなんて思わないよ誰も」

ヴァーユ先輩はアイライーリス先輩の、腕の中にひしっと抱きしめられている魔剣【守護者の炎（ガーディカナル・アブレイズ）】をみて。

むすっとした顔で俺に詰め寄る。

その顔は実に美しく、朱を帯びた頬は実に愛らしい。

「……私も、1本ほしい」

ヴァーユ先輩に約束を取り付けられ。

俺が帰ろうとすると、次はアイライーリス先輩に話しかけられ。

そのまま工房棟の前まで連れてこられ。

今に至る。

「どうしたんですか、先輩」

「私、エクアトゥール君にどんな魔剣が欲しいかなんて、一言も言っていないのに。なんで貴方は私の望み通りの剣が創れたの？」
「ああ、ということは剣がしっくりきたんですね」

俺がそう答えると、当たり前でしょと彼女は笑った。
その姿は。
言っちゃあ悪いが、ヴァーユ先輩とおなじくらい整っている。

粗野な感じはおそらく、髪型から来ているのだろうと察せられるほどだ。
普通に髪の毛を伸ばして大人しめの服を着たら、お姫様っぽくなるんじゃ無かろうか。

いやちょっと待て、確かさっきこの子、切羽詰まったとはいえ簡単に2億出したぞ？
かなりの金持ちなんじゃないだろうか。
それにヴァーユ先輩も同じのが欲しいって言っていたから、同様に金持ちなんだな、なるほど。

「今度また、よろしくね！」
「え？」
「お金は幾らでも払うし、魔石も提供する。そのかわり、貴方は魔剣を創って、ヴァーちゃんを幸せにしてあげて」
「は！？」

突然のことに、俺が目を白黒させると。
アイライーリス先輩は、不意に俺の首へと抱きついてきた。

息も聞こえそうなほどの近い距離。
その中で、彼女は俺を見つめている。

「……何を？」
「それとも、私も一緒に幸せにしてくれる？」
ぞくっ、と。
甘い痺れのようなものが、首から背中にかけて走り抜ける。
驚くほど官能的な声でそう言われたのだ。男として仕方のないことだと思いたい。
「まあ、貴方とヴァーちゃんがお互い仲良くしてくれれば私としても本望なんだけど……」
好きになっちゃったかも、と先輩は超弩級の爆弾を投下して……。
俺から離れ、手を振った。

「思い返せば、とんでもないことになってしまった」
「え？　俺たちと別れて数時間で何があったんだよ？」
寮。俺は、ランとウスギリ・ゲンとソファに座っていた。
なんだかんだ聞いてみたら、ウスギリ・ゲンもここの移住者らしい。
空いていた４部屋の一つがこれで埋まったというわけか。

俺はダイジェストにして二人に説明する。
こんなことはいちいち隠すものでもないから、とりあえずだ。

「先輩に対して無双、ねぇ。やっぱり龍眼族（レザール）は強いんだな」
「今度本当に戦おうぜ！」

ええーーと。
前者がウスギリで後者がランである。
血の気がマックスで盛んなんだが。
なぜだ。

ウスギリの方が幾分か落ち着いているぞ。
どうなってる。

とか話していると、リンセルさんとアンセルさんら女子勢が飯を盛ってきてくれた。
俺も手伝う、と言ったんだが……エスペランサに拒否されてあえなく撃沈。
まあ、リンセルさんもアンセルさんも、料理がやばいくらいうまいから文句はないんだがな。

そもそも、わざわざつくってもらっている身である。
文句なんて言えるはずがない。

「どう？　【龍眼（レザリガルズ・アイ）】は」
「戦闘の時に大いに役立ったよ」

目さえ合わせてしまえば、相手は勝手にひるんでくれ、その結果隙が出来る。

俺はそのタイミングに合わせて攻撃をすればいいだけだ。
一方的に攻撃がしたかったら、【引斥制御（グラビシオンコントロール）】で四肢を固定してしまえばいい。

あとは、膂力に任せて暴れ回るのみ。

「まあ、とにかくシルバ君が何もなくて良かった」

リンセルさんは、そう呟くと。
天使にも見まがうほどの微笑みを、俺に見せたのだった。

『シルバ・エクアトゥールの情報が欲しい？』

「……ああ。アイラが彼に惹かれ始めた……。どうなんだろうな、シルバは、複数人を抱えられる器を持っていると思うか？」

『魔剣を自在に創り出せるような人だ。……女の1人や2人、簡単に纏められるだろうよ』

「……そうか。……なら、安心だな」

『ただ、それが……お主ヴァーユウリンス・ヴァン・フロガフェザリアスを選ぶなんていうのは期待しない方がいいかもな』

「え……」

『ははは、冗談だ。ただ、そこまで期待するのではなく、自分の力で彼の心をつかみ取らないと』

自分の人生は、自分で決めろ。

そして、悔いのない人生を、過ごせ。

## 065　平安（後書き）

ありがとうございました！

## ０６６　授業後（前書き）

新章発足。
これからは暫定的に、毎週月曜日更新となります。
理由は簡単、私が５作同時連載になるからです。

# ０６６　授業後

魔剣を創って、３週間。
もちろん、「龍眼族（レザール）の１年が魔剣を創ってくれるらしい」という噂は流れに流れた。
しかし、そもそも龍眼族（レザール）に話しかけられる人なんているのだろうか。
いない、というのが事実である。今のところ、俺に話しかけられる上級生は、ヴァーユ先輩とアイライーリス先輩だけだ。

ほかの先輩は……特にバラヌ一派は……。
完全に俺を怖がっているのか、何なのか分からないが最近目も合わせてくれなかったりする。

ちなみに、受ける授業は決定した。
この学園、１コマの授業が９０分で、午前中に２コマ、午後に４コマの一日合計６コマで授業が成り立っている。
そのため、一日の最終コマに授業を入れたら寮に帰るのが２０時をすぎていたなんてよくあることなのだ。

まあ、俺はそんなに面倒な授業は取らないが。
授業は、聞かなければならない物だけを入れた。

なんだかんだ、『魔剣鍛冶師』という職業に資格は必要ないが『鍛冶師』という職業に資格は必要らしい。
それは、魔剣を自由自在に創れる人なんて存在しない、という前提条件だろう。
普通に「私の職業は『魔剣鍛冶師』です、なんて言っても大笑いされるだけである。

「エクアトゥール君」

考え事をしていたら、後ろから不意に声をかけられた。
周りを見回すと、どうやらすでに授業は終了しているらしい。
……考えことにふけりすぎて、周りすら見えていなかったか。

ちなみに、声を掛けてくれたのはアイライーリス先輩だ。
彼女自身は「アイラでいいよ」と言っているが、なぜか俺は長い名前のまま呼んでいる。
なぜだろう、ヴァーユウリンス先輩のことは「ヴァーユ」先輩と略しているのに、な。

アイライーリス先輩は、三週間でずいぶんとイメージが変わった気がする。
髪の毛は伸ばすことにしたのか、少しだけ結えてあるし。
前の粗野なイメージはなくなり、ヴァーユ先輩に似て清楚なイメージに変わったような気がする。

しかし、その顔から活発な雰囲気は拭えない。
いろいろと、多様性のある性格だ。本当にうらやましい。

「授業終わったけど、大丈夫？」
「大丈夫ですよ」
「何か考え事をしていたんだね」

将来のことを少し、と返答を返す。
と、先輩は目を細めて俺の頭をそっとなでた。
その手つきは、正直言って妙に色っぽい。

なんと言えばいいのだろうか。その白くて細い、小さな手が近づいてくるだけで……。
背中を、ゾクリとした快感のような寒気が通り抜けるのだ。
これは、『あのとき』の熱が、未だ冷め切っていないからなのか。

「凄いね。私なんて何も考えてないよ」
「先輩は大企業のご令嬢でしょう」
「ふふ」

俺が言ったことにも驚かず、アイライーリス先輩はいたずらっぽく笑っただけだった。
そう、ランからリンセルさんたちに繋げてもらっていろいろと調べさせてもらったところ、ヴァーユ先輩もアイライーリス先輩もかなりの金持ちだ。

ヴァーユ先輩は血筋的にはクオーターだが、種族的には反映されていないと言う一般的な混血である。
母親方が完全な知勉族（エリシュ）、父親方の祖父が械刃族（サミュリ）だったらしい。
だから、少々無機質とも言える美しさを持っているのだと思った。

「そうだ、エクアトゥール君」
「はい？」
「この後、授業ってあるの？」

いったいどうしたんだろう。
俺は次の授業が一時間、あることを先輩に伝える。
確か、魔法の基礎を学ぶ授業だったはずだ。
普通の生徒には退屈すぎる物らしいが、俺とランと言う『外の世界から来た人』にとってはかなり助かる授業でもある。

「はい、1時間」
「じゃあ、終わったら第1食堂でいいかな？」
「なぜ？」
「ふふふー。私とヴァーちゃんと、エクアトゥール君で都市部に行こうかなって思って」

デートの誘いか。
なら、行かないわけには行かないな。
と、視線と気配を感じて俺が振り向くと。
目の前には、ハッとするような美少女がいた。

……っまあ、ヴァーユ先輩な訳なんだが。
それにしても、見とれてしまいそうになる。

「シルバ君、そういう訳なんだが、かまわないだろうか？」
「あー、はい。よろこんで」

ヴァーユ先輩の顔が綻び、穏やかな笑みがその顔からあふれた。
ふむ、このくらいのことならば何時でも大歓迎なんだが。
誘ってくれる人がヴァーユ先輩かアイライーリス先輩か、という意味でだが。

それにしても、ほとんど笑わないヴァーユ先輩のことだから余計に。
笑顔が、まぶしく見える。

「では、また後で」
「……あぁ！」

男勝りな口調だが……。

ヴァーユ先輩は、どうみても乙女プラグイン実装している気がする。

## ０６６　授業後（後書き）

ありがとうございました。

今日はプチオフ会してきたので疲れました
寝かせてください。

## ０６７　都市部（前書き）

ちょっと遅れました、すみません（　；∀；）

よろしくお願いします……。

# ０６７　都市部

今日最後の授業も終わり、俺は先輩たちが待っているであろう食堂へと向かった。
この学園には。食堂が４つある。
正直言ってそんなにいらないと思う。この学園に生徒は３００人しかいないのに、そもそもそこまで食堂の座席も何も必要ないのだ。まあ、一つは職員用、と言うのもあるのだが。それにしても大きすぎる。
何がしたいのか、さっぱり分からないが、その問題を考えるのはこの後でもかまわないだろう。

「あ、きたきた」

と、ほかの生徒と妙な距離を保っている二人組に視線を向ける。
なんだろう、本当にこの人たち異彩を放ってるな。

「授業お疲れさまだな」
「ありがとうございます……っと」

ヴァーユ先輩とアイライーリス先輩が優雅に紅茶を飲み終わり、立ち上がる。
銀と赤、相反しているようで相反していない二人の美少女。
そりゃあ、美しさにあてられて微妙な距離を保ちたくなるのは当たり前か。
それにしても、この二人はやはり美しい。
どうやったらこんな姿になるのか分からないが、とにかく女神に

祝福されていることは理解できた。

「で、今日はどこに行くんですか？」

「うーん、なんだかんだ言って都市部に行く行くいってなにも決めてないの」

「……アイラはシルバ君とデートがしたかっただけだものな」

何を！？　とアイライーリス先輩は勢いよくヴァーユ先輩の方を振り向く。

しかし、ヴァーユ先輩は素知らぬ顔でそれをスルーし、俺の方を向いた。

「まあ、逢い引きがしたかったのは私も一緒だ」

「ああー、はい」

そこで照れられると、どう反応すればいいのか分からないのが現実である。

俺にどうしろと言うのだ。

「あれですよ。俺はどっちか片方とか選べって言われても選びませんからね」

「わかっている。まだ時間はあるし、だからこそ時間を与えているんじゃないか」

何を言っているのかさっぱりわからないが、まあ気にすることはないだろう。

なんだかんだいって、俺はそんなに頭のいい方ではないと自分でも自覚しているんだから。

「ところで、私の頼んでいる魔剣はいつ作ってくれるのだ？」

「それなんですけど、今作ったらまた騒ぎが出るので、ていうか倍増しかねないので、もう少し時間を置こうかなって思ってます」
「まあ、それが先決だねー」

むぅ、納得がいかない。
そんなことを言いそうな顔をしたヴァーユ先輩は、俺を見つめて少しだけふてくされて見せた。
……表情があるヴァーユ先輩の方がきれいだと、本気で思う。

なんだこの可愛さは。

「じゃ、とりあえず出発、しよ？」

アイライーリス先輩を戦闘に、俺とヴァーユ先輩が後ろに続く。
そして、この三人が動くと、人のクレーターがそれに合わせて広がった。

「ここが都市部ですか」
「そうだな。シルバ君は、ここにきたりとかしないのか？」
「必要なものは全て学園周辺で手に入れていますから」

都市部は、……思った以上に都市部であった。
高層ビル群の周りを覆うように、低い建物が並んでいる。
そんな場所を俺は、感嘆の意を込めて眺めていると、ヴァーユ先

輩は珍しいものを見るような顔で俺を見つめる。

「……どうしたんです？」

「い、いや」

あからさまに怪しい。

しかし俺は怪しむそぶりを見せず、彼女の顔を見つめ返す。

「ど、どうしたんだ？　何かついているか？」

「いや、綺麗だなって思っただけです」

ぼふっ。顔を沸騰させるかのごとく顔を急激にヴァーユ先輩は赤らめ、恐ろしい勢いで俺から離れる。

いや、そこまで反応するとは思わんだ。

やあり乙女プラグインでも入っているのか、この先輩は。

「ねえ、後ろの方で何をやっているの？」

アイライーリス先輩が、純粋な疑問の表情を浮かべて平然としている俺と。

顔を真っ赤にした事を悟られないようにしているヴァーユ先輩をみた。

「いや、何もしていませんよ？」

「むぅ、気になるなぁ」

気にされても困る。

ヴァーユ先輩は死んでもしゃべらなそうだし、俺も死んでも言わない。

こんな恥ずかしいこと言えるか。

「へぇー。……ねぇ、シルバ君はこの3週間の授業、どうだった？」

とってつけたように話題を変えられ、俺は少しだけ考えた。

そして、鍛冶関係の授業のことを彼女たちに話す。

「にゃ！？　もう実技ウケなくてもいいって言われたの？」

「そうなんですよねー。何もしていないんですけどねー本当に」

まあ、先生に俺が魔剣を創ったこと、知られたのが大まかな原因じゃないかなと思っている。

そもそも、普通の鍛冶と違って【魔剣鍛冶】というものは道具をほぼ必要としない。

だから、先生は俺に一つの課題を出したのだ。

【普通の剣を一本つくれ】

と。

そして、それを一本、特に苦労もせずに感性に任せて完成させてしまった俺を見て、「あ、教えなくてもいいわ」と判断したらしい。

で、俺は単位をすでに入手しているというわけ。

「それが、いつなの？」

「明日の最後の授業ですね、まあ2コマ続きだったわけですが」

「そっか、ならその時間は私たちと一緒に授業を受けよう。2年の課程だが、シルバ君なら1年でも大丈夫だろう」

……お。

なかなか、いいチャンスをもらった気がする。

## ０６７　都市部（後書き）

来週は頑張ります、お願いします！

## ０６８　自問自答（前書き）

今週も頑張ります

よろしくお願いします！

## ０６８　自問自答

「うん、今日も充実した一日だった」

今はすでに夜だ。そして俺は自分のベッドの上に寝転がっている。

頭の中で、先輩二人とのひと時を思い出しては、自然と顔が綻ぶ。

「……」

そこで思うのだ。

自分が二人の先輩に好意を持たれていながら、自分では何もできないのかと。

未だ、二人の先輩に愛情と言ったような明確な気持ちは備わっていない。

ただ、二人ともこちらが見とれてしまうほど綺麗な人だと分かった、だけである。

「甲斐性、ないんだよなこれが」

甲斐性、というよりは優柔不満なのか。

それとも、自分の未来に目を背けているのか。

鍛冶の道に、女は必要ないとも思っているのかもしれない。

……しかし、俺の目指す場所は魔剣鍛冶師。

汗だくになることはないだろうし、別に女遊びしても構わないような。

……うむ、しかしハニートラップというのがあるのか、大丈夫なんだろうか。

……精神的なことに干渉できる魔剣などは創れないのだろうか。
今度、試してみる価値はありそうだ。

たとえば、相手の思ったことが漠然とわかるような短剣、なども便利そうなんだが。

「あの、シルバさんいらっしゃいますか？」
「ああ、エスペランサ」

躊躇気味のノックが聞こえ、俺はドアをあけた。
目の前にいるのは、やはりエスペランサだ。

頬を少しだけ上気させて、心なしか顔も赤い。
何かいいことがあったんだろうか、それとも風呂上りか。
これは後者だな。

「何かいいことでもあったのか？」
「いえ、少し……好きな方とお近づきになっただけですよー」

実に幸せそうな顔だな、おい。
好きとかって、やっぱりはっきりしていたほうがいいんだろうか。
うーん、そこら辺はエスペランサに聞くべき話ではない、か。

「そういえば、シルバさんは今日、ヴァーユウリンス・ヴァン・フロガフェザリアス先輩とアイライーリス・ホムラ・アマテノヴァル先輩と一緒にいたんですよね？　デートはどうだったんですか？」

おいおいおい、ヴァーユウリンス・ヴァン・フロガフェザリアス先輩とアイライーリス・ホムラ・アマテノヴァル先輩って。
略して言わないのか、エスペランサよ。

俺は返答に困り、適当に流すが。
エスペランサは、どうも簡単には下がってくれないようである。
「ヴァーユウリンス・ヴァン・フロガフェザリアス先輩もアイライーリス・ホムラ・アマテノヴァル先輩も、シルバさんのことを好いておられるのですよね？」
「た、多分な？」
二回繰り返されただけで、少し疲れてきた。
それにしても、ほかの女子生徒の名前を呼ぶとき、エスペランサの顔はロボットみたいに固まるんだな。
同時に、その時だけ声も淡々としたものになっている。
何かのスイッチが入った？
「この世界は、一人の雄に多くの雌が囲みこむ。そんなことは許されていますので」
「お、おおう」
「龍眼族（レザール）にはそのような文化がないのですかね？　しかし、龍眼族（レザール）であっても、私たちは歓迎しますよ？」
んん？
今、何を言ったのかわからなかった。
しかし、俺が彼女に訊く前に。
エスペランサは、俺の部屋から出ていっていた。
「なんだったんだ」

俺は、目の前にいる誰かに語り掛けるようにして、呟いた。
しかし、その疑問に答えてくれる人は、いない。

「へえ、そんなことがあったのかー！」

彼の開口一言に、俺は頭を抱えたくなった。
完全に、相談する人を間違えたのかもしれない。同じ転生者だから真摯に考えてくれると楽観的に考えていた俺が馬鹿だったようだ。

「そういえば、お前はリンセルさんもアンセルさんも手に入れたんだっけか、ランよ」
「そうだねー。彼女たちは俺を俺として見ていなかったりとかするけど」

ランは、幸せいっぱいです、とでも言いそうな顔で笑って見せた。
少し腹が立ったが気にしないでおこう。

「1年の中で一番かわいい二人を手に入れた感想は？」
「えー、最高だな！」

こいつ、腹が立つな。
こほん、とランは少し気まずそうに咳払いをして話を続ける。

「それで、フロガフェザリアス先輩とアマテノヴァ先輩だっけ？
俺は話をしたことがないから客観的な意見しか言えないが、普通に考えたら高嶺の花っていうやつだろう？」
「ああ、普通なら」

今は昼休み。
食堂であり、俺はヴァーユ先輩とアイラ先輩の、ランはリンセルさんとアンセルさんの誘いを断って一緒に食べている。

ランも美少女二人の板挟みというのが疲れているらしく、意気揚々と俺の誘いに乗ったわけなんだが、まさかのろけ話を聞かされるとは思っていなかった。

「少しだけ、本当に思ったんだが。あの二人、何か心の中に闇を抱えているような感じがするんだよな」
「そうなのか？」
「なんか、死んだ元恋人的な人がいたんだとよ」

俺は彼の話を聞く。
ややこしそうな話で途中から聞くのは放置したが、一応聞いておく。

簡単に言えば、ランによく似た男のことが、もともとは二人が好きだった、と。

その男は殺されてアンセルさんはそれを忘れられない、と。

はいはい、なるほどわからない。

「まあ、なるようになるだろ。シルバも頑張れよ」

「ハーレム……か」

「そんな深く考えなくてもいいんじゃないか？　一人を切って一人だけを幸せにするより、二人とも幸せにしたほうがいいとはおもうが」

……こいつ、本当に元日本人か？

# 068　自問自答（後書き）

ありがとうございました！

## ０６９　片鱗（前書き）

よろしくお願いします。

# 069　片鱗

「どうしたんだ。この数日、シルバ君がずっと何かを考えているような気がするんだが、アイラは何か知らないか？」

ヴァーちゃんが、私にそう聞いたのは今さっきのこと。

彼女は私が、シルバ君に想いを寄せているなんて知らないから。

私がヴァーちゃんの見えないところでシルバ君にアピールしているところを知らない。

「いったいどうしたんだろう……」

「へえ、ヴァーちゃんが男の人の心配をするなんて、どうしたのかな？」

今まで、男に言い寄られては一蹴して心を折ってきたヴァーちゃんが、龍眼族（レザール）の少年に心配するなんて、本当に珍しいこと。

まあ、そのシルバ君が、確かに魅力的だって言うことは私だって分かっているんだけれども……。

魔剣鍛冶師……かぁ。

ヴァーちゃんには悪いけど私も優秀な遺伝子は欲しいからねー。

無理に二つの女を手に入れようとは、シルバ君も考えていないだろうし……。

「先輩」

「にゃっ！？」

後ろから不意に向けられた声に、私は思わず変な声を出してしまう。

振り向くと何のことなく、いたのはシルバ君だった。

「あれ？　何でここにいるのー？」

「先輩たちが言ったんじゃないのです？　この授業に飛び入りで参加してもいいと言ったのは」

あ。

確かに、ヴァーちゃんは来てもいいっていったけど。

まさか本当にくるとは、彼のフットワークの軽さが一目で分かる。

「ああ、決闘の実践と言うわけですか」

「そうだな。命に危険が及ぶ可能性もあるものだが」

「へぇ、これがフロガフェザリアス嬢ご贔屓の龍眼族（レザール）か」

……あちゃー。

変な人が、やっぱり絡みに行くのね。

今、シルバ君に絡んでいる人は、名前は覚えていないけど……。

ヴァーちゃんのことが好きで、ポイントを稼ごうとしているのは分かる。

十中八九、この後……。

「おい、そこの1年生。俺と勝負しろ」

凄く小物感……何でここまで。

完全に噛ませ犬なんだけど、本人は必死で何も見えていない。

ここで負けたらどうなるか、なんて。

そうやって考えたら、バラヌのほうが幾分か頭は良さそうに見える。

……そんなに違いはないんだけれど。

「シルバ、ここは無理にやる必要はないんだぞ？」

「いえ、やりますよ」

シルバ君も血の気が多い性格みたいだね。

対して、対戦相手になる男は余裕の笑みを浮かべていたけど、どうなんだろう。

魔剣、その後も創ったのかな。

ヴァーちゃんに売る分は、まだ構想中っていっていたけど。

自分の分は、創っているのかもしれないね。

「……1年のくせに、いい気になりやがって」

私は、男から漏れ出た言葉を、聞き逃さなかった。

対するシルバ君は。

その言葉が聞こえたのかどうかは確定していないけれど。

笑っていた。

「醒眼族（ウェイカー）、アイギス・ライゼィス。あと、これも教えてやろう。……【狂気の凶器（バーサーカー）】」

異名……。
今のシルバ君には、まだ縁のない話。
ある程度の技量、それも秀でた技量を認められた人が、政府から支給されることが多い。

それをもらっているということは、かなり強い、ということになるんだけど……。
シルバ君は、負けるはずなんてないよね？

「……龍眼族（レザール）。シルバ・エクアトゥール」
「試合……開始！」

シルバ君は、開始の合図とともに前に飛び出した。
武器はなし、魔法による武器創造もなく、逆に相手にも魔法を使わせない。
しかし、相手が醒眼族（ウェイカー）であることから、肉弾戦は相手も強い。

シルバ君はどう攻めるんだろう……。

「ふっ……！」

シルバ君の目が、鋭くなった……？

彼の目は今、両目が見えており。
龍眼族（レザール）特有の幾何学的な模様は、紅蓮の光を宿していた。

そう、龍の眼。写真やデータでしか見たことのない、龍（ドラゴン）の眼が、そこにはあった。

すべての生物を、怯えさせるような眼孔は。

完全に、アイギス・ライゼィスの空気を呑み込んでいた。
むしろ、その目を見たすべての人を、彼は呑み込んでいる。
私や、ヴァーちゃんすら。

全て。

「【地】属性中級遠距離攻撃魔法、《黔弾（クロム・バレット）》」

魔法が。
恐怖に打ち勝てなかった異名持ちの放った魔法は、シルバ君に向けたはずが、明後日の場所へと放たれ。

……私とヴァーちゃんに向かって、超高速で向かってくる。

「……なん……！」

凶弾と、私たちの間に滑り込んできたのはシルバ君だ。
その姿はすでに人とは思えないほど変容している。

肌からは鱗は目立ち。
後ろには鋭い尻尾。
そして、その手足は龍の物とそう変わらない。

「シルバ君……？」

シルバ君だった半龍は、魔法で生成された凶弾を握りつぶし、魔法を停止させる。

そして何事もなかったかのように、相手に……アイギス・ライゼィスに突進すると、そのまま腹を殴って吹き飛ばす。

ごろごろと１０メートル以上転がされた彼に対し、半龍は空気を蹴るような動作をした。

一瞬の静寂、その後暴風が渦となって牙をむく。

# ０７０　龍化（前書き）

少々遅れてしまい申し訳ありませんでした

# 070　龍化

風は、竜巻となって相手に襲いかかった。

ほかの人が、顔を背けて恐怖に顔を歪ませる中、私とヴァーちゃんはしっかりと眼をそちらに向けていた。

不思議と、恐怖心はなかった。

幾ら他の人に本気で向かっていっても、私たちを守ってくれる、と信じていたからかもしれない。

「……【狂気の凶器（バーサーカー）】というのは、どこにいったんですかね？」

シルバ君は、笑っていた。

あざけっていた。

偉そうに名乗った先輩に対して、軽蔑の笑みを浮かべていた。

「う、うるさい！」

相手は、完全に怯えきっていた。

間違って私たちに撃ってしまった、ということもあるだろうけど。

そもそも、それを【龍化】しているとは言え素手で受け止めて逆方向に打ち返したシルバ君に恐怖している。

確実に、勝負しようとしているけどこれはどうしようもないんだと思う。

シルバ君が、強すぎる。

なんて言ったって、今シルバ君は……。

シルバ君は、半龍なんだから……！

「畜生……！」

ライゼィスは、歯ぎしりをしながらシルバ君を見つめている。
当たり前だ。後輩の、バカにしていたはずの生徒にミスを庇って好きな人を守られ、しかもそれは攻撃をそらすのではなくそのまま１８０度向きを変えたのだから。

そんなこと、この学園で出来るような人はまだ１人もいない。
そもそも、素手ではね変えそうだなんてぜんぜんだれも思おうとしない。

「畜生畜生畜生！」

あ、暴走した。
初級魔法を、見境なく３６０度に撃ち出すアイギス・ライゼィス。

シルバ君は、人の被害が及ばない物を全て無視して、私たち観客への危害は全て取り払っている。
強すぎる。
なんで、ここまでシルバ君は人を守れる？

それが、シルバ君の強さだと……？

「……魔剣は、何かを護りたい、護るという力の権化だ。……それが俺に与えられた力なら、俺は神に命だって捧げてやる！」

シルバ君の周りに、金色の竜巻が。
それは、シルバ君を取り囲んで、さらに完全な半龍へと変貌させていく。

「【龍化（ドラコフォーゼ）】」

こうして、シルバ君は。
龍人になった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

これが、俺の手に入れた力か。
ふむ、やはり力というのは、誰かを護るために使わないと意味がない。
ただ暴力を振るうだけなら、誰もをしのぐ強さなんて必要ない。
そこらへんの人をたたけるくらいの強さがあれば、それでいい。

「畜生畜生畜生！」

さっきから、この先輩（おとこ）はそれしかつぶやいていないような気がする。
呪詛にもにた、その中身のない言葉は、どのくらいの力を持つのか。

俺には分からないし、そもそも俺は手加減をする理由がない。
ヴァーユ先輩に手を出した。
暴発とは言え、明らかに傷物に出来るほどの威力だったのだ、あの魔法は。

幾ら醒眼族（ウェイカー）の魔法が不得手だとしても、魔法は魔法で。
攻撃魔法は、攻撃魔法に他ならない。

俺は、【刹那≠無限（ピリオド・エターナル）】を抜いて、後ろに円を描くようにして空間の裂け目を創る。
これで、俺よりも後ろに行った魔法は、亜空間を通ってライゼィス先輩の背後から、彼自身へと牙を剥く。

自分の放った魔法で自身を滅ぼせ。

## ０７１　勝者（前書き）

リハビリ目的で変則的ながら、投稿させていただきます。

# 071　勝者

俺は、目の前で地面にうずくまったライゼィス先輩から目をそらし、眼を閉じて先輩方の場所へ引き返した。
けが人はライゼィス先輩以外、いないだろう。

ちなみに、【龍化（ドラコフォーゼ）】現象だったが、気を落ち着かせたら自然と元の姿に戻った。
尻尾や爪がどこに飛んでいったかは知らないが、霧散したような気がする。
さすがファンタジー世界だ。

「……」

おっと、よく見たら先輩方の視線が妙に痛いような気がするな。
ヴァーユ先輩とアイライーリス先輩は普通だったけれど、ほかの線お会いが微妙な……怒り？

特に男子の先輩方は、俺を刺し殺しそうな顔でにらみつけている。
どうやら、俺がボコボコに叩き潰されるところを笑いに来たらしいが、俺が圧勝してしまったために怒りを募らせているのだろう。

俺は【刹那≠無限（ピリオド・エターナル）】を後ろ手に持ったまま、二人の先輩の前まで歩く。
ちなみに、女子生徒からの視線は……ああ、いろいろな感情が入り交じりすぎて判断しきれない。
羨望、あこがれ、恐怖……。

「怪我はないのか？」

「それをいうのなら、先輩方にお聞きしたいところです」

俺がほぼ表情を変えないまま伝えると、アイライーリス先輩は元気に、ヴァーユ先輩は優雅に一回転して見せてくれる。

うむ、怪我はないか、よかった。

それにしても、回ってくれるとは思わなかった。

綺麗だな、本当に。

男子女子関係なくかなりの人気を誇る、というのも中々理解できる。

そして、よく二人セットで扱われているのも、理解……出来ているのか？

「フロガフェザリアス様、アマテノヴァル様。何故この一年に肩入れをするのか、俺には理解できません」

「僕も同意見です。アイギス・ライゼィスに圧勝したとは言え、それほど特異な能力を持っているとは」

愚痴愚痴と文句を言い出した男子生徒に対し、二人の先輩がゴミを見るような眼で彼らを見つめていた。

ヴァーユ先輩はわずかに唇を動かして、「さっきの龍化現象をどんな目で見ていたんだ」とつぶやいているし、アイライーリス先輩は俺の創った魔剣、【守護者の炎（カーディカナル・ブレイズ）】を今にも抜こうとカチリと音を立てさせている。

俺は損な二人の先輩を手で制止し、文句を言い出した先輩方の前に立つ。

「なんだよ、やろうってのか？」

「またまた噛ませ犬のようなせりふを……。文句を言うなら俺に対して言ってください。先輩たちは関係ないのでしょうし」

憎悪の念を向けられるのは俺だけでいい、なんてかっこいいことは言えないが。

今回の火種は俺だと言うことくらいはわかっている。

だからこそ、少しくらいは俺に文句が来てもいいはずだ。

「なんだと……？」

「俺は先輩方よりも頭がいいとか、絶対に思っていないので。決闘（ジツリョク）でしか物事を解決する術をもちませんが、それでもいいというのなら」

といいながら、俺は未だピクリとも動かず地面に身体をくっつけたままのライゼィス先輩を見つめる。

殺してはいないはずだが、いったいどうだろう。

最後のとどめも、やけになって発射した魔法を自分に命中させて自滅しただけだろうし。

「それが複数人になっても、勝てると？」

「……右も左もわからないような1年生に、2年生のエリート先輩が複数人で戦いを挑む、というのはいささか滑稽な話ではありますが、どうぞ」

決して、挑発しているつもりではないことを理解して欲しかったり、して欲しくなかったりするが気にして欲しくない。

少し、馬鹿馬鹿しく感じてしまっただけなのだ。

俺がここにいる意味は、先輩方に授業に参加できるレベルだと言われたからで。

彼らとケンカするためにきたのではなければ、俺は魔法という前世にはなかった技術を、もっと知りたくてきたのだ。

万が一、元の世界に戻れるとなったとき、いつでも戻れるように。それが不可能であっても、前世のように戦死なんてもううんざりだ。

誰よりも、強くなる。

## ０７１　勝者（後書き）

連載当初のように、不定期（ただし駆け足、遅くても3日に1回）にしようかどうか、迷ってます。

早く物語を進ませたい（確信）

## ０７２　中庭（前書き）

更新ペースが少し変わりました。

これからは、前回の更新より7日以内に更新することにします。

不定期ですが、これで結構はやく物語を進めることができるでしょう、

これからもよろしくお願いいたします。

# 072　中庭

結局の話。

先輩たちは、さすがに複数人で俺を相手どって負けるときのリスクを考えたらしく、俺に試合を挑んでは来なかった。

ヴァーユウリンス・ヴァン・フロガフェザリアス先輩とアイライーリス・ホムラ・アマテノヴァル先輩っていうのはそこまでして気に入られたいものなのか。

確かに、二人いると目の保養になること間違いなしのものではあるのだが、そこまで……という感じだろう。

少しだけ、ほんの少しだけだが色々と問題があるようだ。

差し迫った彼らの問題というのは、「今複数人で入ったら、麗しき二人が加勢してくるかもしれない」というものだったと後に藍雷―リス先輩には聞いたのだが。

というわけで今は放課後。中庭に俺と先輩二人はいた。

「この学園の中庭って、男子いないんですね」

「わざわざ花を見る人なんて、か、カップルとかくらいなんじゃない？」

アイライーリス先輩は、そんな事をいいながら「カップル」という言葉をするときに少し緊張したような感じになる。

ふむ、意識のしすぎだろう。幸いなことに、ヴァーユ先輩に気づかれはしなかったようだ。

「今日は、何か予定でも？」

「私は特にないが、どうしたんだ？」

「先輩って、部活などには参加なされていないのですね」

ヴァーユ先輩は、困ったようにアイライーリス先輩を見つめながら俺に説明をする。

「いや、自慢ではないが勧誘はされたが……どれも続く気がしなかったし、第一私は運動がそこまで得意ではないのだ」

「ふむー」

「マネージャーにも勧誘は嫌というほど来たんだけど、大体がヴァーちゃんに対する下心だらけだったからね、私が追い払ったの」

正直言って、ヴァーユ先輩も美しいがアイライーリス先輩も相当である。

アイライーリス先輩、自分の美しさを少しくらいは自覚してください。ていうか、元気そうな要素が消えると、なぜか官能的になっているんですが。

「んっ？」

そんなことを考えながらアイライーリス先輩の方を見ていると、吐息交じりに振り向かれた。

いうことなしの美少女である。

「どーしたの？　こっちの方を向いてー？」

にやっ、と小悪魔的な笑みを浮かべながらこちらに聞いてくる先輩。

ヴァーユ先輩は、明後日の方向を向いて何かに気を取られており、こちらに気が付いていないようだ。

と思ったら、真っ赤な顔でこちらを振り向いた。

どうやら、視線の先には初々しい恋人のペアがいたらしい。

いや、たしかに何かもどかしい気もするが、そこまで気にすることではないような気もする。

「ヴァーちゃんは、ああいう恋がしたいんだぁ？」

「……うむ、できれば、……うぅー……」

こういう時は、鈍感な人を演じて何も聞かなかったことにするんだ。そう心の中でささやかれたような気がする。

まあ、そんなことをしなくても肝心の部分は聞こえなかった。問題はない。

こうやって、先輩たちといるが、途中で俺と一緒に居られなくなったとしても、今は問題ない。

まだ、俺は二人への感情をはっきりさせていない。

それは、自分がはっきりさせることを拒んでいるのかどうかはわからない。

しかし、俺は【龍化（ドラコフォーゼ）】するくらいに、彼女たちを護ってやりたいと思った。ただそれだけのことだ。

他に何もない、今はそれだけでいい。

そこで問題なのは、先輩方が俺と一緒にいることで、先輩方が迷惑をこうむること。

やはり、文句を言わせないためには強くならないといけないのだ。

前世には、「弱肉強食」という言葉があった。

弱い生き物は生態系に基づいて、上の強者に食われる。

「もう少し……だな」
「「ん？」」

俺は、同じタイミングで一斉に振り返った先輩方二人に「なんでもないですよ」と伝えながらも目の前にある石碑に、目をやった。

見たことのない言語だったし、俺は勿論読むことはできないが。

その文章らしきものは、どうも……。

龍と人の、関係性について書いているような感じがした。

## ０７３　意識不明（前書き）

本日二回目の更新です

執筆速度が徐々に上がっている気がしますね、醒眼族と合わせたら

今日で3回目の更新ですし。

追記：こうしんするやつまちがえたぁぁぁぁ！！！

# ０７３　意識不明

ランが意識を失った。
そう聞いたのは、先輩方と別れて寮に帰ってからだった。

「原因は？」
「わからないよ……」

リンナアイデル・パン・リーフさんお久しぶり。
いやー、いつの間にかランがリンセルさんとアンセルさんを彼女にしていて、すっかりリンさんの影が薄くなったような。
最初から薄いのかそれともどうなのか。

「今は安静にしているけれど、まだ目は覚まさないみたいなの」
「まあ、最近いろいろとあったんだろう？」

リンさん、悔しそうにうなずく。
どうやら、リンさんもランのことが好きだったらしい。
本当に、常に罪のある男だな、この人は。

え、俺が人のこと言えない？　いやそんなはずはない。
俺はまだ何も出来ていないし、そもそもそんなに影響力を持っているわけではない。
力がたりないからな、どう考えても。

「少しだけ、ここを任せてもいいかな？」
「いいんだが、リンセルさんとアンセルさんはどこに行ったんだ？」

何か用事があるんだって、とリンさんは首を傾げる。

その細長い、知勉族（エリシュ）特有の耳がひくひくと不安げに揺れているあたり、いやな予感がすると言うことか。

確かに、レイカー姉妹はかなりのお嬢様だって聞くし。

そういう点でも、何か問題があるんだろうか。

「たしか、シルバ君は魔剣が創れるんだっけ」

「いや、まだ……」

さすがに、2本しか完成させてないなんて言えない。

魔剣は、普通の鍛冶師は一生に1本出来ればいい方って言われているんだからな。

でも、そろそろヴァーユ先輩の分も創らないといけないし、俺も自分の魔剣が欲しくなってきたところである。

魔剣鎌【刹那（ピリオド・エターナル）≠無限】も、あれは戦闘用の魔剣で人を護ると言うよりは、人を護る手段を増やすというほうが正しい活用方法だろう。

力の圧倒的なごり押しではなく、あくまでも俺自身が考えて動かなければならないのだ。

誰かを護る……か。今の俺は誰を護ればいいんだろう？　何を護っていけばいいんだろうか。

「ま、今はまだ頼まないけど……魔剣以外に、創れるのかな？」

「わからないが、おそらく」

俺の、ヘーハイスからもらった力は【魔武具創造（マギア・クリエイト）】だ。

おそらく、魔剣のみならずいろいろな物が創れるんだろう。

そんな力を、俺がどんな場所で使っていくのか、それがかわれば俺の未来も変わる、か。

「うー、ちょっとだけ仮眠とってくるね」
「ああ」

とんとん、と階段を上がっていく音。
どうやら、リンさんが2階に上っていったようだ。

俺は、目の前で目をつぶり、安らかな寝息を立てているランに目を向け、少しだけため息をついた。
俺も、ヴァーユ先輩とアイライーリス先輩の板挟みという状態になったら、こんな感じになってしまうのかと思って少しだけぞくっとした。

と、思ったらノックの音。
振り返ると、そこにはエスペランサの姿。

いつもよりも、獣耳も垂れているような気がするしなんだかやつれているような印象を受ける。
どこか、想い人とうまく行っていなかったりするんだろうか、心配だ。

まさか、想い人がランだってことは……ないわなぁ。

「シルバさん、最近はどうですか？」
「ん？」
「ほら、先輩に囲まれて幸せですよねって」

おおう、さすがにエスペランサの耳にも入っていたか。
俺は微妙な顔をしながら、頷いて見せた。

「いいですよね、シルバさんは。……うぅー」

「そのうなり声、流行ってるのか？」

さっき、リンさんもしていたような気がするが。

……そうか、美少女特有のものなのか。納得だ。

きっと素で出てしまうに違いない。俺の考えに間違いなどないはず。

「最近、シルバさんはうれしそう」

私なんて、必要ないですよねとややネガティブ思考になっているエスペランサの頭を無意識に撫でつけながら、俺はしばし考えた。

はて、ここまできたのはいったい誰のおかげか。

「いや、エスペランサは必要だよ。……誰の元に向かっていこうとも、出来るだけ俺のそばにいて欲しい」

「……そんなことといったって、私に残されている時間なんてもう……」

エスペランサは、何を言っているんだ？

俺は訳が分からなくて、彼女の肩に手をやったが、彼女は何も教えてくれなかった。

「ごめんね、本当にごめんね」

「何を、謝っているんだ？」

エスペランサが、一気に情緒不安定になった気がした。

今までの、優しく俺を見つめてくれるような感じは全くしない。

ただ、何かを耐えるように、泣きそうな、そんな顔をしていた。

彼女が何に苦しんでいるのか、無知な俺にはわからない。

でも、なんだか。

俺と彼女が一緒にいられる時間というのが、だんだんなくなっていくような感じがした。
時間が、本当にないのか……？

理由はわからない、しかし。
どうしても、不安を覚えてしまう。

「そういえば、俺はエスペランサの事を何もわかっていないんだけど……」
「……こんど、全部教えますから……」

そういって、エスペランサは部屋から出ていく。
残ったのは、意識の戻らないランと、立ち尽くした俺と。

……何とも言えない、もやもやとした気持ちだけだった。

# ０７３　意識不明（後書き）

ありがとうございます！

# ０７４　廃校舎（前書き）

お久しぶりです。
復活。

# ０７４　廃校舎

「起きないね……」
「ああ、起きないな」

リンさん、一日中そばにいてもランは起きず。
リンセルさんとアンセルさん、途中から戻ってきて治癒系の魔法をかけるも効果無し。

時間経過を待つことにして、ランは安静にする事にした。

「で、どうする？　できれば私が休みたいけど」
「……リンセルさんも、アンセルさんも学園に行っててていいよ」
「え？」

リンさん、こちゃあちょっと二人にヘイトをためすぎ、だな。
たしかに、ランとリンさんが一番一緒にいる時間が長いのに、リンさんからしてみれば横取りされたとか思っていてもおかしくはない、のか？

「私一人で充分」
「……ちょっと、なに言って……！」

烈火のごとく激昇しかけたリンセルさんを、手で制止したのは双子の姉であるアンセルさんだった。
アンセルさんはリンさんに心の奥から冷え込むような視線を浴びせながら、リンセルさんの方をみる。

「……ここは彼女に任せて、私たちは行こう」

「でも、お姉ちゃん……」
「いいから。……気にしないで、行こう」
そのまま、アンセルさんは一度も振り向かないまま、リンセルさんのてをひっぱって学園に行ってしまった。
ずるずると引きずられるリンセルさん、リンさんを睨みつけながらもなにも言わない。
リンさん、二人を見ることなくランの手を握る。
なるほど、これが修羅場か。
俺は妙に納得しかけながらも、リンさんにランを任せて部屋から出ていった。

「……はぁ」
「どうしたのだ？　ため息なんかついて」
「……そりゃあ、ため息を付くことだってありますよ」
って、うわぁと俺は隣を見つめた。
もちろん、そこにいるのはいつもどおり堂々とした、美しい顔のヴァーユ先輩だった。

そもそも、リンセルさんとアンセルさんのそばに俺はいなくていいのか、という疑問が残るんだよな。
……あの二人、結構危なっかしいということは分かっているのだけれど。
俺が、それに干渉していいのかどうか、というものだな。

「ふむ。まあ、今日はそれでもいいんじゃないか？　……しかし、その双子、名前はなんて言うんだ？」
「リンセル・フレイヤ・レイカーさんとアンセル・フレイヤ・レイカーさんですけど」
「なんだって！？」
うぅ……大きな声を出してしまった……と反省したように俯いたヴァーユ先輩は、今までの凛々しさが一気に失われてただただ可愛かった。
……へえ、こんな表情もできるのか。
恥じらう姿は、……うむ、そそられるな。
「……はなす場所を変えようか」
「……あ、はい」
そういって、ヴァーユ先輩は俺の手をかなり自然な流れで握ってきた。
……その眼は、心なしか潤んでいるようにも見えて、いろいろとだめだ。
官能的すぎていきるのがつらくなってくる。
「へえ、こんなところに空き校舎があったんですね」
「そうだな、周りは森だし、近づく人も少ないが少し隠れ家的な雰囲気があっていいだろう？」

なにをしてもいいような感じがしてくるのは俺だけか。
……いや、さすがにそんなことはしないが。

いや、するのか？
知らない。

「……って、なんでここにベッドがあるんですか？」
「保健室だったからじゃないのか？」

いや、そういう意味ではなく、俺をなんで保健室に呼んできたんだこの先輩は！
……まあ、先輩にそういう気があると断定できれば、俺から仕掛けていくけれどな。

俺はヴァーユ先輩の、未だ離そうとしない手を見つめる。
……見つめていることに気づいても、離そうとしないあたりこれは当たりか？
それは俺の希望的観測であって、べつにそうでなくてもかまわないんだ……といっておけばいいかな？

「レイカー家の話をしようか？」
「そうですね」

俺は、そういいながら、ベッドに座ったヴァーユ先輩の右隣に座る。
……手は繋がれたままだから、こちらにしか座ることができなかった。
「……シルバ、いやがらないんだな？」
「嫌がる理由が見あたりませんから」

そうか……と、ヴァーユ先輩は笑った。
その笑顔は、なぜか、どこか寂しげだった。

# 075　感情制御（前書き）

えたってません！

# 075　感情制御

「そういうことなんですか……」
「まあ、私たちとはいろいろな意味で格の違う人なんだ。……本当に」
ヴァーユ先輩が放心したようにうなずき、俺に向き直る。
ちなみに手は握られたままだ。手は離したくないらしい。
俺は先輩から聞いた話を頭のなかで反芻しながら考えて、自分がこれからどうすればいいのか考えた。
正直な話、今すぐにでもリンセルさんとアンセルさんのところに言った方がいいんだろう。
「うぅー。しかしなぁ」
「でも、ヴァーユ先輩の地位も結構なものだとは聞いていますけど」
「そんなことはないぞ？　……私の家は、成金なだけだからな」
ヴァーユ先輩は少しだけ寂しそうな、悔しそうなそんな顔で笑ってみせると、
俺にもたれ掛かって、少しだけ上目遣い。
「私は、やっぱり魅力がないのか……？」
「そんなわけないじゃないですか」
理性を抑えることに今は必死になっているというのに！
と、柄にもなく心の中で俺は叫ぶと、立ち上がった。
きょとん、とするヴァーユ先輩。

俺はヴァーユ先輩に一言。

「俺は、ヴァーユ先輩のことが好きですよ」

そのとたん、ヴァーユ先輩の顔は一気に真っ赤へ。
ぱっと俺から手を離し、顔を両手で隠そうとするが、隠しキレていないのが現状。

俺はとたんに先輩がかわいらしく思えてしまって、気がつけば先輩を撫でていた。

「ふぇ……？」

真っ赤にしたまま、手の隙間からこちらを伺う先輩。
俺は愛らしくなってしまい、手を頭から首へさげて彼女を抱きしめる。

最初は少しの抵抗があったが、数秒のうちに次は先輩が俺を引き寄せる力になっていた。

「……私は、アイラに負けたくないんだ……」

「ん？」

「どうせ、シルバもアイラのことが好きなんだろう……？」

何すねてるんだろ、ヴァーユ先輩って。
俺はそんなことないですよ、と先輩に告げる。

「まだはっきりとは言えませんんが」

「うぅー」

でも、すねてるヴァーユ先輩ってかなりかわいいんだな。
いつもは冷静で正々堂々、男勝りしているから、こういう女の子っぽい場面を見るとギャップで打ちのめされそうになる。
さっきの言葉は決して嘘じゃないけれど、改めて本当に、好きになってきた気がする。

「先輩、今度どこか遊びに行きましょう」
「ん。二人で、か？」
はい、と俺が返事をすると、先輩はそっと顔を上げた。
もちろん、抱き合っている状態だから、目の前にヴァーユ先輩の顔があって。
長いまつげが、一本一本視認できるような位置。
耳を澄ませば、吐息が聞こえるような位置。

「二人で、にきまってるじゃないですか」
「……そう、だな。えへへ」
えへへって。
……こんな声も出せるのか。なるほど実に興味深い。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「……ひっ！？」

ラン君が意識不明のまま、1日がたとうとしている。
郵便物を取りに行った私……リンナアイデルは、郵便物の一つを見て息をのんだ。

『ラン・ロキアス一人でこい、さもなくば……』

脅迫状。
頭をよぎるのはそれだけだったのに、それでもランは今起きてない。

昨日、ウスギリ君の話を聞いている限り、闘技場で魔法を使いすぎた影響でぶっ倒れた、とはきいたけれど。
魔力不足だったら、数時間寝ていれば回復するはずなのに、一日経っても目を覚まさないのは、どう見ても使いすぎの域を越えているの。

この脅迫状。内容によればリンセルさんとアンセルさんを誘拐した。と書いてある。　シルバ君に相談するべきか、とも迷ったけれどシルバ君はあいにくここにはいない。
ただ、授業にも出て行ってないって聞いているから、どこかに遊びに行ったのかな？
それだったら連絡がなおさら取りづらい。

「ラン、起きてよ……」

そうつぶやくも、ランは目覚めない。
私はどうすればいいのかわからず、もう涙目になっていた。

# ０７６　意識覚醒（前書き）

ラン視点。

# 076　意識覚醒

ここは……どこだ？
わからない、わからない。
俺は意識を失ったはずだ。
どこで？　それすらも思い出せない。

俺は、今全然知らないところに来ていた。
いや、知っている。
『ネフェリティスの森』……だ。
俺がこの世界に生まれ落ち、リンに命を助けられた場所。
セリシト魔法王国、王都サウザンドライオにほど近い巨大な森。
……さっきまで、クレアシモニー学園にいたのに、なぜ？

「……とりあえず、歩くか」

わからないのなら、わかるまで、歩くまでだ。
学園は遠いが、王都まで歩くのは数時間だけで事足りる。

歩けども歩けども、森は出口を俺に指し示してはくれない。
今なら、俺は……勝てる？
何に？

ガサッ……！

後ろから音。

俺は反射的に、後ろを向く。
背後を取られると、戦いでは確実に不利になる。
しかし、俺は言葉を失った。

そこにいたのは、俺に似た容姿の人だったからだ。

顔も似ている、さらに言えば体格すら似ている。
男は、俺を見て俺に近づいてくる。

不思議と、恐怖は感じなかった。
闘わないといけない、というイメージもなかった。
ただ、俺と似ている。同類のような気がして。

「……へー。君がラン・ロキアス。いや、紀伊嵐（きいあらし）か。」
「……なぜ、俺の名前を知っている。」

声は俺よりも、少し幼そうだった。
しかし、それは何かを品定めするかのように、口調は淡々としたものだった。
俺の転生前の名前すら知っているだと？　ますます不思議だ。

謎の少年は、俺を見てくすりと笑う。
森は、音を失ったかのように沈黙している。
そして、少年は口を開いた。

「……僕は何でも知ってるさ。君が日本人だったことも、3種族混血だと言うことも。アンセルと、リンセルさんとつき合っているということも。……僕は、彼女たち、彼たちの心の中で生き続けている。」

その言葉に、思い当たる人物が一人。
アンセルの心から離れない一人の男。

「……リュー・ウルガ？」
「そう。初めまして、僕の名前は零牙寺劉（れいがでらりゅう）だ。」

「……なるほどね。……僕と同じことをしようとしているのかい？
……言っておくと、歴史が繰り返すというのなら、この後君は死ぬ。」

……はい？
いや、いきなり死ぬって言われて平然としていられないだろう。

「一応、予知は出来る。……残念ながら、すでにリンセルもアンセルも捕まっているようだね。」

言葉は淡々とした、感情の込められていないもの。
しかし、彼は両手を血が出るくらいに握りしめていた。

「また、僕を殺した輩たちのようだね。……さすが、実力さえあれば入学できる【クレアシモニー学園】だよ。……2年前に僕を殺した５０人中、４８人。」
「……俺は、そいつらに勝てるのか？」

そんな事聞きたくなかった。
俺の問いに対して、リューは首を傾げて見せる。

「五分五分、と言ったところかな。……今の君じゃあ、無理だね。……魔力と体力を著しく消費して、立つこともままならない君は、行ってもタコ殴りにされて死ぬ。……でも、それは君一人で行った場合だ。」

リューが、ニヤッと笑った。
その顔からは、何も読みとれない。

「僕が、君にこれから力を貸す。……君は、【光闇】属性を操るウ

エイカーになるんだ。」
「何だって？」
それはつまり。
あれ、どういうことだ？
「……簡単に言えば、僕が一つの人格として君と体を共有し、君のサポートをしよう。……残念ながら、君の身体を乗っ取るということは出来なさそうだが。」
残念とか言うな。
……ビビるだろうが、ヤメロ。
しかし……なぁ。
そんな都合のいい話があるのか？
「さあ、どうする？」
「いや、その言い方は信用できない。」
なぜ？　とリューは小首を傾げた。
「人格との契約を取り消せるのは、身体の持ち主だけだよ。……僕は君に対して何も出来ない。……つまり、気に入らなければ切り捨ててもいいってことだよ。」
「そんなに単純明快なことか？」
「疑り深いんだね。」
リューがため息をついた。
そして、俺に向かって……。
「【光】属性最上級遠距離攻撃魔法、《波導球（アーク・スフィア）》ッ！」

いきなり大技をぶっ放した。

「バカ野郎……！！！」

「当たっても傷一つつかないよ！」

草木をなぎ倒して、誘導されているかのように俺について来る《波導球（アーク・スフィア）》を、必死の思いで逃げる。

しかし、……当たった。

でも、攻撃はダメージを与えるどころか、俺に体力と魔力を供給していく。

「え？」

「……僕はもう死んでいるからね。……魔力は全部君のものになる。」

……なんですかそれ。

「で、どうだい？」

「……まだまだ信用できない所はいくつかあるけど……スロッがで

てこない限りは大丈夫なんだろうな？」
「スロツは僕の相棒でもあるからね。……さて、行こうか。」
リューが俺に右手を伸ばす。
その手を握った瞬間。

俺の意識は覚醒した。
起きあがると、いつもの清潔とした部屋だった。
……自宅、か。

「……うぅ。」
「ラン……っ！？」

目を腫らしたリンが、抱きついてきた。
しかし、その慌てぶりは尋常ではない。
……まさか。

「アンセルとリンセルは？」
「これ……。」

まさかだった。
……リュー、お前の言うことは合ってたんだな。

『もちろんじゃないか、ラン。今、僕は君であり、君の絶対的な味方なんだから。』

リンから差し出された紙には。

【アンセリスティア・フレイヤ・レイカーとリンセルスフィア・フレイヤ・レイカーは預かった。一人で来い。】

というメッセージと、そして。
場所が明記されていた。

「……行ってくる。」
「ダメ！　……絶対に殺される……っ！」

リンが俺を制止しようとして、起きあがる俺を押し倒した。
……まさか、これに反抗も出来ないほど体力がないとは。
でも。

「行かせてくれ……！」
「絶対に許さない。……だって、ランの代わりはいないもの。」

ぎゅっと抱きつかれ、俺の頭は一瞬フリーズしてしまう。
たしかに、リンが俺に思いを寄せていたくらいは知っていたが、なぜ今のタイミングで。

すこぶるタイミングが悪い。

「……俺の代わりは確かにいないのかもしれないな。」
「だったら！」
「でも、リンセルとアンセルの代わりもいないよ。」

リンの力が、抜けた。
その目から涙が溢れる。……泣かないでくれ。
俺のせいで、苦しまないでくれ。

「ランが死ぬのはイヤだ……。」
「死なないよ。……絶対帰ってくるからさ。」

そういって、立ち上がる。
……よろけそうになったが、突発的にリューが体力を限界まで回復させてくれた。

『さあ、行こうか？』
「……一人で来いってなぁ……。」

もう、一人じゃあないしな。
振り返って、リンに手を振る。

死亡フラグ、一応たててみようか。

「……行ってくるよ。帰ったら、また一年前みたいにデートにいこう、か？」
「ランと？　……いってらっしゃい。」

# ０７７　龍ＶＳ醒（前書き）

お久しぶりです。

# 077　龍VS醒

「シルバ！　おいシルバ！」

教室ではなく、中庭から俺は食堂に戻ろうとしていると、後ろから声が聞こえた。

振り向くと、そこにはランがいる。今日も起きないかと思ったが、起きたらしい。

少し注意して彼をみてみれば彼が今、自信に満ちていることくらいは簡単に判別できるだろう。

今までも充分強かったが、それとは比べものにならない。

「リンセルとアンセルが誘拐された」

「へえ」

「おい、何でそんなに無関心なんだよ」

何でって。

「どうせ、一人で来いって書いてるんだろう？　そして俺に魔剣を創ってほしいと」

「ぐっ」

だいたいそういうことだろうとは思っていたため、ランが顔を背けてうなり声のようなものを出しても俺は何とも思えなかった。

こんなことしている暇があったらさっさと助けにいけよ。

「いや、シルバにも来てほしい」

「なぜ？　俺は彼女たちと何の関係もないし、二人でいったときに

どうなるか分かったものじゃない」

そういった瞬間、俺の目の前には拳があった。

頬にクリーンヒットし、俺は派手に転がされる。

「お前、本気で言ってるのか……！」

「本気も何も、その通りの意味じゃないか」

俺には、ラン・ロキアスがなぜ怒っているのか理解できない。

と思えば、ランは凄い形相で俺をにらみつつ、つかみかかる。

「最低な奴……だな！」

「今頃そんなこと言われたくない」

俺は乱暴にランの腕を振り払うと、そのまま叫ぶ。

「【龍化（ドラコフォーゼ）】」

龍の爪。

鎧のような龍鱗。

そして長く伸びた尾。

【龍化（ドラコフォーゼ）】した俺に対し、ランは顔色を変えなかった。

彼は、嘲りを笛の如く口から漏らして俺を笑った。

「何顔真っ赤にしてるんだ？」
「それは俺の台詞だ」

そんな暇があったら、さっさと助けに行けよ。
きっとランには分かっていると思うが、今の俺は無表情だ。

彼に対する怒りは時が経つごとに、嵐のように襲ってくる。
しかし。それを表情に出すことは無いだろう。

「……仕方ない。お前を倒してから行くことにする」
「時間の無駄だ」

俺は目の前に迫った拳を、横に払って隙の出来た横腹に蹴りを入れる。

【龍化（ドラコフォーゼ）】は、見た目だけのはったりではなく防御・攻撃だけでなく速度まで強化される能力である。
そのため、彼が何か案を考えつくまで、彼の攻撃は俺に当たらない。

「このクソが！」

そこからは、粗野な取っ組み合いだった。
俺は無意識に、彼は意図的に。
蹴りや殴りに魔法を含ませ、威力は増していく。

「こんなことしている暇があったらさっさと戦いにいけや！」
「その前に、シルバを倒さないと証明できないんだよ！」

自分の強さが！　とランは喉が掻ききれるほどの声で叫んだ。

その声は反響し、中庭から校舎まで届いて多くの生徒がこちらに目を向ける。

しかし、俺にもそんなことはどうでもよかった。

ランが行かないというのなら、俺が行くしかない。

さっさと沈んでもらおう。

俺は魔剣槍【刹那≠無限（ピリオド・エターナル）】を取り出してランのパンチの軌跡上に亜空間を生み出す。

亜空間から吹き出すのは、炎だ。

「がっ！？」

「お前が、俺に執着してリンセルさんたちを救わないと言うのなら、俺が救いにいこう」

俺はひるんだランに、容赦なくパンチをたたき込む。

いつもの数倍の威力。元々龍眼族（レザール）は基本種族最強の膂力（りょりょく）を誇る種族であり、一撃のパンチでどのくらいの位直があるのかすでに分からない。

そのとき、頭の中にとある言葉が流れ込んできた。

一回も使ったこともなければ、一回もみたことがないそんな言葉。

しかし、俺は無意識のうちに、それを唱えていた。

「ヴォリア・ズィオナッケ、アレス・ガイレム」

体の内側から、外に向かって。
心臓から、体の末端に向かって。
噴き出すように、力はあふれる。

「それ、なんだよ？」
「よく分からないが。……これでランを吹っ飛ばすのには充分すぎる」

拳は赤く、流血したように燃え上がっていた。
俺は躊躇なくランの頭をそれで殴り飛ばし、動かなくなったことを確認する。

そして、彼の手に握られていた脅迫状を手にして、目的地に向かった。

そのとき、木の陰にエスペランサとにた少女の姿があったようなきがしたが、錯覚……だろうな。
まるで、すべてをみていたかのように、でも、たしかに。

彼女は、そこにいたんだ。

# ０７８　救出

「お前、誰だ？」
「ラン・ロキアス本人を叩き潰しちゃったんで、代理としてきた」

ここは学園校舎の裏だ。
そこから少しだけでも学園から離れると、森があるため人は普通寄りつかない。
森には魔獣がすむと言われている。魔法でどうにかなるという問題じゃないものも住むと言われており、本当に寄りつかない危険地域なのだ。

俺は痛々しい姿で転がっている双子の姉妹と、それに取り巻いている１０数人の男たちをみて、ため息を吐きそうになった。
これは、最悪の状態を覚悟した方がいいのかもしれないが、べつにしなくても大丈夫だろう。

見たところ、男たちにそこまで危ない人はいない。

「……ちっ、龍眼族（レザール）か。……龍眼族（レザール）！？」
「どうも」

俺はにやっと笑うと、相手に向かって一歩踏み出す。

と同時に、【引斥制御（グラビシオンコントロール）】を周りの人すべてにかけた。
下に。全く動けない程度で。

「ラン・ロキアスなんて必要ない」
「は？」

「あいつよりも、俺の方がどうみても強い」

何いってるんだこいつ、と彼らは笑っていたが。

地面にたたきつけられている状態では、それも様がつかない。

俺は男たちに選択を突きつけた。

「二つの選択を与える。一つは二人を解放して何もしない。もう一つは……分かるな？」

俺は簡潔に話を終わらせると、男たちの方にゆっくりと歩いていった。

正直、地面と人の引力を少々強くしているだけで、ゆっくりだったら起きあがることはできる。

その後に何が出来るのかは、少々疑問だが。

「お前、俺を誰だと思ってるんだ！」

「いや、俺よくわからない」

彼のわめいている話によると、元々俺が目指していた龍眼族（レザール）自治区と同じ、『カエシウス聖王国』の何とかっていう貴族の４代目らしいけど。

それを考えたら、リンセルさんやアンセルさんの方が立場は上難じゃないかと思ってしまった。

こんなこと、してていいのか？

それとも、この学園は学園ヒエラルキーというのが存在するんだろうか。

「俺の一声で、お前の家をつぶすことも簡単なんだぞ！」

「すごく小物に聞こえてくるし、俺家族とかいないから」

この世界に家族はいないし、前の世界との未練はもうない。

戻りたいとも思わないし、俺は敗北したのだ。

一度失ったものを、無理に取り替えそうだなんて俺は思っていない。

失ったものは、新しいこの世界でもう一度作ってみせる。

「【龍化(ドラコフォーゼ)】」

俺はいったん閉じていたいわゆる覚醒状態をもう一度展開し、俺は万全の状態を整える。

常にオーバーキル気味でもかまわないはずだ。

たしかに最低限の力で敵を制圧するというのもいい策ではあるが、何が起こるか分かったもんじゃない状態で力を温存するのは、俺はいい案ではないとおもう。

それなら、圧倒的力押しであっても相手をつぶしにかかるべきだろう。

俺が【龍化(ドラコフォーゼ)】したと同時に、ほぼ自動的に能力が強化され彼らにかかっている重圧も。勿論強くなった。

それに膝を折る4代目を無視し、俺はリンセルさんとアンセルさんが動けない要因であった鎖を見やる。

「それ、さわっちゃだめ……触れた人に魔法を使えなくする効果があるの……！」

つまり、ここで適当に名前を付けるなら、『魔封の鎖』みたいなかんじのものなんだろう。

不安げに俺を見つめるアンセルさんと、リンセルさんにたいして、俺は笑いかけた。

「大丈夫ですよ」

「えっ」

「だって、膂力（りょりょく）のみで握りつぶしますから。

力を少しずつ込めていくと、徐々に徐々に、とは行かずいきなりバキン！　と鉄の棒がひしゃげるのではなく折れる音がした。

その思った以上の声の大きさに、リンセルさんとアンセルさんがびくっってなる。

膝を折るほどの重圧に耐えながら俺たちを見つめていたなんとかっていう4代目は、目の前に広がる光景を信じられないといった様子で見つめている。

「……それ、ランクの高い魔獣にも使える高級品なのに……」

「龍眼族（レザール）には適わなかったわけだ。あきらめてもうちょっと高級品を買った方がよかったんじゃないか？」

……まあ、そんなものを買ったらそのまま地面にめり込ませてやるよ。

俺は鎖を外した双子の二人をくるくると回し、けがはないか確認する。

「あぅあぅ」

「おっとすまん。最悪の事態は回避できたようだな」

「……なんで、ラン君の代わりに？」

俺が叩きのめしちゃったから、とはさすがにいえないなここでは。

俺はあえて首を振り、彼女たちの質問には答えず先に避難させる。

そして未だ重圧と戦っている男たちを見やり、口を歪ませた。

一方的に男たちをいたぶれる。

誰も、俺を止められないだろう・

龍眼族（レザール）の圧倒的種族値と、前世から引き継ぎさらに強化されたこの身体能力を見せてやる。

「さぁ、メインディッシュはこれからだ……な！」

# 079　命令

「……はぁ」

俺は、地べたに這い蹲り少しも動く気配を見せない男子生徒十数名を見下ろしながら、ため息をついた。

さすがに卑怯だったのかもしれない。俺の戦い方は。

【引斥制御（グラビシオンコントロール）】で下に引力を強化し、動きを鈍らせて龍眼族（レザール）の膂力で蹴ったり殴ったりするだけ。

龍眼族（レザール）の膂力は、何回も説明するが全種族最強であり。

骨が数本折れた可能性も否めない、というのが俺の見解である。

いや、もしかしてバッキボキに折れているかもしれない。

誘拐した土産だ。

「え……と、終わったのかな？」

「ああ、終わったよ」

リンセルさんが戻ってきたようだ。

アンセルさんは、途中で意識を失ってしまったらしく、カレル・アテラット先生に医務室へ運んでもらっているらしい。

「なんで、助けに来てくれたの？」

「さぁな」

俺は首を振って多くは語らず、リンセルさんを抱き上げて。

リンセルさんが真っ赤になるのもかまわず、医務室へつれていく

ことにした。

「ねえ、歩けるってば」
「……何かあったら困る」
「それは、私がレイカー家の娘だから？」

彼女の言葉に、俺は一瞬どういう意味か分からなかった。
そして一瞬あとに、ヴァーユウリンス先輩がいっていたことを思い出す。

「違うな。これは俺の個人的な感情だ。……リンセルさんがたとえ孤児だとしても、王族の娘だとしても同様に救出に向かっていたさ」
「へぇ」

ちょっと、疲れたかもというリンセルさんに、俺は寝てていいと言った。
まもなく、安らかな寝息を立て始める彼女。
そのすがたは、天使のように愛らしい。

確かに、男が狙うのも考え物だな。

「シルバ、よくやった。……ただ、問題がある」
「はい」

ここは医務室、の近くにある小部屋だ。

生徒指導室、とは少し違うようだが対面でちょうど、生徒と教師が一対一になるような構成になっている。

「まず、誘拐した人の被害状況だが、死人が出た。しかし今回の件はレイカー家当主がかなり感謝しており、お咎め無し」

死人出てるけどいいのか。とか考えていたが、この世界はもっと厳しいものだって知ってた。

そうだった。ということは、双子姉妹を誘拐してランをおびき寄せようとしてきた人も、ある程度は死を覚悟していた？

いや、違う。

彼らはランが、つまり知勉族（エリシュ）と醒眼族（ウェイカー）のハーフがくると思っていた。

しかし、それよりも遙かに強い龍眼族（レザール）がきたのだ。

おそらく、ランに対してなら勝算があったのだろう。

「レイカー家に出頭命令が来ている」

「出頭？　……はい」

「それと、なぜか分からないんだが、ランが満身創痍の状態で現場の近くにいた」

俺がやりました。

訳の分からないことで因縁を付けられたのでぼっこぼこにしちゃいました。

……と、そんな事も通用するはずがなく。

「あいつ自身はなにも言わないし。俺はなにも知らないが。……結局、なにをしていたか位は推測できる」
「そうですか」
「まあ、コレは教師の管轄じゃない。……自分たちで解決させるんだ、いいな」
そういうと、アテラット先生は話は終わり、と立ち上がった。
そして。そうそうと俺に向き直る。
「週末から行け。分かったな」
……はい。
「うちにくるぅ！？」
ていうか情報つながるのはやすぎ！　とリンセルさん。
確かに早いな。この世界、元いた世界とどっちが科学的に進歩しているんだろう。
いや、こちらはたとえるなら魔学、か。
「週末からかぁ……私たちは帰れっていわれてないし、うーん」
「大丈夫だ。地図だけくれれば到達する」
「しかも、まさかの。交通手段使用禁止、かぁ。試されてるね」

交通手段禁止、か。
人数は一応４人までいいって言われているけど、エスペランサは確定だな。

「ちょっと考えてみる」
「そうだね。……ありがとね、シルバ君」

## ０７９　命令（後書き）

ジャンルをファンタジーに変えなければ…
キャラの動きが暴走している

というわけで、変えるかもしれないです

## ０８０　真実（前書き）

クライマックス……のはず。

# 080　真実

「エスペランサ、いたいた」
「んぅ？　どうしたんですかシルバさん」

エスペランサは、食堂近くのベンチで本を読んでいた。
何を読んでいるんだろう、とのぞき込んだら魔術書である。

この世界には魔法という技術があるが、魔術という概念も太古にはあったらしい。
しかし、それが失われて今は魔法しか残っていない、らしい。

「さきほど、古代魔法を使っていましたね」
「ん？　ということは、俺とランの喧嘩を見ていたって事か？」
「ええ、だって私が与えた力ですもの、そばで見てみないと、分からないでしょう？」

その言葉に、俺は違和感を覚えてしまう。
ん？　エスペランサが、俺に与えた力？
古代魔法？　あの、頭の中に入り込んできたあの呪文のことか？

「ここでは他の人に訊かれてしまう可能性もありますし、場所を移しましょうか」
「おう……。エスペランサ、君はいったい？」
「それも、外で話をしましょう」

そういうと、エスペランサは俺の手を引いて進む。

向かう先は、学園の外……ではなく。
学園の門の近くにあった、校舎裏だ。

「ここなら大丈夫でしょう。人は寄りつきませんし」
「えっと、エスペランサ？」

俺が彼女に問いかけると、彼女はふふと笑った。

「まだ気づいていないのですね。たくさんヒントは与えたはずなのに」
「ん？　何の話をしているんだ？　エスペランサはエスペランサじゃないのか？」

腕獣族（ケレイジ）の、と俺が言い掛けたところを、エスペランサは人差し指を俺の唇に当て、黙らせる。
その動作は、あまりにも自然で。

同時に、エスペランサの姿はどことなく大人びて見えた。

「おかしいと思いませんでしたか？」
「……？」
「たとえば、私が名字を持たないことです。この世界はどんなに貧困した村でも、たとえ奴隷であっても。名字と名前というのはセッ

トになっているのですよ」

そうやって考えると、確かにそうだ。

エスペランサは、この世界で唯一名字をあかしていない人物、ということか。

いや、今のエスペランサの話をきくと最初からないと言うことなのか？

「おかしいとは思いませんでしたか？　私が希有な存在である龍眼（レザール）族の種族平均値を知っていたこと」

「……いや、博識なだけかと」

「違いますね。あんな情報が図書館にある訳ないじゃないですか」

エスペランサはこれも否定した。

つまり、……ん？　ということはどこか特別な存在、なのか？

たとえば、この世界の範疇を超えた、とか。

「おかしいと思わなかったのですか？　貴方がこの世界に転生して、貴方の行動が【すべて】、正しい方向に向かっていることを。気づいていませんか？」

たしかに、それは感じた。

しかし、これは俺にとって待ちかまえている運命、とか。

そういう、何か必然的な事だと思った。

ヴァーユ先輩やアイライーリス先輩と仲良くなったのも、それが原因だと思っていた。

「何も気づいていないのですね。本当に鈍感なんですね。……エス

ペランサ、とは前の世界でどこの国の言葉で、なんていう意味でしたっけ？」

エスペランサ？

俺は、自分の記憶から答えを探し出す。

エスペランサ……『ＥＳＰＥＲＡＮＺＡ』。

スペイン語で、意味は。

「……希望。つまり、エスペランサの正体は」

「そうです。私の正体は、希望神ホープです。やっと気づいてくれましたね」

エスペランサが光に包まれる。

光がやんで、俺が目をあけたとき。

目の前にいたのは、転生前に俺が魂の状態でみた、背の低い金髪美人だった。

……神々しい。

「なんだか、シルバさんって鈍感ですね。本当に今まで気づかなかったんですか？」

「……いや、普通は分かるはずないでしょう？」

あ、今までどおりでかまいませんよとエスペランサ、もとい希望神ホープは笑った。

うーん、なんていうか複雑な気持ちだな。

「はい。今までは私が貴方の異世界生活を頑張ってコントロールしていました。つまりはチュートリアルです」

彼女は、右手を開いて俺に見せる。

しかし、神とかって聞くと手のひらからビームが出そうだな。

「ビームなんて出ませんよ」

「うぉ」

「そのくらい分かりますよ、神の権能を使わなくたって」

もう、これだから男子は、とホープ。

しかし、その顔は本当に楽しそう。

「私は、今まであの場所で何万、何億と魂を転生させてきましたが。シルバさんの魂を一目見て、びびっときたわけですよ」

「希望神のお墨付きか」

「そういう意味です。だから、【引斥制御（グラビシオンコントロール）】も【魔武具創造（マギアクリエイト）】も、今回の古代魔法も与えた。ここまでは分かりましたか？」

とりあえず、だいたいの意味は分かったため俺は頷く。

ホープは、ふふとうれしそうに笑った。

「私がコントロールしていたのは、ちょうどラン・ロキアスが目覚めるところまでですね。そこでシルバさんがランさんと共闘してレイカー家の双子姉妹を救っていたなら、私はすぐにでも存在を無かったことにしたのですが」

そこでシルバさんのとった行動は違った、とホープは続ける。

「よりによって、神である私でも予想できなかった事が起こった。

なぜかラン・ロキアスと喧嘩して乱闘がおこる」
「うっ」
「でも、双子姉妹が死んだらどうにもならない。だから私は古代魔法をシルバさんに教えたわけです」
まあ、喧嘩を売ってきたのはどう見てもラン、なんだけど。
さすがにそんなことは口に出さず、俺は頷く。
「おっけー？」
「おっけー」
こほん、と可愛らしく咳払いをするホープ。
「思った以上の事が起こった私は、とりあえずシルバさんに正体を伝えることにしました、ちゃんちゃんっ」
「え、滅茶苦茶端折ったな、今」
「意味のない説明は時間の無駄ですからね。ところでシルバさん、ここで2択の簡単な質問です」
手を、ちょうどピースのような状態にするホープ。
「私はこれからも、貴方の。この世界の人生に必要ですか、必要ではありませんか？」
「必要だな。これからもエスペランサとして、俺のそばにいてほしい」
俺は即答した。
ほぁ、とホープは驚いたような、うれしいような変な顔をする。
俺が即答するとは思っていなかったのだろうか。

うーん、俺はホープが思うほどにエスペランサのことが大切だったからな。

「いいんですね？　神様がそばにいたらやりづらいですよ？　色々と」

「その神様を、どうやって操っていくのかが俺の仕事。俺の人生は、エスペランサというパーツがそろわないと始動すらできないからな」

ただし、と俺は一つの条件を提示してみる。

んぅ？　と首を傾げるホープ。

「エスペランサでいるときは、神の権能を出来るだけ使わないこと、いいか？」

「はい。分かりました」

両手を広げ、俺の方につきだしてくるホープ。

いや、エスペランサか。

俺は、その意図を理解し。

彼女を、抱きしめた。

# 081　また、旅立ちへ

「……ほう。ということは、明日から学校を休学する、ということなのか？」

エスペランサの正体が分かって、再度一緒に旅をすることが決まって1日がたって。

俺は、彼女をつれて一緒に今、二人の先輩と同じテーブルに座っている。

「そうなるな」

「で、この子は一緒に行くのが決定していると」

「ああ」

この子とシルバの関係性は何なんだ？　とヴァーユ先輩。

まあ、そうなりますよねー。とかどうでもいいことをおもいつつ、俺は「家族だ」と答える。

神様を家族呼ばわり。

真実を知っている人ならおそらく卒倒ものだろうが、気にしない。

そもそも、その言葉にエスペランサが顔をにっこりさせているのだからこれでいいのだ。

「かかか、家族ぅ！？」

変に反応したのはヴァーユ先輩ではなく、相方のアイライーリス先輩の方だった。

一応、妹という意味で言ったんだが、何か勘違いをなされているようだ。

そっとしておこう。

「……なんか気にくわない。私も行く」

「は？」

「あ、じゃあ私もぉ！」

思ったよりも早く話が決まってしまったけど、どうすればいいんだろう？

「シルバとなら大丈夫だろう」

「そうだね、シルバくんと一緒なら大丈夫」

「いや、交通手段は禁止されているってことを言いたかったんだが」

かまわない、と二人に言われて俺は大丈夫だと思ってしまった。

本当に大丈夫？　多分1ヶ月くらいは歩きっぱなしになるんだが。

「それにしてもレイカー家への出頭か。……凄いんだな」

「レイカー家は行ったこと……」

「あったら私は今頃こんな口調になっていないはずだ」

えっ。

その口調と、会った会ってないってかんけいあるのか？

俺はそのあとに訊こうとしたが、ヴァーユ先輩が話を切り上げてしまったため、それもかなわない。

「結局、二人とも来るってことでいいんだな？」

「そうだな。……ということは、今日急いで準備をしないとってことか」

荷物は少な目で頼む。と俺は二人に伝え、解散を宣言した。

「俺たちも準備しないとな」
「そうですね。……あの、シルバさん」

エスペランサが、俺の服の裾をそっと摘む。
うるうると潤んでいるその目は、どうみても、あれだよな？

「手、繋ごうか？」
「はいっ」

白い手が俺の手にそっとふれ、すぐに引っ込める。
おい、引っ込めるな。

俺はそんなことを思いながら、手を伸ばして彼女の手を握る。
はぅ、とエスペランサは顔を赤らめ、ふるふると体をふるわせる。

「……なんか、私が神様だって聞いてから遠慮がなくなって気がします」
「えっ。そんなこと無いぞ？　ないない」

実はあったりする。
神様が俺に好意を寄せてくれているのなら、いくらかやっても許容されるだろうなとは思ってる。
大丈夫、愛情故だ。

神に愛情？　……いいか。

「私達はどうしましょう？」
「結局、途中でも泊まったりすんだろうし、最低限の準備でいいんじゃないか？　……ちょうど、俺と今のエスペランサが旅立った時みたいに」
それもそうですね、とエスペランサは笑う。
って、獣耳なくなってますけど？
俺がその場所を指摘したら、大丈夫ですと返された。
あ、周りの人全員の記憶を操作したんだな。
権能すでに使ってらっしゃった。
「シルバさんには、記憶操作はかけていないので。はい」
「おお。ありがとな」
「代わりに、シルバさんが私を好きで好きで仕方がないってかんじに記憶操作しようかと思ったのですが、やめました」
今さらっととんでも無いこといい出したぞ、大丈夫かこの神様。
本当に大丈夫？　俺の記憶なにか操作されていないか！？
言われると心配になってくる不思議。まあいいか。
「……エスペランサ、こんな感じで良かったのか？」
「本当はお嫁さんとかが良かったのですけど、妹ならそれでかまいません！」
ちょっと大胆な義妹で！　とか言ってるあたり熟知しているのかっ！
この子、さすが神である。何でも知ってる！

これからまた旅が始まるんだし、またエスペランサと旅にでる機会なんていくらでもある。

大丈夫。俺たちの未来はつながってる。

## ０８１　また、旅立ちへ（後書き）

これでこの章は終了し、番外編を数話挟んだ後次の章へ行きます！

## 082　4・5章のまとめ（前書き）

直接的には物語に関係ないので、興味ない方はあと書きだけお読みください

## 082　4・5章のまとめ

ヴァーユウリンス・ヴァン・フロガフェザリアス

シルバの先輩。基本的には男勝りな性格で、クレアシモニー学園の中でも特に人気の高い女子である。
乙女的な心は持っている模様。魔法などは得意の分類に入り、学園の中でもトップの成績を誇るが、不意打ちにとても弱い。
後述するアイライーリスとは親友同士で、何時も一緒にいる。
アイライーリスからは「ヴァーちゃん」、シルバからは「ヴァーユ先輩」と呼ばれている。

アイライーリス・ホムラ・アマテノヴァル

シルバの先輩。明るく元気な性格で、男勝りでクールなヴァーユとは対をなすような存在。しかし中は良すぎる。
シルバの魔剣を初めて買った人。彼女の魔剣を求める理由と、シルバの魔剣に対する存在概念が一致したため、ほぼ初対面でも魔剣を作ってもらった。値段は数億。（シルバは自分の概念と沿わない人には決して魔剣を作らないため、金に釣られたということはない）
いきなり手渡された魔剣を調整もなしに使いこなすなど、魔剣に対しての適応能力は高いと思われる。

リュー・ウルガ

故人。シルバやランと同じ転生者であり、死してなお思念体としてのこっていた。容姿はラン自身が自分だと錯覚するほどそっくりである。

アイギス・ライゼィス

シルバの先輩。異名は【狂気の凶器（バーサーカー）】。ヴァーユとアイライーリスに誘われてシルバが参加した2年生の授業でシルバに決闘を挑む。が、シルバの【龍眼】発動に思いっきり怯み、シルバに向けて射出した魔法は大きくシルバから外れて上記の二人に向かい、結果的にシルバの【龍化（ドラコフォーゼ）】を引き起こしてしまう。

さらにそこから暴走し、その【バーサーカー】の名前の通り暴れたが、シルバにあっけなく倒された。

## 082　4・5章のまとめ（後書き）

次話から数話、番外編、です！

# 083　閑話　ラン　in　医務室

クレアシモニー学園、医務室。
ここで、一人の男子生徒がむぅと頬を膨らませたまま、全身包帯に包まれていた。
彼の名前はラン・ロキアス。

「……凹られた挙句、これかぁ」

勿論、ほかの人は倒れているランと、彼がここに居る原因となったシルバの間に何があったのかなんて知らない。
リンセルやアンセルですら、ランに気を使って聞いていないのだから当たり前である。

彼の頭の中には、シルバに負けた悔しさと、未知の魔法を使われた驚きと、自分が双子姉妹を救えなかったという悔しさが頭の中を渦巻いていた。

「……大丈夫？」
「何が？」
「……ぅ、荒れてるね」

彼女の傍にいるのは、リンナアイデル・パン・リーフ。
黄緑色の髪の毛に、ぴょこんと長くとがった耳を持つ『知勉族（エリシュ）』美少女である。

「うわぁ、なんでそんなに荒れてるのさ」
「だって、……いや、なんでもない」

なんでもないわけないでしょ？　とリンはランの頭をなでる。
が、ランはそれを素っ気なく振り払うと、頬を膨らませながらぶすーっといった表情を見せる。

その表情は、誰から見ようが何かにごねている小さい子供にしか見えない。
入学試験時の、何か卓越した精悍なかおつきはどこに行ったのだろうか。
そんな面影は全く見えず、そこにあるのはおもちゃをほかの人にとられた幼稚園児のような顔つきだった。
「もーっ！　ラン君が私たちを救ってくれなくても、大丈夫なのに」
「なんかその言い方、腹が立つんだがなんでだろう」

隣のベッドで、リンセルが首を彼の方に向けつつそういった。
が、ランは機嫌を直さない。

「……もっと、強くならないとな」
「それはそうだと思うけど……、学園の中だったらラン君は一年生なのに結構な実力派なんじゃないの？」「シルバに負けたってことは、もっと上がいるってことだ」

そうだ、最強になろう。
ランは結局、かなり単純な思考にたどり着く。

誰にも負けたくなかったら、この学園で最強になればいい。
一番単純で、そして一番簡単であり同時に一番難しいことでもある。

転生者のランは、ポテンシャルだけで言えばこの学園でもトップのものだろうが、彼の前世は普通の日本人である。

シルバのように、戦いにまみれた世界でもなく普通の平和な世界。
ランの死因は鉄骨に貫かれた即死で、シルバは【戦死】なのだ。

今のままでは、決定的な力がありすぎると彼が考えるのも、訳ない。

「リン」
「ん？　落ちつい……た？」

リンは、ランの顔を一目見た瞬間、彼に何か変化が訪れたのを悟った。
明らかに顔つきが違う。勿論、膨れてなどいなくて何かを決意したような顔をしている。

引き締まった、とでもいうべきだろうか。

「魔法、教えてください」
「んぅぅ？」

予想外の言葉に、リンは一瞬反応が遅れた。

どうなってるの……。と思わず口から声が漏れてしまう程度には、驚いたのだ。
リンセルも、何か奇怪なものを見るようにランを見つめている。

「大丈夫？　頭どこかおかしくなっちゃった？」
「は？　なんでだよ」
「だって、入学してからそんなこと言うラン君を見たことがなかったから。どうしたのかなって思って」

ああ、そういうことか、とランは状況を理解する。
この学園に入ってから、ランはほぼ無敗の状態だったため自分はだれにも負けない、だからリンの手助けは必要ないと高をくくっていたのだ。
もっと簡単に言うと、調子に乗っていたともいう。

しかし、今回の一件でランは分かったのだ。
自分はまだまだ弱い、と。

「うん、俺が間違っていたな。これからもよろしくお願いします」
「うーん、変な感じがする。ラン君が敬語って」

リンはくすりとわらうと、うん、いいよと答えた。
そんな二人を、リンセルは目を細めて見つめる。

アンセルは、まだ、起きない。

「ランが目を覚ました後は、アンセルさんが眠りについちゃったね」
「……おねえちゃんは精神的なショックに弱いからね、しかたないよ」

リンがぽつりと言葉を漏らすと、リンセルは悲しそうに笑った。
え？　と聞き返すラン。

「お姉ちゃんは、決して強い人なんかじゃないんだよ。普通の女の子、よりも弱いかな。誰よりも優しくて、誰よりもおとなしくて。……生まれたときから一緒にいた、私ならわかるもん」

お姉ちゃんは、最高のお姉ちゃんなんだよ、と。
リンセルは、そっと呟く。

ランは、ほぼ動かない手を苦しそうな顔をさらに歪めながらも、リンセルの頭に右手をのせた。

「次は、俺がリンセルを、アンセルを助けて見せる」

「出来れば、助ける前にそれを阻止してほしいかなっ！」

「そう、だな。強くなるまで、待ってくれよな」

さっきまで膨れていた彼の顔はどこへやら、少々成長したような彼を見て、リンセルはこくんと頷いたのだった。

ランの新しい伝説は、ここから始まる。

# 084　閑話　準備　V（ailuliince）&A（yrayiris）

「旅に出るなんて、こういうのは初めてだねー」
「そうだな、レイカー家か……」

クレアシモニー学園のとある寮で。
ヴァーユウリンス・ヴァン・フロガフェザリアスと、アイライーリス・ホムラ・アマテノヴァルは着々と準備を進めていた。

勿論、シルバに誘われたからである。
半ば、自分たちが強引に言った感じもあったが、結局許可してもらったのだ。

「結局、私魔剣創ってもらってないぞ、アイラだけずるい」
「ええっ？！　こんなに時間かかって、まだ作ってもらってないの！？」

アイラが、本当は創ってもらう気なんてないんじゃない？　と不安げな顔でヴァーユにささやく。

「私だって、誰かを護れるような力がほしい」

ぶぅ、と少々膨れた様子のヴァーユに、アイライーリスはなだめるように頭をなでた。

「でも、シルバ君のことだから『ヴァーユ先輩のことは俺が護る』って言って戦いに参加させたくないんじゃないかな」
「……それだったら、うれしいんだが……」

と、若干ふてくされながらも、その顔は赤い。
少しどころではなく、もうすでに真っ赤である。

「少しくらい、なら、でも……」
「やっぱり、自己防衛手段はほしいよね」
「そうだな……」

まあ、彼女が魔剣を欲しがる理由は、半分くらいがアイライーリスへの嫉妬でもあったり。
すくなくとも、彼女は自分だけ助かろうとは思わない、戦うのなら、私も戦う。そういう思考回路が組まれているのが、ヴァーユウリンス・ヴァン・フロガフェザリアスという人なのである。

「とにかく。私は明日シルバに頼んでみるよ」
うん、それのほうがいいかもね、一番」

アイライーリスは、そういってもう一度ヴァーユの頭をなでつけると自分の準備に戻る。
ヴァーユは、少し考え事に耽っていたが考えを頭の隅に押しやって、自分の準備を最優先とした。

「……ねえ」
「なんだ？」
「ヴァーちゃんって、シルバ君のこと好きなの？」
「そういうアイラはどうなんだ？」

質問を質問で返され、アイライーリスは少しだけ詰まってしまう。
シルバが自分の気持ちに気づいていないように、アイライーリスも自分の思いがどういう意味でシルバのことが好きなのか、考えあ

ぐねていたのだから。

反してヴァーユは、すでに自分の気持ちを明確にしていたらしい。
自分のことが好きな人が誰か、すでに明確になっているため気持ちは幾分とすっきりとしているのだ。

「私は、シルバのことが好きだぞ」
「……うぅ、なんでそんなにはっきりと言えるのさぁ……」

さぁ、何故なんだろうなとヴァーユは笑った。
その顔には、すでに迷いは、ない。

# ０８５　出発準備（前書き）

新章始まります！

## ０８５　出発準備

「ええと、その魔剣は何ですか？」

エスペランサ、俺が差し出した剣を、一瞬で魔剣だとみぬく。

いや、さすがといったところか、神様だしな一応。

本当は、もうちょっとあとに渡してもいいんだが。今回のタイミングがあまりにも良すぎる。

そのため、俺は鞘の中に入った短剣を彼女に渡すことにしたのだ。

「ん、護身用のために持ったほうがいいと思った」

「護身用ですか？　……ああ、できるだけ使わないように、といっておりましたもんね」

ここは寮のなかだ。明日の朝ここを出発するため、俺とエスペランサは準備をしている。

旅は２回目だ。だからなんというか、微妙に手馴れている。

そう考えれば、今までの不自然な場所は全て、彼女が神様だったからだと理由づけられるのだ。

神様だから、龍眼族（レザール）の知識を持っていても全く問題がないし、そのた諸々。

「これからは、苗字どうするんだ？」

「エスペランサ・ホープレイで行くことにしました。最初っからこれだとシルバさんのことなのですぐに見抜かれそうでしたし」

確かに、最初から「ホープレイ」という名前がついていたら俺は

感づいていたのかもしれない。
本当は、「エスペランサ」という言葉が彼女の名前であることからすでに気づくべきだったんだろうが、この世界は前世の色々な言語を混成して単語にしたりとかよくあることだ。
そう考えると、一体なんのことを指しているのかわからなかったりとかする。

「んぉ、きいたぞ。出頭だって？」

と、ウスギリ・ゲンが部屋の中に入ってきた。
考え中でよかった、エスペランサが神だとかっていう話の時に入ってこられたら、エスペランサの記憶操作を使ってもらうしかなかったからな。

ちなみに、希望神ホープはどんな能力を使えるのか、俺はさっき帰り道に聞いてみたのだ。

『そうですねぇ、【時間干渉】、【記憶操作】、【変遷】、【神具創造】などですかね、私は希望神のため、ほかの神様よりも限定されていない漠然とした神なので、使える能力が多いのです』

なんていうことを言っていたため、彼女の能力は基本的に使わないことを約束させた。
俺たちの中で、信用できる人は確かにいるが。

たとえばヴァーユウリンス・ヴァン・フロガフェザリアス先輩やアイライーリス・ホムラ・アマテノヴァルを全面的に信用しているのかと聞かれたら俺は頭をひねるだろう。

「レイカー家か。一回だけ行ったことあるけどでかいな、あれ」

「あれ？　ウスギリってそんなにすごい場所の人だったか」
「学園長が叔父、と言えばわかるかな」
あっ。
この一言で、分かってしまったあたり俺ももうだめかもしれない。
確かに、前世でもそういう場所にいたからなんだが、よくわかる。
この世界も血統主義か。
実力である程度は上がっていけるものの、血統を圧倒するためには一筋縄じゃいけないのかも、な。
「シルバさんの心配していることは、シルバさんが龍眼族（レザール）であることによって、それは緩和されます」
「？？」
エスペランサが、俺の心配事を察してフォローしてくれるが、それをきいた薄切りには不思議な顔をされた。
いや、なんでもないんですよとエスペランサは言い訳をするようにしてシルバに説明をする。
「ただ、シルバさんにもシルバさんなりに心配することがあるのです」
「まあ、この学園唯一の龍眼族（レザール）だしな、色々とあるんだろうな」
ウスギリ、変な方向に心配してくれて助かったよ。
さすがに、俺が転生者だったとかいろいろと面倒なことは言いたくない。
ランをあんなふうにしちゃったし、ランの心が折れても仕方ないだろうな。

まあ、いいか、俺とは関係のない話だし。

「レイカー家の近くは特に寒いから、途中で防寒具を買ったほうがいいかもしれないな。今の時期はまだましだけど、夏であってもあそこは万年雪の範囲内だ。一年を通して寒い」

唯一の救いは、湿度が低いところだと説明してくれるウスギリ。いや、ここにエスペランサいるから大丈夫なんだけど、とも思ったがせっかく親切心で話をしてくれているんだから素直に窮しておこうと思った。

エスペランサは、こくこくと頷きながらその話を聞いている。

「徒歩を強いられているんだったら森には入らないほうがいいかもしれない、そこには結構ヤバイ感じの魔物もいるし」

そこは気をつけないと。神様が一人紛れ込んでいるとはいえ、俺以外の3人は全員女の子だ。

俺が守り切れない可能性もあるから、魔剣を3本作ったんだし。

一つはさっきエスペランサに渡した短剣。投擲したら敵の急所に自動誘導するようになっている。

一つは俺専用。これは使うときに説明すればいいか。

そして、ずっと頼まれていたヴァーユ先輩用の長剣。

うむ、なかなかの出来だと思う。

「まあ、頑張りなよ」

「はい、ありがとうございます」

ぺこ、と頭を下げるエスペランサと俺に手を振りながら、ウスギリは自室に戻っていった。

# 086　送迎

次の日。
俺とエスペランサが、指定した場所に向かうとそこには身軽な荷物で俺たちを待っていた二人の姿があった。

勿論、その二人とはヴァーユウリンス・ヴァン・フロガフェザリアス先輩とアイライーリス・ホムラ・アマテノヴァル先輩だ。

ヴァーユ先輩は少々不機嫌な顔で、アイライーリス先輩は逆におどおどしている。
一体何があったというのか。

「むぅ」
「？」

むぅ、とかっていうセリフが彼女の口から洩れるとは思わず、俺は一瞬吹き出しそうになった。
と同時に、彼女を思い切り抱きしめたい衝動にも駆られて俺は一瞬立ち止まる。

エスペランサは、そんな俺の状態を不思議に思ったかのように首をかしげたが、そのまま前に進んだ。
しかし彼女も、ヴァーユ先輩の口から洩れ出た「むぅ」という声のギャップには驚いているようで口が少々にやけている。

「ああ、ヴァーユ先輩に渡すものがあった」
「……」

アイライーリス先輩、戦々恐々としすぎです。

正直、おそらくヴァーユ先輩がこれを求めているんだろう、と思うもの。

そう、魔剣である。

「これを……私のものに？」

「ん。実際は結構前から出来ていたんだが」

俺は、一本の大剣を先輩に渡した。

見るからに重そうな剣だな、と呟きながら先輩は受け取った瞬間、目を大きく見開いた。

そう、その剣は羽のように軽い。

金属でできているにも関わらず、ほぼ彼女の手に乗せているという感覚がないような感じだろうか。

「……質量ないんだが、この剣ってちゃんと使えるのか？」

先輩の説明によると、質量があったほうが普通は勿論パワーモデルらしいが、どうなんだろう。

今回、この剣に使ったものはその名の通り【羽翔合金】という金属でできているものをいつもの魔剣鍛冶作業台で作ったものだ。

使用した属性は、ヴァーユ先輩の使う【氷】属性……ではなく、敢えて【風】属性も注入している。

「しかも属性不一致？」

「軽さという使いやすさに、【風】属性の切れ味をプラス。先輩の持っている本来の【氷】属性とで」

一応、意思発動で吹雪を起こせるようにはした。

「……ふむふむ」

「属性不一致だから最初の方は使いにくいかもしれないけど、そのあとなら十分だろう」

「なるほど」

納得してくれたようで何より。

実はアイライーリス先輩から貰ったお金の一部を使って取り寄せてきたものだし、この合金。

合金ンおサンプルはあったんだが、どうしてもヴァーユ先輩に似合いそうな大剣にするためにはもう一つ分ほどの質量が必要だったのだ。

質量、というのは少し違うかもしれないが。

「で、こっちが鞘」

「おお、ぴったりだ」

「魔剣の名前は……先輩がつければいいんじゃないか？」

「いや、シルバにつけてもらいたい」

あっ、はい。

と、俺の隣でエスペランサも鞘に入った短剣をひっくり返したりまた表向きにしたりしていた。

……あ、エスペランサの方もついていないんだな。

「あとでちゃんとつける。……えっと、じゃあ出発しようか」

「……そうだな」

「ね、あれ」

エスペランサが指差したほうを見ると、そこには数人の姿があった。
……リンセルスフィア・フレイヤ・レイカーさんと。
カレル・アテラット先生と、リンナイデル・パン・リーフさん。
アイゼル・ベラキオスも久しぶりに見た。
ラン・ロキアスはいないか。
不自然だと思ったらアンセリツティアさんもいなかった。

ランはいなくても全然かまわないが、アンセルさんがいないのは嫌だな。

「ごめんね、ラン君なんか怒ってたから」
「いや、別に送迎なんて必要な」
「いいの、私たちがしたかったことだし、そもそも出頭命令を出したのは私のお父さんだし」

リンセルさんが、天使のような微笑みで俺に言ってくれた。
後ろの方で、ヴァーユ先輩がちょっと険しい顔をしたんだが、リンセルさんは気が付かない。
アイライーリス先輩は、「可愛い、きゅんっ」とか意味の解らないことを口走っている。

……それほど可愛いということだ。
本当に天使のような微笑みを讃えている少女。
それがリンセルさん。

「エスペランサちゃんも、頑張ってねっ」
「はいっ」

私は全部知ってるよ！　とそんな視線をエスペランサに向ける彼女。

俺はリンセルさんのことをよく知らないからわからないが、この人はどうも……っていうようなオーラを確かに漂わせているのだから少し怖いな。

エスペランサが希望神ホープだということはさすがに知らないとは思うが、普通の人ではないということくらいは分かっているかもしれない。

「ええと。……ヴァーユ先輩、アイライーリス先輩も気を付けて。特に寒い場所ですので」

「……」

「うん、ありがとうね。リンセル嬢」

ヴァーユ先輩は返事をしなかったが、それをフォローした感じになったアイライーリス先輩であった。

それにしても険しい顔だ。本当に大丈夫なんだろうか？

「……んー、そろそろ行かないとだね」

「そうだな」

今日の夕方には、アイゼルの住んでいた「レジリナ」に到着しておきたかったりもするが、さすがに無理か。

「鍛冶屋に献上する剣はできたか？」

「ばっちりだ。帰ってきたら、今度はアイゼルと今度は旅にいこうか」

どうも、最近はずっと魔剣鍛冶の方ではない普通の工房の方に籠りっきりだったらしく。

元気はなさそうだが、来てくれたんだから感謝はすべきだろう。

「……さて、行くとするか」

# 087　関係

「3人とも大丈夫か？　まあ、エスペランサは俺は担ぐ程度のことをするが、な」

ということで、現在俺たち4人は『カエシウス聖王国』の最南端に位置する『レジリナ』に向かっている。

進んでいる場所は普通の公道だ。

まだ『都市国家ポラリス』の中心部。

近未来的な感じを漂わせながらもそのエネルギー源は魔法という、SFなのかファンタジーなのかわからない場所にいる。

ここは見慣れた場所のためか、みんなも特にきょろきょろする事もなく、順調に進んでいる。

アイライーリス先輩とヴァーユウリンス先輩は何だかんだ言ってお嬢様だから大丈夫かな？　と俺は心配だったが。

どうやら、大丈夫らしい。ていうかラフな格好も実に似合っている。

「ん？　どうした？　私の服に何かついているのか？」

「いや、大丈夫」

何が大丈夫なのか、自分で自分に問い出したいくらい不自然な会話である。

まあ、それも彼女がそれ相応に美しいことによる弊害ということで。

俺は深呼吸をしつつ、俺の隣で不安そうに俺を見つめているエスペランサの方を見た。
何か思うことでもあるのか。彼女は俺を見ては前に視線を戻し、そしてまた俺を見る。

「どうした？」
「いや。なんでも、ない、です」

顔を赤らめ、だれがどう見ても何かあるような表情で否定する少女。
と、ここでヴァーユ先輩が気になったように俺とエスペランサを見た。

「シルバとこの子は、どんな関係性があるんだ？」
「……ええと」

さて、どうしようか。
結構言葉に詰まった。

なぜなら、俺とエスペランサはそもそも何の関係もないと言えばないし、あると言ったら俺がこの世界に転生する前から関係のある人物だ。

「ちょっと特殊な関係で、今は言うことができないのです」

助け舟を出してくれたのは、エスペランサのほうだった。
最悪はあの能力を使うんだろうが、どうなんだろう。

幸いなことに、訝しげな顔をしながらもヴァーユ先輩は納得してくれた。

困ったのは、アイライーリス先輩のほうである。

「特殊なってことは、何か特別な関係でもあるんだぁ」

「……そうですね」

シルバさんがここに来る前から、私とシルバさんは出会っていましたから。

そんなことを真顔で言ってのけるエスペランサ。

その、「ここ」とはどこを指すんだろう？

この世界？　それともこの国？

どちらにせよ、あまり関係ない話か？

どうも面倒そうなにおいがしてきたため、俺は昼飯をどこで食べるかという話題に転換させる。

そもそも、そんなに詮索されてもおれが好奇心に満ちた目で見られるだけなのだ。

前の世界で戦死し、この世界に転生するまえにエスペランサ＝希望神ホープに特殊能力を与えられて今ここに至るなんて言ったところで。

戯言をわめいている痛い人か、電波系の痛い人か。

思い込みの激しいひと、程度にしか思われていないだろう。

「お昼ご飯かぁ。私はまだ大丈夫かな」

「しかし、これ以上中心部から離れたらこのあとまともな飯が食えないかもしれないぞ？」

少なくとも、今日は。

これから郊外に向うから、結構微妙だったりする。

荷物はできるだけ少ないほうがいいが、非常食程度の備蓄は必要なのかもしれない。

「そうだな。保存食……」

ここが本当に中世のような純ファンタジー世界ではなく、文明の発達している世界でよかった。

「先輩方に、なにかアレルギーとかはないのか？」

「「……あれるぎー？」」

この世界に、アレルギーという単語は存在しないらしい。

ふむ、では別の言い方にしよう。

「これを食べたら身体に異常をきたすとか、これは生理的に食べたくないとかっていうものは何か存在する？」

「ないね」

「私もないな」

ない、と。

なら、そんなに深く考えなくてもいいか。

ポラリスの中心部は本当に都会、である。

だから、ぼったくりなんてことは普通起こることのない。

どちらかと言えば、何だかんだで日本に似ているのかもしれない。

生活水準の高い、どちらかと言えば犯罪率も少ない平和な国家だ。
加えて資本主義。完全に日本かな？

「エスペランサ、何か食べたいものは？」
「そうですね……」

正直、私は食べなくても生活ができるのですけど、とエスペランサは俺だけに聞こえる声で言った。
が、この世界だと死にこそはしないが腹は減るらしく、やっぱり食べたほうがいいらしい。

神様って複雑。
便利だけど複雑。

「神様って、案外簡単になれる者なんですよ？」
「えっ」

なんかすごいこと言い始めたけど、本当に大丈夫だろうか？
神様は簡単になれる？　神様って、今からでもなれるものなのか？

……いかんいかん、「神様になろう！セミナー」的な、変なものを想像して吹き出しかけた。

## ０８８　お姫様抱き（前書き）

短い…

## ０８８　お姫様抱き

「なんていうか、全然【試練の旅】っぽくないな」
「ポラリスの中は近代的でどちらかと言えばファンタジックだからな、科学的にといったらおかしいだろうが」
「かがく？」

……なんだか、最近俺はぼろが出始めたような気がする。
そこで、エスペランサはすかさずフォローしてくれるのだ。

「ほら、シルバさんは龍眼族（レザール）ですし、普通の人が知らない単語も知っているんだと思います」
「なるほど。……龍眼族（レザール）には科学（サイエンス）なるものが存在するのか」

納得はしてもらえたけど、正直たとえば械刃族（サミュリ）とかどうやって動いているんだ？
械刃族（サミュリ）っていうのは、俺はまだ直に見たことはないけれどエスペランサによると前世で言う《サイボーグ》的な存在らしい。

ロマンにあふれているあたり、いいね。

一部が魔導で動く機械で動いているらしい。
魔法ではなく魔導と言っているあたり、妙に引っかかる点はあるが、もしかしたら言い間違えかもしれないな。

「そんなことよりも先輩方大丈夫か？」
「へーきへーき」

アイライーリス先輩はそういうが、顔はかなりダメそうだ。

俺はあとどのくらいで『レジリナ』につくのか、エスペランサに訊いてみる。

「あと、2時間くらいだと思いますよ」

もっとも、このままのペースで行ければ、ですがと捕捉する彼女。

このままでいくには、やっぱり俺が負ぶってやったほうがいいんだろうか。

「負ぶうよりも――」

よっと、力を込めて、俺は彼女を抱き上げた。

アイライーリス先輩が顔を赤くするのも構わずにとりあえず進み続けることにした。

俺のやったことがお気に召さないのか、ヴァーユ先輩は怖い顔をしていたが気にしないほうがいいんだろう。

「――こっちのほうがいいだろう?」

ふぁ、と声を漏らす先輩。

まあ、こんな感じだろうとは思ったけど。

思ったよりも軽い、と言ったら先輩は喜ぶだろうか、怒るだろうか。

言わないほうが吉だ、やめておこう。

「何か、失礼なこと考えてた?」

「カンガエテナイ」

はっ、思わず片言になってしまった。

絶対に怪しまれたし、変な顔をされたけど。

決して、何も言われることはなかった、うん。

そのまま抱き上げながら1時間くらい経つと、安心したのかそれとも疲れからなのか、寝てしまった。

妙にイライラしているヴァーユ先輩と、少々複雑そうな顔をしているエスペランサを振り返り、あとどのくらいで着くのか訊いてみる。

「もう見えてきましたよ」

エスペランサの指さす先には、なるほどうっすらと町が見えている。

数か月前に俺がアイゼル・バラキオスとであった場所だ。

宿屋もあったし、おそらく野宿はしなくてもいいだろう。

女の子が多いし、初日から野宿というのも酷だろうし。

「ふにゃ」

「……」

おぉぉぉぉ、ヴァーユ先輩の顔が般若になっている。
怖い、正直すくみ上りそうになるほど怖い。
が、何も言わない。そこが余計怖い。

「……むぅ」

エスペランサも少々機嫌が悪いぞ……。
俺は観念したように、もういいだろとアイライーリス先輩を起こして立たせる。

「……シルバ君の腕、暖かくて気持ちよかったぁ。ありがとねっ」

寝起きの色気に、どぎまぎしたりしなかったり。
ヴァーユ先輩には凍てつくような、エスペランサからは神々しそうな鋭い目つきで睨まれたり。

踏んだり蹴ったりなんだが、俺は何か悪い事でもしたのか？
したんだな？　わかったすみませんでした！

## 089　再び、レジリナ

ともかく、俺たちは何とか『カエシウス聖王国』最南端の町、『レジリナ』に到達した。
時刻は夕暮れに差し掛かったあたりで、空は少々赤い。

とりあえず、俺は先輩の二人に食料の調達を任せ、エスペランサと一緒に宿屋を探すことに。

「なんだか、久しぶりなのですが」
「うん、久しぶりだな。……俺も懐かしい感じがする」

二人がいないことを確認して、エスペランサは俺の手を取る。
その顔は、どこか切なげでどこか悲しげで。　同時に、どこか嬉しそう。

「本当は、もうお別れでしたから。本当にうれしいのです。……『人』として、この世界にいれるのが」

希望の名前を冠した神は、そういって俺の前で目を細める。
これは永遠じゃない、それは分かっているのだが。
……この時を、大事にしよう。

「さて、宿屋に向かうとしますか」
「そうですね、そうしましょう」

俺は、彼女の手を強く握りしめて、歩き出す。

「んっしょ、んっしょ」
「どうだ部屋は取れたのか？」
少し待っていると、先輩たちが戻ってきた。
簡単な防寒具も買ってきたらしく、アイライーリス先輩は少々重そうだったが。
「ごめんね、さすがに重くて二人分しか買えなかった……」
「あとで買いに行く」
俺は龍眼族（レザール）だからなんとかなるけど、エスペランサの分は買っておいたほうがいいか。
俺は頷き、ヴァーユ先輩に宿屋のカギを渡す。
「んぅ？」
「ヴァーユ先輩とアイライーリス先輩で一室。俺とエスペランサで一室」
「えっ」
その「えっ」はいったい何をしめしているんだろうか。
俺がエスペランサと寝ることに対しての驚愕なのか、「私が一緒に寝たい」のほうなのか。
しかし、俺が言い返す前にエスペランサが言ってくれた。
「シルバさんとは、クレアシモニー学園に入学する前から旅仲間な

ので大丈夫ですよ」
「いや、そういう意味じゃ……」
先輩はかなり不満げな表情をしていたが、エスペランサが話はこれで終わりというように会話を打ち切る。
そして、俺を見て満面の笑みを浮かべながら抱き付き。
先輩二人の顔は、またもや般若のような形相になる。

この世界に宗教などというものがあるのかは不明だが。
エスペランサの正体がわかっていたなら、俺は希望神ホープを支持する宗教に今殺されてもおかしくないだろう。
「まあ、とにかく今日はゆっくり休んだほうがいい。……明日から激務になるだろうし……」
明日からは野宿の可能性も高くなる。
心やすまないときもあるだろうし、目的地のレイカー領はかなり北の方に位置する。

日本で言うなら、雪に覆われた日本の九州から北海道まで徒歩で向かうようなものだ。
実際、この国は日本よりも何十倍も大きいのだが。
「というわけで、今日は解散。ゆっくりおやすみなさい」
「……うぅ」

ヴァーユ先輩はまだ不満そうな顔をしていたが。
とりあえず、無視した。

「明日の目的地はどこらへんなんだ？」
「そうですね、えっとこの地図を見ていただけますか？」
エスペランサが取り出したのは、地図なのだが。
……どうなっているんだこれ、と俺が戸惑うくらいには高性能だった。
よく、ＳＦ映画などで巨大なモニターに映される、レーダー機能の付属した機械があるだろう。
あれとよく似た感じの、おそらくまだこの世界でも創り出せないであろう地図。
「今、御存じのとおり私たちがいる場所はここです」
細く、雪のように白い手で指差す場所は、今俺たちのいる『レジリナ』だ。
そして、とちょっと北の方に指を動かすエスペランサ。
「こちらが、明日中についたほうがいいと思われる場所です」
「1日で行けるのか、怪しいんだが大丈夫か？」
公道が伸びているので大丈夫です、とエスペランサは言ってのける。
ほぅ。森の中を潜り抜けたりはしないということか。
なら大丈夫だな。
「そろそろ寝ましょう。……明日は早朝から出発ですね」
「そうだな」
俺はエスペランサの手を引いて、ベッドに寝転がる。

そして、彼女が抵抗なく俺を受け入れたことに気分をよくして…。

次の行動に移す前に、エスペランサも俺も、睡魔に負けた。

# 090　前世今世

目をあけると、前にエスペランサの長いまつげが見えた。
一本一本が判別できるほど、近い場所に今俺はいる。
手を伸ばさなくとも、彼女に手は届く、そんな場所。

やはり人の姿だと睡魔というものはくるらしく、すぅすぅと特に警戒もなく、彼女はねむっている。
それは、俺がそばにいるから警戒が緩みきっているのか、それとも神の力を制限されていながらも使えることに安心しているのだろうか。

俺にはさっぱりわからないが、恐らく後者だろうな。

「……んぅ、んぅ」
「起きたか、おはよう」

彼女に話しかけると、少女はぱちぱち、と瞬きをしてとろんとした恍惚気味な顔で俺を見つめる。

「おはよぉございますぅ～」

甘い。
元からのきりっとした声ではないからか、甘えたように赤い唇から紡ぎ出されるささやきは、鼓膜を溶かしそして最終的には脳すら水にしてしまいそうだ。

そんな彼女に、俺は笑いかけて抱きしめる。
今まで俺はエスペランサのことに気をかけてやれなかったから、

これからの行動で返そうと思ったのだ。

エスペランサも、俺を好いてくれているから転生前も能力をくれたんだろうし、今も一緒にいるのだろうから。

「……はぅ」
「意識ははっきりしたか？」
「……はい」

先ほど自分の発した声に、羞恥心を覚えたのか顔をあからめるエスペランサ。
そして自身に抱きついている俺を認識して、さらに顔を赤くした。

「ちょちょ、なにやってるんですかっ」
「抱きついているだけだけど……」
「……じっとしていた方がいいですか？」

俺が何も言わずにそのままで居ると、エスペランサも遠慮がちにだが体重をこちらのほうに乗せてくる。
それが何を意味するのか、俺はいくつかの推測をたてるもどれか判断しかねていた。

思えば、前世でも。
俺は大切な人に対して最低なことをして、たくさん傷つけた。

その報いに、死んだようなものだろう。

「……んー、そろそろ出かけましょう？」
「……そうだな」

何分そのままの状態でいただろうか、胸が苦しくなってきたのかエスペランサが俺に声をかける。
俺はうなずき、彼女を慎重に放すとエスペランサは「大丈夫ですよ」とほほえんで見せていた。

「私は、シルバさんが『消えてくれ』って言わない限り、そばにいます」
「……心を、読みとったのか」
「読みたくなくても、あれだけ近い場所にいるのですもの」

俺の記憶を読まれたが、まあいいだろう。
前世の未練はもういい……はずなんだが。
今世をちゃんと生きていくんじゃなかったのか、俺は。

……これなら、転生しないでふつうに生まれ変わった方がいいのかもしれない。

「それは許しませんから」
「？」
「記憶を失わずに、新しい世界で人生のやり直しがきく。それのどこがいけないのですか」

やっぱり、断片的にしか読みとられていないか。
俺は首を振り、エスペランサに説明する。

「前世の記憶があって、毎回後悔するんだ。……それなら、最初か

ら記憶がない方がいいんじゃないかと思って」
「……そう、ですか？」
「そうだ」
なんてたって俺は。
「『英雄』になり損ねた戦士、なんだからな」
その言葉を聞いて、エスペランサが首を傾げる。
まさか、エスペランサは俺の前世、特に最後を知らないのか？
「私の情報によると、『世界を守る戦士』の1人として歴史には刻まれているのですが……」
「死因とか、そりゃあかかないよな……」
俺はそこまで考えた後、エスペランサに勢いよく向き直った。
ちょっとびくっとしたエスペランサ。
「この世界から元の世界に戻るって言うことはできるのか？」
「例がないです」
「ということはできなくもないんだな？」
「普通はできない、ということですよ。神と同等かそれ以上の力が必要です」
ちなみに私は私だけを移動するなら可能ですが、シルバさんを連れてはいけないです。
エスペランサ、ちゃんとこうやって逃げ口をふさいでくるのだから、困ったもんだ。
「それよりも、この旅の途中に、寄りたいところがあるのです」

「ん？」
「希望神ホープの神殿ですよ、私を奉る」
「ああ……」

少しでも力を付けたいのだろうか。
よくわからないが、とりあえず了承することにした。

しかし……だったら、あのとき華琉（はる）がこの世界にきたのはなぜなんだ？
確かに、誰も気づかなかったし夢かもしれない。

それでも、俺が入寮2日目に味わったあの感触は、紛れもない本物なのだ。

「シルバさんがなにを考えているのか、私にはわかりませんが。あなたは私を救い、ヴァーユウリンス・ヴァン・フロガフェザリアスさんを救い、アンセリスティア・フレイヤ・レイカーとリンセルスフィア・フレイヤ・レイカーを救い、今ここにいます」

それとも、この世界では満足がいきませんか？　とエスペランサは悲しげに俺を見つめる。
……エスペランサ＝希望神ホープの世界はここだ。
だからこそ、自分の管轄の世界よりも前世の方がいいなんていわれたくないのだろう。

「……俺は、まだどっちがいいかなんて決められないな」
「そう、ですか」

本当に残念そうな顔だな。

っと、俺も過去に捕らわれないでこの世界にきた目的を果たさないと。

龍眼族（レザール）の地位を確固たるものにしないといけないのだっけ。

まあ、レイカー家とのパイプを作った後に考えればいいだろう。

# ０９１　神殿

まだ夏と言うこともあってか。気温はそんなに低くなかった。
いや、学園のあるポラリスに比べれば遙かに寒い。

ヴァーユ先輩、アイライーリス先輩。そしてエスペランサにも防寒具を着させ、取りあえず大丈夫な俺は普段着で北上している。

「よくわからないんだが、レイカー領ってどのくらいの規模なんだ？」

「ポラリス１００個以上？　だっけ。もっと大きかったっけ」

アイライーリス先輩からとんでもない発言が飛び出たが、どうも山脈あたりを保有しているからなんだとか。

「ちょっと次の町に行く前、寄り道をしてもいいか？」

「ん？　どうかしたのか？」

ヴァーユ先輩が、「ほぅ？」とでも言いたげな顔でこちらを向いているが。

俺は極力エスペランサの方を向かないようにしつつ、希望神ホープの支部神殿に行きたいことを伝えた。

「神殿？　ホープ様の？」

「ん、ああ」

アイライーリス先輩は即オーケー。

どうも、人気らしいな希望神。

この世界の神話は比較的神様が人間的で、俺の元いたせかいだとギリシャ神話あたりになるのか。

「デメリットはないし、私もかまわないが……」

ちょっと釈然としない様子のヴァーユ先輩。

まあ、この場合はスルーで。

それにしても、アイライーリス先輩……、すぐそばにエスペランサがいるんだけど正体を明かしたら卒倒するんじゃなかろうか。

本当に倒れそうだな。

まあ、目の前に神が現れて動揺しない人はいないだろうよ。

俺も、転生するとき少々驚いた。

「英雄を生み出す神様で有名なんだよー」

「英雄？」

「過去の魔法大戦時、活躍した人のことを指します」

どうも、希望神は気に入った人に加護を与え、人外じみた力を与えては戦争を一刻も早く終わらせることに尽力していたという。

文献は数多く残っており、その殆どが女騎士の周りを飛び回る妖精の姿として絵に描かれている、と。

加護を与える人って、殆どが女なのか。

……あっれぇ？

「人間と恋をする神様としても知られてるよね」

「へぇ」

と、俺は何気なく会話に参加しないエスペランサに目を向けると。
エスペランサは、顔を少々赤くして「ぽっ」とか言っていた。

なるほど。

「恋をしたのは今までに3回で、全員が歴史に残っているすごい人、だよ」
「うむ」

これ以上はエスペランサが羞恥心で死にそうになっているから、終わらせよう。

「それにしても、シルバ君は龍眼族（レザール）だから龍神アグルスを崇拝しているのかと思ったけど」
「特に特定のっていうのはまだないな」
「そうなんだー」

宗教的な戦争は今まで起こったことがないって。
……正直、前の世界よりもある意味では平和な世界なのかもしれない。

「でも、最近は戦争とかあるのか？」
「１００年くらいはなかったはずだぞ。……最近、不穏なきもするが」

よくわからない。
いきなり戦争が起こったりするからな。

「そういえば」
「ん？」

「昨日、エスペランサと寝ていたシルバはなにもなかったのか？」

それか！

正直、何かしようと思った。

しかし睡魔には勝てず、ふたりして寝てしまったというのが真実である。

情けない話だけどな。

「普通に寝ました」

「そうなのか……」

ほっとした顔を、俺は見逃さない。

同時にアイライーリス先輩も、安堵したような顔ではぁと息をついている。

それにしても、エスペランサの寝顔は本当にかわいいな。

幼女神、最高。

「ここが神殿か」

一言で表そう。

圧倒的白さ。

汚れのない白いペンキの入ったバケツを、神殿の上からぶっかけ

たような感じがする。
荘厳な感じを漂わせつつも、やはり神々しさを感じる。

5段くらいの階段を上り、中にはいるとそこには何人の、異能族（サイコル）。
白装束と紺の袴を身にまとい、仕事をしている様はギリシャ系の神殿なのに、とシュールだが。

「あれは希望神系の神殿に仕える神御子（かんみこ）です。神殿の神によって、袴の色が違います」

えっ。
全部袴なのか。

しかし、驚いているのは俺だけである。
ヴァーユ先輩もアイライーリス先輩も特に疑問を持っていないようだし、エスペランサはなぜだかふんぞり返っている。
いや、理由はわかるんだがな。

## 092　神殿内

「さて、神殿にきたんだがこれからどうするんだ？」
「そうですね」
俺がエスペランサに問いかけると、エスペランサはそばにいた神御子に声をかける。
「すみません、神託（オラクル）をいただきたいのです」
「はい、わかりました」
神託？　と俺が首をひねっているとアイライーリス先輩が説明をしてくれた。
さすがというか、なんというか。もうなにをいいたいのかはっきりしない。
「希望神ホープ様の神託は、一人一人に言葉をいただけるの。そして選ばれた人はこの世界の種族にとらわれない『力』がもらえる」
えっ。
ていうか、その神本人が俺の今目の前で、神御子と楽しそうに談笑をしているんだが。
うーん、『力』か。
俺の【引斥制御（グラビシ・オンコントロール）】はそもそもエスペランサ＝希望神ホープからもらったものなんだが。
そんなことを考えていると、感づかれたのかエスペランサがこちらをむき、口を動かす。

声は聞こえなかったが、それは確かに「あんしんして」と言っていた。

そういうのなら、安心しよう。

「では、偶像の前に案内いたします。……その前にそこの龍眼族（レザール）はこちらへ」

神御子に呼ばれ、俺はほかの人たちの見えない場所に連れて行かれる。

何が起こったのか、俺にはまったくわからなかったが、何か起こったらしい。

よくわからないけれど。

「この辺でいいでしょう。……シルバ・エクアトゥールですね」

「……ん、ああ」

何で俺の名前を知っているんだろう。

エスペランサが教えたっていう可能性もあるのだが、俺を見つめている神御子の目は、「すべて知っていますよ」と俺を見透かしているようだった。

「あなた、この世界の人ではありませんね」

「……いや、今はこの世界の人だ」

断言されたあたり、俺のことを知っているようだが。

いったい、どういうことなんだろう。

俺が転生者、といういみで「この世界の人じゃない」と言っていることは理解できたんだが。

「あなたの身体から、希望神様のオーラが僅かながら漏れ出ています。神託を受けることで人生が変わる場合がありますが、よろしいですか？」
「それはどういういみだ？」
「たとえば、私は神託によりここの神殿の神御子になりました」
神御子は、そう爆弾発言的な何かを口から発する。
「申し遅れました。私の名前はアリュレイ・グロウ・レイリュともうします。『グロウ』は神殿の神御子を指し、レイリュは神託によっていただいた名前です。グロウ・レイリュとお呼びください。」
つまり、名前の意味は「アリュレイ神殿の神御子（グロウ）であるレイリュさん」ということか。
ほうほう、でも俺とはそんなに関係ないな。
「で、俺の人生をかえる、とは」
「それは私には何とも言えませんが、戦争に巻き込まれたりする可能性も少なからずあります」
そのくらいはぜんぜんかまわないんだが。
別に大丈夫。全然大丈夫。
「神託をお受けになられるのですね」
「悪いようにはしないだろう、と思った」
エスペランサのことだ。
大丈夫、大丈夫。

ーーー

私は、別の神よりは人間に近いとやっぱり思われてる。
人に恋は、もちろんしてる。そして英雄として活躍させたあと、最終的には人と神は一生一緒にはいられないため別れる。
そして、数百年後。また同じことをするのだ。

いままでは、有限の命しかなかった現地人が多かったけれど。
今回は、ある意味無限の命を持つシルバさんだ。

「いえ、わかりません」
「そっか。……シルバ君とは、どんな関係なの？」

アイライーリスさんは、どうも希望神信者よりみたい。
きっと私のことは、このパーティの中では一番よく知っている。

だから、そんなに変なことは言えない。

「さて、どんな関係なんでしょう？　私もよくわかりません」
「そっか。……旅仲間ってきいたし、シルバ君のことよく知っているのかなとは思ってるけど、これからもよろしくね」
「よろしくお願いします」

シルバさんのことはよく知っている。
身体に含まれている成分の一つ一つも、そして彼の強さも、能力も。
私が拾って、私が転生させた人なんだから。

# 093　信託待ち

「あ、もどってきた。大丈夫？　なんともない？」

グロウ・レイリュさんに連れられて、元の場所にもどるとまず近づいてきたのは安堵した顔を浮かべているアイライーリス先輩だった。

どうも、俺が龍眼族（レザール）だからなにか問題でも起こってしまったのか、結構心配だったらしい。

少々過保護な気もするが、優しい先輩はいいね。

「いや、なんでもない。大丈夫だ」

「そう？　……よかったぁ」

過保護って結局いいんだろうか。

かわいいけども。

エスペランサのほうをみると、相変わらずのニコニコ顔でこちらを見つめていた。

そしてその笑顔で俺は自分がどんな神託（オラクル）を貰うのかを察する。

まあ、引き受けてやるのもいいだろう。

なんだか、上から目線のいいようになってしまったが、　本当に俺はエスペランサと出会えて、こうやって世界で暮らすことができて幸せなんだから、大丈夫だ。

「はい、こちらです。ついてきてくださいね」

グロウ・レイリュさんは手を上げると、神殿の中央部に入っていく。

それを見届けて、まず入っていったのは希望神信者っぽいアイライーリス先輩と、仲良しのヴァーユウリンス先輩。

そして、俺とエスペランサが少しの間遅れる。

「シルバさん、覚悟はいいですか？」

「怖い言い方をするなよ。……俺の魂を拾ってくれたエスペランサがここに居るから、俺はもう一度生を受けることができたんだ」

だから、覚悟なんて必要はないのだ。

俺が前世で叶えることのできなかった願いを、この世界で手に入れる。

そのためなら、俺はなんだってしてやるさ。

神殿中央部には、太陽の光が直接入り込む明るい場所があった。

ガラスのある様子はないが、雪が降っていても神殿内部は心地よい温度になっているあたり、結界か何かがあると考えたほうがいいんだろうか。

そして、その光の差し込む真下には白い女神像。

虚空を抱きしめるように目を閉じた、彫像でもわかる神秘的な美

しさを誇る長髪の女神は、エスペランサの真の姿だろうか。

「これは、２０００年前の文献と一緒に遺されている造形を忠実に再現したものですね」

グロウ・レイリュさんが俺たちに説明してくれる。

「毎回、文献に登場する女神様の姿は違います。手乗り人形ほどの大きさであるのが一番有名ですが、このように長身の女性の時もあります」

ほう。

で、今回は幼女（ロリ）の姿という訳か。

なるほどな。

エスペランサの方をむくと、すべてを悟ったような笑顔をしている。

しかし、前みたいな悲しそうな笑顔じゃないから、まだ見ていられるのだ。

それにしても、こうみるとエスペランサもわずかながら神々しさが伺えるんだよなぁ。

なんだかんだいって、神聖な場所に行くと神聖なものはさらに神聖になるっていうか、もう何を言いたいのか　訳が分からなくなってきているけれど。

「神託は、誰からお受けになられますか？」

とグロウ・レイリュさんは俺たちに訊く。

どうなんだろう、俺は長くなる、と思って最後にしてもらったけ

ど。

やっぱり最初はアイライーリス先輩か。

「直接、他の方の神託を聞くことは禁止されております」

そう言われて、俺たちは別室へ。

いったいどんな話がされるんだ？

神との対談というものが俺には全く想像できない。

エスペランサは、意識を神殿中央に向けているのか全く喋らない。

想像以上に喋らない。

「シルバ」

「どうした？」

「いや、……なんでもないぞ」

先輩はそういったんだが、正直そんな風には感じられない。

何か確実にありそうな気がするが。どうなんだろう。　いったい何が起こったと言うのだ。

「いや、私は大丈夫だ」

「遠慮しなくてもいいのに」

おれはそういったが。聞き入れてはくれなかった。

エスペランサの情緒不安定の次は、先輩の情緒不安定だろうか。

「そういえば、エスペランサはもう、悲しそうな顔をしなくなったよな」

「そうですね、シルバさんとこれからも一緒に居られるということ

が分かったので」

今、エスペランサはなんとも無さげに言ったが。
言われた本人である俺からすると、滅茶苦茶今気恥ずかしい。

真顔でそんなことを言いかましてくるとは、中々だな。
どうなってるんだ、いったい。
本当にどうなっているのか。

# 094　神託

アイライーリス先輩が戻ってきた。
なんだかんだ、滅茶苦茶上機嫌に帰ってきた。

「ふっふっふー！」
「どうしたんだ、一体……」

ヴァーユ先輩は訝しげにアイライーリス先輩のことを見つめていたが、グロウ・レイリュさんに促されて中央部に入っていく。

エスペランサは、相変わらず俯いている。

「あの、彼女は大丈夫なんですか？」

うん？　彼女はエスペランサからあふれるオーラを感じ取れていないのか。
いや、俺は全くわからないけど。

俺から洩れ出るわずかなものでも、グロウ・レイリュさんは感じとっていたなら、希望神ホープそのものともいえるエスペランサのオーラは滅茶苦茶感じているものだと思っていた。

「ずっと歩いていたからな、疲れたんだろう」

俺はエスペランサの肩を抱き寄せて、逆膝枕をさせる。
うーとか、すーとかいいながらエスペランサは俺にすり寄ってくる。
かわいいなぁもう。

神のことをこういうのもどうかと思うが、まるで愛玩動物だ。

「大丈夫ですか？」

「はい」

エスペランサは今、ヴァーユ先輩と対談中だろう。

結局、アイライーリス先輩が何をしゃべったのか、知りたい気もするが少しまとう。

神殿内で神託の情報を漏らすのはよくないことらしい。

そばに神がいるからよいも悪いものないような気がする！

しかし、さすがに今はやめておくべきだろう。

好きかってするのはもうすこし、「力」を貰ってからだ。まだ慌てるような時期ではない。

「お、ヴァーちゃん帰ってきたね」

アイライーリス先輩の言葉を受けて顔を上げると、たしかにヴァーユ先輩が戻ってきていた。

ちょっとほくほくしている様子からして、何か安堵しているような気がする。

「次は私ですね」

そのまま入ってどうする！

神本人が神殿中央部に入っていきました。

もちろん、すぐに戻ってきた。

3分くらいで戻ってきたエスペランサは、俺だけにみえるようにウインクをして見せる。

その顔を見て、俺は少しだけ安心した。
そして、入れ違いに俺は中央部へ。

「なんていうか、うん、想像はしてたけど」

俺は、目の前に現れた本来の姿。
半透明だが金髪の美女を見つめて、ため息を吐いた。

「これだったら、別にあそこでいってもいいんじゃないか？」
『……ということは、もうわかっているのですね。話が早くて助かります』
「エスペランサ、俺を誰だと思ってるんだ？」

俺は首を振って、不思議そうに首をかしげているエスペランサこと、希望神ホープを見つめる。

「アイライーリス先輩が言っていた通りのことだろう？」
『そうですね、私は。神の身でありながら人間に最も憧れている神です。勿論シルバさんの魂を拾ったのも、転生させようと思ったのも私です』

やはり。……ということは、だ。

『今世の英雄を、シルバさんに任せてもよろしいでしょうか』
「ああ、分かった」

『二つ返事で応じてくれるとは、ありがたい限りです』

エスペランサは、そのホログラムのような半透明な体で俺を包み込むように、手を広げる。

その先に、何があるのかはわからないけれど。

きっと、なるようになるとは思っているから、大丈夫だ。

『これで。……貴方は、龍眼族（レザール）であるとともに【絶越種（トランサンデ）】。その力は後々にわかることでしょう』

俺は、身体に何か違いがないか確かめる。

龍眼族（レザール）の、鱗はいつも通りだ。

別に何ら変わった場所はないが。

『額、ですよ』

「額？」

鏡を見ればわかります、と。

半神態の希望神ホープは微笑んで、神託（オラクル）は終了となった。

# ０９５　誕生（前書き）

起点なので少々短め

# 095　誕生

「シルバくん、その紋章なに？」

確かに、みんなの場所に戻ればわかるとは言われたがさすがに早すぎないだろうか。

アイライーリス先輩たちの前にかえって2秒。

さっそく聞かれた。

「え。何かついてます？」

と、ここで神殿の全神御子が俺に対してひざまづく。

俺は半分訳がわかっていたが、それでも戸惑うと言うことだ。

案内をしている神御子は、その時の参拝客をほっぽりだしているし、掃除中の神御子も掃除なんて二の次というような顔でこちらに頭を下げる。

「鏡、いりますか？」

すべてを知っているエスペランサが、携帯していたであろう手鏡を俺に渡す。

額には、確かに紋章があった。

なんて言えばいいのかわからないが、星と逆星を重ね合わせたものに、翼が生えているような、そんな感じがする、

「それ、英雄の紋章じゃない？」

「そう、ですね」

グロウ・レイリュさんは「まさか本当に」と言ったような顔で俺を見つめる。
残念ながら、事実らしい。
一体どういうことなんだろう。

「でも、周りに希望神はいらっしゃいませんね」

白々しいぞ、エスペランサ。
すごく白々しい。

「そうですね、でも時間がたてば現れてくれるでしょう」

それでも、グロウ・レイリュさんは落ち着いていた。
今世に英雄が現れたという、興奮もあるのだろう。
同時に、この世界がどうなるかわからないと言うこともあるのだろう。
しかし、それでも。

彼女の顔は希望に満ちているのだ。

……そんなに、期待されても、何が出来るかわからないがな。
俺はそんなことを思いながら、唖然としているヴァーユ先輩とアイライーリス先輩にウインクして、髪の毛で紋章を隠す。

「……こういう、ことだったんだ」

アイライーリス先輩は何か呟いていたが、よく聞こえなかった。
いったいどういう事なんだろう。

でも、大丈夫だ。
俺にはエスペランサがいる。
誰も怪しまない小さな少女は、最初から俺のそばに居てくれた。
だから、きっとこれからも、うまく行くと俺は信じている。

「グロウ・レイリュさん、ありがとうございました」
神殿から少し離れた場所。
俺たちは、神殿をあとにしようとしていた。
「いえいえ。すばらしい英雄になってくださいね」
何もしゃべらない先輩方二人。　さすがに驚きすぎである。
若干引きつつ、俺は二人の肩をたたいた。

一体、神託で二人は何を言われたんだろう。
何を言われたのかが一番気になるが、何もいってくれないと言うことは何か言いにくいことなんだろうか

「シルバくん、私、がんばるから」
「ん？」
「ううん、なんでもない」

何をがんばるんだろう。
そうやってふくんだ言い方をされると、いろいろと憶測が浮かんでしまって自分の考えがまとまらなくなる。

「でも英雄、か」

なかなか、悪くない響きだな。
俺が前世でもらえなかった名前だ。

この世界で、それをもらってみるも悪くない。

## ０９６　グロリウス（前書き）

紋章の画像つき！

## 096　グロリウス

「シルバ君は、希望神の英雄になったわけだけど……。べつに今のところなにも変わりはないのよね？」

神殿を出て、約半日。

そろそろ夕暮れ、というころ。

もう少しで次の町、といったところでアイライーリス先輩が、こらえきれなかったように俺の紋章を指差して訊いてきた。

＜ｉ１２６６４４―８７１０＞

それにしても、この紋章はかなり目立つような気がする。

基本的に、黒と黄色で構成されているんだが、どうしてもこれは目立つ。

黄色と黒で警告色。おそらく黄色は光を表しているんだろうが、それでも目がちかちかする。

しかも、それは額全体を覆うように現れている。

希望神の英雄は、代々こんなに目立つものを惜しげなくさらしていたんだろうか。

「まあ、とにかく。どこかでバンダナとかを探さないと」

額を隠す何かを探さなければ。

少なくとも、俺はやっていられない。

「英雄はでも、俺は二の次にしたいんだがな」

「ん？」
「学業をちゃんとこなして、魔剣を鍛冶で創って、でいいと思うんだが」
元々、クレアシモニー学園に入学したのは、前世で最後まできちんとした教育を受けられなかったからだ。
平和なはずの世界だったのに、まさか高校最後の年に、国を越えた域の戦争が起こるとは思わなかった。
「ん、じゃあ、学園を出たらどうするつもりなの？」
卒業したら、か。
俺は、やっぱり魔剣鍛冶かなと考えて、エスペランサを見つめた。
この話題には、「我関せず」とでもいいたげな顔でスペランサは首を振る。
神様は、正直どこに言ったって何とかなるからな。
まあ、俺が「希望神の英雄」になった以上、エスペランサが俺の傍にいてくれるんだろうとは確信に近い何かをもっているのだけれども。
「先輩方は？」
「私は、何もなければ冒険者になりたい、と思っている」
ヴァーユ先輩は、少々意外な答えを出した。
冒険者？　と聞き返す俺。
と、先輩は決意済みの毅然とした目で「自分の可能性を試したい」と答えた。

俺の見解からは、普通に嫁いで平和な暮らしをするのかと思っていたが。

「私は、魔導関係の研究所に入りたいかなって」

「えっ」

「私、脳筋じゃないんだからね！」

アイライーリス先輩は少々頬を膨らませていたが、誰もそんなことは聞いていない。

魔導関係ということは、大体が魔導傀儡……つまりゴーレムの研究というわけか。

前世でいい喩えるなら、ロボットの研究というところかな。前世ではＡＩで感情を　生み出そうとしているが、魔導傀儡（ゴーレム）も似たようなものだ。

アイライーリス先輩も、美少女だから普通に嫁ぐのかと思ってた。

そもそも、この世界で可愛い人なんて大体嫁いでるし。

魔法に長けている人は、それだけに限らないということか。

「ところで、エスペランサちゃんは？」

「まだ何も、決めてないです」

何も決めてないっていうか、どうにでもできるの間違いじゃなかろうか。

まあ、さすがにここでいうのも野暮だから、何も言わなかったけれど。

アイライーリス先輩とヴァーユ先輩は、「まだまだ時間はあるから」と普通の後輩に対する対応をしていたが、二人がエスペランサの正体を知ったときどんな顔をするんだろう。

まあ、そんなことは起きないのかもしれないが。

そんなことを話しあっているうちに次の町へ到着した。
町の名前は「グロリウス」。
その言葉から来るイメージとたがわず、何処か透き通った印象を俺たちに与えてくる「中都市」だ。

「ここ、私の実家が近いな」
「そうなのか？」

ほう、ヴァーユ先輩はここらへんの出身なのか。
まあ、都市じゃなくて多少なりの私有地があるから、厳密にいうとここじゃないということ、なのかな。

「ここは私が詳しいし、宿屋は任せてくれ」
「ん、お願いします」

ここは、知っている人に任せたほうがいいだろう。
変になんでも自分でやろうとして、混乱を招くよりはマシだ。

「部屋はどうする？」
「昨日と同じ方法で」

エスペランサと俺、アイライーリス先輩とヴァーユ先輩。
正直な話、エスペランサと寝ていると自然にリラックスできる。
逆にいうと、アイライーリス先輩やヴァーユ先輩と一緒に寝ることなんかになると、俺は多分緊張で寝れなくなってしまうだろうか

ら。

「むう」

少々不満げだったが、なんだかんだヴァーユ先輩はうなずいてくれた。

俺の今のところ、俺がそばにいてリラックスできるのはこの世界でたった2人だけ。

時間は、かかると思う。

「手分けしようか。アイラ、私と一緒に部屋を取りに行こう」

「俺とエスペランサはバンダナと、食事の場所の確保か？」

「ん、そうだな。ここで2時間後に集合、ということで」

今、俺たちがいるのは中心部から少々南にはずれた役所のひとつ。確かにわかりやすいし、中心部からは徒歩１０分ほどだから大丈夫だろう。

そうすることにしよう。

「ん、行ってしまいましたね」

「ああ、そうだな」

俺が、エスペランサの手を握ってやるとエスペランサは泣きそうな、嬉しそうなそんな顔を見せてきた。

今世での、彼女のパートナーは俺だ。

それなら、このくらいは許してくれるだろう。

「エスペランサ」
「はい」
「時間は、いくらでもある」

俺の言った意味が、エスペランサには理解できただろうか。

この世界で、ちゃんとした死に方をできたら、俺は神になれる。

ほかの英雄とは「決定的」な違いが、俺にはある。

まだ、いくらでも時間はあるのだ。

## ０９６　グロリウス（後書き）

両側の下があいているのは仕様です！

## 097　バンダナ（前書き）

画像つき！

# 097　バンダナ

「シルバさん、こんな柄とかどうですか？」

今、俺とエスペランサはそばにあった洋服店に来ていた。

ビルの一階部分にある、どう見ても都市的ではないその店は、高層ビルという現実的な雰囲気を漂わせながらもどこかファンタジーっぽい。

それだから俺にとっては新鮮なのだが、別に周りの人は何とも思っていないみたいだ。

「あの、聞いてます？」

「ああ、すまん」

周りの独特な雰囲気に包まれて考えに耽っていた俺を、エスペランサは「もう」と、頬を膨らませた。

でも、今まで言ったことのある村は、本当に言っちゃあ悪いが小さな村、みたいな雰囲気しかなくて。

こんな、俺の認識からすれば「幻想的」な雰囲気は初めてだから。

魔法とか、散々見てきたし俺も使った。

でも、俺の前世では超能力が存在していたから、そんなに新鮮さはなかった。

でも、前世の建物はどう見ても現代的で、少し間違えれば近未来的と称されるほど、主要都市は発展していたから。

こういう雰囲気、悪くないな。

「こっちと、こっち、どっちがいいです？」

我に返り、エスペランサのほうを向くと彼女は二つのバンダナをこちらに見せていた。
色は赤と黒を基調にした、どこか和風っぽい文様の並んだものと。
白と青を基調にした、幾何学的な記号のようなものが規則的に並んだものだ。

＜ｉ１２７４３５｜８７１０＞
＜ｉ１２７４３２｜８７１０＞

「うーむ」
「こちらはオウラン帝国のものですね、獣腕族（ケレイジ）」の、有名な紋章の一つです」

うん、それはわかる。
三つ巴、というやつだろう。

俺はそれよりも、「オウラン帝国」という場所に興味を示した。
まあ、それについては別でいいか。今聞かなくても、寝るときにエスペランサに聞いてみよう。

「で、もう片方がこの国、カエシウス聖王国風のものですね」

風、ってことは正しくは違うものということなのかな。
ま、特に関係はないか。

「どっちがいいですかね？」
「値段もそんなにかからないし、別にいいんじゃないか？」

どっちも買う、ということでと、俺は答えた。

「ほぉ。そういう選択肢も確かにありましたね」

「どっちも、こんなに多くの種類からわざわざ選んでくれたんだし」

一つを使いまわしっていうのも、少しきついところがあるもんな。

エスペランサが選んでくれたものだし、本当にうれしいものなんだな。

「ありがとう」

「……いえいえ」

「いいの？　エスペランサちゃんとシルバ君を二人っきりにして」

左のほうから、アイラの声が聞こえた。

アイラは本当に単純だから、おそらくシルバとエスペランサが一緒にいると心配なんだろう。

私だって、心配と言ってしまえば否定はできない。

「でも何か、エスペランサは隠しているような気がする」

「隠してる？」

「妙じゃないか？　あの知識量とか。……希望神ホープの純粋な信者であんなに詳しかったアイラよりも、詳しいことがあるし」

「私は、エスペランサちゃんいい子だとおもうよー」

いろいろと不安だけどね、とアイラは自虐的に笑って私のほうを向く。

「ところで、ヴァーちゃんはどうなの？」
「どう、とは？」
「ふふ、どうだろうねー」

うまくはぐらかされた。

私は考えるのをやめて、あたりを見回す。
ここは一言でいえば、宿屋街。

「どこがいいとおもう？」
「そうだねぇー、私は一般的なところでいいと思うけど？」

値段的に、中といったところ、を指しているのかな。
それなら知り合いの宿があるし、そこなら少しくらいならサービスしてくれるかもしれない。

「さて、いこうか」
「本当に、ヴァーちゃんって男勝りな性格してるよね」
「そうか？」

シルバ君としゃべるのと、そんなに変わらないかんじ、とアイラ。
その言葉に少々、なんと返せばいいのかわからず苦笑いで返すことにして、私は足を進めた。

それにしても。……魔剣の名前、いったいどうするんだろう？
私とアイラの、２つの魔剣のおかげで私たちは、そんなに話しか

けられないのか……？

「かなりの威圧力よね、この魔剣。……鞘の隙間から、隠せないほどの魔力が流れ出しているし……」

普段は目に見えないけど、魔力を直接見れる人とか、魔法で見れるようにすればかなりのものが視認できるとおもう。

なんせ、見れない私たちでも確実に感じ取れるんだから。

「これ、数億で作らせたのは無名とはいえ、ちょっと安すぎたかなぁ」

「……魔剣鍛冶師、か。」

# ０９８　国（前書き）

そろそろ１００話ですね！
１００話は記念の紋章でも作ろうかなって思ってます。

# 098　国

「国について教えてほしい？」
「ああ、さっき聞いたオウラン帝国の意味もよくわかっていなかったし、これからも旅をしていくにつれて必要だと思った」
バンダナを買って、俺とエスペランサは先輩たちと合流し、どうもヴァーユ先輩の知り合いの宿らしい場所に泊まることとなった。
女将は、脱色したような白髪（しろかみ）の似合う美人。
亭主は、体格のいい金髪のマッチョ。
知り合い優遇か、俺の種族も関係したかわからないが、普通の部屋と同じ値段で1ランク上の場所に泊まれることになった。
バンダナはもう装着していたから、紋章のおかげとは思えないけれど。
それにしても、この宿は結構……。
日本的というかなんというか、外国人ががんばって和風にしてみた、みたいな雰囲気だな。
「ええと、前世の記憶とリンクさせて、せつめいしたほうがいいですよね、もちろん」
それで頼む、と俺が頭を下げるとエスペランサはふふふと笑って見せる。
その顔、実にそそられていい。
「そうですね、まず『オウラン帝国』から行きましょうか」

オウラン帝国。
それは、腕獣族（ケレイジ）と械刃族（サミュリ）がほとんどの国らしい。
帝国、と銘打ってはいるが帝政ではなく立憲君主制。

つまり、憲法が王の上にいるということだ。
建前上では。

「この世界では、一番の領地を有する場所ですね」
「ほぅほぅ」
「シルバさんのもといた世界でいえば、ロシアとインドを合わせたくらいの面積はあります」

思った以上に広かった。
そもそも、この世界というか、この惑星がどのくらいの大きさなのかわからないから、俺は何とも言えないのだけれども。

「思えば俺、械刃族（サミュリ）知らない」
「そうでしたね。腕獣族（ケレイジ）が獣人だとするならば、械刃族（サミュリ）は一言でいえば、サイボーグです」

ほぉ。
なかなか、一つの国とするにはミスマッチなかんじもするけれど中々面白いな。
で、腕獣族（ケレイジ）は基本的に和風。

「あのとき、説明しましたっけ。……クレアシモニー学園にいた、ギリス・ランレイは械刃族（サミュリ）ですよ」

そんな人いたっけ。
……ああ、ランと戦っていた人か。

「あまりにも印象が薄すぎて覚えてなかった」
「そうですか……」

ランに負けていたくらいだし、そんなに強くないという感じはしていたな。
本当に、俺は俺と関係ないことは何も知らない感じなんだよな。

この世界の事は、これから生きていくうえで欠かせない知識になりえるから頑張って覚えようとはするけど。
いちいち、他人の事なんて気にしていられないっていうか。
面倒事を抱え込むのは問題ないが、できれば俺の意思で巻き込まれたい。

たとえば、今回の出頭みたいに。
今回に至っては、俺がランを倒して双子のレイカー姉妹を救った結果だから、俺は何も思わないけれど。

「むぅ。……で、何か質問は？」
「今のところはないかな」
「はーい。次はここ、『カエシウス聖王国』ですね。ここは説明いらないでしょう」

ここはいらないな。確かに。
と、俺は部屋の中だということにやっと自覚を持って、エスペランサに選んでもらったバンダナを外した。

「次は、『セリシト魔法王国』。知勉族（エリシュ）と翼羽族（フライド）の住む自然豊かな国です。ラン・ロキアスさんのそばにいたリンナアイデル・パン・リーフさんはそこの王族ですね」

王族にしては、なんだか微妙な立ち位置だったような気がするけれど。
だって、転生者っていうは俺と同じならば学園に入るまでは放浪していたはずだ。

「君主制というか、王様という概念がない国ですね」
「？」
「魔法王国を統治しているのは、賢者なのです。魔法を極め、すでに百何十年と生きながらえている魔法の学者様」

賢者の統治する、国か。
いきなり幻想的な話になってきたぞ……。

魔法に優れた世界、というのをそんなに感じられないんだよな、ここもそうだが。
どうしても、科学というか近代的なイメージに、中世さを残した感じが『カエシウス聖王国』にはある、気がする。

「翼羽族（フライド）は初めてですね。簡単に言えば、背中に翼が生えただけです」
「ずいぶんとそのままだな」
「だって、本当にそのままなんですよ？　ある意味では、一番人間という種族に近いのではないでしょうか。翼という武器を持って三次元的攻撃ができる以外は、すべて平均的ですし」

それにしても散々ないいようだなぁもう。
この世界に種族神なんてものが存在していたら、フルボッコじゃなかろうか。

「このくらいで説明は終えたいと思いますが、どうですか？」
「何を？」
「疲れているようですし、ひざまくら、しましょうか？」
……この子は天使か。
間違えた、女神だった。

## 099　朝

「……おはようございます、シルバさん」
「ああ……ひざ、痛くなかったか……？」
目を開けると、外はすでに明るくて。
俺は、ひざまくらされたまま寝ていたらしい。
「お気になさらず～」
いや、あまりにも気持ちよかったからつい、意識を俺は落としてしまったんだが。
どうすればいいんだろう？　エスペランサはちゃんと睡眠をとったんだろうか。
「エスペランサ、体調は？」
「私も寝ましたので、大丈夫ですよ」
にこにこ、と幸せそうな笑みを浮かべるエスペランサの顔に、疲労らしき疲労の顔は見当たらない。
俺ははぁ、と息をつき手を伸ばし彼女の頭へ移動させる。
そのままなでつけると、エスペランサは恥ずかしそうで同時に嬉しそうな顔を浮かべ、俺の顔から笑顔も自然とこぼれた。
「さて、そろそろ準備していきますか」
「そうだな」
俺はまだ、エスペランサが俺と一緒にいて幸せかどうかはわから

ないが。
少なくとも俺は幸せなんだよな、まったく。

「どうしたんですか？　そんなに覗き込んで」
「……心を読んだらすぐわかるだろ？」
「大好きな人に対して、そんな失礼なことしたくないですし……ね？」

ああーかわいい。
俺のキャラが崩壊の危機に瀕しているのが自分でもわかるが、彼女を一日中愛でていたい感情に駆られた。
これが試験の旅とかじゃなかったら、普通に旅行に向かっていたのに。
一時的に、レイカー家のことを忘れてしまいたくなる程度には、エスペランサが魅力的に思えてきてしまう。

「こんど、二人で旅行いこうな」
「……機会があれば、ぜひお願いします」

そんなことしなくても、いつでも世界中旅してまわれますよ、とエスペランサ。
しかし、そんなこと言われても困るのだ。

この世界では、俺は魔剣鍛冶になりたいなと思っているんだから。

「鍛冶師が本職になるのは、もしかしたらご隠居してからかもですよ」
「ということは、戦争とか起こる、ということか？」

俺が問いかけるが、エスペランサはあいまいに首を振った。

「戦争を起こすのは、たいていの場合は人であり神ではないのです。なので、私はどうもできません。……かろうじて予測できる、またはある程度操作できるのはスロツ＝トールだけですね」

運命神の名前、すごく久しぶりに聞いた気がする。

間違いではないはず。

「じゃあ、希望神ホープの役割は？」

「……私は、英雄を作り出して世界の崩壊をなくすだけですよ」

でも、結局は英雄の行動次第なので。と悲しそうに笑うエスペランサ。

その悲しい顔は、こちらまでもそうしてしまいそうで本当にいきのどくな感じもしてしまう。

「あの……」

「ん？」

エスペランサが何かを聞きたそうな顔をしていたので、俺は向いた。

少し言いづらいことなのか、どうなのか。

「……きょ、今日はどうします？」

「どうするって？」

「……一日、休みません？」

……ふむ。

確かに、それはいいにくいな。俺は何とも思わないけれども。

あとで、先輩方に問い合わせてみるか。

「……もしかして、デート行きたい感じか？」
「あたりまえじゃないですか」
なら、ぜひ行こうかー！
本当に、俺のキャラは大丈夫なんだろうか。
俺自身、自覚はあるというのに崩壊を余儀なくされているようで戸惑っている。
「シルバさん、最近表情が柔らかくなりましたね」
「ん？　そうか？」
「そうですね、転生したばかりの、なんていうか焦った感じがする表情ではなくなり。余裕が出てきたような気がします」
そうなのか？
特に俺は気にしたことがないけれども。
でも、俺の外見を一番よく知っているのはエスペランサだからな。
「……さて、行きましょうか」
「そうだな」

# １００　納得（前書き）

今日の夜に１０１話更新。特別篇（？）

## １００　納得

ヴァーユ先輩は、意外にもすぐに1日の休暇許可を俺たちにくれた。
おそらく、この旅はもともと俺が中心となって言っているものだということを、きちんと理解しての返答だろうが。

「というわけで、俺はエスペランサといってくる」
「えっ」

だが、俺がエスペランサと町を回るといった瞬間、先輩方の表情は急にすぐれないものになった。
いや、原因は俺だっていうことくらいわかっているのだが。
それでも、なんで俺だけがこうなってしまうのか、という部分で俺もあまりいい気がしない。

「むぅ」

アイライーリス先輩も、ぶぅと頬を膨らませているあたり納得のいかない様子。
しかしなぁ、と俺は自分の状況を見返してため息をついた。

確かに、俺がアイライーリス先輩に魔剣を作って、同時にヴァーユウリンス先輩を救い出したのは事実だ。
彼女たちが、俺に対してなんやらわからない好意を抱いているのもわかっているし、俺だってどうせなら付き合いたいと思う。

しかし、時期が時期なのだ。
今は試験の旅の途中で。

本当は俺とエスペランサだけでもよかったのに。

エスペランサの名前を使って、ほいほい釣られてきたのは先輩たちなんだから。

確かに、引き合いに出したのは悪かったかもしれないけれど。

「……シルバさん」

これは、俺とエスペランサだけが、『エスペランサ＝希望神ホープ』という方程式を知っているからだろう。

全員に知らせていたら、みんな文句は言わないはずなんだけれど。

「シルバさん。……4人でいきましょ、ね？」

ほら、こうやってエスペランサが悲しそうな顔をするからあまりこんな、修羅場的なことはしたくなかったんだが。

「……もう一回訊くが、エスペランサ・ホープレイとシルバはどういう関係なんだ」

これは、ヴァーユ先輩は通してくれないようだな。

さて、いったいどうするか。

最悪、エスペランサに権能を使ってもらうというのも考えた方がいいのかもしれないし、ここですべてを白状してしまうか？

でも、白状したら白状したでいいようには進まない気がするんだ。

まだ、その時ではないと俺の本能がそう告げている。

「ただの旅」

「その言い訳はもう飽きた」

やっぱり飽きていたか。
しかし、でもなぁ。

「そもそも、エクアトゥールの家名なんて、今まで聞いたことがないぞ」
「……そりゃあ、別世か、じゃなくて田舎出身だから」
「田舎出身で、魔剣は作れないはずだぞ。このご時世、魔法に秀でている家が上にいくんだからな」

ああ、……この世界も血統主義なのか。

「……この世界も、やっぱり魔法は遺伝するのか」
「この世界も？　……まあ、魔法の技術は遺伝するし魔力を蓄えられる数も遺伝するな、ほとんどのばあい」

前の世界は、魔法ではなく「属性能力」ってよばれる超能力と異能力の中間のような力だったけれど。
この世界と同じように、強い家系が上に行っていたのは間違っていない。

「突然変異、ということもあるじゃないですか」

と、エスペランサが俺に助け舟をだしてくれた。
ほう、この世界には突然変異なんて言う言葉が存在するのか。

この世界の遺伝関係がどうなっているかわからないけど、やっぱりどこか間違えて　とんでもなく強くなる子供とかいるんだろうな。
かといっても、俺は前世ではその『突然変異』みたいな一種なわけだったんだが。

「謎法族（カラミタ）な訳もあるないだろう」
「魔力が、ほかの人よりも種族の中で秀でるということは結構あると思いますよ」
「ぐっ」

さすがエスペランサ、この世界の事はほぼ何でも知っているこの世界の希望神、である。
知識最強は、間違いなくエスペランサだろう。

「そもそも、私が謎法族（カラミタ）なのですから」
「えっ」

そもそも、謎法族（カラミタ）っていったいなんなんだ？
俺はよくわからなかったため。一応ここではスルーすることにする。

この世界では基本となる６種族が人口の約８０％を占めており、次いで多いのがほぼ閉鎖的な空間で技術を蓄えている俺以外の龍眼族（レザール）。
確か、今はすでにいないが上位種もいるらしいし、別に俺が知らないものもあるということだろうか。

あってもおかしくはないんだけどな。

「龍眼族（レザール）と謎法族（カラミタ）のコンビということか」
「……そうですね、他は今まで言ったとおりですよ。世界をとはいいませんが、旅仲間です」

実際、エスペランサはそれ以上なんだけどな。

神だし。なんだかんだ。

そうだよ。

ひざまくらとか色々してくれるから、たまに忘れそうになるけど彼女神だよ。

「ほぅほぅ」

納得するのか……。

謎法族（カラミタ）、聞けば聞くほど実際謎の深まっていきそうな種族だな。

「……仕方ない」

「ありがとうございます」

にこっ、と俺を振り向くエスペランサ。

あきらめたように顔を見合わせる二人の先輩を傍目に、彼女は俺の手を取ると、その場から離れようと引っ張り始めたのだった。

先輩たちの姿が完全に見えなくなってから、エスペランサは俺のほうに向き直って手を名残そうにしながら離す。

が、俺は離れようとした彼女の手を、強く握りしめることによって彼女を逃れなくした。

結果、嬉しそうな顔をされたんだが。

「なあ、謎法族（カラミタ）ってなんだ？」

「簡単に言えば、先ほど言ったとおり突然変異種ですよ。どの種族からも、超低確率で生まれる、魔力を数百人分蓄えられる……。いわば魔人族、といえば想像はしやすいでしょうか？」

「俺のイメージと、エスペランサのイメージが一緒だったらな」

「まあ、普通は生まれないですし、ほかの種族とは強さがいろいろと桁違いなので、忌み嫌われたりとか逆に崇拝されたりしますけれどもね」

私は本当の話をすれば、種族を持たないので自分を偽るには一番いいです、と彼女は笑った。

「そういえば、種族の話もよくしていないのでしたっけ？」

「誰かにしてもらった感じはするけれども。俺の知っているのは7種族だけだな」

そうですか、では今度の時期にと、エスペランサ。

さ、今はデートを楽しもう。

## １０１　特別版　種族について（画像あり）（前書き）

ｈｔｔｐ：／／８７１０．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／
他にもいろいろ作ってます

２ＤＣＡＤを駆使して作りました。

# １０１　特別版　種族について（画像あり）

知勉族（エリシュ）

＜ｉ１２８２５６｜８７１０＞

魔法に秀でて体力の乏しい、基本的な後衛を担当する種族。
耳が細長いのが特徴。
紋章の位置は鎖骨。魔法を使用したとき、色のない部分（白い部分）が属性の色に発光する。

醒眼族（ウェイカー）

＜ｉ１２８２５５｜８７１０＞

体力に優れ魔法に乏しいが、種族の固有能力によって可能性が幾分にも膨れ上がる種族。
もっとも「人間」に似た姿形をもつ種族。ただ総じて平均的に筋肉質。
紋章の位置は二の腕。腕輪のようにまとわりついている。

翼羽族（フライド）

＜ｉ１２８２５８｜８７１０＞

魔法も体力もそこそこある種族。
自由に飛び回れる翼を背中にもつこと以外は、平均的な能力を誇

る種族。翼の形は人による。
紋章の場所は翼の付け根中心部。

械刃族（サミュリ）

＜ｉ１２８２５４―８７１０＞

ほぼ無限の体力を持つが、魔法は一切使えない半機械仕掛けのサイボーグ種族。
体のどこかが機械仕掛けになっており、武器などになる。ちなみにサイボーグのまま生まれる。
紋章は心臓部分。

異能族（サイコル）

＜ｉ１２８２５３―８７１０＞

魔法とは違うもう一つの魔術を扱う条件として、相当な体力と魔力を体にため込むことを強いられた種族。
６大種族の中では一番万能ともいえる。
紋章の場所は掌または甲。男が掌、女が手の甲。

腕獣族（ケレイジ）

＜ｉ１２８２６１―８７１０＞

物理法則にすら迫るほどの身体能力のかわりに、魔法関係がから

っきしな種族。
基本的に獣耳、尾あり。体毛の生えた種類もある。
紋章は額部分。

ここまで6大種族

龍眼族（レザール）

＜ｉ１２８２６０―８７１０＞

全種族の中で最強の膂力と、種族平均を超えた魔法を使う希少種族。また、「龍眼」という能力をその名の通り目に宿している。
基本的に、耳がとがって体格が醒眼族並ではないもののよくなって、顔や手の甲などに鱗が数枚くっついている程度だが。
『龍化』能力を使うことで本来の姿、角と尾が生えた完全な龍人形態になることもできる。
紋章は首の根本から肩にかけて。

謎法族（カラミタ）

＜ｉ１２８２５７―８７１０＞

全種族最高の魔法才能をもつ突然変異種族。
基本紋章が上のものであり、魔力を使えば使うほど紋章が身体中に走り出す。
基本紋章の場所は背中。

## １０１　特別版　種族について（画像あり）（後書き）

これからも、龍眼族をよろしくお願いいたします！

# １０２　朝食

「さぁてどこを回りましょうか、シルバさん！」

エスペランサは元気いっぱいにそういうと、握っていた俺の手を、さらにしっかりと握りなおす。

細くて、同時に白亜な手だ。

ずっと握って痛くなるけれども、龍眼族（レザール）の膂力（りょりょく）で握ったら、いつ折れるかわからないというのが問題。

「大丈夫ですよ。……謎法族（カラミタ）の身体は魔力で強化されていますので」

「そうか」

俺の考えていることをくみ取ってくれたらしい。

そう説明し、念を押すように笑ってくれた。

「思ったよりも強靭なんだな」

「強靭というよりは、魔力を常に発散している形になるのですが、それが基本的には吸収力の強い謎法族（カラミタ）の周りに纏わりつく。ただそれだけです」

結果的にそうなっているだけなのか、なるほどな。

よくわからないけれど、わかったということにしよう。

「そんなことはどうでもいいのですよ」

「ん？」

「どこいきます？　朝もまだ食べてないですし、何処かご飯に行きましょう？」

そういう気遣いは本当にありがたい。

「なら、エスペランサの食べたいものを選びな」

「はいっ」

さすがに、俺が金を出すけどな……。

「……この世界、普通に前の料理レベルはあるんだな」

「たまに、高級食材で魔法効果を持ったものとかありますが、大体はシルバさんの世界とお変わりないかと」

もきゅもきゅ、とサンドイッチをほおばりながら答える。

そういえば、俺はこの世界に来て食品について何にも違和感を持たなかった。

普通は警戒と化するべきなんだろうが、なぜなんだろう？

「おいしいですよ、体が内側から暖まっていくような気がします」

「普通のサンドイッチだろう？」

彼女の言葉に違和感を覚え、俺は彼女から手渡されたサンドイッチをかじる。

……確かに、内側から暖まっていくような気がする。

「……？」

「たぶん、食材に先ほど言った魔法効果のあるものが入っていたんでしょうね」

それならもう少し高いはずなのですが、近くに産地があるのでしょうかと彼女は首をかしげた。
中身を見ても俺には、普通にいいピンク色をしたハムと、おそらくキャベツ、トマトなどの野菜がパン生地に挟まれている一般的なものにしか見えなかったが。

「味は普通なのにな」
「ですねー」

単純に何もないけれども。
ちょっとだけ、すぐに得られる小さな幸せ。

それでもいいから、少しずつ積み上げていけばいい。

「むぅ、せっかくシルバ君と旅に出れたのに」

隣で、アイラが頬を膨らませながらパンをくちに放り込む。
頬を膨らませているのは、不満からかそれとも単に食べているからなのか。

確かに、私はエスペランサ・ホープレイが謎法族（カラミタ）だということに驚いたが、逆に納得できたというか。

シルバのことをあきらめるつもりはないけれども。結局は少し難しくなる。

謎法族（カラミタ）の魔力は上位種を除けばすべての種族を凌駕する。

私のような醒眼族（ウェイカー）なんて、片手間で分子レベルにまで分解できそうな勢いだ。

未成年で未覚醒であっても、恐らく私を町の端から端まで吹き飛ばせる。

敵に回したくはないが、しかし私も……。

「ぐにゅにゅぅ」

「なんだその声は」

「……うー、くやしいよ」

悔しいと思っても、どうやって相手に勝利できるか常に考えようとしないと。

そうしないと、本当に何もできなくなるから。

「ヴァーちゃんは悔しくないの？」

「私だって悔しいさ。しかし、諦めては何も始まらないんだからな」

私が自分に言い聞かせるようにしてそういうと、アイラはうん、とうなずく。

悔しさをばねにして、魔力じゃなくて別の場所で彼女に勝てるようにならないと。

この国……というかこの世界は実力で得られる地位が普段は血統のやや上を行く。

さすがに王族は無理でも、貴族くらいは武勲を上げれば与えられる。

実力で億万長者になったり、有名になったりということはたやすい。

だからこそ。私は負けられないのだ。

## １０３　鑑定（前書き）

少々短め、明日から本気だします。

# １０３　鑑定

「……なぜ、わざわざ鍛冶屋に来たんだ？」
「もらったこの剣の、強さを鑑定してもらうためですよ」
おそらく、魔剣であっても彼らは買い取れないでしょうしと笑って、俺のほうを向く。
「ところで、この魔剣の銘をまだ付けてもらっていません」
「そういえばそうだったな。魔剣の名前には何か規則とかあるのか？」
俺がエスペランサに問いかけると、彼女はとくにないと答える。
「でも、属性の直接的な名前を付けるのなら、それ相応の質は必要になりますよ」
だろうなぁ。
そのくらいはわかっているが、まあ大丈夫だろうと俺は判断して。
とりあえず、その剣の名前を……。
護身用、といったけれど。
そのその剣は、鞘から抜いてさえいれば攻撃を自動追尾で迎撃するっていうものだ。
「【朧迎（ハイドリバース）】、どう？」
「ありがとうございます！」
思った以上にエスペランサが喜んでくれた。

魔剣をもらうことがうれしいのか、それとも俺にもらったということがいいのか。
よくわからないが、両方ということもあり得る。

「さっそく、鍛冶屋に行きましょ」

そういって銘打ったばかりの剣を持っていく先は、普通の武器鍛冶屋である。
俺が言うのもなんだが、すまん。

なんか悪いことをした気がして罪悪感が凄い。

「……鑑定？」
「はい、できればこれを」

そういってエスペランサが取り出したるは、鞘に包まれた小さな短剣。
店員がそれを受け取り、いぶかしげに見つめながら鞘を引き抜くとそこにあるのは淡く青白い感じで発光している魔剣だ。

「うわわぁ！」

危うく取り落としそうになった店員。
そら、「鑑定したい」で魔剣を持ってきたら誰だって驚く。

おそらく、魔剣を作ったことはおろか見たこともないんだろう。

「気を付けてくださいね」

「ああ、すみませんすみません」

と、この時点でその店員はお手上げのようで、上の人を呼んでくるという。

まずは鑑定だけ、ということだったんだがどうなんだろうか。

そもそも、この店に魔剣を鑑定できるひとがいるのかと問われれば、普通の武器よりも圧倒的に絶対数の少ない魔剣を知っている人はいるんだろうか。

いないだろうな。

「すみません、うちの店ではお取扱いできません」

なんか、偉そうな人が3人ほど。

頭を下げにやってきた。

最初から売るつもりもなかったのだが、どうも価値がつけられないらしい。

やっぱり、ここには魔剣を知っている人がいなかったのか。

「どこか、鑑定できる場所を知りませんか？」

「この町の中心部に、もう一つ鍛冶屋がありますけれど。そこでならなんとか」

何とかなるというらしいけど。

そもそも、エスペランサはなぜこんなにもって。

「何が目的で？」
「そりゃあ、シルバさんが鍛冶師としての定職に就いた時、就職先を決めるためですよ」
「？？」

訳も分からず、俺は頭をひねる。
正直、作業する場所と作業に必要なものさえあれば何とかなるのだから、放浪しながらでもいいかなと思っていたんだ。
だって、英雄っていう稼業もあるのだし。

「魔法で、無限に収納できる鞄みたいなものは作成できるのか？」
「できなくもないですが、それはもちろん、重さ無視ですよね？」
「そうだな。……作業台と、魔力をため込むタンクと、あと金属素材、魔石、などなど」

俺が、彼女にどこかに店を構える可能性は少ないことを伝えると、彼女は少々迷ったように首をかしげた。

「それ、自分で作るつもりなんです？」
「作れるのなら、自分で作りたいけれども。……売ってるってことはないんだよな？」
「そもそも、存在していたら国宝級の代物です……。っていっても、魔剣をいとも簡単に作ってしまうシルバさんなら、たやすいことかもしれませんね」

それよりも素材だ。
この世界には、そういった素材表とかあるんだろうか。

「……これは、国立図書館行き決定、だな」
「ですね……」

今の俺たちじゃ無理！

素材だ素材！

# １０４　武具

「とりあえず、、大きめの魔武具ショップに行くべきだろうな」

俺の提案に、エスペランサは素直な顔で頷いた。

ある程度は綺麗に舗装された道を、エスペランサと並んで歩く。

と、彼女の手がなんだかわざとらしくぶらぶらさせているのをみて、俺は少しだけ考えた後にその手を取った。

「まったく」

「……恥ずかしかったんですよぅ」

顔を赤らめて、そう呟くエスペランサ。

そんな彼女の姿は、よりいっそう際だって可憐に見えてしまう。

そんな、何とも言い難い雰囲気のなか、空気を壊さないようにほぼ無音で走り去っていくのはホバー式のＳＦ的な乗り物である。

「なんだこれ」

「【デルエクス】っていうものですよ。ポラリスの方でもあったでしょう？」

「あったか？」

人工の魔力で動く乗り物ですよー、とエスペランサは説明をしてくれる。

どうも、魔剣鍛冶には高純度の人工魔力が必要になるけれど、このかっこいい乗り物には低純度のものでいいという。

どうやって高純度の人工魔力が、ひいてはどうやって人工魔力が

出来るかは分からないけれども。

「難しい話はいいや」

「確かに、こういうのは専門知識が必要かもしれませんが。……では、どうやって魔剣は作っているのです？」

「へーハイスが、頭の中に技術と手順を埋め込んだみたいだ。まるで前世からそのやり方を知っていたかのように、身体が思い通りに動くし何かミスをすることもない」

なるほど、とエスペランサ。

それが一番楽でしょうね、となんだか納得されたが、俺はどうすればいいんだろう。

まあ、わざわざ手順を覚えなくてもいいって言うのは結構楽なんだが。

習っている気がしないんだよな。

そのかわり、魔剣のバリエーションは自分で考えられるからいいんだけれども。

「でも、シルバさんって成功率１００％なんですよね」

「失敗できるかこの前試したけど、無理だったな」

これぞチートである。

確か、普通の人はちゃんとした手順で、ちゃんとした方法でやっても一生に1本出来るか出来ないか。

運のいい人でも2本ほどで、一生遊べるとか何とか言っていたからな。

……俺、この世界に来てたった数ヶ月で4本作ってるんだけどな。

「魔剣と魔武具は、作れる確率が違うのか？」
「魔武具の方が、確率は高いですね。もちろん、性能によって違いますけど」

へぇ。そうなのか。
魔剣の方が技術的には上ということなんだろうか。
なかなか難しいものなんだな、本当に。

「魔武具というより、魔剣以外の魔武具は指輪１つでもそうなりますし」
「ほうほう」
「魔力さえ的確に流し込めば、できるというのもありますからね」
「ほー」

そういわれたら、魔武具の範囲ってかなりひろいという印象を受けてしまうがどうなんだろう？
武具だから、装備品とかに限られるのか？
よく分からないな。

「本屋に行って、材料の本とかも買った方がいいのか」
「先に、小さな鞄を買った方がいいかと」

エスペランサの言うとおりだな。
そうしよう。

というわけで、目の前にあるのは簡単な雑貨店だ。
ただし、魔法によって作られたもしくは改造されたものしか売っていない。
魔武具、とこれらもはいるのだとしたら魔武具店だろうか。

ううむ、この世界での「武具」の基準が分からない。

「意外としっかりしているんだな」
「小さいながらも、生活に必要なものはすべてそろっている、といった感じでしょうか」

エスペランサが冷静に分析し、俺の手を取ってそのまま店内へ。
店内は客が3人ほど、商品を吟味するように見つめている。

物珍しそうに、ではなく普通に考えているところをみると、やっぱり俺とは違って現地人なんだなぁと感じてしまった。
俺にとっては、かなりというか、まるっきり初めて見るものだからのぞき込みそうなんだけどな。

# １０４　武具（後書き）

龍眼族の、タイトルを変更するかもです。

## １０５　さわぎ（前書き）

趣向を変えて一話だけエスペランサ視点。

# １０５　さわぎ

「へえ、これが戦闘に使わない魔武具か」
「そうですねー、もっとも、ここにあるのは低ランクで子供でもお小遣いを少し貯金すれば変える程度のものなんですよ？」

私は、興味深そうに商品を見つめるシルバさんを見つめて、思わず顔を緩めてしまう。

魔武具、というものは種類だけで考えればこの世界ではいくらでも存在する。【武具】として言われているからシルバさんは価値がいしているようだけれど。

【魔法】で作った【武器】や【道具】、その他の総称が【魔武具】。つまり、魔法で作ったものは全部が魔武具となってもおかしくないけれど、普通の人はそう呼ばない。

「シルバさん、何かご購入なされるのですか？」

私がそう聞くと、龍眼族の少年は何か考え深い顔をしながら「うーん」とうなった。
いったい何にそんなにも好奇心を預けることができるんだろう。

シルバさんのその感情は、全知である私にとっては、おそらく感じられないものなんだろうけれど。

「ここにはさすがに、ないか」
「さすがにここに、膨大な重量・物質を圧縮するといった高ランクのものはありませんよ」

「それはわかってるが、どれ。……人口魔力って、質量あるんだよな」
「ありますね」
もっとも、龍眼族（レザール）の膂力（りょりょく）をもってすれば、ほぼないようなものですけど。
でも、魔武具自体には重量制限があるので、そこまではと言った感じですね。

まさか、作業台とその他もろもろ全部持ち運んで旅をしながら魔剣鍛冶師をしたいとは思いませんでしたけれど。

「魔剣鍛冶って面白いです？」
「面白いぞ？　自分の思い通りの剣が作れるっていうのは」
この場合、作れるじゃなくて創れる、かと言い直すシルバさん。
うー、英雄稼業はどうするんでしょう？
……嫉妬とかじゃ、ないですよ？

ないです……もん。

「うーん、少なくとも衣服を入れるものくらいは必要か」

こうして、シルバさんはその店で一番高いものを４つ購入。
そしてその中の一つを私に渡してくれました。

「ありがとうございます」
「エスペランサの荷物分くらいなら、俺が持ってもいいんだけどな。つい珍しかったもので」

物珍しいものをそのままキャッシュで払えますね……。
魔剣は、一番素ランクの高いものだと私も使いますし、まあ今回はシルバさんの贈り物で充分ですけれど。

「ん、なんか騒ぎがあるようだな」

店から出て少しあと、シルバさんに並んで街中を歩いていると、前のほうで少々の喧騒のような声が響く。
人だかりもできているし、中々大きな騒ぎみたいです。

「何をやってるんだ？　ってヴァーユ先輩じゃないか」

……シルバさんが、驚きの視力でその渦中にいる人を判断する。
そして、私のほうを見ると手をいきなりつかんできた。

「ちょ！？」
「とにかく、中に入って聞かないと」

そしてぐいぐい、と私を引っ張るシルバさん。
私の【全知】の範囲は、ものにしか範囲を広められないため未来予知なんていうことはできない。

いや、できるかもしれない。でも、一回この世から身体全部移して、神界で時間を飛ばして……って非常に面倒なことになりますし。

可能ですけれど、私はシルバさんと離れたくないので未来予知は却下ですね。
人はどんな動きをするのかわかりませんし、ね？

だから、私は戦争が起こった時のために、今回はシルバさんを選んだのですから。

人を押し分け、シルバさんは人だかりを抜けるとそのままヴァーユ先輩に近づいた。

「何があった？」
「いや、なんだか少し。付きまとわれたから追い払ったらこうなった」

あぁ！？　と相手は破落戸（ごろつき）よりも下賤な顔でヴァーユウリンス・ヴァン・フロガフェザリアス先輩を見つめる相手がいた。

どうしようかな、この女の人に加担するのはそんなに好きじゃないですけれど。
シルバさんにくっついている何ともない人、と思われても仕方ないですし。

少なくとも今は、謎法族（カラミタ）って名乗っていますし。
頑張りましょう。今回は。こんかいこそ。

シルバさんのためです。

# 106　解放

一歩進み出たエスペランサは、何を考えたのかすぐに男たちに向かって歩み始める。

んーこういうのは俺がすべきことではないのか？　とも思ったがそういえば設定上【謎法族（カラミタ）】だもんな。

「小娘に何ができる？」

「そんなの簡単なことです」

次の瞬間、彼女の姿は一瞬だけ見物と俺たちそして相手側のすべての視界から掻き消えた。

戸惑ってあたりを見回す相手は、その一瞬の間に5メートル以上の距離を移動して懐に潜り込んだエスペランサの姿を補足することがなかった。

そのまま、つぎの瞬間男は上空に投げ飛ばされる。

いや。なんの動作もなしにこうなったというのは、そのまま空間に打ち出されたといった方がいいんだろうか。

龍眼族（レザール）の動体視力をもってしてとらえられなかったそれは、物理法則を無視しているというしかほかに言い表し方を知らない。

と、エスペランサは俺の作った魔剣を手にすると、それを抜く。

魔剣から、鞘に収まり切れなくなった光は、周りに向かって拡散して輝く。

その光に見とれるよりも早く、エスペランサは行動を起こしてそのままスクリュー回転しながら飛び上がると、空中に固定されたよ

うに浮き上がりも沈みもしない状態だった男を魔剣の柄で殴り倒した。

「はぁっ！？」

男は、そんな声を発しながら……しかし彼を助けるものは誰もいないし、空中のため彼を支えるものは存在しない。

そのまま、町の端まで吹き飛ばされたのだ。

「……ふぅ」

軽く息を吐いて、勝利したエスペランサは俺たちのほうに戻ってきた。

俺はまだいい。自分も能力を使って普通では成し遂げることのできないようなことができるから、あれを見てもおかしいとは思わない。

しかし、ヴァーユ先輩とアイライーリス先輩は。

明らかに、エスペランサを怖がっていた。

「今、何をしたんだ？」

「魔力を一部だけ全開にした結果ですよ」

エスペランサは、二人の先輩を単におびえさせる目的でこんなことをしたのだろうか。

いや、違う。

明らかに、あれは。

二人を、試している。

【私はこんな感じですが、あなたたちは私に対してどんな態度をとりますか？】

たとえるなら、そんな笑顔だ。

その顔には、底冷えするような視線も含まれているような気もした。

「シルバさん、行きましょうか」

エスペランサは、そういって俺の手を取る。

彼女たちの決定はあとでということなんだろう。

俺は、エスペランサの気持ちを分かっているから。

エスペランサに、何も言えない気がした。

「必要以上に、強くやってしまった感覚はありますね」

人だかりを振り切って、エスペランサが初めて口にしたのはそんな言葉だった。

自分でも自覚していたらしいが、その顔は真顔で曇りを一切見せない。

「シルバさんに正体を明かしてから一度、謎法族（カラミタ）に身体を再構築し

てみたのですが」

これで基準値なのですがね、とエスペランサも種族のバランスブレイカーさに驚いているようだった。

「でも、このおかげで私はシルバさんと一緒にいられる」

「そんな力なくても、好きな人のそばにはいてやるよ？」

俺はそう答えたのだが、そういうわけにはいかないのですよとエスペランサは語る。

何がいけないのか。俺はわからなかったがエスペランサの顔はおおまじめだった。

「この世界では、実力が重視されるんです」

「や、関係なくないか？」

「関係あるんですよ。……とくに、こういう試練の場合は強い人でパーティを組まないと全員の命を危険にさらすということにもなります」

それもそうなんだが。

それもそうだ、と思ってしまった自分がスグに憎くなてしまった。

「私は、シルバさんがなぜ前回の世界で死んでしまったのか、わかりません」

「……俺よりも強い人がいた、ってだけだ」

それはそうかもしれないのですが、とエスペランサは少々困った顔で。

「ていうか、神なら知っているんじゃないのか？」

「私を含めて、シルバさんの転生時にあった神々は全員この世界の神ですからね。さすがに前世の事までは」

ふぅん。複雑っていうかなんて言うか。いろいろとあるんだな。

「俺は、前世で成し遂げることのできなかったことを、この世界で成し遂げるだけだよ」

「むぅ」

「もちろん、エスペランサと一緒にな」

ぽっと顔を赤らめるエスペランサを、予定通りと俺は笑いながら眺めた。

本当に可愛いし、まるで神とは思えない。どこか卓越したような顔をしながらも中身は繊細な少女。

「どこか行きます？」

「そうだな、もう少し町を回るか」

「……ふふっ」

でも、エスペランサの笑顔を見られるのなら。

一緒にいてもいいような気がした。

# 107　噂

「うぅ、どうするの？」

どうするもこうするもないだろう、と私はアイラ対して頭を振った。

確かに、彼女の能力はおかしい。

でも、それは彼女が迷法族（カラミタ）だからだ。

突然変異種、迷法族（カラミタ）。

種族関係なく、ランダムに生まれる実に珍しいその種族は、一体なぜ生まれるのかすら明らかにされていない。

この世界の研究でも、明らかになっていないことはたくさんある。

勿論、私たちが普段普通に使っている魔法だって。

「まあ、分からないほうがおもしろいということもあるだろうけど」

「一体、なにに対してしゃべってるの？」

思わず、自分の考えていることを口に出してしまっていたらしい。

横を向くと、そこには怪訝なカオをしたアイラの姿があった。

「や、なんでもない」

「そう？」

で、本当にどうするのさとアイラは私に再度問いかけた。

「アイラは、彼女をみて怖いと思ったか？」

「勿論、怖いと思ったよ？　そもそも、異常だよね」

彼女は実にばっさりとしていた。
だから「異常」なんていう、人に使っちゃいけないようなワードすらそのまま口に出す。

「でも、あれは私たちにシルバ君の足手まといになっていないという事へのアピールじゃないかな」
「……ふむ」

確かに、本当に先ほどまで私は。
シルバが、なぜエスペランサをそんなに構うのか気になっていた。
いくら迷法族（カラミタ）だからといっても限度があるだろうし、彼と彼女の名字は違うためどうみても兄妹ということはないだろう。
そもそも、同い年だし。

「エスペランサの名字って、なんていったっけ」
「ホープレイじゃなかった？」
「希望神と何か関連性はあったりしないのか？」
「うーん、どうだろう」

少なくとも、私は「ホープレイ」なんていう神の名前が入った名前は聞いたことがない。
いや、聞いたことはあるが。

でも、それはミドルネームで。
そんなにあからさまには入っていないはずなのだが。

「気になるんだ」
「気になるさ」

好きな人の周りにいる女子のことなら、何だって気になるだろう。

それは俺に限らず、恐らくアイラも気になっているはずだ。

「そもそも、神殿に行きたいと言ったのはエスペランサちゃんだよね」

「そうだな、そこで」

そこで、シルバは「希望神の英雄」という称号を絵に入れてしまった訳だ。

……何か、どうみても都合がよすぎないか？

「そもそも、シルバ君ってあんなに自由自在で魔剣が作れるんだったら、幼少期から有名になってもおかしくないと思うんだけどなぁ」

「だな。……それか親がやっているだろうし。でもエクアトゥールなんていう名字は今まで聞いたことがないぞ？」

……考えれば考えるほど、謎は深まる。

そもそも。シルバとは一体どこからきたのか。

エスペランサという存在は、いったい何なのか。

本当に分からないことだらけだけれど。

……そんなに考えても、分からないのなら今は考えない方がいいだろう。

「さて」

私は立ち上がると、周りを見回して道具屋をみつける。

シルバに誘われたということは、何か意味があるはず何だ。

私は、決して適当にシルバがつれてきた、とは思いたくない。

シルバは、私の気持ちに気づいているのだろうか。
最近は、そればかり考えてしまうのだ。
できれば、気づいて欲しいけれど。

……もっと、大胆にアピールをするべきなんだろうか。

「……うっ」

俺は、急に寒気を覚えて肩を抱いた。
こんなに唐突に寒気がくるっていうのはどういうことだ？
くしゃみもさっきしてしまったし。

「……シルバさん、寒いんです？」
「いや、寒くはないんだが、何なんだろう」

周りを見回しても、見えるのはエスペランサだけだ。

「……もしかしたら、誰かがシルバさんの噂話をしているのかもしれませんね」
「……そんなことをする人は、限られてるんだよな正直」

# 108　ルークエルリダス

「ここが、アリアか」

カエシウス聖王国の王都、アリア。

俺たちがクレアシモニー学園から出発して、約2週間が過ぎた。

結局あの後、エスペランサは先輩方に明確な答えを要求しなかったし、そもそも二人は微妙な距離感を保ったまま、それでもついてきていた。

それっきり、エスペランサと先輩方は会話を交わしたことがない。

エスペランサは先輩方をどうおもっているのだろうか。

正直、不要だと思っていても全くおかしくないんだが……。

「シルバさん、今日はどこに泊まりましょうか」

そんなことを言いながら、彼女は俺のほうをむくと愛嬌たっぷりの顔で笑って見せた。

その顔を見ているだけで、浄化されそうな気がするが気のせいではないと思いたい。

「そうだな。……先に宿をとってからにするか」

さすがに王都だ、魔剣の鍛冶屋くらいはあるだろう。

そんなことを考えながら、俺はエスペランサの後を追って4人分2部屋の宿をとりにいくことにした。

「シルバ」
「どうした？　ヴァーユ先輩」
後ろから話しかけられ、振り向くとそこにいたのは赤く頬を染めた先輩。
顔が赤いのは、熱があるからなのかそれとも別の意味でなのか。
いや、カエシウス聖王国出身のことだから前者はありえない。
「……シルバ、うしろ」
うしろ？
首を傾けつつ、もう一度前を向くと。
そこには、一人の男が立っていた。
「初めまして、シルバ・エクアトゥール」
「……？」
誰だこの人。
しかし、俺が質問をする前に先に口が動いたのは相手のほう。
「私の名前はルークエルリダス・フレイヤ・レイカー」
……そこから先は、俺でも予想がついた。
この人が。
「レイカー家の現当主だ、よろしく」

「まさか本当に交通手段なしで来るとは思わなかった。……さすが龍眼族（レザール）、ということか？」

ここは、王都の中心部にある酒場だ。

だといっても、別に豪華な雰囲気はなくファンタジー世界によくあるアレだ。

この世界が、そもそもファンタジー世界というのもあるが、なかなか。

というより、この世界にも酒というものは存在するのか。

先輩方は最初に会ったとき、緊張でヴァーユ先輩が失神しかけたためここには連れてきていない。

代わりに、いるのがエスペランサ。

「で、この娘（こ）はなんなんだ？」

「俺の相棒です」

「エスペランサ・ホープレイと申します。種族は謎法族（カラミタ）」

なかなか、珍しいコンビだなとルークエルリダスさん。

ちなみに、あの双子姉妹と同じように髪の毛は銀髪で、男にしては長い。

目の色は夜空を覗き込んだような藍色で、星が煌めいたようにき

らきらと少年のような輝きを失っていない。
この人、何歳なんだろうか。見たところ２０後半のような気もするのだが。

「ホープ、か」

と、急にレイカー家当主は意味深な顔をして見せた。
もしかして、気づかれたかもしれない。

「確認のために聞くが、君は【希望神の英雄】に認定されたんだな？」
「えっ」

なぜ、そのことを知っているのか。
俺は疑問に思ったが、図星を指されて言葉に詰まったことで完全にばれてしまう。

「龍眼族（レザール）はバンダナをするのは普通はない。……あるとしたら、額に何か隠したいときだけだ」

この人は、たぶん洞察力が人並ではないのだろう。
それどころか、人レベルを軽く超越しているような気もする。

「さらに言えば、龍眼族（レザール）にエクアトゥール姓は存在しないため、この世界の人間でもないことは分かった」

……この人、龍眼族（レザール）にパイプがあるのか……？
だんだん、この人が人間に見えなくなってきた。

出会ってまだ数時間だ。そのあいだに、この人は俺たちのどこま

でを推理したのだろうか。

「転生者か。……それなら君の魔剣技術もうなずける」

思いっきり全部ばれているな。

……ここは、俺はどうすればいいんだろう。

で、とルークエルリダスさんは次にエスペランサを指出した。

「希望神ホープ様ですね」

「……なぜです？」

今、確実にエスペランサの顔が引き攣った。

震えながら、理由を問うたエスペランサに、彼は柔らかい笑顔を見せた。

「謎法族（カラミタ）というのは、本来自分の種族を隠すものです。ほとんど信用できる人にしか教えません。次にシルバ君が【希望神の英雄】の紋章を持っているということは、すごく近い位置に希望神がいるということ。……さらに露骨に古代の言葉でエスペランサは希望ですし、姓にも露骨な形で希望を持ち出されると」

古代の言葉になっているのか。この世界では。

よくわからないが、そういうことにしておこう。

このひと、エスパーか？

「エスパーではないな。わかることだけ」

エスパーだ……。

## １０８　ルークエルリダス（後書き）

アルファポリスの青春大賞にエントリーしております。

応援よろしくお願いいたします。

投票は下のバナーから……

# 109　心境

「あの人、本当は神だったりとかしない？」

いったんルークエルリダスさんは王城に用事があるということで別れ、俺とエスペランサは二人の先輩を拾うために宿を回っていた。

どうも、明日の朝に王都の門のそばで待ち合わせだそうだ。

その間に、俺が問いかけたのがこの質問である。

「そんなわけないですよ。……ほかの神は、私みたいにそもそも人界に降りられないんです」

へえ、そうなのか。

よくわからないけど、とりあえず脱線気味の話題は別にしよう。

しかし、それでもあの人が、全能のようにも思えてしまう。

「でも、あの人は本当にすごい人みたいですね」

「え？」

だって、私に気づいても眉一つ動かさなかったんですよ？　ともっともなことをいうエスペランサだった。

たしかに、そうなんだけれども。

「でも、彼の種族自身は普通の異能族（サイコル）なんですよね」

「そうなのか？」

「ええ」

エスペランサはうなずくと、前を向いて手を振った。
その先には、確かに先輩方がいたのだが。

「……ここのをとったのか？」
「……うん」

何かにおびえているような顔で、二人は同時にうなずくが。
それは、きっと恐ろしく感じてしまうほどの笑顔を、エスペランサが威嚇するように二人に向けているからだろう。
寒気が一気に体を走り抜けるくらいには怖い。

あどけないけれど、そんな顔もできるのか。

「あ、そうでした」
「ん？」
「ヴァーユウリンス・ヴァン・フロガフェザリアス先輩、アイライーリス・ホムラ・アマテノヴァル先輩。おふた方にお話をしたいので、シルバさんは少々席を外していただいてもよろしいですか？」

フルネームでわざわざ呼ぶのか。
……女って怖い。

俺はうなずくと、宿の1階にあった酒場に向かうことにした。
日はとっくのとうにくれているし、そばの店で開いている場所といえば食事関係の場所だけだ。
酒場の店主に、この近くの魔武具について何か情報をもらえればそれでもいいんだが。

「さて、先輩方。……少し歩きましょうか」

私は、シルバさんが酒場の中へ消えていったのを確認すると、二人の先輩方を見つめる。

両方とも、やっぱりおびえていますね。私が圧力をかけているからですね、逆に同じなかったら困るので、ここは安堵するべきですが。

「な、なんだ」

「これからについてですよ」

私は軽く作り笑いをしながら、先輩たちにこれから私と、シルバさんに対してどのような関わり方をするのか聞いた。

私が、自然な笑いをできるのは今のところシルバさんにだけ。

なぜなんでしょうね、本当に。

アイライーリスさんのほうは、希望神信者、つまり私の信者であるからそばにいてもメリットが多いと思うけれど……ヴァーユウリンスさんは、どうなんでしょう。　おびえながらも、私に対して敵意を向けるような顔もたまにしますし、そこまでシルバさんに心酔しているのですかね。

確かに、彼女たちの恋慕を成功させるには、私はもっとも邪魔な存在でしょう。

しかし、私だって負けるわけにはいきません。

私は、シルバさんがこの世界に転生する前から、シルバさんの事を知っています。

さすがに、前世の事まではわかりませんが……。

シルバさんがこの若さで戦士として戦い、敗北して死んだこと。

それくらいは、転生前の知識として持っていますから。

「……君は、いったい何者なんだ？」

「どういういみです？」

私が聞き返すと、ヴァーユウリンスさんは震える唇を動かして、数週間前私がやったことを言った後、目的は何かと聞いてきました。

こう聞かれると、困るのは私です。

私は自分が「希望神ホープ」であることを、いまのところでは晒したくないのです。

晒せば、シルバさんももちろん注目されるでしょうし、特に世界に危機が迫っているのではないかという気持ちがほかの方にもできるでしょう。

そうすると、シルバさんはせっかく人生をやり直したというのに、好きなことができなくなってしまいます。

「そうですね……。私は、シルバさんの隣にいたいだけですよ」

なら仕方ないです。ここは単に彼に対して好意を寄せている謎法族（カラミタ）の少女という設定で行きましょうか。

本当は、今質問したことを忘れさせるように権能を使ってもいい

のですが、シルバさんはあまり快く思わないようで。

「貴方たちが考えているより、ずっと前からシルバさんのそばにいますからね、私は」

ずっと前……？

転生のときは、時間という概念はあってないようなものですから、本当は彼女たちよりも2週間ほど長いだけなんですけどね。

## １０９　心境（後書き）

活動報告にて、少々のお知らせというかなんというか。

詳しくは←

ｈｔｔｐ：／／ｍｙｐａｇｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｍｙｐａｇｅｂｌｏｇ／ｖｉｅｗ／ｕｓｅｒｉｄ／２０３８５５／ｂｌｏｇｋｅｙ／１０２０１８０／

## １１０　酒場（前書き）

いつもよりも長くなっちゃいました。

# １１０　酒場

「いらっしゃい」

俺が酒場への扉をひらくと、声をかけてきたのは店主らしき落ち着いた物腰の男性だった。

中に入って感じたことだが、圧倒的に人が少ない。
別の酒場は、もっとごちゃごちゃしているのに、ここは静かだ。

俺が入った時点で、客は３人。
一人は、煽情的な服装に身を包んだ紫色の髪の女性。
一人は、落ち着いた服装で銀髪の高貴そうな少女。
一人は、黙々と飯を食っているガタイのいい男。

とりあえず、カウンター席に座ると店主はぴくりとその眉を動かした。

「龍眼族（レザール）ですね」
「うん」

俺が返事した瞬間に、僅かだが反応を示したのは高貴そうな少女だった。
長いまつ毛に、釣り目。目じりのすぐ下には涙ぼくろ。

「ご注文は何になさいますか？」

さて、酒の件だが。
この世界、まったく問題がないらしい。

だからと言って、そこまで飲むつもりもないが……しかし。

この世界でのアルコール濃度がよくわかっていない以上、ありったけ飲むというわけにもいかないだろう。

「おすすめのもので」

「はい、こちらアリア酒です」

そういって手渡されたのは、透明な黄金色をした酒だった。

なんだこれ。【アリア酒】と名づけられているということは、ここらへんのものなんだろうけど。

とりあえず一口。

「……とろみがある」

なんていうか、本みりんを飲んでいる気分なんだが。

いやいいんだけど。

「ところで、初めてのお客様のようですがどこから？」

「クレアシモニー学園」

返答すると、店主はほほえましそうに目を細めたが。

過剰反応したのはやっぱりというかなんというか、少し離れた先にいる少女。

「ここに来たのは初めてだから、ここの情報がほしいんだ」

「そうですね」

店主はわざわざこの近辺の地図を広げ、説明してくれる。

王都というだけあって、魔剣関係の店が２つ。
武器屋が５つ、鍛冶屋も３つある。

どうも、武器屋は外国からの武器も合わせてあるらしく、ただ自分で量産できない。
鍛冶屋は、自分で自分のものを作れるかわりに、少々高い。

らしい。
よくわからないけれど、魔剣を買うなら１００％鍛冶屋。

なら、材料を買いたい場合は？

「材料、ですか？」

と、業務用の場所も教えてくれた。
親切だなぁーとか思っていたら、なんというか。
うん。

「……なんです？」

思ったよりもちらちらとこちらを向いてくる少女に、我慢できなくなって俺は問いかける。
圧倒的白さ。雪原にいけば、それに溶け込んでしまいそうなほど、服装も肌も白いし髪の毛も白銀に輝いていた。

「……いや、なんでもない……」

何でもないというのなら何でもないんだろう。
そう判断し、俺はとりあえず前を向いてもう一口。

まあ、すぐにエスペランサが店内に入ってきたんだが。

「あ、私も同じものをお願いします」

俺の隣に座って、彼女はニコニコしながら注文をする。

「とりあえず、二人ともついてくるそうですよ」

「エスペランサがいやなら、別に追い返してもいいんだぞ？」

人間としてどうかなといった意見だが、相手は神である。

さすがに、ここでなんとかしようとは思わないし思わせない。

「いえ、大丈夫ですよ」

その笑顔は、完全に無理をしている笑顔だった。

そのくらい俺でもわかる。少しだけ心配になったが、深入りするのにここは適していない。

「……あら？」

と、エスペランサが目を向けたのは相変わらずこちらをちらちらと、見つからないと思っているのかさりげなく見ている少女である。

「あの方、どうかなさったんです？」

「いや、よくわからない」

どうかなさったんですレベルの話ではないんだよな。

何でもないって言っていたし、今の俺とは関係ない。

「だってあの方」

と、エスペランサが俺の右耳に唇が当たらないかあたるかの距離で、ささやく。

「私と同じ、謎法族（カラミタ）ですよ」

「……へぇ」

ほうほう。……ほうほうほう。

ということは、丈の長いドレスを着ているというのは紋章を隠すためなんだろうか。

「それにしても、これは美味しいですね」

「そうだな。……ここに来るっていう選択は間違っていないようだ」

あっ。

……うーん、金を引き出すの忘れていたな。

「すまない、店主」

「はい？」

「勘定はこれで勘弁してくれ」

と、俺は立ち上がると頭の上にハテナマークを浮かべたような顔の店主の前で、空中に魔方陣を展開する。

学園を出る前に、カレル・アテラット先生と開発した簡易鍛冶のための作業台だ。

とりあえず、低レベルの魔剣でいいだろう。

この店の防犯にでも使ってくれればそれでいい。

金は余裕で１００万を超えるだろうが、美味しかったから問題は

ない。
それよりも、学園から合法的にくすねてきた材料で作れるのだから、こちらとしては実質タダだ。

え、くすねてきたに合法もクソもないって？
いくつかもらうと許可をもらって、全種類少量ずつもらってきたのだ。
不正はなかった！

「備蓄魔力はないから……俺からでいいか」
「私の分も」

自身の魔力を、本気で使おうとすると魔剣1本に対して致死量まで吸い取られるのだが、幸い俺は龍眼族で少々濃度がおかしいし、エスペランサも魔力ならほぼ底なし。

十分だろう。

魔剣鍛冶一連の動作を終わらせて、俺は出来上がった緑色の短剣を鞘に入れ、店主に渡した。

「防犯にでも使ってくれ」
「えっ」

さすがに店主も面喰ったようだ。
割に合わないと魔剣を返そうとしたが、そこにもう俺はいない。

「いいのですか？　あんなところでさらけ出して」
「いいんだよ。……どうせ誰も信じないだろうし」

恐らく、あの魔剣の値段は３００万くらいだろうか。
ヴァーユ先輩、アイライーリス先輩に作ったものよりも数段階下のものだし。

でも、その魔剣は自動攻撃のついたものだ。
能力的には申し分ないが、人を殺すほどの力はない。
でも、無力化する程度の事ならできるだろう。

「その代り、エスペランサに渡したやつは人を殺せるから、注意な」
「はい」

さて、思ったよりも材料を使ってしまったな。
店主に教えられたそこに、明日の早朝言った方がいいんだろうか。

私は、目の前の状況が理解できなかった。
その龍眼族（レザール）の男は、いとも簡単に魔方陣を発動させたかと思うと、たった数分で一つの魔剣を作り出したのだ。

魔剣というのは、１本単位でそんなに早くできるものでもないし、

そもそも確実にできる保障なんて0に近い。
意図的に作るということはほぼ不可能なうえに、失敗したらほとんど使い物にならないのだ。

あの少年は、いったいどうやって作ったんだろうか。
謎だ。本当に謎だし、彼の隣にいた少女は、確実に「何か」が違うような雰囲気だった。
その「何か」が本当は何を指すのか、私には全く分かっていないけれど。

龍眼族（レザール）の少年も、得体のしれないとんでもない才能の持ち主なのだろうか。

私は明らかに興奮していた。
大きく深呼吸をすると、まだその魔剣を持ったままポカンと口をあけたままの店主に酒の代金を払うと、ちょうど食べ終わった男…
…グレイクに合図をして酒場からでた。

「……そういえば、名前も聞いていなかった」
「クレインクイン様、直ちにクレアシモニー学園の全生徒を洗い出しましょうか？」
「それはいい」

グレイクに返事をして、私は少し離れた場所にいた龍眼族（レザール）の男を見つめる。

「……夏が終われば、私もそこの学生だ」

ほしいものは、絶対に手に入れてやる。

## １１０　酒場（後書き）

シルバ、信念が少々変わっていませんかねぇ……。

とまぁ、読了感謝です。

前話のあとがきで説明している通り、小話のリクエストなどを応募しております。
気軽にどうぞ。

あと、アルファポリスの青春大賞も、よろしくお願いいたします。

# 111　夜

「うーん、ねむねむ」

エスペランサが目を手でこすり、俺を見つめる。

何をしているのかといえば、俺がベッドの中で地図を広げているだけなのだが。

現在、俺は先ほど言っていた酒場の上に位置する宿屋に属する1室にいる。

いつも通りだ。いかがわしいことなんてまだ一度もしていない。

「何をなさっているのです？」

「何って、早朝に行く金属商事の確認をね」

これは、先ほど酒場の店主からもらったものだ。

それよりも、何倍も価値のあるものを渡したのだからもんだいはない。

「何倍、というか何万倍ですけどね」

エスペランサが、俺の考えを読み取ったのかそう突っ込みを入れるが、問題はないのだ。

それよりも気になるのは……。

「あの女はなんだったんだ？」

「ドレスを着ているということは、上のほうの人なんでしょうけど」

「よくわからないな、本当に」

俺は名前を名乗らなかったし、龍眼族（レザール）でクレアシモニー学園出身としか情報は公開していない。

あれ？　今回はじめてじゃなかったっけ、クレアシモニー学園に龍眼族（レザール）を引き入れたのって。

「……学園の名簿全部洗い出さなくても、すぐ身元が分かるんだな、俺って」

「まあ、そうですね」

でも、身元も何もないのが現状ですし。

エスペランサはそういうと、地図をたたんで俺に抱き着く。

発展途上の胸は、抱き着いてもよっぽどくっつかない限り当たらない。悲しいね。

「私も、シルバさんも身元なしなのですよ」

「うん。そうだな」

それよりも、レシピがほしい。

ここの魔剣システムがゲームと同じだなんて思わないけれど。

何か、特別なものがあるんだったらそういうやり方もあるだろうし、なぁ。

「そういうのは、書店に行ってもあるわけないじゃないですか」

「んー」

魔剣はまだまだ究明がなされていない。なのに使えるということだけで多用されている。

だから、もしかして特定のもので確実に魔剣が作れるとしたら？

「んー、この世界の、魔剣システムに干渉するものならもっているのですが」
「持ってるのか」
「持ってますよ、私を誰だと思っているんです？」
希望神ホープの謎法族形態（カラミタ）。
間違ってはいない。いいね？
「条件を飲んでくれたら、これを貸します」
そういうと、ホープは両手を合わせて何かを捻出した。
それは、鎖に縛られた一冊の本。
「【魔剣の魔導書（グリモワール・オブ・マギアレード）】写本です」
「ネーミングそのままだな」
「私に聞かれても知りません」
ヘーハイスのものを写してきたのかな。
それの可能性がどんどん高くなってきた。
「ただ、条件があります」
「ん？」
「……あの」
俺が聞き返すと、とたんにエスペランサは顔を赤く染める。
何か言いにくいことでもあるんだろうか。いったい何があるんだろう？
「き、キスしてください」

……。

「そのくらいのことなら、喜んで」

いやー、希望神の英雄を承ったときから俺はエスペランサのことが好きだったし、別に何ともなかったのだが。

俺がエスペランサの髪の毛を梳くいながら仰向けにさせると、エスペランサはぎゅっと枕の裾を掴んで目を閉じた。

彼女のきれいな、紅色の唇が見える。

弾力もありそうで、艶は言わずもがな。

「……」

彼女の唇に、そっと。

触れ合うように軽く唇を落とすと、彼女は俺に抱き着いてきた。

離れたくない、そんな言葉を言葉にせずに。

## 111　夜（後書き）

もっと過激にしていいんですかねぇ……。

怖い。

## １１２　商事（前書き）

たぶん、今月は毎日更新かそれよりもちょっと低い程度の頻度で更新します。

# 112　商事

「ほぉー」

金属商事【クレサス】。
カエシウス聖王国（せいおうこく）王都で一番巨大な、鍛冶屋ご用達の業務用金属業者である。

「多彩すぎて迷うな」
「あの、そこ高級材料の棚なんですが」

高級な金属は、インゴットの状態から魔力が宿っているというのかどうなのか。
最初から光り輝いているものもある。

今、俺が見つめているのは【氷結合金（フロストアロイ）】。
頑丈そうなショーケースに入っているもので、ええと。

「ここでの重さの単位ってどうなってるんだ？」
「えー。冠するものは同じで、シルバさんの元いた世界での【グラム】が【グレイム】です」

たとえば今、シルバさんが見つめている【氷結合金（フロストアロイ）】の場合、1キログレイムで5万イデアです、と例まで言ってくれた。

イデアは、この国というかここら辺の国の共通通貨だ。
ＥＵのユーロみたいなものである。

「微妙な高さだな、どれ」

昨日もらった【魔剣の魔導書（グリモワール・オブ・マギアレード）】写本を見て、まあ予想通りというか最初から氷属性の効果を持っているということだと。
頑張れば、魔力でそれを再現することももちろんたやすいんだがやっぱり強化されるんだな。

「ああ、これを用いれば魔剣もどきができるのか」
「そうですね、準魔剣っていうのが作れます」

準魔剣、新しいワードだな。
あとで聞いてみよう。

「とりあえず、これを3キロと……」

そばにあった、発注書という名の注文票に商品名と商品番号を書き込んであたりを見回す。

と、ひときわ厳重に管理されている欄を見つけた。
護衛らしい二人の屈強な醒眼族（ウェイカー）が、黙々と周りを確認しているその中には、ソフトゴルフボール大は最低でもありそうなきらきらした宝玉が並べられていた。

「あれは？」
「魔石ですね。巨大なものはこのくらいです」

とエスペランサが手で表して見せる大きさはバスケットボール大。
何に使うんだ、と思っていたら削り出すらしい。

「高級金属とは比べ物にならないくらい高いですよ」
「ん？」

「私がさっき示した大きさのは、国宝級と呼ばれていますし。天文学的な数字が掲示されていますね、やっぱり」

遠目で見るだけでも、７ケタのゼロがある。

……高いな。

「あれの効果は？」

「効果ですか、簡単に言えば【限りなく魔剣に近い準魔剣をほぼ確実に作成することができる】でしょうか」

あ、これチートアイテムだ。

あれは、買わなくても何とかなるか。

さすがに学園にはなかったな。当たり前か。

学園にあった金属も、ここでみれば１キロ１０００イデア以内だったし。

「うーん、これくらいでいいか」

「はぁーい」

購入購入、っと。

昨日のうちに、バッグ強化しててよかった。

「……あら？」

店を出ると、そこにいたのは昨日の酒場にいた少女と、飯を食っていた男である。
こんな鉄臭い場所に、高貴なお嬢様が来てもいいものやらよくわからないが、そんなことは大事なことじゃない。
なんでこんなところにいるんだ。
しかも、あたかも俺を待ち受けていたかのように。

「そこの龍眼族（レザール）」

……俺だな、決定。
とりあえず呼ばれたから、そっちに向かう。
後ろにいる長身の男は、エスペランサを見て……いや、それは完全に見下している目だ。

たぶん届かないだろうが、心の中で念じる。
やめとけ。その子は神だ。

やろうと思ったら、瞬きをする時間よりも早く存在自体が消されるぞ。

「名前は？」
「シルバ・エクアトゥール」
「……エスペランサ・ホープレイ」

ぴくぴく、と相手の二人は眉を動かす。

「すまないが、そこの娘の種族も教えてくれないか？」
「しん、じゃなくて謎法族（カラミタ）です」

完全に神族言いかけたな。
そこまで見下されるのが苛立つか。そのくらい俺だって腹立つから知ってたけども。

「……困ったな」

男のほうが、慌ててエスペランサから視線をそらし、少女のほうは首を振った。
ありえない光景といえばありえない光景なんだが、うーん。

それにしても、流れるような白銀の髪の毛をしている。
俺の周りにはヴァーユ先輩といい、レイカー家の方々といい銀髪が多いがこれもカエシウス聖王国の特徴だろうか。

とにかく、多い。

相手が「困った」と言っているのは、俺の扱いじゃなくてエスペランサのあつかいだろう。
ていうか、俺がバンダナをしているからまだ何とかなっているとはいえ、たぶんバンダナの奥に潜んでいるものを見せたらひっくり返る可能性だってある。

男はたぶん、彼氏とかではなく護衛だ。
ということは、何処か有名な家の出身となるから最悪の場合道具同然となるかもしれない。

まあ、そんなことしようというんだったら俺は容赦しないが。

「とりあえず……。私の名前はクインセシリア・ユピテル・スィリオス、クインと呼んでくれ」

「ちょっと、クインセシリア様……」

何か少女はまずいことを言ったのだろうか。

ああ、愛称でいきなり呼ばせるのがどう見ても常識はずれなんだろう。

それにしても、この人も名前が長いな。クインセシリア・ユピテル・スィリオス……。長い。

ヴァーユ先輩のほうが長いけれど。

「シルバにエスペランサか……ふむ」

さて、時間はあと数時間あるからいいんだけれど、これからどうするんだろう？

「……グレイク」

男のほうは、ただ名前だけを伝えてきた。

こちらを警戒しているのか、それとも逆に名乗るほうがおかしいのか。

よく知らないけれど、まあいい。

「とりあえず、場所を変えようか。グレイク」

どこか借りてきてくれ、と少女は護衛に伝える。

もちろん、少女を一人にするのは危ないと判断したんだろう護衛のグレイクは咎めるような顔をしたが、すごい目力で見つめられて渋々。

こちらに威嚇するような目線を向けて、反撃のエスペランサの目線を受けて逃げていくように去って行った。

エスペランサ、まさかと思うが幻惑でも見せたんじゃあるまいな？

「すまないな、グレイクは堅物で」

少女クレインセシリアは、俺たちを見て申し訳そうに笑う。

「どこかの、ご令嬢なのですか？」

「……うーん、そうでもあるとも言えるし、そうでもないともいえる」

そんな含みのある言葉を発しながら、少女はまたまた含みのあるほほえみを浮かべたのだった。

# 112　商事（後書き）

ご読了感謝です。

アルファポリスの青春大賞の応援、よろしくお願いいたします！

## １１３　質問（前書き）

前回が長かっただけに、今回はちょっと短め。

明日の分は通常の長さに戻ると思います。

# 113　質問

「ところで聞きたいんだが、昨日のあれはどうやったんだ？」

護衛のグレイクがいない今の状態で、少女クレインクインが俺に問いかけたのは昨日の案件だった。

いや、予想はついていたのだけれども、やっぱりなんというか。

「そもそも、何をやったんだ？　私の眼からは、何もないところから魔剣が取り出されたように見えた」

結構時間はかかったんだぞあれ。

でも作業台を展開する魔法は半透明だったし、できるだけ早く済ませたから注視していないとよくわからなかったかもしれない。

しかし、このことをどうやって説明しようか。

「ああ、心配するな。絶対にこのことは他言しないし君を利用するつもりはない」

「根拠は？」

「私のすべての権利をかけて」

なんだか、とんでもなく重い話になった。

俺はとりあえず、何かをいいかけたエスペランサを俺は制止し、一応「魔剣鍛冶師」をやっていることを告げた。

目を見開く少女。

ここまでは想定内だが、ここからどんな行動をとるかで俺も行動

を変えていかないといけないだろう。

「ということは、魔剣を意図的につくれるというのか？」

「まあ、そうなるな」

うなずく。ここで一番ありがたいのは、この関係から俺のお得意先になってくれることだろうか。

スポンサーとか、この世界にそんな概念はあるんだろうか。

よくわからないけれど。

こちらの容姿を、興味深そうに見つめ続ける少女クレインクイン。

確か、エスペランサの話によるとこの少女も謎法族（カラミタ）か。

「なあ、私のものにならないか？　シルバ・エクアトゥール」

「……！？！？」

いったい何を言っているのか、俺は訳が分からずあんぐりと口を開けてしまった。

まったく意味が分からない。しかしそれを聞こうとする前に護衛のあの人が帰ってきた。

「喫茶店を、貸切にいたしました」

「うむ。二人とも、ついてくるといい」

そういって、少女はグレイクに道案内をさせると歩き出した。

それについていくような形で、俺とエスペランサが後ろを歩く。

「さっきの意味、なんて？」

「それは今度話をしよう。……時間なら、これからいくらでもある」

この少女の話し方、表情すべてに何か含みのある表情が垣間見えるあたり、何も考えていないということは彼女の中ではありえないのだろう。

しかし、いったい何を考えているのか分からないんだ。

エスペランサでさえ、なんだかんだ表情を表に出さないときと出す時があるけれども。

この少女は、心を開く時と心を閉じるときの切り替えが実によくできている。

「時間？」

「そう、時間だ」

「クレインクイン様」

「……グレイク、別にいいじゃないか」

「良いわけがないでしょう」

きっ！　とこちらを睨みつけるグレイクは、またもやエスペランサの反撃にあった。

この二人はサイレントで漫才でもしているんだろうか。

こっちから見て、滑稽でしかない。

# 114　城（前書き）

2話かけたら更新します。

# 114　城

「ここが、私の家だ」

夕方。

昼前に待ち合わせの場所へ終結した俺たちは、そのままレイカー家当主のルークエルリダスさんが用意していた大型の【デルエクス】に乗って数時間移動。

少女クレインクインとのお茶もなかなかだったが、h護衛の視線もあり、どうじにエスペランサの事や俺のこのあとのことも考えながら受け答えをした結果、ありきたりな話になってた。

「家？」

家というよりは、どう見ても城なんだが俺は幻覚を見ているのだろうか。

目測だが、大きさだけで考えたらクレアシモニー学園よりも巨大なのかもしれない。

これが、権力の体現か。

「ん、家だが」

「……さすがに広すぎる……」

王都の城を、そういえば俺は見ていなかったな。

いや、遠目には見たんだが直接には見ていないというか。

でも、圧倒的に王城と違うのは、あちらが一面の白なのに対してこちらは氷色だということくらいだろうか。

「綺麗な城……」

二人の先輩方も、まるで幻想的なものを見つめるような目で「それ」を見つめている。

確かにきれいだ。思ったことをそのまま口に出してしまう、無意識にそれをやってしまう程度には美しい光景だったということ。

そんな状態の俺たちを、笑顔で見つめているルークエルリダスさんは門を開けて「ついておいで」と手招きする。

我に返り、後を追うとそこに広がるのは草原と、整地された一本道だった。

この城自体は山の麓（ふもと）にあるんだが、それと同化するように、景観を崩さないようにしつつ城の美しさも際立っているような気がする。

「とりあえず、中を案内するよ」

「おじゃまします」

本格的なメイド、初めて見た。

しかも理想の、なんというかメイド服の姿で。

実際、俺は日本にいたころそのなんていえばいいんだ、コスチュームプレイとでもいうのだろうか、それでしかメイドの姿は見たことがない。

ていうか若い女の人多いな。
異世界ってすごい。

「数日泊まっていくといい。……案内は頼む」

ルークエルリダスさんは、そういうと先輩方とエスペランサに席を外させた。
どうも、俺と話をしたいらしいな。

「すわりなさい。あと、そんなに気張らなくてもいい」

レイカー家現代当主は、俺を落ち着かせるようにそう呟くと椅子に座りこんだ。
ここはルークエルリダスさんの書斎、だろうか。
思ったよりも簡素なつくりをしている中に、壁を覆い尽くすほど多くの本。

「……まず、お礼をさせてほしい。娘二人を救ってくれて、ありがとう」
「あれは……」

あれは、俺が私情でもともと彼女たちを救おうとしたランを叩き潰しただけだからな。
何とも言えない。正直、俺は暇つぶしのような、それとも偽善かのあいまいな気持ちで救っただけだ。
そんな俺よりも、ラン・ロキアスのほうが何か信念を持っていた

に違いない。

今となっては後の祭りだが。

「そこで一つ、頼みたいことがあるんだ」

「？」

「……うちの二人の娘を、どうかもらってくれないか？」

いきなり話が飛躍しすぎて、俺は口を無意識の間にあんぐりと開けていた。

目の前の、精悍なイメージを俺に与えてくる、落ち着いた物腰の中年男性は、しかし至極真面目な顔で俺を見つめている。

「あー、さすがにお断りします」

「なぜ？」

確かに、権力をというか「力」というものを勝ち取るには一番手っ取り早い。

この国の事はよくわかっていないが、レイカー家は「準王族」という分類に入るらしく、簡単に説明すれば王族の次にえらいということなのだろう。

でも、俺は権力のために好きでもない女の子と結婚するつもりはない。

「まだ、やるべきことがありますし。……リンセルスフィアさんとアンセリツティアさんには、大切な人がいますしね」

俺がそう呟くと、相手はこちらを見て「ふむ？」と興味深そうな視線を向けてくる。

「それはいったい誰なんだ？」
「……ええと、なんといえばいいのやら」
俺と同じ転生者で。
でも、「地球」という同じ星に生まれつきながらも俺とは違う世界で。
平和ボケした和の国で、頭までぼけてきたのかと考えてしまう程度には単純すぎる男の名前。
「……ラン・ロキアス」
あの男は、正直言って化ける可能性が十分にある男だ。　思ったよりも順応性が高いし。センスも悪くない。

# １１５　交渉（前書き）

今日はもう一話かけたら書きます。

# 115　交渉

「その人は、君よりも強いのかな？」
「化けると思います。少なくとも」
戦闘のセンスは正直俺よりもいい。
俺は脳筋だからな、力で叩き潰すことしか頭にないんだ。
「ということは、君と同じ存在ということだな」
「……」
俺と同じものにしていいのやら。
確かに転生者、という立場上は同じなのだが、どうしても同じ扱いにしてほしくないみたいだ。
よくわからないけど、生理的にそれを却下しているようだ。
「……わかった。学園に戻ったら彼にこう伝えてくれ」
「年末に試練を与える」。そう彼は言うととりあえず立ち上がった。
その顔は、自分の娘たちの状態を、真剣に思案する親の顔だった。
……そういえば……。
「あら、帰ってきていたのね」
と、俺が質問をしようとする前に一人の女性が部屋に入ってくる。
その姿は若々しい。

リンセルさんとアンセルさんの姉かな？

「紹介するよ、妻のスピラルだ」

ルークエルリダスさんはそういいながらその女性を指差し、次に俺をその女性に紹介する。

まて、この女性は本当に妻なのか。

外見が幼すぎやしないか？　いや、それは幼女級という意味でなく、あくまでもルークエルリダスさんの外見と比較してだが。

「こちらはこの前言っていた龍眼族（レザール）のシルバ・エクアトゥール」

「あら、そうだったのね。……娘たちを救ってくれて、ありがとう」

軽く会釈され、本当に感謝しているのか目じりに涙を溜めている。

そんな状況下だ。ついでに救ったなんて言えない。

「救ってくれた代わりに、なんか褒美をやろうと思っていたのだが」

「……なら、リンセルとアンセルをどうかしら。そうすればレイカー家も安泰ね」

この夫妻、結構すごいことするよなこう考えると。

俺が少々疑問に思っていると、ルークエルリダスさんはこちらに簡単な説明をしてくれる。

どうも、この代に男はできなかったためなんとかレイカー家の名前を引き継いでいかなければならないらしい。

「でも、それなら星の数ほどいるでしょう」

「権力だけにつられてくる豚どもは嫌いなんだ」

同時に、娘たちに対する肉欲だけで寄ってくる豚もね、とかなり過激な言葉を平然と口にするルークエルリダスさん。

こんな口をきけるのも、彼らが「準王族」にいるからだろうか。

とにかく、おっかない。

「そう、できればそんなことを考えない、いい意味で常識にとらわれない人がいい」

だからこそ、何もかもが非常識でイレギュラーな「転生者」がちょうどいいということか。

それなら、やっぱり俺じゃなくてラン・ロキアスを適任とすべきだろう。

今、俺が必要なのは交渉相手だし。

「やっぱり、ラン・ロキアスですね」

「そうか……」

心なしか、少し残念そうな顔をするレイカー家夫妻。　おそらく、転生者っていうところに飛びついたんだろうがうーん。

俺には、エスペランサがいるしなぁ。

そもそも、愛情を抱いていない人と結婚するのもどうかと思うし。

いや、時間は設けられているんだからそうすればいいんじゃないか、という意見も確かにあるんだが。

それでも、そうしたらリンセルさんとアンセルさんは絶対に納得がいかないだろうな。

姉妹が仕方ないと諦めるにしても、ラン・ロキアスは絶対に納得

いかないか。

「では、こうしよう。試練にそのラン・ロキアスがクリアできたなら彼に、できなかった場合君に渡すというのは？」

「そうですね、俺はそれよりも」

それよりも？　と夫妻がこちらに耳を傾ける。

俺は、とりあえず鍛冶系統の交渉を始めることにした。

# １１６　簡易魔剣鍛冶（前書き）

本日更新２話目。

# １１６　簡易魔剣鍛冶

交渉をするにあたって、まず夫妻が疑問に思ったのは。
もちろん予想していた、「本当に思い通りに魔剣が作れるのか」というものだった。

「いや、別に普通のものでもいいんだが」

逆に聞きたいんだが、普通の剣……魔剣じゃない剣ってどうやってつくるんだろう。
よくわからないため、俺は首を振ってバッグのなかから適当な、金属を取り出す。

さすがに今朝買った高級金属は使えない。
学園からくすねてきたいくつかの安い金属を取り出し、展開した簡易作業台に乗せる。

「これが、魔剣鍛冶なのか」

ちょうどエスペランサたちもきているらしく、初めて見たというヴァーユウリンス・ヴァン・フロガフェザリアス先輩が夢を見ているような目でそれを見つめている。

「一回見たことあるけれど、やっぱり綺麗」

完全な作業台での作成を、１から１０まで見たアイライーリス・ホムラ・アマテノヴァル先輩は幾分か落ち着いている印象を受けるが、それでも作業台から目をそらせないようだ。

一方、実に平然としているのはエスペランサである。
一応、ルークエルリダスさんはかなり上質の人工魔力を持ってきてくれたのだが、それでもこの「簡易作業台」というのは俺の魔力を使って魔剣を作ることしか試していない。
やりすぎたらどんなことになるかわかったもんじゃない。
神が使うレベルのものができてしまったら、と思うと逆に怖くなってくる。

「魔力の注ぎすぎには注意してくださいね」
「ん、大丈夫だ」

さっき、時間をとってトイレに行くふりをしながら低ランクの魔剣を作るために【魔剣の魔導書（グリモワール・オブ・マギアレード）】写本で予習してみた。
低ランクのものができるのは問題ないのだが、高ランクのものを作ってしまうと後々面倒なことになる。
レイカー家に来て数時間とたってはいないが、この夫妻は全く野望などという気持ちを持っていないようだ。

「よし、鍛冶開始」

簡易作業台と完全な作業台の何が違うのか。
普通の魔剣鍛冶作業台は、インゴットを正五角形の模様が刻まれた場所の中心にセットするが、簡易作業台に刻まれているのは正三角形だ。
これは、魔剣の拡張性の少なさ。
次に、魔力調整が魔剣鍛冶作業台には必要だが、簡易作業台には

必要がない。
　このくらいだろうか。これはエスペランサが魔法のシステムを少々いじって作ってくれたまったくの新しい「魔法」で。
　たぶん、使えるのは俺だけだろう。
　作業台から吹き出す、虹色の火花と魔力の束を見て、周りの人全員がその美しさに息をのむ。
　正直、作っているからそれどころではないのだが、俺もそばで見ていたのならみんなと同じように口を開けて惚けていただろう。
　それほどの美しさ。他では見ることのできない、魔剣鍛冶特有の現象。
　……今回も、自動迎撃でいいだろうか。
　そう、少し考えたのだ。
　これから、魔剣を売っていくとして、無駄な戦いに俺の魔剣は使われたくない。
　今やっているように、自由に作れることが災いして戦争が起こったら目も当てられないだろう。
　なら、最初から。
　「反撃」「関節防御」にしか使えない魔剣を作ってしまえばいいのではないかと。
　もちろん防御も必要だが。
「んー」
　ちょっと魔力が多すぎた気がするが、たぶん大丈夫だろう。

細かいことを気にしてはいけない。

いや、ここはこだわるべきなんだろうが突っ込んではならない。

アイライーリス先輩に作った魔剣と同じ【脈動赤金（ヴァルカナイト）】を材料に使っている。

金属なのに、心臓のように脈打っているのは少々不気味だが、これで魔剣の属性はかならず【火】属性に固定される。

魔石はなし。魔力配分大目。

さ。どんなものができるのやら。

虹色の光が収まり、みんなが「それ」に目を向ける。

もちろん指し示す言葉は宙に浮かんだ魔剣だ。

「……出来ました」

紫色の魔力に支えられ、空中に鎮座されている魔剣を手に取り、何かおかしな箇所はないか確認する。

魔剣の色は紅。赤よりも紅い、炎のような血のような色をした短剣だ。

分類としては、能力が同じな分エスペランサに渡した魔剣の下位

互換にはいるが。
俺の実力を見せるには、十分すぎる出来だろう。

「とりあえず、これはレイカー家に」

魔剣というものは、使う人によってその力量を変える。
本当に強い人が使えば化け物じみた能力を発揮すれば、頭のない人には命令すら聞かないなんてこともあるらしい。

とにかく、レイカー家なら何とかなるだろう。
……あくまでも俺の予想だが、たぶん。

# 117　完成

「グレイク、本当にここであっているのか？」

レイカー家の白の前に、私は今立っている。

隣には、ついていくといって聞かなかったグレイク。

「いちいち護衛は必要ないと言っているだろう」

「そんなことを言われましても」

グレイクの顔は、しかし渋々でそれを快諾してはくれなかった。

「クレインクイン様は」

「ここでその名前を使うな」

「……はっ。クレインセシリア様は、自分の身分が分かっておりません」

「それはグレイクも同じだろう」

言葉に詰まったのか、黙り込むグレイクに私ははぁとため息をつく。

「とにかく、レイカー家に入るときにグレイクはついてくるなよ」

「……なぜです？」

「……次私に向かって疑問をぶちまけたら、解雇するから覚悟しろ」

なぜ、私は一人で出歩くことすら許されていないのだろう。

さすがに、少々過保護すぎるのではないか。

「ここからは一人で行く。ついてくるな」

私はそう吐き捨てると、町のはずれに位置する、山麓を見つめた。
巨大な氷色の城。レイカー城。

「完成度本当に高いんだな」

ルークエルリダスさんは、そういうと俺が渡した魔剣を手に取って顔をしかめた。
どうも、彼が思っていたクオリティよりもはるかに質がいいものになってしまったらしい。
そりゃあ、言っちゃいけないんだろうが簡単に言ったら人工魔力でも使っているのが違うのだ。

「エスペランサ、大丈夫だよな？」
「はい、ぎりぎり魔剣レベルですよ」

ぎりぎり、ということは一歩間違っていたらほかのものになっていたということか。

『この場で直接いうのははばかられますので、直接お話ししますね』

脳内に直接響いていくる声。テレパシーだろうか、とにかくそう

いうことで俺に知識を吹き込むエスペランサ。

簡単に言って、つまり魔武具の上には「神武具」というものが存在しているらしい。

実際には魔剣をどんなに高ランクへと高めてもそれには無理なのだが、俺が魔剣鍛冶の知識を受けたのは神である。

そのため、ちょっとした弾みで作ってしまうということもあり得るのだとか。

『まあ、めったにないのですけれども。……低低ランク程度の神武具なら作成可能だと思いますよ』

……できれば作りたくないな。

たぶん、「神」ってついてるくらいだから絶対にろくなことにはならないはずだ。

「これ、本当にもらってもいいのかい？」

「はい。迎撃能力を付けておりますが、逆にこちらから危害を与えることはできません」

反撃は仕方ない、という意味で一応殺傷できるようにはなっているが、それも微々たるものだろう。

「それにしても、魔剣鍛冶って本当に幻想的なものなんですね」

この状態では、男勝りな性格だったヴァーユ先輩も、敬語になっている。

いや、当たり前か。

「簡易のもきれい」

完全な方の魔剣鍛冶を見ているアイライーリス・ホムラ・アマテノヴァル先輩も目をキラキラとさせている。

「……さて、寝室を案内しようか。……ん？」

ノックされ、メイドの一人がルークさんを見つめる。

その顔は何か意味ありげで、そしてルークエルリダスさんもその意味を理解したようだ。

「ちょっと待ってくれ。誰が来たんだ？」

「……現代聖国王陛下、です」

# 118　グライノート

現代聖国王陛下。
その人が来たというのがどれほど大変なことなのか、俺にはわからなかった。

俺は転生者で、この国ではだれが頂点にいるのかすら知らない。
ルークエルリダスさんとスピラルさんの夫妻は、準王族だからこその落ち着きで表情を少々変えた程度。
代わりに挙動不審になっているのは、二人の先輩方だ。

ちなみにエスペランサは、眉一つ動かさなかった。

「とりあえず、迎えに行こうか」

君たちはどうする？　とレイカー夫妻は俺たちに話しかける。

先輩方は血相を変えているため、無理として。
俺はどうすればいいんだ？　俺とエスペランサは。

「まあ、プライベートでの訪問だろうし、軽く挨拶をするだけでいいか」

ここで思ったのだが、もしかしてその「聖国王」とこの家って、親戚なんだろうか。
王族と準王族なのだから、普通に考えるとそうなんだろうけれども。

俺は、この国が王政であることしかしらない。

それが立憲制なのか、絶対王政なのかすら知らないのだ。

「とりあえず、迎えに行ってくる」

ルークエルリダスさんはそう呟くと、夫妻で部屋から出て行った。

そして取り残される俺たち。

「……現代聖国王って？」

「刃のような白銀の髪の毛に、雪のような白い肌を持つきれいな方だ。確か年は、シルバと一緒だったかな」

俺と同い年なのか。

……へっ？　確かもう何十年も戦争はないらしいし、ちょっと若すぎないだろうか？

俺が意味を分からず首をかしげていると、アイライーリス先輩がそれを察してくれたのか説明してくれた。

「前代聖国王様は、ご隠居なされているというか、すでに退位はなされているんだよ」

「なぜ？」

「わかんない」

そりゃあ、公開されていない情報を普通の人が知っているわけもないか。

うーむわからない。

「俺たちと同じ歳なのに、すごいなぁ」

「雰囲気もとても毅然とした方だぞ。……正直、私の口調とかは彼

女に憧れて、だから」

聖国王に即位したのはごくごく最近らしいし、そもそも国内はともかく、国外では世代が変わったことすら知らないという人も多いんじゃないかと思うけれど。

それにしてもどういうひとなんだろうか。楽しみといえばちょっと違うのかもしれないけれども、少々気分が高揚してくるというのは語弊があるだろうか。

「こんばんは、シルバ。エスペランサ」

「……こ、こんばんは」

クインセシリアだった。

クインセシリアなんだが、いや、ここは違うのか？

「ああ、先ほどのはもちろん、偽名だ。フルネームはクレインクイン・ゲイボルグ・クライノートという」

改めてよろしく、と手を差し出されて少々戸惑うも、エスペランサがうなずいたため握手でいいと知り、そのまま差し出された手を取った。

「んん？　知り合いですか？」

「ルーク、頼むからプライベートの時は敬語を使わないでくれと何度」
「すまん」

やっぱり、サバサバしている人だなこの人は。
確かによく彼女のしぐさや、口調やそこから垣間見える性格をみると、ヴァーユ先輩が憧れているというのは納得できる。
とくに口調に至っては、そっくりじゃないかと思ってしまう。

「昨日の夜に王都の酒場で会ったんだ」
「またお忍びで王城を抜け出したのか？」
「……まあ」

ちょっとバツの悪そうな顔をして、同時に舌を出している姿を出しているところをみると、少々茶目っ気もあるのかな。
可愛いしぐさのはずなんだが、どうも可愛いと思えない。
美しいを通り越してむしろ神々しい印象すら受ける人だから、それもそうなのかもしれないが。

「それにしても、酒場で作った魔剣を見たときは、本当に……素晴らしかった」

とたんに、恍惚とした顔をしてウルウルとこちらを見つめる聖国王陛下。
……この人のキャラが分からない。

# 119　クレインクイン

ちょっと借りていくぞと、エスペランサと俺を部屋の外へ連れて行くクレインクイン……様。

「二人とも必要ないぞ」

「？」

「敬語だ」

廊下に出て、だれもいないことを確認した後彼女はそういうとにかっと笑った。

改めてみると、さっきよりもボーイッシュな服装になっている。

美しい。

「むしろ、エスペランサには私が使うべきかね？」

「そんなことしてしまうと、この世界のバランスが崩壊しかねますので、お気になさらず」

「シルバは……うん、私のものにならないのか？」

あれ本気だったのか。

「それってどういう意味で？」

「もちろん、恋愛的な意味はないぞ？」

それがむしろたちの悪いことなんだがな。

利用する気満々ということか。

魔剣は確かに強大な武器になりえるが、そういう使用は避けてほ

しいものだけれどもな。

「何に使うつもりなんだ？」

「私は王だからな」

「は？」

いつも通り、含みある言い方をする彼女に、俺は徐々にいらだちを募らせていた。

が、それを察したのか慌ててクレインクインは首と手を振った。

「やや、違う違う」

「……」

「簡潔に話をすると、私は王だから狙われやすいんだ」

この『カエシウス聖王国』に来てまだ数週間で、右も左もわからない俺に対してその態度はさすがにないような気がする。

相手は王だから、そういう含ませる思わせぶりな態度というかそういうのを好むのかもしれないが。

気前よくしゃべってるだけならそれだけでいいし、正直含ませるだけの意味のない行動は腹が立つ。

王だと知っていなければ殴りかかっていたかもしれない。

「狙われる？」

「もう何十年も戦争はしていないし、この周りの国は協定で戦争しないことにしている」

「ふむ」

「そのために。戦争をするために国のトップを殺そうとする人は多からず、しかし少なからずいるな」

そのために、魔剣がほしい。

で俺を見つけた、そういう意味だろうか？

「俺じゃなくても、そのくらいできる人はいるだろう」

いくら珍しいとはいえ、値段が高いだけあって売れ残っているだろうし。

逆にヴァーユ先輩やアイライーリス先輩みたいに、まるでＡＴＭのように金を出す人のほうがおかしい、らしい。

「でも、それでは困るんだ」

「は？」

「普通で回っている魔剣、もしくは魔剣とされているのはだいたい準魔剣だ。そのくらいなら普通の鍛冶師でも金で魔石を買えばできる」

たしか、俺がアイライーリス先輩に頼まれて最初に作ったのは魔石も込みで作った魔剣だったな。

いや、あれは魔剣のランクがおそらくその魔石で幾分か強化されている結果だろうけれども。

「でも、それでは足りないんだ」

「なぜ？」

「準魔剣には期限がある。高い割に１年ほどで修復不可能になるほど痛む」

さらに、手入れにも低ランク魔剣１本くらいの金がかかる。

なら、魔剣のほうがいいんじゃないか？

「だから魔剣がほしいのだ」

「だから昨日王都にいたのか？」

「いや、昨日は呑みたかったから下に降りただけだ」

自由すぎるだろこの聖国王様。

逆に飲みたかったら王城の中で飲めばいいものを。

と思ったら、今は護衛も居ないんだな。

「護衛は？」

「追い返したぞ」

口うるさくて面倒くさいし、小言を言ってくるしと面倒なことしかないんだ。

そう吐き捨てると、クレインクインはなんだかしょんぼりした顔でこちらを見つめてきた。

長いまつ毛と涙ぼくろが妙になまめかしい。いやそんなことを思ってしまってもいいんだろうか。

「ま。私のものになるかどうかなんて、転生者にいっても仕方がないか。基本的に自由だと聞いているし、でも」

「ん？」

「でも、できればでいいから一つ作ってくれればありがたい」

言い残すと、彼女は「元の場所に戻ろう」と少々寂しそうに笑った。

何でもかんでも、思い通りになるなと言っておきたいものだが。

それだけではない気がして、俺は少々戸惑ってしまった。

「……エスペランサはどう思う？」

「うーん、国の所有物になるというのは利益があってないようなものなので、私はお勧めしません」

エスペランサは不振そうだ。

まあ、彼女自身この世界の事はほとんどのことが分かるというのに、人間が何を考えているかわかるのは俺だけだからな。

やろうと思えばできるんだろうけれど、そのあと何が起こるかは神でも予想できない？

前の世界なら、神のみぞ知るという子ｔ場も仕えたんだが、どうなんだろうか？

「この三年間は、どうしようかなぁ」

「そうですね、ちゃんと学園に通って、通いながら商売をした方がいいと思いますよ」

エスペランサとほのぼのとした生活も送っていきたいし。

ちゃんと、クレアシモニー学園を卒業した方がもちろんいいだろう。

将来、どんな生き方をするんであれ。

# 120　宿泊

レイカー家には、2日泊まることになった。
エスペランサはいつも通り俺と同室。
……ではなく、全員一室ごとに部屋は分け与えられた。

「広い」

メイドのひとりに案内された俺が、最初に発したのは素直な感想だった。
とにかく、広い。
中は比較的簡素で、特に贅沢はなされていないような気はするがそれでも、隠れた豪華さが垣間見える。
ベッドの、木の質とか。
毛布とか。

「カエシウスは年中こんな感じなのか？」
「外、寒いですよね……ちなみにここの毛布、すべて中ランクの魔武具扱いなのですよ」
ちょうど案内してくれていたメイドに聞くと、彼女はこちらを労わるような目線を向けてきた。
「これが魔武具？」
「はい。何もしていないのに、触るとぽかぽかあたたかいでしょう？」

そう説明されて、表面を撫でてみると確かに暖かかった。
ファンタジー世界だから、素材が特殊なのかと思ったが魔武具のほうに入るのか。

「ここの待遇はどんなかんじ？」
「泊まり込み三食つき、休暇ありです。給料は能力に応じてといったところでしょうか」

そういいながら幸せそうな笑顔を浮かべる少女に、俺はここにいる人の待遇の良さというものを感じ取ることができた。

「シルバ・エクアトゥール様がここに滞在なされる間は、私に何なりとお申し付けくださいませ」
「何でも？」
「何でも」

かなり上の待遇みたいだな。
しかもこの「何でも」は本当に何でも答えてくれそうな気がして、どうもむず痒く感じてしまう。

「では、何かありましたら内線で」

透き通るような声でそう言い、一礼するとメイドは出て行った。
最後に意味ありげなウインクを残して。

どうも、ルークエルリダスさんは俺の待遇を最高ランクに挙げたらしい、ということは先ほどのメイドからの情報である。

汚い話、ここの城には接待のランクがあるようだ。
どんな客人にも同じようなことをしていたら、酷いと上の人から

は睨まれるし良すぎると下の人を調子に乗らせてしまう。

そういうことを考慮しているのだろう。

「そんなことを考えても仕方ないか」

この世界での転生者というのは、それこそ「誰だお前」レベルではなく何か違う存在として認識されるらしい。　エスペランサは「特別な存在」が英雄になるって言っていたし、それは転生者の事を指しているのではないか？

と。いろいろ考えた時点でそれを相談する存在が今日はいないことに気づき、俺は用意されたあたたかいベッドの中に潜り込んだ。

少し考えたのだが、これだと朝絶対に起きたくなくなるんだが、この世界の人はどうしているんだろう？

とも思ったのだけれど、よく考えれば毛布は中ランクの魔武具だと言っていたな。

ということは高級品か。普通は買えても買わないか。

「……ん？」

俺はうとうととした頭を上げて、ドアのほうを向いた。

控えめにドアをノックする音が聞こえる。

エスペランサかな？　と思い俺は起き上がり、そのドアに手をかけた……。

が、ここでちょっと考える。

彼女なら、そもそもドアをノックすることなく、こちらに来れるのではないのかと。

脳に直接語りかけることもできるし、そうすれば急にあらわれてもこちらが驚くことはない。

むしろ、騒ぎにならないようにするならエスペランサはそうするはずだ。

しかも、別れる時も彼女は「あとでそっちに行きます」とは一言も言っていなかった。

ということは。エスペランサではない可能性のほうが高いということ。

こんこん。またドアを軽めにたたく音。

焦っているのか。周りに人がいないことを確認しているのか気配に落ち着きがない。

うむ、それ以上はさすがにわからない。

気配で人を探知することができても、それが味方なのか敵なのかこれだけでは認知することが難しすぎる。

もし、俺に向かってきた何かの刺客だとしたら？

答えは簡単だ。正面から叩き潰してやる。

次のノックがされると同時に、俺はドアを思い切り引いて支えのなくなった「それ」を感知し、手を掴むとそのまま地面に組み伏せた。

音はほぼ立てず。相手にけがもさせず。

痛みは少々あるかもしれないが、傷になることはないだろう。

「……お前は……」

## １２１　番外編　ランたちの今頃（前書き）

今日はこれと朝の合わせて最大三回更新できたらいい、なぁって感じですー

# 121　番外編　ランたちの今頃

シルバがレイカー家の城に向かって旅をしている頃、一方で、黒髪のさわやかな雰囲気をした少年は汗水を垂らして腹筋を繰り返していた。

彼の名前はラン・ロキアス。

そして彼の表情は……。

「……」

ふてくされていた。

彼はシルバより約1年前にこの世界に転生され、知勉族（エリシュ）であるリンナアイデルによって一年間の鍛錬を受けて入学したのだ。

そのため、シルバよりもこの世界には詳しい。

のだが、ただそれだけである。

確かに魔力は普通魔法をもっとも苦手とし、肉弾戦を得意とする醒眼族（ウェイカー）の基本値よりも何十、何百倍とは持っていた。

同時に、顔はどんな女性でも振り向くほど容姿が良くなっており、身体能力も生前よりも格段にあがっている。

しかし、いきなりパワーアップして普段の生活に支障がでないほど順応したと言え、彼の戦闘知識はふつうの人よりも喧嘩が強い程度であった。

「ラン君、大丈夫なの？」

「……シルバよりも、強くならないと」

一方、シルバは元々魔法の世界ではないとは言え、異能力の存在する世界で生きていた。
そして死因は戦死である。
詠唱がなく、魔法よりも回避が困難な能力を目の前にして、それでも必死に戦い、結果として敗北した。
そのため、シルバはこの世界の知識は無くても目の前に起こる現象について、大げさに驚くことは無かったのだ。

さらに、シルバは【魔武具創造（マギア・クリエイト）】と【引斥制御（グラビシオン・コントロール）】という、彼だけの能力を神から与え耐えられていたが、ランにそんなものはない。

魔法でものを作る能力、そんなものはない。

引力と斥力（せきりょく）、引き寄せる力とはね飛ばす力を操る能力、そんなものはない。

本当はまだ彼が開花していないだけなのだが、あまりにも遅いのだ。
そのため、勝てなかったのは当然と言うことにもなってしまう。

「ウスギリ、どうやったら強くなると思う？」

少年は、トレーニングをいったん中止し、そばにいた狼の耳をはやした男、ウスギリ・ゲンに問いかける。
一匹狼と思えばそういうわけでもなく、むしろ人なつっこい犬を思わせる彼は、頭を振ってから顎に手を当てた。

実際、一匹狼なんて言う存在はいる方が珍しいらしいのだが。

「そうだなぁ、俺はよく分かっていなかったんだが、あのときどう

やって倒されたんだ？」

その言葉に、最初から曇っていたランの顔は、さらに曇った。

「それが、分からないんだ」

「分からない？」

「なんだか、聞いたことのない呪文を聞いて。シルバの拳が紅蓮の炎焔に包まれて。……そこで意識を失った」

実際は殴り飛ばされたのだろうが、その衝撃がくる前にはすでに意識は吹き飛んでいた、と思う。

ランは呟くように、かみしめるようにそう続けると天井を見上げてはぁと息をついた。

ウスギリは、そんな彼をみて頭を悩ませる。

聞いたことのない詠唱、というのはあり得ない。

この世界の魔法は、「属性」「魔法種別」「魔法特性」「魔法名」の順で詠唱することが決まっている。

簡易式詠唱として「魔法名」のみを唱えると言うこともあるが、魔法が極端に弱くなるため普通は使わない。

ということは、一撃で人を失神させるほどの威力を持つ魔法をつかったということは、ヒントがない以上なにも答えを出せることができないと言うことになってしまうのだ。

「ラン君、明日学園の図書館に行って探しに行きましょ？」

そう彼を元気づけたのは、白銀の長髪がよく似合うリンセルスフィアだった。

未だ幼さが残っている美少女は、そのつぶらな瞳で自分の彼氏である少年を見上げると、微笑むように目を細める。

「ああ、そうだな……」

「それにしても、お姉ちゃんまだ目覚めないんだね」

そういって、リンセルはもの悲しそうに動かない自分の、双子の姉の事を思った。

「大丈夫だ。きっとアンセルは目覚める。……そして、シルバにも勝利してみせる」

実際、シルバが使ったのは「龍眼魔法」と呼ばれる古代の魔法なのだが、彼らが知るのはまだまだ先である。

元々少ない龍眼族（レザール）の資料に、さらに少ない龍眼族（レザール）特有の魔法が資料として残っているわけなど無かった。

元来龍眼魔法は、親から子へ、子から孫へ伝わる口伝でしか教わることのできない魔法なのだから。

## １２２　所有（前書き）

本日三話目。
よろしくお願いします。

# 122　所有

「手荒すぎないか？」

部屋の中で、少々息を切らしてこちらを恨めしそうに見つめるのは、クレインクイン。

たった2分前。俺は床に組み伏せた人がクレインクインと分かり、あわてて部屋の中に招き入れた。

「誰かわからないだろう、普通に考えて」

「君の希望神だと思わないのか？　普通に考えて」

いや、思わないから警戒していたんだけどな。

しかし、クレインクインはしっくりこなかったのか怪訝とした顔をしていた。

「エスペランサは、夜くるなら来るっていうさ」

「へぇ」

「ところで何の用だ」

俺が彼女に問いかけると。

クレインクインは、照れ隠しをするように顔を赤らめる。

「や、だってあの時はちゃんとした取引ができなかったからな」

「あのな？　いくら聖国王といっても、女が一人で男の部屋に尋ねる意味が分かってる？」

「……うっ」

分かっててやってるなら、俺も何も言わないけど。

というか、こんな状況でも理性を抑えきれないほど盛んじゃないし、俺。

「いやでも、君と話がしたかったんだ」

「？」

どうも、彼女の代で一番最初にであった転生者が俺らしく、それで興味があるらしい。

さっきも言っていた気がするな、さっきも「恋愛的感情じゃない」って。

「転生者なんて、この世界では珍しくとも何ともないんじゃないのか？」

「珍しいぞ。数百年に1人くるか来ないかって言われているし」

……数百年に1人のペースなのに、たったこの1年で二人もいるぞこの世代。

これって、すごい確率の中で生み出されたものなんじゃないか？

というか、転生者って見てそんなに興奮するものなのか。

「転生者は、私たちの常識を覆すような力を持っているといわれているし、それで世界を救ったことも何回かあるという。すぐに隠居した人も居たらしいが……」

と、つらつらと今まで先代から聞いたのであろう転生者についての情報をぺらぺらと喋るクレインクインの、話を適当に聞き流しながら天井を見つめていると。

「聞いているのか？」

と、結構不機嫌な顔をされた。

「聞いてるよ」

「本当に？」

「一人目が醒眼族（ウェイカー）で、パンチで地面をえぐったりできる脳筋。二人目が知勉族（エリシュ）で魔力が謎法族（カラミタ）を上回る戦術兵器。三人目が腕獣族（ケレイジ）で音速で走ったんだって？　そこまでしか聞いていないけど」

「うむ、そこまでしか言ってない」

ということは、ちゃんと聞いていたということか。

それにしても、代々の転生者ってみんな性能がいい意味でおかしかったんだな。

「転生者に女性はいたのか？」

「二代目は女性だぞ。……女神のように綺麗な女性だったらしい。知勉族（エリシュ）の住んでいるセリシト魔法王国には、彼女を模した像が巨大な街には必ずあるらしい」

すべての転生者が、伝説として語られているしなとクレインクイン。

転生してすぐに隠居しても伝説に残るとは。

いや、実は転生者はたくさん来ていてその中で活躍している人だけが伝説になっているということもあり得る。

それとも、地球とこの世界以外にも世界は点在していて、そこに転生者が行っているとか？

俺も確かに、地球とはいってもラン・ロキアスとは違う地球だしな。

世界が複数個あってもおかしくはない。

「とにかく、そういうことなんだ！　特に龍眼族（レザール）なんていう超稀少種族だぞ！」
「ちょっと声を下げろ。……まったく、聖国王様がここに、男と一緒にいるって知られたらどうするんだ？　城の人たちが黙っていられないだろう」
「相手が転生者なら、今ここで私を抱いても何も文句を言わないと思うぞ」

いや、そんなことはしないけどな。
いったい何を言っているのやら。

「確かに美しいが、今はそういう気分じゃないんだ」
「ぐぬぬ」

それにしても、この女意味不明だな。
本当に聖国王か？

「ていうか」
「ん？」
「聖国王なのに、ここにいていいのか？」
「あー、前代がやってくれているし、問題はない」

問題大有りだろ。
名ばかりの王じゃないか、それだと。

「実際そうだがな。……でもしかし、私はシルバも知っている通り謎法族（カラミタ）だ」
「ということは、刺客も怖くないと？」
「でも、謎法族（カラミタ）というのは本来人に隠すべきものだからな。私は普

段、異能族（サイコル）と偽装している」

まあ、突然変異だろうから。色々とあるんだろうな。

俺も龍眼族（レザール）ってだけで、いろいろとこの短い期間でも反応を見てきた。

龍眼族（レザール）っていうだけで恐れられた時もあったし、逆に興奮気味にされた時もあった。

そういえば前世も、俺は家系の問題でそういうことがあったような気がする。

だからこそ、ここの種族的な問題もなんとなくわかる。

「で、どうしたいんだ結局」

「私のものになってくれないのか？」

「それは、俺が王城に属するということになるのか？」

俺が単刀直入に聞くと、少女クレインクインはこくりと可愛らしくうなずいた。

……自由がなくなる。

これは絶対に自由がなくなるぞ。

王城就きの鍛冶師なんて。

「うーん、だめだな無理無理」

「確かに、転生者は自由をほしがるらしいな。……なら私専属はどうだ？」

「もっと自由なくなるだろ、それ。あと、俺を連れて行くならエスペランサは絶対だからな」

あと、学園で卒業するのは絶対。
それを付け加えると、クレインクインは困ったように首をかしげた。

「そうか……」

「魔剣なら、護身用くらいは創ってやる。材料も負担してくれるならタダで作ってやるから、それでいいんじゃないか？」

さすがに吹っかけるのはやめておこう。
これが発端でこの聖王国を敵に回した、なんていうのはさすがに間抜けすぎる。

「学園の問題はないのだ。夏休みが終わったら私もクレアシモニー学園に、『クインセシリア』として編入するからな」

「それ、他の人勘づくだろ」

「大丈夫大丈夫。……私は、敬語を使われなくても気にしないから」

いや、そんなこと護衛が黙っていないだろう。

「文句は言わせない。……これは私が決めたんだからな」

そう言い切る彼女の目には、確かな信念が宿っていた。

## １２２　所有（後書き）

次回から新章です……と言いたいところですが。
まとめを挟みたいと思います。よろしくお願いします！

# 123　6・7章のまとめ（前書き）

もっと更新するかもです！

## 123　6・7章のまとめ

シルバ・エクアトゥール

「希望神の英雄」に選ばれた転生者の龍眼族。
材料さえあれば、自由に魔武具を作り出せることが判明。流し込む魔力の質と量で、魔武具のランクすら操作可能だがよくわかっていない。
【魔剣の魔導書（グリモワール・オブ・マギアレード）】を手に入れたおかげで、これからの魔剣鍛冶もさらに激化していく、はず。

エスペランサ・ホープレイ

何でも知っている変な少女だと思ったら本当は希望神がシルバに関心を示して降りてきた姿でした。
「希望神の英雄」という称号を何百年か一回、人に与えるとともに随伴して伝説を残し、そのたびに英雄に恋をしては神と人間という存在の差によって見捨てられることの多い悲しい存在。
シルバは今回特別な存在のため、そのようにはならないと思われている。

アリュレイ・グロウ・レイリュ

名前の意味は「『アリュレイ神殿』の『神御子（グロウ）』である『レイリュ』さん」。レイリュは神託で授かった名前であり、本名は不明。アリュレイ神殿で神託の受付をしており、シルバに忠告をした。

ルークエルリダス・フレイヤ・レイカー

カエシウス聖王国の準王族にしてアンセルとリンセルの父。洞察力や推理力が非常に高く、シルバが転生者であることと、エスペランサが希望神であることを真っ先に感づいた。

クレインクイン・ガラドボルグ・グライノート

カエシウス聖王国の現代聖国王。即位したのはほんの最近で、象徴的聖国王を現在は担当している。

偽名は「クインセシリア・ユピテル・スィリオス。

種族は謎法族（カラミタ）だが、普段は異能族（サイコル）として偽っている。

スピラル・フレイヤ・レイカー

双子姉妹の母親にしてルークエルリダスの妻。
温厚な性格。

グレイク

クレインクインの護衛。だが彼女には好かれていない様子。

## １２４　国まとめ　画像つき（前書き）

２１時ごろに小話更新します。

# １２４　国まとめ　画像つき

カエシウス聖王国

異能族（サイコル）と醒眼族（ウェイカー）が起源とする国。
北に位置する広大な国家で、王位は「聖王」または「聖国王」と呼ばれる。
寒冷地、特に一年中のほとんどが雪で覆われるような環境のため、防音がなされている場所が多い。
王族はグライノート家、準王族はレイカー家。
立憲民主制であり、王族は国事などに徹する。

＜ｉ１３２１００―８７１０＞

セリシト魔法王国

知勉族（エリシュ）と翼羽族（フライド）の起源とされる国。
大賢者と呼ばれる、数百年の時を生きながらえてきた魔法に秀でる家系を国のトップと定めている。場所はポラリスの南西。
自然豊かな国で、環境を損なうことなく建築がなされている。
大賢者がトップという事もあり、魔法に秀でた人が上に立つことがもっとも多い国である。

＜ｉ１３２１０２―８７１０＞

オウラン帝国

腕獣族（ケレイジ）と械刃族（サミュリ）の起源とされる国
小さく均衡して争いあっていた数百の国を、【帝王】と名乗る一家がまとめ上げたため現在も帝国と呼ばれているが、完全な民主主義国。
象徴的帝王制を掲げており、科学的な研究も進めているためもっとも科学的には進んでいる国。

＜ｉ１３２１０１－８７１０＞

都市国家ポラリス

上記三つの国と協定をそれぞれ結び、相互協定を結ばせている中継国家。
総合国家ともよばれており、国家面積はクレアシモニー学園６つ文しかない代わりに上記３国のエリートはポラリスで魔法を学びたがり、ポラリスで就職したがる。

ＣＯＭＩＮＧ　ＳＯＯＮ

## １２５　小話　神の神殿

「おいホープ。……またお前は転生者にちょっかいをかけてきているのか？」

神の神殿。

精神世界、いやそれすらを超越する神の世界。

死んだ人の魂をくみ取り、転生へのきっかけとなるその場所で、４人の神は王座に座っていた。

「ちょっかいをかけたわけではありません。私はきちんと所定の順序を経て彼を転生させましたし、結局のところちゃんと龍眼族（レザール）の地位もよく成りつつあります。魔剣鍛冶もきちんとこなしていますし！」

少なくとも、自分勝手にラン・ロキアスを転生させたあなたよりはましです！　と希望神ホープは語気をあらげて運命神スロッ＝トールに言い返した。

確かに、それは事実なのだ。

だからこそ、龍神も武器神もホープの言っていることに反論できない。

しかし、干渉することで神の思い通りに動かしているだけなのではないかと考えてしまうのがスロッ＝トールだ。

そもそも、スロッ＝トール自身が運命を司る神だけあって、大きなブーメランなのだが。

「アグルスも何か言ってやれよ」

言葉に詰まった彼は、先ほどから一回も意見を言わない龍神に話を振った。

と、神妙な顔つきをしていた龍神はその顔をあげると、気まずそうにスロッ＝トールから顔を逸らす。

「今までは自由に転生者が動いていて、伝説が作られてきたけれど。今回は契約だからね。……僕はホープが好きにすればいいんじゃないかなっておもうよ」

「なっ、お前まで」

「ホープも、今までさんざん捨てられてきているし。……彼がホープを幸せにできるというのなら、それでいいんじゃないかな？」

自分の味方をしてくれると思っていたスロッ＝トールは龍神の言葉に「ひぇっ」というかすれた声を発した。

そして最後の頼みである武器神ヘーハイスに目を向けるが……。

「儂（わし）は、全て彼らが決めることだから世界がどうなろうともどうでもいいと思う。……こわれればもう一度作り直せばいいだけじゃ」

改修くらいいくらでも出来る。そう武器神は締めくくるとまた黙り込んだ。

実際、ホープに突っかかっているのはスロッ＝トールだけなのだ。アグレスはホープにとっての兄貴分であるし、ヘーハイスは中立である。

「ぐっ」

「とにかく、これからも私はそうさせていただきますから」

そういうなり、ホープの姿は霧散して人間界に戻っていった。
金色の霧が完全になくなった、それをみて最初に言葉を発したのはアグレスだった。

「ところでスロッ……」
「ああん？」
「ラン・ロキアスって、誰だい？」

龍神にまとわりつく尋常でないオーラに、運命神がおびえたのはそのすぐ後のことである。

そのあと、武器神と龍神の二人に折檻されたのだが、それは別の話。

## １２５　小話　神の神殿（後書き）

明日から、執筆の鬼と化すと思います。

よろしくお願いします！

## １２６　帰還（前書き）

新章開始！

今日はもう一回更新すると思います！

# 126　帰還

「あー、帰ってきた帰ってきた」

クレアシモニー学園門前。

今、俺は変な達成感に包まれていた。

レイカー家の城で、二泊三日いてカエシウス聖王国についてはだいたいの理解ができた。

とはいっても、基本的なことだけでもちろん教えてくれただけだったが。

帰り道は、交通手段を使ってもいいということなのでエスペランサがちゃんと用意してくれていた。

歩きなら数週間かかるのに、デルエクスで行くとたった二日のことである。

「それでも2日かかるんだな」

「ですねー」

エスペランサは、心なしか少々疲れているような気もする。

何かあったんだろうか、でも俺が訊いても「大丈夫です」と言われる未来しかないため聞かなかった。

代わりに、今日は寮に帰ったら早く休ませた方がいいだろう。

「で、では。私たちはこれで」
「あ、うん」

退散するように俺たちから離れていったのは先輩の二人である。
完全にこちらを警戒しているようだし、エスペランサの正体……とはいっても謎法族（カラミタ）という偽情報だが……を知って完全に怖気づいている。
友人関係として関係は続くだろうが、エスペランサが俺のそばにいる限り積極的なアプローチはしてこないと思われる。

これでいいような、悪いような。
異世界に来たのなら、ハーレムとかも確かに憧れるんだが。
この世界ではＯＫらしいし。

でも、無理してそういうことをするべきでもないな。
今はエスペランサだけでいいや。

「さて、今からどうしようか」

日はすでに暮れかけている。
あと一時間もすれば、完全に沈みきって世界は白から黒に転換するだろう。

「って、あれリンセルさんじゃないか？」
「そうですね」

とりあえず、そばにいたリンセルはこちらに気づいたようだ。
にこにこと微笑みつつ、こちらに近づいてきた。

「おかえりなさいシルバ君、エスペランサちゃん」

「ただいま」
「お父様とどうだった？」
「ぼちぼち」

ところで、みんなはどこにいるのかと尋ねると、リンセルさんは柔らかく笑って案内をしてくれた。

「……おかえり」

寮について、最初にふてくされた顔でこちらに呟いたのはラン・ロキアスだ。

なんだか、面倒な空気になっているがこの数か月で体格がより醒眼族（ウエイカー）っぽくなったというか。

思った以上に筋肉の塊になってきたな。

「あー、ルークエルリダスさんからそっちにこれ。リンセルさんも。……アンセルさんは？」

俺がリンセルさんに封筒を3つ、ルークエルリダスさんから渡されたものを渡すと彼女は悲しそうな顔をして首を振る。

どうも、まだ目覚めてはいないらしい。

回復能力をもつ魔武具とか、攻撃に使えないただの補助系魔武具も作るべきだろうか。

どんな形のものがいいんだろう。やっぱり楽器……楽器型がいい

な。

「で、これは？」

「中身を見るわけないだろう」

それもそっか。とリンセルさんは笑い、ラン・ロキアスにも一つ渡して中身をあけた。

見ようと思っても、なんだか封筒すら魔武具っぽかったというのは思った感想だ。

俺が予想するに、本人自動認証システムが導入されている封筒といったところか。

解除方法には、本人を使うかまた別の魔武具が必要そうだな。

封筒が低ランクなら、高ランクのペーパーナイフを創ればこじ開けることくらいはできるだろう。

【魔剣の魔導書（グリモワール・オブ・マギアレード）】写本には、魔剣を主としてあるが別の用途に使う魔武具もいくつか紹介されていた。

もっと高ランクの魔導書を手に入れられたら、それでヒントが得られるのかもしれない。

魔武具にできないものもあるらしいし。

「……うーん」

リンセルさんが、中身を見るなりかなり困ったような顔をしたため何が起こったのかと聞いてみることにした。

「お父様、ラン君に試練を与えるって言ったの？」

「言ってたな」

「うん、ラン君頑張ってね」

あ？　と訳が分からず聞き返すラン・ロキアス。

どうも、開けるのに手間がかかって開けられないらしい。

「もぅ。はい」

ああ、なるほど。

本人認識のために少々魔力を流すのか。

これは中々ハイスペックだな、前世での指紋認証のような感じなのかな。

ラン・ロキアス、手紙を見て怪訝な顔をする。

そして、覚悟を決めたような顔で顔を上げたのだった。

「……ええと。……年末に、なぁ」

## １２７　添い寝（前書き）

本日二回目の更新です。よろしくお願いいたします。

# 127　添い寝

俺にはよくわからないが、結構大変な知らせだったらしい。
ランは「ちょっと出かけてくる！」って言って学園のほうに走って行ったしリンセルさんは泣きそうな顔でその手紙を見ていた。

「何がかかれてあったんだ？」
「簡単に説明すると、『娘たちがほしければ試練に打ち勝て』ということ」

あー、確かにルークエルリダスさんは「ラン・ロキアスを試す」とか何とか言っていた気がする。
ま、もし失敗したらリンセルさんもアンセルさんも俺のものである。
俺は正直どうでもいい。

しかし、このことは彼女に伝えない方がいいかもしれぬ。
よくわからないけれど。

「とりあえず、俺はエスペランサが疲れているから早めに眠らせることにするよ」
「む？　なんか妙に仲がいいね」
「付き合うことにしたんだ。だから当然だろ？」

事後報告だけすると、リンセルさんは興味深そうに目を細める。

「そうそう、ラン君も彼女を一人増やしたんだよー」
「えぇ？　だってアンセルさん目覚めていないんだろ？」
「うん、でも。私たちが何言っても無理そうだったから」

最近、ラン君自分と自分の周りを強くすることにご執心みたい。
とリンセルさん。

「リンセルさんは、ハーレム肯定派なんだな」
「肯定？　だって、私とお姉ちゃんはずっと一緒だから、どうしてもこうなっちゃうよね」

……なるほど。
だからか。俺にはよくわからんが。

「シルバ君はどうするつもりなの？　これから」
「……今のところはエスペランサだけでいいかな」
「ワイルドな容姿にたがわず純情なのね」

純情っていうか、神に勝るものはほとんど存在しないっていうか。
とにかくだ。もうエスペランサが気を抜けば倒れそうな表情をしている。
早く寝かせた方がいいだろう。

俺はエスペランサを抱きかかえると、片腕で彼女の身体を支えながらリンセルさんに手を振った。

部屋の中はちゃんと整理されていた。
ホコリ一つないことを考えると、ちゃんと掃除もしてくれていた

らしいな。
それにしても、リンセルさんもアンセルさんも、そしてリンナアイデルさんも地位は高い方の出身のはずだったんだがいいんだろうか。
そういえば、ランが彼女を増やしたってことは現時点ですでに4人か。
アンセルさん、早く目覚めさせた方がいいかもしれない。

「エスペランサ、起きてるか？」
「…うー。十分に休んだはずなのですけれど」
「どこかでリズムを崩したんだろうな」

本体は神とはいえ、おそらくこの世界の人に合わせて体を作っているから風邪をひいても全く問題はないみたいだ。
そういえば、この世界にも風邪って存在するんだってことをつい最近に知った。

「眠いか？」
「はぃ。……あの」
「ん？」

彼女をベッドに乗せて、布団をかぶせて立ち去ろうとしたところで、エスペランサは俺のズボンをつまんだ。

はっとして彼女のほうに振り向くと、そこには少々目を潤ませたエスペランサの姿が。

「どうした？」
「……添い寝、お願いできないでしょうか……」

そいね？

……添い寝？

いや全然かまわないけれども。

とりあえずエスペランサのベッドの中に侵入して、さてどうするか。

「腕枕したほうがいいか？」

「おねがいします」

エスペランサを極力刺激しないようにしながら、彼女の頭の下に腕を差し入れる。

すると、とたんにエスペランサは幸せそうな顔をして目を閉じた。

「いい夢が見られそうですね」

「エスペランサも、夢は見るのか？」

「見ますよ……」

すぐ後に、すぅすぅと安らかな寝息。

長いまつ毛の一本一本が、数えられる程度には近くにいることを確認して、無性に彼女を抱きしめたくなった。

「いや」

今は我慢しよう。
時間なら、まだまだ何十年とあるのだから。
今焦る必要は、ない。

## １２７　添い寝（後書き）

ご読了感謝です。

明日もこのくらいのペースで更新する予定です。

## １２８　朝食（前書き）

おはようございます。

今日の２話目は、１８～２１時のどこかで更新しようと思います。
よろしくお願いいたします。

# 128　朝食

朝起きたら、エスペランサが服を着崩したまま俺の上に乗っかっていた。
寝相が悪かったのか、なんなのかわからないがどうも俺を抱き枕代わりにしているらしい。

小さいながらも胸はあるし、その寝顔は実に魅力的だ。
だからこそ、焦るのは当然だろう。

でも、エスペランサがそんなにも気持ちよさそうに寝ているんだから、起きるわけにもいかないし。
とりあえず手を伸ばし、彼女が起きない範囲内で頭をなでる。

「うにゅ……」

寝ぼけたようにこちらを閉じた目のまま向けるエスペランサ。
その姿は、神であることを抜きにしても俺が今まで見た中で、一番かわいい顔だった。

「ぁ。……しるあしゃん、おはようございましゅ」

寝ぼけたままの声、蕩けたような目。
呂律の回らない口すべてが彼女の魅力だ。

「おはよう、エスペランサ」

彼女の頭をなでる動きは変わらず、彼女をいじり続けてくると数分後、エスペランサは意識を覚醒させたようだ。

「ふぇっ！？」
「元気になったみたいだな。よかった」
自分がどんな状況にいるのか分かったらしいエスペランサは、素っ頓狂な声を上げて俺から離れようとする。
が、それを俺は許さない。
「いいからいいから」
「よくないですにー」
にー？
「まあ、とにかく俺は今エスペランサをめでたいんだ」
「うー、わかりました」
驚いたことに、納得してくれた。
ということで、俺は遠慮なく彼女の身体を堪能することにする。
いや、変な意味ではなく。
決して変なことではなく。
……何度も繰り返すと逆に怪しまれるが、変なことはしていないのでセーフである。
「あれ、ラン・ロキアスは帰ってきていないのか」

朝。たっぷりとエスペランサの身体を堪能し終わり、朝食を食べるために下に降りる。
ダイニングも本当に数か月ぶりなだけあって、妙な新鮮さを感じる。

「おはよう」

今日の朝食当番はリンナアイデルさんだった。
細長い、特徴的な知勉耳（エリシュ）をひょこひょこと動かし、俺たちの足音を察知しすぐに振り向く。

「今日の飯は？」
「そうだねー。ふつーに今日はコメを使おうかなって」

この世界にもコメはあるらしい。
うん、知っていたけれども。ちょっと特殊なんだよな。

「コールド？」
「そうそう」

この世界には、コールド米とヒート米が存在する。
どんなものかと言われたら、簡単。

コールド米はカエシウス聖王国でとられる、その名前の通り食べると妙な清涼感を与えてくれる米。
ヒート米は、オウラン帝国でとられる食することによって体が温まる米だ。

「ライスボールでいい？　ええと、オウランでいう……」

「お握り、な」
「そうそうそれそれ」

オウラン帝国は、聞くところによると前の世界でいうアジア地方の情景をイメージさせる国。
日本、中国あたりのアレである。

だから、獣腕族（ケレイジ）の名前は日本名に近いものがおおい。
ウスギリ・ゲンとか。
ただ、本来の日本語に直すと「ゲン　ウスギリ」になることが少しややこしいところだな。

「具は何を？」
「セリシトにいる親戚から、龍（ドラゴン）の肉を差し入れでもらったから、それにしようかと思ったけど。共食いになる？」

その質問に言葉が詰まり、助けを求めるようにしてエスペランサのほうを向くと「大丈夫です」と言われた。
龍眼族（レザール）って、龍食（ドラゴン）っても大丈夫なのか。

「龍眼族（レザール）は、龍神の直接的な子孫と呼ばれている中で龍（ドラゴン）は元来、龍神の家畜なのですよ」

もちろん、人レベルで考えれば高貴なもので、１年で狩猟する数も制限されているため高級品なのだが、特に問題はないらしい。

「ん、大丈夫」
「そう。……よかった」

リンさんは、にこりと笑うとおれから背を向けて握り始めた。

綺麗な手で握られたものだ。……きっとおいしい、うん。

## １２９　移動（前書き）

明日もこのペースで更新できればしますよー！

# 129　移動

朝食を食べ終わり、部屋に戻っていったん出かける準備をする。
帰ってきて早々で授業かと思えば、週末のために休みである。
そのため、授業はもちろんない。

「どこにいくんです？」
「工房棟のほうに。……作らないといけないものができたしな」

玄関のドアを開けようとしたとき、俺に声をかけたのはエスペランサだった。
隣にはリンセルさんもいる。
いるから、まあ昨日聞くのを忘れていたことを今聞くことにする。

「リンセルさん」
「リンセルでいいよー」
「リンセル、何か弾ける楽器はあるか？」

んー、ハープかなとリンセルは答える。
ハープか。

「うん、ありがとう」
「？？」

彼女はまるでわからないといった顔をしていたが、いいんだ。

「とりあえず、夜を楽しみにしていてくれ」

そのためにも、何とかして完成させないといけないんだが……。

さて、どうやって作ったものか。

……あ、今回買ってきた「あれ」を使う。

人を救うためならば、俺は全然かまわないからな。

「エスペランサもついてくるか？」

「行きます」

そしてぽかんと口を開けたままのリンセルに手を振って、踵を返す。

後ろをついてくるエスペランサに、少しばかり安心感を覚えて俺は寮から出て行った。

「どうしたんですか？」

「アンセル・フレイヤ・レイカーを目覚めさせる」

エスペランサの問いに答えると、彼女は戸惑ったような顔でこちらを見つめた後、心配そうにぎゅっと自分の右手を握りしめた。

「もしかして、作るつもりなんですか？」

「作る？　いや、創るんだよ」

新しいものを想像するって、いいとおもうけれども。

さて、どんな感じのものを作るか。

さすがに魔武具創造はきちんとした。
いや。
あそこにある魔剣作業台、全部使ってやろう。
「魔力、たぶん足りませんね」
エスペランサの考慮しているところは、学園の工房棟にあるものすべてを使ってもできなさそうということらしい。
「なあ、少し気になったんだけどさ」
「はい？」
「俺の身体の中にある魔力って、数種類あるよな」
知っていましたか、とエスペランサはため息をついてこちらを見つめ返した。
「だって、俺は龍眼魔法がつかえるんだからそうだろう」
「そうですけどもね。……まさかそれを使おうっていうことですか？」
彼女の言葉に俺は、にこっと笑って前を向いた。
質の違う、いやそれどころではないものを使えば、新しいものもできるのではないかと。
「シルバさん？　それ、下手しなくても魔武具じゃなくなりますよ？」
「ん？　龍眼武具でも存在するのか？」
「名称は違いますけどね。龍眼族（レザール）にしか使えないというものはあるとおもいます」

いや、それは創っちゃだめだな。
俺は楽器が演奏できないから、リンセルにやってもらおうかなって思っているんだけれども。

ハープ、か。
なかなか難しい。

リンセルが使えてもっとも高ランクの魔武具を、気合で調節、創造しなければならないのか。

「……エスペランサ、その時に人払いってできるか？」
「それは、結界を張るという意味です？」
「うん」
「できます」

お、即答。
というのなら、問題はないな。

「とりあえず、【一魔剣の魔導書（　グリモワール・オブ・マギアレード）】写本の中を参考に作ってみることにする」
「あ……新しいのがひつようですね。魔剣だけじゃなくなってきますし」
「いや、それは行き詰ってからでいいよ」

まだ、いろいろと実験したいこともあるし。
俺の考えを彼女に伝えると、彼女はわかったというようにうなずいた。

「実験ですか」

「ああ。魔法合金の技術も自分で習えれば、原材料だけ買えばよくなるしな」

高ランクのインゴットと、別種類で高ランクのインゴットを自分で合金にできれば、それだけ魔力は必要になるけれど商事から購入するよりはマシだろう。

「……さて」

アンセルさんを意識の渦から引っ張り上げる準備をしよう。

# １３０　聖魔武具（前書き）

今日も夜にもう一度更新しますー

# １３０　聖魔武具

いつも通りだが、魔剣鍛冶区画には人が一人ともいなかった。
普通の鍛冶実習室には、生徒が３人。
黙々とやっているところ申し訳ないが、エスペランサの結界により「自然と鍛冶区域から離れたくなる」効果を持って退場していただいた。

まあ、別校舎からは窓を通せばここは確認できるのだが。
だからこそ、休日を選んだといってもいいだろう。

もし今日が普通に授業なら、俺は日をずらすか放課後にするけれど。

「ここにある作業台は７個か」
「そうですね」
「真ん中にこれを置こう」

作業台は、一つの作業台をほかの６つが囲むような形状になっている。

そして、この７つを【聖魔作業台（イージェル・クラフテーブル）】というらしい。
おそらく、学園は意図してこの配置にしたのだろうが、学園の中に何人、そもそもの魔武具を作ることができる人が存在するのか。
そもそも教科書には魔剣の事は普通書いていないし、魔剣鍛冶は鍛冶とは違う授業。
受講者は多いらしいが……。ロマン授業だよな、まったく。

「さて」

俺は、自分のバッグから【氷結合金（フロストアロイ）】を真ん中の作業台にセットする。
もちろん、魔力は流していないため鍛冶は始まらないが、その金属からは常にドライアイスのような白い空気が立っていた。

「エスペランサ、２セットずつ均等に流し込んでくれないか」
「はい」

てくてくと棚のほうに向かうエスペランサ。
すぐに俺も後をついていき、材料として使う金属を考えた。

リンセルは【火】属性の使い手だったか。なら属性のバランスも考えて全属性のものを使うことにしよう。
簡単に言えば、【氷結合金（フロストアロイ）】を媒体にして、他の金属を触媒とする。
触媒とするものは金属でなくてもいい。非金属の触媒として一番有名なのは、魔石だろうか。

「うーん」
「どうしたんですかシルバさん」
「【火】属性の触媒は何にしよう」

こういうとき、優柔不断になるのはいただけない。
と、そばにあった赤い石に手を伸ばす。

「……赤石（レッドストーン）？」
「ええと、それは低ランクの魔武具に使うものですね。……ほら、これです」

エスペランサは、俺の持っていた魔法バッグの紐にあったアクセサリーを指差した。
これ、もしかしてアクセサリーのほうが本体なのか。
「それなら、こっちのほうがいいですよ」
「火廣金（ヒヒイロノカネ）か。じゃあこれにしよう」
稀少金属らしく、会ったのは指先と同じくらいの小さなものだが、エスペランサによるとこれで充分らしい。
とりあえず、これ。
「【氷】属性はいいか」
「ですね」
【氷】属性の触媒は、媒体と同じものを削り出して使おう。
こうして、６つの触媒をじっくりと時間をかけて選び、それぞれを外枠の作業台に乗せる。
【火】属性は【ヒヒイロノカネ】、【氷】属性は【氷結合金（フロストアロイ）】。
その他４つは、どれも希少材料。
というか、稀少なものはもちろん反比例して魔力を多く放出する。
あとで魔力が足りなくなったとき、俺から使う魔力をできるだけ少なくしようというわけだ。
「【虚無鉱（エキシマイト）】に【ミスリル】、【濃縮稲妻粉（ライニン）】」

聞いたことのない、というかいかにもファンタジーな金属だらけでなんのこっちゃよくわからない。
ほとんどエスペランサは辞書化していたし、少しひどいことをしてしまった気がする。

「一つの魔武具に、魔力7倍以上を注ぎ込むのか」
「そうですね」

これだけ見れば、どうみても訳の分からないものができてしまいそうだが。
これは、人を救うための楽器を作る作業である。

作るのは水瓶型の小さなハープ。
絵画では天使や女神が奏でているアレだ。

「さてさて。……作るとするか」

ほかの6つすべての作業台の起動を確認して、俺は写本を例にしながら真ん中の作業台を起動。

ただ上に漂っていた靄（もや）のような魔力は、それと同時に真ん中のへと、渦を巻きながら集合したのだった。

「さてさて。まってろよ」

アンセルさん。

## １３１　平穏（前書き）

本日２話目。

少々短いですが、武具完成ですー

# １３１　平穏

魔武具創造は、５時間に及んだ。

触媒から媒体への魔力調整、それの調整に手間取ったっていうのが正直な話。

一気に全部の魔力を媒体に流し込むとアウト。

だからといって一つずつやるとそれもアウト。

完成率が必ず１００％というのは、こういう時に面倒になる。

どんな形であれ、それは創られてしまうのだ。

「ふぅ」

俺は、服の袖で額の汗をぬぐうと、創った「ソレ」を手に持って感触を確かめる。

魔造金属にふさわしい、金属特有の冷たさは感じない。

「できましたね。……少し失敗したような気がします」

「ああ、まずい方向に失敗したな」

リンセルに渡したら、これやばいんじゃないかというものはできてしまった気がする。

エスペランサに演奏させた方がいいかもしれない。

簡単に言えば、魔力が……というより触媒に対して魔力をいつも通りの量でやっているから。

【魔武具】ではなく【魔神武具】ができてしまった。

「純粋な神の産物にならなくてよかったです」
「これもそんなものだけどな」

明確には俺に【神武具】は創れないんだがな。

とにかく、簡単に言うと……ってさっきもやっていたなこれ。
魔力を注入することによって、俺の場合は普通【魔武具】というものができる。これは魔法で作れるもの。
でも、たとえばものに相応しないほどの強大な力をぶちこむ。
低ランクのものを作ろうとして質の良すぎる魔力をぶち込む。

そういうことによって、魔法の産物が神の産物に近いものになってしまう。
それが今回。

「エスペランサ、ちょっと持ってみてくれ」

彼女に、創ったハープを手渡す。
と、薄い金色だったそれは彼女の手に渡ったとたん光沢のある薄い虹色に変わった。

「ほぁぁ。きれいですね」

ハープを手に乗り、ポロンと弦を弾くと、音が目に見える波となって周りに伝搬する。

「なんだか、心が休まる気がします」
「完全な回復能力を目指してみた」

おそらく、完全にはなっていないけれど。

アンセルさんの意識を取り戻すには、十分すぎるとは思うけれども。

「これの干渉先は、人体というか有機物だけなんですか？」

「そうだな、音で直す感じにしたから聞きとれるものだけにした」

でも、そうしたらマイクは直せるっていうことに。

いや、無理かな。さすがに回路のどこがおかしいとかはわからないだろう。

いや、魔法だからできるのか？

「回復って、どこまで？」

「それはさすがに。ここで試してみるか？」

「や、結構ですよ」

それにしても、ハープを構えるエスペランサというのは中々。

様になっているな。

「ここからどうするんです？」

「最終調整、というか実践実験がしたいんだが、どうしようかな」

やっぱり、自分の身体をちょっと切ろうか。

いや、どうすればいいんだろう。

「私が」

「エスペランサは駄目だ。女子に傷跡が残ったらどうする」

俺が却下すると、しかし不満そうな顔でむぅと頬を膨らませた。

うん、しかしだめだ。

「とりあえず。飼育区に行ってみるか」

飼育区、つまりは生物を育てたり研究している場所だ。
けがをしている生物がいたらこれで何とかなるか試すということもできる。
いや、何もないことが一番なんだけれども。

「あ、忘れていました」
「ん？」

エスペランサが、ぽんと手をたたく。
もちろん、ハープは作業台においてからである。

「これの名前は？　なんというんです？」
「【カルムクワイエット】」
「へ？」

意味が分からなかったらしい。

「【平穏】。そういうこと」
「ああ、なるほどです！」

# 132　回復

エスペランサと食堂で束の間の休憩を挟んだ後、クレアシモニー学園の飼育区に向かった。

飼育区は、まるで美術館のような雰囲気を漂わせた洒落た校舎の中にあった。

外見は美術館、中身は農園とはこれいかに。

「ん？　シルバじゃないか」

と、俺のほうに駆けてきたのはウスギリ・ゲン。

すぐにエスペランサにも気づき、「エスペランサさんもこんにちは」と会釈する。

「どうしたんだ？」

「いや、新しく作った【魔武具】の効果を試したくて」

回復系のハーブを見せ、説明する。

さすがに、ここで「【魔神武具】創った」なんて言えないわけで。

「そうか」

うーん、どうしようかなとウスギリは頭を悩ませると、あっと声を上げる。

そして飼育区にいた一人に声をかけ、俺たちを案内するようにとあるドアのほうを指差した。

「どこに？」

「診察部屋だよ。ここで動物の治療をしているんだ」

そういうと、ウスギリはドアを開けた。

「これって、使う人によって効用は違うんだろうか」

診察区の魔法生物を粗方全部全開させてしまったおかげで、みんなから感謝はされどもやることをなくすという何とも微妙なことになった。

演奏していたのはエスペランサだが、もし個人差があるのならどうしようかなと。

「個人差はないと思いますよ」

答えたのはエスペランサ。

【平穏（カルム・クワイエット）】をなでながら答えているあたり、かなり気に入ったらしい。

しかし、それはリンセルさんに貸すつもりのものだ。

ちゃんと受け渡すかは決めていないけれど。

「攻撃用魔武具ならともかく、こういうのは魔力で決まるものではないんですよ」

「へえ」

そんな話をしているうちに、ウスギリが戻ってきた。

「んー。初めて見たが、すごいな」

これだったら何でもできるんじゃないか？　と彼はいうが、何でもできる全能系の能力は魔武具では作れない。
俺は適当に笑ってごまかすと、エスペランサを連れて飼育区から出ていくことにした。

注目されるのはいいけれど、詮索されるのは好きではない。
特に俺の能力は中々説明が厄介なものだ。
クレインクインにも詮索はされたが、あの時は正直……。

ていうか聖国王が美しすぎる。
誘われるのはそんなに好きではないが、彼女には会いたいと思う。

……エスペランサがもちろん一番なんだけれどもな。

「アンセルさんのところ、行きませんか？」
「医務室だっけか。リンセルも呼んで……」

いや、リンセルにこれが使えるかどうか、試さないといけない。
自傷行為に走ると心配されるかもしれないが、ここはやるしかないか。

「自分の骨って折れるかな」
「膂力が高い分、身体の耐久も強くなりますし。無理だと思います」

ていうか、生理的に脳がストップをかけるのか。
思春期の少年少女というのは、リストカットをするらしいが。
俺にはよくわからないんだよな。

前世での学園生活って、戦いに明け暮れていたし。

超能力が軍事までとはいかなかったが、戦闘目的には利用されていたからな。
実習でドンパチしたり、しなかったりしていたから。

自分を傷つけるくらいなら、超能力でほかの人を傷つけていた。
そして、それが当然だと思っていた。

だからこそ、この世界では誰かを守りたい。
前世の罪滅ぼしは。

ここで果たす。

## １３２　回復（後書き）

もう一回更新する、かも。

# 133　譲渡

「ランは……まだいないか。リンセルいるか？」
「うん、ここにいるけど、どうしたの？」

いったん寮に帰り、キッチンにいたリンセルを呼び出す。
あどけない顔をした銀髪の少女は、顔をのぞかせると俺を認識してとてとてと近づいてきた。

「どうしたの？」

もういちど聞いてくるリンセル。
俺はとりあえず、周りを見回した。

「ランはいないのか」
「昨日から帰ってきてないよー。カレル先生のところで訓練をしてるんだって、クリーゼちゃんが言ってた」

クリーゼ？　俺はその人の名前を知らないんだが。
まあ、大体の察しはつく。

「新しいランの彼女か」
「あー、シルバ君には紹介していなかったね」

私たちと同じ異能族（サイコル）なんだよーとリンセル。
面食いのアイツのことだからな。きっと美少女に違いない。

「あ、これ使ってみてくれ」

ほぇ？　と首をかしげた少女に、俺は【平穏】と名付けたハープを手渡した。
　一度エスペランサ……希望神に触れたことで虹色に煌めいているそれは、リンセルの手に渡っても変わらず輝き続けている。

「きれい……。あ、これもシルバ君が作った魔武具？」
「ああ。アンセルさんの意識覚醒に使えないかと思って」

　俺は、先ほど飼育区でやっていた【実験】の結果を彼女に伝えた。
　リンセル、一瞬立ちくらみでもしたのか体が崩れかける。
　その彼女を支えて、魔武具が落ちていないことも確認した。

　魔神武具が、壊れる可能性なんてよっぽどのことがない限りはないんだろうけれど。

「本当に？」
「貸すだけ、だけどな」
「十分だよ、ありがとう！」

　ほぁほぁ、と恍惚な表情を浮かべているリンセルは、妙に艶めかしいものになっていた。
　天をぼうっと仰ぎ見て。しかしそこには天井しかなく。

　我に返ってこちらを見つめること数秒、ぱちぱちと瞬きを数回してリンセルはとりあえず玄関のほうに向かった。

「さっそくいってきていい？」
「ん、今から俺も行く予定だったし、構わないのなら」

わーい！　と数回ジャンプして歓喜し、リンセルは「あ」とこちらに目を向ける。

俺に、一回ためしに奏でてもいいか訊きたかったらしく、もちろん承諾。

彼女が奏でる曲は、少なくとも心の傷すら回復させてくれるような浄化曲だった。

「うん、精神すら治った気がする」

「私も、掌の火傷が治ってる……」

傷口すら治っているあたり、相当だな。

そういえば、リンセルは炎使いだから加減の失敗で怪我をするのか。

「うん。異能族（サイコル）はみんなそうだよ。風の使い手だったら失敗して掌ズタズタとか、氷だったら凍傷とか」

「異能族（サイコル）の女性って、大変なんじゃないか？」

「だからこそ、この長手袋なの」

そういって、リンセルは自分の手をひらひらさせる。

おそらく、それぞれの属性に耐性を持つ低〜中ランクの魔武具なんだろう。

防具の扱いなのかな。それなら俺にも作れるか。

「エスペランサちゃんも、ありがとね」

「私は、何もしていないですよ」

「……いいの、気分だから」

そしてこの満面の笑みである。

これによって、俺はレイカー家姉妹の姉妹愛というものを十二分に感じ取ることができた。

なら大丈夫か。安心安心。
ていうかリンセルっていい女だな。

ちょっとだけ、年末の試練でランが失敗してもいいかなと思ってしまった。
文句が言えないほどの美少女だし。

準王族って、なんとなくルークエルリダスさんの話を聞いている限り王族よりも自由さは高い。
自由もある程度与えられて、そして美少女も手に入れられる。

これって最高じゃないか？

や、もちろんエスペランサが一番だけれども。
これだけは譲れない。

「じゃ、早速いくか」
「うん。……あ、ラン君も呼んでくるよー」

ということで、現地集合。

……ええと、医務室ってどこだったかな。

## 133　譲渡（後書き）

シルバがゲスくなってきた気がします。

## １３４　圧力（前書き）

夜に更新できたらもう一回します。

しかし、咳が止まらなくてキーボード打ちがずれるんですよね……。

# 134　圧力

俺の魔武具に確かな期待を抱き、少々スキップ気味に医務室へ向かう彼女を、俺とエスペランサはあとをついていくことにした。
それはいいんだが、リンセルと並んでいる中世的な少女の存在が気になる。

たぶん、この子がリンセルの言っていたクリーゼっていう子だな。
一目見るだけなら、美少年と判断してもおかしくないほど凛々しい。
服装もボーイッシュだけれど、クレインクインは隠しきれない女性っぽさがあった。
だから官能的なんだが、この少女は完全に女性という特徴を隠しきれている。

ちなみに、個人的には好きじゃないタイプの人間だ。

「で、後ろにいるのは有名なシルバ・エクアトゥールだね」

唐突に俺たちのほうを向き、少女はにかっと少年的な笑みを見せる。
ホットパンツからは健康的な太ももが惜しげもなくさらされているが、彼女が気にした様子はない。

胸はない。ここ大事。

「魔剣鍛冶師、かぁ。本当に作れるの？」
「リンセルが持ってるそれが証明だ」

俺がそっけなく返すと、クリーゼは「へえ」といった顔をしてリンセルの手の中にあるハープを見つめた。
虹色に輝くそれは、少々ながらも彼女の興味をそちらに引き寄せることができたらしい。

ていうか今まで気づかなかったのか。それとも俺が作ったものだと思っていなかったのか。

「龍眼族は、魔剣しかつくれないって聞いてるけど。……これ、魔剣じゃないよね？」

ああ、これはどうしようか。
どうも、興味が俺からエスペランサへ移っているらしいし、俺は何もしなくていいような気がする。

クリーゼなんちゃらは、俺ではなくエスペランサがこの【平穏】を作っていると思ったようだな。
エスペランサも、恐らく俺よりももっと簡単な方法で創る。生成するだろうな。

「シルバさんが何を勘違いしているのか分かりませんが、私にそんな能力はありませんよ」
「ということは、謙遜でも何でもなくこの龍眼族（レザール）が作ったんだ」

さっきそういったはずなんだけどな。
この女は何が言いたいのか、何がしたいのか。
さっぱり意味が分からない。

「自己紹介だけする。僕はクリーゼ・シックザール」

クリーゼなんとかさんは、そういって俺を睨み付けるとふんと後ろを向く。
訳も分からず俺とエスペランサで視線を交叉させていると、リンセルがいったん後ろに下がって申し訳なさそうな顔をしていた。

「……あのね」
「いいっていいって」

相手がこちらに敵意を示すなら、こちらから無理に好意で近づく必要もないしな。
これから3年間、この同じ学園で暮らしていくときに面倒になりそうなのはあちらだけどな。

「ところでランは？　この時にも来ないのか？」
「残念ながら。……でも、年末のほうが大切みたいだね」

ラン・ロキアスがクズに見えてきたのは俺だけだろうか。
彼女が目覚めるかもしれないなんていう一大事に、訓練をやめて様子を見に来ようとも思わないのか。
この調子じゃ、その男に心酔している女性もそんなにいい人ではなさそうだ。

「まあ、一番俺が得しているのは」
「どうしたの？」

リンセルは、俺を見て不安げ。
エスペランサも俺を見て不安げに首をかしげているあたり、どうも顔は驚くほどゆがんでいたようだ。

クリーゼなんとかさんは、こちらを見てふんと鼻で笑った。

「一番得しているのは、俺に権力の圧力がかからないことだな」

神からもらった能力。

正直、もらったのはかなり都合のいい話だ。

そもそも、エスペランサに救われて第二の人生を歩めたのも都合が良すぎる話だろう。

世界中で死んだ人の中、何人が転生できるんだろうか。

俺にはそんな統計の取りようもないし、とろうとも思わないけれども確率は低いはずだ。

チート能力、なんて自分でも思うけれど。

俺の【引斥制御（グラビシオン・コントロール）】は生前から似たような能力を持っていた。

だから、特に気にすることはない。

【魔武具創造】？　これのおかげで俺は材料さえあれば金にも困らなくなった。

俺を雇おうとする女性はいるし、そんなクレインクインは本気で俺を手に入れたがっている。

「なんか、怖いです」

「エスペランサちゃん、同感だよぉ」

少女二人の声で、思案中の脳味噌から意識を外へと引きずり出される。

周りを見回すと、少々怯えつつ心配そうな二人の美少女となぜか不機嫌な少女一人。

「……ああ、すまん」

説教系の能力を持っていればよかったのに、とか一瞬思ってしまったが、あの時希望神に頼まなかったのがもともとの敗因である。あとは俺の動き次第だな。何とかしよう。

## １３５　意識（前書き）

咳が止まらなくてまともにキーボードが打てない状況です。

誤字脱字、多かったら申し訳ないです。

# 135　意識

クレアシモニー学園の医務室。
ベッドのシーツは白、壁は白。
ほかの要素も白、白、白な状態のなかで一人の少女が静かな眠りについている。

少女の名前は、アンセル・フレイヤ・レイカー。
リンセルの双子の姉で、ラン・ロキアスの彼女だ。

整えられた白銀の髪の毛、雪のように白い肌。
眠っているように美しい。まあ、実際眠っているんだが。

「おねえちゃん……」

すぐに助けてあげるね、とリンセルは泣きそうな顔で俺が作った【平穏】を抱きしめる。
そして意を決して構えると、さきほど俺たちが聞いたものとは違う、別の音階を奏で始めた。

音色が美しいのは変わらず、しかし前回にはなかった神々しさと、さらに増した浄化度が俺たちを包み込む。
彼女が弦を弾くたびに、音の波が視覚化されてアンセルさんを抱き上げるように包む。

この曲に、反応したのはエスペランサだった。
るんるん、と曲に合わせてゆっくりと体を揺らしている。

演奏が終わったあと、リンセルはしばらくの間目を閉じたままだ

った。
起き上がっていなかったら、というのが怖かったのだろう。
しかし大丈夫。俺の魔武具はきちんとその役目を完遂する。

「あら……？」
「お、お姉ちゃん」

ちゃんと起き上がっていた。
完全回復。その言葉が一番似合っているように、彼女は体に傷一つない状態で復活したのだ。

しかし、問題が一つ。
精神の傷は癒せても、傷を治すことはできなかった。
そして、記憶の欠損は直せなかった。

「ところで、ここはどこです？」
「……何を言ってるの？」

リンセルが、自分の双子の片割れを呆けたように見つめる。
どうやら、少女の記憶は……いや。
彼女の男女関係での記憶は、完全にラン・ロキアスを追い出していたのだ。

「あの、大丈夫？　私の事は覚えてる？」
「リンセルでしょう？　あとはシルバ君、エスペランサちゃんに、……？」
「彼女は私たちと同じラン君の彼女で、クリーゼ・シックザールちゃんだよ」
「……ラン？　誰ですか？」

完全に、ラン関係のことを忘れているようだな。
俺個人の気持ちとしては、完全に失態でどうすればいいのかわからないんだが。

失態、というか完全な回復は無理らしい。

「……えっと、忘れちゃってるのかな」

何かのショックで忘れている。健忘かと思いつつ、リンセルは心配そうな顔でアンセルの顔を覗き込んだ。
外傷は問題ないようだ。ただ精神面も落ち着いているし、問題なのは記憶だけ。

「あのね、シルバ君がこれを作って直してくれたんだよ」
「……シルバさん、ありがとうございます。……おかげさまです」

うん、口調もおかしなことになっているような気がする。
敬語口調か。確かに声質も同じだし物静かな様子も変わりがない。
しかし、何かが違うような気もする。
どうだろう。

「うん、お姉ちゃんは元通りだけど……。ちょっとおかしいかな」
「私は元気ですよ。……ところで、私の付き合っている相手って居ませんよね」
「それは、数か月前の記憶だね」

リンセルは完全に困惑していた。
俺のほうを向いて助けを求めるようにこちらを見つめるが、すぐに首を振った。

「シルバ君は責められないね。……これは違うもの」
「いや、俺の作った【平穏】に不備があるなら」
「ううん。記憶の欠損は【傷】じゃないんだもん」

そう答えた彼女の顔は、実に悲しそうだった。
妙な罪悪感を覚えながら、しかし俺は彼女をさらにかわいそうに思ってしまう。

「ラン君がそばにいれば、いいのに」

ぼそりとつぶやいたリンセルの顔は、そそるものがありながらも涙をこらえており、妙に痛々しい。

「エスペランサ、いこう」

俺はリンセルから、【平穏】を渡されてエスペランサに話しかける。
ここは、俺の干渉する場所じゃないような気がした。
その前に、会いたくはないがランをこちらに戻さなければ。

いったい何をしているんだろう。

「なんだか、可哀そうでしたね」
「そうだな。……記憶の欠損って、周りの人が困るものだよな」

それも、ピンポイントにラン・ロキアスだけを忘れているって。

……俺としては、ざまぁみろとしか言えないんだがどうすればいい？

## １３６　怒気（前書き）

もう一話更新するかもしれませんが、期待はしないでください。

# 136　怒気

医務室からカレル先生の準備室へ。
その途中、俺とエスペランサは残念なことに妙な罪悪感であふれかえっていた。
こっちはさらに、怒りも感じているが……それはエスペランサも同じようだ。

「いったい、ランさんは何をやっているのでしょう」
「……最終的には、いいのかな」

エスペランサが憤慨しているが、俺は心の中だけにとどめておくことにした。
少なくとも、本人に会うまでは表に出さない方がいいだろう。
エスペランサは……本気で怒らない限り、怒っても怖くないので放置だ。

頬を膨らませたその顔は、申し訳ないながら可愛いと思ってしまうようなものなんだし。

「とりあえず、ランに会ったら一発殴ろうかな」
「そうですね。私からも神力を一撃」
「いやそれだめだから」

ラン・ロキアスが文字通り消飛ぶんだからだめだろう。
エスペランサは、恐らく神の権能をいよいよもって使うときに神の姿に戻るらしい。
それだけでも脅威なのに、というかそれだけで転生者以外の人は失神するだろう。

その状態、つまり１００パーセントの力でぶつけてしまうとラン・ロキアスの存在自体がなくなってしまう可能性があるんだ。

首を振って、もう一度エスペランサにいう。

「いや、だめだ」

「う」

納得のいかないような顔で、彼女は頬を再度膨らませた。

が、だめなものは駄目である。さすがにリスクが大きすぎて笑いごとにならない。

「いいですもん。……シルバさんが、私のできないことはしてくれますから」

「俺が本気で殴ったら、どうなるんだろうな」

「あー、だめですね」

龍眼族が本気で殴る。魔法もかけて、そして【引斥制御（グラビシオン・コントロール）】も付与して加重化させる。

首が吹っ飛びそうだな。逆ダルマ落しみたいな要領で。

想像して少々気分が悪く……はならなかったな。

俺は戦前、【引斥制御（グラビシオン・コントロール）】に似た能力を持っていてそれで戦争に向かったし。

人をミンチの板のようにプレスしたことも数多い。

だから、この世界に来て驚くことはあっても、なんだか微妙な気持ちになる。

変なプライドを持ってしまってるんだろうな、とは思ったけれど。

「本当にバトルするのであれば、ちゃんと言わないとですね」
「でも、龍眼魔法を使ったときは大丈夫だったぞ」
俺がそう告げると、しかしエスペランサは頭をひねって変な顔をした。
「あれは、使い初めだったので制御が弱かったのでは？　あ、そういえばそれ以外ではまだ使っていないんでしたっけ」
「使ってないな」
そのあとに、そもそも戦う必要がなかったからな。
やっぱり、何事もなく平和なのが一番である。
「こんど、龍眼魔法の訓練を頼む」
「そうですね。学園と外をこれからも行ったり来たりしますし、自分の武器をいくつか持っておいた方がいいかもです」
【引斥制御（グラビシオン・コントロール）】は、使うたびに身体から力が抜ける感覚がするんだよな。
今までは相手が弱かったから何とかなるけれども、これ以上にはちょっとキツいことになるのか？
この学園に、脅威は来ないと思うけども。
となると、外、か。
「この学園を卒業したら、【希望神の英雄】っていう戦闘職と、【魔武具鍛冶師】という生産職の両立をさせなければならないのですから、今のあなたでは足りませんよ？」
「そうだなぁ……。楽なまねはできないか。頑張るよ」

幾何学に王道はなし、というが。
戦闘にも王道はないらしい。

やっぱり経験や訓練がものをいうということか。
能力を持っていたとしても、使いこなすのができない人は最強にはなれない、ということだな。

「その点、俺は幾分か本当に楽だな」
「前世が、超能力の世界でしたっけ？」
「どっちかっていうと異能力だけどな」

「カレル先生、ロキアスはいますか？」
「修練所のほうじゃないか？」

……カレル先生のところには、いなかった。

## １３６　怒気（後書き）

明日から更新が予約更新になるかもしれません、とはいってもこの３連休だけですが……。

## 137　唖然

開幕ジャンプからのキック。
これが、俺がラン・ロキアスに向かってやった怒りの行動である。
「うぐふっ！？」
もちろん、何が起こっているのか分からなかった彼はどうなったかというと俺のけりが直撃して吹きとび、壁に叩きつけられて俺を訳の分からないような顔で見つめていた。
「何やってるんだお前は」
「いや、俺が聞きたいんだが……」
ほとんどというか完全に、俺はけんか腰だった。
対して相手は、何が起こったかすら分からないのか呆けた顔のままこちらを呆然と見つめている。
「自分の彼女が目覚めるっていうときに、何やってるんだ」
「あ、起きたのか。……よかった」
「起きた代わりに、お前の事は全部忘れてるよ」
彼の安堵した顔が、一気に歪む。
どういう意味だ。と俺に詰め寄る彼の顔は、何とも言い難い怒気にあふれていた。
いや、俺的には怒っているお前に怒りたい。
「いったいどういうことだよ」
「俺としては、なんでずっとアンセルのそばにいてやらないのかと

疑問に思っているところだが」
「ああ、そうか。シルバはあの封筒の中身を見ていないんだな」
見る前にルークエルリダスさんから聞いてるから知っているんだけどな。
「簡単に言えば、年末に試練を与える。その試練に合格しなかったばあい、他の人にリンセルとアンセルは受け渡すとさ」
「へー」
「興味なさそうな声色だなぁおい」
だから知っているんだって。
俺は少々頭を痛めながら、別に関係ないしと返して彼に向き直る。
「で、アンセルのところにはいってやらないのか？」
「……」
少々悩んでいるようすのラン。
もう一度殴ってやろうかなと思ったが、俺が動く前にエスペランサが飛び上がってランの頬を引っ叩く。
「少しは、女性の気持ちも考えたらどうですか？」
「だって、アンセルは記憶がないんだろう？　俺の」
「ならわかりました、あなたはそういう方なんですね」
この人は人ではありませんね、とエスペランサは何を思ったのかそう告げると、涙目に俺をみて「行きましょう」と背中を押す。
まあいいか。……リンセルには申し訳ないが、俺にはどうすることもできないし。

どうしようもないのならば、本当に俺には何もできないよ。

「もう一回アンセルの様子を見に行くか、エスペランサ」

「そうですね」

ぼぅっと突っ立ったままのロキアスに、エスペランサは「悪魔」と吐き捨てて前を向く。

そして、なぜ勝手にスロッ＝トールが彼を転生させたのか訳が分からないと声を震わせた。

「転生者が転生するのはいいですけど、勝手にされるとやっぱり困りますね」

エスペランサは頭を抱えつつ、それでもどうしようか考えている。

それの意味がよくわからないのだが、いったいどういう意味なんだろう？

「俺の魂って」

「私が拾い上げて、皆さんに許可をもらって転生させたのですよ。それは全員の許可があるからなのです」

「なんで、審査が必要なんだ？」

「そりゃあ、死刑で死んだ犯罪者を転生させても意味がないでしょう？」

ああ、なるほど。

## １３７　唖然（後書き）

明日更新できるかは、私の体調次第です。

## 138　都合（前書き）

更新、できた……。

# 138　都合

「……リンセルすまない。ロキアスをつれてこれなかった」

医務室に戻った俺がそう彼女たちに告げると、リンセルは後一歩で泣きそうな顔をしていた。

アンセルは相変わらず「ラン・ロキアスって？」と首を傾げているし、クリーゼ・シックザールは俺を疑っているのか部屋から出て行ってしまった。

「どうして？」

「や、よく分からなかったな。年末の試練が何とかかんとか」

「……シルバ君はもう知っているかもしれないけど、年末の試練を不合格になったら私たちはどこの家かも分からない人と結婚させられるの」

「うん」

それは知っている。

ていうか、日本での戦国時代女というのは道具扱いであちらこちらに行かせられたというのは聞いたことがある。

のだが、この世界ではまだ政略結婚などがなされているんだろうか？

そんなことはないはずなんだが、今度またルークエルリダスさんに聞いてみるか。

……俺から、二人に言っておくべきか？

年末のアレのあと、彼女たちが行き着く先は俺かラン・ロキアスかどちらかだということを。

いや、言うのも野暮だな。

アンセルのっこころを最初からこちらに引き寄せておこうかな。

「……エクアトゥール君、疑ってごめんなさい」

と。クリーゼ・シックザールがかなりしょんぼりした顔で戻ってきた。

どうも、やはり彼をこちらにつれてくることに失敗したようだ。

「それにしても、記憶の欠損か」

「……どうしよう」

「あ、そういえば聞きたいことがあるんだが」

俺が思い出したようにつぶやくと、3人の美少女は同時にこちらを向いて首を傾げた。

その余りにもの統率がとれた行動に少々感心しながら、言葉を続ける。

「3人……いや、今は2人か。どうしてランに惚れたんだ？」

「……私は、あれ？」

ここでリンセルは戸惑ったように頭に手をやった。

どうも、自分がなぜ彼を好きになったのか、分からないらしい。

対してクリーゼ・シックザールは。

「僕は、初めてへりくだって話をしてこなかった人だからかな」

と、単純明快な答えを示してきた。

ああ、シックザールという家もかなり上の人なのか。

この言葉一つだけでわかってしまうほど、彼女達の身分というのは分かりやすい。

それ故に、男という免疫がないのだろう。

そして最終的には「ちょろい」と呼ばれてしまう。

この世界は、もしかしたら。

……いや、ここにいる人たちはちゃんとした一個人だ。

そんな都合のいい事にはなっていないはずだ。

「アンセルはもう元気か？」

「はい」

「一応、医務室の先生に大丈夫かどうか許可を取ってから元の世界に戻ってくれ」

「……シルバ君はどうするの？」

リンセルの問いに、俺はにやっと笑って手を振った。

「ちょっと考え事があるから、少ししたら戻るよ」

「一体どうしたのです？　シルバさん」

俺が思案顔でいることに、少々の違和感を感じたらしいエスペランサが、問いかけてくる。

「なあ、エスペランサ」
「はい」
「エスペランサは、何で俺が好きなんだ？」
「魂の美しさに惹かれて、転生後は正体を隠していました。今は貴方のそばで居たかったから、です」
明確かどうかは分からないが、それは理由として成り立つものだ。
そうすると、しかしどう言うことだ？
「先ほどの、リンセルの状態をみてどう思う？」
「……少々違和感は感じましたが、何となく好きになって何となくつきあうっていう人が居ないわけではありませんから」
「なら、俺の考え過ぎかな」
「？」
訳が分からず、疑問の顔を浮かべてこちらをみるエスペランサ。
俺は、自分で考えていた一つの仮説を彼女に打ち明けることにした。
「さっき考えたんだけどな」
「はい」
「……この世界が、転生者に都合よくできていたりは、するのか？」
「ないですね」
即答。
それは、彼女がこの世界の神だからこそできたことだろう。
「たとえば、シルバさんは魔武具を自由自在に作れる能力を有していますよね」

「ああ」
「本当に都合よくできていたら、いちいち材料を買ったりしなくてもいいと思うのです。いつでも、念じれば能力が発動して魔武具をつくりだせる。しかしそのような能力は存在しません」
「おお」

人の気持ちに関しても、同じ事は言えますよとエスペランサは言葉を続けた。

「もしかしたら、彼は無意識の間に『女性を無条件で引き寄せる』という能力を有しているのかもしれません。しかし、それは上辺だけで今秋の記憶欠損にはふくまれなかった、ですよね？」
「うんうん」
「ですから、少なくとも人の気持ちは思い通りには成らないのです」

ならないのか。
まあ、俺が考える必要もないのか？

リンセルもアンセルも、今回のクリーゼも男性には疎いようだった。
……そうなると、やっぱり攻略は簡単になるのだろうか……。

# 139　番外編　リンヴ

「リンセル」
「どうしたの。お姉ちゃん」

レイカー家の双子姉妹は、無事にアンセルの健康診断が完了して寮に向かっていた。
アンセルは無表情だったが、リンセルは安堵したようでそれで隠しきることの出来ない不安を顔に浮かべている。

それを察してか、アンセルはリンセルに話しかけたのだ。

「どうかなさったのです？　元気がないように思いますが」
「……だって、本当にラン君の事覚えていないんでしょう？」
「本当に彼が私の彼氏だというのなら、あのときに飛んできているのではないのです？」

彼氏として当たり前、そうアンセルが断言したことをランは出来ていない。
それを知っているからこそ、リンセルは名にも言い返すことが出来なかった。

「でも、でも」
「そもそも、なぜ彼を好いているのかすら分からないのに、私たちの人生を彼に捧げる必要はあるのでしょうか？」
「……ラン君は、誰よりも強いし……」

と。ここまで言い掛けたところでリンセルは記憶を姉が昏睡状態になった直前のところまでさかのぼらせた。

最強ではない。……ラン君よりも、強い人は確実に一人居るのだ。

シルバ・エクアトゥールという存在が。

彼が居ることで。シルバ・エクアトゥールという存在がそばにいるただそれだけのことで自分はなぜ、ラン・ロキアスと一緒にいたがるのか忘れてしまっているのか。

自分の気持ちが迷子になってしまったような気がして、少女リンセルは頭を抱えたい気持ちに駆られる。

「私は。私は……」

「……まあ、この話は後ですね。……ところでそれは何です？」

アンセルの指さしたのは、リンセルが手に持っている棒のようなものだった。

大きさも長さも、指揮棒に似たそれをリンセルははっと我に返って一本、アンセルに渡す。

「シルバ君に渡しといて、って言われたの忘れてた」

「ん？」

「確か使い方はなんだったっけ、心臓よりも上に掲げて。……ええと」

リンセルが使い方を思い出す前に、目に入ったものは寮。

直接彼に聞いた方がいいかと思い、リンセルは説明するのをあきらめた。

「ねーシルバ君」
「ん、お帰り。リンセル、アンセル」

シルバはエスペランサと一緒に料理を作っていた。
これも魔武具の実験の一環で、シルバの作成した魔力鍋にエスペランサが適当な分量で材料をつっこんでいただけ。

「なにこれ」
「……材料を適当に入れるだけで、自動的に調理してくれる鍋」

極度の面倒くさがりが使いそうなアイテムをみて、リンセルははぁと息を吐いた。
見回せば、材料は切られておらずそのまま投入されていたし、調味料の分量も適当だった。

「これでも。おいしいものは出来るの？」
「恐らく。……たぶん」

実験段階だから。エスペランサが隣で作っている法が本命なとシルバは屈託のない笑顔を見せる。
しかしその顔は少々キレ気味で、リンセルはそれの意味が分かっていたからこそ何も言わなかった。

「いい香りがします」
「んー、香りはよくても中身はどうかなって感じだな」

自動調理鍋。主婦がみたら飛びつきそうな代物であるが。
作っている気がしないというのが正直な感想だ。

シルバは、それが分かった上で完成した料理を口に運び、一言「うまい」とつぶやいた。

「……おいしいの？」

「食べてみるか？　ブレイ牛の肉じゃが」

肉じゃが、それは地球でいう日本。ここアルカイダスでいうオウラン帝国が作っている肉料理である。

ブレイ牛も、暖かい血が流れていると言われている牛で食べれば身体の芯から暖めてくれるものだ。

ウスギリ・ゲンからの差し入れである。

「あ、おいしいです」

「そうか、そりゃあよかった。……ところで、何か質問があったんじゃないのか？」

シルバの柔らかい声に、あっと本来の目的を思い出したリンセルは、少々言いにくそうにしながらも指揮棒っぽい形状の魔武具、その使い方を再度訊いた。

「これ、『エンヴ』な」

「うん」

「何かあったら、これに意識を集中して『助けて』と念じるだけでいい。俺がすぐに行くから」

「……なんでこれを？」

実はこの魔武具、先ほど簡易作業台でシルバが数分のうちに創り出したものである。

前世でいう、発煙筒のような役割を持つものでリンセルたちのものが発信、同じ形をしたシルバのものが受信となっている。

「……ラン・ロキアスが不安定な状態だったから、頼る人がいないかと思ってさ」

「うん、ありがと」

うれしいな、と笑ったリンセルの顔はなんだか釈然としないものだったが。

シルバは、その意味もくみ取って笑いリンセルの肩を軽く叩いた。

「無理にとは言わないし、アンセルがあいつの事を忘れている限りな」

「……シルバ君なら、大丈夫かな」

自分の心が揺らぎ始めていることに、気づかないリンセルは。

アンセルが『エンヴ』を大切そうにポケットの中に仕舞っているのを見かけて、心のざわめきを感じたのだった。

## １４０　小話　夏の予定（前書き）

次回、まとめをして新章ですかね。

# １４０　小話　夏の予定

「あー、なんだか俺面倒なことに顔をつっこんでるよな」
「顔をつっこむどころか、身体全部つっこんでいますよ」

夜の散歩。
俺の隣にいるのは、当たり前というかすでに概念というか、勿論の事ながらエスペランサである。

『エンヴ』。まー簡単に言えばラン・ロキアスを信用できなくなった為俺が作ったんだが。
どこに助けを求めている人がいるか、方向さえわかればあとは【引斥制御（グラビシオン・コントロール）】で飛んでいける。

「アンセルさんの件、どうするんですか？」
「どうするもなにも、まだ学園を離れるっていうことはないだろうし現状で少し放置するよ」
「放置ですか……うーん」

いったいエスペランサはこの現状をどうしたいんだろう？
まさか、いや、まさかとは思うが……。

「どうせなら、アンセルさんをこちらに引き込みませんか？」
「まさかだったよ」

そういうことを考えちゃうのか、この希望神は。
でも、レイカー家姉妹ってあれ一緒にいた方がいいんじゃないのか？

俺がその旨を彼女に聞くと、しかしエスペランサは。

「心配はないのです」

「え？」

「ラン・ロキアスが悪役の状態の今、シルバさんがふつうに気にかけていれば両方の気持ちは勝手にこちらに……」

おうおう、なかなかに悪い顔をしている。

正妻公認でハーレムを作っても構わないと？

そういうことなのか、こういうのは。

しかしだ。

しかし、俺はそのつもりが申し訳ないが全くない。

アンセル一人……あー、でもこの調子だと年末の最終試練で俺が呼び出しを食らいそうだ。

そこでもう一度ロキアスに勝利して、二人とも貰っていくという方法もあるが……。

「いいや、俺今のところエスペランサしか好きになれそうにないし」

「ふぇ！？」

俺がつぶやくと、隣にいた少女は素っ頓狂な声を上げて顔を両手でばっと隠す。

月明かりでも分かるほど、その顔は赤くそまっていた。

「立場は分かっているが、別に甘えても構わないんだぞ？」

「……や、そばにいるだけでも私はかなりのわがままを言ってますし……」

最初の方はやっぱりこうなるか。

ていうか、恐らくエスペランサとしては捨てられるのが怖いんだろうな。

それなのに、ほかの女を呼び寄せようとするし、いったい何がしたいのかよく分からない。

だがそれがいい。

「ていうか、それでないとな」

「？」

「いや、こっちの話だ。あと安心しろ」

疑問の表情を浮かべながら、顔をあげた女神に俺は笑いかける。

そして、少々のことならダメージにならないことを伝えた。

少々無理しすぎている感じがするんだよな、最近のエスペランサは。

だからといって、俺から甘えてもいいのかという問題も出てくる。

すべてをかなぐり捨てて、甘えてみたい感じもするが止めておこう。

俺のキャラ……というか人格がそこで破壊されそうだ。

「……ねね。夏になったら、どこかに遊びに行きませんか？」

「デートなら、別に週末にでもいいんじゃないか？」

「お泊まりデートは、長期休暇にしか出来ないでしょう？」

そういってあざとくウインクするエスペランサ。

泊まりでデートか。確かに試練の旅じゃなく、ふつうな感じで旅行をするのもいいかもしれない。

「お泊まり？」
「はい、一週間くらい。……オウラン帝国とか、セリシト魔法王国とかをぶらぶらとしませんか？」

身分証明は……ああ、エスペランサ完全にクレインクインに任せるつもりだな。
……クレインクインも、夏が終われば時間はあると言っていたし、この学園に来るんだろうな。
となると。そろそろこちらは忙しくなってくる頃合いなのかもしれない。

「とりあえず、目前の問題があるぞ」
「はい？」
「休んだ分の授業。……エスペランサはどうしてる？」
「……迷法族（カラミタ）が、魔法の授業に苦戦をするとでも？」

あ、設定はそうだな。
……設定どころか、設定を使わなかったら全知なんだから変わらないか。

## １４０　小話　夏の予定（後書き）

新章では、いきなり飛んで夏休みまで行きます。

学園ものっぽくイベントをこなしつつ、ファンタジー要素ももちろん取り入れていく予定ですのでよろしくお願いいたします。

書きたいことはいろいろありますが、またの機会に。

## １４１　夢と涙（前書き）

まとめはなくなりました。（まとめることがなかった）

ということで、今から夏編で。

## １４１　夢と涙

ーーすこしだけ、もうすこしだけ。

声が聞こえる。
どこか優しいような、暖かく慈悲に満ちたそんな声が。

ーーダウンファール、君。

俺の前世の名前を。抱きしめるように囁く人がいる。
痛みを堪えながら、そっと、そっと。

姿は見えない。しかし、それは確かにそばにいた気がする。
暖かい、優しい炎焔（ホノオ）を思わせるそんな声。

この世界ではない、どこかの世界で。
こちらに呼びかけるような、そんな。
懐かしくて、誰よりも大切にしていたはずなのに。

自分にうそをついて、手放すことしかできなかった。
そんな、儚い存在。

「夢……。……ゆめ、か？」

目をあけると、そこにあったのは見慣れた天井だった。
質素で、簡素で。特に何もない、白。

簡単な話だ。ここは寮の、俺の部屋だろう。

「……涙？」

と、ここで自分の頬を伝った液体が、シーツにこぼれるぽとっという音でその滴に気づいた。
自分はいったい何の夢を見ていたんだろう。
必死に思い出そうと思えば思いだそうとするほど、その記憶は俺から逃れようとしていた。

記憶の器から完全にこぼれ落ちたその記憶は、俺を拒否するように消えていく。
幾度考えようとも、それを呼び戻すことは出来ない。

覆水盆に返らず……とは少し意味が違うのかもしれないが。

「……はぁ」

記憶が消え、俺はため息をついた。
何か、もやもやとした記憶の断片を頭から振り払い、起きあがって窓の外を見やる。
雲一つない静かな藍色の空。そこに広がっているのは街灯の無機質な明かりと、それを覆うような小さな星の輝き。

この世界では、星が不思議なほど綺麗に見える。
前の世界では、夜も明るくなってほとんど見ることに出来なくなっていたものを、ここはいとも綺麗に下俺達の幻想を、投影してく

れるのだ。

「なんで泣いていたんだっけ」

涙の雫、一つの意味も分からなくなった俺はそっと窓を押し開けると、部屋においていた靴をとって。

そこから、外へと飛び出したのだった。

夏の夜、というのは少々蒸し暑いものだ。

風がちょうどよく身体に当たり、迷いやほかのものを吹き飛ばしてくれるような気がする。

気がする、というだけで本当に吹き飛ばしてくれているのは分からない。

しかし、この世界の風はさわやかだ。

思った以上に。この世界は、前の世界よりも環境が破壊されていない。

「もうすこし、か」

俺は、その夢で唯一覚えていた言葉（ワード）をつぶやくと、頭をひねった。

何がもうすこしなんだろう。

何か、俺が忘れていることはあるだろうか。
自分が完璧だとはみじんにも思っていないが、俺の考えていることと夢というのは違う気がするのだ。
しかし……どうも、俺は前の世界には未練がないはずなのに、前の世界と比較してしまう癖があるようだ。

この龍人の身体。鱗も、角も。
違和感は感じなくなったし、むしろクレアシモニー学園では俺しかないという特別さを強調できるいいものだと思っているのだが。

「能力、もか」

神から授かった力。
一見すると楽なものかもしれないが、正直使うと前の世界の時よりも疲れるしそもそも前の世界でも【引斥制御（グラビシオン・コントロール）】は使えていた。
それも、上位互換のものを。

魔武具を創造する力もそうだ。
簡単なものはまだいい、まだ何も考えなくても魔力と材料を並べて作業台を起動するだけでものは出来る。
しかし、材料は自分で調達が必要だし、高覧区のものを作ろうとすると体力を使わないことにしろ精神力がすり減って結局途方もない疲労を味わう。

何がチートなのか。全く。
……時間がたてば、こんなことにもなれてくるのだろうけれども。
けれども、今はぜんぜんそう思わない。

誰かのために魔武具を作る。それだけじゃあだめなんだろう。

……争いに使われるような代物なんだから。
そして、財力や権力などの誇示にも使われる。

金さえあれば、という思考はしたくない。
いっそ、魔剣鍛冶をやめるか？　でもそれはだめなんだろうな。

「もっと簡単に、作れる能力がもらえるのかと思っていたんだが」

でも、鍛冶や武器の神だからなぁ。
……これが妥当なのかもしれない、でも、もっと経験を積めば。
材料消費なしで、魔力だけ使えば魔剣が作れるようにしてほしいものだ。

ここまで考えた俺は、空を見上げる。
元の世界に戻りたいか？　と言われればそれはノーだ。

ここに来て、俺はエスペランサを初めてたくさんの人に出会った。
前の世界は、失ったものが多すぎる。

……やっぱり、自分が変わらないと。
そうしないと、俺を支えてくれた人に申し訳が立たない、からな。

# 142　勧誘

朝の食卓で、そう切り出したのはリンセルだった。
白銀の髪の毛をひょこひょこと飛び回らせて、そういった少女はいないラン・ロキアスの代わりに俺の方に手を置いた。

「海いこ！　海！」

そう、今日も今日とてラン・ロキアスはいない。
アンセルが目覚めてからすでに2か月ほどが経過し、完全に夏。

なのに、彼は年末の事に気を取られているのか寮に帰るという行為すら忘れている可能性があったのだ。
もちろん、リンセルは心配だったらしく、最初の頃こそ毎日様子を見に行っていたが、今はその気もなくなったらしい。

『……ねえ。……ううん、なんでもない』

そんなことばを、俺に何回か話しかけようとして彼女がとどまらなかったらどうなっていただろうか。
おそらく、ラン・ロキアスが今まれ頑張ってる意味すら吹っ飛んでいたんだろうな。

ちなみにアンセルだが……。

「シルバさんも行くんですか？」

完全に俺になついた。

ちょっとおどろいたが、ランという存在が彼女の記憶から完全に吹っ飛んだのち、残っている近しい親族以外の男性が俺最優先というのはいかがなものか。

俺は彼女を特別扱いしたつもりはないのだが、魔琴【平穏】で彼女を目覚めさせたことで彼女の中の、俺の株が上がったんだろうと思われる。

「ここにいるメンバーは全員行くんだろう？」
「そう、だね」

この場面にラン・ロキアスがいないことを確認してから、リンセルは悲しく笑った。

「ほかにだれか呼びたい人はいる？」
「ヴァーユ先輩とアイライーリス先輩もいいだろうか」
「うん、もちろん問題ないよ！」

でも、こうしても……。
ロキアスは来ないから、男は俺とウスギリ・ゲンだけかぁ。
実にアンバランスな男女比だ。
女子は6人もいるというのに。

「ていうか海ってどうするつもりなんだ？」

ここ、ポラリスはオウラン帝国、セリシト魔法王国、カエシウス聖王国に東西南北すべてを囲まれた都市国家だし。
カエシウスは夏でも寒い。ていうか海に面している場所は夏だろうと氷河が広がっている。

「ん、私のほうでいいんじゃないかな？」
「セリシトなら、この時期はいいよねー」

なら大丈夫か。
うん、夏は楽しめる。

魔剣鍛冶も頑張るが。

「というわけで、先輩方もどうだ？」
「私は構わないぞ。むしろ呼んでくれるとは有り難い」

ヴァーユ先輩は、相変わらず男勝りな凛々しさで美しいし。

「私も、いいの？　水着買わなきゃね」

胸も大きくなったしーとあざとくウインクするのはアイライーリス先輩である。

ちなみに、今エスペランサはいない。
ほかの女子メンバーと水着を買いに行ってしまった。
……俺も買ってないんだが、今度一人で行ってくるか。

「で、今回は用事それだけなのか？」
「まあ、うん」

魔剣のことは聞いたが、別に使う必要がないから支障は出ていな

いらしい。
代わりに手入れの仕方を訊かれたが、手入れも何も魔力によるコーティングがデフォルトでなされているため、使わない限りは問題も起こらないだろう。

「あ。先輩方は、休んでいた分の授業大丈夫なんです？」
「ああ、まったく問題はないぞ」

先輩がた二人とも、教師に事前の話はしていたため問題はなかったらしい。
俺はよくわからない。教師陣は龍眼族（レザール）の入学が初めてということで、どう接していいかどう判断すればいいのかわからないみたいだ。
だから、少々むちゃくちゃしても問題はなさそうである。

「シルバ君って、たまに思い出したように敬語使うよね。つかわなくてもいいのに」
「……そうなの、か？」

いつのタイミングで敬語を使ったのか、使ってないのか訳が分からなくなってるな。
学園は上とはいえ、アイライーリス先輩に至っては身分証明書上ではたった2か月違いである。

うん、先輩っていうか、っていうか。
……　うん。

## １４３　番外編　ランの独白（前書き）

短いです。

# １４３　番外編　ランの独白

「ねえねえ、聞いてる？」
「来週、海に行くんだろう？　聞いてるって」
俺、ラン・ロキアスはリンセルの話を聞きながら、腕立て伏せで下していた視線を上げた。
「こないの？」
「……本当にすまないんだが、やめておくよ」
「ねえ、少しは休憩も必要なんじゃない？」
リンセルはぐうの声も出せないほど聖人だ。
すでに数か月、俺は何も見えなくなって邪険に扱ってしまっていたが、それでもまだ俺に話しかけてくれるとは。
「まだ大丈夫だ。……シルバたちと、楽しんで行ってくれないか」
「……うん」
それから、アンセルの様子も聞いた。
どうも、完全に俺の事を忘れているし、俺が会いに行こうとしていないからシルバになついたらしい。
シルバ、か。
魔武具を自由に創造できる、ある意味ではこの世界で最も安定した収入源となれる能力と。
世にも珍しい龍眼族（レザール）なんていう種族を併せ持った転生者。
なぜ、同じ転生者だというのにこんなにも違ってくるのか。
俺にはよくわからないが、彼の話によると重力操作の能力はもと

もと持っていたらしい。
そもそもの転生元から、おかしいのかもしれない。
俺は本当によくわからなかった。

「とにかく、無理は駄目だよ？　私たちのためとはいえ……」
「これは、俺のすべきことだからな」

違う。本当は、俺が「したい」ことだ。
誰かを手に入れるために、親の試練を受ける。
達成できた時の感覚はおそらく何にも勝るものだろう。

「……頼む、今年中はそれに集中したいんだ」
「うん、……わかった、頑張ってね」

少女は、俺を見て悲しそうにそういうと修練場から出て行った。

さて、続き続き。

この時俺は知らなかったのだ。
……最終試練の相手が、そのシルバだったことに。

# １４４　仮本

寮の、自室で。

写本を持ちながら、エスペランサにもらった【仮本】の強化を考える。

彼女にもらったのは簡単に言えば、完成さえすれば魔導書にもなりえるまっさらな原本だ。

自分だけのオリジナル創造ができれば、その【仮本】の上に翳して詠唱すれば、その情報が書き込まれるというものなんだが……。

「うむ、わからん」

どうも。魔導書というものは魔武具ではなく神武具らしい。

ということは、俺の管轄外でおれは一切対処できないようだ。

最初から神武具は何もできないんだよな。魔武具を神武具に近い形にするのはできるが。

と、ここでドアのノック音が聞こえた。

エスペランサかと思ってドアを開けると、そこにいたのはアンセル。

「どうした？」

「……お疲れのようでしたので、差し入れを持ってきました」

……そう、アンセルは思ったよりも数倍俺になつき始めた。

リンセルが何か言いたげな顔をしていたが、もうあきらめたのか

何も言わなくなったところで俺も遠慮することはやめた。

「何をやっていたのです？」

「いつも通りの研究だけど……ん、ありがとう」

彼女からバスケットに入ったパンをバスケットごともらい。

なぜだかアンセルも部屋の中についてきた。

「ん？」

「一緒に食べませんか？」

おうおうおう。

……エスペランサみたいな、どちらかというと年下の感じをした女の子には慣れているからいいんだが。

アンセルみたいな、年上に見える人には弱いっていうか、苦手なんだよな。

ヴァーユ先輩とかも……関わってくれるのはありがたいんだが、そんなに。

それならアイライーリス先輩のほうが接しやすい。

「そうそう、記憶欠損の件だけどさ」

「戻さなくていいです」

「え」

亡くした記憶。

普通の人なら、何とかして取り戻したいものだが。

アンセルは違うらしい。

「記憶が戻ったら、次はシルバさんの事を忘れてしまいそうになる

気がして」
「……ええ？」
「いいんです、ええと」
「ラン・ロキアス」
「そうそう、その人のそばにいるリンセルが、あんな状態だというのに私が記憶を取り戻したいと思いますか？」

正論過ぎて言い返す言葉が見つからない。
俺はこの、目の前にいる美少女になんて言えばいい？

「それよりも、シルバさんがその方の……代わりになってくれませんか？」
「代わり？」
「はい」

代わり、という言葉は少し嫌いだが、彼女の顔というのは真剣そのものだった。
だからこそ、彼女は本気で言っているんだろうな。

「代わり？」
「……私と、お付き合いしていただけませんでしょうか？」

そのとき、俺の時間が止まったような気がした。

「アンセル？」
「……だめですか？」

心なしか、彼女の眼はうるんでいるような気もする。
ちょっと戸惑っている間に、彼女の起こした行動は。

俺を押し倒すことだった。

「助けてもらったこともありますし、いろいろとその後のケアも感謝しておりますし……」

横腹のあたりに、彼女の白い太ももがあった。
身体を動かそうと思えば、手と手を重ねられていた。

目の前には、彼女の顔があって。
雪崩れかかるように、こちらにぴったりと身体を重ねられる。

いや、まて。
相手は完全にお嬢様だぞ？

こんな方法、知らないはずだろう普通。

# 145　アンセル

「……あれ？　すみませんっ、……？」

彼女はとんでもない体勢のままで、眠りについてしまったらしい。
アンセルが、ぱちぱちとこちらを見つめ、弾けるようにして起き上がる。

ま、そこでいろいろと体のパーツが当たったのだが。
かなり目覚めたころから回復しており、いろいろと豊満だった。

「……大丈夫か？」

弾けるように起き上がった割には、すぐに身体の力が抜けたのか再度俺にのしかかるアンセル。
いったい何がしたかったのか、俺には全く分からない。

「アンセル？」
「……なんだか、急に眠くなっちゃいました」
「そうか、ゆっくり休むといい」

彼女を隣に寝かせ、俺はとりあえず起き上がった。
うむ、……まだ仮本のことまったく進めていないんだが、ここは彼女を放っておくべきだろうか。

「シルバ君は寝ないのです？」
「まずは差し入れを食ってからだな。……アンセルはそこで寝ていてもいいぞ」

寝ていたから何かするというわけにもならないんだよな。
しかしどうしようか。アンセルの対処。
対処？

「あ、眠くてもさっき言ったことはその場の勢いではないですから……」
「行動は？」
「ね、眠くて」

やっぱり眠いのか。
ここは作業をやめて、彼女を寝かせることをちゃんとした方がいいかもしれない。

アンセルの寝ている、俺のベッドに腰掛けるとするすると彼女は俺の背中にもたれかかった。
どうも、眠いのは本当らしく抑えたようなあくびが聞こえる。

「うー、このくらいの時間に起きているのは久しぶりなんですよ」
「そうなのか？」
「……はい」

お嬢様って、やっぱり生活リズムのがいいのかな。
俺にはよくわからないけれども。

しかし、力がたまに抜けたりするアンセルは肌で感じていて危なっかしい。

「寝ないのか？」
「……シルバさんが作業をしているなら、後ろでもいいので見ていたいです」

「……わかった、俺も寝よう」

だめだ、何も始まらない。

今日は寝よう。

「あの、いいんですか？」

「ん？」

「お付き合いの件、ちゃんと考えてくれますよね？」

考えないと、こういうことはしないと思うんだけどもなぁ。

別に俺は性欲がないとか、そういうことは全くないんだが、どうすればいいんだろうと少々戸惑っている。

エスペランサには性的な魅力は正直微塵にも感じないが、逆にアンセルはすごいのだ、その点。

さすが。

「……寝るか」

「……隣では寝ないのですか？」

「寝てもいいのか？　警戒心はないんだな」

「私を襲う気でしたら、私があああなっているときにはもう襲っていたでしょう？」

そういわれたら、何も言い返せない。

正直、あの時はドギマギした。

や、むっちりしているというよりはすらっとしているのだが、なんというか色気が半端ではない。

これがファンタジー世界の美少女か、と驚きを隠せなくなる程度にはあれだけで堪能することができた。

しかしだ。

唐突すぎて、なにもいうことができなかったし身体を動かすこともできなかった。

むしろ、あの時は本当に襲われるかもしれないと思ったのである。

「今日はゆっくり寝ようか、な」

「はい、おやすみ、なさい」

最後は消え入りそうな声になっても、こちらをちゃんと見つめるようにして言い切ったアンセル。

眠った彼女に掛布団を乗せて、俺はとりあえずどうしようか考えた。

結局、隣に寝ることはやめて雑魚寝することにした。

……なんだか、俺の寝相が悪くて彼女に迷惑をかけたらどうしようかなとか思ったんだよ。

「おやすみ、アンセル」

差し入れを食べ終わり、寝る準備を済ませた俺は暗い部屋の中で眠っているアンセルを見つめた。

わずかに差し込んだ月明かりを浴びた彼女は、正直かなりきれいだった。

彼女にしても……もちろんかまわないんだが……。

エスペランサの扱いもちゃんとしないといけないし、少々真面目に考えた方がいいかもしれない。

## １４６　暖かな朝（前書き）

アンセル視点。

# 146　暖かな朝

朝起きると、私はシルバさんの部屋にいた。
昨日、眠くてそのまま……見たいです。

「う……」

結局、私はシルバさんになんて言ったんでしょう。
シルバさんは、私の事を逆に考えてちゃんと考えてくれるのでしょうか。

「あ、起きたか」

目を横に向けると、そこには椅子を回してこちらを向いたシルバさんの姿がありました。

正直、シルバさんのサバサバした雰囲気に、龍眼族（レザール）の鋭いフォルムはとても似合いますし、恰好がついています。

私はシルバ君自身が魔剣を振って戦うところを今まで見たことがないのですが、きっと輝かしいほど似合っているのでしょう。

「今何時ですか？」
「んー特に気にしなくていいんじゃないか？　夏休みだし」

そういいながらも、シルバ君は腕時計をこちらに見せてくれます。
部屋には時計がないようですね、それにしても簡素な……。

「今日は何か予定が？」

「ちょっとお昼にエスペランサと学園に行って。……それくらいかな」
「私も、ついていっていいでしょうか」
私の申し出にたいして、シルバさんは数秒考えてすぐに頷いた。
こちらのほうに身体を移動させると、私の頭に大きな手を乗せて微笑むと、シルバさんは「朝食残ってるか訊いてくる」と部屋から出ていきます。
……なんだか、子ども扱いされているような気がしますが、私の気のせいでしょうか。
部屋を見回して、机の上に小さな本を二つ見つけました。
……シルバさんの研究成果でしょうか、少々興味はありますが、見せてくれるときは見せてくれると思いますのでここは見ないでおきましょう。
「朝食、一応持ってきた」
ほどなく、シルバさんは戻ってきました。
持ってきたのはベーコンと目玉焼きでしょうか。使っているのはポラリス豚のようです。
ここ、都市国家ポラリスのオウラン帝国側で牧畜されている一般的な豚肉ですね。
質が良く、それに数も多いので比較的安値で手に入ります。
卵は……普通の鶏のようです。おそらく個体名はあるのでしょうけれど、卵だけでは私に判別はつきません。
ポラリス豚のほうは、少々肉に脂が少ないので見分けがつきまし

た。

「あの、思ったのですが」
「ん？」

私がシルバ君を見つめると、シルバ君はいやな顔一つせずに私のほうを向きます。

たびたび研究の邪魔をしているようで非常に申し訳ないのですが、それでもやっぱり聞きたいことはたくさんあります。

「シルバさんって、この世界の住民ではないのですよね？」
「うん、そうだよ」
「えっ」

素朴な、ちょっとした疑問だったのですが、シルバ君はさらっと教えてくれました。

「知らなかったのか？」
「今さっき、思いつきで……」
「ルークエルリダスさんが一発で当てたから、もう知られているのかと思ってた」

お父様の洞察力は私の眼から見ても異常です。

「アンセルだからいいか。取り合えず俺は【チキュー】っていう世界から転生してきた」
「ということは、一度なくなられているのですか？」
「ん、そうだよ」

戦いに負けてね、戦死した。とシルバさんは顔色一つ変えずに淡

々と教えてくれる。
……心なしか、シルバさんの眼は悲しそうでした。

いつもはあまりそういう目をしたことを見ることはなかったのですが、どうなのでしょうか。
私の知らないシルバさんも、かなり多いのでしょう。

特に、私は数か月間眠りについてくれていましたし。

「……なんだか、ごめんなさい」
「ん？　気にすることはないし、この世界に来てアンセルやエスペランサに出会えたから」

この時に、最初に私の名前を出すとは、やっぱりわかっているのですね、シルバさん。

## １４７　付き合い

「正直、話足は全く問題がないのですけれども。逆にシルバさんはいいのですか？」
「俺はって？」
「簡単に言えば、甲斐性の問題です。ハーレムを築くのはいいですが、ハーレムは愛人じゃないのですよ？」

エスペランサに許可を取りに行く。
別に俺が勝手に決めても構わないんだが、この世界でいう「ハーレム」というものが俺の認識と一緒かどうか、確認してきたということである。

「んー、でも俺は性欲とか、人並しかないぞ」
「いやー。そういう意味ではないのですよね。本当に大丈夫です？」

エスペランサはふん、と鼻を鳴らして腕組みをする。
そして俺のほうを向いて、ドアのほうをみる。

「アンセルさん、入ってきていいですよ」
「あぅ。……わかっていましたか」

入ってきたのは、エスペランサが言っていた通りアンセルである。
こちらにくると、すとんと床に座り込む。

「シルバさん、これからもよろしくお願いできますか？」
「アンセルがいいというのなら、喜んで」

とりあえず、なんだかんだで今アンセルとエスペランサが何か話

をしている。
俺は、ここから退場した方がよさそうだ。

「というわけで、今日はどうするつもりだったのですか？」

とりあえず、今日の予定を見直そう。
本当は、新しい魔剣の研究でもしようかと思ったのだが、アンセルがいるんだったら予定変更だな。

「護符を作りたいんだ」
「護符？」
「うん」

アンセルに対しては少しずつ情報を開示していくとするが、エスペランサの正体は当分の間教えないでおこう。
ルークエルリダスさんがエスペランサの事を知っていたということは、レイカー家は一家で希望神信者かもしれない。
そうすると、いろいろと関係が今からでも崩壊しかねないのだ。

「魔法的干渉から、エスペランサとアンセルを守るためのお守りみたいなものだ」

ここで、エスペランサの分も作るといったのはもちろんのことだが、彼女の存在を偽装するためである。
それをエスペランサはわかっているようで、しかし「私は謎法族（カラミタ）なので、必要ありませんよ」といかにもな否定を入れてきた。

「あら、そうだったのですね」
「思ったよりも動じないのです？」
「ええ」

見慣れておりますし、種族でいちいち偏見を持つほどレイカー家は知識に乏しいわけではありません、とアンセルは柔らかく目を細めた。

たしかに、当主があれだからなぁ。
本当に、レイカー家とかかわりを持つのはこちらとしても、後々有利なことかもしれない。

「あの、シルバさんの事をお父様に報告してもよろしいでしょうか？」
「ん、いいけど記憶の件はどうするんだ？」
「ちゃんと説明します。シルバさんに否はありませんし、お父様もシルバさんを信頼してらっしゃると思います」

そういったアンセルの顔は、何処か決意に満ちている、と称すればいいのだろうか。
どうも、目が据わっているような気がした。

エスペランサは、俺のほうを向いたり、アンセルのほうを向いたり首をせわしなく動かしている。

「あの、あのー」
「エスペランサさんも、再度ながらよろしくお願いいたします」

先ほどもいろいろな話をしていたみたいだが、アンセルの今の言葉へエスペランサがうなずいたのは、容認するということだろうか。

ちなみに、よっぽどがない限り正妻はエスペランサのほうである。

ハーレム、か。

俺はその単語をかみしめるように心の中でつぶやくと、もう一人の転生者、ラン・ロキアスの事を考えた。

彼の女を全員吸い取ってやろう、ということはしないが、レイカー家の後継をルークエルリダスさんが正式にやってくれるというのなら、俺はせめてリンセルさんもこちらに移行させたいものだ。

「シルバさん、考え事ですか？」

「いや、大丈夫。……学校に行くかぁ」

そんなことよりも、この二人……。

口調がどちらも敬語なんだよな、非常時には聞きわけがつかないかもしれない。

# 148　アミュレット

アンセルが彼女になった、ということで俺は先ほど、魔武具を一つ作った。
媒体をアンセルがくれた市販の安いネックレス、触媒を【サンストーン】と【ムーンストーン】っていう、高ランクそうで結構安いものを使ってみる。

ちなみにこの二つ、高質な魔力を大量に流し込むかいろいろすると、【ソルレイト】と【ルナライト】という高級触媒にすることもできる。
そもそも、上位の二つは地域によっては守り神の代わりになっていたりするんだけれど、とにかく今回使っているものはそこまでではない。

しかし、残念なことに今回は俺の魔力を使った。
その結果。

「あー、やっちゃった気がする」

【持ち主に対して負の感情を持った人からの、干渉を一切無効化する】というとんでもない魔武具ができてしまった。

「とりあえず、アンセルにこれを渡そう」
「初めて見ましたが、綺麗ですね。鍛冶？　でしたっけ」
「や、【魔武具創造】だから鍛冶じゃないな」

今回は金属を使っていないからな。
触媒であれ、媒体であれ金属を使えばこの世界では「鍛冶」とい

うらしい。
よくわからないけれども。
そもそも、鍛冶っていうのは日本で「金打ち」がなまってなったんだっけか。
いや、うろ覚えだから違うかもしれない。
そもそも日本人じゃないから、知っている方がおかしいのかもしれないな。
「ところでこれはなんです？」
「【干渉護符（イミュレット）】」
「効果は？」
「【持ち主に対して負の感情を持った人からの、干渉を一切無効化する】」
「……ちょちょ、ちょっと待ってください」
アンセルがあからさまに、慌てた。
これが物理的にも効用があるのか分からないが、これで彼女に対し劣情を持った人の干渉をすべて受け付けなくなってくれるとありがたい。
「でも、これって。万が一シルバさんが私に……そういうことを思ったら」
「うん、たぶん干渉できなくなる」
「んー。シルバさん、改良版でシルバさんを対象から外してくださいね！」
元気いっぱいに言ってくれた。
あら、俺って信頼されてる？

しかし、今の間はさすがに彼女には首にかけてもらおう。
似合ってるな。

「紫色なんですね」
「時間によって変わるようにした。朝に近いと赤へ、夜だと青に変わる」
「なるほど」

ちなみに、隣にいるエスペランサに渡そうとしたらそのまま「いらない」と返された。
やっぱり必要ないらしい。

「効力さえなければ、普通にアクセサリーにいいのですけれど」
「わかった、普通にアクセサリー作る」

さすがに、魔武具しか作れないため何かの効力はつけるべき。というかつけないと作成できないというへんなデメリットがついている。

「アクセサリー度合いを……と思ったが、その色変化がすでに魔法なんだよな」
「なるほど。効果は違いますが、お揃いというわけですね」

アンセルは実に嬉しそうだ。
そんな彼女を見てつられたのか、エスペランサも微笑む。

「アンセル、すまないが一回はずしてくれ」
「はい」
「作り直す」

このくらいの回収なら、もんだいない。
持ち主に俺も登録してしまえばいいだけだからな。そうすれば行ける。

……や、でも一応俺を対象から外すために、作成者を対象から除外すればいいのか。

「エスペランサさんエスペランサさん」
「はい？」
「シルバさんは転生者ですが、エスペランサさんは謎法族（カラミタ）じゃないですよね？」

俺が作業に取り掛かろうとすると、後ろからそんな会話が繰り広げられており、手を思わず止めてしまう。
……アンセルも、親に負けず劣らず良い「眼」を持っているな、今確信した。

「……レイカー家、おそろしや。です」
「ふふふ」

ここでエスペランサの声が、本気で怖がっている声というのが一番印象に残った。

……すごいなぁやっぱり。

## １４８　アミュレット（後書き）

護符なのにネックレスとはこれいかに。

## 149　晩御飯

「アンセルさんなんなんですかあれ」

夜、アンセルが「ふんふん」とは鼻歌を歌いながら飯を作っている。

本当に上機嫌だな、そのアミュレットからくる安心感も幾分か加算されているのかもしれないが。

「ねえ、どうなんです？」

「ん？」

「アンセルさん」

アンセルが俺にとってどうなのか、正直今のところはわからない。ラン・ロキアスという存在が彼女の記憶から消飛び、性格も口調も思う以上の変化を見せたことで完全に別人になっている感じもする。

だからこそ、彼女に対しては学園を離れていた時間が多かった俺にとっては、かなり気軽に話ができる一人でもある。

意識不明に陥っていたこともあり、こちら同様この数か月で怒ったことが分からないし。

「あの人、やっぱりレイカー家そろって凄い【眼】を持っていますよね」

「そうだな。……うん。ところであの時なんてごまかしたんだ？」

あの時、俺は盗み聞きしていることに罪悪感を感じてしまい、作業に集中したのだ。

希望「神」であるはずのエスペランサが、ちょっと本気で怖がっているところには驚いたが、それがレイカー家の能力か。

この世界、転生者以外には「スキル」なんていうものはめったに存在しないらしいし。

ルークエルリダスさんに万が一そんな能力があったとしても、それがアンセルにも遺伝するとは思えないんだよな。

「シルバ君は、何が食べたいです？」

「何か作れるのか？」

「オウラン帝国の料理、私も好きなので作れますよ」

ということは、アジア系の混合料理が食べられるということだ。

これは楽しみだなぁ。俺も前世での高校は日本だったが、日本料理は大好きだった。

なんていうか、脂っこさがない感じがいいよな。

中華料理も好きだが。

「じゃあ、頼む」

「そうですね。……今日はリンさんも、リンセルも帰ってこないのですよね」

「サポート」らしい。誰のってもちろんここにもう何か月も戻ってきていないラン・ロキアスのだが。

何をサポートするのか、気になるところではあるが。

もう、あの人に構う必要はないんじゃないかと俺は思ってしまった。

ああ、ランに俺とアンセルが付き合っていることなんて知る由も

ないだろうし、リンセルにもアンセルは言っていないという。

「リンセルは、気づいているかもしれませんけどね」

「気づいても、彼女の性格なら言いそうにないですよね……」

ちょっとだけ罪悪感が湧くが、それはリンセルに対してでありラン・ロキアスに対してではない。

まあ、特定の誰かを今は狙うつもりはない。

アンセルとエスペランサがそばにいてくれるだけでも、今は大満足である。

ていうか、昼にあんな言葉を言われたら期待しちゃうのが男だとおもうんだが。

や。下心で埋め尽くされている前世の友人ではない、あーでもあの人女の子侍らせてても結局愛したのは一人だったな。

あの人、死なないからおそらく転生することはないだろうけれども。もう一度会ってこういう時のアドバイスをほしいものだ。

「シルバさん、何を考えているのです？」

俺の隣で、こちらを向きながら疑問の顔を浮かべるのはエスペランサだ。

むむ。俺の表情をずっと見ていたらしく、どうも微妙な表情を浮かべているエスペランサ。

「や、なんでもないよ」

「嘘ですね」

私が、いつからシルバさんの事を知っていると思っているのです

かと彼女はそういった。
何も言い返せなくて、俺は「あとで」と彼女に言う。
さすがに、今聞いてみてアンセルにエスペランサの正体を知られてもいいことはない。
それならもうすこし、信頼関係が気づきあげられてからのほうが確実だろう。

「シルバさん、できましたよ」

ちょうどできたようだ。恋人の料理というのは嬉しいのだが、日本のアニメには美少女の作る料理がまずいというテンプレがある。

おいしかったです。

## １５０　悩み（前書き）

今日は複数回更新するかもです。おたのしみに。

# 150　悩み

「シルバさん」
「……ん」

アンセルは、よく俺の部屋に来る。
こちらが呼ばないと来ることのないエスペランサとは大違いで、それこそ毎日のようにくる。

「あの、作業中ですか？」
「ん、休んでいたから大丈夫」

そして、彼女が来ると同時に俺の休憩は始まる。
今まで、寝るまで無休でやっていたため気分的にも体力的にもよくなった。

「今日は何の研究を？」
「複数の属性を持つ、触媒が作れないか考えてた」

別々の金属を合わせた合金を使えばいいのではないか、と問われればそれで仕舞だが、合金でも作り出すことのできない複数属性というものが存在する。

とりあえず、この世界に3種以上の属性を持つ媒体もしくは触媒は存在しないという。

「それって、確か理論上は存在可能なんですよね」
「うん。……でも、魔剣と同じかそれ以上の難易度だろうな」

残念ながら、触媒は魔武具扱いではない。
だからこそ、調合のスペシャリストが一人ほしいところだが。
俺の持っている【魔武具創造】みたく、ほぼ確実に作れてしまっても面白みがない。

……とんでもない「運」を持っている人はいないんだろうか。

「理論上可能っていうのは、この世界にもたくさんあるのか？」
「ありますが、もちろんそれらは魔法をもってしても開発がされていないものですよ？」

まあ。できたら大丈夫なんだよな。
そうしたら「理論上」なんて言わなくて済むし。

俺が立ち上がって、アンセルのいるベッドのほうに腰を下ろすと彼女は首をかしげてこちらを向いた。

「お疲れですか？」
「うん、今日はいいかなって」
「お邪魔、でしたか？」

と、とたんにしょぼくれるアンセルの姿は、とても年相応に見えなくて可愛い。
最初は俺の愛情もへったくれもなく、ただ彼女の安全を確保したくて付き合い始めたのだが、一週間も経てばだんだんと愛情というものも生まれてくるものだ。

アンセルはいつもどおり、なついているといえばいいのやらなんやら。

「疲れているのなら、あの」
「ん？」
「ひざまくら、しましょうか？」

……えっ。
この人、本当に。こんなにも楽でいいのだろうか。
俺が何をしたというのだ。特に何もしていないぞ。

……意識を覚醒させたのは確かに俺の「魔武具」だが、演奏するのには一定以上の技術が必要らしいし単に俺だけの力ではないのだが。
でも、これでももう一回ラン・ロキアスのところにいかないだけいいか。

「最近、シルバさんは何か思い詰めているようですね」
「まあ、学園をやめようかなとも思ったりしてるけど……おおっとごめん」

本当は、先に「希望神の英雄」としての役目を果たすためにもう、学園をやめようかなと時々フッと思ったりする。
しかし、今目の前にいる少女アンセルのその顔を見てやめられるわけがないだろう。

「鍛冶専業になるということですか！？　……そういえば」
「ん？　ああ、専業はならないけれど」
「そういえば、そのバンダナはなんです？」

彼女によると、前々から気になってはいたが切り出す機会がなかったとか。

「もしかして、第三の眼が開眼したとか」
「……前世でなら、【頭大丈夫か】とか真顔で言えそうだが、この世界は実際に会ったりしそうだからな。……やや、違うぞ」
「……希望神様の、英雄紋章」

やっぱり、アンセルは知っていたか。
と、そろそろと右手を伸ばして俺の、紋章を恐る恐る触るアンセル。

彼女の持つ属性だからか、夏でも少々ひんやりとしていて気持ちがいい。

「本物、ですね」
「うん」
「……これが、その原因です？」

アンセルは少々納得のいかないといった顔をしていたが、諦めたようにそして、決意したように俺のほうを向く。

「シルバさんが、どうしようと。私はついていきますよ」
「……まだ、何も決まっていないんだがなぁ」

年末で、ランが成功したらランと結婚するんだぞ？　分かってる？

そう彼女に言いたかったが、アンセルの顔を見ていたら、その気もなくなった。
どうせ最終関門は俺だろうから、俺がランに勝てればいい話である。

「……今日から、少しくらい戦闘訓練もするか」
「お手伝いしますよ」
「ありがとう。……さてまずは寝ようか」

# 151　海1（前書き）

海、開始。

# 151　海1

「夏だ！」
「海だー！」

リンナアイデル・パン・リーフさんとリンセルが砂浜から海へ、突撃するように浮き輪を持って駆けていく。
さすがに二人だけでは、万が一の時危ないだろうということでウスギリがついていった。

……そう、海である。
リンナアイデルさんの助けを得て、今、俺たちはセリシト魔法王国の海に来ているのだ。
ほぼプライベートビーチと化しているが。

海は透き通った蒼だし、南国を思い浮かばせてくれる、そんな海である。

「あっづい」

そんな中、俺は太陽をじっと睨みながら砂浜に寝転がっていた。
すでにシートは敷き終わっているし、アンセルとエスペランサは優雅にビーチベッドで寝転がっている。

「あ、クリーゼも来ていたのか」
「……うん」

クリーゼ・シックザールの水着は何て言うか、目のやり場に困る。
いや、決して色っぽくはないと思うのだが、なぜ競泳水着っぽい

んだろうか。
プロ仕様なのだろうか、水の抵抗がないのか？
胸がないから、最初から抵抗は少ないと思うんだがなぁ。

「貴方は。普通なんだね」
「何か変なものを着ていてもだめだろう」

無難に、無難にサーフパンツ。
結局、ウスギリと選びに行くのはなんだか気まずかったので自分で選んだ。

じゃ、ちょっと泳いでくるといったクリーゼにうなずいて、俺はビーチベッドで寝ている二人の彼女たちを見に行くことにする。

「……ええと。……ごちそう様？」
「もう。何を言ってるんですか」

アンセルは巨乳だ。胸は大きい。
というか、今回来た女子の中では一番だろう。
ラン・ロキアスはなんというか、貧乳が好みらしくリンセルもクリーゼも、リンナアイデルさんも貧乳であった。

「エスペランサは……うーん」
「なに微妙な顔しているのです？」

スペランサは、なぜスクール水着なんですかねぇ。
日本で見たものと、二次元の画像で見たものと全くイメージが一致したとんでもないものを着ている。
前のほうには名札で、「えすぺらんさ」と書かれてある完璧ぶり、

俺はなんといえばいいんだろう。

「オウラン帝国で、女性が普通に着用しているのですよこれ」

「嘘！？」

「嘘です」

……だよな。

さすがにそれはないよなぁ。

魔武具として、絶対におぼれない水着を開発するのはどうだろうか。

そうすれば女性の採寸もし放題なんだが。

と、アンセルの顔が一瞬怖いものに変わったような気がした。

「なんだか、シルバさんがいやらしいことを考えているような」

「ないない、大丈夫だないないない」

必死に否定。採寸は別にいやらしいことではないので、セーフのはず、である。

「そうですか？」

「うん」

ていうか、やるとしてもエスペランサかアンセルだな。

ほかの女の身体は、すまないがまったく興味がない。

俺は、自分に差し出されたものにしか興味を示さないようだ。

思ったよりも、自分がドライに思えてきて少しだけ悲しくなった。

……まてよ？　それならクレインクインも……。
いや、そんなことはないない。

「うーん。数か月ぶりの休日というのはいいものだな」
「そうだねぇヴァーちゃん」

先輩方二人は、たった今着替えがが終わったみたいだ。
アイライーリス・ホムラ・アマテノヴァル先輩はどこから持ってきたか分からないようなエロい水着で。
逆にというかなんというか、ヴァーユウリンス・ヴァン・フロガフェザリアス先輩は一般的なビキニで。

しかし俺たちのことはスルーして、海に入っていった。
……うぇ。

「クレインクインも呼んでこればよかったかな」
「シルバさんって、聖国王様をなんて思ってるんでしょう」
「……そうやっていえば、アンセルだってそうだろう」
「まあ、遠く離れた親戚ですよね」

そうやっていえるアンセルのほうが凄いと思う。
ちがう。レイカー家が準王族だというのに、なんだか俺が勘違いしてしまっているような節がおかしいのだ。

「転生者はルール完全無視でも構わないのですから、気にする必要はないかと」
「なら大丈夫だな！」

……ごめんエスペランサ。
俺ってなんで、大丈夫って思ったんだっけ？

# 152　海2

「シルバさんは泳がないのです？」
「それをそっくりアンセルに返そうか。アンセルは泳がないのか？」
ビーチベッドで寝転がる少女に俺は問い返すと、立ち上がって大きく伸びをする。
手の甲、そこについた数枚の鱗が太陽の反射を受けて煌めいた。
「バンダナはどうしようかな」
「どれどれ……ええと、はい」
と、エスペランサは一時的に紋章を消す魔法をかけてくれたらしい。
アンセルに見せても「大丈夫です」と親指を立ててくれた。
「私たちも行きますね」
っと、とエスペランサはビーチベッドから立ち上がると、そばにあったラウンジフロートに魔法で空気を入れ始めた。
フロートってあれだ。寝っ転がれる浮き輪みたいなアレである。
この世界にもあった、ことがすでに驚きなんだが。
アンセルが普通に見ているということは、別にエスペランサが創造したということにはなるまい。
「シルバさんシルバさん」
「ん」
「これ、魔法で改造してください」

……あー。
できるだろうか、簡易作業台で。
できる、かな。

「失敗するかもしれんぞ」
「全然かまわないですよぅ」

直すのは簡単ですから、とエスペランサは笑う。
うん、大丈夫。

なら、少しくらいいいか。
俺は魔法の鞄（かばん）から、【氷】属性の触媒を適当にいくつか取り出し、作業台の上に乗せた。

「うん、できたかな。大丈夫？」

海の中。いや上。
とりあえず、どんなことがあろうがひっくり返らないようにはした。
それぞれ別のものに、浮かんでいるのはアンセルとエスペランサである。
あてもなく流されていくのもどうかと思ったため、一応そこまで遠くまで行かないようにも指定した。

「ここ、【龍化（ドラコフォーゼ）】したらどうなるんだろうか」

口に出してみると、それがとんでもないことのような気がして、俺は首を振る。

変なことを考えてはいけない。

そんなことを考えてしまうと、やってみたくなるのが人間なのだから。

俺は人間じゃないけど。

「何か考えてるの？　シルバ君」

と、何も考えずに俺がぷかぷか流されていると、話しかけてきたのはリンセルである。

胸は……ないか。はぁ。

「どこ見てるの？」

「……おうすまん」

しかし、その顔は決して怒っているわけではなく、むしろ少々恥じらいのほうが大きい。

……当たり前か。

「冗談冗談。……水着だもんね、仕方ないね……」

貧乳は目の保養にならないんだよなぁ。

……正直、リンセルみたいな幼児体型っていうか、体の全体的発育が本来の年齢よりも下回っている人は愛でる分にはいいが色欲に惑わされるようなことはないのだ。

それで考えれば、アンセルがやっぱり一番だなぁ。

「……おねーちゃんのこと考えてる」

「うん」

「……お姉ちゃん、シルバ君とお付き合いを始めたんだね」

「おう」

俺は特に、彼女に対して謝ることもないため返事を避けた。

変に恨まれるようなことはしていないはずだし、そもそも一度記憶がアンセルは消えている。

健忘、なんだったか。とにかくそういうことなのだ。

「お姉ちゃんは、記憶の事なんて言ってる？」

「俺に聞くか？　それ」

「最近、お姉ちゃんはそういう関係の話をしようとすると避けるの」

リンセルの顔というのは、その言葉を発した瞬間にどこか悲しげだった。

姉妹の間に亀裂が走り始めている、のかもしれない。

俺にとっては好都合極まりないが、今の状況考えるとそんな風にも言ってられないか。

「記憶は戻さなくてもいいって言われた」

「……やっぱり、か。……お姉ちゃん、今のラン君の状態を見ていたらそんな気はしてたよ」

というよりか、まだランと出会っていないんだよなぁ。

ランは帰ってきていないし、そもそも俺も無理にアンセルとラン・

ロキアスを合わせようとしていないのだから。

「これで、ラン・ロキアスが戦う意味が半分なくなったな」

「……そうだね。……ということは、シルバ君はお父様から訊いてるんだ」

……ここで教えても、海での楽しみが消えるだけか。

「ないようっていうか、さらっと聞いたけど中身は教えてもらってないぞ」

「そっかぁ……」

でも、ありがと。

リンセルは、消え入りそうな声で口を動かすと、先輩方のいる美少女の楽園へと戻っていった。

# 153　移動

海に来たから、とりあえずは何か食べようということになった昼ごろ。
海の隅にあった海の家みたいな、小さな小屋にてリンナアイデルさんはいろいろな料理を展開していた。

「美味しそうだな」
「シルバさんは、この辺の料理初めてなんですか？」
「うん」

初めて、とはいってもここの世界。
いろいろな場所が、【地球】と違うようで似ている。
だからこそか、少々驚きも……。

魔剣鍛冶がここまで難しいらしいことには驚いたが。
前の世界は、似たようなものを作るのは確率的にはもっと簡単だったのに。

まあ、俺は確率無視で材料さえあれば【魔武具】は作成できるから、そこは気にしなくてもいいんだけれどもな。

「はい、シルバさん」

みんなが思い思いの料理を食べているなか、ジュースを三つトレーに入れてきたのはアンセルだった。
一つを俺に、一つをエスペランサに渡してニコリと微笑む。

「美味しいですか？」

「うん」

味も呑んだ感触も、普通の炭酸飲料だが。
食べたこともないような、甘い味がした。

何かのフルーツだろうか。
アンセルに訊いてみると、彼女は「結構ありきたりな果物ですけど、シルバさん食べてないのですね」と笑う。

「シルバさんの元板世界だと、柑橘系のミックスみたいな感じでしょうか」

分かりやすく。解説を入れてくれるのはエスペランサである。
どうも、彼女の説明によるとオレンジのような形をした赤い果物ということだ。

真っ赤かぁ。少しリンゴのような色を想像して、おいしそうと思ってしまった。
実際美味しいんだろうけれども。

今度、ゆっくりと市場とか行くべきなんだろうか。

「アンセル、この後どうするんだ？」
「海に入りたい方は続行で、宿に先いく人は宿へ。二手に分かれようってことになっていますけれど、シルバさんはどうなさいます？」

もう、海はいいかな……。
宿、というかおそらくホテルだろう。
普通に散歩してみるのもいいかもしれないな。

「俺は観光で」
「はい、ではシルバ君は宿・観光ですね」

ちなみに、【オウラン帝国】【セリシト魔法王国】【カエシウス聖王国】の三つと、【都市国家ポラリス】の合わせて４国は同じ言語を使っているので、心配はいりませんよ、ということらしい。

もう、一つの国でいいんじゃないのか。そう思ってしまったがいろいろと込み合ったことがあるらしい。

アンセルは詳しく言ってくれなかったけれど、こんど歴史書を読んでみるか。

「そうですね。……カエシウス聖王国にこれからも絡むのであれば、必要かもしれませんね」
「知識が？」
「はい」

シルバさんの人生は自分で決めるものですが、私を妻にしてくれるというのなら、私は構いませんよとまたもや真顔で俺が思わず飛び退ってしまいそうなことをいうアンセル。

「うん、それは年末に決まるものだよ」
「んぅ？　たしか年末って、アレですよね」
「おう」

アンセルにはすべてを教えておいたからな。
いいのいいの。俺が勝てればいいんだよ。

「観光、俺とリンセルだけか」
「……そうだね」

ほかのみんなは、まだ遊び足りないらしく。
俺とリンセルで、車に荷物を積み込むことになった。

まあ。俺が全部やったんだが。
さすがに女子に力仕事をさせるわけにはいかない。

「お疲れ様、ありがとね」
「何が？」
「……負担と思ってないあたりが凄いね」

まあ、元々力はあったほうだし。
……龍眼族（レザール）の膂力（りょりょく）補正も相まって、力仕事を力仕事と思わなくなっていた。

「なぁリンセル」
「ん？」
「一緒に観光しないか？　俺なら、護衛代わりにもなると思うし」

護衛っていうか。
こんな可愛い少女が一人で歩いていたら、手を出されるかもしれない。
うん。俺の判断は間違っていないはずだ。

「うん……お願い。一緒にいこっ」

……しかし、こうやって快諾されることも予想はしていない。
俺をただの男友達と思ってくれているのなら、それでいいけれども。

「……ロキアスの件は大丈夫なのか？」
「大丈夫、だとおもう。……クリーゼちゃんが言いつけない限りは」

……それ、一番危なくないか？

## １５３　移動（後書き）

もう一回更新するかも、です

# 154　ユーニウェルシタース

「なんていうか、別の意味で幻想的だ」

リンセルと二人で、宿を出た瞬間俺が発した言葉はそれだった。
なんていえばいいのかわからないが、しかしそれしか言えない。
カエシウス聖王国、王都アリアみたいな白い世界ではない。
むしろ、緑生い茂る綺麗な町だ。

なのに、しかし。
それでも、その言葉しか出てこなかった。

「……幻想的？　……魔法的なものはほとんどないよ？」

この世界で、「幻想的」というと魔法関連のワードに限定されるようだ。
……しかし、どうなんだろうな。
少なくとも、前の世界ではこんなものは見ることができなかった。

「世界樹みたいなのがあるじゃないか」
「うん、それ世界樹よ？」

リンセルは少々怪訝な顔を浮かべ、こちらをむく。
と、すぐに「あ、この世界のことあまり知らないもんね」と気づいてくれたようだ。

「海のほうからもうっすら見えていたでしょう？」
「うん」
「近くまで行ってみる？」

世界樹。そう彼女が解説した、天に届くほど巨大な木。
そこを中心として、ここセリシト魔法王国の……なんだっけ。

「ユーニウェルシタース」
「ん？」
「それが、ここの名前」

……リンセルがそう説明してくれたとおりである。
ていうか、俺の考えることが分かるのか。さすがエスパーだな。

「ねえ。お姉ちゃんに言って、私に言ってないことあるでしょう？」
「あるよ」
「……そっか」

彼女は、きっと「私にも教えて」と言いたかったのだろう。
しかし、俺が予想以上に早く返事をしてしまったため、素の返事が来てしまったものだと思われる。
でも、俺は今現在で彼女に言うことは何もないんだなぁ。

「私に言うことはないんだね」
「ない。少なくとも、今の俺たちの関係にいるあいだは」

この関係かぁ、とリンセルは何かを思案するような顔で黙り込んだ。
彼女が何を考えているのか、俺にはわからないが。

しかし、今の状態でリンセルがラン・ロキアスと交際を解消させるということは起こらない。
そこで俺に乗り換えるようだったら、俺は本気で軽蔑するが。

「そうだね。……うん、大丈夫」

少し寂しそうな顔を浮かべてはいたが、それでもうなずいてリンセルは無理にでも笑顔を浮かべた。

……ていうか、そばにエスペランサがいないと落ち着かないなぁおい。

今までエスペランサが隣にいたこと、それが当たり前になっていたせいかな。

……同じくらいの身長の、リンセルがいるからまあいいか。

「……じゃあ、街中を歩きましょうか。……どこか行きたいところはある？」

「時間が余れば、商事に行きたい」

「……魔剣鍛冶の？」

俺がうなずくと、リンセルはこくりと俺のまねをするようにうなずいて、歩みを始めた。

「私も、観光のほうに行けばよかったですかね……」

みんなが、次はビーチフラッグをして遊び始めたあたりで、飽き始めた人が一人。

アンセルである。

彼女は、気だるげにはしゃぎまわっている少年少女を見つめては、空を見上げて、そして最後に世界樹のほうを見つめていた。

エスペランサは逆に、自分から輪の中へ入っていったのだが、アンセルは物憂げな顔をしたまま動かず。

刺すような日差しを見つめて、自分の周りに魔法で簡単な結界を張る。

「さすがに暑すぎますよね」

張った結界は、もちろんクーラー代わりに。

「アンセルさん、楽しくないです？」

「……いえ、大丈夫ですよ」

エスペランサに訊かれて彼女は笑って見せるも、その顔は決して優れるようなものではなかった。

自分が何を思っているのか、わかっているのだ。

だからこそ、不安になっているのだろう。

「……リンセル、シルバさんに変なことしないかしら」

自分の嫉妬からかもしれない。

でも、付き合ってくれたばかりの彼が、知らないところでほかの

人と交際しているという変な推測に、とらわれて素直に楽しめなくなっていたアンセルであった。

## １５５　世界樹の枝

「何かほしいもの、あった？」
「……ちょっと考え中だが、このべらぼうに高い枝はなんだ？」
俺が指差したのは、商品名の表記がなくただただ値段の高すぎる一本の枝を指差した。
察しはつくが。それにしても、高すぎる気がする。
「それ。世界樹の枝よ」
「……それでも、高くないか？」
「季節の変わり目に、１０本だけ採取が許可されているみたいね。……年に、多くても３０本」
世界樹というのは、少なくとも数万年以上魔力をため込んでいるらしく、枝にもそれが浸透しているらしい。
「最上級の魔力は。この枝から搾り取るの」
「魔武具の触媒にも使えそうだな」
「……お金、あるの？」
あるよ、と俺は財布を取り出した。
６ケタか。まあ大丈夫だろう。
「あるある」
「魔武具の買い取りもしてるみたいだけど、万が一はそれでするの？」
「足りるから大丈夫だって。……【平穏】を強化しようかなっておもってさ」

それもそうね、と笑顔にやっとなってくれたリンセル。
でも、記憶の欠損はシルバ君の失敗じゃないよともう何度目かわからない慰めをもらった。

「今、お姉ちゃんすごく幸せそう」
「……そうかな」

俺はアンセルの事も、リンセルの事も知らなさすぎるからな。
正直言われたって、なんて返せばいいのか分からない。

「私は双子だからわかるよ。……本当に、お姉ちゃんはシルバ君が大好きなんだって」
「そっか」
「……年末、……知ってるよ。最終関門はお父さんじゃなくてシルバ君になるんだね」

知ってるのか。
いや、知らされてなくてもレイカー家はみんなそうか。
分析したりとかできそうだもんな。

「シルバ君は、私をどうするつもりなの？」
「どうするとは？」
「……お父様は、両方に一人ずつなんて絶対に許さないと思うよ」

それは、父親を分かっている娘だからの答えか。
もちろん、俺もあのしゃべり方から察するにルークエルリダスさんはそんなことしないだろうな。

ていうか、そもそもアレ。

「俺に、どんな答えを期待してるんだ？」
「えっ……」
「困るだろう。たとえば俺が勝つって言っても負けるって言っても」
姉思いのリンセルの事だから、姉が悲しんでも行けないし、だからといって自分が我慢するのも嫌だろうな。
「わ、私は」
「でも、これだけは言っておくけど……。負ける気はないから、俺」
その言葉に、彼女がどんな表情をしたのか。
俺は見ることをせず、数秒たってから顔をそっちに戻した。
「あのね」
「ん？」
「……これで、私の気持ちが変わったらどうするのよぉ……」
……全然考えてなかった。
「うん、いい買い物をしたな」
そのあとは、なんだか気まずくなって。

結局商事を出るまで、一言もっ言葉を交わすことはなかった。

リンセルの顔は赤くなっているし、ちょっとやってしまったかという感じはする。

ラン・ロキアスのあの状態だったら、彼女の印象も悪いものだっただろうし。

まあ、そんなにコロコロと好きな人が変わるような女性ではないと思いたい。

「……帰りましょ。もう夕方だし……」

「やっぱりあそこにいると、時間の感覚がなくなるな」

なくなるどころか、世界樹の下にあるから薄暗くて何が何やらわからない。

いいか、少しくらい。

「夜、みんなで食うのか？」

「うん」

「それとも、この近くで二人で先に食べる？」

「お誘いはほしいけど、みんなが待ってるだろうし。エスペランサさんとお姉ちゃんがさすがに怒るから遠慮しようかな」

断られてよかった。

ここで承諾されたら、これから距離を取ろうって思っていただろうな。

「今度、ね」

「来年以降かな。行くとしても」

この言葉に、彼女はなんと思っただろうか。
俺に知る由はないし、今は知らなくてもいいか。

# １５６　番外編　ベンチ

日が、暮れようとしていた。
現地の人が「世界樹」と呼ぶ巨大で広大な木、そこを中心とした『セリシト魔法王国』の都、ユーニウェルシタース。

そのなかの、宿の一つ。玄関先、ベンチにて。
二人の少女は、腰かけて待ち人を待っている状態だった。

少女の名前は、アンセルとエスペランサ。
身長だけで見れば、３歳以上は明らかに離れている親戚のような風貌だが同い年である。。

「あの、ちょっと思うんですけど」
「はい？」

最初に口を開いたのは。金色の髪を長くたらした背の小さいほう、エスペランサである。
気まずいその状態を打破しようとしたのか、何も考えていなかったのか言葉を発した少女は、もう片方の少女に生返事を返され必死に話題を絞り上げる。

「シルバさんって、かなり天然だと思いませんか？」
「そうです？　……私は、研究熱心なシルバさんしか見ていないので、よくわかりませんけれど」

エスペランサが必死で紡ぎだした話題は、彼女らの彼氏の話題だ。
エスペランサはシルバの魂時代から知っており、この世界に来てからは誰よりも彼の事を知っている。

しかし、アンセルはいまだ表面的にしかシルバの事を知らなかった。

「天然というよりは、深く考えているようで実は考えていない。そんな雰囲気のする方ですよね」

何かが起こったら「とりあえずやってみよう」という気持ちの高いひとだ、とアンセルはシルバを分析していた。

そして、誰かを守るという気持ちも普通の人以上に強い。

アンセルは自分の考えを述べた後で、エスペランサの反論を待った。

「シルバさんはこの世界に来たいきさつが経緯ですし。それは仕方のないことかもしれませんよね」

「……」

アンセルは、シルバの事を知らない。

彼が、この世界では珍しいというよりは「特別な」存在であることは知っている。

転生者。別の世界から何らかの原因で死に至り、この世界に生まれ変わった人たち。

年齢は死んだ時と同じことが多く、ほとんどがこの世界のルールを覆すような「特殊能力」というものを持ち合わせている、どこまで行ってもいろんな意味で異常（イレギュラー）な存在。

そこまでは、知っている。

アンセルの家系は【カエシウス聖王国】と深いつながりがあった

からだ。
それは、半分血統のつながりでもあるし、歴史的なつながりでもある。

そして、アンセルのレイカー家のみが国で「準王族」を名乗る権利を持っていた。
それゆえか、この世界での数多くの知識を持っている。

「転生者なんて、普通の人は知らない単語（ワード）でしょうしね」
「そうですね。……ところでエスペランサさん」
「はい？」

何かを思いついたような顔をしたアンセルに対して、エスペランサは一瞬だけ顔をおびえるようにこわばらせた。

エスペランサは、神である。
正体を隠しているとはいえ、神を恐れさせるアンセルは、ある意味では本当に恐ろしい存在なのかもしれない。

「この前はうまくごまかされましたが、まだ私はエスペランサさんの正体を知らないんですよね」
「……うー、時が来たら話しますってば」

自分が彼女におびえている。そんなことを悟られないようにエスペランサは冗談めかして頬を膨らませてみせる。
アンセルはその様子に目を細めるものの、その表情は全く笑っていなかった。

「レイカー家は、【見抜く目】というのを与えられているんです」
「そうなんですか」

これは知らなかった、と全知であるはずだったエスペランサは驚いた。

何でも知っている。そう、この世界での全知に人は関連されないというところで、神にも弱点がある。

人間は何をするかわからないのだ。

「……ん？　ではなぜ持っているのです？」

「私の先祖が、どうも転生者だった可能性があるようなのですよ」

電撃が身体を駆け巡ったような衝撃を、エスペランサは感じたように思えた。

# １５６　番外編　ベンチ（後書き）

もう一回更新できたらします

# １５７　世界樹の夜１

一日の終わり、それはその日が楽しければ楽しいほど、あっという間にやってくるものだ。

リンセルとのデートっぽいものが終わり、ホテルに帰るとその玄関にはアンセルとエスペランサが二人ともちょこんとベンチの上に座って待っていた。

リンセルは、俺に対して満面の笑顔のような、安堵の顔を見せるアンセルを見て悲しそうな顔をしたし、俺もちょっとだけ罪悪感が湧きあがったがそれを心の奥に押しやって。

そして、あっという間に飯を食って、今俺は眠れず起き上がろうとしている。

「よっと……」

ユーニウェルシタースと呼ばれているこの都、どうもオウラン帝国と密接に歴史上でつながっているからか、旅館も木造で日本風である。

あくまでも日本「風」であり、完全な日本のようなものではないが、俺の理想とするようなものだった。

「畳なんて、本当に久しぶりな気がする」

この何とも言えない、清涼感というか、清廉さというか。

それがこちらに妙な安らぎと、同時に爽やかさを与えてくれており、それもなかなかのものであろう。

部屋はほぼ個室になっている。男と女で別れようということになったのだ。

もちろん、アンセルやエスペランサは俺と寝たいとかなんとか、夜の営みも恋人の役目ですとか言っていたが、しかしそうしたらウスギリがとても気まずい状況になる。

ということで。男女別だ。

男は2人しかいないため、ほとんどしゃべることなくウスギリのほうは眠りについていた。

こういうのに慣れているのだろうが、俺はこういう時こそ探検とかをしたくなってしまう。

探検とはいかないまでも、散歩くらいはしたくなる。

世界樹の枝、その間に取り付けられた、魔力を源とする明かりの下を歩きたい。

「……いくか」

「そうですね、行きましょう」

宿の主人に断りを入れて、玄関を出たところでアンセルと合流した。

特に、そんなことを約束したわけでも何でもないが。

「なんで俺がここに来るって知ってたんだ?」

「ドアを開ける音がしたので、誰かなと思っただけですよ」

ウスギリさんは、お疲れでしたので。

あとは俺しかないと、アンセルは簡単に説明してくれた。

「夜のお世話はしなくてもよろしかったのですか?」

「今まで要求してなかったんだから、わかるだろう？」

確かに、とアンセル。

最近は、そんなことどうでもよくなってきた感じはある。

肉欲などにおぼれる気はない。

誰かを守る。それができてからでいいような気がしてきたのだ。

「アンセルと、婚約が決まったらやろうか」

「……はい」

その時を楽しみにしていますから、とアンセル。

「そうそう、この世界の決闘について、もう少し詳しく教えてくれないか？　特に年末にやるようなああいうの」

「お父様なら、全部許可するとおもいます。魔剣であれ、魔法であれ」

「それは、【魔剣の力】とか言われないのか？」

「たとえばシルバさんのように、魔剣を作り出す【運】とか、買う場合は財力とか、それを使いこなす適応力とか、いろいろありますよ。それらを総合的に、お父様は見ると思います」

ほうほう。つまり。

でも、ラン・ロキアスの事だ。

きっと、俺が考えないようなことをしでかすに違いない。

俺は、魔法ではないが似たような世界からの出身だから、【世界のシステムに順応してその中で、やりくりする】ことを前提としているけれど、相手は何も存在しないらしいな。

不便じゃないのか、とも思ったがよくわからない。

だから、相手は俺たちの想像の、斜め上を行くんじゃないかと思っている。

「常識はずれなこと、してもいいのかな」
「たとえばなんです？」
「そうだな……あ、ひらめいた」

頭の上にハテナを浮かべるアンセル。
しかし俺は彼女に直接的な答えを言うのではなく、彼女を安心させようと頭に手を置いた。

「絶対に、アンセルを手に入れてみせる」

絶対に負けない方法、考え付いた。
あとは、それをどう魔武具に付与させるか、だな。

## １５７　世界樹の夜１（後書き）

朝と夜の2回更新にしようか悩んでます。

ご意見、お待ちしております

# 158　世界樹の夜2

世界樹の下。
あたたかい光が差し込む、そんな別世界のような空間の一つである。

「シルバさんの世界には、こんなものはなかったのです？」

俺がきらきらとした顔でそれらを見つめていたのだろうか、アンセルがにこにこと微笑みながら俺を見つめていた。

「俺のもと居た世界は地域に差はあったけれど、こんなに巨大な木なんてなかったな」

どちらかといえば、科学が別の方向に進化したような世界に俺はいたからな。
属性能力という、この世界でいう魔法とそんなに変わらないような能力を人々が持っていて、それを使ってくらしていた。
力を持った人が上に行き、最終的に一番上に上がれたのは正しい心を持てた人々だった。

それゆえに、むしろ平和だっただろう。
……正直、俺が戦士として死んでしまったのは、今回の平和の中で争いを欲し、我慢できなくなった男たちを止めようとした結果である。

「俺は弱かった、それだけだからな。別に死んだ世界に復讐しようなんて思っていないし、今はこの世界でアンセルやエスペランサがそばにいてくれる。それだけで十分だから」

十分、いや十二分。
争う理由すら見つからない、そんな世界。

この世界に転生させてくれたエスペランサ……希望神ホープにも。
そして、今回俺を支えてくれる女性になるだろう、アンセリツティアにも、俺は感謝している。

「アンセリツティア・フレイヤ・レイカー」
「はい」

俺が彼女の呼び方を変えたことに、何かあったのかと少女は俺を真顔で見つめた。
その顔を覗き込めば、その瞳をじっと見つめれば。
彼女が、こちらのいうことを何でも決意してくれることを、すぐにわかるだろう。

「ちゃんと言ってなかったな。……俺と付き合ってくれないか？」
「……はい。これからもよろしくお願いいたします」

「あの、あの」
「ん？」
「こうやって正式にお付き合いすることにはなりましたけれど、いったいどうしましょう？　何かしなければならないってことはあり

ますか？」

んー。

いったいどういう意味なんだろう。

「ごめん、ちょっと言ってる意味が分からないや」

「……ええと、えと。……忘れてください」

と、アンセルはうつむいて俺のうつむく。

その顔は熟れたトマトのように真っ赤で、何かやらかしたという気持ちが出ている。

「私は、なにか勘違いをしていたでしょうか？」

「勘違いっていうか、たぶん俺とアンセルの間で認識の違いがあるんじゃないかな」

「……シルバさんは、こういう恋人はどんなものだと思ってますか？」

……前の世界では、大切な人を守り切れなかった。

だから、せめてこの世界では守ろうと思う。

命を懸けても。でも。

それを、彼女たちに悟られるのはできるだけやめたい。

「そうだな、別に俺は何もないよ。大切な人が笑顔でいてくれればいいし、それは無理しなくてもいい。……アンセルが俺の事を信用できるっていうのなら俺はすべてをアンセルに話す」

隠し事は、やめた方がいい。

俺も、散々情報を隠しているため何とも言えないが。

アンセルが、立ち止って俺を後ろから抱きしめる。
その感触は、何とも言い難い甘い痺れに代わり、俺は動けなくなる。

「シルバさんを、信用しないわけないじゃないですか」

……そうだったな。
アンセルはそういう人だもんな。

「……アンセルに、すべてを話そうか」

# １５９　番外編　困惑（前書き）

リンセル視点

# 159　番外編　困惑

「……あれ、シルバ君とお姉ちゃんがいない」

妙な蒸し暑さが身体を刺激し、思わず目を開けてしまう。

世界樹の中は妙な暖かさでおおわれているから、夏の時は逆に暑さが増すという。

ちょっと困るけど、冬はありがたいんだよね。

「真夜中デート、かな」

想像すると、私もラン君とそういうことをしたことないなぁと思ってしまい、結構寂しい気持ちになる。

そうやって、「恋人っぽい」ことを。

私たちは時間をとる前に、ラン君はああなっちゃったから。

「私も夜のお散歩に行こうかなぁ」

でも、さすがにこの時間に女一人っていうのも危ないかな。

……テラスにいって、少々涼もう……。

「誰もいない……」

それもそうだ、今は深夜の2時ごろでもちろん普通の人は眠っている。

お姉ちゃんとシルバ君はどこを歩いてるんだろう。
シルバ君、ちゃんとお姉ちゃんを大切にしてくれるのかな。

そういうことでは、お姉ちゃんはシルバ君と一緒にいれて幸せなのかなぁ。

……って、なんで私はシルバ君の事ばっかり考えてるの……。
ラン君が、私と結婚するために年末の試験を受けるって言ってるんだし、やっぱり私の事は好きなんだろうけれども。
でも、そうしたらお姉ちゃんはどうなるの？

お父さんは、絶対に私たち二人をべつべつのところにやらせたりはしない。
少々無理しても、私たちの気持ちを無視しても。

お姉ちゃんは、シルバ君っていう理想の人を見つけてしまったみたいで。
そうしたら、……もしかして年末の、最後って。

「でも、そんな」

可能性としては十分あるのが困る。すくなくともお父さんはシルバ君を気に入ってる。
シルバ君の才能にも、その考えにも納得がいっているからこそ手紙すら彼に頼んだ。

普通の人なら、読んでしまうかもしれないのに。
特にシルバ君の、あの技術ならきっと、開いて認証をまた戻して私たちに渡すってことも可能なんだろう。

でも、彼は。
シルバ君は、それをしなかった。

しなかったと私が分かるのは、彼の目を見たからだ。
人のウソくらいは簡単に見抜ける。それが私たちの遺伝された能力みたいなものだから。

「……って、なんで私はシルバ君の事ばっかり考えているんだろう」

自分に問いかけるように、声に出すと。
それを余計に意識してしまい、同時に自分の顔がかっと赤くなるのを感じてしまった。

私の気持ちは、いったいどうなってるんだろう。
ラン君の事が大好きなのはわかってるし、それは。

でも、なんで？
私は、シルバ君をそこまで意識してしまうんだろう……？

# 160　感情

「そろそろ、戻るか」

アンセルにそういうと、上を向いてぽかんとしていた彼女は俺に気づいたように、顔を戻すと頷いた。

その顔は、心なしかいつもよりも格段に艶やかで。

俺がその瞳に引き込まれそうになる程度には、美しい。

「好きです」

「ん？」

「シルバさん、大好きですよ」

突然、彼女の口から漏れた言葉に俺の思考は一瞬だけだが停止した。

いったい、誰のことをいっているのだろうと考えてしまった後、いう相手が俺しかいないことに気づく。

「……どうしたんだ？　急に」

「あのですね。……何故なんでしょう、世界樹の方をぼぅっと眺めていたら、気持ちが押さえきれなくなってしまって」

そういって、俺の手を実に妙な自然さで握る彼女。

アンセルは簡単にそういうと、俺の方を向いて物悲しそうな顔でわらった。

「……もうすこし、歩いていきませんか？」

「ん？　いいけど」

「わぁい」

大人びた様子の彼女では考えられないような、子供っぽい声が聞こえた。

容姿はここまで艶やかだというのに。

うーん、女というのは謎があるほうがいいというが、彼女はそれを通り越してむしろ神秘的な印象すら周りに与えている。

妖精的な、精霊的な雰囲気を極々自然に漂わせてくる彼女はいったい何者なんだろう。

そんなことを考えていると、アンセルは俺の手をいっそう強く握った。

「私、こういうのに憧れていたんですよね」

「ん？」

「普通に好きな人と歩いて、デートしたり。またべつのことをしたりって、普通では出来ないですもの」

冗談でも嘘でも何でもなく、これが初めてなので。

アンセルはそういって、もう一度視線を上に向けた。

こぼれ落ちそうになった感情という名前の、涙を抑えようとして上を向いたのだろう。

しかし、それは失敗していた。

目尻から少しずつこぼれたエキタイは、彼女の耳を伝って彼女の服に垂れる。

「あ……」

間違った、と少しバツの悪そうな顔をしたアンセルは、抑えることをあきらめて前を向き、そしてそのエキタイを拭うことなく流し続ける。

「アンセル」

その状態から、俺が彼女を抱きしめるまで。
時間は分単位も必要なかった。

「……違うんです。幸せすぎるんです」

俺が勘違いしていると思っているのか、彼女は弁解するように泣きじゃくりながらもそう言い終える。
しかし、その涙を彼女が拭うことはなかった。

だから、俺が拭った。
親指の先で、彼女の繊細な白い肌にふれるとそこから顔色が、伝染するように赤くなっていく。

「調子に乗ってるかもしれないけれどもな」
「……」
「今の俺には、アンセルを幸せに出来る力を持っていると思うよ」

魔剣の力に頼らなくても。
【引斥制御（グラビシオンコントロール）】を使わなくても。

例え、俺が龍眼族（レザール）ではなくなっても。

誰かを守りたいという明確な目標ができた、それだけ。
ここまで、誰かを幸せにしたいという気持ちが強まったのは初め

てかもしれないが、俺は今、俺の胸の中で泣いていた彼女をどうしようもなく幸せにしたくなった。

「だから、アンセルだけじゃなくて姉妹二人一緒に幸せにする」

「……はい」

「絶対にラン・ロキアスに勝ってやるから。年末までゆっくりゆったり待っていろ」

少しカッコつけすぎたかもしれない。

でも、少なくともアンセルは幸せそうに顔を緩ませていたから、問題はないはずなのだ。

「私、重いかもですよ？」

「それは、世界崩壊とどっちが重い？」

前世は、そういうことが絡んでいたからな。

正直この世界で驚くべきことなんて少ないと思っていた。

だから、最初は大きく取り乱すことはあまりなかったし、龍眼族（レザール）や【魔武具創造】、【引斥制御（グラビシオンコントロール）】という力も相まって自信がついていた。

でも、それは見かけだけで。

本当の強さとは、こういうことなんだと思ってしまった。

気づいたからこそ、今こんな……。

前の世界にいたら、キザ過ぎて砂をはきそうなせりふすら言えるのだと思う。

「……双子姉妹だけじゃないな」

「……エスペランサさんも、ですよね」
「もちろんだ」

全員、平等に。
出来ないことなんてないはず、なんだから。

# 161　海の朝

朝、目覚めるとそこにはクレインクインの姿があった。

いきなりの事に、驚いているのは部屋の隅で「ヒェッ」という声を発したウスギリ・ゲンでも誰でもなく、のしかかられている俺である。

「クイン？」

「我慢ができなくて」

「……仕事は？」

「夏の休みが終われば、私も学園の生徒だからな。全部終わらせてきた」

と、完全に俺がクレインクインに押し倒されている状態で話している。

……これ、アンセルやエスペランサに見られたら修羅場を回避できる気がしないんだが。

「とりあえず、俺を起こしてくれないか」

「……うむ」

と、俺の上から退くクレインクイン。

彼女から解放されてから、俺は「もう少しそのままでもよかったかな」と要らぬ後悔をしてしまった。

エスペランサも、アンセルも。

どちらかといえば受け身な態度をとる女性だからか、このようにぐいぐいくる人が俺の周りにはいない。

別の意味でぐいぐいと、俺を牽制してくるクリーゼ・シックザールという存在はいるが。
その少女も、この夏になってからかなり収まった気はする。

ラン・ロキアスへの愛情が薄れてきている、ということだろうか。
俺からすると、喜ぶべきことなんだろうが正直クリーゼには興味がない。
リンセルをこちら側に持ってこれれば、それでいいのだ。

そこから何故か、大きすぎる副産物といった存在が、目の前にいるクレインクインなわけなんだが。

「学園の下見とかは？」
「んー、パンフレットでは見たんだが、実際に行くのは明日が初めてだ」

明日？
ええと、俺たちは今日の夜に帰って。

明日の朝、クレアシモニー学園に到着する予定である。

「ああ、一緒に帰るってこと？」
「ご名答。その通りだ」

そう答えた少女の顔は、実に嬉しそうなことこの上ない。
ただ、その笑顔が良すぎるからか、心なしか輝いているように見えるというのはやりすぎだろうか。
たとえ……比喩としては十分というか、ちょうどいいというか。

適任であるという気はするのだが、今いち「これだ！」というものは現れないものである。

「ということは、今日はあれか」

「うむ！　一緒に遊ぶんだー」

……本当に、嬉しそうにそういうな。

立場上、こんなイベントが極端に少ないからかもしれないが。

「そういえば、私の知らないうちに一人彼女を増やしたと聞いた」

「……アンセルな」

「……把握」

一瞬だけ、クレインクインの表情が固まった気がするのだがどうなんだろう？

俺の気のせいかな、しかし。

……この少女、実に男の煩悩をくすぐるというか、刺激する体つきをしている。

というか、動作の一つ一つが他の人よりも数倍優雅で、同時に艶やかさも湛えているという……。

彼女の、どこからそんなものが出てくるのか疑問だが。

彼女がまとっているオーラから、そんなものは感じ取れる気がした。

「ところで、夜伽（よとぎ）はまだなのか？」

「よくそんな単語を知ってるな！」

さすがに、突っ込まずにはいられないワードを知っている。

夜伽なんていう単語、生前の世界でも聞いたことは数回しかないだ

ろう。

【夜の営み】とか【（自主規制）】とかはわかるのだ。
しかし、なぜそんな古臭く同時にわかりにくい言葉を使うのであろうか。

しかも、……いかにも西洋風なクレインクインに言われると、ギャップがひどい。
女性はギャップがあったほうが可愛いとよく言われるが、彼女の場合どう見ても日本人ではなく西洋人である。

銀髪の髪の毛に、きりっと引き締まった顔。
同時に恐ろしいほど、青く透き通った眼。

「……むむ？　なぜ私をじっと見つめているのだ？」
「美しいなって思っただけだよ、性格はあっけらかんとしているがな」

彼女をおちょくる目的で発したはずの言葉は、どうも彼女に俺が考えた以上の効果を及ぼしたらしい。
クレインクインの顔は朱（しゅ）に染まり、そこから徐々に深みを増していって最終的には紅（くれない）にへと変貌した。

「美しいだなんて、ピュアな少女に言うべき言葉じゃないぞ」
「……ええ？」

訳も分からず困惑する。
実際はわかっていたが、いやでもここはそういう「フリ」をした方が都合がいいだろう。

というか、思った以上に純粋なんだよなぁ。アンセルやリンセルしかり、クレインクインしかり。
お嬢様ってみんなこんな感じなのだろうか。

それとも、カエシウス聖王国の王族と準王族だけが特別純粋無垢なだけなんだろうか。
猫を被っているだけ、というのも十分あり得る話だから何とも言えない。

疑ってかかるべきか、否か。

「髪の毛とかサラサラだし、肌はきめ細かい白だし。……欠点なんて一つも見つからないな」

この際、もう部屋の隅で失神してしまっているウスギリはもういない存在として扱おう。
腕獣族（ケレイジ）というのは体が丈夫。だから失神してそのまま放置してもきっと大丈夫だ。

「ほら、私には重大な欠点が」

言いにくそうに、口ごもるクレインクイン。
彼女は、俺の右耳に唇を近づけると、耳に向かって息を吹き込むように次の言葉を紡ぎだした。

「私は、謎法族（カラミタ）だからな」

その声の、色っぽさといったら、天井知らずといっても過言ではないだろう。
とにかく。……とにかく。

俺は、その声にノックアウトした。
その後、何が起こったかは記憶にない。

## 162　オルガレオ・ウリム

「……今日は、海にはいかないのか？」
「今日はここ、『ユーニウェルシタース』で観光の予定だったけれど」
「それでもいいか。……私もいいかな？」

クレインクイン・ガラドボルグ・グライノート。
それが今、俺の目の前にいる少女の名前である。
年齢は俺と同じで、階級はたとえると月とすっぽん。

彼女は、『カエシウス聖王国』の聖王である。

「問題はないと思うけど」
「そうか、よかった。……あー、偽名のほうで読んでくれると助かる」
「俺はクインで読んでいるんだから、偽名も本名もないだろ」
「そういえば、そうだったな」

宿のロビーで、そんなことをしゃべっていると準備を終えたらしいアンセルたちが到着したようだ。
アンセル、リンセルとエスペランサという三人はクインを見ても驚かなかったが・
ウスギリとクリーゼ、リンナアイデルはその限りではなく、どう話しかけていいのかわからないと言いたげな顔で二人見つめあっていた。

「……護衛は？」

ふと、そう思って俺はクインに質問をする。
前回、俺とエスペランサが聖王国に行ったときは、異常な警戒をこちらに向けていた護衛の男がいたはずだ。
名前ははっきりと覚えておらず、グレなんとかだとは思うんだが、あの人はどうしたんだろう。

「グレイクなら、異動にしたぞ。その代りに一人……あーたいた」

クインは宿の外を覗き込むようにして身を乗り出すと、手を挙げて誰かを呼んでくる。

「失礼します」

と、静かな声が聞こえてはいってきたのは、リンセルの背ほどしかない少女だった。

寧ろ、見た目だけの年齢的には十代前半。
手の甲にある種族紋章から察するに、種族はアンセルやリンセルと同じ【異能族（サイコル）】だろう。

「クインセシリア様の護衛として配属されました、オルガレオ・ウリムと申します」

レオとおよびください。そう締めくくって礼をした少女に対し、俺たちはどうすればいいのか分からずとりあえず会釈を返す。
これが、あのグレなんとかさんだったら無視すればいいんだが、こういうときは反応に困る。

彼女の実年齢亜いくつなのか俺にはわからないが、なんていうか。
うーん。言葉にできない何かが、心の中でジタバタしているのはわ

かる。

「レオは信用できる護衛だぞ。しかも純粋な混種族なんだ」

なぜか誇らしげな顔をしてみせるクイン。

そもそも、転生者である俺には混種族という言葉の本質が分かっていない。

なんとなく、複数の種族が交わって出来たものだということは理解できるが、そうすると彼女が「純粋な」といった意味が理解できなくなるのだ。

俺の表情から、何を考えているのか分かったらしいエスペランサは、その権能を使い俺の脳内に直接知識を流し込んでくれていた、

「……」

その視線はやめてほしい。

気持ちだけではなく、中身全部を見透かされたような気持ちになってしまうから。

どうも、混種族には純粋なものと、一方に偏ったものがあるらしい。

両親が異種族である場合、

「どちらかへ完全に偏った個体」

「片方の種族の影響が強いが、混種族個体として成り立っている個体」

「丁度よく混ぜ合わされ、両方の種族特性を持った個体」

の三つが生まれるという。

これだけを聞いていると、ニホンで米の配合のようにも聞こえてならない。

とにかく、その選択肢のうち、最も珍しいのが一番最後で、国に３ケタいるかいないか、ということだそうだ。

「ええと」

「ん？　どうした？」

ポラリスを囲んでいる３つの国の人口は、どれも２億を超えている。その中の、多くても１００人程度。しかもそのどれもが優秀。

「なるほどね。年齢は？」

「１４です」

いきなり、女性に年齢を訊くというのもいかがなものだろうか。そう考えはしたが、即答されたため大丈夫なんだろう。この世界の礼儀はよくわからない。みんな、驚くほどフランクなのだ。

……それは、俺が転生者だから特別扱いされている、というのもあるかもしれないが。

「クイン」

「……ん？」

「カエシウスの、成人は何歳から？」

「２１だなー。私のところだけじゃなく、ここも、オウラン帝国もだが」

……本当に十代前半だった。

大丈夫なんだろうか、正直クインの心配よりもこっちの心配をしてしまう。

「ええー？」

「シルバが、私の護衛になることを断ったからだぞ。……まあ、レオはこの歳でも実力は確かなんだ」

実力は確か、か。

でも、どうも俺の代わりみたいな言い方をする。

俺が自意識過剰、かも。自信がなくなってきた。

「できれば、【龍眼族（レザール）】のシルバさんと、お手合わせを願いたいのですが」

「準備が間に合ってないんだ、今度でいいだろうか」

……せっかく昨日思いついたアイデアを、形にしてからそのことは考えよう。

今日、どこかで時間をとれるならその限りではないが。

## 163　グループ分け

とりあえず、俺たち7人にクレインクインとオルガレオ・ウリムを加えた9人で世界樹の町『ユーニウェルシタース』を散策することにした。
ただ、9人で歩くというのも道の邪魔になるということで、二つに分けることにする。

「……どう分けようか」
「ここに、ラン君がいたらなぁ」

リンセルはそんなことを言っているが、今いない人のことを言っても仕方ない。
そもそも、恐らくラン・ロキアスがここにきているんだったら、俺はここにいない可能性だってある。

エスペランサとの二人旅という予定もあるし、それについても考えていかなければ。
一泊二日の旅行で許してくれるだろうか、夏休みはあと2週間ほどしかないけれども。

「とりあえず……どうしようかな」

こういうとき、困るのがクレインクインとレオのペアと、リンセルとクリーゼのペアだろう。
エスペランサとアンセルは、俺と来ることですでに頭の中では決定しているらしく、特に心配してなさそうな顔をしていた。

「リンセルは、誰と行きたい？」

「……うーん。私は誰とでもいいかな」

リンセルはおおらかに笑っているし、それでいいとして、リンナアイデルさんも同じ意見だという。

しかし、他に何があるんだろう？　クリーゼは俺と組みたくなさそうだ。

「ひとつ、いいだろうか」

「どうしたクイン」

ここで挙手したのは、堂々としていながらもどこか気恥ずかしさを漂わせているクインである。

彼女は、「申し訳ないのだが」と言葉をつづけ、顔色一つ変えずに俺を指差す。

「私は、シルバに会うためにここに来た。だからシルバと一緒がいい！」

……ええと。

そうなれば絶対にレオが付いてくるわけで。

……いいか、それで。

「ウスギリ、これで構わないか？」

「俺、一般人なんだがなぁ」

ウスギリは、自分がこの二人のお嬢様の相手をしなければならないのかと、少々いやそうなご様子。

残念だけれども、そういうことだ。

「5人か」

「5人ですね」

あまり変わっていない気がするが、どうしよう？

まあ、いいか。

「なんか、アリアとは打って変わってなんというか」

「昨日もおっしゃられていましたけれど、幻想的なのでしたっけ？」

巨大な世界樹の下に位置する町、『ユーニウェルシタース』。

首都というか、王都ではあるはずなんだが、都市国家ポラリスのように高層ビルの立ち並ぶ場所でもなければ。　カエシウス聖王国のような雪景色の中、城が王都のしるしになっているということでもない。

初めて来たときは、本当にこれが王都なの疑問を持ってしまう程度には、厳かな感覚はしなかった。

「これは、リンナアイデルさんと一緒に来るべきだったか……」

彼女がこちら側だったら、いろいろ連れて行ってくれていただろう。

そう考えて、俺は少し後悔しかける。

でも、よく考えればエスペランサとは何もわからない状態からいろいろと旅をしていたわけで。

ていうか、俺のすぐ隣でクインとレオが、町の案内がしたいのかう

ずうずしていた。

「……案内、どうぞ？」

「うむ！」

何回か、ここには来たことがあると豪語するクインのことだから、きっと悪いようにはしないだろう。

俺がそう判断したところで、他のメンバーも半分あきらめつつ彼女に従うことにした。

というか、案内なら全知のエスペランサがやればいいと思うんだが。

エスペランサは、……純粋に楽しみたいらしく、何も言わないな。

「正直、面倒です」

「見事に本音をぶっちゃけたな。……まあ、エスペランサがいうのならいいけど」

クインが周辺の説明をしている中、それを聞き流しながらエスペランサと会話をする。

「それよりも、旅行の件はどういたしましょう」

「それは、今じゃなくてあとでするべきことだな」

さすがに、今そんな話をしている場合ではない。

クインが怒り出す前に、意識をそちらに戻すべきだろう。

# 164　遊園地

目の前に、昨日リンセルと一緒に行った商事がある。

「ここは……シルバが、必要なんじゃないか？」

「今日はいいよ、昨日行ったし」

アンセルとエスペランサには、リンセルとここにきていることを言っているため問題は特にないのだが、クレインクインはその『事項』に対し興味を持ったようだった。

「ほぉ」

「一通り買ったし、大丈夫だぞ」

「ふーん」

……どこか、彼女の顔が不機嫌に見えるのは思い過ごしだろうか？いや、ここは事実のようだ。完全に機嫌を損ねている可能性がある。

「クイン、こんど何か作ってやるから、許してくれ」

「うむ、許そう」

シルバは私のおもったことをちゃんを分かってくれる。

クインは聞き取れないと思ったのか、そういったが残念ながら唇の動きでそのくらいは判断出来た。

彼女の機嫌が、見る見るうちによくなっていくのはそれだけでわかった気がする。

が、本当はどうなんだろう？

彼女の護衛であるレオのほうに顔を向けると、レオは顔を赤らめてクインの陰に隠れてしまった。
……ええ？　なんでこんなことになってるんだ？
人見知りなのだろうか、でもそれならばクインの護衛なんて務まらないような気もするけれども。
まあ、王族だからなぁクインは。

感情を顔に出すというのは、制限できるのだから問題はないだろう。
あとは……アンセルみたいな目を持っていればいいんだが、俺の持っている『眼』は相手を畏怖させる眼である。

ていうか、あの時から一回も使っていない。
年末のあの時に、使ってランを再起不能にできればいいのだが。

リンセルもアンセルも、俺が幸せにする。
そう言ってしまうと、どこか気障な気もするけれどそれをやってのけられるのが転生者なのだろう。

俺は、ルークエルリダスさんの信頼を得ているんだしな。

「次はどこに行きたい？」
「クインは？」
「……私は、遊園地とやらに行って遊びたいな」

この世界に遊園地なんてものがあることすら驚きだが、レオの指差した先には確かに観覧車もある巨大な遊園地があった。
モチーフは世界樹なのだろうか、いろんなアトラクションがある

がどれも緑を主体とした色配置がなされている。

あまり考えたくはないけれども、……この年になって、いく、のか。

と、ここまで考えた後。クインの眼を見つめてその奥にある無駄な煌めきに気づき、俺はとりあえず承諾することにした。

恐らく、彼女は幼少期一回も行ったことがないのだろう。

転生者である俺に対して「敬語はいらない」といっているのも、少しでも普通の女の子扱いされたいからではないだろうか？

「俺にはよくわからないけれども、クインがいきたいというのなら行くか」

ここは、文句も何も言わずに彼女に従った方がよさそうだ。

観光はやめて、クインが楽しむようにすればいいか。

「いいのか？　でも、ここに来たのは」

「俺はいいよ、どちらでも」

エスペランサたちをみやっても、特に反論はないらしい。

「遊園地。……私もそういえば初めてです」

「私もです」

……あー。

これは、思いっきり楽しんだ方がよさそうだな。

俺は飽きるほど、前の世界のものだったら乗ったことがあるけれども。

この世界のアトラクションは、初めてだ。

動いている仕組みこそ違えど、特に変わったものは多く見かけない。

他の属性の魔力を、疑似体験するようなものは確かにあったけれども、それくらいだろう。

俺は正直特に何も感じず、少女たちがはしゃぐのを見ていただけだったのだが。

それにしても、護衛のレオ以外の女子三人、はしゃぎすぎではなかろうか。

「レオは、乗らなくてもよかったのか？」

「……エクアトゥール様こそ」

「シルバでいい」

彼女が俺に「様」をつけているのは、きっと彼女がクインから俺の個人情報を手に入れているからだろう。

レオが、どのくらい信頼を得ているのか分からないが、私服で来ているということはかなり信頼されているはずだ。

ここ、甲冑をつけて歩いている人も決して少なくないというのに。

「ところで、何と何の混種族なんだ？」

「そうですね、【翼羽族（フライド）】と、ご存じ【異能族（サイコル）】です」

「あれ？」

確か、エスペランサに教わった【翼羽族（フライド）】は、翼を持っていたはずなのだ。

持っているからこそ、彼女たちが【翼羽族（フライド）】と呼ばれる意味がある。

「ああ、私の場合普段は透明にしたうえで小さくしているのですよ」

と、レオはまず俺に背を向けて背中の真ん中あたりを指差す。

そこから、手のひらサイズの小さな翼が姿を現したのを見て、俺はふむと思った。

「御伽噺（おとぎばなし）で想像する、妖精みたいだな」

「美しいです？」

「ああ、綺麗だ」

綺麗なのは確かに認める。

先ほどまで無色だった1対の翼は、今小さいながらも半透明な虹色になっているのだ。

まだ小さいままだけど、俺の感じたのは「可愛い」でも「美しい」でもなく「綺麗」だった。

ちょっと語彙貧弱（ボキャブラリー）に乏しい評価の仕方かもしれないが、まあ仕方ないだろう。

「そして、こうですね」

レオは、そういって元来の大きさだろう、彼女の小さな体をそのまま包めそうな大きさまで拡大すると、俺のほうに振り返り安堵したようにため息を漏らす。

「もし、後ろを向いた瞬間に襲われたらどうしようかと思ってました」
「ん、そんなことしないぞ」
「でも、先ほどから私のほうをちらちら見ていますよね？」

うん。

確かに、見ていたけれども。

「ちょっと、前世での恋人に似ていたんだよ」
「恋人？」
「恋人っていうか、元婚約者だな」

まあ、今も彼女は前の世界で生きていると、いいんだが。

# 165　3人目の転生者

「元婚約者、ということは一回解消されたのですね」
「ああ……恥ずかしい話ながら。二兎を追う者は一兎をも得ずってやつだ」
「……？」

……ああ、異世界ではさすがにことわざまでは無理か。
ということで、俺はレオに「二つのものを得ようとしてどちらも失う」ということを説明する。

確か、こんな意味でよかったはず。ちゃんと覚えていないから少々不安だが。

「ああ、そういうことだったのですね。それは異世界での諺（ことわざ）、なのです？」
「まあ、そういうことだな」
「……」

俺がうなずくと、レオは何か思うことがあったらしく黙り込んでしまった。
いったいどうしたんだろう？
レオを心配して俺が手を伸ばすと、しかしレオはすぐに首を振って自分の無事を伝える。

「いえ、ちょっとですね」
「ん？」
「ええと、……同じ境遇同士、頑張りましょう？」

その一つの言葉で、俺はすぐにその意味を察した。
同じ境遇。つまり、この少女は俺やラン・ロキアス、リンセルやアンセルの先祖様と同じように転生者ということになるのだ。

「転生者なのか？」
「はい。……ええと、精神はそのままで体は乳児の時から遡りです」
「俺はどっちもそのままだ」

どうも、このレオという少女。
俺と違って、完全に転生してやってきたらしい。

そのため、俺のような新鮮さっていうかなんて言うか。
この世界になじんでいるっていうか、そんな感じになっているという。

「これ、言いますけどクレインクイン様にも伝えていませんからね」
「なら、なぜ俺に？」
「先ほども言ったでしょう。……同じ境遇なのですから」

彼女の言う同じ境遇というのは、転生してきてクインに認められるまでワンセットということだろうか。
どうも、彼女の表情を見ている限りそのようだ。

「そういえば、シルバさんは護衛を蹴ったそうですね」
「そうだな」

蹴った、というのは何も物理的な意味ではなく。
就職の事だろうな。残念ながらそれは蹴った。

「なぜなんです？」

「さすがに聞いているだろう」
「……魔剣を、自由に創造できるんでしたっけ」

いや、ちょっと違う。
自由に、というのに語弊がある。

別にいつでもどこでも好きな時に生み出せるのではなく、俺の能力は「材料がそろっていれば」の話。
しかも、簡易だろうがなんだろうが作業台というものが必須になるため、正直急増で創るのなら【異能族（サイコル）】がよくやる、魔力を凝縮させて武器を生成するやり方のほうがいい。

あと、魔剣だけではなく【魔武具（まぶぐ）】全般すべてということも、細かく違う点だろう。

と頭の中では思ったのだが、さすがに事細かく説明するととんでもないことになりそうなため、取りあえずうなずくことにした。

「ということは、魔剣を作れば生計は立てられるのですね」
「十分すぎるほどには」

正直、俺のつくった魔剣って無償で渡していない限りすべて億越えしている。
金が云々かんぬん……というわけにはいかないが。

「あと、自由がない」
「自由ですか。……それは確かに」

やっぱり、それには同意してくれるのか。

「そういえば、レオの能力はなんなんだ？」
「秘密です。……まだ、一回も使っていませんし」

でも、何を与えられたかは知っていますとレオは微笑んだ。
ということは、この人も神々の審査を通過したということか。

「しかし、奇遇ですね」
「まあ、そうだな」

奇遇どころの話ではない。
正直、どうなっているのか俺も戸惑っている。

「私が勧誘しても、来てくれないのですか？」
「いや、今のレオに発言力はないだろう」

彼女が、転生者ではなくこの世界のひとりとして認識されているだけでは、彼女もあの……グレイクっていう護衛とかわらない。

だから、俺は今彼女を「純混種族の護衛」としか見ていない。
転生者は、彼女にとって未だアクセサリーでしかないのだ。

「逆に問おう」
「はい？」
「レオが【引金（トリガー）】になりえたとき、俺たちと来ないか？」
「それは、口説いているのです？」

口説いている、か。
確かに勧誘ではあるが、口説いているわけではないと思いたい。

引き金。つまり、彼女が何かの拍子に【転生者】と判明したとき、

彼女はこれからどうやって生きていくのかということだ。

「そうですね、考えてみます」

「おう」

「ただ、あまり期待はなさらぬよう。……私が何であれ、今はクレインクイン様の護衛ですので」

ああ、この娘はガードがとても堅そうだ。

……突破できるのだろうか。……ちょっとだけ、心配にはなってきた。

「あ、こんなところに二人ともいたんですねっ」

後ろのほうで声がし、振り向くとそこにはエスペランサ他2名の姿があった。

その一瞬で、レオの翼は最初からそこに何もなかったかのような自然とした現象として「消え失せ」る。

花が咲いて散る、そんな感覚を肌に感じながら俺は3人に向かって手を上げる。

「……さて、次はどこに行く?」

# １６６　能力

「何やら、レオと仲良く話をしていたみたいだが、何を話していたんだ？」

遊園地を後にして、そうクインに訊かれた。

俺は遊園地になんの面白みも感じられなくてほとんど乗らなかったし、レオは護衛で仕事中ということもあって他に話す人もおらず、そのあとも前の世界についてとか色々と話し込んだ。

そんなことをしながらも、レオは周りに気を張り巡らせていたらしい。

完全な感知能力とか、持っていてもおかしくないはずなんだが。

「もしかして。妬いてる？」

「嫉妬しているといったら？　その分相手をしてくれるのか？」

既成事実を作っても構わんのだぞと、クインは脅しているのか脅していないのか微妙な言い方をした。

既成事実ということは、……ああ、夜の相手っていう意味か。

純粋なのに、そういう言葉はちゃんと知っている。

つまり、偽装しているのかよくわからない。

「クイン、レオを引き抜くっていったらどうする？」

「そうだな。……魔剣１５本」

「おう……」

最低価格１５億。そう言いたいのだろう。
まだ、聖国王とはいえレオはやとわれの身だから、ということだろうか。

思わぬ商談を持ちかけられて、一瞬面喰う俺。
その状態を、怪訝な顔で見つめるエスペランサとアンセル。

いや、そういう意味じゃないから。

「ほら、シルバの彼女たちもご執心のようだぞ」
「いや、そういう意味じゃないから安心してくれ」

今のところは、そういう意味じゃない。
ラン・ロキアスは気に食わないが、レオのほうは相性がよさそうな気がしただけなのだ。

ていうか、どうも話を聞いている限り俺の世界と同じところから転生してきたらしい。
【属性能力】という、この世界でいう魔法のようなものも知っていたし、正直俺よりも詳しかった。

「レオはどうだ。シルバに口説かれたのか？」
「口説かれてないといえば、嘘になります」

ぺろっと、唇を俺だけに見えるように出してそう答えるレオ。
誤解されるかもしれないが、しかし確かにそういう意味でもあるのだから困りものである。

ちなみに、レオには俺の前の名前を教えていない。
もし知人だったとき、恐らく俺はショックを受けるだろうし相手

もショックを受けるかもしれない。
そういう事も考えた上での、ものだった。

「シルバさん、手が早いです」
「違うって」

違うって言ってるのに、なんでこうなってるんだろう？
冗談ですよとエスペランサは笑っていたが、アンセルは本気でそうとらえてしまった感じはありそうだ。

本当に、そんなことはないのにな。

「まあ、いつ何が起こるかはわからないからな。その時は代わりの護衛を紹介してくれても構わない」
「さすがに、この世界に来て年月がかかっているわけでもないから人脈なんて限られてるけどな」
「人脈が限られているのに、カエシウスの王族とつながってるとか異例中の異例だぞ」

そうクインはいい、笑うと世界樹を見上げる。

「シルバも、数年したら世界樹のようになっていくんだろうか」
「どういうことだ？」
「いや、何でもない」

ちょっと、寂しく思えてしまっただけだと。
クインは俺には理解できない言葉を残すと、そのまま何も言わなくなる。

衝動的に何かの感情が噴き出しそうになったんだろうか。

よくある話だから、何も言えないけれども。

「恋って、難しいな」

「……クインが恋をしてるのか？」

「鈍感」

……いや、この言葉で察したけれども。

俺にその矛先が向かっているとか、普通の人は思わないものなんだぞ。

「鈍感って」

「いいんだ。……私の恋は、たいていかなわないものだと思っているから」

身分が身分だしな、とクインは悲しそうに笑う。

が、しかし彼女にそこは譲れないため俺は首を振るだけにとどめておいた。

「いろいろと、難しいものなんだな」

「そうだろうなぁ。……俺は、よくわからないけれども」

いや、よく知っている。

知っているけれども、前世での俺の周りの王族が特別すぎたのだ。

自由奔放だったから。俺も彼に少しは影響された節があるけれども。

あの人、結局どうなったんだろう？　俺が最後に彼の身体を見たとき、体の数か所がすでに神格化されていた気がする。

能力の使い過ぎによって、逆流し身体が侵されていたのだ。

結構珍しいことらしいけど、それもあの人らしい。

「ん、シルバ何を考えている」

「いや、なんでも」

「嘘だ」

うーん。

やっぱり、そういうことは簡単に見破られるか。

困ったな。

## １６７　騎士序列（前書き）

大晦日、書き終わるたびに直で更新します。

他の作品もあるのでそこまで間隔がないわけではありませんが、おそらく3話以上確定なのでよろしくお願いします！

詳しいことは今日の活動報告に記載しておきますー

# １６７　騎士序列

「明日の朝に学園へ帰るんだよな？」
「そうですよ」

夜、飯を食った後にアンセルに確認する。
明日、一緒に彼女たちもついてくるようで。

レオは、１４歳ながら飛び級をして護衛につくらしい。

「学園に戻ったら、シルバも守ってくれよ？」
「……頼まれたら、しよう。ただしずっとはダメだ」

むぅ、と頬を膨らませるクレインクイン。
その姿は、年相応ではない幼さが垣間見えてとてもおもしろい。

「新学期が始まったら、できるだけ一緒に居てやるから」
「本当？」

それにしても、何故転生者というのは特別扱いされるんだろう。
こう、仮にでも聖王国の聖王に対して敬語を使わなくてもよかったし。

ちょっと調子が狂う所もあるが、たとえば彼女に敬語を使ってみるとするとだな。

「クレインクイン様」
「……言ったはずだぞ、シルバは私に敬語を使わなくていいと」
「しかし」

「次からこうしよう。使うな」

はい。終了。

彼女に敬語を使うと、クインはとたんに顔が険しくなって不機嫌になるのだ。

そして、先ほどまで甘えたような声は、完全に厳格なものへと変貌を遂げつつある。

「……すまない」

「謝らなくてもいい」

こうなれば、無理して彼女の期限を損ねるようなことはしたくない。

だから、使わないことにした。

「そういえばシルバ」

「ん？」

「シルバって、強いのか？」

この世界での、強いという基準がわからないため俺は首を傾げた。

確かに、俺は膂力（りょりょく）最強の【龍眼族（レザール）】であり。

【龍眼族（レザール）】の種族特性である【龍眼（レザリガルズ・アイ）】と、【龍化（ドラコフォーゼ）】をどちらとも有している。

そして、武器神ヘーハイスからもらった【魔武具創造】と、希望神ホープからもらった【引斥制御（グラビシオンコントロール）】も使えている。

しかし、それは真に俺が強いという証明になるのだろうか。

同じ待遇の人がいたとして、俺はその人に勝てるだろうか？

「……難しいことを考えなくてもいいんだ。……ただ、もう一人の転生者をたたき落としたそうじゃないか」

「でもあれは」

俺の力じゃない。

全部、生まれ変わったときに俺の理想の能力を与えてくれた神々のおかげであって。

そして、俺にずっと一緒にいてくれるエスペランサのおかげである。

「この世界の、強さというのはな？　身体能力と、魔法が基本でそれにプラス武具適応力というのが存在するんだ」

クインが俺に説明してくれた。

どうも、魔剣を使えない人も存在するという。

ふつうの武器が使えて、魔剣などが扱えない人は、「適応力が低い」とされるらしい。

冒険者や、騎士になるには必要不可欠なモノなのだとか。

「でも、シルバはその点問題ないよな」

「……たぶん」

「なら、【龍眼族（レザール）】ということもあって強いと自信を持ってもいいんじゃないかな。調子に乗りすぎるのはよくないが、闘技場にいって力試しをするのもどうだ？」

彼女は、俺がそれ相応の自信をもてるように、的確な意見を言っ

てくれた。

「そうですね……シルバ様、私と勝負してみませんか？」

「レオと？」

「はい。私に勝てれば、かなり強いと思いますよ？」

護衛って、王国の騎士を序列1位から並べて、聖王がいい印象を持った人から選んでいくって言うのを効いたことがあるようなないような。

なるほど、なぁ。

「ちなみに、騎士序列を訊いても？」

「4位です」

騎士って、何人くらいいるんだろう？

「騎士は、聖王国軍１５万人のうち、優秀な５００人だ。その中で未成年は数人居るが、最年少で5位いないに入ったのがレオ」

クインの話を聞いている限り、さすがというか南東か。

そうそう、天才とかって誇称するんだよ。

俺は違う違う。人に与えられた能力だ。

「学園に戻ったら、一回よろしく」

「はいっ」

戦闘の約束を取り付けると、レオはいかにも嬉しそうな顔でうなずく。

この子、まさか戦闘狂か。

なら、騎士ではなく冒険者になればいいのに。

「冒険者もいいなと思ったのですが、生活が安定しないと思ったので。とりあえず成人までは護衛としてつくことで契約を交わしております」

「え」

「もちろん、ほかの騎士たちはここの位置がいちばんだと考えておりますし、男性が多いですからね」

なんか、騎士は騎士で大変そうだ。

彼女も転生者なら、問題はなさそうだけれども。

レオの能力は、まだ視ていないからな。

さぞ凄いものなんだろう。

## 168　添い寝

「きょう、一緒に寝ないか？」

夜の飯も終わり、俺はそうエスペランサに告げると彼女は顔を赤らめることなく首を傾げる。

「それは、添い寝という意味でよろしいのです？」

ああ、これは理解していない顔だ。

でも、添い寝でも全然構わないため俺はうなずく。

「ここで添い寝するよりも、二人で旅行するときにした方がいいのではないのです？」

「いやだって？」

「いえいえ。気まずくならないと言うのなら、私は構いませんけれど？」

そんな話を経て、夜になると、本当にエスペランサはこちらの布団に進入してきたではないか。

上目遣いの使い方は心得ているらしく、ていうか完全に俺は彼女の虜になっていた。

ここはみんなとは違う部屋を取って、気まずいことなんて何一つないのだが……。

でも、結局はこうなるんだろうなと言うことを身をもって知らしめてくれた。

「どうですか、寝心地は」

彼女の声が、俺の鼓膜をなでるようにしてくすぐったい。
エスペランサの方をむくと、彼女はなんだか照れくさそうに顔を赤らめていた。

それは、完全に人工的な明かりをけして、月明かりのわずかなそれでも彼女の顔色が分かる。
ただ、その姿を見ていとおしく感じてしまうのは、俺だけではないはずだ。

同じ状況にたたされると、どうしても今まで意識していなかったのにこうなってしまう。
理性を保ち続けるのが困難になってしまうのだ。

「俺……」
「まあまあ、さすがに壁一つでは聞こえてしまうので、今はこれで我慢していただけます？」

と、エスペランサは恋人と手をつなぐように俺の手を握った。
ちょっとだけひんやりしていて、もうちょっとだけ心の中が暖かくなる。
そんな、小さな手。

「私はいつでも、覚悟済みですから」

そう言った彼女の口調というのは、それでも幾分か不安を抱えているように見える。
何を覚悟しているのか、これは二つの意味があるのではないかと俺は考えてしまうのだ。

「不安？」
「不安はありますが、シルバさんならと」
一つの意味は、この状況で次に起こり得ることについてのことだろう。
もう一つは、試練の旅で彼女が言っていたことだろうか。
転生者に毎度恋をする希望神ホープの、それがかなうことは今までに一度もない。
だから、彼女は俺に恋をしていたとしても、その思考は複雑なのだろう。
「安心して」
「……はい」
俺のいいたいことは、彼女に伝わっただろうか。
少しの不安は俺にも芽生えたが、大丈夫。
俺は、エスペランサのことが好きだ。
それを確認して彼女の手をいっそう強く握ると。
彼女は、俺の耳に息を吹きかけると俺が反応したのを目で見て笑った。
「やっぱり、耳が弱いんですね」
「五感が強化されてるからかな」
前から弱かったか。いや、耳が強い人なんて居るのか？
そもそも、吹きかけているということよりも、俺の耳に彼女の唇がぴとっとくっついたことに俺は動揺したんだが。

……エスペランサって、こんな女の子だっけ？
いつもよりもまして色っぽい気がする。

「……旅の予定は……」
「明後日、すぐにいくよ？」

唐突に聞かれたが、どこに行くかは決まっていない。
むしろ、宛のない旅の方がいい。
まだ学生だが、世界を回るまで時間はあるのだから。

エスペランサは、その言葉を聞いて俺の顔をまさぐる。

「はい」

そして、俺の唇を見つけると、そこにそっとキスをした。

ことりが餌をつつくような、一瞬だけだったが。
それが、刹那を感じさせてこれまたいい。

「……いつまでも、優しいシルバさんでいてくださいね」
「おうよ」

## 169　同情→行動

「ふーっ、ふーっ」

先ほどから、エスペランサが頻繁に俺の耳へ息を吹きかけてくる。

何をしているんだろう？

息を吹きかけるのをみつめているのは楽しいものだが、彼女の行動にはなかなか訳の分からないことが多い。

「……楽しいか？」

「そうですね、息を吹きかけるたびにシルバさんが反応するのは、とても」

面白がってやっているようだ。

しかし、エスペランサよ。

何回か、間違って俺の耳にキスをしているのはどういうことだろうか？

まあ、エスペランサだからいいけどさ……。

と、彼女の方をむくと、わずかな光の中で彼女が笑っているのが分かった。

「シルバさん、可愛いです」

「……そう言われるのは初めてだな」

可愛いなんて、男にしかもこの歳の人に言わないだろう。

だからこそ、エスペランサって凄いなと思う。

なかなか。そういえる人って言うのは少ないから。
俺が反応に困っていると、エスペランサは俺を見やって首を傾げた。

「いやされたりしないのです？」
「……癒し？　エスペランサとこう一緒にいるだけでも十分いやされてるけど？」

実際、本音である。
だからこそか、彼女はすぐに顔を赤くして照れた。

「……そう、ですか」

俺の言った言葉を噛みしめるように記憶しながら、俺の手を握る彼女の顔には、涙が一筋こぼれていた。

少なくとも、イヤで泣いているわけではないため彼女の涙を親指でふき取りながら、彼女を見つめて呟く。

「嬉しそうだな」
「だって、……そう言われるのは初めてですから」

一人分、俺の方によるエスペランサ。
やっぱり、そういうことなら最初からこちらによってくれればよかったのに、と思いつつ俺は彼女の腰に手を回す。

「今まで、私は居て当然。用が済んだらさよならって言う感じですし」
「へぇ」

「興味がないのですね」
「ないよ」

ひどい、とか言っているが、彼女は本心ではないはずだ。
彼女は、俺が言いたいことをすでに分かっているのだろう。

しかし、俺は彼女が知っている上で、彼女に口で伝えることにした。

「問題は、俺がどうするかだろ？」
「……そうです、けど」
「同情してほしいんだったら俺に言うなよ」

同情なんて、結局は無責任な人がすることだから。
まだ、彼女にひどいことをしていない間は、俺が行動で示す。

これだけでも、いいはずだ。

「なんだか、安心しました」
「ん？　今までの所に、どんな要素を見いだしてそれを言ってるんだ？」

しかし、彼女は俺の胸の中に飛び込むようにすると、そのまま俺をうるうるとみ積めた。

「シルバさんは、シルバさん、ですよね」
「おう」
「……そこに、安心したんです」

んん？

ちょっと意味が分からなかったが、俺は意味が分からないといわず彼女を抱きしめる。

少々、蒸し暑いためさらにひどいことになりそうな気がするが、予想に反してエスペランサの身体はひんやりとしていた。

「つめたっ」

「……あー。……迷法族（カラミタ）って、冷たいらしいですよ」

ほかの種族が暖かい方で体温がうろちょろするなら、迷法族（カラミタ）は逆らしい。

いいじゃないか。

「暖めがいがあるな」

「……凄く、ポジティブですね」

「まあな」

あまり彼女に触れたことがないからか、彼女の小ささを実感するいい機会になれたと思う。

なんていうか、人形みたいな身体をしているんだよな。

「って、何で着物なんだ」

「オウラン帝国では、よく着用されるらしいですね」

……変に着崩しているから、なんか色っぽいし。

いいや、気にしない方が吉。

っと……そろそろ、ねむくなってきた……。

# 170　サクラ

正直、明確にどこに行きたいとか、行きたくないとかあまりない。俺はエスペランサと旅に出たい、ただそれだけであって。

楽しめれば、それでいいと思っていたから。

「エスペランサ、どこに行きたい？」

「そうですね……今までカエシウス、セリシトと来たので次はオウラン帝国に行きませんか？」

提案をしてくれたのは相手のほうだった。

オウラン帝国、という国について、俺は腕獣族（ケレイジ）と械刃族（サミュリ）が多い国、としかしらない。

「そっちには何があるんだ？」

「ええと、独特の形をしたお城とか、巨大なテーマパークとかですかね？　魔導学にも精通していますし、魔剣についても何か情報を得られるかもしれません」

魔導学とは？　と思ったが、きっとこの世界での科学みたいなものなんだろう。

この世界に科学という概念は存在しないようだが、しかし魔法だけですべてが成り立っているというわけではない。

この世界にも、わかっていないところがたくさんあるのだろうだからこそ、そういうのを研究するために「魔導学」なんていうものを立ち上げた、と考えればいいんだろうか。

「とにかく、退屈はしないと思いますよ」
「そうか。ならそっちにいく？」
もう明日には出発ですもんね、とエスペランサは目を細めた。
学園に帰ってきてすぐだというのに、とでもいいそうだったが彼女は言わなかった。
俺の勘違いでなければいいが、恐らく海よりもこちらを楽しみにしていたようだ。
「アンセルやクインには申し訳ないけどな」
「旅行中に、彼女たちの事を考えるのは禁止してもいいです？」
「うん」
……今回の旅行は、今までエスペランサをあまり構ってやれなかった俺の謝罪もかねてだからな。
エスペランサを、旅行中は第一に考えよう。
「というわけで、明日からいなくなります」
アンセルらに説明すると、アンセルは「むす」といった顔をした。
反論があるのか、と聞けば特にないみたいだけれども。

それでも、何かあるのだろうか。

「お土産、お願いします」
「お土産？」
「はいっ」

お土産がほしいといったが、いったい何がほしいのか彼女に訊いてみたら何でもいいという。

アンセルの好きそうなものか。……うむ、難易度が高い。

「考えておこう……」
「はい、よろしくお願いいたしますです！」

ところで、と彼女に俺たちがいないときはどうするのかを聞けば、適当に魔法の訓練をするという。

あとは、クインに学園の案内とかをするのかな。

「あの、どこに行かれるのです？」
「オウラン帝国」
「ああ、スズナリに行ってもいいかもしれませんね」

スズナリというのは、ええと。
オウラン帝国の王都だったかな。

「サクラという植物が生い茂っているらしいですよ？　綺麗な花だそうで」
「桜って春だけじゃないのか？」
「え？　一年中じゃないんですか？」

もしかしたら、品種によるかもしれませんねとアンセル。
この世界には、春夏秋冬咲き乱れる桜があるらしい。
それは素直に身に行きたいな。

「桜の色は？」
「薄いピンクが主流ではないのですか？」
普通の桜だぞ？

魔法で品種改良されているんだったら、蒼とか黄色とかあってもおかしくはなかったんだが。

「ていうか、散らないのかな？」
「散りますよ？　季節ごとに開花と散華を繰り返すんです」

……何ともハイスピードなことで。

## １７０　サクラ（後書き）

次回から二人旅。

# 171　王の夢見（前書き）

アンセル視点

# 171　王の夢見

「明日からシルバはエスペランサさんと旅行か」
「二人旅、したかったらしくて」

準備をしながら、寮の中を言ったり来たりしているシルバさんとエスペランサさんを見つめながら、私の目の前にいるのはクレインクインです。

とりあえず、このままだと気まずいので話しかけましょう。

「あの、クレインクイン？」
「なんだか、アンセルは昔に戻ったな」

私が、クレインクインと彼女のことを呼ぶ理由は簡単、そうしないと彼女は私に反応を示してくれないからです。

そして、クレインクインが「元に戻った」というのは私の口調について。

やはり、取り繕うようにクールさを示したのですが、長い期間眠っていてそれすらもドニ戻ってしまったようですね。

「……まあ、一人の記憶を忘れているらしくて」
「都合よく？」
「都合よく」

本当に都合のいいことに、私はラン・ロキアスの存在だけを忘れていました。

今のリンセルの状態を見ていると、忘れてよかったなと思います

し、そもそもラン・ロキアスが好きになれません。

リンセルの彼氏だというのなら、リンセルを大事にするべきではないでしょうか？

まあ、これは私がリンセルの姉故、かもしれませんけれども。

「シルバは、ちゃんとアンセルを愛してくれるのか？」

「はい。……凄く、よくしてくれていますよ」

シルバさんには、感謝もしきれません。

私を目覚めさせてくれたこともそうですし、今はちゃんと私のことも相手をしてくれるのです。

今回、エスペランサさんと二人旅に向かわれるらしいですが、その代わりに。

夏休みに一回は、二人でデートを約束してくれました。

そんなことを頭の中で反芻しながら答えると、しかしクレインクインは暗い表情のまま、私のほうを見つめてきます。

その表情は、なんともまあ。

もの悲しげで、何かを訴えるような声でした。

「私のことも、愛してくれるだろうか」

「シルバさんは……うーん、どうでしょう」

愛しているかどうかは定かではありませんが、少なくともクレインクインを嫌っているということはなさそうですよね。

シルバさん、前世ではいろいろとシッパイをなさっているようで

すし、彼からは女好きのオーラがながれているのですが、どうも制御しているような気がするのです。

まあ、これはクレインクイン自身の問題でもあり、シルバさんはシルバさんで「自由」というものをほしがっていますから。

前世の反動なんでしょうかね？

「私が、聖国王でなく、ふつうの少女だったら……」

「身分とか、関係ないと思いますよ」

そもそも、シルバさんに聞いてみれば最初クレインクインに出会ったとき、彼は彼女のことを知らなかったのですから。

そういう意味ではないと思うのですよね。

「自由、か。難しいな、私には」

「学生のうちはだいじょうぶなのです？」

「うむ」

そういって、クレインクインは少々夢見がちな目をこちらに向けます。

普段は威風堂々としていても、結局彼女は私たちと同じ。

まだまだ、夢を見る余裕はあるのですよね。

……数年後、その余裕もなくなってしまうので、今のうちに楽しみたいという気持ちもあるのでしょうけれども。

「学生の間だけでも……」

と、次はなにやら危ないことを口走りましたね。

さすがに、これは忠告した方がいいかもしれません。

「それは、私ではなくシルバさんの決めることですから。あと、それを言うのはさすがに軽率です」
「す、すまん」

私が進言するのもどうかと思いますけれども。
さすがに、クレインクインがシルバさん大好きだってことは分かりました。

……うーむ。シルバさんにもいろいろ申し上げたいことはあるのですが、明日から居ないんですよね……。

## １７２　準備（前書き）

少々短いです。

# 172　準備

「オウラン帝国にはどうやって行きくんだ？」
「【デルエクス】をレンタルしていくか、それとも公共機関を利用するか、どっちがいいです？」
彼女が俺に提示したのは、どちらも結局はあの乗り物【デルエクス】に関係するものだった。
この世界での乗り物といえば、恐らくほとんどがその【デルエクス】だろう。
三角形に、エックスを重ねたようなホバーで浮いているもの。
動力に、人工というかなんというか、べつの魔力を使っているとかなんとか。
これも魔導学か？　俺にはよくわからない。
「また、この前みたいに歩きで行くか？」
「それもいいかもですけどね」
そういって、エスペランサは笑う。
しかし、そんなことをしていたらオウラン帝国の端につくだけでも2日はかかる。
さすがにやめた方が、賢明のようだ。
「でも、一度くらいは公共のを使った方がいいと思います」
エスペランサも同じ気持ちだったらしい、というわけでそういう

風になる。
でも、ちょっと考えればこれはどうなんだろうな。

「そうだな」

そういえば、外の国に行くのに特別なものは必要ないのだろうか。
今まで、カエシウスにはルークエルリダスさん……準王族の紹介状、セリシトはリンナアイデルさんがいたから何ともなかった。

あー。でも、あれか。
最初の、学園に向かうまでのところで何も言われなかったから大丈夫なのかな。

「何か、パスポート的なものは必要ないのか？」
「身分証明書があるでしょう？　あれで行けますよ」

ほへー。
なるほどね。

と、ここまで喋って。
俺は、そういえばと一つの事を思い出した。

「冒険者組合とかあるのか？」
「ないですよそんなもの。あるとすれば、政府にやとわれてやるものか、それとも自分で名乗るかくらいですよ」

なんでそんなことを考えたのかはわからないが、しかし。
うん。こういうファンタジーチックな世界には、かならず「冒険者」なんていうものがある、という先入観でいたからかな。

「へぇ」
「シルバさんは冒険者になりたいんですか？」
「……いや、俺のやつは何て言えばいいんだ？」
さすがに冒険者ではないけど、いろいろと旅したいよな。
まず、この世界を回ってみたい。
世界一周ができるかどうかはわからないけどもな。
「職業なんて、名乗ったらそれなんですから。【放浪魔剣鍛冶師】とかでもいいのですよ？」
「……そこもゆっくり考えることにしようかな」
時間はまだまだあるんだよな。
あと2年半、ゆっくりと考えた後で行動するのもいいかもしれない。
もちろん、その時はアンセルとエスペランサも一緒だな。
リンセルは……どうなるかわからない。
「さて、準備は終わりましたか？」
「終わったよ」
俺はリュックをしめると、エスペランサのほうもみる。
……エスペランサは着替えだけかな？
俺は、取りあえず魔武具創造のための材料もたくさん持っているけれども。
「旅の間も、オウラン帝国特産の材料を手に入れるのです？」

「もちろん」

それは決定事項だ。

そして、アンセルとクイン、レオについてもお土産は絶対である。

リンセルにも買ってやるか。

「もうお土産に頭がいっぱいですか？」

「うん」

「そうですね。……何かほしいものとかあるのですか？」

俺は材料があればいいかなって。

うん。

## １７２　準備（後書き）

次回から旅。短めに。

そしてすぐに２学期へ行きますよ

## 173　オムニ停

「いってきます」

みんなに別れを告げて、俺は学生寮をあとにする。

となりはいつもどおり、最初から一緒にいてくれたエスペランサだ。

彼女、鼻歌を歌いながら歩いているあたり、相当上機嫌なのだろう。

だからこそ、その足取りも幾分か弾んでいるように錯覚できる。

「さて、ここからどうしましょうか？」

「どうしようかなぁ。……取り敢えず、長距離用の列車に乗るには中心部に行かないといけないのか？」

俺が問いかけると、エスペランサはうなずいた。

都市国家の中心部は、ビルが建ち並ぶ都会である。

だから、取り敢えず中央部分まで行けば何とかなるのかなと思うわけ。

【デルエクス】意外にも、一応列車というものは存在するらしいけれど。

きっと、俺が思いもしなかった方法で走っているに違いない。

「そうですね。……こっちですよ」

エスペランサに案内されるがまま、学園からの最寄りの、オムニ停に乗る。

オムニ、っていうのは前の世界でいう「バス」を指すらしい。
公共交通機関として。【デルエクス】の大型版はあるか、やっぱり。

「レンタルしたいですねぇー」
「ん？　それとも、列車で個室とる？」
「そうしましょう！」

個室か。夏休みだからな、どうだろう？
とれるんだったら、とることにしよう。

「あーきましたね」
「これ？」
「はい」

と、程なくやってきたのは四角い形をした【デルエクス】だ。
動力が一回停止し、【デルエクス】は地面に着地すると、同時にドアが開く。

そこに乗り込み、ほとんど空の座席のどこかへ座り込むと、ドアが閉まってエレベーターで上に向かう感覚が一瞬だけした。

「ほぉ。滑っていくような感じなんだな」
「人、少ないですねぇ」

すーっと滑っていくそれは、何となく心地が良い。
騒音もほぼしないし、魔力を動力として使っているらしいから環境にもいいんだろうな。

「直行か」
「みたいです」

ちなみに、まだ学園の敷地内である。
学園が都市国家の半分近くを占めているため、学生寮からさらに時間がかかるのだ。

「こう通ると、学園の敷地ってデカいよな」
「そうですね」

都市国家とはいえ、その半分である。
確か、ここポラリスは面積が……どのくらいだったっけ？

……あとでエスペランサに聞いてみよう。

「やっと、見えてきましたね。高層ビル街」
「そうだな」

1時間くらいたっただろうか、うとうとしていた俺は、エスペランサの言葉で目を覚ました。
見れば、周りはすっかり都会である。

車の通行量はおおいし、それに比例してか人も多い。

ただ、前世の世界と違うのは空に飛行機が飛んでいないのと、その変わりと言っては何だが翼羽族（フライド）が数人、飛び回っていることくらいだろうか。

「こっちです、こっち」
「おう」
「ここで手続きです！」
「おうおう」

ターミナルについたら、そこからは大忙しである。
エスペランサの指示通りにやっていったのだが、それでもたくさんの順序があるようだ。

予約して、別の所で発券。
そこからそれの証明をもらって、そしてステーションに向かう。

「次はこっちで発券です」
「おうおうおう」

チケットは、紙として渡されるのではなく身分証明書の中にデータ化されるらしい。
それで、証明をもらうときに初めて紙媒体にされるのだとか。

一手間かかってるんだよな。なんでこんなものにしたんだろう？

「この列車です！」
「……これも浮いているのか？」
「これは【デルエクス】みたいな魔力でなく、磁力で浮いているのです！」

列車は、超魔導磁気浮上式。というものらしい。
前のだと、「超伝導磁気浮上」だったんだが、超魔導ってなんか格好良い響きだな。

ていうか、超魔導っていうのは磁力が働くのか。
なんだこの万能物質は。

しかし残念ながら、とてもスロースターターなのだという。

「あとは、このままスズナリへ、ですよ！」
「了解」

無事に個室はとれたし。
今乗車すれば、夕方にスズナリへ到着だな。

## １７３　オムニ停（後書き）

今普通に私が使っている「バス」も。
今回龍眼族で使用した「オムニ」も、由来は一緒で「オムニバス」からきていますと、補足をば。

## １７４　都　スズナリ（前書き）

お陰様で、２百万ＰＶ突破いたしました。
まだまだ、シルバの物語は終わりません、

これからも、「龍眼族の異世界魔剣鍛冶」を楽しんでいただければ幸いです。

# 174　都　スズナリ

夕方。
列車で5時間くらいかかっただろうか、軽く一眠りしてエスペランサに起こされ、窓の外をのぞく。
が、そこは残念ながらトンネルの中。
というわけで、駅を出て第一声。

「なんだここ」
「スズナリですよ？」

エスペランサは、俺をみてきょとんとしている。
が、え？

こんなものだっただろうか、なんだこの「外国人が考えた日本像＋α」みたいなごっちゃ混ぜ感。

「なんだここ」
「……先ほどから同じことしか言ってませんよ？」

エスペランサは、なんとも思わないのだろうか。
いや、彼女はそもそもこの世界管轄の神だ。

これがふつうなんだろうな。俺は全く「普通」に感じられないが。

「いや、もっとちゃんとした所かなって」
「何がです？　私はシルバさんの世界を知らないのでこれがふつうかと思っていましたけど」

ほら、やっぱり。
この世界の人々、神はこれに何の疑問も持っていない。

どうやったら、夏のこの時期に桜。
桜（サクラ）は、アンセルが1年中咲き誇るっていっていたから妥協しよう。

何故、その隣には梅が？
梅は早春に咲くのではなかったか。

さらにそのとなりには、紅葉が落ちてるし。
訳が分からない。

もっとも訳の分からないことは、それがすべて一つの木から、ということだ。

「確かに、この世界だとこれが正しいんだろうけどさぁ……」
「……？」

さすがに、いろいろとカオスである。
不器用な神が、俺のいたような世界をモデルにつくったが、種類を分けるのが面倒になった。みたいなセンスを感じる。

と、俺はちょっと上を見上げ。
【それ】を見て、安堵したような、またかというような気持ちになった。

「アレが城？」
「そうですよ」

天守閣がある。
何階建てなんだろう。小さなビルに匹敵するくらいには高さがある。

そして、何よりも横にたいしても広い。

「アレが？」
「あの、先ほどから本当に、同じようなことを繰り返しているだけのような気がしますけれども」

いやだって。
ええ？

今日、ここに来てまだ３０分も経っていないはずだが、驚くやら呆れるやらで。
正直、疲れた。

「うーん……」
「何がいけないのですか？　綺麗なスズナリの町並みですよ？」

エスペランサは、そんな俺の気持ちを知ってか知らずか、首を傾げて目を輝かせる。
ここに一度来たかったんだろう。

俺は微妙な気分だったが、今回はエスペランサのためだ。
楽しむことにしよう……。

「よ、よし。……取り敢えず宿を探そう」
「予算はどのくらいです？」
「最高級とは言わないから、エスペランサが満足できるような所で」

最高級はいくらかかるか分からないからな。
こんなになんというか、うん。

ていうか、こんなにも和風要素が入っているのなら、遊郭もあるだろうし、遊興する場所はいくらでもあるのだろう。
あと、ここは純和風ではないようだ。
駅から通りをずらっとみるだけでも、東アジアのいわゆる、日本・中国あたりの文化が「不器用」に混ざっている印象を受ける。

「うー。露天風呂は必要ですか？」
「あるの！？」
「ありますよー。個室と共同、どっちがいいですか？」

露天風呂、というのは日本だけではなく確か極北のほうの国でもあった気がするが。
もうすこし観光する時間があれば、カエシウスにももしかしたら同じものはあったかもしれないな。

あったわ。
とりあえず、ここは個室にしていただこう。

「個室るんるん♪　一緒に入りましょうね！」
「お、おう」

エスペランサは楽しみにしすぎて音符マークが口から飛び出しているかのようだった。
そんなにもここが楽しみだったのだろうか。

しかし、そんなことよりも気になっていることが一つ。

「なあ、滅茶苦茶注目されていないか？」
「そうですね。……まあ、シルバさんはそれですし」
俺の小さな角と、顔や手の甲に浮き出ている龍鱗（うろこ）を指さす。
「私は、夏の薄着なので目立っちゃいますね」

薄く白いキャミソールに、白い肌。
そこまでは良いが、そこからが問題。

下着をつけているが、それでも心臓部からうねるように、また放射状に伸びるように全身に広がっている紋章は、イヤでもふつうの人々には目に付くのだろう。

「【龍眼族（レザール）】と【迷法族（カラミタ）】の二人ですもの、仕方ないですよね」
「……そう、だな」

ちなみに、ここに龍眼族（レザール）は意外と居るような気がする。
ただ、確実に俺とは人種が違う。

……文化が東洋なら、龍眼族（レザール）の人種……龍種も東洋風ということか？

## 175　おすし

「ええと、エクアトゥール様ですね」

都、スズナリの中にある旅館「静嵐荘（せいらんそう）」にて。

チェックインを進める。

「こちらの部屋になります。代金はチェックアウト時にお払いください」

ちなみに、スズナリという名前はジンカ文字にすると【栖澄鳴】となるらしい。

鈴鳴ではないんだな、と思ってしまったが、今はそんなこと関係ないだろう。

勿論、ジンカ文字とは漢字のことである。

旅館の女将に鍵を貰い、俺はエスペランサを振り返った。

「早速、飯でも行くか。確か1階にあったよな」

「そうですね」

エスペランサ、興奮中。

なぜだか分からないけれど。いや分かっているけれども。

取り敢えず1階の、絶賛繁盛中である店にはいることにした。

……回転寿司だった。

隣には、回っていない方の寿司もあるが、エスペランサに聞けば早く食べたいとのこと。

「これがお寿司なのですね」
「色が、すごいな」

確かに、美味しそうな白身、赤身の魚はある。
均一で同じ値段だというのに、中々なクオリティだ。

しかし、青い魚身はいったい何なのだろう？
黒もある。……確かに脂は乗っていて美味しそうなんだが、残念ながら色でちょっと食欲がなくなった、気がした。

「ああ、これは……」

いや、でもあー。
ちょっと苦悶した後、取り敢えず一皿。

うーん、結局白身魚をとってしまった。
エスペランサは、何も気にしていないようで

「状態異常付与なんてあるのか？」
「いえ、それはシルバさんのような、特別なものが必要なのですよ。あと、そんなものはここにないと思いますし、鮮度の失われる魚にはしないと思います」

つまり、素材としての能力はもっていたとしても、それが人体に影響を及ぼす程度になるのはまだまだだということだろう。
それを高めたり、さらに付け加えたりするには特殊な能力か、ま

た調合が必要になるということか。

「へぇ」

「魔法の研究をするかたは、作る型と別にいるのですよ」

と、早々に話を終わらせると、エスペランサは手を合わせた。

「いただきます」

そんなに食べたかったのだろうか。

その普段ではあり得ない色をした魚を口に入れると、そのまま頬を押さえるエスペランサ。

「ん～！」

美味しかったらしい。

声は揺れているし、中々だな。

「おいひいですほ、ほれ」

「口にものを入れたまましゃべらないの」

はひ、とエスペランサはうなずいたが、しかしそのままもう一皿と行った。

女子力（じょし）……。どこ行った女子力。

なんだろうか、しかし笑顔の絶えない少女の姿というのは良いものだな。

彼女のそばにいたいのは、そんなエスペランサの姿をずっと見つめていたいからなのかもしれない。

「スズナリのご飯は美味しいですね。ね！」
「ヘルシーなのは認めるけれども。いや、確かに美味しいけどもなぁ」

ずっとこれだけを食べたいとは思わないんだよなぁ。
たまに食べる程度が良いかもしれない。

んんー。中々ですな。

「食べてみるかぁ」
「どうぞ」

エスペランサが、俺の口の中に黒い寿司を差し入れてきた。
……あ、旨い。

っていうか甘い！

予想外の味がした。
うん、甘い。スイーツのような甘さである。

「美味しいです？」
「甘い」
「はい、菓子魚（かしうお）って言われてるんですって」

……だめだ。普通の魚を食そう。

「うどんも食べますか？」
「そうだなー」

エスペランサ、食べ過ぎである。
それでしかも、さらにアレだ。

全く腹が膨れている気がしない。きっと彼女の胃袋は底なしなのだろう。

「美味しかったですね！」
「……どのくらい食べたんだ、本当に」

皿が柱５つ以上になっていたのを見るに、恐らく６０皿くらいだろうか。
俺なら、確実に腹がパンクしている。

「早く露天風呂入りましょ」
「……一緒に？」
「はい！」

……さっきは冗談かと思っていたが、本気だったらしい。
これは、思った以上のご褒美になっているのかもしれないぞ……。

# １７６　勝つ自信（前書き）

ラン視点。

## 176　勝つ自信

「これ以上無理なのか？」

おかしい。

一週間くらい前から、というか夏休みが始まってからまったく成長している実感がない。

今、目の前にいるカレルを見つめながらも、俺は肩で息をしていた。

この前までは、確かにいい線まで行っていたのだが。

カレルに「本気で来てくれ」って頼んだ瞬間、今までの訓練が嘘のようにやられた。

「……ラン、もうその辺にしろ。彼女たちも心配しているだろう」

思えば、もう2か月がたとうとしている。

リンセルやクリーゼには大きな心配をかけているが、でも……。

最終試験に合格できるくらいの強さがない限り、彼女たちに合わせる顔すらない。

「……でも、年末の試験にクリアすることは、最終的に幸せにつながる」

「そうか。……まあ、飯に付き合ってくれよ」

カレルは気楽に……とはいかなかったが、俺を飯に誘った。

普段なら断って自己練習にはいるが、彼の眼を見ているとその返

事が頭から消えてしまう。
その程度には、カレルは真面目な顔をしていたのだ。

「どこに？」
「そうだな、何が食べたい？」

俺は首を振る。

「……何でも」
「了解」

そして、そのまま汗を流しに行った。

案内されたのは、一般的な学園の食堂の一つだ。
ラーメンっぽい麺を頼み、それをすすりながらカレルの話を聞く。

「なぜ強くなりたい？」
「……前世では、俺は大切な人に謝ることすらできずに死んでしまったから。……この世界では、できるだけ……」

俺は、死ぬ直前に大切な人を泣かしてしまったのだ。
そして、それに罪悪感を覚えるあまり、すぐ上から鉄骨が降り注いできたことをまったく気づいていなかった。

そして、そのまま貫かれた。
すぐに転生したということは、即死だったということだろう。

痛みがなかっただけ、マシだと思いたい。

「妄言が過ぎるな」

しかし、カレルは俺の言葉をバッサリと切り落とす。

それも、一つの可能性として想定していたため特に気にしなかった。

そのくらいの事は、俺だってわかっている。

「そのくらいわかってるさ」

「面白い情報を渡そうか？」

「……は？」

と、カレルはいきなり話を変えた。

何があるのだろうか。しかし、予感からするに俺にとっては面白くない話だろう。

「まず、知っているとは思うがアンセルはシルバ側についた」

「……そうだな。それは俺のケアの問題だろう」

アンセル……。いい女だったが離れていったということは、やっぱり俺のせいだろうか。

俺の人生と、彼女の人生が最終的には同じ道ではなかったということだろう。

現にリンセルは、こんな俺でも世話はしてくれている。

「そして、年末の最終試験の相手は誰だと思う？」

「ルークエルリダス・レイカーさんだろ？」

「残念、シルバだ」
「えっ」

シルバ・エクアトゥール。
彼と、もう一度戦わなければならない。
いや、そんなことよりも、もっとひどい。

なぜ、当主じゃなくてあいつなんだ……。
出頭命令の時に、何かがあったんだろう。

「……いや、でも今の俺なら彼に勝てる」
「その自信はどこから来るんだよ」

カレルは「冗談ではない」と真顔だ。
俺を気に駆けてくれているという証拠でもある。

「俺には相手が知らない特性がある」
「それだろ？」
「そう」

まず一つ、俺はただの完全混種族ではないということだ。
今はウェイカーとエリシュ、そしてサイコルの種族特性も持っている。
だからこそ。彼の想像を超えるような攻撃方法が可能だということ。

二つ目は、魔力が尽きないことだ。
普通、魔法を使うと少量の体力の消耗ともう一つ、根本的に魔法を起こそうとする気持ちがなくなる。
それが魔力で、恐らく本能的に体が魔力をそこまで使うのを制限

しているのだろう。

しかし、俺にそれはない。

というか、今までどのくらいの魔法を使えるのか試したが、5時間ぶっ通しで、普通の人なら1回で倒れてしまうような魔法を使ってもだいじょうぶだった。

ほかにもいくつかあるけど、この二つで勝てるとは思う。

「俺をここに転生させてくれた神様には感謝しているし、俺の中にはリューがいる」

そういいながら、俺は心臓部分をとんとたたく。

やっと、前回の復讐（リベンジ）ができる。

そして俺は勝って、アンセルもリンセルも「もう一度」手に入れる。

## 177　露天風呂（前書き）

糖分が少なめになってしまわれた。

# 177　露天風呂

「ふぅ」

彼女は、湯につかりながら幸せそうなため息をつく。
湯からは、白い湯気が霧となって立ち昇っている。

「良いお湯ですね」
「そうだな」

エスペランサは、俺が返事をするとまた一つ。
ため息をつくと、それは霧の中に混じって消えていった。

「もう少し、近づいてもいいですか？」
「どうぞ？」

こういうとき、どうやって話しかければいいのか分からなくなる。
エスペランサは、タオルを巻いているとはいえほぼ裸である。

それもそのはず、露天風呂なのだから。
というか、二人部屋にしては何もかもが大きすぎるのだ。

「このあとは、どうするんだ？」

俺の隣に移動した、エスペランサと一緒に夜空を見上げながら彼女にこれからの予定を聞くことにした。

「もちろん、同じお布団にくるまって寝ます」
「いやいや、そういう意味じゃなくて」

彼女は何を勘違いしたのか、露天風呂だけではなく寝る時も一緒にいようとしたのか聞く必要のないことまで口走っていた。

と、一瞬きょとんとした表情を浮かべた少女は、こちらを見つめて頭の上にハテナマークをくっつける。

「そういう意味じゃないのです？」

「いや、そういう意味でもあるけど。……本当は明日どうしようかなって」

なるほど、と頷きながらエスペランサは白いその両手で水をすくい、子供のように目をキラキラさせていた。

なんだか、まぶしく見えてしまうのは俺だけだろうか？

ああ、それは彼女の肌の輝きか。

「明日からどうする？　別に何日居てもいいけど」

常識の範囲内で、ということでいうのなら最高でもあと3週間くらいは時間がある。

ただ、そこまで一緒にいたとして何かするというわけでもないだろうけれども。

「そうですね。明日はここ【スズナリ】を回って、明日他の場所に行きませんか？」

「そうするか」

「わぁーい！」

そういって、少女エスペランサは大きく伸びをした。

ふわっと湯気は揺れ、彼女の露出した肩は一層白く感じられる。

それにしても、彼女は幼いのか大人びているのか微妙な存在だな。普通に考えたら神様なんだし何でも知っているから上に見るんだろうけど。

こうも近くにいると、どうしても彼女が妹のようにも思えてしまうのだ。

「そろそろあがるのです？」

「おう」

そのまま寝てもよかったのだが、まだ時間を見ると午後１０時。まだ店は開いているだろうということで、泊まるときに食べる菓子類を買いに行くことにした。

この、東アジアを具材としてかき混ぜたサラダのような国は、スズナリ周辺こそこんな歴史を感じさせる場所だが、逆方向に向かうとポラリスよりも反映した大都市があるらしい。

「やっぱり、シルバさんはそちらに興味があるのですか？」

「ないわけないだろ」

こっちにも魔武具の材料はあるのだろうが、それでもあちらのほうも気になる。
スズナリが【腕獣族（ケレイジ）】の都なら、あちらは【械刃族（サミュリ）】の都だろう。
生まれた時点から身体の半分以上が機械でできている、先天性のサイボーグである【械刃族（サミュリ）】。
きっとその都は工業工業しているのだと考えれば、そう心が躍るのはわかるだろう？

「大気汚染とか酷そうです」
「そこは。この世界の魔導学が何とかしてるだろ」

なんとか、というのはいったい何なのか俺には分からないが。
まあ、特に考える必要はなさそうだ。

俺は魔武具を創る、魔法関係の人だからな。
自分の生計をちゃんとして、あとは大切な人数人と安全に暮らしていければいいような気もする。

放浪する必要もないんじゃないか、と考える時もある。
そもそも、俺はこの世界に転生してきて何をやろうとしているんだろう？

「何か考え事でも？」
「ん、いや大丈夫」

エスペランサが、籠の中に美味しそうだと思って購入予定の和菓子類を詰めてきた。
かなりの量があるし、どれもが名称も同じで前の世界で見たこと

のあるものだ。

不器用だな本当に、コピーするのなら完全にコピー世界を作ればよかったのに。

「全部？」

「はい」

……まだ食べるのか。しかもこんなに。

## １７７　露天風呂（後書き）

次回は添い寝回です。

# 178　キス

目の前に、手の届く距離に彼女がいる。
手の届くどころの話ではなく、実際に考えれば……ちょっと耳を澄ませるだけでも彼女の息が聞こえてきそうな、そんな距離に俺たちはいた。

「……なんだか、こうやって改まると恥ずかしいですね」

彼女はそう呟くと、しかし右手を伸ばして俺の頬をそっとなでる。
もっとも、それはなでるというよりは当てるだけのようにも感じられたが。

「これ。いいかんじですね」
「どういういみ？」
「……こうやって、私はシルバさんの体温を感じていられる。……シルバさんは……」
「俺は、エスペランサの息を感じていられるってか？」

こくん、と頷いた少女に俺は微笑みかけると、また少女も微笑む。
それが、また一つ彼女の魅力を感じさせる大きな要因となった。

「ねえ、シルバさん」
「ん？」

その声は、耳に確実にはって侵入してくるような感じがする。
猫なで声、とはいかないがていうか。
おそらく精一杯色っぽい声を出そうとしたのだろう。

ぞくっとした。悪い意味で。

「あぅ、大丈夫です？」

「すごい声だな、それ」

俺の身体が震えたのが気になったのか、少ししょんぼりとした顔をするエスペランサ。

そんな彼女を見つめながら、右手を動かして彼女の頭を抱き込む。

「……無理しなくていいから、自然体でいなよ」

「はい」

しかし、彼女は俺の声ではなく、他の何かに反応したらしい。

「……交わりたいですか？」

「ん？」

爆弾発言を、してくるではないか。

交わりたいって。そういう意味だと思うんだが。

エスペランサは、俺の手を握って頬を摺り寄せるようにする。

「私と、交わりたいですか？」

「……聞いてくるのか？」

別に俺は肉欲にあふれているわけでも何でもないんだがなぁ。

しかし、それでもちょっと待て。

……エスペランサが、体変えやがった。

「だって、私は人間態とはいえ神ですよ？」
「……それもそうだな」
その前に、なぜ徐々に体が大人びていっているかの説明をしてほしいなぁ。
しかし残念ながらその説明はなく、俺がちょうど希望神ホープとして彼女を見ていた、あの神殿の時のような容姿になる。
「だから、いいんですか？　人間が耐えられるとは思えません」
「俺は転生者だからな」
転生者だし、神に力もらっているから大丈夫だろうという安易な考えだが。
まあ、間違って位はいないようだし大丈夫だろう。
彼女の唇に唇を重ね、すぐにはなす。
「んっ……」
「今日はこれだけでも」
いい香りがする。
どうも、エスペランサは俺の身体に異常がないか親愛なようで。
だからこそ、ここまでしかできなかった。
特に問題はないと思うんだけれどもね。
「大丈夫なんです？」
「何が？」
「……私との体液を交換したってことは、僅かながら神に近づいた

ってことなんですよ」

神に近づく、か。

そんなことも、まあ後々は考えていくべきことなのかもしれないけれども。

俺がこの世界での人生の満喫後は、ヘーハイスの部下になることなんだからな。

「……特にないから、大丈夫だろ」

今のところ、問題は何もない。

だからこそ、こうやって調子づいていられる。

「何かありましたら報告してください」

「大丈夫だって」

「そういってられないかもしれないんです！」

本気で心配してくれているようだが、まあ大丈夫だろう。

涙目になってうるんでいる彼女をみながら、しかし我慢できなくなってもう一度唇を合わせる。

「決めたことは、なんでもやるさぁ」

## 179　スズナリでの朝

目を開けると、そこに広がるのは白い美少女だった。
広がる、という表現は少しおかしいのかもしれないけれども。

「エスペランサ、おはよう」

彼女に声をかけると、少女はうっすらと目を開き、こちらを見つめる。
そして、柔らかく微笑むとそのまま再度倒れこんだ。

すぅすぅ、と息の声が聞こえる。
取りあえず頭をあげて、窓の外をのぞくとそこにはスズナリの朝が風景としてあった。

「エスペランサ？」
「……はい。失礼しました」

と、むくっと起き上がるエスペランサの動きといえば、それはそれで人工物を感じさせるものがある。
ロボットみたいな動きかただった、が。

とりあえず、突っ込むのはやめた。

「早速着替えていきましょう」

エスペランサに部屋から一時的に追い出されて、同時に俺の分の着替えも投げてよこされて。
ちょっと布擦れの音も聞こえてくるが、気にしないようにして俺

も着替えをする。

といっても、いつも通りの服装なわけなんだが。

この世界が前世と同じように発展してくれていて助かる、本当に。

「今日はどこに行かれるのです？」

とりあえず準備が完了して、部屋に鍵をかけて外に出る。

不器用な神様が不器用にコピーして混ぜて作ったようなスズナリの町で、取りあえず俺はあたりを見回した。

「とりあえず魔剣っていうか、魔武具の材料をなんとかしようかなって」

「ここでも一つ作るのです？」

創るかどうかは決めていないけれども。でも作りたいなぁ。

材料はおそらくあるだろうし。

「最初にそっちに行ってもいいのか？」

「私は構いませんよ。今日はまだまだ時間がありますしね」

まだ、正午にもなっていないし、ということか。

確かに、まだ店が開き始めているところだ。

「行くお店は決まっているのです？」

「まったく。とりあえずそこらへんをぶらぶらと歩く予定だから」
ガイドマップもあったし、別にそれに沿っていてもよかったのだが。
地図を見るよりは、自分たちでうろちょろしたほうがいいと思ったので。
「エスペランサは、どこかいきたいところないか？」
「私は、あとでも構いません」
そう言ってはいるが、その目はキラキラと輝いているし、そもそも首をせわしなく回しているせいか、目移りしすぎである。
それを指摘すれば、彼女は「今のうちに行きたい店を決めておくのです」と返答。
つまりはそういうことである。
エスペランサって、そういうのには興味がないと思ってたんだがな。
ほら、仮にも彼女は神様だから。
「私は全知でも全能でもありませんので、ていうか。年頃の女の子はこういうのに興味があるのでは？」
エスペランサが指差したのはアクセサリーショップである。
髪飾りとか、確かに興味をひかれそうなものはたくさんあるけれども。
「としごろ？」
「そうですよぅ」

まあ、いいか。
彼女がそう言うのなら、彼女に合わせよう。
俺は神のことなんて全く分からないけれどもね。

「先にそっちみる？」
「いえ。お先にシルバさんのほうをどうぞ？」

それなら、早く俺のほうを終わらせよう。
鍛冶屋とかはよく見かけるんだが、肝心の材料はどこにあるんだろうか。

「やっぱり、ガイドマップが必要だな」
「そういう感じのものは、やっぱり町の中心ではなく少し外れたところにあると思うのです」

うん、それはそうだと思う。

「フェニックスの羽根とか見つかればいいですね」
「そんなものがあるのか？」
「はい」

でも、俺の想像するフェニックスと、この世界にフェニックスって、絶対違うと思うんだよな。
ペットショップとかに売ってたりするんだろうか、今まで興味なかったけど。

「もちろん、売買には証明書が必要でしょうけれどもね」

では、早速探してみましょうと彼女が指差した先には、「スズシロ商事」と書かれた看板だった。

# 180　スズシロ商事

「なあ、エスペランサ」
「はい、何でしょうか」

恐らく業務用にあるのだろう、様々な材料が売ってある「スズシロ商事」の一角に、俺とエスペランサはいた。

「ホウオウの羽根と、不死鳥（フェニックス）の羽根ってどう違うんだ？」
「ええと？　なんですかー？」

とてとて、とこちらのほうにやってくるエスペランサ。
隣に並んだところで、俺はショーケースに展示されていた二つの羽根を指差した。

どちらも値段は、羽根1本につき7ケタ行くというとても高価なものではあったのだが。

「ええと、ホウオウの羽根は純粋な最上位の【火】属性としての役割でしょうか。不死鳥（フェニックス）は、属性としての役割こそホウオウに劣りますが、【火】【光】の二つを属性として持っていますし、さらに使用者への回復効果もあるそうです」

つまり、純粋に魔法の属性だけを重視するなら【ホウオウ】。
副作用なども考慮に入れるのであれば、【不死鳥】というわけか。

「両方買って、一つにしたらどうなるんだ？」
「それは、シルバさんの運次第ですよ」

材料は魔武具になりませんから、とエスペランサは首を振ってその結果がどうなるかわからないと俺に言った。
まあ、両方買うわけだが。

「こっちは？」
「ゲンブ岩……は、化石ですよ」

化石の一部なんだとか。
ちなみに効用は、【地】属性に準ずるらしい。

「オウラン帝国は、元々生物の種類が多い場所ですから」
「そうなのかー」

そんなことを知らなくても、ショーケースに入っている高級そうなものを眺めるだけでも楽しい。
しかし、学園を卒業後どうしようか、決めなければならないのも一つ。

放　浪というか、旅をつづけながら所々で鍛冶屋をやるというのなら、そういう知識も必要なのだろう。

「ところで、エスペランサの手の中にあるのは？」
「【生命草（イノチソウ）】という、回復薬の原料ですよ。シルバさんに影響されて、私も何か作りたくなっちゃいました」

そんなことを言ってのけ、同時に柔らかく微笑んで見せるエスペランサ。
さすがである。なんというか、ごくごく自然な動きに圧倒されてしまう俺だった。

「全部俺が金を払うから、他にも何かほしいものがあったらとっておいで」
「はい、そうします」

そしてそばを通りがかった店員に声をかけ、商品を注文するエスペランサ。
どうみてもショーケースの中ってことは高価なのだが、俺の財布の中は大丈夫なのだろうか。

一応、身分証明書はキャッシュカードにもなっているのだから問題はないんだけれども。
魔　剣を一本売るだけで億は行く。でも、それを創るためにはいくら俺が成功率１００％だとしても、数百万は材料費としてなくなる。

普通に生活する分には、その差分で充分なんだろうけれども。

「ええと、……私も作ったものは売った方がいいですか？」
「自分で使う分はちゃんと持っておくこと。他は制限しない」

それはエスペランサが決めることだろう。
神とはいえ、彼女も女の人なんだから買いたいものとかあるんだろうな。

「そういえば、シルバさんってこの世界での誕生日がありませんでしたね」

「この世界にも、誕生日なんていうのがあるんだ」
「ありますけれども、どうします？」

会計が終わり、そろそろスズシロ商事をでようかというところで、エスペランサは唐突に話しかけてきた。
誕生日か。……前世では結構祝ってもらったりしたけれど、この世界にもそんな記念日が存在するんだな。

「そんなこといったら、エスペランサもないじゃないか」
「私は、【神々の生誕祭】の前日ということにしているのですよ」
「なにそれ」

シルバさんのいた世界でいえば、「クリスマス」ですっ。とエスペランサ。
確かに、ねぇ。

「俺がこの世界に来た日を覚えているか？」
「はい。大丈夫ですよ」

じゃあ、その日でいいか。
取りあえず決めていた方が、いいかもしれないしな。

「ちなみに、アンセルさんとリンセルさんは、【神々の生誕祭】が誕生日なんですって」
「ほー」

豆知識も終わったところで、ちょうどスズシロ商事から出れた。
とりあえず買ったたくさんのものを、【次元袋】と名付けた重さ無視の袋の中に入れる。

「さて、次はどこに行きたい？」
「とりあえず、魔武具のお店に行って魔剣の相場を見てみましょう」
王都なら、さすがに魔剣の一本や二本くらいはあるだろう。
……鍛冶屋が、十数件立ち並んでいる通りがあるようだし。

## 181　速報（前書き）

前半：ラン視点。

後半：？？？視点。

# 181　速報

「……ラン君、どこいくの？」

俺は、ショックを受けていた。

そうか、そういうことだったのかと。

シルバ・エクアトゥールが帰ってきてから、上機嫌だったのはそれが原因だったのかと。

「別に」

こうやって見ている限り、リンセルはこのことを知らされていないのか。

でも、安心はできない。どうしても疑心暗鬼になってしまう。

きつく彼女を突き放してしまったせいか、リンセルは一瞬悲しそうな顔をしたが、すぐに表情をもとのものに戻す。

「ラン君、変わっちゃったね」

「誰のせいだと思っている」

みんなして、俺をだまして。

こう考えてしまうと、俺がリンセルやアンセルを手に入れるチャンスが巡ってきたことに対しても、シルバが進言したからなのではないかと。

前世でもバカにされ続けて。

この世でも、そうされるのは悪いがごめんだ。

「俺は、今からレイカー家に行く」
「えっ！？　でも、どうやって？」

リンセルの顔が、真っ青に染まった。
目は見開かれ、目の前に恐怖を見た、ような顔をしている。

しかし、俺はそれに気づいていなかった。
気づこうともしていなかった、という表現のほうが適切かっも知れない。

気持ちで人をしばりつけられないのなら、力でねじ伏せる。
拘束する。服従させる。

「シルバにできたことを、俺ができないはずがない」

相手が龍眼族（レザール）で、特別に体力や気候に対しての耐性があったところで。
他の女子生徒三人も、同じだったはずがないのだ。

「一人で、行くの？」
「カレルと」

その言葉にはっとしたのか、リンセルは俺の後ろを見透かすように目を細めた。
振り返れば、そこにはカレルがいることだろう。

「……カレル。そんなことしてお父様が納得するとは思えないよ」
「そうかな？　俺はシルバよりも、ランが君たちにはふさわしいと思うけれどもね」

その言葉の本心が、どうなのか俺には分からない。
もしかしたら本気で思っているのかもしれないし。
あるいはもしかしたら、シルバとつながっているのかもしれない。
だけど、俺はリンセルが好きだから。
それが、どれだけ歪んで、いびつな形になっていようとも。
愛情が、執着に変わっていようとも。

「そう、か」

私は、カレルからの速報をあけ、ため息をついた。
もう少し何とかならなかったのか、それとも相手が結果を急いだのか。

私はシルバ君でいいと思ったのだが、相手はやはりそうか。

「転生者の子孫を、転生者の二人が取り合う、か」

声を出せば、それが何らかの形になって先祖様たちに届くような気がして。
その前に、誰に連絡を取らなければいけないのかはすぐに察しが付くのだが。

「ゼロ」
「はい」

外で待機していた械刃族（サミュリ）の男に、声をかける。
無骨な機械で全身を覆い、さながらパワードスーツのように体を「要塞」化している彼の名前は、ゼロ＝オール。

「今回来るラン・ロキアスという男と、前回来たシルバ・エクアトゥールという男。ゼロが支持するとしたらどっちに行く？」
「俺が選択できるというのなら、龍眼族（レザール）のほうですね」

即答、か。
なら、彼に任せてもいいだろう。

「では、ゼロ。シルバのところにこれを届けてくれ」
「速報封筒を使わない理由は、……ああ」

すぐに理解してくれるのは、さすがだな。

「では、私は【械騎馬（テクノホース）】の許可を要請します」

【械騎馬（テクノホース）】とは、械刃族（サミュリ）にしか使いこなせないと思われる機械として生きている馬のこと。
械刃族でも、乗りこなすことが可能な人は限られるのだが、彼はその中で最年少で可能になった人だ。

「許可する。……ええと、今はオウラン帝国に旅行だそうだから、そっちに向かってくれ」
「了解しました」

「あとこれ」

私は、屋敷の壁に取り付けてあった一本の斧を彼に渡す。
銀色に輝き、鈍色の場所なんて一つも見つからない。

寧ろ、それ自体がほんのりと光を持っているようにも感じられる。

「これを、俺に？」
「何があるかわからないからな」

私の言いたいことが分かったのだろうか、神妙な顔でうなずいた
ゼロは、踵を返した。

## １８１　速報（後書き）

後半が誰か分かるかたは、いらっしゃいますかね？

# 182　デルエクス

オウラン帝国、王都からとりあえず出ることにした。
お土産は買うだけ買ったし、あまり深く考えないでチェックアウトも済ませる。

「ここから、北上します」
「うむ」

エスペランサに案内されて、俺たちが向かったのはオムニ停ではなくレンタル屋だった。

「いや、これならこっちでなく、普通に中古でもいいから買おう」
「そうですか？　まあ、シルバさんが言うのなら私は構わないですけど」

と、次は中古ショップへ。
武器に中古という概念はないのか。

「こんな感じでいいです？」
「乗る感覚は？」
「ゲームで」
「ゲームか」

貴方の世界でいうのなら、という話ですよとエスペランサ。
そういう関係の事は、よくわからないため肩をすくめて機体を見やる。

近未来感を漂わせているものであることはよくわかった。

フォルムは角ばった流線形と称すればいいだろうか、想像するなら電脳世界に迷い込んだような雰囲気すら匂わせている。

「デザインも、いろいろあるんだな」

「シルバさんのお好みで決めてくださいな」

普通に考えたら、ブランドというか。

メーカーもいくつかあるのだが、いかんせんよくわからない。

「まあ、結局下の部分ですね。……この部分があるものは総称して【デルエクス】と呼ばれるので」

エスペランサが指差したのはエンジンを込めたユニットの部分だろうか。

機械関係の事は分からないが、エンジンと魔力風の放出口？　の二つがあれば【デルエクス】として認められるということだろうか。

少々わかりにくいかも。

「何か性能差とかは？」

「最初は、何も考えないで好みでいかがでしょうか？」

それなら、そんなに考えなくてもいいか。

「そうそう、この世界でっていうか。この国でタブーとされている色とかはあるのか？」

「いえ、特に数日国はありません。でも色は、属性の色でもあるので結構な頻度で好まれます」

ほぅ。特に問題はないということで。

純粋に、好みである黒に赤のラインがはいったものを頼んだ。

「なんていうか、買うと気持ちがいいな」

「そうですね。シルバさんの【デルエクス】初購入ですね」

中古だからか、簡単な手続きも終了し。

予備の燃料というか、人工魔力も購入したところでエスペランサと店を出る。

「乗ってみますか」

「免許は？」

「……そうですねぇ、こうしましょう」

神というのはいろいろと便利なものだ。

だが、証明書をそのまま書き換えるのはやめていただいた方がいいかもしれない。

さすがに、やりすぎ。

「ん？」

「……どうしました？」

と、ここで虫の知らせといえばいいのだろうか。

何かの感覚が、俺の背中から尻にかけて流れていった。

俺を不思議がるように見つめるエスペランサ。

その「何か」には気づかなかったようで、しかし。

それを、俺が感じ取ったのはわかったらしい。

「いや、変な予感が、な」

「……未来予知、ですか？」
「分からないな。あくまでも第六感的なものだろうし」
「……あー」

と、ここで何か考え始めたエスペランサ。
そして「あとでお話が」というと、【デルエクス】の後部座席に座り込んだ。

「はやく、出発しないんですか？」
「でも、乗り方が分からないんだよなぁ」
「バイクと一緒です。ゲーム感覚で」

……本物の乗り物に、それはいかがなものかと思ったのだが。
やってみたら、意外とうまくいった。

目標が移動を始めたという連絡が入った。
ルークエルリダス様からだ、俺はそれを確認して馬を見下ろす。

「北か。大丈夫か？」

こく、と頷かれ前を向く。
機械樹。マドウマシンで構成された、永遠に増殖し続ける巨大な森林。

この中を、一気に駆け抜けるのが早いだろう。

「よし、いこう」

それにしてもラン・ロキアスとシルバ・エクアトゥールか。

後者は一瞬だけ見たことがあるが、中々気の強そうな男だったな。

# 183　魔導都市ギージック

「ここが、【ギージック】」
「そうですね。オウラン帝国の中で、一番発達している場所です」
エスペランサのいう「発達している」とは。
きっと、魔導学的に発展していることのことを指すのだろうか。
王都スズナリの、アジア風な雰囲気とはことなり。　こちらでは、どうもサイバーパンクな印象をこちらに与えてくれる。
「何といっても、この動いている感じがたまらないね」
「……そうですね。視覚的にもはっきりと私たちに訴えてきてくれる……」
なんというか、今しがた【デルエクス】でここまでは知ってきたのだが。
なんというか、腕獣族（ケレイジ）の領域（テリトリー）から械刃族（サミュリ）の方向に向かっている途中で、奇妙な森林の横を通り過ぎた。
機械でできているような、そんな雰囲気の森である。
確か、エスペランサによるとそれは【機械樹】と呼ぶらしいが……。
「ここにも、あれはあるんだな」
「そうですね。……先ほどは近くで見られませんでしたが、ここならいくらでも観察できますね！」
【機械樹】を見れば、それがごくごく小さなものであることは分

かる。
一つの樹だと思っていたものは、実は小さな木が集まった集合体であることがすぐに察せれれるのだ。
また、その樹は有機物ではなく、一見すると無機物に見えているのだから面白いものである。
「そして、やっとここにたどり着いたわけだが……」
少し、町の中心部に目を向けるとそこに広がるのは何とも言い難い光景。
俺の心は、この都市に来てから揺らぎを止めることがなさそうだ。
「こういうの、よくわからないのですけれどもシルバさんは興奮する人なのです？」
「なんていうか、男のロマンが詰まっている気がするんだよな」
剥き出しになった基幹部。
そこには、色とりどりの歯車が複雑にそれぞれを、それぞれの別の歯車が干渉しあい、影響しあっていた。
機械的なものを見てしまうと、どうしてもこころ踊ってしまうのは俺の悪いところか。
いや、でもあんな感じの魔剣も一度作ってみたいものだな。
「あんな感じの魔剣は、魔剣じゃないのですよ？」
「ほう」
「完全な魔導学を駆使しつつ創るのであれば、それは【魔武具】ではなく技術の結晶。【技武具（ぎぶぐ）】という扱いになるのですよ」

ほう、ここにも別の武具の名称が。
今まで、俺が知っているものは魔法で作り上げる【魔武具】と、神の力で創りだす【神武具】だけだった。

全部でどのくらいの種類があるのかと彼女に問いてもよかったんだが、そのくらい自分で調べるのもいいかと思ってやめる。

「とりあえず、宿を最初にさがそうか」
「そうですね。……ええと、こちらの名物はなにがあるのでしょう？」

少なくとも、械刃族に温泉は必要なさそうだな。

俺はエスペランサが座席の上にちゃんと座ったのを確認し、中心部に向かうことにした。
ここまで工場が立ち上っているのだから、大気汚染は免れないだろうと覚悟をしていたんだが、どうもそのような様子は見受けられない。

「色とりどりの煙は、魔導的なもので心配はないと思います」
「その話を聞いていたら、【魔導】って何でもできる気がしてきたよ」

おそらく、それが本当なんだろうけれども。
技術さえあれば、なんにでもなれる万能物質がこの世界にあったとしても、何の不思議もないのが本当に怖いところではあるが。

「それにしても、これは安全運転でいいな」
「もう少しシルバさんが【デルエクス】の仕組みを理解したら、改造しそうではありますけれども」

そう言っているところ申し訳ないが、俺が自分で改造するくらいなら、もっと確実な方法を選ぶ、はず。

と、ここまで来たところで道を【デルエクス】ではない他の【ナニカ】が走っているのを見つけた。

【デルエクス】が１００台あれば、その馬のような何かは2～3頭ほどしかいないのだが。

「ああ、あれは……。【械騎馬（テクノホース）】、ですよ」

「なんだそれ」

「何もそのままなんですが……」

説明に戸惑うエスペランサ。

しかし、うーんとうなっている彼女を見ていて可哀そうになり、彼女に考えるのをやめさせた。

「……説明、難しいんですもん」

そういって、ちょっと拗ねるように頬を膨らませるエスペランサ。

……うん可愛い。

## １８３　魔導都市ギージック（後書き）

可愛い。

## 184　レウス・テック

「さて、最初にどこへ行きましょうか」
「特に決めてない」

エスペランサと、スズナリに到着したときとまったく同じ反応をしつつ町の中を歩く。
スズナリのこう、なんというかカオス具合のする場所ではなく、完全に科学的な場所である。

工業系というか、なんというか。
とにかく、ロマンをかなり詰め込んだような、町だ。

「さきほどから、シルバさんの目のきらきらが止まらないのですが」
「ほんとう、いいところだけどなぁ」

できれば、ここに拠点を構えたい。
そう直感的に思ってしまう程度には、心をくすぐられるものになっている。

「なかなか」

何よりそも、なんというか。
歯車が、本当によさげで恐れ入る。

「まずは、技武具を見に行きますか？」
「そうだな」
「ええと、【技武具】は技術のみ。それさえあれば可能性関係なく出来上がるものです」

簡単な説明を終え、エスペランサははふぅと息をつくとちょっとだけよそ見をして、指をさした。

「たとえば、あの場所とかどうでしょうか？」

指差した先には、技武具屋だろうか。

看板すら歯車で、少しずつ動いているところをみると、技術力が高いのがうかがえる。

やっぱり、実力社会なのか。とか思ったり。

そう思ってしまえば、俺はエスペランサからもらった能力で魔武具を作っているわけで。

申し訳ないな。本当に。

「失礼しますー」

カラン、と小気味のいい鈴の音。

エスペランサがドアを開けると、そんなおとともに、店内の奥から「いらっしゃいませー」と爽やかな声が聞こえた。

「いらっしゃいませ。【レウス・テック】へようこそ」

エプロンを見にまとった青年が出てきて、ニコリと笑った。

械刃族（サミュリ）の部分は……おそらく両手だろう。

先ほどまで作業をしていたのか、変形途中でここまで来たという印象を受ける。

「……なかなか、珍しい組み合わせのお客様ですね」

それは、俺の種族である龍眼族（レザール）と、謎法族（カラミタ）であるエスペランサを見てのことだろうか。

なんというか、ラン・ロキアスといい勝負の顔だが、思った以上に悪い印象は受けない。

って考えれば、最初のほうもラン・ロキアスは好青年だったわけなのだが。

まさか、あんなことになるとは。

「ここにあるのは……」

「はい。すべて僕の作品ですよ」

ということは、簡単に察すればこの人がここの店主か。

見た目は俺と同じくらいの歳だろう。おそらく実際もそこまで変わっていないはずだ。

械刃族（サミュリ）の精神年齢と肉体年齢の齟齬がどのくらいあるのか分からないが。

と、彼は今思い出したと声をあげ、手をポンと叩く。

「申し遅れました。……レウス・ゼグゼスです」

ほぉ。

ていうか、そもそも「レウス」の部分は名前なんだな。

苗字かと思っていたんだが。

「この店に、お客さんがいらっしゃるなんてそもそも珍しいことですからね」

「そうなのか」

「こんな若造の作った作品なんて、買う人はいないでしょう？」

と、ここで初めて俺は彼の作った技武具を見た。
……ちょっと圧倒された。
いったいどんな仕組みになっているのかは分からないし、俺には現時点では知る由もないのだが。
「凄いオーラを放ってるんだな。……店主の作品って」
俺が呟くと、彼は一気に神妙な顔をして悟ったようにこちらを見た。
「特別な、眼を持ってらっしゃるんですね」
「龍眼族だから、な」
答えると、彼はもう一度悟ったようにこちらを向くと、そういえばと話を続ける。
「貴方のほうからも、オーラを感じますが？　特に、同業者の匂いが」
……わかってる、っていうことか。
俺は観念したように首を振って、取りあえず何を彼に見せようかと思って……。
考えるのをやめた。
「これが一番の新作だね」

# １８５　旅の途中（前書き）

前半：ゼロ視点
後半：？？？

# 185　旅の途中

闇を切り裂くようにして馬をはしらせ、俺はついに機械樹の森を抜けた。
途中で魔獣が襲ってくることは多々あったし、食料も思った以上に足りなかったが俺は械刃族（サミュリ）、四肢の動きを制限すれば問題はなかったし、特に他の問題があるわけではない。

「エグゼ、大丈夫か」
「……」

いたわるように馬に声をかけると、意思表示するように彼は体を二回、発光させる。
一回で肯定、二回で否定。

そう領主であるルークエルリダスさまがしつけてあるため、少し体力的な問題があるということだろう。
俺は馬から降りて、エグゼを見上げる。
そして残っていた食料に彼に注ぎこむと、そばにあった宿屋をみやった。

「そろそろ、俺たちの故郷だぞ」
「……！」

決して口には出さないが、もし彼が話すことを可能とするならば喜んでいるのだろう。
しかしその喜びもつかの間、後ろでかすかなうなり声がした。
エグゼはそれに反応したようだが、残念ながら戦えるだけの余力は残っていないだろう。

「エグゼ、ここで待っていろ」
「……！！」

強い発光を3回。たしか警戒の合図だったか。
今すぐにでも本能的に逃げ出したいだろう彼を待機させ、森の中を睨み付ける。

２つの巨大な眼光。どうも、機械樹の森を駆け抜けたときに森の主を怒らせてしまったらしい。
たしか、ここの森の主は……殺したらオウラン帝国では死罪か。

俺は自分の身体を変形させ、一見すると騎士の鎧のような形となる。
魔導変形部分はここ、つまり頭を含めて心臓以外すべてだ。

ここまで俺が自分を強化できたのは、領主のおかげである。
そして、俺はレイカー家に仕えたときから、すべてをあの家に捧げている。

俺の身体は、レイカー家のみんなを守る盾。
そして、レイカー家に仇なす者共に攻撃される鉾（ほこ）となる。

「森の主……【古然狼（エンシェント・ヴォルフ】か」

体長４メーティアはありそうだな。
……まあ、殺さない程度に調理した方がよさそうだ。

「死んでないか？　大丈夫か？」

「くるるぅ」

森の主として3千年はここにいるというのに、実際のところまだ子供らしいというのだから驚きである。

あまり傷つけたくはなかったため、取りあえず懐かせることに成功した。

彼？　彼女？　の金属毛を許可をとって数本抜き取り、ポケットの中に仕舞う。

そして丸まった森の主に「戻って」と声をかけ、「くぅ」と寂しそうな声をあげながらも見えなくなったところでエグゼのところに戻った。

「とりあえず、シルバ・エクアトゥールに渡す手見上げはできたぞ」

「……」

柔らかく、1回発光。

ちょうどいいものができたという意味だろうか、簡単に抜き取ることができたが、普段はこうも行かないだろうな。

それにしても、龍眼族（レザール）と謎法族（カラミタ）のペア、か。

俺は目の前の先、地平線沿いに広がっている巨大な都市を見て、そっとつぶやく。

俺と、エグゼの故郷だ。

昔はいい思い出なんて一つもなかった。

が、ここで俺が領主様に見初められて迎えられたように。

今回は、俺が二人を迎えるのか。

「……とにかく、あと少しだ」

ゆっくりでいい、すこしずつでいいから。
魔導都市に向かって、歩みを進めよう。

「はっはっはっ」

雪の森を走りぬく。
ここを抜ければカエシウス聖王国の王都、アリアだ。
そして、もう少しすればレイカー領にたどり着く。

「もう少し……」
「そうだな、もう少しだ。……今ならシルバとエスペランサはオウラン帝国にいるし、大丈夫だろう」

カレルにそう言われ、俺は今一度気を引き締めた。　この世界が実力主義というのなら、俺はそれを実行して見せる。

レイカー家の当主になる、なんていう夢はないが。　少なくとも、二人の姉妹は頂こう。

「俺は勝てるさ」

何に、とは言わないけれども。

問題はなさそうだな、特に。

# 186　高速便

「はふぅ」

一息ついて、エスペランサはこちらを向いてきた。
もう夕方だし、急ぐこともないためすでに旅館でゆったりしている。

技武具を作っていた少年、レウス・ゼグゼスとそこから数時間語り明かして、結局終わったころはほんの数分前だったというのだから、同業者同士で話をするのはかなり危険なことが分かるだろうか。

「シルバさん、お話しすぎです」
「結局、系統が違うだけで材料とかっていうのは最初な次男だなって思ったからさ」
「確かに、私の知りえないこともたくさん知りましたけど」

けど、それでもとエスペランサはなんだか腑に落ちない様子である。

どうも、彼女の呟いていることを察するに俺に渡した仮本に不備があっただとかなんだとかいろいろ後悔しているらしい。
俺としては、正直頑張ってくれただけでもすごく感謝しているんだが。

なんでそういうネガティブ的なことを考えてしまうんだろうか。

「大丈夫。今日はとりあえず休もうか」
「あした、どこに行かれるんです？」

「スズナリと一緒かな。……商事に向かってから、お土産を買いに行こう。逆でも全然いいけど」

そうですね、なら今回は逆でお願いしますとエスペランサは微笑む。

すごく、それは愛らしくて。

エスペランサは、そばにあった安楽椅子のようなものに腰掛けると、もう一度「ふぅ」とため息をついた。

よく見れば、それは安楽椅子ではなくマッサージチェアである。

魔導都市ギージックか、思った以上にハイテクだぞぉ、ここ。

「シルバさんもどうですか、とても気持ちがいいですよここ」

「……ん、俺はいいよ」

ここで一つ作る予定だったんだがなぁ。

……どんな魔剣を創るか、全くイメージが湧いてこないんだが、どうしようか。

「はふぅ」

集中しようとしているところに、そんな声が流れてきたら集中も吹き飛ぶというものだ。

……どうにか、ならないかな。

「ちょっと夜風に当たってくる」

「了解いたしました」

部屋を一回出た方がよさそうだ。

あんな無防備なエスペランサの姿を見てしまったら、なんだか最近変な本能が宿ってくるんだよな。

というわけで、いったんギージックの街並みを一人で見歩きながら夜風に当たることにした。

ここは、なんというか種族が入り乱れているせいか、俺が歩いてもあからさまに反応したりしない。

絶対数的にはすくなくても、ちらほら龍眼族をみかけるからだろうか。

それだけではなく、知勉族（エリシュ）や異能族（サイコル）などといった、ここで見るのは珍しいかもしれないといった種族もみる。

種族のサラダボウルとでも称すればいいんだろうか、とにかくそんな感じになっているのだ。

何気なく空を見上げると、そこには驚くほど綺麗な夜空が広がっている。

電灯も明るく地面を照らしているというのに、それを無視しているかのごとく強く光を放っている。

紺色の夜は、光によって眩く彩られていた。

「そろそろ、戻るか」

夜空をテーマに一本作ってみよう、と思いついた俺はおおきく欠伸をしてきた道を戻ることにした。

その前に、まだ閉じていない【レウステック】に立ち寄るか。

と、ここまで考えたところで何か忘れているような気がして俺は首をかしげた。

何か、……連絡を怠っているような気がするんだが気のせいだろうか。

「……あ、アンセルに連絡するのを忘れ……た？」

同時に、俺のほうへ飛んできた便箋を見て、俺は思わずうぅとうなってしまった。

飛んできたのは魔法製の高速便だからだ。

高級品であるためめったに使われないが、それは発動とともに空を飛んで「直接」送った人へと届けられる。

勿論、さすがに人目にはついたようで、じろじろとみられた。

高級品を使ってまでということもあってか、畏れるような顔でこちらを見る人はいたし。

俺のそばにいた人は【レイカー家】の家紋が刺しゅうされているのを見て声をあげかけたのか口を押えた人も居た。

「ルークさんからか」

そんなことを考えながら、手紙を開いて中を一目見て。

俺は、そのまま直接エスペランサのところへ走り出した。

まったく、旅行中をわざと狙ったようにしか感じられないんだが!?

# 187　可能性

「ラン・ロキアスがレイカー城へ突撃したんですか」

急いで宿の中に入って、エスペランサに伝えると彼女は頭のおかしいくらい簡単に理解してくれた。

俺もかなり焦っていたから、そこまでわかりやすい説明ではなかったと思うのだが、それでもわかってくれるのはさすが俺とずっと一緒にいてくれているからだろうか。

「完全に、今回私たちがこうやって旅行に行くことを見越してやってみたような気がしますね」

「まあ、取りあえずは明日に迎えが来るらしいから、戦いの準備だけしていろと言われたんだがな」

まあ、クレアシモニー学園でのあの件があってから、一回だけで俺と彼の決闘が終わらないだろうなとは思っていたが。

まさか、こんなことになるとは思っていなかっただけあって俺も落ち着きを取り戻していないようである。

そもそも、今ラン・ロキアスという存在は俺に勝っているのだろうか。

そこからよくわからないため、正直そこまで実感がないのだが。

俺たちが帰ってきた6月から……すでに何か月たっているんだろうか。

結構な月日は経っているはずなのだが、そこまでといった感じもする。

少なくとも、アンセルが目覚めてからは楽しい日々が続いていた。

だからこそ、ラン・ロキアスの事をおろそかにしていた感じはあるのだが。

自然な流れでも、しかし結果としては彼からアンセルを奪った形になっているのだから仕方ない。

だけれども、結婚の許可をもらうためだけにレイカー家に殴り込みをかけるのは、いったいどういう神経をしているのだろう？

「シルバさんは、あの時からどのくらい強くなりましたか？」

「とりあえず、エスペランサから言われた……【龍眼魔法】は、毎日訓練を重ねているよ」

【龍眼魔法】とは、その名の通り龍眼族（レザール）にしか使えないとされている魔法のことである。

別名が【古代魔法】だということでも分かると思うが、今俺たちが使っている魔法という概念の元となったものである。

「どうですか？　使いこなせるようになってきましたか？」

「……魔力をどうやって調整するのか分からなくてさ、本当に難しいな」

俺に語りかける彼女の顔は、実に心配げなものになっていて。

ちゃんと心配されている、気にかけられているというわずかな優越感を感じながらも、その裏に微妙なひっかかりを感じていた。

「でもそうだな。最近は思ったよりも……一気に使いやすさが増した気がする」

「あの。それは、でも」

ここでエスペランサは言いよどむ。
その理由はわかっていたが、まあそういうことなんだろうなと。
ほんの数日前……というよりは、数十時間前に彼女とキスをしてからだ。
そこで、俺と彼女の体液を少々交えたことが原因となっている、らしい。
人間態であれ、神と交わったら少々のことであっても影響はでるということか。

「単刀直入に言えば、少しだけだと思いますが神と同化しはじめている、または神に近づいている可能性は確かにあると思うのです」
「……うん、それで？」

俺の返答に対して、エスペランサは何かを言いかけようとしたようだが、すぐにそれも諦めたようである。
その代り、こちらが心配になるほどの悲しい笑顔を見せて見せてきた。

「……シルバさんは、そういう方なので。それでいいと思いますよ」

それでこそ、【希望神の英雄】ですねとすでに懐かしい単語（ワード）が聞こえ、俺ははっとなって額に手を当てる。
もう、バンダナをつけるのも習慣になってきていた。
彼女に選んでもらった二つを、今日も片方つけて生活している。

「最終的に、俺は何をすればいいんだ？」
「なんでもいいのですよ。……ただ、その神託がでたことは、この世に私がいるということのまた一つの証明となりえますので」

証明っていわれても、っていう感じはするのだが。
残念なことに、そこまで考えたことはないため俺は首をかしげるしかなかった。

いったい、何を俺はやっていけばいいんだろう？
まあ、エスペランサが道案内はしてくれるし、俺は提示された選択のなかから、一番いいと思われることをちゃんと選択するだけだ。

今のところ、俺はエスペランサがそばにいてくれたらいいが。
……アンセリツティアとリンセルスフィアが結局どうなのか分からないが、最終的に俺側か、ラン・ロキアス側かどちらにつくのかちゃんと質問はするつもりだし。

「とりあえず、明日までエスペランサはお休み」
「……シルバさんは、どうするのですか？」
「俺も寝るけど」

そういって、俺は椅子に腰かけたまま就寝についたのだった。

# 188　飛翔

「シルバ・エクアトゥール、初めまして」

次の日、取りあえずチェックアウトを済ませた俺たちの前に現れたのは、レイカー家の護衛の一人だった。

確か、名前はゼロ＝オール。

械刃族（サミュリ）の男で、体を鎧姿から順に変形させつつこちらに向かってくる姿は、特撮映画を思わせる圧巻振りであった。

「初めまして、ではないかな。この前顔だけ合わせた気がするが」

「そうだな」

彼と握手を交わして、取りあえず今の状況確認に入る。

ランがいなくなったのは昨日の事で、どうもカレル・アテラット先生が同伴しているらしい。

「さて、ここからどうやって行くかだが……龍（ドラゴン）は乗りこなせるか？」

「は？」

いきなり、とんでもない言葉を聞いて俺は思考を停止させた。

エスペランサはあわあわしているあたり、結構有名なことなのか。

しかし、俺が反応する前に相手は「わかっている」と首を振った。

「それなら、馬はどうかな？」

「それなら大丈夫だ」

馬なら、前世の時に何回か乗ったことがある。

ここのと仕様が同じならば、問題ないだろう。
ただ、問題なのは龍眼族（レザール）が馬に触れて恐れないかどうかだ。
「心配事は問題ない、乗ってもらうのは【機械馬（テクノホース）】だ」
そもそも、その名前を初めて聞くんだがいったいなんだろう。
と、考えたときに彼が乗っているそれに気が付いた。
……なるほどね。
「でも、それは械刃族（サミュリ）にしか乗りこなせないはずです」
エスペランサの反論に、ふっと笑ったのはゼロ＝オールだった。
「乗れないとは言わせない。……乗れなかったら、どうするつもりだ？」
「【龍化（ドラゴフォーゼ）】して飛んでいく。そっちのほうが早い」
ということで、俺は自分の身体をゆっくりと変化させた。
ゆっくりといってもたった数分での出来事であり、周りにいた部外者はぎょっとした顔をして俺から離れたが。
俺は、どうも成長しているようだ。
前回にはなかった翼も2対は生えている。
「おいで、エスペランサ」
「はい」
彼女をお姫様だっこする要領で抱き上げて、俺はゼロ＝オールに

方向を聞く。

「じゃ、一足早く行ってくる」

「……さすがだな」

城でまた会う約束をして、俺は一気に飛翔する。

綺麗な魔導都市だったが、残念ながらここにいれなかったか。

「あ、ちょっと待ってくれ」

「あ？」

彼に呼び止められて、ちょっと降りたのは既に魔導都市を出てからだった。

速度も申し分ない、そんなかでも、彼の話が聞こえたのは魔法とは、何か違う力が見えた気がした。

「これを渡しておく」

「これは？」

「材料だ」

俺に渡すものといえば、恐らく魔武具創造に関連するものなのだろう。

ありがたくいただいておくとして、さぁ。

「……今から、直線で行くぞエスペランサ」

「わかりました。……体力が尽きたら、言ってくださいね」

「出来れば、体力が危なくなったときに言う」

体力が尽きたら、何も言えないんだが……なぁ。

「あれが、レイカー城」

俺の目の前には、何とも言い難い純白の城がそびえたっている。
そして、その周りを囲むような城下町。

「俺がリンセル、アンセルと結婚すればここは俺のものか」
「そういうこと、だな」

カレルがうなずき、こちらを見つめた。
その顔が、いったい何を示しているのか分からない。
だけれども、悪いことではないと信じたいのだ。

「ああ、これを渡しておこう」
「これは？」

彼から、１本の鞘付剣を渡される。
抜くと、剣は金色に輝き綺麗に瞬いた。

「魔剣【夕暮れ時の太陽（トワイライト・サン）】だ。……持っていけ」

## 188　飛翔（後書き）

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ６８９５ｃｍ／

パラレルワールドでのシルバとエスペランサの短編をあげさせていただきました。

読んでいただければ幸いです。

# 189　跡取り

「そらを飛ぶっていうのは、どうもなかなかロマンあふれるいいことだと思いました」

エスペランサは、俺を見てそう呟き笑顔をこぼす。

あれから約12時間ほどが経過しただろうか、時間は少々どころではなくたっていき、気が付けば一年のほとんどが冬なレイカー領は夜になっていた。

夜のレイカー領というものは、やはり美しかった。

夜景もさることながら、その上には領主の城が立っている。

しかし、どうも……。

「城の入り口付近があわただしい気がするな」

「そうですね」

寒さとか、大丈夫ですかとエスペランサ。

そして、息をするように俺に付与魔法を数種類かけて、俺の決断を待った。

「そうだな、このままもう一っとびしますか」

彼女にそう告げ、下ろしかけた彼女をもう一回抱きかかえて【龍化（ドラゴフォーゼ）】する。

こっちの姿に代わるのも、だいぶ慣れてきた感じがするな。

どちらも俺の身体であることに変わりはないのだが、どうしても

しかし、今の身体のほうが龍眼族（レザール）らしくて好きだ。

何より、姿かたちがかっこいいのだから。

「そういえば、謎法族（カラミタ）には龍眼族（レザール）みたいな感じのものがあるのか？」

「ありますよ。ただ、それは魔法を使いすぎるとなるだけで、普段はなりません」

まあ、私はなれますけど。

エスペランサは茶目っ気たっぷりにウインクをして見せたが、それを俺が視認する前にレイカー城周辺までついてしまった。

どうも、誰かが護衛隊を次々と薙ぎ払って直進を続けている、ということはわかった。

で、その人は間違いなくラン・ロキアスということもわかったのだが。

分かったのはいいんだが、これはどうすればいいんだろうか？

ラン・ロキアスを止めればいいのか戸惑っていると、高速便が飛んできた。

「ん、エスペランサ開けて」

「はぁい。……ええと、【このままでいい】だそうです。シルバさんの出番はこのあとみたいですね」

このあと、つまりはそういうことか。

俺は事態を察知し、手紙にあった裏口から侵入することにした。

「いやぁ、こっちに突進してくることには驚いたが。シルバ君はどうやってここまできたんだ？」

裏口から、城内にはいるとそこにはレイカー家夫妻が待機していた。

領主のルークエルリダスさんは、何やら装飾の施された懐中時計を手にして、落ち着いているのか落ち着いていないのか微妙な反応を見せてくる。

「飛んできました」

「ほう、【龍化（ドラゴフォーゼ）】ということか」

よくわかっている。

さすが、【眼】を持っている人は違うということだろうか。

「ところで、その懐中時計は？」

「これも魔武具だ。……それと同時に、レイカー家の跡取りが持つべきものでもある」

彼の話によると、これを持っていればどこに行ったとしてもある程度の身分の保証はされるらしい。

「今回の、シルバ君とラン・ロキアスの戦いで、勝者にこれを渡そうと思っている」

ぐっとそれを握りしめ、ルークエルリダスさんは俺のほうをまっすぐ見つめた。

その目は、とんでもなく真面目に見え、変なことが言えなくなっ

ている。

「私は、シルバ君にできるならレイカー家を継いでほしい」

「……」

その瞳は、本気だった。

そのためにか、彼は俺に一本の剣を手渡した。

「【闇夜の月（ミッドナイト・ムーン）】。これがこの剣の名前だ」

渡され、それを抜くと黒い剣身が見えた。

黒、というか深い紫だ。

それこそ、月に照らされた闇夜を思わせる。

「これ、魔剣じゃないんですね」

「それは神剣だからね。……必要ないかもしれないが、取りあえず持っておいてくれ」

「感謝します」

……これが、そうなのか。

うん、了解。

神剣、か。

持ってみれば、それがどれだけの能力を持つのかなんとなくわかる。

剣だけで、何とかなる程度には強いのかもしれない。

剣のポテンシャルが良すぎるのだろう。

「ご期待に沿えるよう、努力します」

「頼んだぞ。……シルバ・エクアトゥール」

## １９０　第一陣（前書き）

前半ラン視点。

今日は夜頃にもう一回更新します

# 190　第一陣

「ここからは、俺と一緒じゃなくて一人で城までいくんだ、わかったかい？」

カレルは、自分は案内だけだと俺に伝えたうえで、指をパチンと鳴らした。

光が充満し、それがなくなったころには彼の姿はない。

そして、彼がいなくなったとともにこちらへ奮然と向かってくるのは、レイカー城でやとわれている一般の護衛隊だろう。

「そういう、ことか」

どうも、俺の情報は相手に知られわたっているらしい。

おそらく、カレルはそういう役目だったんだろうなと察して、もう一度俺は。

彼から手渡された、魔剣【夕暮れ時の太陽（トワイライト・サン）】の意味を考えた。

闘の声をあげてこちらへ突進してくる護衛隊の姿が見える。

俺は迷わず魔剣を抜き、その純白の剣をもう一度見て、軽く笑って見せた。

「行くぞ」

呟くと、その魔剣は一瞬だけだが瞬いたような気がした。

太陽のように白い県は、閃き相手の目を焼き尽くしながら敵を切り裂く。

……切り裂いたはずなんだが、どうも致命傷にはなっていないようだ。

普通、魔剣に切られたら大けがどころではないのだが、痛がっているだけなのを考えるに、そこまでといった感じだろうか。

もしかしたら、クレアシモニー学園に駆けられているものと同じような【不殺の魔法陣】とやらが発動しているのかもしれない。

この近辺で人は死なない。そういうことだろうか。

俺は歪んだ笑顔を見せかけ、それを抑え込みながらつぶやく。

「なら、遠慮はいらないな」

【夕暮れ時の太陽（トワイライト・サン）】の目つぶし効果は確かに有効だ。

使用者である俺には影響を及ぼさないのに、こちらに向かってくる全員に強い光を浴びせかけているのが分かる。

俺は無駄な戦いをせず、レイカー城に突っ切るのがおくてきのため、そのまま直進することにした。

「邪魔」

ゆがんだ笑いが、自分の中からこぼれ出てきた気がする。

自分の周りではなく、広範囲に目くらましを発動させ、周りにいた敵すべてが一瞬ひるんだのを見て一気に接近、その後魔法を詠唱する。

「【氷】属性上級遠距離攻撃魔法、【氷河球（ブリーズ）】！」

あられのように降り注ぐ巨大な氷の球たちは、面で敵を制圧する

には十分すぎる威力と破壊力を持ち合わせていた。
簡単に言えば。本当に簡単に言ってしまえば足止め程度にしかならないのだが、押し寄せてきた護衛隊を飛び越える時間の稼ぎくらいには使えたのだ。

護衛隊が魔法障壁を発動させながら、一部は俺に向かって走りかかってくる。
しかし、俺の魔力は濃度が濃すぎて、いい意味でも悪い意味でもおかしい。
濃度が強すぎて、上等な魔力のため相手が魔力を節約しているようでは俺の【魔法】には到底かなわないだろう。

案の定、魔法障壁を軽々と突き抜けて護衛隊に降り注ぐそれらは、ものに当たったと同時に接触したものを凍らせていた。
ここは北国。氷や寒さへの耐性はついているのだろうが、それすらを無視しているのだから脅威だろう。
だからこそ、俺はこう軽々と突破できているわけなのだが。

「さて、もう少しで門だ」

レイカー家に突入できる唯一の門が見えた。
幸い門の前には何もなく、【来るもの拒まず】といいたげな状態になっており少々おかしく思えてしまう。

なら、遠慮なく進入させていただこう。
俺が門を開けると、そこにいたのはレイカー家当主のルークエルリダスではなく、一人の械刃族（サミュリ）がいた。

「護衛隊を突破したみたいですね」

レイカー家の二階。窓から外の様子を覗きながら、俺とルークエルリダスさんは待っていた。

挑戦者であるラン・ロキアスが、やってくるのを。

「この後……。ああ、間に合ったみたいだ」

空を舞うように、翼の生えた【機械馬（テクノホース）】に乗った男がやってくるのを見て俺は思わず息をのむ。

その美しさもさることながら、男は……きっと歴戦の戦いを潜り抜けてきたのだろうな、というような威厳があったのだ。

「あれは？」

「ゼロだ。……あっていなかったのか」

あれが、ゼロ＝オールなのか？

俺が出会った時とはまったくちがう、実にサイバーパンクなイメージがしたのだが、こんな感じではなかったはずだ。

「彼の魔導部分は全身。ほぼ全身を機械鎧の姿に帰ることができる」

ほう……。なかなか、ロマンのある装備だな。

完全に機械の、バイザーを付けたような顔になっているため表情を読み取ることはかなわなかったが。

彼の身体からは、紫色のオーラが噴き出しているような気がした。
いや、確かに噴き出していた。

「本気、ですか」
「そうだな、……彼は、一番信用できる護衛だ。その誇りも、背負っているだろうな」

そう冷静に呟きつつも、ルークエルリダスさんは落ち着きなく、その懐中時計を握りしめていた。

# １９１　第二陣（前書き）

ちょっと前に、３０万文字超えてましたね。
そしてあと少しで２００話、なのです！

# 191　第二陣

ゼロ＝オールとラン・ロキアスの戦いが始まった。
ゼロは、体の一部を全身の鎧からさらに変形させて本体から切り離し、一本の巨大な斧槍（ハルバード）を生成。
それを構える。

ロキアスは、真っ白な剣を持っていた。
特に装飾はなされていなかったが、魔剣を作っている俺の目からはすぐにわかる。

あれは、【魔剣】だ。

「あれは」
「どうしましたか？」

となりで、落ち着きのない声を漏らしたのは当主本人であった。
何が恐ろしいのか、そのまま剣を、見つめている。

「あれを手に入れているということは、カレルは完全に彼を認めたのだな」

あきらめたような、ため息。
ルークエルリダスさんは、俺に先ほど渡した【闇夜の月（ミッドナイト・ムーン）】と兄弟剣である「それ」の話を始めた。

どうも、有名な剣であることは間違いないらしい。

「魔剣を作っているシルバ君には申し訳ないが、あっちのほうが上

等だ」

兄弟剣が、神剣であることからそのような予感はしていたが、どうも俺の思い通りだったらしい。

俺はふぅと息を吐き、自分の実力不足を反省していると、右手をとる感触があった。

「大丈夫です」

エスペランサだ。

彼女は、俺の手を握ると柔らかい笑みをこぼす。

そして「彼とあなたは違います」と諭すように言葉を紡いだ。

「あの人は、新しく手に入れた魔剣すべての力を扱いきれておりません」

「それは、どういう？」

俺には、彼女の言っている意味がわからない。

希望は自分の胸から消えることはなかったが、不安もまた、自分の胸から消えることはない。

「シルバさんには龍眼魔法がありますし、その【龍眼（レガリアス・アイ）】もありますからね」

あの人になくて、自分にしかないものはいくらでもあるではないか、と俺を安心させようとするエスペランサ。

「たしかに」

確かに、俺は転生した身だが。

神々に見初められて、手に入れた能力ならいくらでもあるではないか。

武器鍛冶神のヘーハイスからは【魔武具創造】をもらった。
それは今も魔剣づくりのために役立っている。

龍神アグルスからは、龍眼族（レザール）としての身体をもらった。
その特典としてついてきた【龍化（ドラゴフォーゼ）】と【龍眼（レガリアス・アイ）】、【龍眼魔法】は、使いこなせてはいないものの自分の自信につながった。

運命神スロッ＝トールからはこの境遇をもらった。
神にしてはスロットマシンという【運】に頼ったものだったが、ちゃんと今の状態を引き当てられた。

そして、希望神ホープからは。
俺にしか持っていない【引斥制御（グラビシオン・コントロール）】をくれ、『エスペランサ』として俺の支えになっている。

「そうだな」

ここまでかんがえたところで、俺は何も自分に問題がないことを悟った。
心配することなど何もなかったのだ。
彼には持っていないものを、俺はいっぱい持っているのだ、と。

「それにしても、この状況はキツい、かもしれない」

ついに、ルークエルリダスさんは焦り出した。
その状態を見ながら俺が下のほうを向くと、そこには確かに魔剣に押されているゼロ＝オールの姿がある。

あいまいにしか分からないが、どうも純粋に力だけで押されているらしい。
あの魔剣の基本能力は、見れば分かる通り瞬きによる目つぶしだろう。
しかし、械刃族（サミュリ）にそれが通用するとは思えなかった。
……もしかして、彼（ロキアス）は俺たちの知りうることのない、固有能力を持っているのではないかとどうしても感じてしまうのだ。
俺にも、あるのだから、彼にあってもおかしくないだろう。
「いえ、発動するような特殊能力を、ラン・ロキアスは持っていませんよ」
「でも、それならなぜ」
一時的に筋力を倍増させる、というような能力を行使しているのではないのか。
しかし、もしエスペランサの言っていることが事実だというのなら、俺はとんでもない勘違いをしているのかもしれない。
「もしかして、あれが醒眼族（ウェイカー）のそもそもの能力、なのか？」
「いいえ、彼は……」
エスペランサは、圧殺する勢いでゼロ＝オールを抑えているロキアスに焦点をむけると、息をのんで後ずさる。
「彼は、三種以上の混種族なのです。……論理上、あり得ないのですが」
「三種以上？　でも、親の親も混種族だったばあいは稀だがあり得

るんだろう？　……あ」

ここまで考えたところで、俺は勘づいてしまった。

気づいてしまった、といえばいいだろうか。

彼は、俺と同じ転生者なのである。

親も、その親も。特に普通の人間である可能性が高いのだ。

「それが、彼の特殊能力というわけですか。現時点ですくなくとも、腕獣族（ケレイジ）・醒眼族（ウェイカー）・知勉族（エリシュ）の種族は混同されているようですね」

龍眼族（レザール）には及ばないが、物理原理に迫るほどの身体能力を持つ【腕獣族（ケレイジ）】。

魔法は不得手だが、それを凌駕する隠れたポテンシャルを持つ【醒眼族（ウェイカー）】。

逆に魔法以外は不得手、代わりに謎法族（カラミタ）の次点で魔法的才能が高い【知勉族（エリシュ）】。

なるほど、飽きれるほどバランスの取れた混種族構成である。

少しは見習いたい、といいたいところだが見習うところが何もない。

「それにしても、なぜゼロは降参しないんだ？」

ルークエルリダスさんの心配しているところは、別にあったようだ。

確かに、遠目からみても分かるほどゼロ＝オールの身体は火花を散らせて半身以上が故障しているだろう。

魔導機械部分がほとんどな彼は、少しくらいなら平気なもののそ

れ以上は本当に危険なはず。

「ちょっと、止めてきます」

俺はガタガタと、自分の身を案じるのではなく彼の身を案じるように震えだしたルークエルリダスさんをあとに、窓から飛び出した。

# 192　修復

「もうそろそろ、いいだろう？」
「……シルバ・エクアトゥール」

執拗に攻撃をやめようとしないラン・ロキアスの後ろに回り込んだ俺は、取りあえず彼の服を掴んで後ろに引き回す。
手が完全に後ろへ向かったところで、俺は腕を話すとロキアスは数回跳ねてしかし、見事に着地して見せた。

「なんでここにいるんだ。……せっかく、君がいないころを見計らってきたというのに」
「残念でした」

嘲るように彼をおちょくるも、ロキアスの目に光はあまり宿っていなかった。
ただ、執念というかなんというか。

とにかく、なんだかよくわからないもので動いている感じすらした。

「ゼロ＝オール。大丈夫か？」
「……発声部分と、重要な器官は壊れていない」

逆に言えば、それ以外は壊れており使えない、もしくは動かないという意味の裏返しではないのか。
そう考えたあと、彼に「少し待ってくれ」と声をかけると振り向き、ロキアスのほうを向く。

怒りがふつふつと湧き上がってくる感触がする。
どうしても、それだけは。
それが彼の選択だとしても、理不尽な方法で執着し、あろうことかレイカー家にまで突撃してきた男を、俺は許せなかった。

「とりあえず、ロキアスは中にはいってくれ」

ルークエルリダスさんに伝えられた言葉を吐き捨てるように呟くと、俺はゼロ＝オールを担ぎ上げた。
かなり思いが、龍眼族（レザール）の膂力（りょりょく）からしてそこまで問題ではない。

エスペランサが心配そうな顔でこちらにやってきていたが、彼女に「大丈夫」と断りを入れて城の中に入っていった。

「械刃族（サミュリ）が魔導部分を治すのは、どうすればいいんだ？」

ここでは「直す」ではなく「治す」である。
それは、確か先天的に魔導サイボーグであるため、身体の一部とみなされるらしい。
そのため、ここでは修理するという意味ではなく、怪我を治す感じになるという。

「普通なら専用の技術師を呼ばなければいけないんだが、ルークエルリダス様に拾われた時に改修されて、自動修復されるようになっている」

そのまま自室にたのむ、と言われ俺は彼を引きずる。
2階に上がる際、ちらりとルークエルリダスさんの姿が目にはいったが……。

そこには、鬼神のような恐ろしいオーラを纏った男が、ランをゴミのように見つめていた。
実力社会だとしても、やはりそれはそれということだろうか。

「シルバ？」
「……ついたぞ」

2階の片隅に、彼の部屋はあった。
ドアを開けると、簡素ながらも優遇されているだろう痕跡くらいは見受けられる。
シーツはきちんとたたまれているが、これは彼自身がたたんだものだろうか、それともここの使用人がたたんだものだろうか。

とりあえず、俺は彼をベッドに乗せると部屋を見回してみた。
うむ、本当に何もない。

「斧槍（ハルバード）、忘れた」
「それは自動追尾であとで送られてくるから大丈夫だ」

大丈夫、らしい。
なら、このままやって俺はルークエルリダスさんの言葉を聞かなければ。

彼に別れを告げ、部屋から1階に繋がる階段へ。

そこで。ルークエルリダスさんの妻であるスピラルさんにもであった。

「こんばんは」

「こんばんはー。……明日、勝ってね」

その顔は悲しそうにゆがませており、一見すると俺が何かしたようで勘違いされそうではある。

が、人をここまで心配しているというのも珍しいし、それがこの、レイカー家の特徴ともいえるだろう。

だからこそ、その願いは聞き届けるべきなんだろうな、と悟って頷く。

「はい」

答えると、スピラルさんは少しだけ笑顔になって「大丈夫よ」と労ってくれた。

負ける要素がない、とか言ってしまえば彼女を安心させられたのかもしれないが、そんなことは決して言えない。

相手も魔剣を持っているから。

その魔剣がどんな効能をもつのか俺には分からないが、できれば攻撃系統のみの能力しか有していない魔剣であってほしいと切に願う。

「エスペランサ」

「はい？」

1階に降り、未だじりじりと火花を散らしているラン・ロキアスとルークエルリダスさんを横目に、「彼女」に話しかける。

「夜に、一本魔剣を創るぞ」

# 193　夕食

その日の夜は、実にピリピリとした雰囲気の漂うものだった。
突撃してきたといっても、ラン・ロキアスは客人扱いとなるらしい。

しかし、俺はそんな彼と一緒に食事をする気にはなれないため、夕食を辞退した。

「……そうか。……晩飯はあとで持ってこさせる」
「あと、工房を貸していただけませんか？」
「材料は好きな分だけ使ってもいいぞ」

ルークエルリダスさんは、かなりいやそうな顔でしかし頷く。
その頷きは、俺の工房使用許可というよりはもう一人の転生者との食事だろう。

目だけを動かし、下のほうを現すようにするとはぁとため息をつき、肩を落とした。

「今日は早く寝るといい。すべては明日にかかっている」

決して無理をするなよ、とルークエルリダスさんは言うと、背筋を伸ばして顔を引き締めた。

「あの」
「ん？」
「カレル・アテラット先生は、どちら側の人なんですか？」
「今のところは、分からない」

不安げな顔。どうも、兄弟剣の譲渡と案内だけしかしていなかったらしい。
その真意はよくわからないが、カレル先生はカレル先生でいろいろと考えがあるのだろうと、俺は考えてからそれをやめた。

「私は、一緒に夕ご飯をいただいてもよろしいでしょうか？」
「エスペランサさん。どうぞ」

エスペランサは少しでもルークエルリダスさんの精神面を和らげようと、食事に向かう。
あとですぐ戻ります、と俺にそっと言って彼女は案内に従い下に降りて行った。

さて、こちらも工房に向かって魔剣鍛冶の準備をしますか。
ゼロ＝オールにもらった材料もあるし。

スズナリにいたとき、買ったものもあるから大丈夫だろうな。
取りあえず、工房に向かいながらどんな魔剣を作るかゆっくり考えよう。

「……う、さぶ」

外に出てみれば、夏だというのにやはり一年中雪国だからか、とても寒かった。
夜、である。

空を見上げればそこは星空だし、涼しいどころか少々寒い風は絶え間なく吹いている。
でも……ここは綺麗だった。

ここに来たのは2回目か。
1回目は、試練の旅だった。
2回目は、今回で。

今回は、戦いにこちらに来ている。

「3回目は……」

3回目は、のんびりこっちに来たいものだ。
こちらに来れる資格があるから、だが。

もちろん、ここに来るためには……。

「明日、勝たないとな」

その言葉を、ちゃんと実行させないと。

「うー」

大広間は、それは雰囲気がひどくなっておりました。
ラン・ロキアスも、ルークエルリダスさんも何も言わず黙々と食事をなさっているのです。

スピラルさんも、そこまでといった感じでしょうか。
その雰囲気には不安を感じているようですが、残念ながら押しつぶされそうにはなっていないようです。

それにしても、このラン・ロキアス。
いったい、どうやってシルバさんに勝とうというのでしょうか。
今のところ、そんな片鱗は全くないのです。

……3種類以上の混種族と、あとは……へぇ。
超高純度の魔力、ですか。
中々のものだとは思います。さすが、護衛隊と護衛長を突破しただけあります。

あとは、帯刀している魔剣でしょうか。
ルークエルリダス様にお聞きしたのは、魔剣【夕暮れ時の太陽（トワイライト・サン）】とのことでした。
上級の魔剣だとは分かりますが、シルバさんに勝てるかどうかは別、なのですよね。

「……美味しい」

シルバさんは、魔剣鍛冶師なのです。
簡単に、負けるわけにはいかないのですから。

今回、きっとシルバさんは。
切り札となる、魔剣を作ってくれます！

「……ふっ」
「君は……エスペランサさんだったかな？」

おっと、笑いが思わず漏れてしまいました。
相手にも気づかれたようです。

「はい」
「シルバ・エクアトゥールのお付きか」
「……はたして、そうでしょうかね」

立場的にはそうなのかもしれませんが、しかし。
私は希望神です。

本当は逆に、あちらがお付きかもしれません、よ？

## １９４　障壁（前書き）

１章が思った以上にながくなったため、途中で区切りました。

# １９４　障壁

レイカー城内にある工房で、俺は腕組みをしながら材料を見つめていた。
ゼロ＝オールからもらった機械狼の家と、買った羽根。
そして、ルークエルリダスさんから許可をもらった、高級材料の数々を見て、さてどうしようかと頭を悩ませた。

「あまり、考えたくはなかったんだが」

今回、作るのはなんといっても、【防御特化】を売りにしたい。
売りにというか、そもそもそうやってラン・ロキアスを完全に拘束したいのだ。

相手に何もさせず、試合を終わらせる。
とてもじゃないがヒーローっぽくないやり方だ、と自分を自虐的に見つめながら、俺は剣の主材料となる金属を選ぶ。

相手の魔法を現象として「なかったことにする」には。どうすればいいんだろう？
エスペランサによれば、「超高濃度」の魔力が彼の特徴だというが。

それに、俺の魔剣が勝てるのかといわれたら五分五分だろうな。

「【排除合金（ヴァニクシマイト）】」

排除合金とはよく言ったものだ。純粋な【闇】属性で構成されているそれは、接触した魔法関係の物質を消すことが可能だ。

これに、そうだな……。
味方を取り囲むように、バリアを張ってくれるような能力を付属させれば完璧なんだが。

「……麒麟（キリン）の毛……」

工房の材料庫、引き出しを数個開けて取りあえず俺はそれを見つけた。
麒麟の効果ってなんだっけか。そんなに覚えていないため写本を取り出し、検索にかける。

「……雷、か」

そういえば、この世界の属性に【雷】属性という種別は存在しない。
これは、……もしかしたら、相手の意表をつけるのかもしれないな。

「雷と、炎と……闇と」

バリアはどうやって張ればいいんだ。
……いや、違うな。

魔力を【魔導】としてパネルのように展開できれば、いいのか。

俺は、魔剣鍛冶用作業台に、【排除合金（ヴァニクシマイト）】を設置する。
畜魔器のチューブもつないで、準備完了。

あ、忘れていたものがあった。

金属と並べるようにして、防御に強い【玄武岩（ゲンブ）】、雷をつかさどる【麒麟（きりん）の毛】、【火】属性を豪炎へ強化させる【鳳凰（ほうおう）の羽根】を設置し、スイッチオン。

いつも通りというか、もう何回も見慣れた色とりどりの魔力は、霧となって形を作っていくのを操作しながら、金属と他の触媒たちが融合していくのを見つめていた。

「仕上げは……」

俺は、別口で作成していた【魔石】を【魔剣】に接着するように置く。

魔石の色は緑色。大地の色であり、風の色でもあった。

「よし、完成」

出来上がった魔剣を取り出し、手で確認しながら俺は一仕事終えたおっさんのようにため息をはいた。

魔剣鍛冶というのは、やはり神経をすり減らしてつくるものだ。

確実に成功する俺でもこれだけ疲弊するんだから、普通の鍛冶師たちっていうのはもっとダメージにも近い何かを受けているに違いない。

「あ、シルバさん」

椅子に腰かけて肩で息をしていると、エスペランサが工房にはいってきた。

そして、俺の姿と魔剣をみて目を輝かせる。

こちらにとてとてと歩いてくると、そのきらきらさせた目のまま口を開いた。

「完成したのですね、明日の切り札が」

「そうだな。……ちょっと、ちゃんと機能するか調整をして今日は早く寝よう」

出来上がった長剣を、エスペランサに手渡しながら俺は手を洗い、外に出る。

「ルークエルリダスさんの調子はどうだった？」

「相当参ってたみたいでしたので、ラン・ロキアスに割り振られた部屋への案内は私がいたしました」

お疲れ、と彼女をねぎらい、俺はとりあえずはぁと息を吐く。

中庭に出たところで、剣を地面に差し込み【発動】と唱える。

すると、機械の作動するような音ともにバリアフィールドっぽい何かが作動、俺の周りを取り囲んだ。

「エスペランサ、ちょっと殴ってみて」

「はい」

次の瞬間、魔法最強の謎法族（カラミタ）のパンチが、轟音を立ててすっ飛んできた。

# １９５　葛藤（前書き）

ウスギリ視点

## １９５　葛藤

「……シルバ君が、実家に到着したって」

俺たちのいる寮の中は、妙に静まり返っていて。
思った以上に、葬式ムードへ変わっていっていた。

いるのは、レイカー家姉妹とリンナアイデルさん。
全員が全員、リビングのソファに座り込んでうつむいている。

「正直……。二人は、どちらに勝ってほしいんだ？」
「私はシルバ君ですかね」

俺の質問に、即答したのはアンセリツティアさんだった。
レイカー家双子の姉のほう、優秀な異能族（サイコル）である彼女は、その銀髪を電灯で煌めかせながらしかし妹を厳しい目で見つめていた。

「私。は」

言いよどむというか、言葉に詰まるというか。
言葉が出ないまま、地面を見つめ続けるリンセルスフィアに、しかし誰も助け船は出さなかった。

今のところ、リンセルさんは気持ちが揺れ動いている状態だと考えられる。
元々はランの事が好きで付き合っていたが、今の彼の状態だと何もならないしな。

というか、そもそも【相手側の実家に突撃する】というランの思

考回路は、どこか一部配線をまちがえたんじゃないかという憶測だってできる。
だからこそ、彼女がどうするかで結構状況も変わってくるとは思うのだが。

「私は……私は、それでもラン君を、信じたい」

数分後、リンセルさんの口から漏れ出た言葉は、俺たちの予想に反したものだった。
こんな状況でも、彼女は彼を信じるというのだろうか。

アンセルさんは、自分の妹の言った言葉が信じられないといったように、彼女を凝視していた。
その状態を維持しながら、しかしリンセルは次こそ顔を上げる。

「いくら酷い扱いを受けようと、ラン君は私の彼氏だから」

愛情の裏返しとして、今までの所業をみているということなのだろうか。
まあ、俺はこの件に対して部外者である。
俺が何を言ったって仕方ないと思うが、ランの友人としてその彼女に一言言ってやりたい。

「今のランは、やめておいた方がいい」
「ですよね、ウスギリさんも同じですよね」

もちろん、俺はランもシルバも贔屓目で見ているなんていうことはなくて。
しかし、今のランの状態というのはあまりにも酷いものだった。

だからこそ、忠告しなければならない。

「俺がなんていおうが、アンセルさんが何を言おうが聞かない人は訊かないだろうから強制力はないが」

自分の味方がだれ一人いない状態、いったいリンセルさんは何を考えているのだろう？

「今のランは、【レイカー家次期当主】という座をただ見つめているようにしか見えない」

シルバがどんな状況なのか、正直あまり学園に来ない彼は分からないけれども。

少なくとも、彼の周りにいる女性はみんな、笑顔で実にしあわせそうな顔をしていた。

ランの周りはどうだ。……彼とずっといたリンナアイデルさんだって、今は目がうつろではないか。

「とりあえず、今は結果を待ちましょう。……明日の正午に決戦が始まると聞いていますし」

今日は早く休んだ方がいいでしょう、とアンセルさんは一言言い残して欠伸を口で抑えた。

「リンさん、リンセルを頼んでもよろしいですか？」

「ええ」

頷くリンナアイデルさん。そのままリンセルさんをねぎらうように背中をさすっていたが、途中で思い出したように俺のほうを向い

た。

「そういえば、クリーゼちゃんは？」

「夏は実家に帰ったそうだ」

クリーゼ・シックザールは確か、レイカー家の親戚だったか。

同じ異能族（サイコル）である彼女は、今どんな気持ちで実家にいるんだろうな。

少なくとも、情報は言っているんだし。

「そういえば、明日の決戦に勝ったら、最終的に何があるんだったか」

「……ええと」

やっと口を開いてくれたリンセルさんは、指折り数えながら教えてくれた。

「少なくとも、私とお姉ちゃんとの婚約。レイカー家次期当主の座。……あと、【称号異名】」

称号異名っていうのは、政府とか国家から正式に渡される異名のことだ。

自分で名乗ることも可能だが、勿論公認があったほうがいろんな場所での発言力は段違いになるだろうし。

「でも確か、シルバはもう一つ持ってるんだっけ？」

「希望神ホープ様の神殿から、【希望神の英雄】があると思う。……まあ、この情報はお父様から聞いたものだろうけれど。ええと、レイカー家が与える【称号異名】は……」

その名前くらいは知っている。
【見つめる者】。

『ゲイザー』、だったかな。

# 196　孤独（前書き）

後半ラン視点

# 196　孤独

エスペランサの繰り出してきた剛腕は、俺の魔剣が発動した魔法障壁にぶつかると、ガラスの砕け散るような音ともに魔法部分が肉体と分離された。

感心するやら驚くやら、妙な表情をしたエスペランサは、最終的に「すごいですね」と、魔剣をきらきらした目で見つめることに終結する。

確かに、手ごたえはある。

「エスペランサ、さっきのはどのくらいの威力で殴りつけたものなんだ？」

「そうですね、知勉族（エリシュ）ならあばら骨全部破損、魔法効果によって斜め上に向かって打ち出されて……」

と、ちょっと怖い説明をし始めるエスペランサに、俺は慌てて言葉の中断を支持、一言で言ってもらうことにする。

「簡単に？　……ええと、私が測量したなかではラン・ロキアスくらいの高濃度で攻撃はしました」

くらい、ということはラン・ロキアスはこれよりももう少し強いか弱いかということだろう。

……少し強くするか、うん。

「工房に戻るぞー」

「はい。わかりました」

ちなみに、エスペランサが本気でぶっ放すと、ここの城は壊滅するらしい。
よくわからないけど、普通に考えて謎法族（カラミタ）ヤバい。

「……今回は、エスペランサが命名しなよ」
「はい。では、【聖域創造（サンクチュアリ・クリエイター）】、と」

ほう、【聖域創造（サンクチュアリ・クリエイター）】、か。
即答で言われるのなら、最初からそう進言してくれればよかったのだが。

まあ、この名前は大切にしよう。
俺はニコニコ顔で目を輝かせているエスペランサの頭に手を伸ばし、引き寄せてなでてやる。

「もう少しだけ調整したら、今日はもう寝ようか」
「そうですね、よろしくお願いいたします！」

「はぁ……」

俺……ラン・ロキアスは、エスペランサさんに案内された部屋の、ベッドに倒れこんでため息をつく。

あの、エスペランサっていう人、かなり強い。

なんというか、強者の余裕が現れている。

それが、態度や、言葉として表に露出しているのだ。

エクアトゥールのお付きだと思っていたのだが、残念ながら俺の考えは間違っていたのかもしれない。

「魔剣の手入れって。どうすればいいんだ」

俺は、カレルからもらった【夕暮れ時の太陽（トワイライト・サン）】をみつめ、その汚れも何もない剣を見つめる。

魔剣というものを見たのははじめてではないが、それを手に入れたのは初めてだ。

光明の如き輝き、魔剣というのはこうまでも美しいものだったのか。

確かに、世界中の人たちが魔剣を追い求める理由が分かったような気がする。

だからこそだろうか、普通に考えても少しだけ。

シルバ・エクアトゥールがうらやましくなった。

「とりあえず、明日の戦いには勝つ」

魔力頼みだが、俺の魔力は特別だ。

だからこそ、あの人に勝てると思っているし、実際に勝って見せる。

そして、【準王族】となって権力を手に入れる。

権力と影響力を手に入れられたら、あとはこの世界を旅したいな。
やりたいことはたくさんあるけれど、まあ。

今のところやったって、捕らぬ狸の皮算用でしかない。
有言実行とするためにも、もう少しだけ頑張ってみなければ。

「……おやすみ」

誰に、でもなく。
とりあえず、それだけを呟いて俺は目を閉じる。

転生前、俺は孤独だった。
友人はいなかったし、本当の家族……実の母親は交通事故で亡くなっている。
父親はそれが原因で自暴自棄になりながらも、俺が食事できるように仕事はしていた。

そこから……俺は鉄骨事故、か。
今頃、父親はどうしているんだろうな。

……レイカー家の今回が終わったら、見捨てられているかもしれないがちゃんとリンにお礼を言わなきゃ。
勝とうが負けようが、リンはこの世界に入って初めて、俺に接してくれた人なのだから。

何もわからない俺を、1年間も世話してくれたのだから。

## 197　小話　言い表し様のない不安

「私たちって、シルバ君に見捨てられたのかな」

小さく縮こまってアイラは私に、悲しそうな顔でそうつぶやいた。

結局、シルバは私たちに魔剣を使っただけで終わってしまった。

海に入ったものの、その時も彼はこちらにはあまり関してくれなかったから。

不安になる、私たちの何がいけなかったのだろうか。

「……権力、なのかなぁやっぱり」

「レイカー家は……確かにそうなのかも、しれないな」

しかし、こう考えてしまっては。

彼のそばでいつもにこにこしている、エスペランサ・ホープレイの存在が解せないのだ。

あの娘は、いったいなぜ彼のそばにいるんだろう？

いたって普通の……ではないか。シルバは夜、エスペランサと一緒に宿泊するといってきかなかったのだから。

「でも、恋人のような感じはしないんだが」

「……どちらかといえば、兄妹みたい」

種族はまるっきりどころか、訳の分からないほど違うがあり得るのだろうか。

龍眼族（レザール）の謎法族（カラミタ）なんて、前例がないのではなかろうか？

「でも、同い年だと聞いているぞ」
「同い年でも、謎法族（カラミタ）と龍眼族（レザール）の年齢の数え方が違うのかもしれないでしょう？」

……こうやって考えてみると、私たちは謎法族（カラミタ）のことを全く分かっていなかった。
自分の無知がこんな、おかしなところで影響してくるとは思わないだろう。

「もうすこし、シルバ君と一緒にいたかったなぁ」

アイラがぼやく。
その言葉の最後のほうは、涙声にもなりかけていた。

私は、そんな彼女の肩を抱き寄せてただ、呆然と座っていた。
こう考えてしまってはどうだと思うが、しかし龍眼族の少年と旅をしたことすら、夢に思えてしまう。

あれは、私たち共通の夢物語ではないのか。
私たちが、それを体験していたと記憶に刷り込んだだけではないのか。

不安になってきた。いったいどうすればいいのだろうか？

「……不安になっても仕方ないよね」

今気づいたが、彼女が抱えているのは彼が作った魔剣だ。
最近、ずっと肩身離さず持っているな。

「今のところ、私とシルバ君をつなぎとめているただ一つのもの、

だから」

つなぎとめる、もなにも。

私たちと彼は、それだけではただの顧客と職人なだけであるのに。

## 198　小話　エスペランサ

彼女は、美しかった。どこが、といわれると返答に困ってしまうが、そういってしまう程度には。

たとえば、その瞳。瞳は琥珀色で、煌めていている。まるで、宝石のように。

たとえば、その髪の毛。長くたらした白銀の髪の毛は、今も太陽の光を反射し幻想的な美しさを思わせている。

顔は人形のように整っており、容姿だけで神から祝福されたことが分かるだろう。

それだからこそ、彼女は守らなければならないとこちらに知らせるように、彼女は脆弱で病弱であった。

「ねえ」

彼女が、口を開く。

その途端、甘美なその音声は私の鼓膜を震わせて聴覚に訴えかけ、そのまま鼓膜もろとも蕩けさせてしまいそうな不思議な魅力を持っていた。

そのため、誰も彼女に反抗するような男はいなかったのだ。

「ん？」

ただ、私を除いては。

「おなかがすいたの、何か食べに行きましょう？」

彼女の依頼を聞き、私は頷いて腰を上げる。
周りのクラスメイトからは一気に視線が集まり、特に一部の男性陣からは憎悪とも殺意とも取れる表情が伺い知れた。

「シルバ。早くいきましょう？」
「了解」

彼女からの柔らかい声。振り向けば、立ちくらみからか身体を危なっかしく揺らしながらも、こちらに手を伸ばす彼女がいた。
表情は全く持って柔らかい聖女そのもので、または天使とも例えられるだろう。
取りあえず倒れそうになった彼女を支え、導くように手を引いて誘導する。その間、誰も彼女に手を差し伸べようとはしていなかったし、結局何も私にすることはなかった。

「偽善、偽善。そればっかりです」

彼女は、不満げな顔をして私の差し出した紅茶を一口一口確実に呑み込んだ。
ここは学園から少々離れた喫茶店だ。昼休み中は本当に自由となっている学園では、こうやって外食をする生徒も少なくない。
場所は学園のある通りを右折したあと、すぐのビルの二階。昼だからか、太陽がまっすぐ私たちへと降り注いでいる、そんな春の真っただ中。

「先ほど、私がわざと揺れていたのは気づいていましたよね」

「うん」
「なのに、結局シルバしか助けてくれませんでした。だから嫌いなのです」
無駄な憧憬は必要ないと、そう言い切ったうえで少女は頬を少しだけ膨らませた。
「それなのに、シルバには牙をむいて。私に気づかれないと思ったのでしょうか」
おそらく、そう思っているのだろう。
彼らの前で、彼女が見せる顔といえば柔らかい笑顔で固定されている。聖女のように微笑むだけで、彼らは満足している。
だからこそ、こんな表情は私だけが見られるものなのだとはっきりと自覚することができるのだ。
普段は精巧な洋人形であっても、自分の前ではきちんとした一人の【人間】として生活をしている。
それを感じられるだけで、私は幸せだった。
「ところで」
「ん？」
「……次の授業、休んでどこかに行きませんか？」
彼女は、私に命令をしない。他の男たちにはしているのに、私に対しては常に提案である。
「それって、でも」
しかし、それはさすがにどうかと思うのだが。
小悪魔のような魅力的で、官能的で。何よりもこちらに甘く語り

掛ける少女は、まっすぐ私のほうを見つめると右耳に唇を張り付けて、ついばむように呟いた。

「退屈なの。……ね」

荷物は後で取りにこればいいでしょう？　と少女は念を押すようにしていつもの聖女へと顔を戻した。

残念だ、私が言うとおりにしないと不愛想な人形にもどるということか。

全くわがままな女だが、それもある意味で残念なことに、私に対してだけである。

私が再び注いだ紅茶を飲む少女。その姿は、やはり異常性のある美しさを放っているのだった。

「確か、学園から南下すると海があると聞きました」

「あるけど、遠いぞ」

「構いません」

喫茶店から出て、少女は道路の先を見透かすように目を細めてつま先を伸ばしたり元に戻したり。

そのたびに、ボリュームのある髪の毛は揺れてふわふわと空気中を漂った。

「これ、デート？」

「はい。なんだと思っていたんですか？」

何気なく彼女に問いかけると、彼女は恥ずかしげもなくそう答えて私のほうを向く。
その姿はとてもしおらしく、顔は少々赤らめている。
そうか、これは逢引きだったのか。
それだけがわかると、思った以上にきもちが軽くなって、視野が広がった。
視野が広がれば、彼女の細かいことにも気づくというものだ。
ネイルや靴下を校則の範囲以内におめかししたり、髪飾りは昔私が贈ったものだったり。
すべてが完成されていても、やはり規則への反抗心というものは芽生えているということだろうか。

「今日は特別な日なので」

そう彼女は告げたが、いまいちよくわからない。
私を呼び出さなくても、彼女にはお付きの執事が何人もいるはずなのだ。
彼女という存在を守護するためだけに、とある国は軍隊を派遣するだろう。
そんな存在を、私はそばに置いていいのだろうか。否いいはずがない。
彼女が、一度でも嫌がれば私は「最初から生きていなかった」ことになるだろう。
それほどの、存在。
それこそ世界の命運がかかっているような、人物なのだ。

「自由になれればいいのですけどね」
「自由？」
「そうです。自由ですよ」

なんのしがらみも制限もなく、自分の生きたいままに生き、逝きたいままに逝く。
そんな人生を彼女は望んでいたようだが、それはまことに残念ながら望んでもかなうとは限らない。

「でも、貴方も私もそうにはならない、でしょう？」
「そうだな」

私も彼女も、自由にはれない。
常に何かに縛られている。
むしろ、私が彼女に縛られ、彼女は私に縛られている。
共依存。片方がいなくなれば、もう片方も居なくなる。最終的に世界も滅び、人類はこの世から姿を消す。

「最初のほうは、荷が重すぎると思っていたのですが。……あなたがいて、それも変わったような気がしますね」
「そうか。……それはよかった」

荷を背負わされるこちらの身にもなってほしい。
最初はそう感じていたが、月日がたちそれが年月へと変わっていくうちに情も移るというものだ。
憧憬は思慕に変わり、恋慕に代わる。
彼女に抱いていた憧れの感情は、いつの間にか共依存としての関係になっている。

「希望、か。よく言えたものだ」

彼女の名前の意味を呟き、私はそれを胸に抱え込むようにこぶしを握った。
エスペランサ、スペイン語で希望を意味する言葉である、

私は隣を歩いている少女を見やって、その銀色の髪の毛を無意識に手で梳いた。

彼女は不思議そうな顔でこちらを見つめたが、それに私が答えることはなかった。

## １９８　小話　エスペランサ（後書き）

この前短編として出したものを持ってきました。
読んでいない方もいらっしゃるかな、って感じです

# 199　決戦直前

朝起きると、エスペランサは俺の胴体に抱き着いていて。
そのない胸を押し付けられていた。

「エスペランサ、おはよう」
「……ふにゅ」

起きようとしないのはいかがなものか、こういう大切な時期に。
俺はため息をつき、彼女の捕縛から離れると背伸びをして一気に伸びをする。

魔剣の不備を確認し、全部で5本を並べる。
そしえそれを、亜空間に送り込んで準備完了だ。

正しくは魔武具の一つで、魔力で圧縮した空間を使うものだが、説明が面倒なため【亜空間】と名付けさせてもらった。
空間ですら、魔法で作れば【魔武具】というのは、今回初めて知ったことだ。

「ふにゅ……、おはようございます」

と、彼女は起きたようだ。
目を擦りながら現在の状況を把握すると、「はぅ」と声を出して、そっと俺のほうを見て。

「あわわ、今日確かそうでしたね」
「あと4時間しかないぞー、最終調整に入るからおいで」
「はいっ」

とまあ、こんな感じでエスペランサが着替える。
それを横目で見ながら、普通なら興奮するはずなのに俺は魔剣をずっと見つめていた。

ラン・ロキアスに勝てる見込みが十分にあったとしても、それは俺が勝てるという確信にはならないのだ。
だからこそ、もう少し努力して、完全な勝利を目指さなければ。

「着替え、終わりました」
「おう」
「ええと、何か戦いの前に制限はございますか？」
「何もないけど、どうしたの？」

エスペランサが、少々言いずらそうな顔でこちらを見つめる。
そして、そのまま何を思いついたのか、こちらの手を握ると詠唱を始めた。

「ーーーーはい」
「ん？」

何を言ったのか、俺には分からなかったが。
しかし、彼女が顔を上げたころ俺の身体には確かな変化があった。

「……これは？」
「貴方は私にとっての英雄ですから、その加護を与えたまでです」

そう、【希望神の英雄】の証である額の紋章が、光り輝いているのだ。

「なら、これはもういらないな」
「そうですね」

力も、心の奥底から湧いて出てくるような気がする。
体力だけではなく、魔力もだ。
感覚的に、心情もポジティブに代わっていた。

「……なんだ、これ？」
「私は人々の【希望】をつかさどる神ですよ？」

そういって、少女はにこりと微笑む。
俺は初めて、彼女の意味を分かった気がした。

正午1時間前、俺とラン・ロキアスは呼び出された。
案内されたのは暗く、少し不気味さすら持っていた決闘場。

観客席には、スピラルさんとエスペランサ、そしてクレインクインと……もう一人の少女が座っている。

「正午だというのに、ここは暗いな」

神殿の中、だとは推測できるが、それにしても少々暗すぎないだろうか。

そう思った矢先、エスペランサが指をパチンと鳴らして明かりがつく。

さすが、というところか。

ランとクインがぎょっとしたような顔をしていたが、しかし他の人々は眉ひとつ動かさなかった。

天井には、大きく絵画が描かれていた。

これは、何回か見たことがあるからわかる。

……毎代の【希望神の英雄】の壁画だ。

「エクアトゥール。その額はなんだ」

やっとランも気づいたようで、こちらを見て呟くように言葉を発する。

そして、天井に同じものを見つけて、顔が引き攣った。

「何も、考えていることで間違っていないと思うが？」

「両者、準備を」

ルークエルリダスさんの合図が入る。

この状態でいろいろといわれるのはさすがに不利か、それを彼が察してくれたのだろう。

「【龍化（ドラコ・フォーゼ）】」

唱えると、体が確実に変容したな、という感覚がした。

体の中から何かが生えてくる、明確な違和感が身体を駆け巡り、巨大な尻尾が生える。

背中には刺がいくつも生み出され、それは下半身すべてに影響した。

これでこそ、龍人だろう。

龍神アグルスが、ちょうどこんな感じだったはずだ。

俺は加えて、魔剣をすべて空中に展開した。

うむ。負ける気は全くしない。

俺の心の中は、希望で満ち溢れている。

# ２００　転生者ＶＳ転生者１（前書き）

祝２００話

# ２００　転生者ＶＳ転生者１

「はじめ」

荘厳な、声が響く。

しかし、最初に動くまで数分の時間を要した。

こちらの【龍化（ドラコ・フォーゼ）】に、制限時間というもののははない。

それは、龍眼族（レザール）本来の姿が今変化している方の姿だからである。

しかし、普通に他の種族と体を似せるためには、やっぱり人間に近い【人化（ニュート・フォーゼ）】態のほうが都合がいいのだ。

動かずにずっといても、時間が過ぎていくだけである。

じりじりと、自分自身を焼き尽くすような緊張感のなか、俺はラン・ロキアスという存在をじっと見つめていた。

相手が動いたら、こちらも動く。

とりあえずは相手の出方を見てみないと、やはりいけないと思うのだ。

「……」

緊張は、バーナーの炎から業火へと変わりつつあった。

しかし、この場合動いた方が負けるだろう。

動かないと勝つも負けるも、ないような気がするが。

「……チッ」

小さな、下を打つ声が聞こえた。

発したのはラン・ロキアスだ。

いらいらしながら、青筋を立ててピクピクと手を動かす。

白い魔剣を抜いたその姿は、さながら魔王に対抗する勇者だが、その実態は神のみぞ知る。

すくなくとも、俺には天使の皮をかぶり切れていない悪魔に見える。

次の瞬間、動いたのは俺ではなくやはり、ロキアスだった。

魔力で体中が強化されているのか、走れば決闘場の空気が変わる。

魔力が威圧の意味を十分に発揮していることは、一目でわかる。

灰色の魔力が、彼の周りでオーラとなって発散されていた。

灰色、は彼の心の汚れではなく、彼が複数の属性を扱えるからだろう。

この世界、基本的に一人は1属性しか扱えないと聞いていたし、俺も魔剣の力と【引斥制御（グラビシオン・コントロール）】を使わない限り1属性は固定されている。

しかし、俺の場合は魔剣と【龍眼魔法】。あっちは転生者の能力として他種族混種族と、別種属性・混属性が使えるようになっているのだ。

だからこそ、もう少し何とかしないと差別化が図れないだろう。

「力を借りる」

俺は、突進してくる少年から離れるように後退しながら、空中に漂っている魔剣が1本を尻尾で掴んで地面につきたてる。

魔剣の名前は、エスペランサにつけてもらったそれだ。

「起動、【聖域創造（サンクチュアリ・クリエイター）】」

瞬間、俺を取り囲むようにドーム型のバリアが展開される。

実際はハニカムのように、パネルがくみあわさっているだけなのだが、それを彼が知る由もない。

「！？」

突然目の前に現れた障壁へ、彼は息を飲みながら右こぶしに魔力を凝縮しはじめた。

障壁に超濃度の魔力をぶつけてそのままぶち破る気でいるのだろうが、そうはさせない。

俺は【引斥制御（グラビシオン・コントロール）】を発動、魔力を重力の操作にさいて、聖域に近づくほど下への強力な力が働くようにする。

【引斥制御（グラビシオン・コントロール）】の力は、魔力を使用するが魔法とは違うものらしく、もちろん聖域内にいる俺すらとんでもない重圧がかかってきた。

俺が龍眼族ではなかったら、恐らく背骨が折れるだろう。

車が肩に乗せられたような重圧を受けながら、俺は動きが止まりつつあるロキアスに、【引斥制御（グラビシオン・コントロール）】を限定させた。

範囲魔術は、やはり自分にも効果を及ぼすようだ。

これからは、少し考えた方がいいかもしれない。

「……ぐぐぐ」

ロキアスが、歯ぎしりしながら重圧に耐える声が聞こえた。
思ったよりもタフだ。膝はついているとはいえ、並の人なら完全に地面へ伏せているほどなのに。

……それも、訓練の成果。
そう言ってしまえば、すべて簡単に片付くか。

「ぐぐぐ、……がっ！」

苦しそうな声。
しかし、彼はどうも。

魔力で完全に打ち消すことはできなくとも、緩和することができるというのが分かったらしい。
外に発散する魔力と、自分の力を増大させる魔力をうまくコントロールし、ついに障壁へたどり着いた。

「このくらいの壁、……打ち破って、やる！」

魔剣、【夕暮れ時の太陽（トワイライト・サン）】が閃き。

次の瞬間、魔剣によって生成された魔法障壁は、ガラスを割られたように四方八方へはじけた。

# ２０１　転生者ＶＳ転生者２

本来聖域内、俺の元々いた場所に突っ込んできたラン・ロキアスは、目の前に広がる光景を目の当たりにして、愕然としただろう。

それもそのはず、そこには聖域どころかそれを創りだしていた魔剣すら見つからず、しかし重圧はさらに強くなっている。

そして、俺はその真上にいた。

「……！」

俺は正義のヒーローでも何でもない。

ただ、自分のしたいことをし続けるだけだ。

エスペランサも、レイカー家の双子姉妹も。

必要に迫られるなら、クレインクインだって、守ってみせる。

その意識表示として、俺はこの勝負に勝つ。

実質第１歩だ。レイカー家の次代当主としての座も手に入れられるなら、おまけ程度に考えても問題ないだろう。

レイカー家の跡継ぎになったら、特にリンセルさんとアンセルを守るのは義務だろうからな。

俺は、ラン・ロキアスを突き飛ばすように手を向けると浮遊していた５本の剣は、風切り音だけをならしながら彼めがけて降り注ぐ。

魔剣一つ一つが、上級の魔法使い１人分だと考えれば、この行動の危険度が分かるはずだ。

本気でいく。

これはそういう戦いだからこそ、俺もそうする。
魔剣【聖域創造（サンクチュアリ・クリエイター）】は、先ほど破られたわけではない。
彼のパンチ一つで、破られるはずもないのだから。

もちろん、自分から解除したに過ぎない。

「起動！」

ラン・ロキアスが気づいたのか、上を向いた瞬間に俺は呟いた。
すでに遅い。

魔剣効果が発動し、彼を聖域内に閉じ込めることに成功した。

「あー、もう出られない」

焦ったように、自分の魔剣を振りかざしてもそれは破れない。
先ほども、魔剣が聖域の魔法障壁に振れる前に解除したのだ。
彼は破ったつもりでいるのだろうが、それは解除時の視覚効果でしかない。
障壁はハニカム状になっているのだから、解除するときにそれらが分離するとガラスが割れたようになるのだ。
ただ、それだけである。

「くそ……」
「ちなみに、俺からの攻撃は通る」

俺は特に意図せず、無造作に右手を薙ぐ。
と、他の魔剣が魔法障壁を突き破って彼に襲い掛かるのだから、残念なことにそこは凄惨なことへと変貌する。

実際は、突き破っているのではなく先ほどと同じ理論なのだが。
一部だけ、障壁を取っ払ってそこにピンポイントで他の魔剣を差し込む。
そのくらい、魔剣鍛冶師には造作もないことだ。

……実際、魔剣鍛冶師なんて名乗れるのは俺だけだろうけれども。

「もうあきらめるか？」

俺が今回のために作ったのは、全部で５本。
１本は今起動している、【干渉不可の障壁＝聖域を創りだす】魔剣。
他は、【対象者の血を吸い取る】魔剣と、【血を魔力に変える】魔剣。
この二つで、ロキアスと魔剣の強さを反比例させることができる。

そして、取りあえず俺は戻ってきた魔剣を１本、尻尾で巻き付け持ち、左手で未だに効果を発揮し続けている【聖域創造（サンクチュアリ・クリエイター）】を掴む。

自分で作ったものながら、完成度の高いことこの上ない。
ちなみに、尻尾で持っている魔剣の効果は。

【龍眼魔法を付与させることができる】恐らく世界で唯一の魔剣だ。

「とどめ」

俺は自分だけに聞こえるよう呟くと、尻尾に持っていたほうを右手へ持ち変える。
そして、約３か月ぶりに、唱えた。

「フロガガイレム・ミゼンクレイス・サーガ」

唱えるは、氷結の魔法。

超濃度の魔力を剣に浸透させ、相手を氷漬けにした上で切り裂く龍眼魔法。

それは、中級程度の威力であっても、十二分に効果を発揮する。

# ２０２　転生者ＶＳ転生者３

俺が地面に着陸しているころ、ランは何もしてこなかった。
いや、実際には何もできないのだ。実際何をやっているかといえば、遅い来る冷気に対抗しようとしているのだろう。
しかし、【龍眼魔法】というものは一つ一つが膨大な量と、とんでもない濃度をもつ魔力の塊だ。

それは、彼の持つ魔力なんて花にもかけないほどに良質なものである。
完封勝ち。この言葉はある意味ではとても爽快感のあるものだが、ある意味では実に喪失感を伴う。

俺は右手に持った魔剣で彼の喉（のど）に突きつけながら、彼に話しかける。

「降参したほうがいい」
「……だれが、諦めるもんか」

冷気が吹き飛んだ。
思わず一歩引くと、彼の周りから。
螺旋型の魔力が、渦を巻きながら二重螺旋を描いている。

「【超絶能力開花（アッパー）】」

彼が叫んだワードは、俺の聞いたことがないものだった。
いや、一度何かの文献でちらりと見たことはある。
龍眼族（レザール）の【龍化（ドラコ・フォーゼ）】や【龍眼】のように、醒眼族（ウェイカー）にしかない種族特

性。

「……いいや」

俺はふっと息を吐くと、5本の魔剣を再び手から離し、空中へ浮遊させる。

相手がいくら種族特性を使おうとも、龍眼族の前では無意味なのだ。

……いや、正しくは俺の前では無意味、か。

「……ルークエルリダスさん、神剣の力、借ります」

独り言のように、レイカー家の当主への言葉を呟き、俺はゆらゆらと狂ったように足取りがおぼつかないラン・ロキアスを見つめた。

「……ええと、この神剣の能力は。……なるほどね」

剣を抜けば分かる。魔剣と明らかに違う、その剣の【志】が感じ取れてくる。

魔剣は人が選ぶものだが、神剣は剣が人を選ぶということか。

特に構えなくてもいい。持っているだけで、ラン・ロキアスの動きは『彼』が教えてくれる。

未来予知か、推測か。そのくらいに正確なため、彼が自身の身体を強化したところで俺の戦闘スタイルに変わりはないのだ。

一つ、残念なことといえば。

最後の魔剣が、完全にお役御免になったことだろうか。

まあ、いい。
最後の切り札は、披露しておくだけ披露して本質を明かさないのが適任だろう。
それだけで、相手の抑制になれば万々歳だ。

今は、手札を切る時ではない。
今回の切り札は、この神剣【闇夜の月（ミッドナイト・ムーン）】なのだから。

「起動」

俺が唱えると、突っ込んでくるラン・ロキアスと俺との間に濃い闇の空間ができた。
真夜中、霧の中を歩いているような感覚になっているだろう彼だが、こちらからは分かる。
まるで、あるいみではマジックミラーのようなものだろうか。
こちらに見え、あちらには見えない。

だからこそ、相手がどんなことをしようが関係ないのだ。
龍眼族は、この世界に存在する8種族の中で最強なのだから。

それに、転生者という要素が加わっただけで、ほぼ無敵といってもいいだろう。
……とっても幼稚なたとえ方だ、無敵なんて、小学生くらいしか使わないというのに。

「なぜだ……なぜなんだ！」

彼の目線から外れるように自分の身体を動かすこと数分、彼はいらだちと焦りから呪詛のように言葉を繰り返す。
精神すら、この闇は使い方によって蝕んでいくということだろう

か。

「もう、面倒だ」

俺ははぁと息を吐くと、５本の魔剣をそのままロキアスの身体に突き刺す。

勿論急所は外してあるが、その代り血は吸われ続ける。

「……チェックメイト」

まだ抵抗をやめようとしないロキアスを殴って気絶させ、強引なチェックメイト。

……こんな終わり方でよかったのかは疑問だが、とりあえず、俺の目標は果たされそうだな。

# 203　勝利

……勝負は決した。その事実を目の当たりにして安堵したのか、俺は体からすべての力が抜けてその場に崩れ落ちる。

立つことすら不可能だが、首だけを動かし完全にラン・ロキアスが静止したことを確認する。

そして、ほぼ動かない左手を上にあげた。

「勝った」

声に出せるのは、その3文字だけだった。

魔力の使いすぎか、超濃度の魔力を使ったからか分からないが、体の殆どに感覚がない。

これで勝ったといえるのだろうか、正直普段だったが。

まあ、良しとしよう……。

「起きたか」

目を開けると、そこにあったのは白い天井だった。

何の変哲もない、いや。

不自然に白い、そんな天井と何回か反響したようにも感じる目。

首を横に動かすと、いたのはやさしい顔をしたゼロ＝オールであ

る。

どうも、ここは俺に割り振られていた部屋とは違うらしい。

「ここは？」

「……身内用のゲストルームだ。……いい感じだろう？」

その一言で、俺は自分の境遇が幾分か変わったことを察する。

問題はない、何も、問題はない。

「勝負は、結局どうなった？」

「疑いようもないほど、シルバの勝利だろう。そのおかげで今こんなところにいるんだし」

「ロキアスは？」

俺の質問に、彼は一瞬だけ言葉を詰まらせる。

械刃族（サミュリ）というのは機械でできていた、表情なんてあまり読み取れないはずなのだが、それでも彼はあくまでも「優しい」顔のままだった。

「ロキアスは、クレアシモニー学園に戻った。これからリンセルさまにどうやって説明するのか、それは分からないが」

そうか。

……この勝負に勝ったから、リンセルも俺のほうになるのか。

おそらく、ほぼ強制的な力がはたらいているのだから、どうしようもないのだろうけれども。

「あの時から、何日経ったんだ」

「……いや、１２時間くらいだよ。龍眼族というのは魔力の再生力も色々と化け物級らしい」

さて、と席を立つゼロ。
俺のほうに目を向けると、跪いて一言。
「これから、何でも申し付けくださいませ」
「……やめよう。そういうの」
変にむず痒くて。
変に、前世の事を思い出して、俺は首を振った。
前世のこと、いろいろとあったのは事実だが。
それでも、もう少しだけ。
この世界の事とか、よく知りたいから。
「分かったよ」
少し寂しそうな顔をするゼロだったが、すぐに戻の顔に戻るとドアに手をかけながら、もう一度だけこちらを向いた。
「急がなくてもいいから、動けるようになったら領主様のところに言ってくれ、話があるそうだ」
そういって、静かに部屋から出ていく械刃族（サミュリ）の青年を見送りながら、俺は先ほどの言葉を噛み締めるようにして考えた。
話、か。
何を話されるかは、聞かなくても大抵予想はつくのだが。
「シルバさん」

そんなことを思っていると、次に入ってきたのはエスペランサである。

とてとてとこちらに近づき、体に何か以上はないか確認したうえで、彼女は大きなため息とともに安堵の息ももらしたのだった。

「勝ったんですね」

「そうだな。……転生者との戦いで、一番最初の勝利だ」

「この世界に、転生者は複数どころではない数がいますからね」

……必要となったら、今回みたいに戦っていくということになるかもしれない、ということか。

ま、できるだけこういうことは避けたいものだ。

今回は、ラン・ロキアスが未熟だったから。

というより、俺よりも未熟だったからこそ得られた勝利である。

たとえばレオがそうであるとは限らないし、他の人はもっと強いのかもしれない。

だからこそ、これからも強くなっていかなければ。

「そういえば、魔剣は？」

「全部ここに。……【闇夜の月（ミッドナイト・ムーン）】だけは、ちゃんと渡すってルークエルリダス様が持っていかれましたが」

……ま、そりゃそうだろうな。

もともとは、レイカー家のものなんだし。

しかし、あの神剣。

本当は、どんな能力を持ち合わせているんだろうか。

俺は、鮮やかに黒く閃く神剣をもう一度思い浮かべて、ぶるっと震えた。

鮮やかに黒く、か。

変な表現だな、本当に。

# ２０４　勝利報酬

負けた。

俺は、負けたのだ。

龍眼族（レザール）の、シルバ・エクアトゥールに。

「……くっ」

思い出すだけでも、悔しさが口から零れ落ちる。

何もできなかった。殴り１発、蹴り１発与えられずに、負けた。

完敗だったのだ。カレルにもらった魔剣も没収されたし、何が起こったのか分からない。

なにより、学園に帰りたくなかった。

リンセルになんて言えばいいのだろう？

顔向けができない。

「でも、帰らなければいけないんだよなぁ」

カレルと一緒に向かった道を、今度は一人で戻る。

虚しさは倍増するし、だからといって寄り道をする気力もない。

俺はカエシウス聖王国の街並みを一瞥して、前に歩を進める。

もう、後ろを振り返ることは、ない。

「ルークエルリダスさん、遅れまして申し訳ありません」

結局、完全に回復するまで3日を要した。

フラフラではあるが、立てたのは1日目だったのだが、ゼロ＝オールに止められ。

完全回復してから行けと釘を刺されて、そして今である。

ルークエルリダスさんは、自分の書斎にいた。

「お、回復したか」

書斎を見回すと、そこには2本の剣がある。

あれがきっと、俺に渡された神剣【闇夜の月（ミッドナイト・ムーン）】と、魔剣【夕暮れ時の太陽（トワイライト・サン）】なのだろう。

……ん？　なぜ、ルークエルリダスさんはそれを持っているんだ？

「さて、座って」

指し示されたほうのソファに腰掛けると、ドアがノックされて腕獣族（ケレイジ）の少女がお茶を持ってきていた。

「この世界で飲めない茶はあるかい？」

「そんなに、そもそも飲んだことがないですね」

「なら、この茶はどうかな」

そういって注がれたお茶の香りを嗅ぐと、そこに広がるのは俺で

もよく知ったものだった。
紅茶、か。
口に含んでも、そこに広がるのはミルクティーの味である。
なぜだ、乳製品は一つも入れてないというのに。
俺の反応を見て、ルークエルリダスさんはかなり面白がっている様子だった。
「これで何代目だったか、この地に降り立ったご先祖様は、前にいた世界の味を再現したかったらしくてな。魔法の力を借りつつ、少なくとも来たばっかりの転生者に違和感なく茶をふるまえるようになったわけだ」
ルークエルリダスさんは満足げに頷く。
確かに、この人は転生者の末裔らしい。
それは、この紅茶の色をしたミルクティーをふるまったからと考えるのではなく。
やはり、彼と俺には何か似ているような、そんな感覚がするのだ。
「さて、真面目な話に入ろう」
と、顔の色を思いっきり変えるルークエルリダスさん。
その目は、厳しく見せながらも優しさと喜びを隠しきれていなかった。
「まず、このペアになっている神剣：【闇夜の月（ミッドナイト・ムーン）】と魔剣：【夕暮れ時の太陽（トワイライト・サン）】は、正式に君のものだ」
「えっ」

俺の戸惑いは、二つを手に入れたものというよりおまけとして【夕暮れ時の太陽（トワイライト・サン）】がくっついてきたことによるものだった。

「ああ、カレルに預けていたが元々これは私の……レイカー家のものだ」

元々、初代レイカーのものだったしとルークエルリダスさん。

国立図書館などで一通り調べてみたが、歴史として残っている転生者は最古のものがレイカー家の人だった。

「次。……ラン・ロキアスとの決戦に勝利した結果として、次代レイカー家の当主をやってほしいんだが、どうだろうか？」

「……」

来たか。

でも、放浪鍛冶師をやって全世界を回ってみたい気持ちもあるからな。

学園に在籍している間、そうしてみるか。

「わかり、ました」

「まだ、時間はあるからゆっくり考えてほしい。でも、これからは『シルバ・レイカー・エクアトゥール』だ。よろしく頼む」

……うむ。

こう言われると、妙に実感がわいてくるものだ。

この世界でミドルネームというのは、いったいどうなんだろう？

俺の世界では、称号だったんだよな。

前世の名前、『ダウンファール・ゼロ・デスムーン』なら、『ゼ

ロ』はその通り。
ゼロから先代たちが実力で上まで上り詰めたことを評されて付けられたものだ。

ランの居た地球はよくわからない。
少なくとも、俺の生きていた地球はそうだった。

照れくさいやらなんやらで、しかし顔を上げるとルークエルリダスさんの顔は、まじめそのものだった。

「同時に、異名：【限越者（ゲイザー）】を与える。カエシウス聖王国からは、後日正式に別の異名が与えられるはずだ」
「そういえば、異名って……」
「説明するよ」

そういってルークエルリダスさんは、丁度お茶を注ぎに来た侍女を見て、「でも、その前に休憩」と息を吐いたのだった。

## ２０４　勝利報酬（後書き）

ｈｔｔｐ：／／ｍｙｐａｇｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｍｙｐａｇｅｂｌｏｇ／ｖｉｅｗ／ｕｓｅｒｉｄ／２０３８５５／ｂｌｏｇｋｅｙ／１０９１３８２／

こちらで、異名の読み方を募集しております
よろしくお願いいたします。

# ２０５　小話　降臨（前書き）

ラン視点。少々短いです。

# 205　小話　降臨

もう少し、俺がシルバ・エクアトゥールよりも強くなっていたら。
しかし、そんな希望や後悔は無駄なことなのだ。
いくら現実逃避をしようとしても、俺が彼に敗北したことは変わらないというのに。

「どうやって、リンセルに伝えようか」

このまま学園に帰らず、そのまま放浪の旅に出ることも考えた。
しかし、そんなことはもちろんできなくて。

少なくとも、レイカー家の加納氏がついえたからといってクリーゼまでが離れるというわけでもないのだから。
シックザール、か。

たしか、レイカー家の専属護衛だった家だったけかな。
今代は、男が生まれずにいたこととレイカー家にゼロ＝オールがいたことから必要とされていなかったらしい。

それにしても、あのゼロ＝オールとかいう護衛、そんなに強くなかったな。
あのとき、エクアトゥールが来ていなかったらそのまま械刃族（サミュリ）の主部機関すべて潰してやったのに。

魔法での身体能力も組み合わせ、全速力で極寒のカエシウス聖王国南部の森を駆け抜ける。
周りに生えているのは針葉樹林だ、雪をかぶり、前世ではなかったダイヤモンドダストを発散しているようにも見えた。

しかし、すこしもそれらは俺の感情を鎮めてはくれなかった。
最初にリンセルやアンセルに好かれたのは俺なのに。
先に転生したのは俺なのに。
先に種族特性を複数発言したのは俺なのに。
なぜ、俺は彼に勝てないんだろう？

「……そういえば、あのエスペランサって言う人」

一度おかしいと思ってしまえば、疑心暗鬼になってしまう。
どうしても、次は負けたくないから、相手が何かをしているのかと思ってしまう。

「あのエスペランサっていう人、人間の匂いがしないんだよな」

……正しくは人間のように見えないと思うべきか。
直感だけで判断するのもおかしな話ではあるが。

すこし、あの人について考えるのもいいかもしれない。

と、後ろから人の気配がする。
俺が振り向き、同時に臨戦態勢をとると、そこにいたのは1人の……。

ええと、なんていえばいいんだ？

「誰だ？」

「……ランが負けちゃったからな、取り合えずシルバ・エクアトゥールに勝つまで俺も人間態になろうと思ってな」

まったく俺の話を聞いていない。
と、その人は「人間態」という言葉を使った。

つまり。

「1年ぶりだな、ラン」

俺に、腕が変形して現れた二桁のスロットマシーンを見せつける彼の後ろには。

運命神の隠しきれないオーラが、漂っていた。

## 206　違和感

ルークさんとの話も終わったあとは、自由行動を許されたためエスペランサと散策をすることにした。
まだまだ手続きとかたくさんあるらしく、残念ながらまだ学園に戻ることはできなさそうだが。

まだ、夏休み中だということも幸いして、何か背徳感があるわけではない。

「二学期からは、学園生活に戻るんですか？」
「戻るよ」

ていうか、はやく戻りたくて仕方ないんだが。
結局、そんなに学園生活を満喫する余裕もなかったからな。

「二学期は、イベントがたくさんあるのですよ」
「ほう」
「なので、私も楽しみなのです」

と、ここまで話をしたあとで。
彼女は、何かを感じ取ったように体が一瞬だけこわばった。

明らかにおかしいと感じ取れるそんな状態に、俺が気づかないはずもなく。

「どうした？」
「……いえ、少しだけ変な感覚がしてです」

勘違いかもしれないので、ご迷惑をおかけしました。
彼女はそういったが、彼女の直感ってつまりはこの世界の変化である。

何か、この世界に介入したということだろう。

「新しい転生者か？」
「いえ、それはないですね。私は人のことを感知できませんから。……しかも、ふつうはシルバさんみたいにああやって審議にかけるので」
「普通は？」
「ええ、例えばラン・ロキアスは運命神の独断ですね」

ほう。
だから、よくわからなかったがエスペランサがいい顔をしていなかったのか。

俺は半分分かったような、半分さっぱりわかっていないような顔でうなずくと、空を見上げた。
さすがに雪は降っていないからか、だからこそ太陽が出てきていると考えるべきなのだろうか。

「思ったよりも、あっさりと決闘も終わっちゃったしな」
「これから、どうするつもりなんです？」
「予定はいつまでも未定、だぞ」

答えると、エスペランサはそれもそうですねとほほ笑んだ。
時間ならいくらでもありますよ、と彼女はもういちどほほ笑むが、俺はその言葉には何も返答しなかった。

俺は、今が楽しければいいと思っているかもしれない。
この幸せが、いつまでも続けばいいとは思っているが。
いつか、エスペランサと別れる日がくるかもしれないと考えると、それだけで悲しくなってしまうのだ。

考えるだけも、というのは。
俺が、弱いという証拠なんだろうけれども。

「何とか、したいんだけどな」
「能力的には、強いのですからあとは精神力ですね」

……前世での出来事がトラウマになっているのだろうか。
やっぱり、誰かを俺は守ることができないのだろうか。

考えれば考えるほど、不安になるというのはこういうことを指すのだろう。
せっかくレイカー家から【ゲイザー】なんていう、異名ももらったのに。

ちょっと将来の事も、見透かせないなんて、な。

「ところで、本当に何もないのか？」
「感覚的にはいろいろあるのですけれども、間違っていたら申し訳ないのですが」

そう予防線を張るように前置き、いわゆる言い訳をして彼女は言葉をつづける。
後に続いた言葉（ワード）は、俺の予想のなな め上をいくほど、インパクトの強いものだった。

「運命神が、この世界に降りてきた可能性が高いですね」
「はっ！？」

運命神ということは、スロツ＝トールだろうか。
ラン側の人間、ということになる。

なるほどね。つまりはそういうことなのだろう。
俺に希望神がついているように、ラン・ロキアスには運命神がついているということか。

……まあ、いいや。
俺とロキアスの戦いは2回では終わらないということ、だろうな。

戦いの準備期間、無駄にしないようにしたいが。
……それでも、やっぱり少しくらい頑張りたいな。

## 207　小話　鮮やか夜空

「……時間がない」

私は、シルバさんが寝静まった頃。ちょっとだけ呟いて自分の手を握り締めます。

シルバさんがこの世界にやってきて数か月がたちました。やっと時間のおかげか、私への接触も何気なくやってくれるので、緊張はないのですが。

やっぱり、彼に包まれていると少し頬が赤くなるようです。

これは安心感からか、それとも別の何かか。

少なくとも、いやな気持はしないのですね。

「……シルバさん？」

彼が起きていないことを確認し、私はそっと彼から離れます。

カエシウス聖王国の夜は、月とオーロラで綺麗なのですね。

「なんで」

なぜ、運命神までもがこの世界に干渉してきたのでしょうか。

上の神に許可を取ったのでしょうか、否彼の行動はそんなことを

しないでしょう。

私がシルバさん……シルバ・エクアトゥールに干渉しているのは、ちゃんと「希望神の英雄」という称号を持たせるためです。

来るべき世界の危機に、シルバさんなら立ち向かってくれると思ったうえでそうしました。

彼の感情的には何かなくなっているような、逆に何かが増大されているような不安定さを持っていましたが、それでも転生者の中では幾分か安定しているでしょう。

普通の転生者なら、私たちにあそこで出会って萎縮したり失神したりといろいろとやらかします。

魂だけの状態で失神すると、消滅の危機が訪れるのでその時はあわてましたが。

そして、ほとんどの人は「能力」を持ち合わせていながら、それを人のために使わないのです。

自分の力を誇示し、女を集め自分の肉欲を満たすだけ。

今のシルバさんは、そうなのでしょうか？

……どうしても、二重の意味で心配してしまいます。

「はぁ」

私は、そっと息を吐いてレイカー城を見上げてます。

どうしても、いろいろ考えるものがあるから。

時間がないかもしれない。……このまま、学園でラン・ロキアスが色々と力を持ち始めると、どんなことになるか分かったものじゃないので。

こういうことは、シルバさんに任せることなのでしょうが。

「……エスペランサ、さんかな？」

「はぅ」

突然後ろから話しかけられて、私は思わず息を吐き出します。

いったい誰かと振り向くと、そこにいたのはベランダに着陸したゼロ＝オールさんでした。

「どうしてこんなところから？」

「秘密。特殊な領主様からの願い事があってね」

彼は、私の正体を知っているようです。

それは、女子供に対するやさしさなのかもしれませんが、口調が柔らかい。

ルークエルリダス・フレイヤ・レイカーの腹心なら、教えているでしょうし。

私の場合、何か言われたところでその人たちの記憶を消せばいいだけなのですから、問題は全くないのですけれども。

「シルバ様は、もう寝た？」

「その呼び方、シルバさんは望まないと思いますよ」

自然な口調で、シルバさんに「様」がつけられているのを聞いて私は首を振りました。

シルバさん、どうなんでしょう？

まだ学生だから、という理由で嫌いそうです。

「そうだな……夏休みが終わったら俺も【学園】に向かう」

「ありがたいです。……でも、お城のほうは大丈夫なのですか？」
「領主様は、この一帯では最強の人だ。問題はないさ」
まあ、そうでしょうね。
……はい。

私は、空を見上げます。
夜空には、星が漂ってこちらに色を与えてくれます。

シルバさんのいた世界より幾分とまぶしい星空ですが、これはこれで幻想的に感じられるでしょうか。
……シルバさんが、私の番（つがい）になってくれるのなら。

次は、シルバさんの元いた世界にも遊びに行きたいものです。

## ２０７　小話　鮮やか夜空（後書き）

第１０章は、あと数回小話を挟んで次の章へ。

１１章は、新学期から始まります。

# ２０８　小話　銀世界（前書き）

ラン視点。

## ２０８　小話　銀世界

「ふむ、この世界も楽しそうではあるな」

運命神スロッ＝トールは俺の話……つまりすべてを聞いてから、うんうんとうなずく。

しかし、何か言葉を返してくれるのかと思えば、次に出た言葉がそれなのだから頭を抱えるのも分かってくれるだろうか。

「なあ」

「そうだ。……このままの名前ではなく、ほかの名前を付けてくれないか？」

と、突然の命名権を渡され、俺は困惑する。

自由奔放な神様だ、まったく。

俺の能力を決めたのも、結局は運だったような気がするし。

まあ、神様の考えを俺が理解しようとすること自体がおかしいのかもしれないけれども。

「どんな名前がいい？」

「そうだな。……できるだけ、ほかの神の名前はやめてほしいところだ。あとはどこの言語を使ってもいい」

神の名前がＮＧというのは、それはそれで当たり前か。

俺はうんうん、とうなって彼を見上げる。

彼の体は、かなりの巨漢だ。

俺の３割増しだろうか。

「学園につくまでにつけておくよ」
「おう、期待してるよ」

こんなにフレンドリーに話しかけてしまって大丈夫なんだろうか。
俺は存在を消されないんだろうか。

……俺の存在を消すつもりなら、最初にもう消しているか。

「実はな」
「ん？」
「ランを転生させたの、まったくの独断だったからさ……」

と、おかしなことをいう。
俺は転生のシステムがよくわかっていないため、何も答えることができず彼の説明を待つ。

……なるほど、つまり俺に味方する神は目の前にいる運命神しかいないわけだ。
シルバはどうなんだろう？

「シルバ・エクアトゥールは3柱だな」
「さん！？」
「ああ、俺はあまり干渉できなかったが」

つまり、彼は「龍眼族（レザール）」であることも。
魔剣鍛冶ができることも。

すべて、神からの受取ものだということだろうか。

うん。……物事が終わってから聞いているからまだ幾分か気分はいいが、直前に聞いていたら俺は絶望していただろうな。
どうやって、シルバ・エクアトゥールに勝利すればいいんだろう。

「俺の干渉も程度は限られているし……。そうだな、少し考えてみることにするか」

少なくとも、俺を切り捨てるようなことはしないようだ。
ありがたい。心の支えになりそうな気がして、俺ははぁと安堵の溜息をついた。

そんな俺を見て、しかしだと彼は忠告をいくつか説明する。

「基本的に、俺は戦闘には参加しない。できない」
「おう」
「もう少し強くなったら力を与えてやる。……お前の前世でいうレベルアップボーナスみたいなものだ」
「おう」
「あと……シルバ・エクアトゥールに何かおかしな場所はなかったか？」
「……希望神の英雄、とかに選ばれたらしい」

俺が三つめの、質問に答えると運命神は目を見開いた。
そして、俺のほうに息を吐いて「残念だ」と言葉をこぼす。

もちろん、なんのこっちゃわかっていない俺は困惑した。
この人は……この神はいったい何を言おうとしているのだろうと。

「あの人に、希望神がついている可能性が高いな。……このくらいのちんちくりんの女はいなかったか？」

「いたよ」

エスペランサさんでしょう、と返事をする。

と、運命神は幸せの逃げそうな深いため息をつき、「エスペランサ」はどういう意味かわかるかと俺に問うた。

「いや、しらない」

「お前のもといた世界の、スペイン語で【希望】だ。あとは、わかるな」

……理解。

つまりは、そういう意味だったのか。

俺は、彼と並んではぁと息を吐く。

息は白くなって、白銀の森に溶け込んだ。

## ２０８　小話　銀世界（後書き）

次回はまとめ。まとめが終わると次章へ。

# 209　8・9・10章の簡易まとめ

7・8・9章のまとめ

人物

クリーゼ・シックザール

シルバたちがレイカー家に向かっていた頃、ランとくっついていた新しい彼女。
家はある程度有名なカエシウスのもので、シルバに敵意に近い何かを抱いている節があった。

オルガレオ・ウリム

カエシウス聖王国国王に見初められて護衛を任されている少女。
実は転生者。シルバやランとは違い、本当に人生をやり直すことができた。
シルバの前世を知っているため、シルバはもしかして……と色々勘ぐっている。

レウス・ゼグゼス

魔導都市で技武具の専門店を開いている青年。実力はトップクラスであるが、年齢のせいか同業者には相手にされていないようだ。

ゼロ＝オール

レイカー家の護衛をしている青年。械刃族（サミュリ）の中でも特に珍しく、心臓部分以外すべて魔導機械になっている。
実力は決してないわけではなく、一人で兵士２００人分といわれていたが、ランに四肢を押しつぶされて現在は療養中。

都市

スズナリ

オウラン帝国の王都。日本など東アジア全般をひっくるめて混ぜ合わせたような街並みをしている。
龍眼族も少ないながら日常的にみられることが多いが、シルバはどこか違うと感じ取っているようだ。

ギージック

オウラン帝国の大都市で魔導都市。
こちらは腕獣族（ケレイジ）の都ではなく械刃族（サミュリ）の都。
スチームパンクでサイバーパンクな雰囲気を漂わせている。

# ２１０　神と人（前書き）

新章、発足。

# 210　神と人

「へえ、そういうことですか」

結局、夏休み後半のほとんどはカエシウス聖王国のほうで過ごしてしまった。

ルークエルリダスさんには深く、まだ考える必要はないといわれたが、それでも深読みしてしまうのだ。

これから、どうやってやっていけばいいのだろう、と俺は。

彼からもらった懐中時計を、手放せなくなっていた。

「どういう意味か、説明してほしいのですけれども」

ところで、だ。

今、俺は目の前に人間態の神が二人いる状況に立たされている。

エスペランサを隣に位置させた俺の反対側には、一人の械刃族（サミュリ）を隣に位置させたラン・ロキアスが立っている。

本当に珍しい、それどころかこの世界に入って初めて怒りという感情を表に出したのではないかというような、エスペランサの口調。

それは、まぎれもなく械刃族（サミュリ）に向けられたものだった。

「どういう意味も、こういう意味だけれど？」

しかし、彼は飄々と彼女の言葉を躱す。

あまり考えたくはないが、つまりはそういう意味らしい。

俺には、エスペランサがなぜここまで怒っているのかわかっていないが。
それでも、その械刃族（サミュリ）がエスペランサの言っていた「運命神」であることはすぐに検討がついた。

「ま。そこにいるシルバが俺の転生させたランを虐めてくれたらしいからね」
「虐めるも何も、勝手に転生させた貴方の責任でしょう」
「そう。だから、俺はこの世界に降りてきた」

人間態の運命神は、エスペランサの言葉に対してかぶせるようにしながら、意地汚い笑顔の片鱗を見せた。

「それとも、俺がこの世界にいたところで困ることでも？」
「そうですね。私たちの邪魔はしないでください」

バッサリ。
そう言い放ったエスペランサの言葉には、冷たいナイフのような鋭さすら思わせていた。

「俺は、ランの側につくというだけだ」

そう返した相手も、負けじとすごみがあった。
すごみがあったところで、何かが変わるわけではないのだが。

それでも、一か月以内に決闘をした俺とラン・ロキアスが。
お互い顔を見合わせて困惑する程度には、二人の仲は良くなかったのだ。

「シルバさん、少し……我慢ができなくなったらごめんなさい」
「ん？」

二人と別れた後、俺は学園の近くにある喫茶店に彼を連れていき、飲み物を注文した。
【コーヒー】と明記されていたのだが、この茶色の飲み物は俺の知っているアレなのだろうか。

香りも、味も、そのままだったが。

「俺には、神々の関係なんてわからないけれども。……仲がよろしくないことはすぐに分かった」
「でしょうね。……シルバさんは、【神】という存在をどのようにとらえていましたか？」

質問をされ、俺は数十秒考えた。
どのように、エスペランサと出会う前は捉えていたか？

この世界に入ってきて、思ったよりも時間はたっていないというのに。
この世界での生活1日1日が、俺には斬新すぎて細かいことは覚えていない。

「……そうだな。この世界に来る前は、無神論者だった」
「ふむ？」
「悪魔の証明と一緒だと思ったんだ」

最初は。……おかれていた状況もあった。
大切な人を立て続けに失った俺に、手を差し伸べてくれたのは神でも天使でもなかったし、それは従兄弟とその家族だった。
魔法、とは違う異能力を有するあの世界。
神なんていなくとも、よっぽどでないと何とかなる世界であった。

「でも、今は違うのですね」
「違うも何も、目の前に本物がいたら信じるしかないだろう？」
「……でも、ある意味では神も人間と同じなのですよ」

と、エスペランサは意味ありげにこちらを見つめる。

「そもそも、私たちは【神】とは名乗り、呼ばれているものの、本当の名前は何というのかわかりませんしね。【唯一】の存在ではないので」

人間が、自分たちを【人間】と名乗ったのと同じといいたいのだろうか。
確かに、エスペランサはもっと無表情で淡々と物事（タスク）をこなすようなものだと思っていたが、それは全く違うものだったし。

「そもそも、【神】という存在は別に【人】の上位種族でもなんでもないですし、ある意味では【異世界人】という一つの区分なのかもしれません」

……至言だな。
もう少し、神というのはプライドの高いもので、崇められるのに幸福感を感じるようなものだと思っていたのだが。

いや、それはエスペランサが【特別】だからだろうか。
いずれにせよ、彼女が俺に対してどのように接してくれるのかが一番だとは思うが。

「シルバ、さん？」

俺は、エスペランサが自分に呼びかける声を聴いて我に返った。
ずいぶんと長い間、俺は考え事をしていたようだ。
とりあえず頭を振って、本題にはいることにする。

「で、我慢って？」
「私が力を使って彼へ干渉していない今のことです」

つまり。

エスペランサは、運命神が目に余るようなことをしたら、遠慮しないといっているのだ。
世界が壊れることだけはやめてほしい、かな。

いろいろと面倒なことになりそうだし。

いや、世界が破滅したら面倒という感覚もなくなるのか。

## ２１０　神と人（後書き）

「神様」についての皆さんの考え方は人それぞれだと思いますが。
少なくとも、物語の一つとして考えていただければ幸いです。
エスペランサは自分の事を、【神】という一個体の【異世界人】だとしか認識していません。

キャラクターの一人として、考えていただければ幸いです。

# 211　編入者

「シルバ君、お帰りなさい」

寮にかえると、そこで出迎えてくれたのはアンセルとリンセルだった。

アンセルは「やっと会えた」とかなりの嬉しそうな顔で。

リンセルは、俺にどう接すればいいのか微妙な顔で、こちらを見つめている。

「リンセル、今までどおりでいい」

「……」

彼女は答えない。俺が何を言っているのか、理解していながらもそれではいけないかのように、首を振っている。

「私、は」

「そんなことよりも、私に何かないのですか？」

言いよどんだリンセルをさえぎるようにして、俺のほうを見つめるのはアンセルだ。

彼女をかばおうとしているのか、それとも何なのか。

しかし、俺はどうしようもなかったためアンセルにお土産を渡す。

「急にああなったせいで、一つしか買えなかった」

「それだけでも十分です。……ああ、それは」

と、俺の持っていた懐中時計を見て、彼女は誇らしげに俺の顔を見上げる。

その意味が分かっている、特にアンセルはリンセルと違いそれに納得できている。

それだけで、俺の心は休まった。

「リンセルのケアを、頼めるか？」

「承知いたしました」

彼女にリンセルを頼み、俺はドアを再度開けた。

どこへ？　といった顔の彼女に、俺は軽く笑いかける。

「あいている寮がないか、掛け合ってくる」

こんな状況だし、来学期からはクレインクインとレオがやってくる。

レウスは……よくわからないが。

「確かに、そう考えてみればそうですね。……って、クレインクインと一緒に暮らすつもりなのです？」

「ああ、そうだけど」

「……うーむ？」

残念ながら、それは俺じゃなくてあっちの意思なんだよな。

いろいろと面倒なことが起こりそうだし、でもまあ認可されているからいいか。

この学園に来るときは、ふつうに接しろといわれていたし。

「教師陣も、色物は一つにまとめておきたいだろうからさ」
「でも、どこに掛け合うんです？」
「ウスギリか、カレルかな」

カレルは、ラン側の人かと思えばレイカー家側だったしどちらかというと。
まだ、帰ってきて一度も会っていないから、そっちに行ったほうがいいかとも思う。

ウスギリに行くほうは、彼の叔父がここの学園長であるからだな。
さすがに、カエシウスの現聖王国陛下が学園に来るなんて話はいっているだろうし。

「はい、わかりました。……ええと、エスペランサさんは？」
「どこだろう？　……ま、夜までには帰るって言ってたし大丈夫だろう」

万が一のときは力を使うことくらい許可している。
まあ、彼女の種族は謎法族（カラミタ）だし、知っている人は襲おうとも思わないだろうけど。

「ほう、うん。学園長に掛け合ってみるよ。……あと、レイカー家次期当主おめでとう」
「それはまだ決まっていないですね」

カレルは、いつもの部屋にいた。

今日はランがいないらしく、人がいないのはある意味ですこしさみしくも感じた。

「来週からは、かなりいろいろあるんだよ。編入者が４人もいるし」
「４人？」
「クレインクイン様、オルガレオ・ウリム。オウラン帝国からレウス・ゼグゼスと、フドウ・サカキ」

フドウ・サカキ、か。
いかにも日本人っぽいものだな。

「誰か、知り合いがいるのか？」
「レウスとは、ギージックで」

たぶん、あの技武具職人のだろうな。

# 212　引っ越し

というわけで比較的速やかに、寮移動の事は進んだ。
学園長の話によると、……まあ、そういう人がくるとやっぱり対応に困るものなんだな。
取りあえず、「俺が志願した」という名目上で新しい量が割り振られ、俺とアンセル、エスペランサが移動。

運命神はあっちに入って、結局どうするんだろ？
こちらは6人、か。
運命神以外の3人が、一緒に寮で暮らすことになるらしい。

レウスがこちらにくるのは、俺と同業者扱いされているからだろうか。
リンセルは、すぐに環境を変えるのもどうかということでルークエルリダスさんと相談しあい、今回は変えないことにした。

「ということで、早く引っ越しの準備をしましょう」

アンセルと、取りあえずの予定として簡単に身の回りを整える。
ほとんど家具とか、買わなくてよかった。すぐに荷物も片づけが終わり、トランクにまとめる。

「なんか、ごめんなさい」
「ん？」

魔剣の材料を、袋の中に一括収納しているとリンセルが部屋の中に入ってくる。
顔は実に申し訳なさそうな感じになっており、どうもこちらに引

け目を感じているらしい。

「いつでもいいから、完全にラン・ロキアスとの未練を断ち切れたら来るといい」

それまで、ゆっくり待つことにしよう。

変に彼女を刺激しても、仕方ないことだしな。

「……シルバ君は、私の事好きじゃないんだね」

「好きだろうと嫌いだろうと、少なくともリンセルの心がランのところにある間は俺もできるだけ干渉しない」

偽りの心を持って、人に接するのは簡単なことなんだがな。

それはそうなのだが、仮にも後で結婚するかもしれないという状態の時に、彼女にそう接するのもどうかと思ってしまったのだ。

俺は彼女が何やら考えているその状態を見てはぁと息をつくと、これで話は終わりと手を振る。

それをみて、さらに悲しそうな顔をしたリンセルに、俺は彼女の手を取ってあるものを渡した。

「これは？」

「……持ってなかっただろ、俺がいない間」

彼女に再度渡したのは、【リンヴ】だ。

これは、彼女たちが俺に救援信号を渡すとともに、こちらも相手のことが少々わかるようになっている。

まあ、こんなこと言ったらいけないから彼女たちには伝えないけ

ど。
簡単に言えば、前の世界にいた時のＧＰＳみたいなものだろうか。
「……あと、これは？　ストラップ？」
「土産」
実際は、原料を俺が現地で加工したから元土産なのかもしれないけれども。
ま、これがあれば万が一俺がいなくなったとしても何とかなるだろうと思っている。
どこにも行くつもりは、今のところないが。
「シルバさんシルバさん。あぅ」
と、気まずい空気の中突撃してきたのは、リュックサックを背負ったエスペランサである。
俺を見、リンセルを見て。
か細く、「失礼しました～」とドアを閉じかける彼女の手を引いて、部屋の中に引きずりこむ。
「どうした？」
「私とアンセルさんの準備、終わったので報告に来ました」
「ん、すぐ行くよ」
はい、と返事をしてエスペランサは一瞬だけリンセルに心配そうな目を向ける。
しかし、それも本当に一瞬、刹那の時で。

すぐに、ぱたぱたと階段を下りて行った。

「さて、俺もそろそろ行かなきゃな」

そう呟き、リンセルの方向を向くと少女はなぜか、幽玄なまなざしでこちらを見つめている。

いったいどうしたのだろう？　さっきとはちがって、どこか悟ったようにも感じられるが。

「すぐに、そちらに行きます」

「……そうか、いつでも歓迎するよ」

言葉を返すと、リンセルは部屋から出て行った。

それにしても「すぐ」か。

何か、踏ん切りがついたのだろう。

あとは……クレインクインたちを待つだけだな。

## 213　レウスとクイン

「同い年だったんですね、シルバ。またあえてうれしいです」

レウスは、こちらを一目見てその顔をほころばせた。

械刃族（サミュリ）でも、その表情が一瞬で分かる程度には変わっているのだから驚きだ。

あのとき、数時間話し合っただけだというのに。

「もともと、新学期からはここに編入する予定だったのです」

と、彼はそういったが果たしてどうだろうか。

荷物とか、かなり慌てて整理してきた感じがするのだ、まあ、俺の知ることではないだろうから深くは言わないが。

「同じ寮なのですね、これからよろしくお願いいたします」

「あと2人、この寮には編入してくる」

「ほう、どんな方なのです？」

「自分の口できいたほうがいいと思う」

俺から、何か言ってもあっちに迷惑がかかるだけだしな。

……レウスも、クインも今日くるって言っていたし、大丈夫だろうな。

と、噂をすればだ。

俺たちのいる玄関前へ、一台の【デルエクス】が到着する。

どうも、オートバイ型でワイルドに運転していたのは、オルガレオ・ウリム。

そして、後部座席に座っていたのは、クレインクイン……。
じゃなくて、クインセリシアかな。

「ちょっと振りだな、シルバ」

と、俺に話しかけてから、隣にいるレウスに気づくクイン。
一礼して、よろしく頼むと手を差し出す。

「クインセシリアだ。フルネームはクインセシリア・ユピテル・スィリオス」
「偽名ですね。私の名前はレウス・ゼグゼス」
「ほう、その根拠は？」
「さぁ、どうでしょうね」

不敵な笑みを浮かべるレウス。
しかし、クインも負けていない。

けれど、その前にレオが割って入ってきた。

「クインさま、早く入りましょう。ゼグゼスさんも、これからよろしくお願いいたします。私のことはオルガレオと、およびくださいませ」
「はい、わかりました」

さて、この人から。
俺は、なぜクインの事が偽名だとわかったのか、聞き出さないとな。

「なぁ、レウス」

「はい？」
「なんで、彼女が偽名だと？」
「勘ですけど？」

この男、勘が働くのか。

……まあ、技武具に勘が必要かどうかは別として、勘がいいのは生きるのに役立つんだろうな。

「まあ、あの反応では偽名でしょうね」
「間違ってたらどうするんだ？」
「その時は、……や、大丈夫、です」

もし間違っていた時どうすればいいのか、考えていなかったようで。

彼は、顔面を少々蒼白にして、頭を振った。

「商売するためにここに来たわけではないので、少々気楽ですね」
「ん？　学費は？」
「技武具の売上で何とか。……初期に買ってくださった方が何人かいたので」

それこそ、始めたばっかりの時に決して安くないものを買う人がいるだけ、まだいいんじゃないかなと思ってしまった。

……俺は、一番最初に俺の剣を買ってくれたアイライーリス先輩の事を思い出して、なんだか申し訳ない気持ちになってしまう。

また、今度話しかけてみるとするか。

「あ、訊くのを忘れていたのですが。その後ろにいるお嬢様はどなたで？」

後ろ？

振り向くと、ドアの隙間からこちらを見つめるアンセルの姿が。
お嬢様って、と思ったがドレスを着ているのだからそう連想するのは当たり前か。
実際、お嬢様だし……。

「アンセル、おいで」

隠れてないで、とアンセルを呼ぶと彼女はキラキラと顔を輝かせる。
そしてこちらへてくてくと、歩いてきた。

「……アンセリツティア・レイカー嬢ですか？」
「ご存じなのです？」
「ええ。レイカー家のご姉妹に、結婚相手が決まったってせんじ……つ？」

と、レウス。
俺と、アンセルを見つめて、あいた口がふさがらない状態のようだ。

「まさか」
「さぁ、どうでしょう？」

アンセルはなんとまあ、気まずそうにそうぼかしたが。
ぼかしきれていないのは、誰にでもわかっている話で。

そこから数時間、レウスが動こうとしなかったのは、また別の話

だ。

## ２１４　異名（前書き）

ご協力ありがとうございました。
この話で、先日募集した異名の発表となります。

# 214　異名

「ショックだ……」
「まだいっているのですか……」
数時間たったあと、やっと再起動した彼はしかし、それでも「ショック」という言葉をただ繰り返すだけの機械になっていた。
そんなに、俺が彼女を手に入れたことが衝撃的だったんだろうか？
「でも。私の店に来た時は別の女の方を連れてきていましたよ」
「エスペランサさんの事ですね。彼女もシルバ君のものですよ」
アンセルから、そういう言われ方をされるのはどうも気恥ずかしいものである。
誰かの所有物、か。
確かに、そうなのかもしれないけれど。
「ということは、貴方は相当の実力を持ちつつそれを認められているわけですね」
さすが、理解力の高い。
この世界の住民は、ほとんどが実力主義だと聞いているし、実際レイカー家はそうだった。
俺だけの実力か、と問われれば首をかしげてしまうが。
俺は、神々からもらった魔武具を作り出す能力【魔武具創造（マギア・クリエイト）】と力の向きを操る【引斥制御（グラビシオン・コントロール）】を所持している。
後者は最近、全然使っていないが使っていないというのは戦闘が

それほど少ないということだろう。

あとは、そもそも【龍眼族（レザール）】という種族から持っているこの強靭な身体と、【龍眼魔法】か。

もともと、俺の頭はいいほうじゃない。前世での【能力】は、ほとんどが戦闘目的でつかわれているという先入観からも、戦闘しか脳にない。

前世では誰かを傷つけるためにしか使わなかったこの能力、今回は護るために使おうとやっと決意したばかりなのだから。

「そういえば、異名の授与がまだだった気がする」

「それなら、先ほど届いていましたよ」

いかにも高級そうな封筒を差し出してきたのは、エスペランサだった。

そして、その後ろにはレオもいる。

「聖国王陛下から、こちらも預かってきました」

この場にクインがいないのは、せめてものカモフラージュのつもりなのだろう。

レウスがここにいなかったら、直接渡してきただろうに残念だな。

「異名……。羨ましい響きです」

「先にどっちを開けば？」

試しに聞いてみたが、レオは首を振って「ご自由に」と返すばかりだった。

たぶん、聖国王からというのはクインが名付けたんだろうな、と

推測することができる。

家臣に名づけさせた可能性もあるが。

うぬぼれでは決してないが、クインが俺の異名を人に任せようとするかという疑問がわいてくるのだ。

「カエシウス聖国王からで」

白というよりは、水色に近い封筒だ。

王宮からという証拠になる、魔法印は紺色で光を浴びてキラキラときらめいているようにも見える。

で、おそらく印璽（シーリングスタンプ）は国旗だろう。

四つの輪が、中心に向かって複雑に絡み合っているのがそれだ。

ああ、でもこの世界で家の紋章はそのまま印璽に使われるんだな。

封筒を開けると、そこに入っていたのは1枚の薄いプレートのようなものだった。

身分証に近いが、それよりもさらに薄くてしかもしなっている。

触った感想は少しひんやりしている、ということだろうか。

質感は明らかに普通の紙ではなく、ツルツルしており剥離紙のような印象を受けた。

「ほう」

でだ。

問題というか、本題は記載されている内容である。

「……ええと」

「【聖魔の翼：フルギーロ・デ・カオソ】。が、カエシウス聖王国から与えられた貴方への異名です」

この世界の異名はどのように決まっているのだろうか。

よくわからないが、しかし【聖魔】の意味が分かっていないのだ俺は。

翼、というのは【龍化（ドラコ・フォーゼ）】したときに巨大な翼が生えてくるから、こじつけ的にでもそれを意味づけることはできるとして。

どこから、この単語が出てきたんだろう？

「こういうのは、直接本人に聞いてみたほうがいいかもですね」

「う、うん」

まあ、本人がおそらく上の階にいるから、後で聞くことはできるけど。

謎を生み出すようなネーミングだな、語感はいいから気に入ったが。

「異名って、こんな感じなのですね……」

「同時に、役所には届けられますので機会があれば確認しに行くのも一つですね」

異名の記されたシートのようなものをうっとりと見つめているレウスを全く無視して、レオは俺に説明を続けていた。

アンセルはなんだか、俺以上に喜んでいるような気がする。

まだ一つあるんだが、異名を一度に数個もらう人って今までに存在したのかな。

「……レイカー家公認の異名」

正直カエシウス聖王国からやってくるものはそこまでといった感じだ。

確かにうれしいし、国単位に認められていることを示しているから、誇らしくも思う。

しかし、やはり本題は「レイカー家」から認められていることだろう。

俺が、ラン・ロキアスから掠め取ったものだ。

誰かと争って、闘って手に入れたものというのは、やはり別の感情が湧き出てくる。

「【爾今眼龍】？」

「【それを今、眼にする龍】、ですか。お父様も考えましたね」

読み方は【プロストゥス・ゲイザー】だそうだ。

どこか哲学的な、幾何学的な印象を受ける名前だと思う。

それにしても、アンセルの解釈が意味深な気がして、どうも落ち着かない。

ルークエルリダスさんが、娘の将来の配偶者に与えた異名だ。

彼が、次のレイカー家を次ぐ男に与えた異名でもある。

ルークエルリダスさんに授けてもらった、懐中時計を無意識に取り出し、見つめてしまう。

周りの祭りのような、活気あふれた雰囲気の中、自分だけが深く沈んでいたのかもしれない。

やはり、もう一度。
ルークエルリダスさんとは、会ってみる必要がありそうだな。

「さて、そろそろ夕方に向けて、皆さんで買い物に行きませんか？」

アンセルの、声が聞こえそれにみんなが同意する声が聞こえた。
顔を上げると、俺のそばに今いるのはエスペランサだけで、みんな自分の部屋に戻って準備をしているようだ。

「みなさん、行っちゃいましたよ？」
「ああ、俺も行くよ」

俺は彼女に返事をし、立ち上がりかける。
しかし、次の瞬間。

俺は、「え」と体を一瞬膠着させてしまった。

「さぁ、行きますよ」

少女は、なんでもないように踵を返していってしまう。

しかし、俺は確かに聞いたのだ。

俺が立ち上がろうとしたとき、エスペランサが俺の耳元にささやいたのを。
それが、おそらく俺にとってはかなり重要なことであることを。

「【五剣創造者（フィフスニーラスー）】」

## ２１４　異名（後書き）

決定した経緯については、こちらにて説明しております。
多くの応募、まことに感謝いたします

ｈｔｔｐ：／／ｍｙｐａｇｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｍｙｐａｇｅｂｌｏｇ／ｖｉｅｗ／ｕｓｅｒｉｄ／２０３８５５／ｂｌｏｇｋｅｙ／１１０７０２１／

そして、これからも本作品をお楽しみくださいませ。

## 215　書物

「理由は深く聞かないでくれ、恥ずかしい」

クインに、あっけなく断られて俺は自分に与えられた異名の意味を見失う。

格好いいから問題はあまりないのだけれど、それでもやっぱり知りたい。

探求心というのは、中々だと思っているからにして。

だからこそ、そこまで考えていないのかな。クインは。

ちなみに、今レウスとレオ、エスペランサの3人はキッチンにて料理を作っているところだ。

オリエンテーション的に、クイン以外のみんなは交流を深めて仲良くなっている。

「どうするんですか、クイン」

「うーむ、どうしよう」

アンセルは、俺の隣でソファに腰かけている。

読んでいるのは【異能力（サイキック）】の本。どうも、初対面の時を思い出すような内容だな。

レウスがここにいなかったらって言うのは確かなんだがな。

ここにいなければ、クインも俺たちも変にカモフラージュせず、ここだけは最低限リラックスできるところとして利用できたかもしれないのに。

「まあ、レウス・ゼグゼスが信用に足りる人間かどうか、という判

断はレオとシルバに任せる」
「俺？」
「同業者だろう？」
う。
どうも、エスペランサが色々としゃべったらしい。なるほどといわざるを得ない。
同業者って言っても。彼と俺ではかなり違いがある。
技武具は才能かもしくは技術があれば、どうにかなるレベルのものだ。
設計からやって、ふつうの鍛冶のように本体ではなく「パーツ」を作って組み合わせる。
それこそ、械刃族（サミュリ）にとっては、自分の体を作っているのと同じだ。
工業機械を作っているように、ものを作る。
しかし俺の作っている魔剣は、設計なんてめったにしない。
ヘーハイスに教わったやり方は、魔法で剣を作るということだ。
魔法で本体を形成し、魔法で合金を作り出す。
しかも、俺以外の人はそこに「人並み外れた豪運」というものすら必要になってくる。
「技魔剣とか、作り出せないのか？」
「理論上は可能だけれども。……そうだな、そういうのもいいかもしれない」
魔神剣、もう一回作ってみたいものだ。
ちなみに、最初に来る方が要素の強い方だと、エスペランサには教わった。

「ご飯出来ましたよー！」

と、お盆をいくつか持ってきながら、少女たちがダイニングにやってきた。

俺たちも、行ったほうがいいか。

「そういえば、この世界に来てから本をまともに読んだことなかったな」

「教科書は？」

「教科書は読んだよ。でもまともな書物じゃなかったろ」

基本しか書かれていなかった。

特に龍眼族の俺に配られたものなど、まるで小学生を相手にされているような感覚がした。

魔剣も論理ばかり。

エスペランサにもらった写本・仮本も、まともな書物ではなかったがそっちの方が参考になる。

「確かに、どこまで行っても。いい意味でも悪い意味でもシルバさんは異常（イレギュラー）ですものね」

「……そうだな」

学園にいる意味というのは、はたしてあるのだろうか。

そう問われれば、半分半分と答えるのが一番よさそうだ。

なんにせよ、どうしても通わなければならないということはない。

この5か月間くらいで半分以上来ていなくとも、鍛冶の授業は経験で理解ができてたし満点をとった。

ダメなのは数学とか、魔導学とかそこらへんだ。公式を当てはめるようなものは、どうしても理解が遅れてしまう。

「前の世界では、学校に通わなかったのか？」

「通ったさ。……でも、授業内容はここよりも過激なものだったからな。戦闘の記憶は焼き付いていても、座学は頭から消えている」

1年だからといって、ここみたいに簡単な魔法を遠的したりする場所ではなかった。

1度目から実戦訓練だ、命の保証もない。

死にたくなければ、安全に行きたければ。

この学園ではなく、一般人と「普通の高校」に通えばいい。そんな世界だった。

「2年からは、学びたい方向によって専門的なものになる。もう少しだけの辛抱だ、そうだろう？」

「そうだな」

ああ、忘れていた。

この世界、1年が9か月、か。

もうそろそろ、1年が終わる。

「次の学期は……」

「たった2か月で終了だ。休みの期間は、自分たちの成長のチャンスだからな」

「冬休みは、また私たちの実家ですよね？」

休み多い、って思うのは、俺が違う世界出身だからか。

……その分年月が流れるのも早い、というのはいいことではない

のかもしれない。

# 216　神力（前書き）

「まとも」に近づいたラン視点

# 216　神力

「で、変なことになっちゃったわけだけど。これからどうしろと？」
「俺は何も言わん。援助が必要なら助けはするが、自分から干渉はできるだけしないようにされている」
それは希望神も同じだ、とスロツ＝トール改めフドウ・サカキは俺にわざわざ説明してくれた。
ということは、シルバ・エクアトゥールも必要以上に自分を強化してはいないということになるんだが。
余計悔しくなってきたのは気のせいだろうか。

「まあ、あいつとランでは土台が違うからな」
「土台？」
「前にも説明しただろう」

ああ、転生に携わった神の数だったか。
俺の場合はフドウ1柱で、シルバは3柱。

でも、それはあくまでも基礎の問題だと思っている。
俺はおかげで、混種族を手にいれている。だから問題はない。

「この混種族は、どこまで増殖できるんだ？」
「6種族。あとは……奇跡が起きれば、プラス6種族」
「奇跡」

その意味が俺の心に深く突き刺さる。
すくなくとも、俺がこの世界に転生できたことすら「奇跡」の一種だろうに。

なのに、それ以上の奇跡が。
俺の先に、顕現できるのか。

「転生者は、周りに大きな影響を与える存在だ。一人で抱え込むな」

フドウのやさしい言葉も、今はあまり効果がなかった。

「……シルバに勝ちたい。どうすればいい？」

「とりあえず、体力は十分だから魔法からだな。……シックザールのお嬢ちゃんに教わったらどうだ」

クリーゼの事か。
確かに、彼女なら俺に教えてくれそうだ。

「魔法、か」

「この世界にいる時点で、魔法は械刃族（サミュリ）でもない限り使えないと一人前としてやっていけないからな」

種族的に、俺のメインは醒眼族（ウェイカー）で。
それは、まったく魔法を使えない械刃族（サミュリ）よりはマシなものの、魔法ではなく肉弾戦を好む種族だ。

魔法は決してうまい方じゃない。ましてやシルバの龍眼族（レザール）のように、固有魔法を扱える種族でも決してない。
あるのは、ごく限られた状況下で発動する一時的な「能力開花」だ。

「でも、一般的には魔法に秀でている知勉族（エリシュ）も、持っている、だろ？」

確かに、彼の言うとおりだ。
この世界に転生して1年たったころ、入学する2か月くらい前に俺は混種族になった。
いきなり、紋章が現れたのだ。

身体に種族的な特徴は現れなかったとしても、それは明らかに種族紋章であり。
そのおかげで、俺は醒眼族（ウェイカー）としては異常なほど魔力では上にいる。

さらに、おそらく俺個人に与えられたであろう、魔力が尽きないというのも。
俺は、ちゃんと扱えていなかった。

「うん、クリーゼに頼んでみるよ」
「ああ」

そうしたほうがいい、とフドウは笑う。

「しかし。ホープがエクアトゥールに肩入れしすぎているのも気に食わないな。……ラン、【神力】を使いたくはないか？」
「しんりょく？」

神の力、かな？

「といっても、魔法の上位版くらいしか教えてやれないが」
「魔法がマスターできたら、その時は頼むよ」
「承知した」

それにしても神の力か。

俺が使ってしまって、それは俺の体がちゃんと適応できるんだろうか。
使った結果、代償で身体が塵すら残さなくなるとか、冗談でなくやめてほしいな。

「まあ、例を挙げるなら……」

フドウは、その辺にあった石っころを拾い上げ、力を入れるようにして握りこむ。

「魔法なら、この範囲だな」

と、石は立方体のキューブになった。
恐る恐る触ってみると、確かにまだ石だ。

「で、神力だとこうなる」

もう一度握りこみ、手を開けるとそこには水が元の形のまま「存在」していた。

「はっ!?」
「不思議だろう?」

存在の物事自体を書き換えるとかなんとか。よくわからない説明をされたがやっぱりよくわからない。
いったい何を言っているんだろうか、この人は。

間違えた、何を言っているんだろうか、この人間態の神は。

「思い立ったが吉日、だったかな。お前の世界の言葉だ」

「前の世界だよ。……俺の世界は。今はここだから」

そうそう、そういうこと。

もっと強くならねば。

違う世界でも、……もう俺は誰かを守りたい、な。

レイカー家の称号は手に入れなかった。

その代わりに、俺はクリーゼを守ろう。

## 217　特殊鍛冶室

「すみません、この学園に工房はありますよね？」
「あるけど……」
数日後の昼、さて工房に行くかという時間帯に、ちょうどレウスに話しかけられる。
「一緒に行くか？」
「そうですね。ちょっと下見に行ってみたいんです」
下見、とは。
ええと、魔剣鍛冶用の作業台はあったが、技武具用はあったかな。
あ、この際だ。彼に教わることができるのか、ちゃんと聞いてみよう。
「俺に、技武具の作り方を教えてくれないか？」
「ええ、技武具はマニュアルがあるくらいですし、私なんかでよろしければ」
マニュアルあるのかよ。
……技武具って、もしかして一般に復旧していたりするのかな。
「装飾品として、好まれる傾向にあるものなんですよね。美しいものは本当に美しいですし」
逆に、戦闘ではそこまで使われません、とレウスは少し問題がありそうに顔をしかめた。

精密機械みたいな扱いなんだろうか、とちょっと頭をひねってやってみたが、全然訳が分からない。

「簡単ですよ。設計して、成型して、組み立てて、中に電気を流し込むんです。魔導機械と基本は同じですよ」

魔導機械か。

なかなか、ロマンのある名称だな。

「でも、この世界に存在する機械ってほとんどが魔導機械なんだろう？」

「いいえ？　魔導機械であるものは、ごく一部限られたものだけですよ」

このくらい常識でしょう？　といわんばかりの口調に、俺はおうと答えることしかできなかった。

レウスはまだ、俺が異世界から来た人だとはしらない。

だからこそか、怪訝な顔をしていた。

まだ、彼にいっていない理由は簡単、見定めきれていないからである。

レイカー家は先祖が転生者だったから、言っても問題なかった。

先輩方は最初の方こそ戸惑ったものの、俺の存在については認めてくれている。

エスペランサの存在は、どうも認めようとしていないらしく俺とは今疎遠になっているけれど。

「龍眼族（レザール）というものは、やはりこういう常識には疎いのですか？」

「そういうこと。オウラン帝国の種別じゃないからね」

オウラン帝国で、まれに見た俺とは違う感じの龍眼族（レザール）。
龍眼族（レザール）についての文献が少なすぎるせいか、同種のはずなのに俺すらわかっていない。

……エスペランサにあとで聞いてみるか。
それが一番早そうだな。

「じゃあ、案内するからついておいで」
「はい。よろしくお願いいたします」

それにしても、魔剣鍛冶にマニュアルはないのかな。
……あった方が助かるんだがって、たぶん使うのは俺くらいか。

「技武具の作業台の方は……こっちか」

特殊鍛冶室。
魔武具、技武具の機材や作業台がそろっている場所が新設されていたらしい。
そこに入るには、どうも届出が必要らしく、今は入れない。

入れない代わりに、巨大な窓があったためそこから覗くことにした。

「うん、完璧ですね」
「設備は整っているのか？」

「はい。技武具は作るための機材によっても、もちろん材料によっても出来が違いますが、ここの機材は最高級のものですね」

目をキラキラと輝かせている械刃族（サミュリ）の少年は一刻も早く中に入って作業に取り掛かりたいと、そんな顔をしていた。

カレルに相談したら、届け出を拝借してくれるのかな？

それよりは、事務に聞いたほうがいいんだろうか。

取りあえず、……ちょっと材料を探そうかな。

「シルバは、何をやっているのです？」

「材料を見てるんだよ。……新しい剣を作ろうかと思って」

「シルバって、魔剣を何本も完成させている、豪運の方だとお聞きしておりますが」

「間違っては……いないのか？」

豪運どころの話ではないと思うが。

あれだ、宝くじで１等が当たる１００万分の１よりも少ないといわれている。

金をかければ魔剣が必ず出来上がるということもなければ、しかし魔剣を作るために費用はかかる。

でも、俺の場合は違う。

ヘーハイスからもらった「能力」によって、成功するようにできている。

だから、運ではない。

運だとしても、もう何回か交通事故で死んでいるんじゃないかっていうくらいは当たっているんだ。

「取りあえず、鉄とこれで作るか」
「……今度魔剣鍛冶をするとき、私もいていいです？」
「うん」

順序とかに成功の秘訣があるんだったらまだいいんだが。
ない、って言うのが結論で。もう考えること何もなんだよな実際。

# ２１８　傭兵と護衛（前書き）

？？？視点

## ２１８　傭兵と護衛

「ここが、都市国家ポラリス」

目の前には、大都市が広がっている。

【オウラン帝国】の魔導都市ギージックとは明らかに違う、魔法要素を持たない建物。

数百階はありそうな、巨大なビル群。

見ているだけでも、ここが発展した場所だとわかる。

振り返り、私は後ろにいる械刃族（サミュリ）の男に質問をした。

「ところでゼロ。私はなぜここに？」

「【学園】に向かって、一人連れてこないといけないんだよ。いや、正しくは同行を納得してもらわなければいけない」

「期限はどのくらいで？」

「２年半だ。できるだけ卒業に近い方で、決意させろとルークエルリダス様から」

人の説得は、苦手。

それなら、世界中を回って戦いに没頭した方がすべてを忘れられるから。

幼少期から、私は世界を巡りまわっては戦争に明け暮れていた。

初めて武器を持ったのは５歳の時、なぜそこにいたかもわからなかった私は、傭兵団に拾われて【兵器】として育てられる。

そういう面では、ここにいるゼロと同じ身分なのかもしれない。

特定の主人を持たない【傭兵】か、主に仕え命をも捧げる【護衛】かという違いはあるけれど。

「強いの？」

「うちの次代当主だぞ？　それに、俺が命をささげてもいいって思わせてくれる」

ああ、この男の主でもあるのか、その男は。

私はゼロが【彼】についていろいろと褒めたたえているのを聞き流しながら、それでもあまり興味がわかなかった。

「給料も出ないのに、よく仕えられるわね」

「必要なものは与えられるし、今回も緊急で改修してくれた。家族のように接してくれている。……愛情もある」

無理。私には理解できない。

愛情なんて、この時代なら金で買える。

世の中、すべて金だ。魔力を持たない械刃族（サミュリ）は、体を改造することで人工的に個人を強化できる。

魔力の少ない醒眼族（ウェイカー）は、【法武具（ほうぶぐ）】を除いた剣を購入すればいい。

【異能力（サイキック）】を持つ異能族（サイコル）に至っては、魔剣さえ買ってしまえば負けることはまずないだろう。

そして、強者はそれが自分の能力だろうと、他人の力だろうが異性を引き付ける。

「何を考えているかは分かるぞ。理解できないんだろう」

「そうね。よくわかってるじゃない」

「でも、その美貌は金じゃないだろう？」

……痛いところを突かれた。
でも、この顔も、肢体も金にはなる。
実際、護衛も何度もやってきた。置物としても価値があるらしい。

もっとも、純潔を売ろうなんて思ったことはないが。
男の下心にまみれた視線など、不快感しか覚えない。

「愛情があれど、貴方の体は廃課金でしょうに」
「課金か、いい例えだな」

彼は動じない。だからこそ嫌いなのだ。
所詮、私たちの身分なんて使い捨ての何かであるのに。

名誉を立てて、こんな状態から抜け出したいと【普通】は思っているのに。
この男ときたら、そんなこと思っていないらしい。

「まあ、彼に会ったら君の考え方も変わるさ」

余裕綽々、という表現が一番正しいんだろう。
それまでに、彼を信じ切っているということ。

「いいわ、賭けをしましょう」
「ほう？」

不敵な笑み。
私は、一息ついてその目をまっすぐ見つめ返した。

「期限以内に、私が貴方の言う【彼】に影響されて変わったら、私

は傭兵をやめる」
「ほうほう」
次の言葉で、彼の顔は歪むだろう。
だからこそ、口にする。
「ただし、私が考えを改めなかったら。私は彼を……。シルバ・レイカー・エクアトゥールを、殺す」
「いいよ。君がシルバに勝てるかが問題だけどね。【雪精鍵姫（スニョグリャチカ）】？」
嫌（いや）な男だ。まだ余裕をなくしていない。
それに、その異名は私には似合ってない。
嫌（きら）いだ。

# ２１９　雪精鍵姫

学園の新学期が始まって数日。
寮のメンバーのだれよりも先に授業が終わり、帰ったらそこには二つの人影があった。

「おっす」

一人は、レイカー家の万能護衛であるゼロ＝オールだ。
２週間以内に別れたばかりだから、驚くということはなかったが、まさかこんなに早く再会できるとは思っていなかった。

それよりも気になったのは、拘束衣にも似た服を着ている、肌・髪・服装すべてが白い一人の少女である。
女の美しさを例えるのには様々な単語を使うが、彼女は【白雪】とでも称すればいいのだろうか。

雪、と称してしまうとなんだかふわふわしたイメージがあるが、彼女はしんしんと降り積もるというよりは【吹雪】のように冷たい。
視線も、彼女の放つオーラも、すべて。

そして同時に、彼女が「強者」であるという証明にもなっているようだ。

「何の用事で？」
「ちょっといろいろあってですね」
「ああ、敬語はいらないって言ってるのに」

ゼロはちょっとまじめすぎるんだよな。

こういうプライベート的な空間の中ではいらないって言っているのにすっかり忘れているようだ。

「……詳しいことは追々話していくとして、学園に入ることになった。……この【雪精鍵姫（スニョグリャチカ）】と一緒に」

「その名前で呼ぶな」

おっと、初めて声を発したか。

涼風のような、凛として澄んだ声だというのに。

やはり、少し冷たい気がする。

「……ふん」

いや、思ったよりも冷たいぞ。

まるで俺を親の仇だとでも思っているんだろうか、そのくらいの声色である。

なぜこんなことになっているのかわからず、俺は混乱して思わずゼロの方を見つめてしまった。

「えと、ちょっといいです……いいだろうか？」

「おう」

と、ゼロに手をつかまれ部屋の外へ。

今の言動だけでもわかるが、ちょっと訳ありのようだ。

彼女の姿が見えなくなる場所まで来て、振り返ったゼロの顔は青ざめていた。

「あの人、だめだな」

「何が？」
「いろいろと。殺意しかなさそうな顔だ」
実際それしかないんじゃないかな。
少なくとも、俺に対していい感じの感情は抱いていないのだろう。
これは困ったが、同様にゼロも困ったような顔をしていた。
彼女の対応をどうしよう？
「ところで、なんで来たんだ？」
「ルークエルリダス様からの用件でな、でも今いうわけにはいかないんだ」
「なぜ？」
俺への要件だから、今いってしまっても問題はないと思うんだが、どうなんだろう？
何かあるのだろうか、でも今は俺よりももちろん、彼の方が状況を理解している。
俺は、彼に従おう。
「その前には、何とかしてあのお嬢ちゃんの態度を改めさせなければ」
「ん？」
「あの少女だよ、結構有名な傭兵なんだが。当主様が雇ってね」
まあ、ゼロとは性格の合わなさそうな人だなと思った。
同時に、俺とも合わそうとしないらしい。
正確に難あり、か。

「何ぶつぶつと私の事を」
「【雪精鍵姫（スニョグリャチカ）】、少しは空気を読めよ」
「その名前で呼ぶなといっているだろう」

しかし、俺には彼女の名前を【雪精鍵姫（スニョグリャチカ）】という異名でしか知らない。

「すまん、名前を教えてくれないだろうか？」

彼女に話しかけると、その彼女はわずかに不機嫌な表情を膠着させた。
どうも、俺が彼女に話しかけることがそこまで考え付かなかったのか、それとも殺意を放っていれば俺が彼女に話しかけないと思っていたのか。

残念だが、殺気や殺意をもろに浴びるのは慣れている。
前世で戦争なんてしていたら、そらそうなるし。

「今から死ぬ人に、教える名前などない」

帰ってきた言葉は、それはもう物騒なものだった。
同時に、彼女の手が懐に伸びるのを感じ取った俺は、魔剣の展開を開始。

彼女が刀、だろうか。何かの刃物を俺につきたてる前に、魔剣によって玄関先へ吹き飛ばされていた。

「名前を教えてほしいだけなんだけど？」
「嫌いだ」

その言葉は、俺に対する言葉だろうか。
それとも、俺ではなく別の、いや世界のすべてだろうか。

こういう人を、俺は前の世界で知っている。
環境のせいで、性格が捻じ曲がった人を。

自由もない、誰かに従わなければならない。結婚相手も、そして大人になったら何になるのかも決められている。
その人は、世界を恨み。
しかし、あの時「あの人」に出会って、変わった。

そう、俺だ。

「おま……！」

激昂して俺と彼女の間に割って入ろうとするゼロを制し、俺はそこらへんに漂っていた魔剣の一つをそのままつかむ。

「まだやる？」

相手がどれだけ強かろうが、魔力を持っていようが。
俺の剣は、エスペランサに能力テストをしてもらっている。

特にルークエルリダスさんと、「約束」してからはそれを積極的にすることになった。
レイカー家の次期当主になりたい人なんていくらでもいる。
レイカー家の双子姉妹を手に入れたい人なんて星の数ほどいるのかもしれない。

だからこそ、それ全部ひっくるめて「護る」ために、俺は魔剣を作っている。
俺は聖人ではない。実に保身的でもある。
自分と関係ない人に対しては、関心を持たないのもそう。
だが、自分との関係者を護るためなら、世界を文字通り敵に回してでも守り切って見せる。

そうしないと、この世界でやり直せる意味がない。

「黙れ」

静かに、彼女が憤った。
【雪精鍵姫（スニョグリャチカ）】、とはよく言ったもんだ。
どこが姫なんだろう、そのオーラは、魔女に近い。
消え去れ、と彼女の口が動いたのが見え、俺は。

ちょっとまずいかもしれない、と無意識に魔剣を展開しながら頭の隅で考えた。

# 220　コエ

嫌いだ。

会う前から知っていたことだった。もともとそんな気はしていた。

なのに、私は。

そのことを、再確認する羽目になった。

「消え去れ」

体の中に溜め込んできた、ルークエルリダス・レイカーに雇われた時から溜め込んできた魔力を凝縮させて撃ち出す。

相手が魔剣使いだということはデータとして知っている。でも、これだけの魔力をぶちこめば、龍眼族（レザール）でもただでは済まない。

学園ごと、シルバ・レイカー・エクアトゥールには消えてもらう。

嫌いだ。大っ嫌いだ。

その「何でも知っている」みたいな眼も、恵まれた種族も、その魔剣も。

私の役目はここで終わる。このままこの男を殺して、契約を破棄すればいい。

「おっと、危ない」

しかし、私の打ち出したはずの魔法は、いとも簡単にエクアトゥールに防がれた。

やはり詠唱に時間がかかるからか、発動途中で彼の魔剣が私を囲んだ。

魔法は苦手だ、その一瞬だけでも隙を作ってしまうのが。
その間、集中しなければならないのが、私にとっては致命傷にもなり得ている。

見る見るうちに、私の魔力が消えていくのを感じた。
魔剣がそれを吸い取ったのか、一気に意識も遠のく。

でも、私はこんなところで意識を失えないようになっている。
魔法がだめなら、彼と戦えばいい。

剣技なら、私の方が上のはず……。

「【雪精鍵姫（スニョグリャチカ）】！　やめろといっているだろう！」

しかし、その前に割りはいってきたのはレイカー家の護衛であるゼロ＝オールだった。
捨て犬が飼い主に拾ってもらうように、彼はレイカー家に拾われたというのに。
何が忠誠だ、役立たずと判明すれば捨てられるというのに。
何を信じているのだろう。

そして何度もいうが、私はその名前が嫌いだ。
どこが姫だ、何が「精霊」だ。私に美しい例え言葉など、何一つとして似合わないというのに。

この血で汚れた肌も、血を吸ったようにきめ細やかな肌も。大嫌いだ。

【雪精鍵姫（スニョグリャチカ）】という異名を持った人ではなく、もう一度名もなき

傭兵として世界中を旅してまわりたいのに。
この龍眼族（レザール）は、私が彼を殺すのを許してはくれないらしい。

「あぅっぐぐぐぐ！？」

いつの間に、私の目の前へ近づいてきたのだろう。
瞬きの次の瞬間には、すでに目の前……。

懐に飛び込んできた龍眼族（レザール）の彼は、私の首をその太い腕の先に生えた手で、挟み込んだ。

「不毛な戦いは終わりにしよう、な？」

あくまでも、彼の声は優しいものだった。
威圧感など何一つなく、ただただ私に諭すように。

その声は、すでにこの世にいない、大切な人の声と不覚にも似ていて。

私は条件反射的に、何もできなくなる。
首は苦しくない。そんなに強く握られていないから。

でも、せき込む。涙（エキタイ）が、眼の裏に込み上げてきて思わず眼を見開いた。

「！？」

しかし、私は見てしまった。その目を。

シルバ・レイカー・エクアトゥールの眼に、紋章が浮かび上がっ

ている。
それが目に入れば。心に恐怖が突き刺さってくる。
動物的な本能が「逃げろ」と全力で叫んでいる。
恐怖のショックのまま、死んでしまう。

「……ん、大人しくなったかな」

次の瞬間、恐怖はなくなっていた。
一瞬で見事に消え去った恐怖に戸惑っていると、龍眼族の彼は私を不意に抱き上げる。

「悪い、少しやりすぎた。……今日はゆっくり休ませる」

抵抗する気力もなくなった私は、ただただうなずくことしかできなかった。

「……嫌い」
「嫌ってどうぞ、ご自由に」

そっけない。普通の男なら、私がそういうだけでおろおろするのに。
……そういう動じないところも、大嫌いだ。

# 221　会議

「というわけで、仲良くしてやってくれ」

俺の話を聞いたみんなしかし、いい顔を決してしなかった。
特に、彼女に対して敵意丸出しなのはエスペランサとクインだ。
エスペランサは俺の作った魔剣を握ったり離したりして、いつでも彼女がとびかかってこれば迎撃する気満々でいたし。
クインはクインで、同じ状況になった時にレオに指示は出しているようだ。

ちなみにアンセルは、彼女に敵意は持っていないものの心配そうな顔をしている。
どうしても、いろいろと心配事というものはありそうで。

「【雪精鍵姫（スニョグリャチカ）】。その名前は知っています」
「その名前はやめて」
「では、名前は何というのです？」

まあ、それは普通の対応だろう。
それに対し、しかし彼女はぼそっと一つの単語を呟いただけだった。実に不機嫌そうに、またちょっと俺を見てぶるっと震えて、「ヒョウリ」と。

「ヒョウリさんですか、よろしくお願いいたしますね」
「……【星天の獅子座（ステッラ・レオン）】。聖王国の側近がここにいるということは、ここに聖国王もいるということ。……なるほどね」

そして勘がいいのは、俺たちにとって困ったことでもある。

いや、彼女は有名な傭兵だ、もしかしたらクインの父親……つまり前代の聖国王と出会っていたのかもしれない。
でも、彼女が今の状況、空気を読んで何も言わないという保証はない。

「んえ？　えっ？」

混乱しているのは、もちろん何も知らないレウスだろう。
しきりにクインのほうと、ヒョウリを見つめていた。

「考えるな、感じ取るんだ」
「え？　え？」

考えちゃいけないと思うんだけれども。
正直、まあいろいろとあるからな、まあいいや。

今はそれが問題ではない。はやくヒョウリが安全に、ここで暮らしていくことを誓わせないと。

「それで？　結局はどうなんですか？　そもそもお父様が遣わしてきたのなら、私とシルバ君には知る権利があります」

もちろん、クインにも。
ここで話を続けなかったのは、彼女の気遣いだろう。

クインはしかし、残念なことに警戒心を解いていない。
俺にしかさっきは放っていないのだが、どうなんだろうか。

「わかった。……学園の中にいる間は、自分から危害は加えない」
「それでいいですかね。みなさんよろしくお願いいたします」

レオが場を取り仕切り、取りあえず会話は終結する。
これからどうなるかわからないが、「学園内の平和」というものは保障されたのかもしれないな。

話が終わると、ヒョウリはすぐにどこかへと姿を消す。
それを見ながら、俺とゼロは顔を見合わせた。

「どうすればいいんだ？」
「いや、頑張って籠絡してください」

籠絡って。

しかし、ゼロの方を向くと彼はかなり真剣な顔でこちらを見つめているのだから困ったものである。

「どうしたんだ？　そういえば、まだ理由も聞いていないぞ」
「本当に口に出しにくいことなんだよ。……特に、シルバには」

ゼロは俺が、かなり保身的な人間だということが分かっているからな。
ということは、直接的には俺や、俺の周りの人には関係ないことなのかもしれない。

「いいよ。もしここで言ってくれないのなら、エスペランサに聞く」
「あああそれはだめだ。言うから言うから！」

ゼロはエスペランサの正体が「希望神ホープ」であることを知っている数少ない人の一人だからな。数少ないとか言っておきながらも、なんだかんだで１０人近くいるのはまた別の話だが。

エスペランサは「自分はすべてを知っているわけではない」とか言っていたが、このくらいの事わかるだろう。

「ええとな？　冷静に聞いて」

「うん、俺は基本冷静だが、どうした？」

俺がうなずくと、ゼロはごくりと息を飲み込む。

そして、俺を見つめて。

「最強の龍眼族（レザール）を、探せって言われたんだ。それで君しか龍眼族では知らないし、すでに世界的には君が有名になりつつあるからさ」

最強の龍眼族だってさ。

いい響きだな、本当に。

# 222　一体型武具（前書き）

222話達成です。

# 222　一体型武具

「はぁぁ、心配ですよ私はシルバさんが！」

その日の夜、俺に向かってそう呟いたのはエスペランサだった。
もう夜も暮れ、明日の登校のためにほとんどの人が自室に戻っているだろうそんな時間だ。

エスペランサの言っていることは、ヒョウリのことだろうとは予想ができる。
そもそも、俺とヒョウリの戯れに近いドンパチに、一番早く駆けつけたのは彼女なのだ。

「それにしてもヒョウリ、か」

感じにするとしたら、どうなんだろうか。
あの異名、【雪精鍵姫（スニョグリャチカ）】といい、その吹雪のような態度・口調といい。

普通に考えたら「氷莉」とかかな、よくわからないけど。
この世界、人の名前に漢字はあまり使わないらしいから、本当の意味が込められていたとしてもこちらで判別するのは難しい。

もしかしたら、「表裏」なのかもしれないしな。

「ヒョウリのデータとか、持ってる？」
「持ってますが、必要なんですか？」

なんで持っているんだろう、という野暮な疑問は脇にどける。

彼女は人間の事は分からないから、彼女の知識ではないはずだ。
どこからか、情報を取り寄せてきたか。

……クインに応援を要請したのかもしれないな、エスペランサならそのくらい許可をとるまでもなくできるだろうし。

「失礼します」

そんなことを言っていると、部屋のドアがそっと叩かれた。
エスペランサがそちらに向かったのだが、ちょっと開いたドアの隙間から見えたのはレオの姿だった。

彼女を部屋の中に招きいれ、クインの様子を訊く。

「クレインクイン様は、すでにご就寝になられました」

そこではぅ、と一息。
息を吐いたのではなく、息を吸ったのが「ふぅ」ではない原因だと思われる。

「どうした？」
「あの傭兵、ちょっと厄介ですね」
「どういう意味で？」

忠誠心というものが分かっていないのです、とレオは息を次こそ吐く。

「私はクレインクイン様に、ゼロ＝オール君はシルバくん含めレイカー家に、ほぼ忠誠心だけで従っているじゃないですか」
「そうなの？」

「はい」

正直、俺も忠誠心とかよくわかっていないからな。
前世は、親友と従兄弟が言っているままに戦いに参加した。

もちろん、なぜ戦うのかっていうのは知っていた。
自分の生活と、自分の大切な人を守るため。

それを知っていて、しかし俺は護り切ることはできていないんだろうな。
実際、「敗北」して俺はこの世界に来たのだから。
だからこそ、この世界ではみんなを守りたいと思っている。

「まあ、いいんじゃない」
「ん？　愛情とかあるじゃないですか。私たちであれば、主を慕うっていう意味でですよ」

それはね？　確かにあるけどさ。
環境とかもあるんだよな、本当に。
愛情を知らない人に対して、愛情をいくら説いたとしてもそれは理解できないんだから仕方ないね。

「あーレオ。あとで頼みたいことがあるんだけど」
「はい、今日ですか？」
「近いうちに。ちょっと開発したいものがあるから」

はい、と頷くレオ。
俺の作りたいものが分かっているのか、しかしその顔はあくまでも笑顔だ。

「クレインクイン様には作らないのです？」
「創るけど、まだ今の時期じゃないかな」

元の形って言うか、もうクインの試作品はできているんだが……。
クインが本当に必要になった時に渡すし、それは今じゃないと思っている。

そんなことよりも、今先に作っておくべきはレオのものだ。
ヒョウリにも作ってやるつもりだが、ヒョウリは後回し。
取りあえず、クインを護衛しているレオを優先する。

実際、ヒョウリの性格も残念ながら俺が後回しにしたい理由の一つだ。
殺意を向けてくる相手に、どうやって武器を与えようなんて言う感情が出てくるのだろうか。

今回はしかも、一式創る予定でいるし。鎧と、武器とその他いろいろ。
その他いろいろと武器は鎧に合体させられるようにする。
武器も変形させる。レオがどんな武器を得意とするかはわからないが、取りあえず剣・槍・斧くらいに変形させられればいいだろう。

「わかりました。……ええとでも私クレインクイン様から離れられないのですが」
「私が代わりにいるから、大丈夫です」
「そうですね、エスペランサさんなら」

レオも知っているからなぁ。
ていうか、知らなくてもエスペランサが謎法族（カラミタ）である時点で心配は何もないだろう。

## 223　魂のお守り

「ん、今日はレオの代わりにエスペランサ様か」
「なんだか、陛下に【様】付けで呼ばれるのって何か違和感がありますね」
「そうか？」

今日は、シルバさんがレオさんをお呼びして魔武具を作っているので私は代わりにクレインクインさんの方に来ました。
一言、話しかけてくれた言葉。やっぱり何か違和感があるのですが、どうでしょう？

「この世界にいる限り、私は身元不明の【エスペランサ・ホープレイ】ですよ？」
「そうか。……うーん、しかし」

神につけないのも変な感じだ、とクレインクインさんは難しい顔をする。
普通なら堂々としているのに、今は完全に力を抜ききっているようで。
年相応の女の子。それが一番、今の彼女の状態に近い言葉だと思います。

「王宮は息が詰まる。……ここの方が何倍も居心地がいい」
「それは、聖国王様ですからね」

私は、息が詰まることはないと思います。
神界では、気なんて遣わなくてもいいですし。
私のこの、口調はそもそもの癖でこれが自然となっているのです

から。

「レオが、シルバに鎧を作ってもらってるって聞いたんだが」
「はい、シルバさん創ってますね」
「……羨ましい。私も欲しいぞ」

ぶぅー、と頬を膨らませるクレインクインさん。
でも、よく見れば彼女の机の周り、書類だらけなんですよね。

少しくらい、拾い上げても大丈夫でしょうか。

「あの、これらは？」
「シルバに関する資料だ。……見るか？」
「はい」

私には、人の事はあまりわかりません。
といっても、クレインクインさんが誰か、いったいどういう身分でいるのかなどは分かります。
が、過去を探る能力はありませんし、今何を思っているのか、なんていう読唇術は「神の力」ではなく、実際に見て判断するしかありません。

実際、この世界に来ることを許されているのは私だけなんですが……。
スロツ＝トールはどうやってここに来る許可を取ったんでしょうか、たぶん独断で来たんでしょうね。

まったく、運命の神でありながら自分は自由奔放なのですから、困ったものです。
今度、レグルスとヘーハイスに頼んで縛ってもらいましょう。神（グレイプニル）

縛りの鎖で。

「ところで、エスペランサは何か作れるのか？」
「お守り程度なら。……でも、信仰心にかかわりますよ？」

私の一部を削りとって作るお守りっていうのがあるんです。
「神の魂」を削って、というほうが正しいのでしょうか、本当に効果があるんですよ。

でも、本物というのはほとんど出回っていません。
私が与えるものですから、当たり前ですね。
とある方が、そもそもアレですけど。

しかし、偽物は随分と多く……。
プラシーボ効果では、何にもならないんですよ？
だから神殿では絶対に取り扱ってないって言わせるんです。

「カエシウス聖王国は、希望神ホープの信者が一番多い。し、私もそうだからな。様ってつけたくて仕方がない」
「様は、だめです」

断言。
再度クレインクインさんは頬を膨らませたが、無視して手を組む。

「クレインクインさん、友好の証ですからね？」
「……うー」

信仰の表れにはさせない。
私の、この世界でできることなんてシルバさんの周りでしかできないし、影響も少ないのです。

だから、「友情」とする。それが一番でしょう。

「これを、持っていてくださいね」

「ん？」

「危険人物がクレインクインさんに近づいたら、知らせてくれますよ」

私が作ったのは、本当に簡単な守護のお守り。

取りあえず、暗殺者とかあとは……魔獣とかですかね、クレインクインさんに殺意を抱く人に対して合図を出すようにしました。

シルバさんみたいに、自動迎撃なんていうものは作れませんでしたが、クレインクインさんも謎法族（カラミタ）です、大丈夫でしょう！

「綺麗だ」

「そうですか？」

「うん」

金色で、ちょっと弱弱しい光がともっていて。

光が鼓動のように揺らいでるのは、それが私の魂の証。

## ２２４　試作品（前書き）

おはようございます。４時とちょっとです。

# 224　試作品

エスペランサがクインの場所に言っている間、俺はじっとレオの体を見つめていた。
まな板じゃないか。……鎧を作る際にはありがたいけれども、ちょっと……ああいいや別に。

「ちょっと、視線がいやらしいと思ったら……。あの、ため息をつかないでください」
「いや、見ておかないとサイズの検討がつかないんだよな……」

レオの属性はなんだっけか。
いや、寒冷地で戦うのならば、氷属性に強くした方がいい。
やっぱり地帯での影響はあるからな。

「どんなものにしたい？」
「……どう、とは？」
「これがほしい、あれが欲しい。……まあ、取りあえず試作品を作ってから探せばいいか」

大体これくらいかな、と。
レオが見つめる中、俺は素材を取り出して成型に差し掛かる。
外に向かって冷気を発散するようにした方がいいのかな、でも内側……装着者はある程度の体感温度を保つようにしよう。

必要な武装は、一体型の変形可能な手持ち武器と、分離可能な一体型武器だ。
クローでもつけてみればわかるかな。……魔力でフックになるようにすればいいと思うし。

「レオの魔力って、濃度はいいほう？　量は？」
「そうですね。濃度は上、量は中でしょうか」
ということは、彼女の力は……。能力は、魔力ではないということか。
いまいちよくわかっていないんだよな。まあ大丈夫だろう問題はないはず。

「シルバさんの眼って、なんでもわかると思っていました」
「【龍眼（レガリアス・アイ）】の中には、そうなる人も多いらしい」
特別な「眼」を持つ種族なのだから、本当はなんでもあるのだろう。
しかし、俺の手に入れたのは「威圧」というものだった、ただそれだけである。

別に、今の能力が気に入っていないなんてことはない。
どんな人でも、これさえあれば止まるのだ。
争いを、必要以上にしなくてもよくなる。このことに何か問題はあるのだろうか、否、ない。

「ないとおもいたい」
「いったいどうしたのですか。……それにしても、魔武具創造って言うものは本当に美しいものなのですね」
幻想的。そのことばが一番この作業に対していい言葉だろう。
しかし、この作業は幻想などではなく、魔剣も実在するものだ。
この世界で、幻想的といえばそんなことを指すのだろうか。

「完成が楽しみです」
「……ああ、俺もだよ」

完成させるのは俺だが、俺自身でさえそれを楽しみにしている。
だって、この世界ですでに知られている「魔剣」でもなんでもない。

自分が名付ける【魔武具】が一式、出来上がるのだ。
最初は金にならなくても、俺がクインを拒否したわけではないことの証として、これは完成するだろう。

「シルバさんは、こういうのを作るのは好きなんですか」
「好きだよ。……かなりね」

前世にいたときは、何かを作り出すような才能は何一つなかったが。
今回は、それがあるのなら、楽しんで作るべきだろう。

「でも、例えば犯罪などに巻き込まれるかもしれないじゃないですか」
「そうだな」

そういうときはどうするのです？　とレオ。
正直、それもあるから今のところ知り合いにしか作っていないというのもある。
どうしても、まだ店を構えていないからということもあるにはあるのだが。

「それは追々考えていくつもり。……それよりも、今日の作業は終

わったから」
「はい」
「じゃあ、お休み。……ありがとうな」
「いえいえ、こちらこそ」

レオと挨拶をかわし、彼女が部屋を出ていくのを確認して俺はもう一度、製作途中の鎧を見上げた。
どちらかというと、ロボットのような雰囲気すら出しているようにも見えた。
しかし、完成は本当に目の前だ。試作品とはいえ、これで問題がなければ……。
いいのだが。

# 225　感情

嫌いだ。

「はぁ……」

なのに、この男は私の向かう先々で必ず姿を現す。

こちらは会いたくないのに、だからと言って彼も意図して一緒の場所に向かっているわけではない、そのくらいはわかる。

だからこそ、この状態に腹を立てているのだ。

「……」

彼は、私に自分から一切話しかけようとしない。

そもそも、私の周りには誰もいなくて。

逆に、彼の周りには必ず数人の人がいるのだから、当たり前なのかもしれない。

「……」

シルバを、恨むようににらみつける。

決して声は出さない。本能的に、彼とは合わないと告げられているのだからやっぱりそうなのかもしれない。

でも、不思議と嫌悪感はしない。確かに彼のことは嫌いだと思っている、だが嫌ではない。

そんな不可解な状態にいるからこそ、訳が分からなくてさらに嫌いになる。

確かに、ゼロ＝オールの言ったとおりだ。彼と一緒にいると、それだけで心が洗い流されていくような感覚がする。
どうしようもなく面倒なことだけれども。どうしても。

彼は私に、考えを改めろとも何も言っていないのに。

「……ふん」

とりあえず、この場所から逃げよう。話はそれから。
私は逃げるように食堂を飛び出し、日々の鍛練を行うために修練場に向かう。

今日も、脅威はその牙を研ぐ気配すら見せない。
俺、ゼロ＝オールはそう判断して、自分の主の行き先へと誘導する。

「いいって、ゼロ」
「そういうわけにはいかない」

結局、今の俺でもシルバにはかなわないのだろう。
俺はただの、改修を繰り返した【械刃族（サミュリ）】で。
彼は【龍眼族（レザール）】である前に転生者だ、生まれる前からのスペックが明らかに違う。

「でも」

でも、何とか強くなりたいものだ。
主が護衛の強化をするのは、いったいどうなんだろうと考えて、はぁとため息をつく。
だめだな、そんなことをしていては。
【械刃族（サミュリ）】は、改修によってしか強くなれないのが、本当にもどかしい。

「……思い悩むな」
「気づいてた……か」

主を守る立場であるのに、何で俺は主を心配させているんだろう。
自分が情けない。

「試作品が問題なく完成したら、次は【械刃族（サミュリ）】用の装備の練習をする。……もう少し、待ってくれ」

またレパートリーを増やすんですか、シルバ様。
そう叫びたくなるのを必死にこらえて、俺はうなずく。
完全に俺のためじゃないか。なんでそこまでできるんだよ、本当に。

俺はあふれ出しそうになる感情を、相当無理してため込む。
……俺は、やさしさに弱い。

## 226　守られる必要

試作品ができた。
俺は作業が完全に完了した作業台を簡単に片付け、席から立ち上がる。
集中力も精神も、肉体も少々消耗させすぎたかもしれない。今とんでもなく俺を襲っているのは、眠気だ。

寮にある、ふかふかのベッドで寝たい。
あわよくばエスペランサに包み込んでもらうことも可能かもしれない。
彼女なら、喜んでそうやってくれるだろう。

そんな希望を抱きながら、おぼつかない足取りで俺は隣の部屋へ向かう。

「はい、シルバさん？」

彼女は、変わらずそこにいた。
金髪をふわふわと、さらさらときらめかせてこちらを見つめるのは、美少女だ。

神々しさすらかいま見えるほどの、表現しきれない美しさに。
女神のような慈悲深さを持つ。

それもそうで、彼女は女神なのだから仕方がない。

「今日一緒に寝よう」
「はいっ」

と、ここで彼女は俺の状態に気づいたようだ、ふらふらしている俺の体を支え、「大丈夫ですか」とこちらを見つめる。
その愛くるしさたるや、ダメだ言葉が眠気で出てこない。

「お風呂で頭とかぶつけないでくださいね？　一緒に入りましょうか？」
「いや、そこまではいいから、ベッドで待っててくれる？」

献身的すぎて感動するから、ちょっと自重。
エスペランサの心は底なしに深そうだ、人をダメにしそう。

正直、今までエスペランサが恋した人々が、なぜエスペランサを捨てたのかよくわからない。
ここまで性格・容姿と揃っている人はいないだろうよ。

さて、風呂に入ろう……。

「試作品、完成いたしましたのですね」
「うん。……ちょっと時間がかかっちゃったけど、ごめんね」
「いいえ。……造形も、少し武功ですが試作品にしてはディテールに凝りすぎているような気がします」
「試作品だけど、あとはデザインだけにしたかったから」

試作品をつついたり、ランプがつくのに対して眼を輝かせていたエスペランサは、すでに意識を失いかけている俺に気づいて「失礼します」と布団の中に潜り込んでくる。

彼女の手が俺の頭へ伸ばされ、胸に押し付けられた。
柔らかい感触が、いつもは俺を扇情に駆り立てるのに今回は余計眠りを誘う。
いい感触だ。このまま、眠るのも悪くない。

「いつもなら、口説き文句一つや二つは言ってやるんだが」
「いりませんよ。そんな段階、もう終わっているでしょう」

彼女の口調はあくまでも、優しい。
ゆっくりおやすみなさい、と肩をぽんぽんされ、そのたびに俺の意識は揺れた。

脳が揺れる。それほどまでに、眠い。
だめだ、意識を手放しそう。

「おやすみなさい」

あ、寝ましたね。
私は、すうすうと子供のように寝息を立てるシルバさんから目を離さず、そっと彼を胸から話します。

愛し合っているときは全然問題ないのですけれども、龍眼族って髪の毛が異常に硬いですし、鱗も尖っているんですよね。
さすがに、このまま寝ていると肌に突き刺さるので、ちょっとだ

け。

「それにしても、……うー」

ちょっと、詰め過ぎなのですよね。もう少し、無理をしないで肩の力を抜いてもいいと思うのですが。

……シルバさんの性格上、私が何を言ったって無駄なのはわかっているのですが。

それでも、無理をしてでもいいます。嫌われたって構いません。

……まず、嫌われないかな、って淡い希望を抱くのは、私自身が希望にすがりつく存在だからでしょうか。

希望なんていう曖昧なことば、色々と問題なのですが。

シルバさんは最終的に神の伴侶になるお方なのですから、私が手綱をちゃんと引っ張っていないとダメですよね。

……もう少しだけ、もう少しだけ近づきましょう。

髪の毛、もう少しだけ柔らかくならないんでしょうか。完全に針なんですが。

……東洋種はそんなに硬くないはずなのですけれどもね。

あまり考えないようにしましょう。整髪剤なども使っていないでこれなのですから、諦めるしかないでしょう。

本当は男でもできるのですが、シルバさんが嫌がるので神の力は使いません。

だからこそ、そばにいたいのです。

守ってほしいから。……私は守られる必要がないかもしれませんが、やはり私も女の子なので。

それを実現してくれるのが、将来的に神を超えるシルバさんなのですから。

## ２２６　守られる必要（後書き）

新連載、「ゼファーヴェイン・ルカ」もよろしくお願い致します。

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ３９２４ｃｐ／

後々シルバっぽい人も登場するかもしれません。

# 227　試作品完成

「レオ。できたぞ」

クインから許可をもらい、レオに試作品を着せる。

着せる、というよりは装着に近い。彼女に軽くかぶせ、彼女に「機動（アウェイク）」とコマンドを発声してもらった。

「ああ、おー！」

鎧は彼女の体に密着し、彼女はそれが普通の服よりも着心地のいいものだと気づくだろう。

ちょっと魔法成分を多めに設定してしまったが、まあ問題は少ない。

そんなことよりも、今はレオの喜ぶ顔が最大のご褒美である。

なぜこんなにも可愛いんだろう。クインには申し訳ないが、雇ってみたくなった。

まあ、無理だからこれは妄想で終わらせるつもりだが。

クインに申し訳が立たないからな、とりあえず彼女のものも与えたほうが良さそうだ。

「これ、クインに渡してくれないか？」

きゃっきゃとはしゃいでいる彼女にさやつきの、大型ナイフを渡した。

新しく作った魔武具だ。大ぶりに振るよりは、懐にも隠しておけるナイフの方がいいようが気がして、とりあえず作っては見たが…

…。

まだ、肝心の魔石を埋め込んでいない。
これも試作段階だ。クインの安全を一番に考えるのならもっと頑張らなければ。

「変形式なんですね」
「力技でもなんとかなるように、斧にも変わる」

ソードブレイカー付きの大型ナイフ、手斧、その他いくつかの武器を仕込むつもりだ。
魔力でナイフを飛ばして、射出式にしてもいいのかもしれない。
とにかく、クインの安全をまずは確保するのが最大の目標だろう。

「とりあえず、今日1日はずっとそれを着ているといい」
「ほかにコマンドはございますか？」
「マニュアルは作ってあるから、いろいろ試してみてくれ」

試作品だから、途中で故障したらすぐに呼べ、と。
変形機構が故障しやすいが、おそらく完全に彼女が動けなくなることはないだろう。
この鎧、彼女の身体能力を鎧の裏に張り巡らせた魔法増幅装置で強化もしているのだ。
だから、機械の部分が大破しても魔法は亡くならない。

「絶対に、クインに向けないこと、いいな」
「わかっておりますとも」

威力調整してないから、死ぬでは済まない可能性もある。
ただ、クインは謎法族（カラミタ）だから、多分攻撃しても守られたりするん

だがな。

「これを、私に？」
「はい、シルバさんが作った試作品の魔武具です」

できれば、俺に直接渡されたかったと少々不満げな顔だが、それを無視して俺はエスペランサに手を伸ばした。
レオも愛らしいが、俺はやっぱりエスペランサのほうがいいな。
別に、レオが攻略できるとは全く思っていないが。

そんなことよりも、あの先輩方二人はどこにいったんだろう？
夏から全く見かけていないんだが、やっぱり俺は嫌われたんだろうか？

ちゃんと今度、彼女たちの寮を尋ねたほうが良さそうだ。
俺ははあと息を吐き、隣できょとんとしている少女を見つめる。

「そういえば、そろそろ年末ですね」
「……もう、2週間もないぞ？」

年末の前に、レイカー家姉妹の誕生日がある。
今年は殆ど学校に行っていないんだよな。来年もっと頑張らなきゃ。

……頑張れたら、の話なんだがな。

## ２２７　試作品完成（後書き）

この章はこれでおしまい。
まとめを書いて、短編をいくつか上げて次です。

次はリンセルとアンセルの誕生日、年末年始を描く予定です。
これからも、よろしくお願い致します。

追伸
現時点で、累計２０９７位くらいに位置することが判明しました。
２０００まであと少しですね。本当に、応援有り難うございました。

# ２２８　小話　送り出す人々（前書き）

三人称視点。

お久しぶりです

## 228　小話　送り出す人々

「ちょっと疲れた。今年はいろいろありすぎて」
「でも後継者も決まりましたし、結果としてはいいのではないでしょうか？」

雪に包まれた銀世界。山の麓にある白い城のテラスに、一組の男女が立っている。
1人は風格のある中年の男性で、もう1人はその男に寄り添っている慈悲に満ちた表情の女性だ。

男のほうをルークエルリダス、女のほうをスピラルという。

「そうだな、シルバが【レイカー】の名前を継いでくれるんだ。次代は安泰だな」

男は、自分の右掌を上に向けてそっと開く。
彼の発するのは、【光】属性の異能（サイキック）だ。
魔法よりももう少し温かみのある。生きているような鼓動する光。

その光は太陽の方向へ飛んでいき、消えた。

「スピラルは、私の選択が間違いだったと思うかい？　私がラン・ロキアスではなく、シルバ・エクアトゥールを選んだことに対して」
「両方共実力のある転生者ですが、正直言って私はシルバさんのほうが、いい印象が残りました」

つまり、私の選択は間違っていなかったと。
ルークは安心するとともに、今頃学園で事件に巻き込まれている

だろうその少年のことを考える。

彼がとあるルートから、「この世界が危ない」という情報を聞きつけたのはつい1週間ほど前のこと。

そのために、若手の8種族を1人ずつ、集める役目も託されたルークは学園の中で探してもらえるように、大幅改修した【械刃族(サミュリ)】ゼロ＝オールと【種族不明】のヒョウリを向かわせたのだ。

種族不明とはあるが、ルークはその大体の予想はついていた。

おそらく【腕獣族(ケレイジ)】。魔法にも対応した両刀の個体だろう。

物理法則に逆らうような動きを「生身」でできるケレイジに、魔法の才能を付け加えるとそれはもう、ても付けられないことになる。

なるが……。

「まあ、シルバの魔剣には正面では勝てないだろうね」

「……それは、確かなことですが」

彼の魔剣のすごいところは、きちんと自分の意思を持っているところだ。彼がきちんと手入れをしているからこそ、愛情を込めて接しているからこそアレだけの性能を発揮できるのだろうとルークは考えている。

「ヒョウリも、もう少しやさしくなってくれれば楽なんだろうけれど」

「シルバさんなら、なんとかしてくれます」

何でもかんでもシルバ頼みはちょっと、彼に申し訳ないなと考えてしまう。

どうしても、シルバというのは何でもかんでも自分のせいだ、だから自分で何とかしないとと思わなければならないことがおおい、と分析しているからだ。

「アンセルの時も、直してからの事後報告だったのは、あれは……」
「あの件は、まだアンセルさんとお付き合いしていないからだって言ってましたよ。今ではこうしているから、ロキアスがした後だと思うからって」

実際、ラン・ロキアスからは連絡がなかった。
リンセルは最近気持ちが揺れに揺れているようで、そのケアもシルバに任せてしまっている。

「本当に、シルバに頼りっぱなしだ。彼への贈り物をどうしよう？」
「この短期間で色々とやってくれた分、たくさんお礼をしなければ」

レイカー家の未来も殻に任せなければいけないのですから、とスピラルは儚い笑顔をルークに向ける。

その前に世界が終わってしまったら、そんなことも水の泡。
世界もが自分たちの次代にかかっていると考えると、その心は重い。

## ２２８　小話　送り出す人々（後書き）

３週間ほど放置してしまい申し訳ありませんでした。
新作のほうを４月中に１０万文字にするのにすべてをかけてしまいました。

しかし、それももう終わり。これからは隔日以上のペースで更新していきます、よろしくお願い致します。

# 229　冬（前書き）

新章開始

1話目は短めで。というかこの章自体短いです。

# 229　冬

冬がきた。この世界の冬は、秋をすっ飛ばしてやってくるため温度の落差が激しい。

風邪をひく人も多いというが、【龍眼族（レザール）】である俺には関係のないことだったようである。

そんなことよりも、なんというか。もう学園に休みがきた。

そうやって考えると俺って今年、本当に学校に言っていないような気もするんだが、それはさておき。

「レイカー城にはどうやって行くんだ？」

「普通に【デルエクス】で向かいますよ。ゼロがここにいる以上、私はそういうことですし」

アンセルがそうやって答えてくれる。ヒョウリも本当は嫌だが、ということを強調しながらついてくるらしい。

ちなみに、初対面のあの時以外、まだ襲われてはいない。

力試し的な目的で襲われたのだろうか、と俺は考えているわけなんだが。

どうも、その様子はないんだよ……。

「【デルエクス】では、隣に座りませんか？」

「……3席あったらね」

「エスペランサさんですか？」

いつも彼女ばっかり、とアンセルは悲しそうな表情を見せる。

アンセルたちにはエスペランサの正体を分かっているはずなんだ

が、そのくらい許してほしい。
いや本当に。

俺は彼女の境遇を聞いて決意したんだから。
エスペランサを絶対に見捨てないって。

もちろん、このコトについてはルークエルリダスさんにも説明は通してある。
俺がアンセル、リンセルとともに結婚する日が来る時、エスペランサは名義上「レイカー」の名前を授ける、と。
だから、最終的に彼女たちは姉妹になるのだ。

「まだ夜の営みも今月はしていませんよ」
「……したいの？」
「シルバさんとなら」

したいのか。確かに、彼女と寝るのは構わないんだが。
……彼女、思った以上に体力があるから【龍眼族】でも少し厳しい場所があったり。

「アンセルはやっぱり美しいな」
「……お褒めの言葉を、ありがとうございます」

口調はいつもと変わりないが、その表情は完全に……なんとも言いがたい。
明後日が誕生日であるアンセルと、リンセルの為にとりあえず俺はプレゼントを用意した。
ひとつは魔剣だ。もちろん2人には、俺のいない間にも何もなくいてほしいから。
他の男の誘惑に関しては心配していないが、別の部分では心配事

がたくさんある。

まあ、もうひとつも魔武具であることに変わりはないのだが。

「さて、そろそろ夕ごはんができる頃ですね」

外を見つめれば、夕闇。

色はオレンジ色から紫に変わってきたころあいだろうか。なかなか綺麗だ。

都市国家のここでもここまでなら、オーロラとダイヤモンドダストが見られるというカエシウス聖王国はどうなんだろう。

「そっちの空はどうなんだ?」

「きっと美しいと思います。……幻想的で、どこか救われるように浄化されますよ」

## 230　ヒョウリとの雑談

「ヒョウリ、学園生活には慣れたか？」
「……」
学園の片隅で、窓の外を見つめている彼女に話しかける。
相変わらずの無表情で、しかし今回は少し不機嫌にも見えた。
もう少しにこっと笑ってみせたり出来ないものか。
「なんで、話しかけるの」
「同居人なんだがそれは」
不機嫌な人に話しかけるのはあまりよろしくない気がするが、しかしゼロも彼女に話しかけるつもりはないらしい。
ルークエルリダスさんは「全員で」って言ってたし、ヒョウリを俺が連れていかなければならないような気がしたから……。
「話しかけないで」
「……そういうわけにも行かないんだよ。一緒にレイカー城に行かないか？」
「……一緒には行かない」
一言、彼女はそういうとそっぽを向く。
1人で間に合わせるつもりなのだろうか。
「そういうわけにもいかないよ」
「……」

キッと彼女は俺の顔を睨みつけた。
どうも面倒なことが起こりそうな匂いがプンプンする。

「みんなヒョウリに敵意を向ける」
「えっと、それはな？」

敵意？　敵意ということは、誰かが彼女を恨んでいるとかそういう意味ではないのか？
でも、俺はそういうのを感じないし、逆に学園の中だったら彼女に言い寄る男も多い。
彼女は決してそんな人を相手にしなかったけれども。

「……貴方は気楽ね。自分の周りに自分を支持してくれる人がたくさんいて」
「あの」
「でもね、その人のいうことに反対すれば敵意を向けられるほうの人間には全くおもしろくない」

ああ、エスペランサとかアンセルとか、クレインクインに好かれているのを嫉妬しているのだろうか。
……いや、クレインクインは俺じゃなくて俺の剣の腕に興味を持っている。

「まあ、分かるけどさ」
「わかってない」

俺は前世にも生をあずかっていたのだから、ソレがわかる。
俺の周りには2人の人気者がいて、その2人が両方共ほぼ同じ意見だったから、何も不安は考えることなくやっていたんだけど。

「私には忠誠心も愛情も、ない。私を縛り付けるのは金。通貨」

こうやって考えてみると、傭兵って寂しいんだな。

俺はそっと彼女の顔を伺うと、次の言葉を待つ。

が、飛び込んできたのは少し困ったような、挑発めいた顔だった。

「それとも、身体で服従させてみる？」

「しないしない」

【龍眼族（レザール）】の腕力で襲いかかったら、そういうことを無理やりする前にいろんな場所が折れてしまうような気がする。

ていうか、……正直エスペランサの方が美しい。

「美しいのはわかる。その顔も、肌も。だけどそういう意味じゃないだろ？」

「エクアトゥールって、簡単に『美しい』って口にするわよね」

……あー。そういう、人なのかな？

面倒だな。俺はため息を付きながら、先ほど傭兵が寂しいかもなんて言っていた自分を馬鹿にされた気がした。

……まあ、だからといって面倒な事に頭を突っ込みたがるのが俺なんだけど。

「……そういうの、いいから」

「分かった分かった。……さて、一緒に行こうか？」

「……もう何も言わない」

ふん、とちょっとだけしょげたように、彼女は顔をそむける。

しかし、俺には彼女の顔がすこしだけ笑っていた気がして。

まあいいか、と息を吹き出したのだった。

「バカ」

「……はいはい」

「……ヒョウリかぁ、美しい少女だ」

【龍眼族】の少年と、彼女が話をしているのを見つめながら僕は少女を見つめた。

白い肌、本当に綺麗だ。眼も、中毒性のある。

アレを手に入れたい。力でもなんででも、服従させたい。

その顔を、歪ませてあげたい。

「まっててね、ヒョウリちゃん」

おっと、屋上から足を滑らせそうになった。

まあいいや、ああいうクールな少女、勝ち気な少女をこう眼に焼き付けておきたい。

はやく、帰ろう。

一日中縛り付けられた彼女の顔を見つめているのもいいかもしれない。

僕は、様々な妄想をしながら、学園をあとにした。

# 231　レイカー城へ

「ヒョウリ、来てくれたのか！」
「……どうしても、っていうから」

明日はアンセルとリンセルの誕生日、ということで俺たち一行は早朝に集まって、ゼロの運転する【デルエクス】に乗り込んだ。
レウスは実家に帰るらしくおらず。クインとレオは一足先に王城へ戻っている。

約束の時間、ヒョウリはうれしいことに現れてくれたのだ。

「ほら、乗って」
「うん、うー、急かさないでよ」

彼女の手を取って【デルエクス】に誘導すると、ちょっと頬を膨らませてそういうのだから愛くるしくて仕方がない。
少しはデレてくれたらしい。本当に喜ばしいことだ。

表情をちゃんとみせてくれたほうが、やはり女性というのは何倍も魅力的に見える。

「いつのまに仲良くなったんですか？」
「……いや、別に」

俺も本当はその原因がよく分かっていない。
ただ、少なくとも前の会話が少しは影響あったのかな、と推測できる程度。
それも言葉通りの「推測」であって、急に彼女がなぜこうなった

のか、悪く言えばこうなって「しまった」のかよく分からない。

「リンセルも、大丈夫？」
「うん」

ちょっと物寂しそうな顔をしているリンセルに話しかけると、彼女はこくりと頷いた。
そういえば、ラン・ロキアスとはどうなっているんだろう。まだ離れられないというのなら、もう少し待とうかとも思ってはいるのだが、よく分からないな。

ロキアスも気まずいだろうな。負けて帰って、状況的には俺から情けを掛けられてリンセルと一緒に居られるんだから。

「出発します」
「はーい！」

ゼロが、後ろにいる俺たちに声をかけた。
今回彼が借りた【デルエクス】はリムジン型、とでも言えばいいんだろうか。
座席が対面になっている。中身もかなり広い。

「～♪」
「上機嫌だな、エスペランサ」

鼻歌を歌っているエスペランサに話しかける。
すると、彼女はこんな言葉を俺に投げかけた。

「まともにレイカー城へ向かうのって、今回が初めてではありませんか？」

「一回目は試験で、二回目は……そうだったな」

1回目は先輩たちと、歩きでレイカー城へ向かった。
正直道はきちんとあったから、そこまで苦ではなかったから何とも思わなかったが、問題は2回目。
1日で、【龍化（ドラコフォーゼ）】して急行したのだ。あのときは本当に無理をしたと思うよ、うん。

「こうやって胸を張ってレイカー城へ迎えるのも。シルバさんが勝ち取った権利なのですよ」
「そうか。……そうだな」

ロキアスとの対決、決戦で勝利した副賞だ。
俺はレイカーという名を授かってシルバ・レイカー・エクアトゥールになったし、アンセルとリンセルを邪魔なく守ることができるようになった。

「だから、素直にうれしいのです」

勿論、エスペランサもだ。
彼女は無条件で、俺と添い遂げることを誓ってくれた。
だからこそ、俺はその期待に応える。

俺が魔剣鍛冶師として活躍することによって、「ヘーハイス」との約束と同時に「アグレス」との契約もちゃんと守ることができている。
エスペランサは、「ヘーハイス」に直談判して死後も俺といれるように契約を取り付けてきたらしい。

それだけやっていると、どれだけ俺のことを気に入っているのか

分かると言うものだ。
本当にそれがありがたいと思っているし、俺はエスペランサに選ばれたことを本当に、光栄に思っている。

「途中で何回か止まるから、その時に済ませる物は済ませてください」
「らじゃ！」

この世界にも、やはりパーキングエリアなんていうものは存在する。
だからそこで、食事をとったりできるということだろうか。

やっぱり、この世界は思った以上に発展している。
発展しているところもあれば、魔法的に発展しているところもあるから本当におもしろい。

【デルエクス】が走り始めた。
揺れを一切感じず、やはりこれは心地いい。
偉大な発明だと思うよ、本当に。

# 232　爪

「久しぶり、でもないかなシルバ」

ルークエルリダスさんは、前であった時と同じ笑顔で俺を見つめていた。

俺の方を見て、アンセルとリンセルの顔を見て、彼女たちにも挨拶をする。

「リンセル、アンセル。おかえり」

「ただいま帰りました、お父様！」

アンセルは元気いっぱいだ。目覚めてからやっと出会えたという喜びと、おそらく俺が隣にいるからだろう。

さきほどから、チラチラとこちらを見つめている。

かわいい。気づかれていないと思ってるのか、時折十面相してみせたりしているがどれも魅力的だ。

しかし、リンセルは挨拶を返さなかった。

暗い表情のまま、俯いて何を考えているのかわからない。

彼女のことがちょっと心配になったし、本当に大丈夫かと不安にもなった。

もちろん、そんなことは【デルエクス】の中にいる時でもわかっていたことだ。

レイカー城に近くなれば近くなるほど、彼女を取り巻く雰囲気というのは陰鬱となっていて。

「リンセル、後で私の部屋に来なさい」
「はい……」

ルークさんは、そんなリンセルを見て思うところがあったようだ。
彼女を心配はしたが、彼女を慰めるのは俺の仕事ではないような気がした。

「ゼロ、シルバとヒョウリの部屋を案内してやってくれ」
「はい」

ゼロ＝オールはレイカー家の護衛に態度が変わっている。
こちらを見てウインクこそしているが、身体は改修後のごつい機械騎士姿で礼をしている。
バイザーも取り付けられ、彼の表情は完全に見えなくなった。

「疲れただろう、晩餐までゆっくりするといい」

リンセルを押しとどめて、ルークさんは俺達に告げる。
どうしようか、さて、自分の部屋で何をしようかな？

「で、やっぱりすぐに魔剣鍛冶に入る」
「車の中で寝たし、特に疲れてないからな」

俺は部屋に到着するとともに、簡易魔剣鍛冶用の作業台を取り出す。
何をするかはそれだけでわかるだろう、魔剣鍛冶だ。

とりあえず、新学年が始まるまでに試作品を正式にプロトタイプ

へとしたい。
クインを出来るだけ安全な状況にしておきたい。
だから、こうやってするしかないのだ。

「試作品ですか？」
「魔鎧（まがい）に組み込む」
「レオさんのためなんですね」
「いや、クレインクインのためだ」

あくまでも、騎士に力は与えるがそれは騎士の使える王の為に使ってもらう。
だからこそ、もし反逆の牙を剥いた時は、レオを破壊するようにもできている。
クインは優しいから、そういうのは嫌がるだろうが。

「で、どうするんです？」
「クローがいいかなって」

ワイヤーで射出するか、どうしようか。
とりあえずトリッキーな方法で相手の意表を付くというのも必要だ。
魔法を糸状にして、回収可能にするのも面白いかもしれない。

「仕込みで？」
「うん」

とにかく、できるだけ早く完成させないと。
俺も納得がいかないし、クインにも心配させてしまう。

「あ、そうだ」

俺は、その射出できる「爪」に制約をつけようと決めた。
レオの安全も必要だが、今回……特に試作品である今は、クインに害が及ばないのを再前提にするべきだ。

「エスペランサ、ちょっと手伝ってくれ」

彼女の名前を呼ぶと、その神は嬉しそうな顔でそっと微笑むと、こちらを覗きこんだ。

「なんですか？」
「どこまで遠く、魔法の糸が続くか試したい」
「……分かりました、とりあえずレオさんを想定して魔力を放出してみますね」

なんだ、その能力は。
思った以上にすごいものだな。

「このくらいでしょうか。転生者で、多めに補正がかかっているとしても」
「城から城の端までか」

３００m位か。このくらいなら十分だな。

俺はそれでいいと判断し、作業台でそれを組み込み始める。

# 233　事態

「あ、リンセル」

ゼロに夕飯が出来たと聞いて食堂まで案内されると、そこには他のみんながすでに集まっていた。

アンセルに連れられて、少々吹っ切れたような顔をしているリンセルを見つけたが、彼女に話しかけられる前にルークエルリダスさんはこちらへと手招きする。

学園の話が色々聞きたいんだろうか、隣に案内すると彼は俺に話しかける。

「リンセルのことなんだが、シルバはこのままでもいいのかい？」

……ああ、リンセルのことか。

もちろん、大切には思っているが、だからこそ今のところ手が出せないッて言うこともあるな。

俺がたとえば愛情で彼女を縛ったとしても、それは彼女の幸せにしていることになるのだろうか？

そんな俺の考えを上手くまとめながらルークエルリダスさんに伝えると、彼はうーんと腕を組んだ。

そんなことよりも、一番問題なのは、直接的に言わないラン・ロキアスだと思っている。

彼が一言「もういい」とでもリンセルを突き放せば、少しはましになったかもしれない。

いや、それだとリンセルが更に沈むか。困ったな。

「とにかく、様子見で行くのか？」

「ここにいる1週間で何とかしたいですね」

学園のほうでは出来なかった、リンセルとの時間は格段に増えるだろう。

今のうちに何とかしておいたほうがいいか。

「とにかく、みんなご飯を食べよう」

円卓に俺を座らせると、「今日も美味しそうだ」と眼を細めた。

さて、食べますか。

それにしてもリンセルの表情が暗い。

食欲もあまり無いようだが、ほんとうに大丈夫だろうか。

アンセルにあとでケアを一回任せよう。それでなんともならなかったら俺が何とかしておいたほうがいいのかもしれない。

「どうかしましたか、シルバさん」

何も言えずに、飯を食べていると俺の異常がきになったのかアンセルが話しかけてきた。

そんな彼女に、俺はあとでと目配せすると、もう一口掻き込んだのであった。

「やっぱり、だめだよおねえちゃん」
「……そうですか」

夜、姉妹の部屋でリンセルは姉にそう言った。
何がだめか、それはもちろんロキアスとの関係を断ち切ることだ。

何度も、リンセルは彼と離れようと思った。
最近に至っては、彼も気まずいのかリンセルと話をすることも少ない。
だから、本当は彼女がラン・ロキアスと一緒にいる意味が無いのだ。

「諦めたほうが絶対いいのに。境遇は悪いんでしょう？」
「それでも、好きになっちゃったんだから仕方ない……でしょう？」

相手がいくらダメ男であっても。好きになってしまって彼女は相手に依存してしまっている。
それをアンセルはひどく心配しているのだ。

「身を滅ぼしますよ、リンセル」
「おねえちゃんはどうなのさ」
「私は、幸せでいっぱいですけれど？」

その答えに、決してリンセルは納得しなかった。
一度は姉妹でランを取り合ったのだ。それを相手は忘れている。
事実、それはしかたのないことなんだが、この状況に立たされている彼女が冷静でいられるはずもない。

「おねえちゃんだって、一回はラン君を好きになったんでしょ？」
「記憶が無いのですもの」
アンセルが即、真顔で答えた。
その顔を見つめて、リンセルは眼に沢山の涙をためている。
「狡いよ」
「エスペランサさんに頼んで、記憶を改ざんさせていただいたらどうです？」
「……そうしようかな。そうしたらお父さんにももう迷惑かけないし」
はっとなるリンセル。そんな彼女を、アンセルは正気かと目を見開いた。
すくなくとも、アンセルは最終手段としてその手段を提案しただけだが、それを彼女がすぐとびつくとは思っていなかったのだ。
「シルバが悲しみますね」
アンセルは話は終わった、というかのようにアンセルは部屋を出た。
向かった先はシルバの部屋。
自分の行動が原因ながら、面倒なことになってしまったとシルバを頼るために。

# 234　強くなる（前書き）

ラン視点

## 234　強くなる

この世界の女というのは、全員が全員強い男を好む。
何でもかんでも、強いことが最優先だ。強くて優しい、強くてかっこいい。そんな単語がずっと飛び出してくる。
権力も「力」であるから重宝はされるんだろうけど、それでもといった感じなのだ。
俺は、空を見上げてはぁと息をついた。
「クソみたいに悟った顔をしてるな」
「コノ世界がよくわからないんだよ」
俺の隣にやってきているのは運命神人間態のフドウ・サカキだ。
人間というのはよくわからないものだ、と不思議な表情。
「自分自身もわかってないのにな」
「……ああ……うん。でも俺はホープのこともよくわからない」
彼の話によると、希望神ホープというのは神というより人間に近い部類にはいるのだという。
だからこそシルバに恋をすることができたのか、と納得できてしまう。
それに、シルバはパートナーである彼女と完全に良い仲を築くことができているのだからさすがとしかいえない。
俺とフドウは……もう、なにがなんだかって感じだけれどもな。
「俺はお前をサポートする。ただ、俺が与えるのは力そのものでは

なく、きっかけだけだ。それでいいな」

わかっている。俺だって、人から直接与えられた力は欲していない。

でも、神の力にすがることだってたまには必要だろう。

特に、今回は血迷ってなんていない。

次こそは、何かを手に入れるために力を欲するのではなく、誰かを守るために強くなりたいのだから。

「フドウは、運命を擬人化した神なのか？」

「娯楽、運命、単なる運。それらの総合みたいなものだな。だから楽しいものとか結構好きだぞ」

なるほど。と思う。彼は概念を象徴としているからこうなのか、と。

しかし、そうしたら希望神も同じなんじゃないか、とも考えてしまうのだ。

「アイツは特別だから、なにも手出ししない方がいいぞ。やるならやっぱりエクアトゥールかな」

特別。特別な神ってなんだろうか、と俺は考えた。

唯一神とかだったら特別なんだろうけれども。

「俺たちと人間は種族が違うだけだ、いいな」

「……おう」

「簡単だろ？」

お前に言わせたら、もっと明確な異世界人なのかもな、と笑った

フドウの顔は、輝かんばかりの何かを持っている。
でもまあ、なんだかんだいって神は神なんだよな……。

「まあ、……この話はやめにして冬休みの予定を聞こう」
「リンやクリーゼと、シックザールの本家に行くつもりだよ」

じゃあ俺も、とフドウは笑う。
たぶん大丈夫だろうけれど、シックザール家っていうのはレイカー家の護衛をする一族らしい。
……将来的に、俺はリンセルたちに配属されたらどうしよう？

嫌な予感を覚えながら、しかし俺はそのことを頭から追いやった。
今、そんなことを考えたって仕方のないことなのだ。

そんなことよりも、今クリーゼやリンになにができるか考えた方がいいのかもしれない。

「でも実際、なにもできっこないよな」
「……そんなこと言うなよ」

フドウは俺を励ますように、宙にとある言葉を浮かばせた。
視覚化された言霊は、【異能力（サイキック）】を表している。

「これをまず、使えるようにしよう」
「え。でも種族的に」
「問題ない。転生するときに、君になにも細工をしていないとお思いか？」

……まさか。

俺が自分の状況を理解する前に、彼は答えをさらっと言う。
無限の可能性を持っているということではないのか、もしかしたらこういうことは。
「君には、すべての種族の因子をぶち込んである。……訓練さえすれば、いくらでも強くなれる」
……なるほどね。

## 235　呪縛（前書き）

まだラン視点。
とてもきれいなランになってしまった。

# 235　呪縛

「本当に悪かった。……もう一度、俺と一緒に歩いてくれないだろうか？」
「……正気を取り戻すって、信じてた」

シルバ・エクアトゥールがレイカー城に向かった頃、俺は目の前の少女に頭を垂れていた。
これは、今までの懺悔だ。何を自分は今まで思っていたのか、なぜリンやクリーゼを放っておいていい権利があったのだろうか。
レイカーの身分が欲しくて、名前が欲しくて。だから血迷っていた部分が多すぎる。

「これからは、少しずつ変わっていくから」
「はい、ずっと待ってるよ」

クリーゼも、リンも。
俺を見つめて、こくりと頷く。

その姿は、何処の誰よりも輝いている。
簡単にいえば、自分に向けられる気持ちを持った人なんだから、美しいものなのだ。

「もう少しだけ、早く本当はそうして欲しかったけれどもね」
「……うーすまん」

本当に申し訳ないと思っている。それどころか、本当に謝りの言葉すら蛇足に思えて仕方がない。
俺は二人の顔を直視することが出来ない。

「とりあえず、目標を決めよう」

クリーゼにそう言われ、俺はハッとした。

目標。普通に考えて、俺がこの学園でしたいことってなんだろう？

勉強はいいや、この世界のことがわかればそれでいい。

……でも、やっぱり、あれは悔しい。

「魔剣に負けないような魔法が使いたいな」

「……やっぱり、シルバくんが気になるんだ」

「次は、ちゃんと自分の力を出し切りたいんだ」

やっぱり私怨はよくないな、と。

とりあえず俺はそう告げて、２人を見つめる。

話は終わった、さあどうするか。

「なんか、変わったね」

「そうか？」

「うん。……どす黒い泥から、真水に戻った感じ」

……意外に毒舌だな、リンよ。

「とりあえず、準備は済んだのかな」

「準備は終わっているけれども、どうしよう」

俺は、正直悩んでいた。
シックザール家に何を持っていけばいいんだろう？
ていうか、クリーゼの話によるとみんな血の気が多いっていうから、戦闘になるだろうことは知っている。
「何を持っていけばいいんだ」
「貴方の『力』を持っていけばいいんじゃない？　シルバ・エクアトゥールには負けこそ、貴方の強さって学園屈指なんだから」
１年の時点で、これだけできるウェイカーっていないのよとクリーゼは俺を元気づけようとしていた。
たしかに、エクアトゥールが学園にいない間俺は学園内の試合に明け暮れていた。
結果はやけくそだったとはいえ、全勝していたのだから問題はないだろう。
あとは来年、エクアトゥールと戦った時にどうなるかだ。
フドウによれば、俺は全種族の因子を持っているためこれからの成長によってはもっと強くなれると言われた。
だから、強くなる。
次こそ、あの人に勝ってみせる。
そして、今回は一番大切なことも決して、見失ったりしない。
「もう、リンセルさんのことはいいの？」
「……うん。今は、俺を認めてくれる人がいるから」
いつまでも、彼女に執着する必要もなくなった。
今まで言えなかったこと、新学期が始まったら最初に言わなけれ

ばならない。
俺も、いつまでも甘えてはいけないから、早く言ってやらなきゃ。
彼女を俺の呪縛から解き放たないと、あとでまた面倒なことになってしまうだろうからね。

## 236　支え（前書き）

シルバ視点に戻ります。

# 236　支え

「すみません、シルバさん」
「んー。アンセルは気にしなくてもいい。今まで彼女の措置を放っていた俺の責任だろうし」

ありがとう、と俺はアンセルを労った。
今回は全面的に俺が否定的な言葉を投げかけられても仕方ないことだと思っていたのだが、やっぱりレイカーの家の人々は、考えていたよりも相当優しい。

言い方を変えれば、甘いのだ。
身内に甘すぎる、そう思えば、俺もその身内に仲間入りした扱いになっているのだから喜ぶべきかどうするべきか。

「今からリンセルのところに行ってくるよ」
「えっ。……明日のほうがよくありませんか？」
「いや、全然」

今こうやってやっている間にも色々と面倒なことになりそうだと、俺は確信している。
だからこそ、何とかしなければ。

「アンセル、ここで待ちたいならどうぞ」
「はい」

彼女の視線は俺にすがるような顔で、でもその眼は光を失っていない。
それだけで、彼女を。

彼女の家族たちを助けようとする気持ちはなくならない。

「リンセル」

彼女の部屋のドアをノックする。

部屋の奥で物音が、何かを落としたような音がして上ずった声で「どうぞ」と告げられた。

「入るよ」

部屋の中に入ると、そこは暖色系に彩られた華やかな場所であった。

アンセルの寒色系とは逆だ。

そんな事よりも、その部屋から漂ってくる女性の香りが、強化された嗅覚を強く刺激する。

理性が一気に崩壊しそうなのをなんとか抑え、俺は彼女に近づく。

リンセルの表情はわずかに頬が上気しているようにも感じられた。

天蓋付きのベッドに腰掛け、振り向くようにして軽く俺に手を振る。

「おとなり、どうぞ？」

机には、赤いアネモネが飾られていた。

この世界でも、こう呼ぶんだろうか、よくわからないけれども。

「ごめんね、気を使わせちゃって」
「アンセルにも言ってるけど、気にするな」

俺は無性に彼女の髪の毛を撫でたくなった。
どうしようか、と考えているとリンセルはこちらを見つめ、肩をすくめる。

「何か、話したいことがあるんでしょう？」
「……記憶を改ざんしたいって言ったらしいな」

アンセルから相談されたことを、直接彼女に聴いてみる。
みるみるうちに、顔色が青白くなってこちらを泣きそうな顔で見つめる。

「私がバカなことを考えたって思ってるでしょう」
「別に、思ってないけれど？」

俺は即答した。そんなことを考えているはずなんてない。
なぜかって言えば、俺は戦士として死んだ。

その意味くらい、わかるはずだ。

「嘘」
「……俺だって、前の世界で何度も思ったことがある」

俺の言葉を聴いて、はっとした顔を見せるリンセル。
ぽつり、とつぶやく。

「……そっか、この世界に来る前には、やっぱり彼女さんがいたんだね」

その話が出てくるとは思わなかったが、俺は特に隠す必要もないため頷いた。
彼女が1人と、許嫁が1人。
残念ながら後者は、その前に解消になってしまったが。

「戦争、なの？」
「うん」

その2人が死んだわけではない。学生生活で一緒に過ごした仲間だ。
特別仲がいい、というわけではなかったがずっとそばに居てくれた仲間だ。
だからこそ、記憶も理性も吹き飛んで、戦いに向かう殺人マシーンになればいいかなと思っていた時期だってある。

「……そっか」
「だからこそ、現実逃避したくなったことなんていくらでもある」

俺が死んだあと、他のみんなはどうなっているのだろう？
俺のために憎しみをたぎらせる人はいるんだろうか、そう考えてしまう。

「でも、俺には支えてくれる人がちゃんといたから」
「じゃあ今度は、貴方が私を支えてくれる？」

そうだな。
次は、俺がリンセルを、アンセルを。
そして、エスペランサを支え、支えられる番だ。

「……約束する」

## 236　支え（後書き）

まだ今章は終わりませんが、次章は2年生になります。

## 237　シュウ&ケン

窓の外で、2対の翼を持った小鳥が爽やかなメロディーを奏でている中、俺は眼を覚ました。
身体を起こすと、太ももの部分に膝枕の要領でリンセルの頭がある。

無性に彼女に触れたくなって、頭を撫でていると数分後に彼女が目覚める。
起きるにもちょうどいい時間だ、特に謝らなくてもいい気がする。

「……んぅ、おはよう」
「おはよう、リンセル」

彼女と朝の挨拶をする。リンセルはまだ寝ぼけているようで、こちらを見つめるとハッとして勢い良く起き上がった。
頭をぶつける事こそなかったが、少々危なっかしい。

彼女の顔をのぞき込むと、熟れたトマトのごとく真っ赤に染まっている。

「なんだか、ごめんね」
「何が？」

急にそう告げられ、俺は思わず聞き返した。
彼女が俺に謝る必要なんてあっただろうか？

「……なんでもない」
「へんなの」

うつむかれてしまった。顔は高揚しており、真っ赤に染まっていた顔は、今桜色へ変わっている。

そういえば、今日は二人の誕生日だ。

俺はハッとして、彼女に振り返る。

「誕生日おめでとう」

「……そういえば」

私も忘れてた、とリンセルは笑顔を浮かべると俺に寄り添って腰辺りに手を伸ばす。

予想していたよりもずっと細く、弱々しい雰囲気を与える手だ。白雪のようにきめ細やかで、しかし確かなあたたかみを俺に与えてくれる。

前世では、俺にそうしてくれる人はいた。確かにいた。

でも、俺はその手を振り払っている。

……次こそ、この手を離さない。

「なんだか、誕生日プレゼントに彼氏をもらった気分」

「あー、なら用意していた方はいらないかな」

「いる！　いります！」

軽口を叩けるのも、いい。

俺は彼女にちょっと待っててと告げて、自分の部屋に戻る。

そういえば、昨日アンセルを自分の部屋に放置したままだった。

もしかしたら一睡もしていないのかもしれない。その時はどうし

ようか。
少しくらい、彼女を休ませたほうが良さそうだな。

「アンセル、寝ずに待ってたのか」
「いえ、待ちきれなくて途中で寝ました」

アンセルは実にすっきりとした顔で、俺の帰りを待っていた。
その腕には、エスペランサが包まれており、眠そうに眼をこすっている。

簡単にいえば、おそらくエスペランサがアンセルのだきまくらになって眠れなかったのだろう。

「問題は解決したよ」
「ソレは良かった」

眠い、とエスペランサがぶつぶつ何かを言っている間、俺とアンセルは結果を報告して笑顔を浮かべた。

「誕生日おめでとう」
「……ええと、これは魔剣ですか」
「うん」

誕生日プレゼントとして創った、さやに入った探検を彼女に渡す。
アンセルがさやからそれを引き抜くと、桜色の剣身が現れる。

埋め込まれている魔石は、虹色に輝く小さな宝石だ。

「……高そう」
「俺が創ったものだし、特に変わらないよ」
高かったのは魔石部分だけだ。魔石だけで、費用の９０％を占める。
でも、素晴らしいのはその性能であって、おそらくこれを売ろうとすれば億はいくだろうな、っていうくらいには予想できる。
でも、彼女にそれを教えなくても、彼女は分かっているだろう。
「値段は……教える必要もないな」
「知りたいって言っても教えてくれないのでしょうね」
「うん」
どうせ自分で調べるだろう。あとで武器店に行けば、鑑定してくれる人はいくらでもいる。
これを売る気はないんだろうが、彼女が鑑定する人を探すときはおそらくクレインクインを頼る。
……まあ、決して偽物とかではないから、問題はないんだが。
「軽く指をそれで切って」
「はい？」
「魔剣と契約」
「はい！」
ちょん、と血を魔剣に吸わせて登録を完了すると、俺は彼女に別の魔武具で傷も残さず完治させる。
傷が残ったら大変だからね。

魔剣の名前は「$#μ（シュウ）」。ちなみに後でリンセルに渡す方がこれの属性違いコピーで、「X3И（ケン）」。

どっちも2人をまもることを目的としている。彼女たちが危険にさらされればさらされるほど、強い力を発する。

ちなみに魔剣の名前を読みにくくするのは、もちろん他の人に悟られないようにするためだ。

エスペランサに指摘されて、これからはこの方式も使っていこう。

決闘用で使う魔剣とか特にそうだな。相手に魔剣の特性を悟られたら、対策されるかもしれない。

まあ、魔剣が普通の魔法に負けるはずなんてないのだが。

「よし、4人でデートに行くか」

「はい！」

4人、というのはもちろんエスペランサもである。

眠そうだが、我慢してもらうことにしよう。

ここの、城下町が少々気になっていた。

もしかしたら、良い材料とかも見つかるのかもしれないからね。

## 237　シュウ&ケン（後書き）

またｐｔが伸び始めたようで、嬉しいやら驚くやらで気分が動転しています。
これからも、楽しんでいただければ光栄です。

# 238　変化

「魔剣だ」
「うん、はいリンセルの分」

リンセルは、魔剣を見て恍惚とした表情を浮かべていた。
今回、彼女へは初めての贈り物になる。

彼女の安全を確保すると同時に、リンセルには最高のプレゼントになれば幸いと考えて、今回は魔剣を作ったのだ。

予想以上に喜んでもらえてこちらもうれしい。

「……そんなに神々しいものじゃないぞ？」
「でも、魔剣でしょう？」

たとえば世界的に有名な鍛冶職人が作り上げた名作とかならその視線で良いかもしれないが、結局これも作業時間は1時間を超えていない。
比較的簡単に作れてしまうのだ。だからリンセルの認識は少しおかしいかもしれない。

まあ、俺の存在自体が異質なんだがな。

「でも、将来的には名工になることが確定なシルバさんの作品ですから」

そう言っているのはエスペランサだ。
名工になることが確定というよりは、死後エスペランサは俺を神

にしようとしているらしい。

もともとヘーハイスもそのつもりだったらしく、意気揚々と許可を取ってきたエスペランサはどの象徴になりたいか、この前質問してきたくらいだ。

しかし、このことは流石にアンセルにもリンセルにもいえない。

「今日はバンダナしていないんだね」

希望神の英雄を象徴した、額の紋章を晒している俺にリンセルが声をあげる。

リンセルに初めてこれを見せたときは、まじまじと見られたものだ。

この地域一帯、希望神教の信者がたくさんいてアンセルとリンセルもそうなのだから、まあしかたのないことかもしれないが。

信仰の対象が目の前にいるというのは、信者にとってどういう気分なのだろう？

俺はにこにこと話をしているアンセルと、それに付き合っているエスペランサを見て微妙な感情になった。

「町の名前はなんて言うんだったか」

今から向かうのは、簡単に言えばレイカー領。城下町。

希望神ホープの神殿もそこにあるらしく、密かに俺が楽しみにしている場所でもある。

ルークエルリダスさんは【デルエクス】をよこすといってくれた

が、断った。
ゆっくり歩くのも、悪くない。
「あー、でも町だから、他の人もいるのか」
バンダナを持ってきた方がよかったのかもしれないと後悔し、俺はどうしようかと3人を見つめる。
「いや、そのままでも大丈夫ですよ」
わかる人にはわかりますし、わからない人にはわからないでしょうから、とアンセル。
でも、この意味が分からなくてもホープの紋章である黄色と黒の十芒星と周りの羽は、……この前までより何か変わっているような気がする。
「完全な姿に進化してきたみたいですね」
「……よくわからない」
この前、羽は実に科学的(さいばー)だった。
とがっており、一つ一つが三角のパーツでできていた。
でも、なんだか。
曲線が生まれてきているような気がする。
「今度、詳しく教えてくれ」
「はい」
そもそも、俺が英雄になったから何かの脅威が迫っているとかそう言う意味ではないらしい。

希望神からの加護を受けているということを主張させるため。というのが主目的のようだ。

「あれ？」

「どうしたの？」

そういえば、たしかゼロは1種族ごとに最強の若者を捜しているのではないのか？

……もしかしたら、エスペランサは俺に言っていない世界の脅威があるのかもしれない。

「……いや、今はそんなことを考えている場合じゃない」

あまりにも、2人に……3人に失礼だ。

せっかくのデートなのだから、ちゃんと相手をしてやらないと。

「さて、行きますか」

## 238　変化（後書き）

次回からデートです

# 239　フリーダ

「準備できましたっ」
「私も出来たー！」
「オッケーです」

三人とも偶然の一致か、服の色は白を基調としている。
いつぞやのクインの服装とは大違い、凄く清楚な印象を受けた。
さすが令嬢。普通を求めて迷走し始める聖王陛下よりなんか整っている。凄く可愛い。
クレインクインの私服、一回だけみたことがあるがやばい。
前聖国王がみたら卒倒してしまうかのごとく、セクシーで露出の多いボーイッシュな服装だったのだ。
さすがに薄着はしていない。ドレスというわけではないが、だからといって三人共コートすら着ていないのはなんだろう。
慣れているのかな。俺は龍眼族（レザール）の身体の、強靭さで何とかしているが。

「よし、じゃあ行くか」

ルークエルリダスさんの邸宅から、そばにある領地内の町まで歩いて数分……。
ではないのだが、散歩程度の気分で到着できるため【デルエクス】を使用しないことにした。
……4人ノリのバイク型なんて滅多にないしな。
重機か何かかかも知れない。

「シルバ君の手って、暖かいんですね」

と、アンセルが俺の手を握ってそっとつぶやく。
逆に、彼女の手は冷たくかじかんでいた。

「そうか？」
「はい」

あたたかいというより、でも龍って恒温動物じゃないだろう。
変温動物だと思うんだが、龍眼族はどうなんだろうか。

空は相変わらず、白い雲に覆われている。
そして雲からは、雪が舞い降りていた。
町までの、白く染まった草原。

「……あ、あれがレイカー領の『フリーダ』だよ」

雪があろうが無かろうが、そこは真っ白な町だった。
雪に覆われている白い屋根に、家の壁はすべてが白に近い薄い色。

「へえ、綺麗な町だな」
「お父さんがデザインして作り上げた町なんだよ？」

ルークエルリダスさん、デザインも出来るのかすげぇ。
まあ、自分の領地だしどうにでも出来るんだろうけど。

ていうか、俺がいつか、彼の座を継ぐことになったら。
この町は俺の管轄になるんだろうか。

「早速案内するね、こっちだよ」

とてとて、と町の壁の前に立つリンセル。
すると数秒と経たないうちに、衛兵が数名出てきた。

「リンセルスフィアです」
「……お嬢様、いらっしゃいませ」

そしてアンセルの方も向いて、男たちは一礼をする。
そして俺とエスペランサを見て、首を傾げて何かを思い出したように一例をした。

「アンセリツティアお嬢様もいらっしゃいませ。……？？」
「シルバ・レイカー・エクアトゥールさんですよ」
「ああ、よろしくお願いします」

俺を疑わしげに見つめていた6対の目が、みるみるうちに笑顔へ変わっていく。
何かしたか？　いや、何もやっていないというか。

「次代のレイカー家当主が決まって、皆さん安心しているのですよ。変な人じゃないって」
「……お、おう」

それにしても、ちょっとあの人達の、俺に対する評価が高い気がする。
……どうしよう。

「神殿に行きたいのですが、地図をいただけますか？」
「ええ、喜んで」

静かながら、この街は活気にあふれている。
何人かこちらを見て、手を軽く振ってくれる人もいた。

「さて、廻りましょうか」
「……ああ」

# 240　イスフィール

「いい町だな。ゴミなんて落ちてないし」
「住民みんなが気を使ってるの。環境保全に」
『フリーダ』と言う名前の町。
簡単に言えば、雪国で。
小さな街、というのはすこし違うのかもしれない。
外壁は存在するし、衛兵もきちんとある。
役所や娯楽施設も、小さいながらすべてが整っており、都市ではないが中型の街だろうか。
なにより、広場には幻想的な、ダイヤモンドダスト(ダイヤモンドダスト)をまき散らしている噴水のようなものが存在している。
「幻想的だな」
「そうだね。……魔法で無理矢理動かしてるから、そんなことになるんだけどね……」
むしろ、これは細氷を噴き上げるのがデフォルトらしい。一年のほとんどが雪で覆われているから、水が噴き出す方が珍しいそうで。
よく考えてみると、この世界に【水】属性は存在しない。水は氷の分類か。
ていうか、リンセルは【幻想的(ファンタジック)】っていう言葉を理解できるんだな。
この世界自体かなり【幻想的(ファンタジック)】なのに。
この世界の基準で言う幻想とはどういうことをさすのだろう？

魔法は幻想ではなく、現実なのだが。

道路が凍っていないことを考えると、道路の下に何らかの魔法作用がはたらいているのだろうか。

たしか、前いた日本ではアスファルトの下に熱を循環させていたような気がする。

魔法でやったらもっと楽なんだろうなと思いつつ。

「あっ、シルバ君に会わせてみたい人が……」

「だめです」

「いるんだよ」

リンセルが何か言ったが、アンセルが即座に拒否した。

姉といえども双子。数分しか違わない同じ歳の姉アンセルにリンセルは口をとがらせる。

エスペランサは意味がわかっていないようで、アンセルリンセルを交互に見つめていた。

「親友だからいいでしょー」

「シルバ君には刺激が強すぎるからだめです！」

「強いしいいじゃん……」

うん、会話についていけない。

二人の会話を普通に理解したいけど、なぜアンセルがそんなに拒否してるのか分からない。

精神衛生がどうたらこうたらとか言っているんだが。

怖いな。そんなにアレなのかな。

「シルバ君の精神衛生を考えてください！」

なんか、目に毒な親友さんみたいです。

俺にはそっちの方がいいような気がするけど……。いやなんでもない。

クインとレオ以外は、みんななんだか露出が少ないんだよな。

アンセルリンセルは令嬢だから仕方ないのか。でもクインはすべきことじゃないんだよ。

「とにかく、あの子にシルバ君を引き合わせるのは……！」

「あれ？　リンセルにアンセル……、おひさー」

二人が同時に後ろの方を振り向いた。

目の前には、買い物袋を肩に下げた少女が、歓喜を抑えきれないっていいそうな顔をして立っていた。

髪の毛はリンセルたちほどには整っていないが太陽の光を反射する銀色で、小柄なのに何よりも……突き出すところが突き出しすぎている。

しかも、真冬だというのに露出度はとても高い。

雪のように白い肌が、惜しげもなく晒されていた。

おそらく、この人が件の人物だろう。

アンセルは『この世の終わり』が訪れたような顔をしている。

エスペランサは、警戒半分興味半分だろうか。

「イルちゃん、二年振りだね！　この娘が親友のイスフィール・ミカイル・エイレインちゃん」

「ん？　この人はリンセルの彼氏？」

ん、と俺がうなずくとイスフィール……ええとなんだっけ。なんとかさんは顔を輝かせて。

こちらによってくると、上目遣いをしたかと思えば両手をバッと広げて……。

「えい、ぎゅー！」

俺が反応できないまま、抱きついて来やがった。

# ２４１　女神様の殺意

「……」

結構容姿のいい女性に抱きつかれたというのに、俺の気持ちはヒドく冷めていた。

怒りが自分を支配しているわけでもなければ、今さっきまで楽しんでこの町を見ていたというのに、すべてどうでもよくなって気がする。

アンセルの言っていた意味が分かった。正しくは意味をはき違えているのかもしれないけれども、この娘は根本的に俺と合わない気がした。

「離れろ」

「ん？　もしかして、緊張しちゃった？」

相手は俺の周りを取り巻く雰囲気の変化に気づいていないようだった。

色気を振りまきながら、俺の身体を服越しに指でなぞる。

悪寒がするとともに、俺は後ろの方で一つの影が動いたのをみた。

「私のシルバさんに……」

エスペランサだ。しかも恐ろしいことに、今回彼女は殺意すら周りに発散させていた。

迸る神のオーラすら、彼女は隠そうとしていない。

ここでやっと、女はエスペランサに気づいたようで、慌てて俺か

ら離れるが時すでに遅し。

触れたとき、音はしなかった。

しかし、近距離にいた俺が一瞬吹き飛ばされる程度の衝撃はやってくる。

リンセルとアンセルは……魔剣が守ってくれているようだ。一安心。

だが、その女の衝撃というのは、すさまじい物だった。

「殺す」

エスペランサは、あくまでも迷法族（カラミタ）の能力で憎悪を燃やしていた。

神の力は使う様子がなく、今回は道路向かい側の壁に彼女を押しつけたにすぎない。

ただ。ただでさえ迷法族（カラミタ）なのに、今回は手加減をしていないようだ。

彼女の後ろに、後光が差している。

「……何よ貴方」

「【希望神】エスペランサ・ホープレイ」

何バカなことを、と女は毒づきエスペランサの手を払う。

……いや、本物なんだが……今回のエスペランサは軽率な気がする。

現実世界にここまで干渉していいんだろうか？

自分の正体は、後でどうせ記憶を消去するんだろうが。記憶のゆがみは後々巨大なゆがみとなって世界に影響するんだろうな。

「いいわ、決闘しましょう」

女は、覚悟を決めたように闘技場の方を指さした。

彼女からすれば、自分の親友の彼氏に色目使ったらほかの彼女が怒った、というのだから少々納得のいかないものかもしれないが。

こうくる……のも、どこか軽率に見える。

エスペランサがぴくぴくと右手を動かしている。

もしかして、この超展開は彼女が操作して作り上げた舞台なのかもしれない。

俺にはまだ、神に干渉する力なんてないから。

今回は、ゆっくり彼女たちの戦いをみてみようっと。

城下町【フリーダ】唯一の小さな闘技場は、突然の決闘に活気立っていた。

【希望神】の異名を名乗った少女と、名家の娘の決闘。

この町には、ほとんどが希望神を信仰しているからか、老若男女関係なくやってきたのだ。

「今回はイスフィールちゃんが悪いかな！」

リンセル、親友を見捨てる。

正しい判断だとは思うが、まあ仕方ないだろう。

まず、エスペランサが負ける要素が一つもないところから、この試合はおかしい。

しかも、彼女は本気だ。先ほど静かに俺の方へやってくると、「神の力を少々使います」ってわざわざ進言してきた。

神の力を使うと言うことは、彼女が本来の姿を取り戻すということだ。

龍神のように、見たら普通の人間なら溶けるとかではなさそうだが、希望神ならその姿をとらえることが難しそう。

「押さえますから」

力を？　俺にはよくわからない。

というか、エスペランサの姿でなれきっているが本来は彼女の姿は……。

本当は、ずっと希望神の姿でいてほしいのだけれども。

「今回のことで、離ればなれになったりしないのか？」

「シルバさん、なんだか弱気ですね」

弱気って言うか。

俺は転生してからずっとエスペランサ……希望神と一緒にいたから、今頃になっていなくなるのはどうもやるせない。

しかし、彼女の表情をみれば俺の心配事なんぞ吹き飛んでしまう。

彼女は、笑顔を浮かべていたのだ。

「シルバさんが願うなら、ずっと私は貴方のそばにいます。

シルバさんが望むなら、死後も私は貴方と一緒にいます。
これが私の祝福です。そして、私の悲願です」

何十回何百回、好きな人を作っては捨てられて、絶望しながらも世界を牽引した神の言葉。
その言葉は、確かに深く染み込んだ。

「さて、ちゃちゃっと勝ってきます」

時間だ。エスペランサは首を伸ばして寄り添うようにしていた顔を動かし、俺の口にキスをした。
彼女からそうされるのは初めてで、今まで求めてきたばっかりだから少々照れくさい。

でも俺は、彼女が何かとんでもないことをしでかしてしまうのではないかと、いやな予感を覚えずにはいられなかったのだ。

# ２４２　希望神ホープ

自重なんて知りません、
エスペランサはそれが言いたいかのように、容赦なくイスフィールへ襲いかかった。
最初は人間態のままで。それでも迷法族（カラミタ）というものは普通ではなく魔法の威力が半端ない。
もちろん、為すすべもなくやられている。あれは不可侵の攻撃だ。その攻撃を妨害することを許してくれないのだから本当に恐ろしい。
体術でやりあったら絶対にエスペランサが負けそうだが、今回はどうしようもなく、イスフィールが不利だろう。
逆に考えれば、魔法というものは使える人が使えば一方的な試合展開も可能と言うことである。
そもそも、この世界の魔法ってなぜ存在しているのだろう？

「エスペランサさんって、あんなに強かったっけ」

リンセルは、エスペランサの正体を知らなかったのかな。
アンセルは知っていると思うけれども。

「本当、頭おかしいくらいに強い」
「迷法族（カラミタ）だったっけ。やっぱり強いね」

でも、一回戦ってみたいかも、となんだか好戦的なリンセル。
イスフィールのこんな状態を見ても思っているあたり、マゾなのかもしれない。

と、ここでエスペランサが攻撃を中断した。
地面から顔を離しながらきょとんとするイスフィールに、エスペランサがとった行動は、神格化である。

エスペランサの身体から光が迸っている。
迸った光から、エスペランサの髪の毛がさらに長くなって地面に着くほどになる。
身長が伸び、アンセルと並ぶくらいにまで高くなった。
幼さが残っていた顔からはさっぱりそれが溶けるようになくなり、凛々しさを増した顔へ変化する。

それにしても、胸は膨らまない。
……悲しい。

「はっ!?　っへ?」

相手は何がおこっているのかわからないのだろう。
そもそも、そのきちんとした姿は俺が龍眼（レザリガルズ・アイ）でとらえているにすぎない。
おそらく、このまばゆい光がある間は、誰もその姿をとらえることができないのだろう。

だが、それでいい気がする。

「……!?」

光が収まった頃、希望神ホープは服装すら変わっていた。
俺が転生する直前に着ていた服だ。
いや、それも正しくは違う。

少々、現代風にアレンジしているのか露出が多い。
ヒマティオンかな、とは思うがこの言葉を知っている人は少ないだろう。

絵画から出てきたような姿だ。しかし、いくら鮮明に美しく書いたとしても、やはり本来の美しさにはかなわない。

「なにあれ」

俺の隣で、リンセルが愕然としていた。
俺の額にある紋章と、希望神ホープになったエスペランサを交互にみつめて、顔色が悪くなる。

一体何が起こったのか、察したのだ。
自分の親友が、一体「誰」を怒らせたのか、今頃気づいたのだろう。

「シルバくんは、知ってたの？」
「何が？」
「エスペランサさんが、ホープ様だったって」

神の存在には何も思わないのか。
まあ、この世界のことだからよくわからないけれども。

「うん」
「いつから？」
「約1年前、俺が転生する前から」

俺の言葉を聞いて、リンセルはさらに顔色が悪くなる。

蒼白を通り越して、むしろ黒くなっているような気もして、ちょっと本当に問題。

彼女は後悔しているんだろうか。

「イスフィールちゃんは消されちゃうの？」

「指一本で出来そうだし、そうしたら誰も彼女のことを思い出せないだろうな」

俺は除いてだ。

俺は希望神の加護を受けているため、この紋章があるかぎりそれは続く。

もちろん、そういうことはやめてほしいと思っているが。

……それにしても怒りが収まってないんだよな。

「……」

神の姿になったというのに、エスペランサは一言も声を発さなかった。

思えば、手に光が収束して何かの形に変わっている。

……弓だ。

簡単な装飾すらない、純粋な光の弓に箭をつがえて神はイスフィールに向ける。

彼女は何もすることが出来なかった。

避けようなどと考えることすら出来ないはずだ。

自分が何をしてしまったのさえ、考えていられないのかもしれない。

「反省なさい」

涼風のような声がした。この世界で聴いた中で、一番美しい声がした。

それは人々の声を通り過ぎ、すべての人に届く。

彼女を待ち受けるのは、断罪か、神罰か、それとも神の怒りか。

# 243　神罰

「ひっ……」

イスフィールの、僅かな声が聞こえた。

リンセルには申し訳ないが、俺には彼女を助けようなんて気持ちは全くない。

かばったところで、こちらにメリットが来るとは思えないのがひとつ。

そして、エスペランサを怒らせた時点で俺の心が動かないのが、ひとつ。

サクッ、と箭が刺さった。

希望神が放ったのだ。寸分違わず、心臓に向かって射掛けられる。

「少しは反省なさい」

再び、神の声が響く。

外傷は内容だが、糸が切れたように彼女が崩れ落ちる。

一体、何が起こったのか誰にもわからないが、俺はなんとなく察しが付いた。

神が相手に外傷を与えないなら、精神攻撃か存在抹消かどちらかだろう。

今回はおそらく前者。どこかに放り込んだか、こちらの体感時間は一瞬でも永遠の時を見せたか、どちらだろう。

もちろん、自分の推測があっているとは思っていないが、予想は予想だ。

「一体何ごとだ!?」

と、やってきたのは1人の壮年の男性である。

ルークエルリダスさんよりも少々年上の印象を受ける。

白いひげを蓄えた、厳格そうな感覚をこちらは思い知らされるのだが、なんというか。

怒りに震えたホープをみてからだと、全然怖くない。

怖くないどころか、どこか滑稽に見えてしまってどう反応すればいいのかわからない。

「イスフィール！　大丈夫なのか?」

彼の後ろにはメガネを掛けた【知勉族(エリシュ)】が心配そうな顔で彼女を見つめていた。

おそらく、イスフィールの母親だろう。こう考えれば純粋な一族なのかもしれない。

と、ここで何が起こったかエイレイン家の当主はわかったようだ。

希望神を睨みつけかけて、夢を見ているように戸惑っている。

相手が、一瞬で何かを悟ったのかな。

「は?」

「控えなさい」

神の言葉は、静かなものだった。

しかし、その炎は、蒼い。

また怒りが再燃されたら、「フリーダ」そのものが消されかねな

い。
希望神は基本的には甘いとどこかの文献で書いていたが、神話にはある一線を超えた時とんでもないことが起こったとも書かれていた。

神話というのは半分以上がフィンクションだとは思うが、この世界は実在するんだからどうなんだろう。
……取り敢えず、彼女を怒らせるのはやめよう。

「はっ！」

自分が誰を見つめているか、人間の本能から悟ったらしい。
すぐに跪いて、頭をあげることはなくなった。

それにつられて、他の人々も全員が頭を下げた。
老若男女関係なく、左ひざをついて跪き、祈るように手を組んで心臓の
方へ近づける。

もちろん、リンセルやアンセルも例外ではない。

「あ、シルバさんはしないでくださいね、お願いします」

見よう見まねでやろうとしたら、本人から止められた。
やらなくてもいいらしい。ていうか、彼女の説明によれば英雄は神の隣にいるものであり、同格かそこいらなんだとか何とか。

でも、正直崇められるのってどうなんだろうな、と思う。
希望神も、あまりそれに対して優越感に浸っている様子もない。

「頭をあげなさい」

許可をもらい、顔を上げたエイレイン家当主は何が起こったのかわかったようで、イスフィールを担ぎあげると「申し訳ありませんでした」ともう一度雁首を垂れる。

「気にしないでください」

希望神は、元の穏やかな顔に戻っていた。

怒りの炎もある程度は収まっているようで、まあ問題はないだろう。

「では、シルバさん。このまま神殿に行きましょう」

希望神は、実に軽いノリでエスペランサの姿にもどす素振りも見せず、こちらに滑ってきた。

取り敢えず、これはまずい。

「……取り敢えず、地面に足つけようか」

「聡明ですね。今敬語を使ったら、こうしてました」

希望神ホープが弓を再び取り出したのを見て、俺は自分の判断に感謝した。

……あとでイスフィールに何をやったのか、聴いてみようっと。

# ２４４　女神の祝福

「目が溶けそうだ」
「そんな、オーバーすぎます」

フリーダの街を歩いていると、彼女を見て周りの人がひざまずいていくのが見えた。
そんな人々に柔らかくほほえむ女神の姿は、本当にそれに相応しいものだった。

美人だ。美神か。
……でも、この言葉だとほかのいみになっちゃうんだよな。

「いや、事実だ」
「龍眼族（レザール）の視力では、私がまぶしく見えますか？」
「見える」

龍眼族（レザール）の無駄に強化された五感は、神を強くとらえすぎたようだ。
目はさっきからちかちかするし、なんだか肌がひりひりする。
神のオーラに当てられてちょっとふつうの状態ではなくなっているのではないかと推測していると、そういえば彼女をどう呼べばいいのか訊いていないことに気付いた。

「ええと」
「エスペランサで」
「エスペランサ、今から神殿に行くんだよな？」
「はい」

エスペランサはうなずいた。

俺が訊きたいのは、夏前に行った神殿のことだ。
あそこの神殿では、俺が「希望神の英雄」となったことを、関係者以外に口外しないことを誓わせた記憶がある。

でも、それってほかの神殿にも口外していないのだろうか。
それもあるが、後はエスペランサの身元だな。
これからどうやって説明すればいいんだ。

彼女自身がこの世界に干渉し始めた時点で、もう手遅れな気もするが。

「この前、レイリュ神殿行ったじゃん」
「そうですね。神殿には特別な連絡方法があるので、おそらく知られているかと」
「そんなことじゃなくて、エスペランサは身元がバレてもいいのかって」
「私はかまいませんけど。シルバさんは隣が神ではご不満ですか？」
「いや、ぜんぜん」
「なら問題ありませんね」

問題ないというのならないのだろう。
そういえば、少なくともエスペランサと。
ラン・ロキアスについている運命神で2柱がこの世界に直接干渉していることになるのか。

などと考えていると、後ろの方でリンセルの声がした。
先ほどから何度も話しかけようと努力はしているようだが、どれも失敗している。

「ホープ様」

「……エスペランサで」
「エスペランサ様」
「様は無しで。って、先ほどもこの話しませんでした？」
「しました」
「敬語も無しで」

……ずっとこのループだ。もう5回目だろうか。
そりゃあ、彼女仲間だと思っていた人が自分の信仰している神だったら驚くだろうし、気も動転するだろう。
むしろ、今こうやっている中でも落ち着いて状況を受け入れているアンセルが恐ろしい。

それに、エスペランサは敬語いらないとか言ってるんだからな。
でも、出会いなおしたときから敬語のアンセルはともかく、急に口調を変更したリンセルに、彼女は敬語で話すことを許さないだろう。

「……うん」
「よくできました」

よくできました、とエスペランサは俺によくやるようにリンセルの頭をなでる。
と、予想できていたがリンセルがあっさりと失神した。

「あら、倒れちゃいました」
「俺がやるからいいよ」

あら、じゃないんだよな本当。
対応に困っている様子の彼女を制止して、俺はリンセルを抱き上げる。

……軽い。

「アンセルさんも、申し訳ありません。せっかくの誕生日なのに」
「いえ、お気になさらず」

アンセルは柔らかい笑顔を浮かべたまま、やんわりと首を振った。
そんな彼女と、俺の腕に抱かれているリンセルを見つめてエスペランサは何かを思いついたように顔を上げる。

「……そうだ、私からお二人に祝福を与えましょう」

リンセルとアンセルにとって、一番いい贈り物かもしれない。
神から、直々な祝福。期待せずには居られないというか。
恐れ多いといった様子で、しかしアンセルはうなずく。

「パーティの時にで、お願いできますか？」
「はい、わかりました」

俺は、エスペランサを見つめていた。
うーん、やっぱり。
神にこの言葉を使うのが適切がどうかはわからないけど、やっぱり何度見てもいとおしく感じられる。

本当に、前代は頭がおかしいとも考えたが。
そのおかげで俺がエスペランサと出会えたと考えると、グッジョブと言葉をかけることしかできない。

「……どうしましたか？」
「やっぱり、エスペランサを見捨てる昔の英雄たちはどうかしてる」
「……ほら、つきましたよ」

彼女が放った言葉は、照れ隠しのような印象を確かに届けてきた。
エスペランサの顔をのぞこうかとも考えたが、よけられてそれは失敗する。

「ここが、希望神のスラテマー神殿か」

## ２４５　スマテラー神殿（前書き）

短め。

## ２４５　スマテラー神殿

スマテラー神殿、それはこの前言ったレイリュ神殿より、３周りほど小さなものだった。
都市ハズレにある小さな教会のようなイメージを受ける。

「なかにはいりましょう」

るんるんと１歩飛びで中に入るエスペランサを追って中に入ると、そこには数人の参拝客が、彼女を食い入る様に見つめて膠着していた。
しかし、神殿の御子たちが自然な形で頭を下げると参拝客はつられるように跪く。

「神殿内では、実は御子たちのほうが対応はあっているのですよ」
「ほう」

神聖な場所だからこそ、そんなに大仰とする必要がないのだとか。
俺には宗教とかよくわからないけれども、まあいいか。

「そういえば、さっき使ってた弓って」
「神弓【ＴＤ２Ｍ】です。おそらくデッドコピーなら、シルバさんの能力で作れますね」

アレ、エスペランサに聞くと唱えれば箭が自動的に生産される連弩にもなるらしい。
意味は「Ｔｈｅ　ｄｅｓｉｒｅ　ｔｏ　ｍｅｔｅｏｒ」、つまり「流星に願望を」なんだそうだ」。

「あれから、魔神武具は作っていないのですか？」
「作る必要がないからね」

もったいない、とエスペランサは神殿を歩きながら頬をふくらませる。

かわいい。……ところでリンセルはいつ起きるんだろう？

さすがに、彼女を抱き上げながら神殿を回るのは辛い。

早く起きてくれないかな。

と、アンセルが軽く妹の頬を叩き、無理やり意識を戻すことにしたようである。

「あ、ごめんなさい！」
「いいよ気にしなくて」

それにしても、リンセルは意識を失っていた時も幸せそうに表情をゆるめていたのだから、結果的にはエスペランサの正体がわかってよかったのかもしれない。

「大丈夫ですか？　リンセルさん」
「わわ、わわ」

まだ落ち着けてはいないようだが。

「とりあえず、この神殿にも祝福を与えて。そのあとリンセルさんとアンセルさんの為にどこか食べに行きましょうか」

夜に晩餐会するようだから、そんなに沢山は食べなくてもいいだろう。

それにはアンセルに提案があるようで、どうもおすすめのところ

があるのだとか。

「エスペランサさんは、甘いもの大丈夫です……よね」

「はい」

本当は質問したかったのだろうが、エスペランサの方を見て俺の疑問も吹き飛んだ。

俺達の見ていない間に、わたあめを口に含んでいる。

「先程、御子さんからもらったのです！」

……すごく、美味しそうです。

ていうか先ほどの怒りは何処へやら、顔は緩みきっている。

どうもコドモにしか見えないんだよな。

「……むぅ、何か失礼なこと考えてます」

「なんでもないです」

# 246　今頃

「美味しいです。程よく甘くて、ほどよく暖かくて」

俺は、目の前でアップルパイのような棒状の何かを頬張っている希望神を見つめていた。

一瞬、相手が神であることを忘れる程度には彼女が愛らしく思えて、どうしても目を逸らしていないと顔が緩んでしまう。

最も、逸らしたところで状況が変わるかといえば変わらないのだが。

「シルバ君ニヤニヤしてる」

「顔を覗き込むな、恥ずかしいから」

顔をあげると、リンセルもニヤニヤしていた。

俺と違うところは、俺が幸福感で顔を緩んでいるのに対し、彼女は俺を見て笑顔を作っているところだろうか。

思えば、リンセルもこんな顔をするんだ、と俺は気付かされた。

いつもは元気いっぱいで、むしろ純粋な笑みを浮かべている彼女が、俺の前でそんな表情を浮かべているのを考えていると感慨深いものもある。

「アンセル、それ冷たくないのか？」

「冷たいですよ？」

冷たいですが、やっぱり私はこれが好きですとアンセル。

彼女が食べているのはスノーコーン。いったい何が言いたいのか

といえば簡単で、かき氷である。

真冬の、こんな時期に食べるものだとは到底思えないんだが、この子の感覚は一体どうなっているんだろう？

少なくとも、常人の感覚はしていないのではないか、と予測することはできるが真実はわからない。

「でも、シルバさんだって食べているじゃないですか」

「これ、ホットだぞ？」

この世界には、暖かい氷というのが存在する。

俺は確かに、アンセルと同じモノを頼んだ。

だが、とりあえずコールドとホットがあれば、奇妙な方に興味を惹かれてそっちをえらぶだろう？

「実際暖かいし、湯気立ってる」

「それ、でも結局美味しいって話題なんですよ」

じゃあなんで頼まなかったんだ。

俺は気になったが、彼女がもじもじと何かを言いかけているのを見て、ははんと察した。

「はい、あーん」

スプーンで軽くすくい、彼女に差し出す。

やってほしかったら自分で言えばしてやるのに、というのは女心をわかっていないと判断されるのかな。

ぱく、と口にふくむアンセル。

それを見て、「私もー」とリンセルが口をぱくぱくさせていたし、

エスペランサもじっと俺を見つめている。

なに、やって欲しいの？

「みんな、ちゃんと口にしような」

「……察せないシルバ君……」

「ごめんって」

とりあえず、2人にもあげよう。

リンセルとエスペランサの口の中にも放り込み、俺も一口。

体の奥で溶けるような感覚がする。

そこからあたたかみがほんのりと広がり、同時に後味の悪くない甘さが身体を駆け巡るんだ。

「んん～！」

っと、女子3人が歓喜の声を押し殺している。

そんな姿を見ながら俺も残りを食べていると、誰かから声をかけられた。

「おいそこのお嬢ちゃんたち！　俺たちと飲まないか？」

……バカかな？　ちょっと待て、本当にこの人達は考えなしなのか？

かおをあげると、そこにいるのはもじゃもじゃ頭の青年である。

「悪いが、全員俺の連れなんだ」

最初は穏やかに。

もしかして俺のことが見えていなかったのかもしれないな。
輝きださんばかりの美少女がいたら、もしかして俺の方に気づいてなかったのかもしれない。

ていうか、そもそも希望神とここの領主の娘が2人。
本当に考えなしの大馬鹿者かなって思ってしまった。

「は？　お前に話ししてねえよ」
「……おい、ユベグやめとけよ」

いきなりの暴言にカチンときながらも何とか理性で何とかしていたら、彼の仲間らしい男が彼を押しとどめた。
彼は俺の事を見て目を一瞬だけ見開いたし、リンセルとアンセルのことも分かっているようである。

さすがに、エスペランサの事はわからないか。

「ユベグやめろ。外からやって来たんだから声をかける相手を間違えるな」
「は？　この男が何か特別だとでも？」

それをきいて、リンセルが「特別に決まってるじゃない、私達の……」と何やらつぶやいているが、彼女たちを見つめて鼻の下を伸ばしきっている彼には聞こえない。

俺は万が一の時を考えて、とりあえず店員さんに目配せした。
彼に見えない場所で指差し、手を動かして殴る動作をする。

店員はその意味がわかったようで、店長に何かを説明してすぐに頷いた。

どうも、テレパシー的な能力を使える人のようだ。

というわけで、俺は店の中で暴力を振るう許可をもらったわけだが。

さすがにやめよう、店に迷惑だからね。

「申し訳ありませんが、貴方には彼のような魅力が感じられません」

なんだかんだ言って、アンセルの感情の籠もってない声は恐ろしい。

吹雪が体の中を駆け巡るような感覚だ。

「は？」

「私に殴りかかりますか？　どうぞ？　ただ、その後どうなるか知りませんよ？」

アンセルの煽りは、本気（マジ）だからなぁ。

彼女を殴ったら俺は手加減しないし、殴った時点でルークエルリダスさんが許さない。

しかし、ユベグという男は、一線を超えてしまった。

## 247　笑顔

「俺の女に触るな」

俺はアンセルの肩に手をかけた、ユベグと呼ばれている男の手を振り払った。

一線どころではなく、ちょっとダメな領域まで踏み込んでいるような気がする。

本当はこういう人と関わりたくない。面倒なことになるのは分かっているのだが、アンセルが巻き込まれた以上積極的に巻き込まれよう。

相手が触れてきたのが悪いのだ。

そういうことにしておいて、俺は彼の頭を掴む。

思ったよりも小さな頭だ。そして、柔らかい。

こめかみの部分を小指と親指で挟んでいるのだが、少し力を込めればそのまま凹みそうである。

「済まない。きちんと償いはするから、ユベグを放してくれないか？　この前ここに来たばっかりで、何もわかっていないんだ」

しばらくそのままで、少しずつ少しずつ力を込めていくと。ユベグという男は唸るような悲鳴を発し始めたため、先ほどまで彼女を諌めていた別の男が俺に頭を下げた。

彼は俺が何者なのかということが分かっているようだ。

彼にはそれをききたかった気もするが、しかしそれも面倒に感じられた。

俺は、ただ彼をアンセルから放したかっただけだ。アンセルが俺

の方を見てあたふたしているのを鑑みれば、これ以上の罰も必要ないのだろう。

俺はアンセルのためだけに、ユベクを放した。

彼を一瞥して、何事もなかったかのように席につく。

「アンセル、美味しい？」

「はい。でも、食べ終わっちゃいました」

と、俺のアイスコーンを見つめている彼女に、俺は要らなくなっていたそれを渡す。

彼女の笑顔を守るのが俺の義務だ。だから気にしていないようだったら、男を気にする必要もない。

本当なら、今頃路地裏に連れ込んで半殺しにしているところだ。

絶対に許さなかっただろうが、まあしかたのないことだな。

とりあえず、彼女たちが食べ終わったら城に帰ろう。

自分たちの目の前に存在する3人の大切な人々を見やって、俺は簡単に息を吐いた。

「なんだか、最近めっきり少なくなってきたのですけれども。やっぱりなんというか、いるのですね」

城に帰って、アンセルが言葉にしたのは先程のユベグという男のような人種のことだろうか。

確かに、最近はこういうのがなくなっていたから慢心していたが、

考えれば考える程慢心というのが行けないことだとわかるな。

これからはやっぱり警戒しないといけないか。

「……シルバさんの胃が、マッハで削られていきそうなので全然気にしなくてもいいですよ？」

心配してくれているのはエスペランサだ。俺の健康状態が著しく、今から悪くなっていくことを予想してのその言葉だろう。

心配をかけている時点で、エスペランサの胃も心配ではあるが。

そう思って彼女を見つめていると、希望神はにっこりと笑顔を見せた。

その顔は、俺の悩みや心配を一緒くたにして吹き飛ばしてしまうような破壊力を持っている。

思えば、もうすぐで2年が始まる。

正直学園を中退して、魔剣に打ち込みたいんだが、そうもいかないな。

1年の時頑張っていなかった分、なんとか取り戻さねば、行けないと感じていたのだ。

何が、と言われれば何とも言いがたいが。

外にいすぎた。

「皆さま晩餐会ですよ」

侍女の1人が俺たちを呼びに来ていた。

晩餐会、というのはいささか語弊があるような気もしたが、それ

でいいのかな。

俺はよくわかっておらず、とりあえず頷いてリンセルアンセルエスペランサの3人をみやる。

「ふたりとも、誕生日おめでとう」

最終的に、死のあとに選べるのは1人っていうか……エスペランサだが。

生前は、少しくらい贅沢をしたっていいだろう。

# ２４８　武器妖精（前書き）

突然ですが、今回で新章です。

# ２４８　武器妖精

「んー？」

俺は、新しく作り上げた魔剣を見て、首を傾げた。

魔剣の完成というのはとても美しいもので、やはりなんというか、華がある。

あるのだが、今回は何かが違う気がしたのだ。どうも何かが違う。

魔剣ができる瞬間というのは、どこか安らかに一つのものが「降臨した」ような雰囲気を受ける。

しかし、今回は違う。一瞬、はじけたような感覚がしたのだ。

「エスペランサぁ」

とりあえず、もしかしたら魔剣ではなく手違いで間違ったものを創りだしてしまったかもしれない。

写本は全部読み終わって、ちょっと応用して魔剣をつくろうとした矢先にこれだ。

何か禁忌に触れてしまったらどうしよう、と一番信用のおけるエスペランサを呼びつける。

「ほうほう、おめでとうございますシルバさん」

希望神は、慌てている俺とは裏腹に嬉しそうな顔をしていた。

顔はゆるんでおり、目はキラキラときらめいている。

何か俺のものに新しい要素でも出来上がったのだろうか。

「これは、武器妖精ですね」

「武器妖精？」

なにのことを指しているのかは分からないが、それが特別なものだというのはその固有名詞から分かった。

何が特別なのか、ほんとうによくわかっていないのだがどうなんだろう。

エスペランサ曰く、魔剣というのは元々何かを宿すための鞘で、内包されるものが武器妖精なのだという。

しかし、魔剣を作れたとしても一定以上の技量がなければその真価は発揮できない。俺が今回創った魔剣は、それの基準に達したのだという。

「というわけで、中に内包された妖精を呼び出してみましょう。まず、魔剣名を宣言するのです」

「今回は、【極光（アクイローリス・ルミナリア）】」

一般的な言語でオーロラだ。極北の大地、その上空で夜見られる神秘的な現象である。

なのでそれと同じように、幻術をかける魔剣として今回は創ったのだが。

「魔剣は、私達と同じ異世界人。あなたの魔剣が、それの間を仲介するようになったわけです」

大人の階段ならぬ、魔剣鍛冶師の階段を順調に駆け上がってますね、とエスペランサはぴょんぴょんと跳ねた。

金髪が踊るように跳ねてその状態も、とても愛らしい。

嬉しいの？

というか、少なくとも俺は魔神剣が作れる時点で階段を三段飛ばしにしているようにも感じられるのだが、どうなんだろう。

「三段飛ばしどころではないような気もするのですが、どうなのでしょうか」

「よくわからないけれど。で、どうすればいいんだ」

彼女は、簡単に「現われれい出よ」って言えば出てきます、と。

なぜ一々そんな回りくどい形で言うのかよくわからなかったため、とりあえず「出てこい」と声をかける。

そうするとどうだろうか、そこに現れたのは1人の美女であった。

身体は透き通っており、どこか霊的なものも感じるが、それは幽霊ではなく精霊であることがわかる。

『初めまして、シルバ様』

透き通った少女の声だ。どこまでも綺麗で、そして神秘的。

エスペランサの女神的な声とは毛並みが違うが。

武器妖精は、そっと跪き、背中の翼を広げた。

『貴方がつけてくださいました。私はローリス。よろしくお願いいたします』

## ２４８　武器妖精（後書き）

龍眼族の更新速度が遅くなります。隔日更新としていますが、毎日のノルマを完成させたらこちらも書きます。

## ２４９　新学期の朝

「おはよう、みんな」

朝だ。

俺は起きあがると、猫の首を掻くように、隣で寝ていたエスペランサの首をくすぐる。

眼をあけたのを確認し、起きあがる。

彼女の姿は、女神態のままだ。出来るだけ他の人に違和感がないように、あのとき居た人々以外には視力フィルターがかかっているらしいが、まあこれはいいだろう。

彼女におはようと声をかけ、俺は着替えに入る。

今日は制服だ。滅多にこの服を着る機会はないが、今日は特別な日のため着る。

今、俺たちはレイカー城から戻ってクレアシモニー学園の寮に戻っていた。

リンセルたちの誕生日であった晩餐会も、年末年始のお祭り騒ぎも確かに楽しかった。

楽しかったし、幸せな気分にはなれたのだが、いかんせん特筆することがない。

「今日から新学年だな」

「ですね」

ふぁーと一回。

エスペランサが艶っぽいあくびをしながら、その美しい肢体を見

せつけるように伸びをしてベッドに座っている。

しかし、胸は今まで通り無い。神なんだから少しくらい豊胸してしまってもいいと思っているのだが、はっ。

もしかして、俺が貧乳好きであることを知っての対処だろうか。

「今年はちゃんと授業受けるんですよ？」

「分かってる」

それはエスペランサも一緒なのだが。

まあ、今年は何も起こる予定はないし大丈夫だろう。

今のところ、だがな。

とりあえず、ダイニングに向かうため階段を下りる。

ダイニングについた頃、リンセルたちはなにやら学園最強の話について議論を始めていた。

「今、学園最強はラン君が一番有力なんだって。３年生にも何人か有力な候補はいるんだけれど」

「とりあえず、叩き潰せばいいんだろう？」

おはよう、も無しに俺は単刀直入に完全勝利勧告をした。

びく、とリンセルの肩が跳ね。俺を振り返って、おはようと柔らかい笑顔を返してくる。

「血の気盛んすぎ」

血の気が盛んであることは否定しない。

最強という言葉に興味はある。正直、俺に負けたロキアスが有力

候補って言うのが納得行かない。

まあ、最近彼は改心してまじめになったって小耳に挟んだし、俺がレイカー城にいっている間も訓練はしていたんだろうなと予想は出来る。

出来るのだが、正直運命神が何か干渉しているんだろうな、と察することくらい出来る。

神が自分の贔屓している転生者を優遇するのは、エスペランサが俺をゆうぐうするのと同じことだと思っているからだ。

決定的に違う場所は、彼女は俺と恋愛感情で結ばれていることだろうか。

「私たちのシルバさんが最強です」

エスペランサがそんなことを言っているのだから、俺は彼女の加護をありったけ受けていることくらい理解できるのだ。

あとは、自分がいくらその思いに、その加護に答えることが出来るかどうかだと思う。

「ところで、その剣は何？　随分とオウラン帝国風だね」

「カタナっていう奴で、俺が生前居た世界で使っていた切るための剣だよ」

この世界、剣と言えば普通は「叩き切る」ものと決まっているらしい。

魔剣であっても、その火力でごり押しするのが定番であり、刀らしいものは調べたところオウランにしかなかった。

「でも、これも魔剣なんだよね？」

「うん。名前は【極光（アクイローリス・ルミナリア）】」

と、【ローリス】という言葉が引き金になったのか、『武器妖精（アームド・フェアリー）』が出てきた。

ひょこ、と刀の束にはめ込まれた魔石から尾を引くようにして少女が姿を現す。

それを見て、リンセルが歓喜の声を上げた。

「これ、『武器妖精（アームド・フェアリー）』だよね」

「初めまして、皆様方」

この前まで「エクアトゥールなんか興味ない」なんていう風に魔剣を見ても興味を示さなかったヒョウリすら目を丸くしているのを見れば、それがいかに功績か分かるというものだ。

本当、みんなの顔を見るためにここまで到達してよかった。

……こんな段階があるなんてぜんぜん知らなかったけれど。

「ちなみに、これは純粋にシルバさんの成長です」

と、エスペランサが言っているのだからもうどうしようもない。

次の段階はなんなんだろうか、と上を目指したくなってしまう。

「次は、自由に憑依させる『武器妖精（アームド・フェアリー）』を指定できることですね」

……えっ。

# 250　朝礼

学園長の話は、いつも一言だ。
長ったらしく生徒たちを寝かせたりせず簡潔にことを終わらせる。
そのまま生徒たちに考えさせるのだ。

むしろ、長いのは学科長の話だ。
最近の魔法使用についてだとか、前年で学園1位になった人の発表とか、今年の最有力候補だとか。

そこでラン・ロキアスが一番の候補に挙がっていることもちゃんと告知され、周りの目線が彼に移る。
こういう面倒なことに巻き込まれないのは、ある意味でいいかもしれない。

今年は、ダークホース枠として名乗りを上げることにしよう。

「早速だが、去年になって異名を授かった人がいる」

魔法科長が再び口を開き、講堂はしんと静まりかえる。
異名を預かった人が居るんだ。すごいな本当。
学生の間に異名を得るのはかなり珍しいとリンセルたちには聞いているから、かなり実力のある人なんだろうけれど。

「誰なんだろう」
「鏡を見てからそれを言ったほうがいいとおもうよ」

あ、俺か。
そう考えてみたら、確かに俺だけかもしれない。

レイカー家の次期当主になったんだから当たり前か。

「まあ、ここでっはっきりと名前は言わないが」

そんなことをいって、俺の方をしっかりとみつめているのだから何とも言い難い。

面倒なことは起こしたくないが、まあ大丈夫だろう。

「しかも、３つももらっているのだからな」

やめてくれ。

事を重大にするのは、やめてくれ。

俺が必死になんでもないような顔をしていると、魔法科長はまるで自分のように誇らしい顔をしていた。

それが自分の評価につながらないのは、この世界の法則を見ればよくわかるのだが。ということは、本当に喜んでいるのだと言うことがよくわかる。

「私のはなしはこれで終わりだ。では、よい新学期を」

魔法科長が礼をし、そのまま解散となる。

さて今年度の授業を選びに向かおうかとリンセルたちと一緒に出口へ向かう。

寮へかえってきた俺たちを待っていたのは、ヒョウリとゼロだっ

た。
ゼロは安堵の表情で、ヒョウリはどこか固まった笑顔で。
でもヒョウリは、前みたいな変な敵意は向けてきていない。
「なんだか、いい顔になった」
俺がそう話しかけると、ヒョウリはぷいとそっぽを向いて。
これは違うの、ごにょごにょと何かを口走ったがよく聞き取れない。
なんだかよくわからないけれども、これでもいいかなって思ってしまった。
というより、今日ラン・ロキアスたちから何かくるかなと思っていたのだが、何もこなかったため拍子抜けしている場所すらあったのだ。
「そういえば」
エスペランサが、俺の方を振り向く。
その視線の先には、俺ではなく魔刀【極光（アクイローリス・ルミナリア）】であった。
「おとなしいのですね」
『騒いでもメリットがありませんから』
と、するっと出てきたローリスは、初めましてと2人に頭を下げたところで。
ヒョウリを見つめて、数秒沈黙した。
「知り合い？」

「……そんなわけ無いでしょ」

真っ先に否定したのはヒョウリで、そのあとローリスもハッとなったようにうなずく。

『ちょっと、昔の知り合いに似ていたもので』

彼女の世界、つまり『武精界（ぶせいかい）』での知り合いか。

精霊と妖精の、異世界というのもなかなかだと思うがいったいどんな感じなんだろう？

『ヒョウリさん、でしたっけ。双子の姉妹は居ますか？』

「いない」

うん、やっぱり思い違いです、とローリス。

いったい何が起こったのかよくわからないが、まあ、大丈夫だろう。

「ヒョウリは、普通に今年学園生活を送るのか」

「……そういうこと」

よろしく、とふてぶてしくも言ってくれたヒョウリに、俺はただ彼女の変化を喜ぶことしかできない。

勿論、そんなことみんながいる前で言うと修羅場になりかねないため、あとで言うことにしよう。

## 251　3人

「異名付きって、学園生活で特別扱いされたりするのか？」
「それは、されたくて言っているんですか？」
何気なくエスペランサに聞いてみる。
相変わらず、エスペランサは希望神の姿のままだ。
そこまでひどい世界干渉をしていないためか、他の人々からは「数ヶ月見なかったらすごく成長していた」ていどの認識しかされていない。
「されたいわけないだろう」
変に目立つのは、自分の動きを制限されるのと同じである。
それであるからにして、目立ちたいとは思わない。
俺はリンセルやアンセル、エスペランサや他の一部の身内だけで事足りているのだ、関わる人間というのは。
それなのに、人々が俺を珍しそうにもてはやすわけだから、注目が最初から変に集まっているというのに今回の事例である。
確かに、レイカー家の次期当主が決定したとなれば、ある意味ではかなり重要な問題にはなるんだろうが。
すくなくともこの学園……『クレアシモニー学園』には関係のない話である。
「俺は俺を好きな人たちが、俺に対して特別だと思ってくれればそれでいいんだが」
俺の言葉に、彼女は貴方らしいと微笑む。

その笑顔によって突然、ひとつの記憶が頭のなかに入り込んで俺はなんとも言えない気持ちになった。

どうしても、少々ながら寂しさを持ってしまうのだ。

……俺はきっと、彼女の名前を忘れることが出来ないのだろう。

……神になったら、ちゃんと時をさかのぼって、彼女に逢いに行きたい。

エスペランサという最愛の人がいたとしても、この思いは永遠に変わらないのだろう。

「……なんだか、前世を思い出しているような顔をしていますね」

「そのとおりだからね」

一生忘れることが出来ないから。

でも、彼女のお陰で今も俺は支えられているなって。

「前の世界に、戻りたいのですか？」

「戻りたくない、って言えば嘘になる」

「……そうですよね」

エスペランサは、全てを知っているような顔でこちらをみている。

実際、全てを知っているのだろう。

「今から、シルバさんに将来のことを話します。……いいですね？」

何かを覚悟したような顔だ。それをはなしすることで、何かこれからが変わるのかもしれない。

でもそれを知っている。

「ああ」

俺は返事をした。将来を少しわかるというのなら、それを知らない術はない。

……たとえ、結果的に俺の身体が滅ぼされようとも。

「3人」

「3人？」

「これから、さらに3人の女性がシルバさんへと加わります」

3人。今でもすでに3人いるというのに、3人。

何か意味があるのだろうか。

「1人はヒョウリさん。1人は対をなすヒョウガという少女」

ヒョウリとヒョウガ。覚えておこう。

彼女はその理由を教えてくれない。なぜ出会うのか、全て知っているはずなのに。

「そして最後は……貴方が最も望む人でしょう」

……最も、望む。

## 252　早めの夜

「3人」
「どうしたのですか？　先ほどから、同じフレーズしか口にしていないですよ？」」

エスペランサに言われた言葉を、幾度なくとも繰り返す。
そういわれれば、ヒョウリをみる目というのも代わって来るものだ。
見つめていると、視線に気づいたようでこちらを見るヒョウリの姿があった。手を軽く振ると、彼女も軽く返してくれる。
その目には、憎悪や嫌悪といったものは見つからない。

ちなみに、今俺に話しかけているのはアンセルである。
アンセルはおろか、誰にも教えていない。
まだ確定事項ではないのだ。

「いや、何でもないよ」
「なんでもなく、『三人』なんて発言しませんよ」

うーん、困ったな。
アンセルには教えてもいいような気もしないでもない。だが、云うことは出来ない。

「ちゃんと時がきたら話す」
「はい」

聞き分けのいい女性だ。変に詮索しないから、大好きだ。
それにしても、あの希望神が話しした最後の1人。俺がもっとも

求めた女性というのは、やはり華琉（はる）のことだろうか。
　1年前、アレは夢だったのか夢ではなかったのか、すでにわからなくなっている。
　彼女がこの世界にいるはずはないのだ。彼女は、今でもあの世界でちゃんと生きていると思いたい。
　あの世界とこの世界の、時間経過が違っていたらその限りではないのだが。

「どの授業を受けるかは決めた？」
「はい。私も、魔武具を作る方面に進もうと考えています」
　アンセルはこの後の未来がすでに決まっている。
　だから、自由に学びたいものを決定することが出来るのだ。
　俺の場合も、そんなに代わらない。
　もう、魔剣学は学ばなくてもいいだろう。自由に魔剣どころか、魔武具を作り出せる俺には仕組みをわかる必要がないのだ。
　あとは。この世界で生きていくのに最低限の授業さえとってしまえばいいと思っている。
　この学園、誰もが入れて誰もがでれるようにはなっている。
　何か目的を持ってやってきていない人々は、普通に就職して普通の人生を送る。
　きちんと目的を持った人々は、きちんと目標を達成して学園を出る。
　ただ、それだけの違いだ。
「シルバさんは、卒業後どう成されるつもりで？」
「もっと、この世界を体験したいんだ。もっと、この世界を旅した

い」
「冒険家になるっていうことです？」
「いや、……普通に放浪したいなって」

この世界には、一年中ぐつぐつと噴火しているカタンセルという火山や、噴火しているはずなのにそれが氷であるため、噴氷という前の世界ではとうてい見ることの出来なかっただろう現象をかいま見れる氷山も存在するのだという。

そういうのを、見ていきたいのだ、俺は。

「それに、私はついて行ってもいいのですか？」
「うん」
「やったぁ」

ふふふ、とアンセルはほほえんで本当にうれしそう。
そんな彼女を見て、俺はただ彼女を抱き寄せたくなる。

「ちょっと、みんなに見えますよ」
「イヤか？」
「……じゃない、です」

なら何も問題はないな。
俺は彼女の手を引き、自分の部屋に誘導すると鍵をかけた。

これからは、二人の時間だ。

「今日は早めに寝ようか」
「でも、まだ8時です」

いつもなら、魔剣を1本作っている頃だが、今日はぜんぜんそのような気分になれない。

「明日早起きすればいいさ」

彼女の体をじっくりと眺める。

……美しすぎて、乱暴にするのをためらうレベルだ。

最近は力を無意識のうちに抑制できているが、俺は龍眼族（レザール）。ちょっとまずっただけで骨折とかあり得る。

すると、アンセルは俺の考えをくみ取ったかのようにほほえんだ。

「大丈夫です。……シルバさんのしたいように、私をしてくださいな」

## 253　1年遅れの用事

「ヒョウリ、少し時間あるか？」
「あるけど……本当に少しだけ」

朝、俺はヒョウリに話しかけた。
夜はお楽しみで、アンセルがぐっすりとまだ眠っている。

今は食堂だ。まだ起きているのは俺とヒョウリだけだが、彼女はこのあと用事があるらしく、あわただしくパンを頬張っていた。

とりあえず、先日からずっと気になっていることがあった。
で、とりあえず今訊いてみることにしよう。

「いくら払ったら、俺の物になってくれる？」
「確かに傭兵は金で動くけれど、今は任務中だから」
「そういう意味じゃなくて、その後でもいいから俺の依頼を受けてくれる？」

よく考えたら、「俺の物になれ」なんていう口説き文句、傭兵とはいえそれに見合わないほど美しいヒョウリには聞き慣れていることなのだろう。
変なこと言ったかな、とちょっと心配になって、俺は彼女をみやった。
しかし、彼女はまったく気にしていないようで、むしろ柔らかい微笑みを浮かべている。
なにかいいことがあったのだろうか、とは思ったが到底考えつかないため、無視。

「時と場合による。今急に言われたって、わからない」
「そうか……」
ヒョウリの言葉は、簡単だった。
特に今は任務中だ。この学園で、1種族に付き1人ずつそろえないといけないのだっけ。
レイカー家の任務だが、俺もよく知らされていない。
「じゃ、私もう時間だから」
と、もう話は済んだというように服を羽織って、ヒョウリは鞄を持ち上げる。
俺の方を人目だけ見て、すぐに前へ視線を戻す。
寮を出て行った彼女をしばらく呆けた顔で見つめていると、エスペランサが俺に質問をしてきた。
「どうしたのです？　なぜそんなことを？」
「いや、ちょっと気になってね」
「私の言葉を鵜呑みにしてはいけませんよ？　あくまでも可能性なのですから、囚われてはいけません」
エスペランサは、俺が彼女の言葉に囚われかけていて、その結果こうなっていると考えているらしい。
半分は正解だが、半分は間違っている。
俺のみならず、男性というのは美女が好きなのだ。
下心がないわけではないし、そもそも彼女は戦闘のプロ。ルークエルリダスさんの跡をを継ぐことになった場合、彼女を護衛にするのもいいかもしれない。

でも、やっぱり雇って言うことを訊かせるよりも……。

「ここから、ただで側にいてくれるまで持って行くのさ」

もちろんの事だが、落とした方が後々の問題にも有利に働くと思われる。

「なんていうか、肉食獣の目をしていますね」

エスペランサの言葉に、俺は思いっきり首を傾げた。

「え、龍（ドラゴン）っていうのは肉食獣じゃないのか？」

「違います。雑食ですよ」

真面目に返され、俺はぐぅの音もでない。

「野菜も食べますし、だからこそ普段と差し障りのない生活をシルバさんはできているのですよ？」

なるほど、了解である。

そう考えてみれば、そうだな。

と、ここで俺は1年前の事を思い出した。

去年、行きそびれたところが一つだけある。

「龍眼族（レザール）自治区にまだ行ってないな、そういえば」

「そんなこともありましたね。1年前のことだというのに、まるでずっと前のような感覚がします」

おそらく、あのときは大金だと思っていたアレも、今考えてみれば端金（はした）なのかもしれない。

剣を1本作る度に、高ければ億単位の金が飛び込んでくる仕事をしているのだ。

まだ個人的な取引しかしていないし、俺もコレ以上拡大させるつもりはないが、それでも1年目で十億は稼いだ。

そう考えれば、残念だが……。

次に龍眼族（レザール）自治区に向かう目的は、前とは違うのかもしれないから。

## 254　ヒョウリの確かな変化

「最近、表情が軟らかくなった？」

先ほどから、頬の紅潮が止まらない。

私はどうしてしまったのだろう。この前まで、シルバ・エクアトゥールのことが大嫌いだったというのに。

いつの間にか、彼の姿を目で追ってしまう。

いや、これは恋なんかじゃない。

ただ、さっきの言葉を聞いて少しどきっとしただけだ、別になにか意図があるわけでもなく、きっとコレは……違うのだ。

「そろそろ、自分の考えを反省する気になった？」

ゼロ＝オールは私をみてにやにや笑っている。

あんなにあのときは強い思いだったというのに、何で今はこんなにもゆらいでるんだろう？

でも、忠誠心なんて私にはあり得ないのだから、大丈夫大丈夫。

「これは、違う」

「違わないさ。数ヶ月前はことあるごとにシルバ様を殺そうとしていたのに、今は依頼を受けようと思ってるんだろう？」

うぬぬ。

私はそんな、違うのに。

あ、シルバだ。

「ほら、目で追ってる。一つ忠告をしておくぞ」

私をからかうように弾んでいた声が、低くなったことに気づいて私は振り向く。

ゼロ＝オールはこちらをまっすぐ見つめていて、その視線ははずそうとしていない。

どうしても、いや、違う。

「今からリンセル様、アンセル様と並ぼうとするのは、相当努力をしないと無理だぞ」

「あの、エスペランサっていう娘は？」

「あれは並ぼうとしても無理」

私は今まで愛情を感じることができなかった人だ。

愛情を向けられたことがないから、それがわからない。

向けられたのは、劣情だけだった。

だから、……だから私は何も知らない。

「愛情を向けられるって、どういう感じなの？」

「ヒョウリも転生者だから、分かるだろう？　前の世界の記憶は？」

そう切り替えされたが、私は覚えていないと首を振った。

本当に覚えていない。幸せだったような気もするし、孤独だったのかもしれない。

兎に角、良く分からない。

「一言、シルバ様に『愛情を教えてください』って言えば教えてくれるだろ」

この護衛、本当に主を信頼しているのか面倒なことはすべて投げやってるのか分からない。
おそらく前者だろうけれども、彼の「シルバ様ならなんでもしてくれる」という認識が酷い気もする。

人は誰1人として万能ではないし、全能でもない。
それを私は分かっているからこそ、誰かに縋りたくなるのだろうか。

今まで、傭兵として誰にも頼ることがなかったから……。

「シルバ様は、気持ちを向けられたら向けられた分だけ帰す人だと思う」
そういったゼロ＝オールの顔は、何かを悟ったような顔をしていた。
本当は何を考えているのか、感情を悟るのが難しい械刃族（サミュリ）ではあるが、そのくらいは分かる。

信頼とか信用とか、あとは忠誠心とか。
ちょっと前では疑っていたけれど、確かにシルバ・エクアトゥールの隣にいればそれが目覚めようとしているのだ。

でも、忠誠心が芽生えるということは、相手に依存してしまうことなのかもしれない。
私は、どうしても其れが怖い。

# 255　授業準備

授業が決まった。俺は取りあえず、去年とれなかった戦闘系をすべてとることにした。
2年になってからとれる授業もいくつか混ざっているが、そこはまあ、といった感じで。
鍛冶系統のものは、出席回数ではなくそれができたか出来ていないかで単位が決まる。

もちろん、魔剣も魔神武具も出来、さらにふつうの鍛冶も問題ない俺は特に支障がなかった。
あるとすれば、数学や魔法学の座学であったが、それらも何とかテストが通過していたらしい。

「今年は戦闘系統なのですね。鍛冶系統はもっと上にのばさないのですか？」
「のばしたところで、理論を語られても、なぁ」

エスペランサと学園内の中庭、ベンチに座り込む。
手で側にあった石をもてあそび、中に魔力を注ぎ込みながら剣の形へと変えていく。

もちろん、光は伴うため注目の的だ。
特には気にしないけれど。そもそもこうやって遊ぶのは楽しい。

「これは理論じゃないからね」
「そうですね」

そう、コレは俺が鍛冶神ヘーハイスからもらった「能力」であっ

て、理論で何とかなる物ではない。
たとえば今もそうだ。まず魔剣の第1条件である「金属または合金」をすでに破っていても、こうやって軽めの魔剣はできあがりそうなんだから、鍛冶担当の先生は面食らっていた。
俺の場合、
「金属から剣を作り、魔力を注ぎ込んでなおかつ魔石の力を借りて魔剣を開発する」
という一般的なものではなく、自分の解釈からすると
「物質の形を剣に変え、魔剣に変換する」
といった感じになりつつある気がする。

神に恵まれた、という言葉が一番あっているだけなのだ。
もちろん、人生を全うした後はヘーハイスの手伝いをすることになっているが、代わりにエスペランサとずっと一緒にいられる。神の時間は無限だ。
彼女によると、老衰で死ぬのではなく、神々の戦争で死ぬことくらいしかないらしいが。

俺はできあがった魔剣をくるくると、ペン回しの要領で回す。
軌跡を作るように火花が散り、自然と周りの人々から拍手が起こった。
中には俺のことを快く思わないのか、不快そうな顔をしている人もいくつか見られるが、まあ人それぞれだ。俺が目立つのがいやな人はいるだろうさ。

「時間です」

エスペランサが俺の肩をたたいて時計を指さす。
今週は体験授業の様なもので、取りあえず気になった授業を見に行くといった感じ。

次も戦闘だ。次は魔剣を扱った敵との対処戦闘というものだが、魔剣に魔剣をぶつけるのはこれまた別だろうな。

俺は魔剣を作っている。だから、ある程度どうやって対処したらいいのかは分かっているのだけれど。

まあ、見に行くだけ見に行ってどんな感じか見るのも悪くない。

「週末は授業をとらないで、工房の利用権を手に入れる」

「カレル先生に相談ですね」

魔剣は滅多に作らないと思うが、自分でいうのもなんだが俺の剣は質がいい。

この学園では鍛冶系列全般の金のやりとりが許可されているから、人気が出て学生の時から「エクアトゥール」のネームバリューが出来ていればいいんだが。

今年は何か有事があるんだろうか。これもやっぱり、ふつうの学園生活を送りたかったのに、なんでここまで色々起きるんだ。

まあ、楽しいからいいんだけれどもさ。

「ほら、リンセルさんたちがお待ちです」

ん、そういえばリンセルたちも同じ授業か。

ヒョウリも取るって言っていたような気がする。

2年からしかとれない授業だし、おそらくラン・ロキアスも俺対策に受ける可能性があるのか。

これは、遅れてはいられないな。

# ２５６　目には目を、魔剣には魔剣を

特別条件闘技場。通称特条では異様な雰囲気を放ったグループが二つ存在していた。

２つのグループ以外に、女性を交えたグループは存在せず人口比率的に１０：１といった男女比。

もちろん、一つは俺と一緒にいるエスペランサをはじめとしたアンセルリンセルと、ロキアスのリンさんとクリーゼさんのグループだ。

ヒョウリもいたが、彼女は基本ソロ。こちらが彼女に手を振ると気づいてくれたようだが、こちらに近づこうとはしていない。

もちろん、俺たちを見つめる目というものは様々で、そのほとんどが羨望か嫉妬ではあったのだが。

たまに殺意などがあって、去年ヴァーユ先輩の授業に参加したときと同じ気配を感じた。

「なんだか、場違いな気がする」

「少なくとも、こんなに声のかけにくい団体はみたことがないな」

場違いというのは間違っていないと、思う。

俺もロキアスも、引き連れている女性は有力者の娘なのだ。

ロキアスの右にいるのはリンナアイデル・パン・リーフ。セシリト魔法国のトップの曾孫。

左にいるのはクリーゼ・シックザール。代々レイカー家の護衛を務めている一族だ。

対して俺はカエシウス聖王国、準王族のレイカー家姉妹と。
一般人にはその一端すら正体を分からせない、希望神人間態のエスペランサ。

そして引き連れているのはこの学園トップの実力を持つ3種混種族のロキアスと、魔剣鍛冶で次期レイカー家当主の俺。
ロキアスの後ろの方には運命神人間態フドウ・サカキもいる。

本当に、頭おかしいほど化け物集団だ。

「今年は負けないから」

ラン・ロキアスはかなり穏やかな表情で、全く持って穏やかから懸け離れている言葉を発した。
それは俺に向けて放たれたものであるが、周りのおそらく先輩たちが、一斉に1歩彼から離れる程度には威力を持っている。

しかし、魔剣の対策が出来ない限り彼は俺に勝てる訳なんてないし、俺の魔剣はそれこそ「願いを叶える」魔剣に近い。
俺がさせたいことを魔力にこめるのだから、当たり前と言えばそれまでなのだが。

「こらそこ騒ぐな、授業を始めるぞ」

俺の名前はアガグ、と声が反響した。
騒然としていた闘技場が静まりかえる。入ってきたのは男の教授で、体格は醒眼族（ウェイカー）らしく、ゴツい。
ボディビルダーでも出来そうな筋肉をしている。

そんな教授が、1本の魔剣を担いでこちらにやってきた。

『あの魔剣、手入れが全くされていませんね』

ローリスが、俺だけに聞こえるような声でそっと呟いた。

『武器妖精（アームド・フェアリー）』が言うのならそうなのだろう、俺は注意を負けると、確かに汚れというか、傷がある。

それは年月によるものではなく、たとえば血を浴びたときにちゃんと払っていないとか、戦の後に洗浄していないとか、そういうものだ。

普通の武器だって手入れをおろそかにすると刃こぼれしたり、切れ味が悪くなったりするのだ。もともと荒っぽい扱われ方をする魔剣に、手入れが必要ないなんていうことはない。

手入れに時間は多少かかるが、それで魔剣の寿命が伸びるなら値段が7桁を超えたあたりからは絶対にやった方がいい。

リンセルやアンセルの魔剣だって、俺がメンテナンスをすると言っても自分達でやる、なんていって道具を借りにくるくらいで。

何で女の子も分かっているのに、この男は分かっていないのかね。

「凄く、げんなりした顔になってますよシルバさん」

「だって、アレみたらこの授業受けたくなくなるだろ」

と、ここまで話をしているのは俺とエスペランサだけだ。

もちろん、教授に目を付けられた。

「そこの龍眼族（レザール）、名前は？」

迷法族（カラミタ）は話題にあげにくいのだろう、エスペランサではなく俺の方を指さすアガグ教授。

この学園史上初の龍眼族（レザール）と知ってか知らないでか、特に気にした様子もなくこちらを見つめた。

「シルバ・レイカー・エクアトゥールです」

「よしエクアトゥール。魔剣を向けられたらお前ならどうする？」

魔剣を向けられたらどうする、か。

どうやって答えようか、普段の俺なら答えは一つなんだが。

ここで其れを答えたら、この授業に参加する意味が本当になくなってくるのかもしれない。

悩んでいると、実際にどうだと突きつけられた。

周りの人が一斉に飛び退いた。深紅の魔剣が僅かに発光し、おぼろげな光源となる。

俺はカタカタと魔刀【極光（アクイローリス・ルミナリア）】が自動迎撃に動こうとするのを押さえつけながら、平然と彼を見つめた。

「……剣を抜くか？　でも、それならそのまま刺し抜かれるぞ？」

「普通は、ですよね」

まるで自分の剣が普通ではないみたいだ、と教授は笑った。

だが、アンセルたちは「あーあ」と呆れ顔だし、ロキアスは自分と同じ被害者が出てしまうと焦っているような、その状況を楽しんでいるような顔をしている。

ここにクインがいなくて良かった。クレインクインがここにいたら、きっとキレていただろうから。

この男を誰だと思っている、とか怒鳴りそう。

「そうですね、魔剣は質の問題なので……」

と、……俺はパッと手を離してローリスを解放した。

射出するように飛び出した俺の魔刀は、柄を前にしたまま軽く相手の魔剣をあしらうと、こちらに戻ってきて俺の手に収まる。

「私の場合、迎撃に入りますかね？」

## 257　魔剣の騙り

我ながら最低な答えだ、と思う。
一般人なら、魔剣をつきつけられたら相手がどんな人か分かるようなものだ。
魔剣を授かるに相応しいほどの実力の持ち主か、それとも魔剣を購入することが可能な程度の金を持ち合わせているかのどちらかしかない。

魔剣を作り出せるのは俺だけだから、そう考える人はいないと思うし。
作り出せる人を知っていたとしても、それは先ほど例示した前者に値すると俺は判断する。

こういう場合、さっさと自分が悪くなくても謝った方がいい。
理不尽だが、剣の錆になるよりは自分の命を大事にした方がいいのだ。
戦場での出来事なら、絶望するしかほかなさそうだが。

「ほう、魔剣持ちか」

アガグ教授は、面白いものをみるような目でこちらを見つめている。
魔刀は明らかに、周りにも分かるような殺気をはらんでいた。

今まで作った、未公開の魔剣たちも亜空間倉庫から出て参戦したがっているのが分かる。
さらに迎撃、というワードに反応してかリンセルたちの剣も小刻みに震えだした。

すべてが解放されたら闘技場自体が消滅してしまいそうになる程度の力は宿しているだろう、やめよう、

俺はローリス以外の魔武具すべてに制止を指示し、周りの生徒に「危ないですよ」と話しかけた。

魔剣対魔剣の闘いがどうなるか、分かっているが……。

そういうのはやめよう。魔刀【極光（アクイローリス・ルミナリア）】は新品に近い状態だし。

『戦いたいです』

手を離したらそのまま切りかかりそうな声で、魔刀は俺に催促をした。

乗らないけどね。ただでさえ教授の顔に泥を塗りそうなのに、それを助長するわけには行かない。

すくなくとも、俺は「迎撃に入る」としか言っていなくて、自分から切りかかるのは御法度だから……。

魔剣持ち同士の緊迫の時間は数分と経過しようとしていた。両方が両方、神経をすり減らして相手が動くのを待っている。

俺は動かないと決めているから、相手が出るのを待つだけだが相手は自分から動いたら勝ちにくいのが分かっているのだろう。

勝手に持ち主の手を離れて自動迎撃を行う魔剣に、突破口が見つからないのだ。

「……俺じゃお前に勝てないな」

アガグ教授が気を落としたように剣を納め、俺も納めるのを待っ

ている。
俺が納め終わると、改めてといったように周りを見回した。
「エクアトゥールが言ったように、魔剣を持った人ならば直接対決に持ち込むのもいい。今俺は彼のスペックと、彼の魔剣のスペックを自分と照らし合わせて勝てないと判断した」
そういうときは、素直に負けを認めるのも手、か。
周りの生徒は何人かが不満そうな顔をしていたが、俺やエスペランサ含め魔剣を知っている人たちは教授の株を上げた。
魔剣を持っている人は、自分を驕りやすい。
強大な力を持っているのだから、負けるはずがないと変な自信を持ち合わせやすいのだ。
実際、俺もそう間違っていない。さきほどのも、戦闘になれば勝つことはないものの絶対に負けない自信は存在した。
そもそも、創り主の身も守れない迎撃魔剣だったら、リンセルたちのを回収しないといけないし。
「その魔剣、質が良すぎて市場では出回っていないと思う」
実際に魔剣を持っている人からほめられるのは、本当にうれしい。
俺が心を躍らせていると、教授はどこで手に入れたのか問いかけてきた。
もちろん、自分が創ったとは言いたくないから適当にぼかしたが。
「さて、ほかになにか方法は？」
「魔剣の所有権を奪う、ですか？」

隣から声がして、俺は声の発生源であるエスペランサを信じられないと言った目で見つめた。
今、とんでもないことを希望神は言い出したような気がする。
教授の方を見れば、そう俺と変わらない表情をしていた。

いや、確かに君は出来るかもしれないけれどもさ。

# 258　傭兵団

「やれやれ、今年はとんでもない生徒がいるもんだ」

アガグ教授は、始業式の時にその場にいなかったためか、俺の存在もロキアスの存在も知らなかったらしい。

俺が龍眼族（レザール）であることにたいして驚かなかった理由については、元々は龍眼族（レザール）自治区で魔剣を購入したからなのだという。

ちなみに、ロキアスは回答として「魔力量でモノを言わせる」といった。

頭も筋肉で出来てるんじゃないか、と思うくらい脳筋な考えに面食らったが、彼なら可能なのだそう。

というわけで、授業後俺は一団共々アガグ教授に研究室へ案内された。

次の授業は2時間後で、だからこその余裕。

たった1ヶ月前までカエシウスでは真冬だったというのに、こちらに戻ってきたらもう夏近い。

この国は、季節がはっきりしているのに忙しすぎる。

星が公転を乱回転させてるみたいだ。

「レイカーっていう名前を聞いたとき、もしやと思ったがやはりそういうことのなのか」

「まあそれはどうでもいいとして、魔剣の手入れはした方がいいと思います」

レイカー家がどうちゃらっていう話は本当にどうであれ俺はあま

り好きではないが、取りあえず忠告だけをする。
　このままでは魔剣が泣いてしまう。ローリスは『これだけは譲れません！』とたぎっているのだから言わないわけにも行かなかったし、俺も俺で鍛冶師だ。
　誰が使ったのかはどうあれ、手入れは気になる。

「おう、これからは気をつけよう」

　俺の口調からいろいろと察したのか、素直にうなずくのはなんだか、ギャップを感じる。
　第一印象は失礼だが、かなり野蛮に感じた。
　それと同時にヒョウリと同じ匂いも感じたけれど、それは訊かない。

「5年ぶりの新任らしいんだ、俺は」

　と、ここでカミングアウトである。
　詳しく訊くと、年齢は今まで最年少だったカレルの２４よりも若い２２歳。
　傭兵上がりで学園長にスカウトされたのだと、こちらが訊きたいことをぺらぺらと話してくれる。

「これから長いつきあいになりそうですね」

　俺は席を立ち上がり、リンセルアンセルエスペランサの3人と共に講義参加の表明を示す。
　アガグ教授の表情が、喜ばしいものへ変わったのは言うまでもない。

「ヒョウリもこの学園にいたとは、驚きだな」

ガイザー・アガグは、シルバたちが研究室から去っていった後の部屋を見回しながら、1人ソロで最後まで話を聞いていた少女のことを思い出す。

魔水でつくった氷のように、鋭く美しい少女。

そして何年も、アガグは彼女をみていた。

「世界は狭いな」

彼とヒョウリは同じ傭兵団の出身である。裏の社会で「アヴァロン」と言えば、完全に有名人だろう。

だが、それをシルバは知らない。もうすぐエスペランサが彼に情報を与えるのだろうが、そのことをアガグは知らない。

アガグはシルバを快く思っているが、完全に信用されていないことも察することが出来ていた。

「どうも傭兵は、シルバ・レイカー・エクアトゥールに惹かれてしまうらしい」

変な力を感じる、と魔剣を見てため息をつく。
魔剣は、シルバに突きつけたときよりも強く発光し、手入れを待っているようだった。

「失礼します」
「ヒョウリ」

ドアが開き、1人の少女が入ってくるのを見てアガグは声をかける。
氷のような少女は、目の前の男を見つめ、懐かしそうな柔らかいほほえみをみせていた。

「これからのことを、話し合いましょう、ガイザー」

## 259　魔剣は生きている

「これ、いいの？」
「ああ」

私は、ガイザーから手渡された1本の剣を見て、呆気にとられた。
これは、前の紛争でガイザーが私を守るために使った魔剣。
値段は一度だけ小耳に挟んだことがある。7桁の0は最低でも付くと言われた、彼の生涯を現した、剣。

「エクアトゥールに好意を抱き始めているだろう、ヒョウリ」

ガイザーの指摘は鋭かった。傭兵団に入ってきた頃、世話役が彼だったから。
この学園に来るまで、傭兵団以外の人は信用できなかったけれど。
これは重要なことではない気もする。

とにかく、私が顔を赤らめたのを見てガイザーは確信したらしい。
魔剣を私に押しつけるようにしながら、俺を見つめる。

「もう、傭兵団はないんだ」
「……分かってる」

傭兵団は解散した。傭兵とはいえども、人として最低限のプライドは持つべきだという意見を持つ人々と、金さえあれば動くという人たち。
私とガイザーはどちらも前者の方で、仕事は選べるほど実力も伴っていた。

その結果、私はレイカー家に雇われてこの学園へ。
ガイザーは……誰にスカウトされたのだろう？

「俺のことは心配いらない」
「その言葉を聞くと、不安になる」

そういって戦争後に死んでいった同胞たちを、私たちはいくらでも見ているはずだ。
だから、その言葉があるということは、この近くに何か危険な因子が紛れ込んでいるということ。

「自分のしたいことをすればいい。俺も自分のしたいことをする」
「したい、こと？」

そんなものはないと、私は答えた。
嘘だ。本当は、たくさんある。

普通に友人を作って、普通に彼氏をつくって。少しだけでいいから、「傭兵」のヒョウリではなく、一人の少女として見てもらいたい。
無知で、というのはいやだ。ちゃんとお互いを理解して、それでもちゃんと……。

なぜ、シルバ・エクアトゥールの顔が思い浮かぶんだろう？

「その反応で分かる」
「……ガイザーは、意地悪だ」

私のことを分かっているからこそ、余計質が悪い。
でも、恋愛感情こそ抱いたいことはないけれど、私は彼を慕って

いる。

「さて、俺も大事な人のために細工をするか」

「……必要ない」

顔が赤く染まっている。それは自分でも自覚できていた。

だから、何もいえなかった。

ヒョウリが落ち着いたところで、ガイザーは彼女を自分の部屋から追い出した。

彼女の存在は大切に思っているが、自分はそれを縛り付けられる存在だと思っていない。。

だから、自分は基本的に放任主義だ。でも、彼女は自分に感謝しているらしい。

何がいいたいのか分からないが、とにかくアガグは首を振る。

「もう俺は、傭兵じゃない」

1歳年上の教師にスカウトされ、自分はそれにのった。

今は、教鞭をとる教師だ。傭兵時代の技術を、子供たちに教えるだけでいい。

彼女は、任務という形でこの学園へきた。
1度2人の未来は別々になったと思ったのに、また合流した。
未来にどうなるかは、分からないのだが。
傭兵でなくても、彼はガイザー・アガグ。
異名持ち、魔剣持ち、勲章持ちの戦死に代わりはない。
「さて、……魔剣の手入れでも……と」
魔剣を手に取り、シルバからもらった、淡く発光しているクリームのようなモノを慎重にのばしていく。
魔剣が喜ぶようにきらきらとした光を発するのを感じて、今までごめんと彼は魔剣に謝る。
この世界に、魔剣に手入れが必要だと思っている人は少ない。
手入れを怠っていても、魔剣は対人において充分すぎる性能を発揮していたからだ。
だが、ガイザーはシルバの考えを聞いた。
「魔剣は生きている」
その言葉の意味が、分かったような気がして。
彼は、クリームの上を浸透させるようにして、魔力の滴を垂らした。

## 260　学園侵入者

「と、いうわけで！　レオやってきましたー！」

あれ？　前からいなかったっけ、という存在感の無さに驚くこと数秒、俺は意識を取り戻して何とか笑顔を取り繕う。

本当に、存在感が皆無だ。どうも、今のところレオとクインは俺の中で重要なポジションにいないらしい。

人材的には、レオはぜひともほしいところではあるが。

「どうした、シルバ」

「いや、なんでもないけど」

クインは俺のことが結構きになるようで、すこし考えてすぐに何か思いついたように後ろを向いた。

そこには、ヒョウリが立っていて不思議そうな顔で俺たちを見つめている。

「なぜ、君はこっちの輪に入ろうとしないのだ？」

「情が移ると、万が一の時。別れの時に困るから」

彼女が言っているのは、すべてが終わったあとの事だろうな、とは思う。

傭兵を繋ぎ止めるのは金であり、情ではない。

それをきちんと理解しているからこそ、何も言えないのだろう。

というか、この世界の傭兵って、兵士というよりは便利屋に近い気がする。

戦争までやってくれる便利屋。……なかなか物騒だな。

「では、レイカー家の任務が終わったら、私に雇われるか？」

「期間は？」

「私が死ぬまでだ」

呆れたように、ヒョウリは首をふる。

その前に、先客がいるのとちらり、俺の方を向くんだから、もうすべてを許す心境になってしまった。

「この輪に入ってくれるなら、レイカー家が払った同額はダスつもりだが」

「必要ない。……金で買われた友情なんて、望んでいないでしょう？」

よく分かっている、とクインは笑っていたあたり、別に無理やり引きこもうとはしていないようだ。

それが一番いいのは分かっているんだが、やっぱりなんだかんだ言って、……なんとも言い表しがたい。

と、こんな和やかな雰囲気が漂っていた時だった。

誰かが慌ただしく俺たちの寮に入ってきたかと思うと、大声で叫んだではないか。

「学園に侵入者が、シルバ・エクアトゥールとラン・ロキアスを出せって！」

「一体どういうことだ」

俺は、先ほど駆け込んできたゼロ＝オールに事情を説明させながら完全武装して学園へ向かう。

今日、ゼロは学園長とレイカー家のことで話があるらしく、1人残っていたのだが、時間的に考えると……。

帰宅途中辺りで、異常に気づいたということだろうか。

「名指しで俺を呼んだのか？」

「はい」

ゼロは、仕事モードだった。

クレアシモニー学園の一生徒として、ではなくレイカー家の護衛として完全に仕上がっている。

身体のモードは戦闘。機械騎士としての姿を、歩くたびに変形させていっていた。

俺は俺で、魔剣7本。魔刀以外は亜空間に閉じ込めてあるが、すべて新作だ。

さらに言えば、すべて個別の場所においてある。

「万が一の時は、私が」

「いやいや、こんな楽しいイベント自分でやるよ」

俺は戦闘狂ではない。できれば戦いたくないと思っているが、俺

が戦う条件は、大きく分けて2つになる。

一つは、自分が名指しされた場合だ。見ぬ強敵と戦うのはいいものであるし、負けると分かっている敵を蹂躙するのもそれ一興というわけ。

そしてもう一つは、俺の大切な人たちが傷つけられた時だ。絶対にこんなことになったら手加減はしないし、仲間に向けられた傷の倍、相手を傷つけてやる。

前の世界でもこうだったから、俺はなんとも思っていなかったけれど。

どうも、実力が上であれば地位が上なこの世界、俺の思想は少々特別だったらしい。

## ２６０　学園侵入者（後書き）

今章はこれで終わりです。
次、の話はもう決まっています、一言で言うなら「勇者」ですかね。
お楽しみくださいませ。更新は明日か明後日からです

# 261　龍醒の合流

学園に入り、騒ぎのある方向へ進む方向を変えた頃、俺はロキアスの率いる一団にぶつかった。
そのままなんの打ち合わせもなく、合流して。

俺は口を開く。

「状況は聞いているか？」
「うん」

なんでもないように、ロキアスは頷いた。
運命神人間態を含め、この一団も臨戦態勢だ。
名指しで呼ばれたら、そりゃあそうなるか。誰でも予想できる状態だろう。

クリーゼは手で握り拳を作っていたが、指と指の僅かな隙間から黄緑色の光が漏れている。
おそらく属性は【風】。あの状態で腹パンをくらったら、内臓をかき混ぜられそうだ。

ロキアスはどちらかというと、ゆったりしている。
ゆったりしているが、その目は決して笑っていないし戦闘したくてたまらないと言った顔でいた。

さすがに、俺と目を合わせるときには殺意は消えている。
だが、そう。前に向ける目は殺意に近い何かをはらんでいた。

「お楽しみを邪魔されたような目をしている」

「……まあね？　お昼からクリーゼとお楽しみするつもりだったからね」

全く、お盛んなことで。

俺は下ネタはダメ、と首を振って彼を一旦黙らせる。

改心はしたようだが、こんな調子の彼ならリンセルとアンセルを渡さなくてよかったと思う。

下半身の獣め。婚約者は愛情を深めるものであって、食らい尽くすものではなかろうに。

性欲（ハーレム）の巣を作るつもりしかなさそうだ。下の実用性だけ考えてるんだな、きっと。

こう散々こき下ろしているが、おそらくその通りなので相手はにこにこしていた。

「シルバはそう思わないわけ？」

「ねーよ」

今はヒョウリとレオの攻略に忙しい。

……いや、それはさすがに冗談だとしても、今はそんなことをする気分になれない。

今は魔剣をつくって、周りを万全な状態にしたい。

恋人を増やすなら、それ相応に彼女たちを納得させ、安全な場所におかねばならないと俺は考えている。

肉欲のまま考えては、絶対にいけないのだ。

万が一、億が一のことを考えて予防線を張る。そばにいるときは

自分の能力を矛にも盾にも使う。

誰かを愛するというのは、それなりの覚悟が必要なんだ。

「なんだか、『お前の考えが気に入らない』みたいな顔をしているね」

「よくおわかりで」

俺の魔剣1本で、ロキアス2人分だ。

その程度の戦闘力は秘めているため、まあ……。

学園では安全、と判断できる。

ヒョウリは、身体能力では俺に勝るだろうが魔剣相手だとすこぶる相性が悪いから。

彼女の戦法は、相手の攻撃をいなし、受け流して反撃するタイプ。

俺の魔剣は基本、圧倒的な物量で攻めるか迎撃用のものだ。

相手が攻撃すれば返り討ちにする。

防御に走れば防御をさせない勢いで攻撃する。

この循環が、やはり美しい。

……俺がヒョウリを雇えたら、そのときは魔剣を報酬として渡そう。

俺がいなくても、史上最強の魔剣使いになれれば幸い。

「ねえ、万が一戦うことになったらどうするんだ？」

考えに思考を巡らせていると、ロキアスがそんな言葉をかけてきた。

万が一戦うことになったら、というか。

俺が戦う必要がなければ、俺は戦いたくないんだが……。

時間と労力の無駄であってほしい。この臨戦態勢は、本当に。

特に、レイカー家の双子姉妹と希望神は怒らせてはいけない。

相手が跡形もなく吹き飛ぶから。

「共闘する？」

「遠慮する。後ろから刺されそうだ」

後から飛びかかってきたら、魔剣の自動迎撃範囲内だから返り討ち確定だが。

それはロキアスもわかっているようで、「そんなことしないよ」と首を振っているが。さあどうだかな。

「俺は、戦闘狂じゃ、ない」

「わかってる、わかってるってば」

細かく文を止めながら警告すると、ロキアスは慌てたように手を振る。

さて、そろそろ騒ぎの中心だ。

……何だあの、なんていうか。

……ファンタジー物のゲームに出てきそうな、いわゆる勇者のコ

スプレみたいな格好は。

## 262　ハヤト・イリテ

「アガグ先生、アテラット先生」

男を押しとどめているのは2人の若手の、教授である。

1人は閃く真紅の魔剣を、1人は煌めく金色の魔剣を持っていて、威嚇というよりは完全に牽制レベルで構えていた。

どちらも敵意丸出しで男を見つめており、何か行動を起こせばすぐにでも斬りかかるつもりなのだろう。

俺はリンセルたちを、輪にはいらないぎりぎりの場所で留める。

ロキアスも同じ心のようで、クリーゼたちをちゃんと押しとどめているけれど……。

「さて、行きますか」

俺が輪の中に入ると、アガグがこちらに気づいたようでダメだと首を振った。カレルに目配せして教え、こっちに近づいてきた。

それに対して、勇者っぽいコスチュームをした男もこちらに気づいたようで。

何か捻くれたような笑い方をする男だ。癪に障ってそれどころではなくなる。

「ラン・ロキアス。シルバ・エクアトゥール。……あの人の言っていたとおりだ！」

あの人。確かに男はそういった。

何が目的なのか、よくわからないが彼のバックに誰か居るということを指し示しているのだろう。
まずは、なぜオレたちの名前を知っているのかが問題だ。それを聞き出さないと、いろいろあとで面倒なことになる気がする。

「俺の名前はハヤト・イリテ」
「そんなのどうでもいいんだよな。……目的だけ言ってもらおう」

男に敵意満々な脳筋ぶりを発揮したのは残念なことに、ラン・ロキアスであった。
脳筋すぎて話にならない。

目的を言わないつもりなら、力づくで言わせる気らしい。

「ほう、来るのか？」

こうやってイリテという男も挑発するから、事態は深刻なものになるんだ。
普通に話し合いで終わらないものなのか。
終わらないから、こうなるんだろうがな。

「いってやるよ！」

猛然とランがかけ出した。
魔力の奔流が一種の力となり、白い虎を模したオーラが流れ出る。

彼の武器、あらん限りの無尽蔵な魔力である。
その魔力を超超高密度にするだけでその威力は何百倍にも増すし、何をやったとしても魔力というものは便利だ。

だからこそ、それは単純に強力。
俺の魔剣よりも、汎用性は高いだろう。

ロキアスとイリテが戦闘を始めた。
俺たちを取り巻く輪が広がり、銀色の火花が輝く。

俺は手を出さない。ロキアスが額を切ろうとも、返り討ちにあったイリテが右手を破壊されようとも、俺とは関係ない。
リンセルやアンセルたちが無事ならいいのだ。人質に取らない限り、俺は戦う必要がないと考えている。

むしろ、このままラン・ロキアスも新参の刺客も一緒に消えてくれれば、未来も安泰ということだろう。

リンセルの方を振り返る。
彼女は俺の方を見ていたが、何かを悟ったかのように頷く。
それこそ、彼女が俺の側についたという確固たる証拠であった。

「それで充分だ」

俺は微笑む。勝利を確信した笑みは、誰に悟られずとも周りに霧散した。

亜空間から、6本の魔剣を送り出した俺は、それを個別に操作しながら時を待った。

ここから、２人が一斉に倒せるタイミングを図る。

そして、その時はきた。

## 262　ハヤト・イリテ（後書き）

短いですが、今回はこのへんで

# 263　龍醒の変化

６本の魔剣に、それを操っている機関から魔力を一気にそそぎ込んだ。
魔力は普段、目に見えないものとして空気中に漂っている。
が、こうやって反応させれば、目に見えるものとして視覚化され、敵にも自分にも認識のできる物になる。

「共々吹き飛べ！」

魔力を展開された６本の魔剣の中心に集結させ、一気に照射する。
レーザーともビームともつかない魔力の閃光は、迸るそれと同時に２人に直撃した。

断言したのは、２人の表面が焼き焦げるのを視認できたからである。
ロキアスはとっさの判断で魔力による打ち消しを行っていた。
しかし、イリテはその限りではない。

そういえば先ほどまで魔法を一度も使っていないな。
魔法が使えなかったのかもしれない。それでも、種族的に使用することができない械刃族（サミュリ）は対魔法武器や防具を持っているのが主流だ。

正直、持っているか持っていないかなんて関係ない。
安らかな放課後を邪魔した相手に、八つ当たりしているだけなのだから。

「ふぃー！　俺じゃなかったらこうなってたぜ！」

ロキアスは、余裕綽々と言ったような顔で俺をみつめ、笑顔を浮かべた。
盾で防御しているのに、服は半分以上が吹き飛んでいるのを見ればどうみてもその威力はわかるはずだ。

ちなみに、彼が言っている「こう」はイリテのことを指していた。
死にこそはしていないものの、顔一面を火であぶったようなことになっていた。
苦悶の表情と悲痛な、声にもならない悲鳴が聞こえる。

「シルバ……」

周りの人からは、俺がどう見ているのだろうか。
残虐非道の魔王だろうか。野蛮な魔法を使う魔龍だろうか。

別にどれでもいい。これから、俺は変わらなければならない。
いや、本質は変わらない。だが、これまで以上に保身に入ろう。

「やりすぎ」

話は始まってすらいなかったが、俺はリンセルたちのところに戻った。
最初に口を開いたのは驚くべきことにヒョウリで、「バカ」と言葉が続く。

イリテの応急処置と尋問に、2人の教授が近寄る。
そんな状況を見ながら、俺はレイカー家の双子とエスペランサの言葉を待った。

俺が大切なのはここのグループだけなのだ。外は、どうでもいい。
無論、クリーゼやリンナアイデル、ラン・ロキアスも除外する。

「シルバ、きみは変わったね」
「お互い様だろう」

ロキアスは柔らかくなった。
俺は、尖った。

ただそれだけのものだ。有名人になってしまった以上、俺はいつまでもオープンにしていられない。
シルバ・レイカー・エクアトゥールとして、これからは生きていかなければならない。

2年のはじめに気がついてよかった。
こうやって刺客がやってきたとき、どう対処すればいいのかこれでもんだいはない。

「ええ、このままで問題はありません」

頷いたのはエスペランサだ。それに続き、リンセルとアンセルも不安げながら頷く。
3人とも、何かを決意したような顔だ。

それもそのはず、俺は前とは違うのだから。

「お父様もこうですから、問題はありません」

アンセルも、頷いた。
彼女によると、ルークエルリダスさんが俺に優しかったのは、ア

ンセルとリンセルが認めていたからにすぎないという。
もし、2人が認めていなかったら。認めていたとしても、俺が信用ならないと判断していたら。

ルークエルリダスさんが敵に回っていたのかもしれない、といやな予感が頭を通り抜けて俺は身震いする。

しかし俺が息を返す前に、肩に手をおく人がいた。

「シルバ・エクアトゥール」

振り向くと、そこにはカレルと、アガグがいた。
2人とも険しい顔でこちらを見つめている。普通なら教師におびえるリアクションをとるべきだろうが、そんな感情は微塵にも起きない。

「なんでしょうか？」

## 264　傭兵からの頼まれごと

「つまり、シルバはなんにも思っていないと言うことだな？」

俺は、生活指導室に連れて行かれた。

どうも、教授たちの考えによると俺はあきらかに「異常」な行動をしたらしい。

しかし、どうとも思わなかった。

答えは簡単で、俺は自分に干渉してくる人が嫌いだっただけだ。

教授などならともかく、そもそもの部外者が俺にどうこう口出しするようなことではない。

しかも、今回はロキアスに挑発した。

2人に名指しして、片方に挑発したとしても、それは両方に挑発したと言えるのではないか。

そこまで考えて、俺は無駄だなと悟った。

が、この教師2人は、そこまで捨てたもんじゃないらしい。

「気持ちはよくわかるし、立場的にそうしても問題ないことはわかっている」

これを言ったのはカレルだ。カレルはレイカー家とつながっているから、もちろん俺の状況をもわかっている。

そのため、深く俺を叱ったりはしないのだろう。

「俺的には、部外者を倒してくれたからよくやったと言いたいところだけれども」

傭兵のアガグは相変わらずで、こちらを興味深そうに見つめていた。
彼は自身独自の論理をもっていて、今回はそれが俺と見事にマッチしたということだろうか。

「こんな所につれてきて申し訳ない。外でこんなことを言ったら、贔屓って思われるからな」

いや、生徒指導室につれてくるのもどうかと思うけれど。
俺はそんな言葉を飲み込んで、こくりと頷いた。

「ところで、イリテは？」
「今は医務室に搬送した。……とりあえず目覚めるのを待ってから、尋問をするつもりだが」

尋問、というとなかなかそれは穏やかではない。
が、不法侵入だからそれであっているんだろうな、とは推測することくらいできる。

俺たちが揃って溜息をついていると、アガグが手を挙げた。
なんだろう、とそちらを向くと。傭兵は俺をまじめな顔で見つめていた。

「少し言いにくいんだが……」
「はい？」
「ヒョウリを、頼む」

いったい何を言い出したんだろう。
俺はよくわからず、頭の上にハテナマークを浮かべた。

彼によると、昔はヒョウリの教育係だったらしく、結構気に入っていたようだ。
……ヒョウリが、俺の言葉を彼にリークしたのかな？
リークと言うよりは、相談したといった方があっているのかな。

兎に角、そんなこんなでどういうことなのかわかった俺は、はいと頷いた。
あれだけ美しく、なおかつ強い少女だ。頼むって言われて、嬉しくならないはずがない。

その前に、彼女の攻略の方が先だろうか？
俺に対する態度は確かに改善されているが、まだちょっと素っ気ないな。

さっき、バカとか言われたし。

「あと、一つ後で頼むかもしれない」
「また女子ですか？」
「……おうよ」

流石に5人以上はどうもできない気がする。
でも、エスペランサに言われた女性の数は6人だ。

今でも、平等に接するのがかなり大変だというのに。
エスペランサは天界でも何とかなるから、ちょっと今は我慢してもらっているというのに。

愛情の注ぎ方を変えよう。
今までは1を3人で割っていたから、エスペランサもちょっとっ

てかんじだったから。
これからは、1を3人にそれぞれ注ごう。

「不思議なオーラがあるんだよ、シルバには」
「ほう」
「傭兵に好まれやすいんだ。……いや、戦う人に好かれやすいのかもしれない」

そんな、特徴的なことがあるのかね。
魔剣を創っているから、仲良くなって取り入れてもらえれば魔剣を無料でもらえるとかなんとか、思っているんじゃ無かろうか。

そう考えているとしたら、ちょっと厄介だな。
でも、まだ俺はアガグに創っていると言っていないし。

「でも、胃が痛くなるのはいやなので、もちろん人は選びますよ」
「おう」

ヒョウリが気に入るのなら絶対に気に入る顔はしている、とアガグ。
もちろん顔も重視するが、俺は中途半端に最初から好感度がなぜかあがっている人は好きではない。

ならエスペランサは？　と訊かれるがエスペランサは人ではない、神だ。
リンセルはこの前まで、俺に対する好感度は0に近かったし。
アンセルも、記憶が吹き飛ぶまでは俺に目もくれなかった。

ヒョウリは殺意すら抱いていたのだから、ちゃんと接して好感度をあげたと言えるだろう。

「傭兵は愛情や忠誠心が分からない人も多いから、少し扱いにくいかもしれないが」

大丈夫。きっとなんとかなるだろう！

# ２６５　傭兵と傭兵（前書き）

アガグ視点

# 265　傭兵と傭兵

「ガイザーのバカ」

顔を桜色に染め、彼女は俺の頭をポカポカと力ない手で叩いた。
どうも、シルバに言った言葉がどこからか流れてしまったらしい。

ここはいつもの、俺の部屋だ。
シルバたちもたまに来るが、一番訪れることが多い生徒はやっぱりヒョウリである。

早くもよからぬ噂が立ち始めているようだ。が、ヒョウリが気にしていないのなら俺も気にする必要はない。

「そんなことより、授業にはなれたか？」
「流石、教えるのが上手」

ハヤト・イリテは尋問できなかった。
いつの間にか、医務室から霧のように消えていたのである。

もう少し見張りをつけておくべきだった、と後悔したがそれも後のこと、今は何も出来ないのが現状であった。
傭兵仲間の何人かに声をかけて、別に依頼は出させているが彼らは戦闘のプロであって、諜報のプロではない。

でも、シルバとラン・ロキアスが目的ならば再び復讐にくるだろうことは容易に推測できたことだ。

「そうか。よかったよ」

「うん」

俺が教えるのはあくまでも護身術で、魔剣を打ち負かすために魔法で対抗するのは一部の例外を除いて得策ではないということを、本格的に授業が始まった最初に説明した。

例外は、たとえばラン・ロキアスだ。

彼は超高密度の魔力を殆ど際限なく射出し続けることが出来る。

シルバが魔剣を介して可能にしていた物を、ロキアスは自分の魔力のみで可能にする。

汎用性はロキアスの方が断然上だ。しかし迎撃の面でいってしまえば、シルバの持っている魔剣に負けることはないだろう。

いったい、どこからそんな質のいい魔剣を何本も調達しているのだろうか。

俺にはそれが不思議でしかないのだが、カレルは笑うばかりでぜんぜん教えてくれないし。

「シルバの魔剣って、どこからの輸入なんだろう」

「本人に訊けばいいのに」

「ヒョウリは知っているのか？」

「うん」

ヒョウリには、知っているがあなたには教えないといわれた。

彼自身がレザールだから、特殊なルートを知っているんだろうことは予想できるんだけど、それ以降が分からない。

出来れば俺も、もう1本魔剣がほしいものだ。

いつも持ち歩いている魔剣【蜃紅楼（シンクロウ）】は大戦用にしたい。

少なくとも、普段から持ち歩くものじゃない。これは鞘がないの

だ。
細心の注意は払っているが、生徒たちを傷つけたら……と思ってしまう。
そうだな。大戦用、つまり「相手を殺すための魔剣」ではなく。生徒たちを守るための魔剣が欲しいところだ。
教師である以上、誰かを傷つける為の魔剣は必要ない。
「本人に訊いても、シルバくんは本当に信用している人にしか教えないとおもう」
「いつから、エクアトゥール呼びから君付けになったんだ？」
新学期が始まってすぐ、彼女の態度は大きく変わったように思えた。
シルバが、ついに乗り出したのかとか思うと感慨深いが、そんな感じの話ではない。
今まで、ヒョウリは愛情を知らなかった少女だ。傭兵団にいたときも、依頼人の劣情と欲望にさらされてきた少女である。
俺は世話係だったとは言え、傭兵である以上彼女に恋をすることは許されなかった。
だから、こうやって想い人のことで一喜一憂したり、頬を染めたりする彼女がとても貴重に思える。
いっそのこと、もう傭兵をやめて一生シルバに仕えるのはどうか。
2人が結ばれることになったら、そう提案するつもりだ。
「……ヒョウガも、この学園に来るのね」

「ああ」

ヒョウガとは、これも傭兵だ。

傭兵ではある物の、少々特殊な分類に入る。

ヒョウリの姉貴分だったか、妹分だったか。

兎に角、彼女と仲がとてもいい。

「ヒョウガも、きっとシルバくんが好きになる」

「【も】？」

墓穴を掘った、とでも言いたげな顔のヒョウリを笑うと、またさっきみたいにポカポカ叩かれた。

結局、やはりヒョウリも気づいているようだ。

傭兵は、自然とシルバを好む傾向があるということが。

# 266　希望と選択と。

「シルバさん、お父様から着信ですよ」

夜。みんなで食べる夕食も終わり、ある人は部屋に、ある人たちはリビングで談笑と個々の作業に戻るなか、俺はアンセルにそう呼び止められた。

彼女の端末をみると、確かにそこには【お父様】との表記が。

新学期も始まって1ヶ月がたつ。こんな時期になんの用だろうと首を傾げながら、俺はアンセルに差し出された端末を手に取った。

「もしもし」

『こんばんは、シルバ。元気にしているかな？』

世間話から始まった。

まあ、単刀直入に何か急ぎの用事もあるわけではないらしいと推測し、俺は依然と大差はないこととハヤト・イリテの事案を報告する。

話をしたのは、もしかしたらルークエルリダスさんなら何か知っているかもと考えたからだ。

イリテについてはエスペランサから軽い情報はもらっている。といっても、どうも神にも分からないことがあるらしく、殆ど俺が知ることはなかった。

ここで考えられるのは、「神が知らない」＝「異世界からの干渉」という推論だ。

もちろん、何か理由があるわけでもなくただ直感的にそう思っただけだが。

この世界にほかの世界からの住民が攻め込んできたりしたら、どうなるんだろう？

俺が元いた世界なら対抗できるかもしれないけれど。というか銃が飛んできたところでこの世界は怖くないからな……。・

『いや、こちらは何も知らないが調べてみよう』

「ありがとうございます」

『本題に入ってもいいかな？』

ルークエルリダスさんの質問というか、提案に俺は頷き。

電話をしていることに気づいて「はい」と答えた。

アンセル達をちらりと見やると、少々不安げな顔をしているが、どうだろうか。

『学園をちゃんと卒業するか、2年で中退するかどちらがいい？』

「それは、何か問題があるということですか？」

『まだ、詳しくは言えないけれどね』

俺はそう言われて、悩んだ。

前の世界では、まともな学園生活は2年終了時までだったのである。

普通に通っていれば、3年生の夏休み頃に紛争が発生し、冬休みが始まるあたりで戦死。

だから、この世界でまた学園生活を送れると聞いたときに喜んだのだが、今回も正式に卒業は出来ないのだろうか。

しかし、もしルークエルリダスさんが何か急用があるというのな

ら。

今の俺は、学園をやめると選択することだろう、とは予測できる。

「希望だけを言わせてもらうなら」

最後まで、卒業するまで学園生活を送りたいと俺は答えた。

ルークエルリダスさんは分かっているようで、すぐに『分かった』と返事をし、また連絡すると言って通話は終了。

端末をアンセルに返すと、ずいぶんと心配そうな顔で俺を見つめていた。

「どうか、なさいました？」

「俺、変な顔をしてるのかな」

「ちょっと怖いです。険しいって言うか」

何かあれば、遠慮なく言っていただければとアンセル。

そんな彼女をみて、俺はしかしどうしても躊躇してしまった。

中退、といってもアンセルには話が行っていないのだろう。

ということは、たぶん……。

ヒョウリの任務に関係することだ。だが、アンセル達は俺が中退すると言ったときどんな反応を示すのだろう？

ルークエルリダスさんに直談判しにいったら、話がこじれてしまう。

だから、今は言うことが出来ないのだ。

「今度話すよ」

俺は言葉を濁し、今日は疲れているからもう寝るねととりあえず

これ以上の追求を阻止する。
階段を昇るとき、ちらっとヒョウリの方をみて目で合図。
１０分後、これでくるはずだ。
「シルバさん、希望は通りますよ」
自分の部屋に入る直前、そうエスペランサに言われ俺はハッとする。
……まあ、それならよかったと言うべきだろう。

## ２６７　傭兵と魔剣鍛冶師

「シルバくん、はいっても？」

きっかり１０分後、俺のドアをノックする音がした。

ヒョウリだ。周りに誰かくると困るのか、そわそわしたような声色をうけて俺はドアを開ける。

顔は相変わらず美しいが、少々高揚した面持ち。

頬は桜色に染まっているようにも見受けられた。

「どうしたの？　あの合図は、相談したいことでしょう？」

とりあえず、今はまだ俺とヒョウリは恋愛的関係にあるわけではない。

あくまでも、一人の傭兵と一人の魔剣鍛冶師。

もしくは、一人の傭兵と依頼人の後継者として話しをしている。

でも、少なくとも彼女が俺に対して好意を抱き始めていることくらい、気づいているつもりだ。

自意識過剰かと言われたらそれまでだが、前までは殺気をこちらに向かって放っていたのに今はそれが無いどころか、最近は呆けてこちらをみている彼女をよく見かける。

「……うーん、難しい問題ね」

俺の話を聞いて、ヒョウリは素直に唸った。

ヒョウリはこの学園での生活を、任務の一環としか認識していないらしく、本人はどちらでもいいという。

「そういえば、どんな任務なのか詳しく知らないんだが」
「ん、この学園で、種族最強を1人ずつ選出するの」
詳しいことを知らないから、よく言えないんだけれどもと彼女は肩をすくめる。
そのうち、龍眼族（レザール）は本当に俺しかいないため、俺は選ばれたということだろうかな。
「大量改修をしたゼロ＝オールが械刃族（サミュリ）代表で、私が異能族（サイコル）代表」
「ヒョウリって異能族（サイコル）だったんだ」
「ちょっと特殊な部類だけれども、私はそうよ」
異能族（サイコル）と言えば、アンセルやリンセルもそうだ。
しかし、確かに何となくだが……2人とヒョウリは違う感じがする。
名家の令嬢というだけでなく、確かにアンセルもリンセルも、戦闘に関しては強い部類にはいるらしいのだが。
と、ここで俺は彼女が右手を庇い気味にしていることに、気づいた。
「ちょっと手、見せてみろ」
「ん？　……ああ、これは何でもないの」
しかし何か思うところがあるのか、ヒョウリは隠すことなく俺に腕を晒す。
くっきりした痣だ。強い力で腕を掴まれたのだろうか。

「これが何でもないと？」
「よくあることだから」

それは「よくあること」であって、何でもないことにはならないと思うのだが。
俺は彼女の痣を左手で包むようにし、彼女の掌と自分の右掌をあわせるようにする。

俺は医療系魔法師ではないため、完治させるどころか微塵も直すことが出来ないが。

「なにを、しているの？」

不思議そうな顔をこちらのほうを向いているヒョウリに、俺は何も言わない。
彼女は手をふりほどくようなことは、しなかった。
数ヶ月前ならやっていただろうと考えると、やはり彼女が変わってきたことが、分かる。

「よし、完了」

つぶやき、彼女の手を離す。
ヒョウリの腕から痣は消えていた。

代わりに、俺の腕に肩代わりされているはずだ。
龍眼族（レザール）の再生能力って言うのは全種族のなかでも異常で、だからこそ大した問題はないと断言することが出来るのだけれど。

「女の子に傷が残ったら、大変だものな」
「……そういう台詞は、卑怯」

意識回復系の魔武具は作成したが、そういえば純粋な回復系の魔武具は作っていなかったと少し後悔する。
今作ろうか。……今度でいいや。

「これは、外傷の回復魔法なの？」
「そんな感じかな」

まさか肩代わりしたなんて言えないから、これでよし。

完全に彼女が落ちたら、彼女の魔剣も作ってやるかな。

「もし学園を中退したとしても、私は貴方の隣で働ける？」
「……ん、それは前から『俺』が望んでいることなんだけどな」

完全に変わってきた。

## 268　アンセルとお話

「最近、ヒョウリさんと一緒にいる期間が長くないですか」

アンセルから苦情がきて、俺はためいきをつき首を横に振る。

「そんなことはない」

そう、そんなことは決してないのだ。

今まではエスペランサ、アンセル、リンセルと3人でローテーションをくんでいたのだが、ヒョウリをそこに組み込めていないため、ちょくちょくコミュニケーションを取るようにはしているのだが。

それを、アンセルは快く思っていないらしい。

「ちゃんと、中途半端な気持ちで接しないで頂けるとありがたいです」

「なんで？」

聞き返せば、そちらの方が判別しやすいとのこと。

判別しやすい、という判断もいかがなものかと思うが……。

とにかく、やるならやるやらないならやらないでわかりやすくしろと言われた。

今のところ、俺はヒョウリに指一本触れていない。

好意を持たれていると言ったって、彼女は任務を受けている傭兵であり、俺はその依頼人の関係者である。

ここで恋に落ちてしまったら、その関係自体が曖昧なものになっ

てしまうのではないか、と危惧しているんだがどうなんだろうか。

「まあ、俺からは落としにかからないけどね」

「うそつきは嫌いですよ？」

「冗談と言って欲しいところだ」

恋人として付き合う付き合わないは別として、俺が彼女を口説いているのは少なくとも仕事での意味だ。

一生仕えてくれ、なんて殆どプロポーズと近いのかもしれないけれど。

それでも、放浪鍛冶師としてやっていくならば、助手は必要だ。

優秀で、顔もよくて、護衛にもなる。

これらすべてを揃える人が目の前にいるのだ、これを使わないわけアルマいて。

リンセルやアンセルに仕事をさせることも考えたが、やめておいた。

そういうのは、準王族の令嬢にやらせることじゃない。

エスペランサにやらせることも考えたけど、エスペランサなら手探りでやるのではなく、ただ的確に仕事をこなすだけだからな。

彼女にはアドバイザーとして活躍してもらおうっと。

「シルバさん、将来設計はできているのですね」

「いや、漠然としたものだけだよ」

すぐに代を継いで欲しいというのなら、それでもいいけれど。

俺はカチカチと時を刻み続けている銀時計を見つめながら、それを握りしめた。

こんどこそ、学園を卒業したいものだが、果たして今回はそれがかなうのやら。
変に考えても仕方ないから、できるだけ考えたくはないけれども、ね。

「俺は貴族のことをよくしらない」
「あら？　生前は貴族だったと聞きましたよ？」
「家庭は古の遺産とかいって嫌ってたんだ。だから俺は普通に学園へ入って、普通に戦士として戦死した」

デスムーン家って、日本語に訳せば「月無」なのに、みんな「死月」だと勘違いしていたしなぁ。
本当、あの名前はあまり好きじゃなかったから……どこかに婿入りするつもりだったんだが。

「そういえば、なぜ『エクアトゥール』になったのでしたっけ」
「原点とか、そう言う意味で付けられたんだと思うけど」

そういえば、よく知らないな……由来。
今度きちんと聞いてみなければ。

それにしても、俺の前の故郷というのは。
名字にも意味があったというのに、この世界も同じようなものなんだろうか。

「もっと、この世界のことを知りたいんだ。学校で習うようなものじゃなくて」
「……そのために、世界を旅したいのですね」

そう、放浪したかったのは、そういうこと。

# 269　陸魔剣乱舞

アガグ教授の講義を受けて、放課後いつものように俺は最後まで授業に残っていた。
教授の講義は、いつも最終試験である。
なので、必要とあらば夜まで訓練に明け暮れることができるのだ。

「今日はどうする？」
「とりあえず、魔剣の操作をもっと上達させたいので、お相手いいでしょうか」
「おう、いいよ」

アガグ教授が魔法１本対、俺が魔剣６本。
手数では俺が圧倒的だけれど、その分６本全部を一度に操作しなければならない。
難易度としては同じくらいかな。でも、アガグ教授は普通に大戦をくぐり抜けてきた戦士である。傭兵である。

「隙あり！」

このように、少しでも隙を見せればみぞおちに柄が飛んでくる。
隙ありって言ってくれるだけマシだ、これが演習じゃなきゃみぞおちにクリティカルヒットしてそのままダウンだろう。

さらに言えば、もしこれが柄ではなく、剣先であったなら。
ていうか、なんで乱舞する魔剣６本の間をすり抜けられるんだ。

「シルバ、どちらかというと君の魔剣は乱舞というよりは一種の規

則性を持って動いている」

アガグ教授、的確に俺の欠点を見抜く。

そして全部を動かすのではなく、役割分担という方法を指摘した。

「3つを防御に、3つを攻撃に回すというのはどうだろう？」

「そうですね、やってみます」

俺は頷くと、3つを急速に回転させ、バリアのようなものを創りだすと周りに配置。

高速で回転したそれらは、こちらの視界を遮ることなく相手からの脅威を無効にする。

そして、防御はそのままで固定し魔力を流し込み続け、攻撃に専念した。

「負担は少なくとも減っただろう？」

「そうですね、ありがとうございます」

確かに、操作性は良くなった。

迎撃機能付きだから、防御側はこれでほぼ完成しているとも言える。

だからこそ、これが効く。いい気分だ。

「このあと、夕飯でもいっしょにどうだ？」

「……うーん」

「彼女さんたちも同伴で構わないぞ」

そういって教授は快く笑ってみせる。

ヒョウリも連れてくるけど、と何か口走って30分後に学園門で

落ち合う話をし、俺は彼と別れた。

今のところ、双子やエスペランサも彼には敵意を持っていないから、大丈夫だろう……な。

「というわけで、一緒に来なさいヒョウリ」

アガグは、まるで我が家のような寛ぎっぷりのヒョウリを見つめながら説明する。

食事会。ヒョウリがほとんど参加したことのないイベントに、とりあえず連れて行こうと思ったわけだが、彼女にとってそれはもっと大きな意味があった。

「シルバくんと、お食事」

彼女の態度の変わり様といえば、完全に恋する乙女である。

アガグはそんなヒョウリを見つめて、柔らかい笑顔を浮かべていた。

「……何着て行こう」

「デートじゃあるまいし、普通のものでいいんじゃないか？」

アガグは恋愛というものをよく覚えていない。

学生時代に初恋はしたが、もろもろの事情により成就せず、そこ

からは傭兵であった。

だから、恋愛事に対する知識は一切ない。

「俺には無理だわ。アドバイスとか」

「戦闘では無敗のガイザーも、こういうのは苦手？」

「それはヒョウリもそう変わらんだろ」

兵器、と呼ばれる時代もあった。

命令通りに動く戦闘兵器、として扱われる時もあった。

だから、まともに普通の人々と溶け込めない人は多く存在する。

「しかたのないことよね。……シルバくんもわかってくれると嬉しいのだけれど」

「大丈夫だろ……。あの人、訳ありっぽいし」

# 270　魔剣契約

「楽しくなかったか、ヒョウリ」

食事会も終わって、みんなが満足げな顔で和気藹々と話しをしている頃、俺はうつむき加減で誰とも話しをしようとしないヒョウリに近づいた。

俺の言葉にはっとして、少女は少しだけゆがんだ笑顔を見せる。

愛想笑いのつもりなんだろうが、そこには感情の込められていないいびつな表情が存在しているだけである。

「ちょっと、いろいろ考えてて」

彼女の服装は、今まで俺がみてきた中で一番迷走しているようにも思えるものだった。

言い方は失礼なのかもしれないが、娼婦が気取って貴族の舞踏会にやってきたような印象を受ける。

何に緊張しているのか、それとも自分を誇示したいのか。よくわかっていないが、どうしても今日の態度には違和感しか覚えなかった。

ヒョウリは自然体の方が、幾分も幾倍も美しい。

それは周知の事実だと思うのだが、なぜ緊張したりするのだろう。

でも……今でも、充分美しく感じられる。

「あのね、シルバくん」

「後で話しは聞くよ。部屋でね」

彼女の表情から尋常でない「何か」を感じ、俺は彼女を制す。
自意識過剰なのかもしれないが、もしかしたら告白されるのかもしれないと考えてしまったのだ。
彼女の声は震えているし、顔は真っ赤で今までの冷徹な「ヒョウリ」という少女は存在しない。

……周りの人が、ヒョウリを見つめている。
男達はそろって鼻息を強くしたし、彼女の実力が感じ取れた人は顔をひきつらせ、女性は避難するようにひそひそと話を始めた。
なぜ、こんなにも周りはヒョウリに向かってアウェーなのだろう。
彼女が異質な存在だと言うことならわかっているが、それでもこれはひどすぎるような気もしないでも、ない。

「早く帰りましょう」

その目線を分かってか、ヒョウリの歩く速度が速くなる。
俺もそれを否定する意味なんて無い。

「ヒョウリさんに何かあったのです？」
「周りの空気」

エスペランサにそう質問され、周りを見回して俺は応えた。
どうみても以上だ。なんでここまで、彼女を敵視というか、異常視されなければならないんだろう。

「シルバさんは何も感じないのですね」
「……何が？」

俺は、ヒョウリが。ただ一人のかわいい美少女にしか見えないのだが、何か間違っているのだろうか。

「まあ、いいですよ」

彼女が、おれに何かを隠しているというのは分かった。
しかし、俺からは何も読みとることができないのだ。
もしかして、同類なのかもしれない。

「魔剣を、作ってほしいの」
「は？」

部屋に帰ると、そこにはヒョウリもついてきて。
丁寧に鍵までかけられたあと、そう言われた。

「ふつうの魔剣じゃなくて、一生かけても私が払えない物を」
「……魔剣で、俺から縛り付けるってこと？」

一生かけても国王であっても、払えない魔剣というのは簡単に作ることが可能だ。
機能を充実させればいい。自動迎撃と言うのがそもそも、普通ならとんでもなく高価で合ってもいいものなのだから、問題はない。
バトルアシストとか付けてみたら、それだけで跳ね上がりそうだ。

「うん」

「……あまり気は乗らないけれど、少しいいことを考えたから承諾するよ」

いや、そんなものは必要ない。

俺が作る魔剣なら、俺が考えていることも可能なはずだ。

変な笑いがこみ上げてくる。彼女が、俺の物になるとすればそれはそれで有り難い。

「変な顔」

「……おっと、取り乱した」

これ以上周りの女を増やしてもいいのか、っていう疑問はあるが。

エスペランサによると、あとヒョウリ併せて3人っていってたから、大丈夫なんだろう。

「でも、いいのか？　傭兵をやめてもらうけど」

「……うぐ」

やっぱり考えていなかったのか。そもそも、一生誰かに仕えたらそれは明らかに傭兵ではないのだが。

「いいんだな？」

# 271　双魔剣フロスフレア

「おお、完璧だ」

今までみた中で最高級の魔剣が完成し、俺は歓声を上げた。
高級、という訳ではない。確かに金属はルークエルリダスさんから「自由に使ってくれ」と言われた幾つかの金属を混ぜ合わせたし、魔石も今までは柄に一つだけだったが小さいながらも強力な物を3つほど、埋め込んでいる。

ヒョウリに渡すための物だ。同時に、俺のレベルが上昇したのを確認するため、少々の実験もかける。

「出て来いー」

唱えると、魔剣から『武器妖精（アームド・フェアリー）』が現れた。
今回呼び出す予定だったのは属性にマッチする鳥獣型だったが、どうもその通りの物がでたっていうか。
……片羽は炎の、片羽は氷の。鷲型が出てきたのだから満足だ。

『初めまして、我が主』

魔剣の名前は「双翼（フロスレア）」。この名前の通り、二つの属性を一つの魔剣に宿す効果を持っている。
同時に、本当は番になるように作った2本の魔剣であり、それを合体させることによって『武器妖精（アームド・フェアリー）』が出現するようになっている。

「創造主は俺だけど、ご主人は別の人だよ、フロスレア」

『ふむ、承知した』

この場合、『武器妖精（アームド・フェアリー）』にとって優先順位は創造主＞使用主になる。
その特性を生かして、今回俺が作った魔剣には一つの特性が存在する。

「自分の媒体の、能力は把握できてる？」
『ぬぬ、創造主が与える好意の分だけ力を発揮する、か？』
「そう」

そうなのだ。俺が好意を向ける人でないと、この魔剣はただのガラクタと成り下がる。
これは防犯の意味もある。たとえば相手に魔剣を奪われた場合、ふつうの魔剣なら新しい主に移ったと判断して元々の主人に牙をむくが。
この魔剣なら、そのような悲劇は起こらないだろう。

ちなみに、殺意を抱いていた場合、持つと死ぬ。

普通に考えたら、どうなんだろうな。
これで、一生かかっても払えない価値になっただろうか。
ヒョウリが裏切るとは思っていないけれど、何が起こるか分からないからな。

彼女が俺に好意を抱いている間は、俺も彼女に好意を抱くことにしよう。
態度で示さなくとも、魔剣が俺の気持ちを示してくれるのだから。
態度では、どうしても準王族の双子や神にいい顔してないといけないけれども、さ！

でも、いい顔っていうのも嘘じゃなくて、本心でやっているから大丈夫だとは思う。
3人とも、俺の性格を知っているよとでもいわんばかりに笑顔を向けてくるのが怖い。
でも、エスペランサは幾分か安心しているみたいで、それは俺が決して彼女を裏切らないというか、それを分かっているからというかで、新しい女の子を引き入れても何もいわない。

『主、私はどうすればいい』
「いったん魔剣に収まってくれるかな、テストするから」

今は自分の部屋ではなく、学園の魔剣工房。
だから隣のテスト室に向かえば魔剣のテストがいくらでも可能で、魔剣を学園に通っているうちに手に入れられる人なんておれくらいしかいないのだから、ほぼ貸し切り状態。

耐久テスト、魔法の性能テスト、意志の疎通、その他潜在能力の有り無しを確認して書類にまとめていく。
友人だろうと、きちんと契約はする。去年の先輩の時は学園に処理を任せたが、あのときは結局「手数料」とかいわれて1割ほど持って行かれたからな。
もう個人契約でいいだろう。

しかも今回は金が絡まない。もっと大切な、人の「心」を契約に使うのだから学園なんて挟んだら面倒なことになる。

「でも、学園に見つかったら文句言われそうだよな」
『この世界のことはよく分からないが、主たちに従おう』

魔剣から声。俺はそうだなとうなずき、テストを再開した。

## 272　契約変更（前書き）

お久しぶりです。今日から更新再開します

# 272　契約変更

魔剣の最終調整が終わったのは、初夏にさしかかる頃のことであった。

毎日、魔剣を酷使するためそんなに長い時間ｔｅｓｔはできない。できたとしても2時間と言ったところだろう。

脆弱性を確かめて、その部分を補強。時には魔剣鍛冶作業台をもう一度使ってまでも生成を繰り返し、装飾という名前の強化を繰り返す。

一時期は装飾がすぎて、どうみても儀式用の剣になってしまったこともあった。

それをみて『武器妖精（アームド・フェアリー）』の彼が引いたような声を出したとき、俺は芯はそのままに作り直すことを決めた。

というわけで、これは2代目である。思った以上に費用も何もかもかかってしまったためか、正直魔剣の能力が無くともかなりの束縛力はあると思われる。

「さていこうか、新しい主に会いに」

「承知」

ヒョウリは、鼻歌を歌いながら昼食を作っていた。

エプロンをして、なれた手つきで野菜を炒めている彼女をみると、前の不機嫌な社会復讐願望者はどこにいったのだろうかと不思議に思うことが多々ある。

何が、彼女をここまで変えたのだろう？
ゼロには「シルバのおかげ」とか言われたけれど、正直俺は今まで通り、何も特別なことはしていない。
逆に、何を説明したのか分からないがゼロのほうが貢献したといえるだろう。

……当の本人は、今アンセル、リンセルと共に買い物に行ったわけであるが。

「ヒョウリ」
「ん？」

振り向いたヒョウリの顔は、満面の笑顔であった。
どうしてそんなに輝き出すような笑顔をしているのか、と不安にもなりつつしかし俺は何も言わない。

「そろそろ御飯ができるから、ダイニングで待ってて」
「おう。……あとで話があるから、御飯の後でも」
「分かった」

俺が真剣な顔をしているのをみて、彼女も少々表情を引き締める。
そうして料理を器に移そうとしたヒョウリの背中を無性に後ろから抱きしめたくなった。

……ここで、俺は自分が彼女に対する気持ちと、自分がエスペランサやレイカー姉妹に対する気持ちが同じことだと気づく。
ああ、いつの間にかやっぱり好きになってたんだな、と考えて契約内容を魔剣と心の中で相談しながら変更する。

「今日はシルバ君、オウラン帝国の肉料理が好きって聞いたから…

…」

と、作ってくれていた物をみれば肉じゃがである。
彼女の頬は赤く、その雪めいた白い肌に紅が差すというのはやはり美しい。

口に含んでみると、どこか懐かしさすら感じられる味が舌を伝って味覚に広がる。
これは、華琉（ハル）が作ってくれた味によく似ている、とそこまで思い出して、俺は彼女が心配そうな顔でこちらを見つめていることに気づく。

「美味しくなかった？」

指をのばされ、頬を伝っていることにも気づいていなかった液体を人差し指で掬われる。
涙、か。

俺は首を振り、今まで食べてきた中で一番おいしいと答える。
実際そうなんだから、仕方がない。嬉しそうに小躍りしかけているヒョウリを見つめ、全部食べてしまっても良いかと問うた。

「で、お話って？」

俺が一口一口味わって食べているのを、彼女は満面の笑みでみつめていた。
最後の一口が終わったのを確認してから、ヒョウリは俺に質問をする。

「魔剣ができた」

俺が言うと、ヒョウリは申し訳ないようななんだか微妙な顔でこちらを見つめる。
彼女は俺のそばで給料を払い続けるために魔剣がほしいといった。
しかし、俺の感情の中にはそんな物はない。

「人生１００％、俺に預けてくれるか？」
「……それって、契約ってこと？」

傭兵の金銭脳に違う、と答え俺は双魔剣【フロスフレア】を彼女に渡した。
世界で一つの魔剣だ。俺の作ったものは全てが唯一無二のものではあるが、それの上を行くものであるだろう。

「いや、俺との……卒業後の契約は今後一切破棄する」

その言葉を聞いて、ヒョウリは何かを察したのか意を決したような顔をした。
しかし、たぶんその察しは間違っている。
俺は彼女とこれから一緒に、人生を歩んでいきたい。

「代わりにとは言ってなんだが、俺を支え続けてくれないだろうか？」

言葉を聞いて、少女は硬直した。
最初の数秒は、俺が何を言ったのか耳にも入っていないようで表情が固まっている。
そして数分の間。少しずつ顔が紅潮していくのを、俺は見つめていた。

「で、でも。私は身元も分からない傭兵出身」
「その分は問題ない」
俺は1枚の書類を彼女に見せた。
契約書というよりは、ルークエルリダスさんの宣言文と言ったものだ。
そこには、ルークエルリダス・レイカーがヒョウリをレイカー家の第三女として認めることを記したものである。
さらに、加えてルークエルリダスさんだけではなく、リンセルとアンセルの署名付き。
スピラルさんの署名ももちろんあるな。つまりはそういうことなのだ。
「えっ」
次は、どんどんと彼女の顔が青くなっていった。
現実を理解できていないのか、パニックになりつつある。
そんな彼女を見つめながら、俺は笑った。
ヒョウリを抱きしめて、そのまま離さない。
「結婚を前提に付き合ってくれ。……ヒョウリ・レイカー」

## 273　ヒョウリ・レイカー

俺は、ヒョウリの前で正座していた。
帰ってきたリンセルとアンセル、ゼロ＝オールとエスペランサもだ。

まず、この事態……計画的にかつ強引に彼女をレイカー家に引き込んだことを謝らなければならない。

「ええと、頭をあげてくれないと、困る」

希望神と準王族、及びその関係者たちから深々と頭を下げられてヒョウリは困惑しているようだった。
それもそのはず、傭兵というのは誰かに頭を下げることも、誰かに頭を下げられることもない利益のみの役職だと彼女やアガグ教授が語っていたからだ。

「本当に申し訳ない」

それにしても、よくリンセルとアンセルはこのことについて了承したな、とは思う。
彼女たちはただほほえんで「いいよ」と二つ返事でＯＫサインを出してくれたのだが、どうしたんだろう？

「いやなら取り消す」
「……そうじゃなくて、私なんかが本当にいいの？　っていうのがね……」

その部分は問題ありません、とアンセル。

彼女は、ヒョウリにここにいるほとんどのそれを承諾したこと、カエシウス聖王国の準王族にヒョウリが相応しいと判断したことを説明する。

クレインクインとレオは正座こそしなかったものの、「扇動してしまった、申し訳ない」と2人して頭を下げていたし……。

そう、最初にこの方法を考え出したのはルークエルリダスさんに提案したクレインクインである。

この書類自体、聖王国から発行されレイカー家にわたったものであり、ヒョウリが承諾してサインをした時点で「国」がそれをみとめたと同意であるのだ。

正直、関係者なので「お前が言うな」と返ってきそうではあるが、聖王国ってやっぱり王族と準王族が好き勝手できるものなんだな、と考えてしまった。

権力って凄い。最初は「名誉＞権力」と考えていたのに、今は「名誉＝権力」にへと価値観が変わりつつあるほど、その威力は高い。

「分かりました、承諾します、けど……」

と、契約書をみてヒョウリは首を傾げた。

どこか分からない場所があったのだろうか。のぞいてみると、第3女としての部分である。

「私、何歳かまだ判明していないんだけど……」

その言葉を聞いたクレインクインが、年齢鑑定を深くおすすめしたのは、言うまでもない。

そう言えば、俺も戦死して身体を作り替えられてこの世界にやっ

てきたが、正しい年齢は知らないことに気づく。
おそらく、１９。……不安。

「シルバさんは１９ですよ」

魂レベルで俺のことを知り尽くしているエスペランサが即座に答えたため、取りあえず認識が間違っていないことに安堵する。
俺やラン・ロキアスみたいに見た目は少々違えど、ほぼ誤差のような状態で転生した人は転生・転移した時点の年齢を継続しても良いらしいが。
レオみたいに赤ん坊からの人生や、ヒョウリのように良く分からないケースの場合は、この世界での基準に基づくらしい。

……知勉族（エリシュ）はその限りではないが。
知勉族（エリシュ）は３０歳くらいまで他の種族と同じように成長するが、その先から年の取り方がスローになっていく。
龍眼族（レザール）も同じだったような、そうでないような気がするが、ハテ。
……俺以外の「年齢を知っている」龍眼族（レザール）にまだ出会っていないため、何とも言い難いな。なんでもエスペランサに頼むわけには行かないし。

頼るときは頼り切った方が、エスペランサは良いと言っていたけれども。

「これで、要らない嫉妬をしなくても済みます」

アンセルは、なんだか安堵していた。
今まで、俺がヒョウリを気にかけていたのがモヤモヤしていたようで、それを今回の「レイカー家の姉妹化」に加え「彼女」という

地位を持ったことによってなくなったのだろう。

でも、俺はヒョウリにもう一つ言わなければならないことがある。

「ヒョウリ」

「……ん」

「傭兵を辞めてくれ」

俺の言葉に、ヒョウリが一瞬だけ戸惑ったような顔をした。

しかし、俺もリンセルたちも、目は至極真面目である。

レイカー家、つまり準王族となるのだから、それに相応しいようにもちろん立ち振る舞いも何とかしなければならないわけで。

つまりそういうことだ。傭兵は辞めてもらわないといけない。

これは契約書に明記されていることである。

「もう、辞めてるけど？」

しかし、俺が考えていることよりも早く、彼女はそう答えた。

彼女の話を聞くに、俺から双魔剣を手渡された時から辞めるつもりだったらしい。

「ガイザーにもう辞表は渡しているから、大丈夫よ」

ただ、一方的に守られる存在であるのは嫌だという。

……なんていうか、ヒョウリらしい回答だ。

## 273　ヒョウリ・レイカー（後書き）

この話で今章終了です。

# 274　序話　傭兵たちの会話

「よしよし、計画通りだな」

俺はヒョウリからの報告をうけて、おもわずわらってしまった。
思った以上にことが進みすぎている。いや、別にシルバ・エクアトゥールに何か悪いことをしたいというわけではないのだが、やはり仲間が認められていくというのは嬉しいものである。

それが、最終的にどうなるか楽しみで仕方がないし。
次に彼に紹介する時、しやすいからである。

「……次はヒョウガの番ね」
「そういうことだよ」

ヒョウリの隣に立って、壁に寄りかかっている少女に声をかける。
銀髪碧眼の美少女。どこか愛嬌のあるようで、どこかに無機質な感覚すら覚える。

ヒョウリが美しい方面だとすれば、この子は可愛い方面に伸びていると言ってもいいだろう。
傭兵としての実力は最高級だ。正直教育係であった俺よりも、入団時点から強かったし、傭兵団が離散した時もなぜか俺についてきてくれた人の一人である。

「ヒョウガ、大丈夫？」
「もちろん大丈夫です。……シルバさん、か」

どこか夢見心地なヒョウガにこれなら安心だなと安堵のため息を

つき、俺はふぅと息を吐く。
実際、彼女なら大丈夫だ。史上最強の腕獣族（ケレイジ）という異名は伊達ではない。

「うまく取り入ってくれ」
「この任務が終われば、私も自由なの？」
「最初から自由だろうが」

彼女がそもそも、傭兵団解散の原因なんだからさ。
傭兵の中では、嫌と言うほど不名誉な異名がついている。

# 275　断罪と殺意

男を一人、気が立ってミンチにしてしまった。
魔剣でばっさり、だ。亜空間に帰って行く緑色の魔剣を見つめながら、俺ははぁと息を吐く。

あっさり人を殺してしまったというのに、その行動に心は動揺すらなかった。
ましてや嫌悪感は掻き失せ、断罪を楽しんでいるようにも感じられて自分が分からなくなる。

「……し、しるばくん、この、この肉塊は？」

アンセルは何もみていない。悲鳴すらしなかったのだ。
あったのは、剣が肉を切り裂く音と、肉がべちゃっと落ちる音だけだ。
彼女は、この肉の正体が先ほどまで彼女を襲おうとした男だと言うことを、しらない。

「ただの魔獣だよ。進入してきたんで、魔剣のテストがてら切り刻んでみたんだ」

俺は、自分が思ったよりも数倍明るい声がでたことに気づいた。
魔剣、いやレウスと一緒に開発したため技魔剣とでも証するべきだろうか、【大地の鎖鋸（アースエンソー）】は、個別としての初めてのお仕事を完遂したわけである。

鋸は3つ、それぞれがシュレッダーの役割を示すように回転しており、一撃の斬撃あっても数回分の扱いとなる。

更に恐ろしいところは、それが用途によって横に拡張されることだろうか。
ミンチにはし易い。

アンセルは薄々気づいているようだが、何も言わなかった。
現実逃避したいのだろう。その気持ちは良く分かる。
自分の恋人が、人殺しをしていたと考えたくはないのだろうな、とは思う。

「帰ろう」

俺は自分が悪いことをしたとは思っていない。自分の愛する人が襲われそうになって、ふつうなら恋人にしかさわらせないような場所を無理矢理やられたら、俺は絶対に許さない。
ただ、それだけのことだ。

「帰ろう」

肉は必要ないため、下水道にぽい。
アンセルに肩を回してもう一度声をかけると、俺は振り返ることなく学園の路地から去った。

証拠は何もなく、見た人は誰もいない。
凶器は見つからない。

「……やりすぎです」
「関係ないよ。俺にはね」

彼女には俺が、恐ろしく冷酷に映ったことだろう。

人を殺しておいて、まだ笑っていられるばかりかいっさい動揺していないのだから。

「見ちゃった」

屋上で、一人の女子生徒が下を見つめていた。
名前はヒョウガ。元傭兵であり、今は半傭兵と言ったところだろうか。
ガイザー・アガグについてきた彼女は、とりあえずは学生の皮を被って内情を調べていた。
一見するとかなりすばらしい学園だ。施設も充実している。

しかし、一部を除いて生徒が問題である。
特待生はほぼ無料で授業および生活料が支給されるが、ほとんどはやはり貴族や名家が多い。
そのほとんどが、ここポラリスを囲む3国のものであるのが現状である。

「生徒は腐ってますね」

ヒョウガは、シルバの行動……殺人行為を目撃しても、何とも思わなかった。

自分だって何百人と殺してきた、傭兵である。
金や利益があれば、正義漢だろうと何だろうと殺してきたし、今頃その行為についてとやかく言うことはできない。
しかし、彼女が気になったのは彼の動機であった。

女の子を庇ったように感じられた。
もしかしたら見間違えたのかもしれないが、おそらくシルバという龍眼族（レザール）と近くにいた銀髪の美少女は付き合っていたのだろう、と考える程度のことはできる。

ヒョウガは、ヒョウリと違って最初から愛情も忠誠心も理解できている。
だから、愛情がゆがんだ物として現れたことを理解することができるのだ。

「……おこらせないようにしないと」

このタイプは、身内にとことん甘くて部外者に厳しいタイプだ。
ヒョウガはしっかりと目標の人間を判断した後、ふっと軽く笑ったのである。

その笑顔は、雪の精のような。
美しく、愛らしいものであった。

## 276　ヒョウガとヒョウリ

「初めまして」

ヒョウリにつれてこられた少女は、まるでヒョウリとの血縁関係を疑いたくなるほど、にたような顔をしていた。

むしろ、身長の差はあれどリンセルとアンセルのような感覚をうけたのだが、彼女たちによるといっさいの血縁関係というのは存在しないらしい。

「ヒョウガと申します」

名前も1文字違いじゃないか、とも思ったのだが。

考えれば、たしかヒョウリはアガグ教授に名前を付けてもらったんだっけ。

そう考えれば、容姿から姉妹と勘違いした彼が付けたと思ってもいいのだろうか。

「よろしく」

エスペランサは、「この人が」と、自分の信託が間違っていなかったと安心していた。

彼女が安心すると言うことは、すくなくとも悪い人というわけではなさそうだ。

見る限り、純真無垢な笑顔を浮かべた美少女、といった感じだろうか。

リンセルやアンセルは少々ご機嫌斜めな様子だったが、それを必死に表へ出さないようにしている。

それだけ、彼女が魅力的に見えたということだろう。
これで銀髪っぽい髪色の人は４人か。なんでここまで。

いや、別に学園内に銀髪があふれかえっているというわけでもないのだ。
少なくとも、おそらく１０００人はいるだろうここ、クレアシモニー学園でも１０人程度のはずだ。

「私と同じ部屋でかまわないので、ここに泊めてもかまわないでしょうか」

ヒョウリは、レイカーという名前をもらってから変に敬語になってしまった。
前の、冷静なクール口調は聞けないのだと思うと少し残念だ。
ていうか、俺は前の方が好きだな。

このままだと、どうしてもアンセルと被る。
あとで掛け合ってみよう。

「ヒョウガは妹分なんです」

そんな説明を聞きながら、俺はうーんと考える。
勿論、作るとしたらどんな魔剣を作るか、だ。

彼女は俺と人生を共にすることがほぼ決まっている。
それなら、今から考えていたって問題はないだろう。

「ヒョウリ、後で俺の部屋」
「はい」

彼女にしか聞こえない程度の声で指示し、俺は自分の部屋に戻ることにした。
ヒョウガという少女を見ていると、どこか心が落ち着かないのだ。
恋？　いや違うと思う。
雪女に見つめられているような、心底恐ろしい冷たさを感じる。
怖いようだが、やはり美しい。

「到着しました」
「……その敬語なんとかして辞めてくれない？」
俺のベッドに腰掛ける少女に、放ったのは抗議であった。
ヒョウリに、前の方がいいと単刀直入に意見する。
やっぱり、彼女には少々憎たらしささえ感じさせるあの口調が好きだ。

でも、と何か口ごもる彼女に対して、俺はヒョウリの頭をなでる。
最初は、自分に自信が有り余ってあんな感じだったというのに。
この数ヶ月で、ここまで謙虚になった。謙虚になってしまったと言うべきであろう代わり映えに、俺は半分満足しながらもどこか不安さを感じ取っていた。

不安定なんだよな。こういう急に変わった人というのは。
どこかに必ず無理をしているから、決壊したときのショックが怖い。

それが涙であればまだ救いようはあるのだが、全方位への攻撃だったら社会的に終了してしまう。

「でも、レイカー家の一員だから……」

「なら、せめて俺の前だけでも素を出してくれないかな？」

素を出す、というのは別に難しいことではないと思っている。

もちろん、相手の信用や信頼という問題はあるのだろうが。

彼女をじっと見つめると、少々照れながらもこくりと頷く姿が確認できた。

素直でいい子だ。控えめながら、俺に抱きついてきたヒョウリの身体を受け止めて、俺は息をつく。

「ん、灯りは消して欲しいかな……」

「分かったよ」

言葉から、彼女の言いたいことを察して俺はパチンと指を鳴らす。

灯りが揺らめき、消える。そのまま倒れ込むようにしてベッドに転がり。

俺は暗闇の中から、彼女の存在を、認識した。

# 277　心の歪み（前書き）

事後注意

## 277　心の歪み

「……おはよう」

目を開けると、目の前でヒョウリは俺から布団を全部奪って、産まれたままの姿を隠していた。

そうか、と昨日の行為を思い出す。

相手を求めては求められ、とりわけヒョウリのそれは激流のような感情である。

もげるかと思った。いや、比喩表現ではなく。

アレで初体験とか、正直何ともいえない気分になる。

「私は娼婦じゃない」

冷静に、できるだけ冷静に装っているつもりでも、彼女から漏れ出る甘美な響きは中々取り消すことができない。

傭兵は利益のためなら何でもすると聞いたことがあるが、と傭兵の認識を違えてしまう程度には、アレである。

「……ずっと見つめないで、恥ずかしい」

やっぱり、全身をなめ回すようにして見ていたら気づくか。

そもそも、女性というのは自分に対する視線に敏感なものであり、とくに名声に敏感な傭兵となってはそれどころではないのだろう。

ヒョウリに注意されて、あわてて目を逸らす。

思えば布団を引っ剥がしたら全裸なんだろう。薄い布に包まれても彼女のシルエットは良く分かる。

「謝らないと」
「ん？」
「理性のタガがはずれてしまった。申し訳ない」

俺の謝罪に対し、誘ったのは私からなのにとヒョウリは柔らかくほほえんでいた。

いやー。それでももう一戦、もう一戦とずるずると夜が明けるころまでやっていた訳だし、今日が休日だからいいもののいろいろとマズい気がする。

「正直、怖いのは周りに聞こえていないか、だけれど」
「魔剣を創る時はかなりの音が鳴るから、完全に防音」

ていうか、ヒョウリなら俺の欲の深さを理解しているものだと思っていたのだが。

実際、かなり独占欲が強い方だと思う。

アンセルやリンセルが、他の男から「美しいですね、流石レイカーの娘」なんて声をかけられるだけで内心、腸煮えくり返る思いだし。

だから、それも祟ってか前日あんなことをしでかしてしまったんだろうが。

あのときは、アンセルが路地裏に連れ込まれて押さえ込まれるところまで目撃してしまったから、殺意に一瞬意識を囚われてしまったのだ。

気がつけばアンセルの肩に手の痕が残る強さで引き剥がしていたし、アンセルが見ていないと判断するなり、魔剣でミンチにしてしまった。

惨殺用魔技剣の威力テストになったわけだが、まあ有効だろう。
証拠が俺の魔剣しかないため、疑おうとも証拠はどこにも無いわけだが。

「……人を殺した顔をしてる」
「この世界に転生する前から、人は殺してるから」
「違う。……最近のことだと、思う」

うーん。やっぱり、傭兵の観察眼には装うのも不可能か。
俺は観念して、詳細を話すことにした。
もっとも、反省も後悔もしていない。1人の大切な人の心を守るために、1人の命を引き裂いた「だけ」なのだから。

「……私は、利益のために戦争に参加したから【誰かのために】人情や自分の為にっていう意味が理解できないの、ごめんね」
「分かって欲しい訳じゃないから、大丈夫」

否。きっと心の奥底では、誰かの賞賛が欲しいはずなんだ。
でも、保身的になってしまうのは自分が弱いからだと思っている。
自分の芯を持っていながら、それは脆い。

思えば、震え始めていた自分の身体を。ヒョウリは優しく抱き寄せていた。

「この世界では、強者が半分正義なところがあるから」
「……」
「私は、姉を助けてくれた貴方に感謝する」

それがどんな結果になったとしても、とヒョウリは儚く笑ってい

た。

しかし、俺はこの震えが、本当に後悔とかではなく武者震いであることに気づいてしまう。

……考え方も、人間から少々ゆがんできている。

思った以上に龍の姿をもらってから、独占欲というのは強化されているようにも感じられた。

「守りきらないと」

「……シルバ？」

俺の口から漏れ出た言葉に、ヒョウリが凍り付いたような掠れた声を上げかける。

「ヒョウリは、護衛任務についたことがあるか？」

「ええ。……秘書に偽装して、だけれども」

「そのとき、刺客に対する対応は？」」

「生死問わない、ってなってたけど……。あっ」

つまり、そう言うことである。

## 278　居場所

「っていうことがあった」

ぼやくように、ヒョウリ姉は私に、彼氏さんのことを話してくれました。

勿論、口外厳禁。そのくらいは私も分かっていますし、彼女の立場を悪くする理由はありませんので、言うつもりはありませんが。

すくなくとも、ヒョウリ姉が私にいってくれるというのは、やはり姉分、妹分という関係があるからなんでしょうけれども。

「私は、分かるような気がします」

「ヒョウガ、分かるの？」

「もし、ヒョウリ姉（ねえ）が襲われたら、凍らせて粉砕しますよ？」

まあ、ヒョウリ姉が男におそわれたところで、何かされる前に逆襲するだろうことくらいは予想が簡単なのですけれどもね。

でも、やっぱり私もヒョウリ姉も女性ですから、万が一何かあったときは確かにどうにもならないのかもしれません。

そう考えてしまうと、絶大的な力を持っていながらもそれを驕らず、守護に使ってくれる男の存在は頼もしくもあります。

ふつうなら、任務をうけて私たちが守るような身分の方なんですけれどもね。

「そういえば聞きました？　ガイザーが、レイカー家と協定を結んだようですよ」

「ガイザー派で一緒にいる人なんて、私たちを除いたらガイザーと５人くらいしかいないのにね」

「少数精鋭ですから」

ガイザーの策は、本当に嫌と言うほど有効だと思いますよ。

まず、私達2人に下心を持つ人、少しでもガイザー自身に反感を持つ人全員を切り捨てました。

そのあとで、実力の上から5人だけを選ぶか、それとも下から選ぶかどちらがいいか、残った人全員に個別で聞いたんです。

その中で、「ガイザー・アガグの意志に従う」とした人だけを集めた結果、ちょうど5人しかいなかったという訳なんですよね。

なので、実際に完全同意なんです。今はほとんどがカエシウスに入国して、レイカー領に到着している頃でしょう。

「今まで世界をさまようようにしていたのが、やっと居場所を」

「……そうですね」

ガイザーは基本的に「善」なので、戦争に参加はすれど強盗などの任務は遣りません。

なので、一部の裏社会からは疎まれているのですよね。

それにしても、でも私は傭兵を辞めた身。

何とかしてシルバ・レイカー・エクアトゥールさんに取り入らなければ、私の居場所はありません。

別にほかの権力者でも何とかなるのですが、正直かっこよくて。

ヒョウリ姉も好きな相手の方が、私の方が好きになれそうですから。

「器が大きそうですね」

「充分大きいと思うよ。……ただ、部外者に厳しすぎるかな……」

部外者に厳しいのは、仕方ないと思いますけれども。

まだ身内にしか魔剣を作っていない間は、何か目的があるから何でしょうし。

その目的も、結局はあの性格からするに周りを先に固めておく必要があるからなのでしょうね。

「それにしても、ヒョウリ姉が王族ですか」

彼女に微笑みかけると、ヒョウリ姉は恥ずかしそうにでもなく、不思議な表情を浮かべます。

現実がまだ理解し切れていないようです。そりゃあそうなんでしょうけれども、やっぱり少し心配になってしまいますね。

「王族って、偉いの？　レイカー家は準王族だけれど」

「そりゃあ、名字も出身地も分からない少女傭兵を、書類1枚で引き込むことができるのですから権力は充分すぎるほど……。しかも、ルークエルリダス・レイカーさんと言えばカエシウスの聖騎士団の、元師団長じゃないですか」

この情報は、このまえ文献から手に入れたものです。

別に、そんなことをしなくても一生を贅沢して暮らしていくのもできたのに、少なくともルークエルリダスという男は、5回以上の戦争を生き抜いてきたばかりか輝かしい勲章の数々を持っているとも聞きます。

そう考えると、魔剣を高値で売りさばくだけでいいというのに、学生という身分で甘んじているシルバ・エクアトゥールというのも似たもの同士なのかもしれませんね。

馬が合うのでしょうか……。

「とにかく、私はとりあえず夏にレイカー家に行く。それまでに、何とかしてシルバくんに取り入らないとね」

「その件は問題ないかもしれませんけれども、はい」

## 279　涼野冷という女性

ヒョウガは。あの人に似ていると思った。
彼女がヒョウリの部屋に泊まり初めて1週間がたっている。
性格は良好でリンセルたちも特に敵意を持っていないようだったし、むしろ一緒に料理を作ったりとか、いろいろ遣っているようだ。
でも、その愛嬌たっぷりの可愛い顔のなかに、心底冷え切ったような冷たさが垣間見えてしまう。

周りへの拒絶というべきか、なんと言うべきか。
心の弱さを隠すため、1枚の防壁を常に他人と挟んでいるような感覚がした。

いつもの俺なら、他人のああいう感じの面倒くささはスルーするのだが、否応にも気にしてしまった。
本当に困ったのは、それが「ヒョウリの妹分だから」ではなく、ほかの理由だからである。

「……レイに似ている……」

華琉（はる）の親友で、俺の親友の恋人だった女性にとてもよく似ているからだ。
顔が似ているわけでも、境遇が似ているわけでもない。
ただ、根本的なそれが、どうしてか似ているように感じられたのだ。

彼女の名前は「涼野　冷」。
若干17歳にして、剣聖だった少女だ。

「あ、ダウンファール君こんなところにいたんだ」

風が強い。鼓膜を振動させ、ビュウビュウといった音を立てている。

そんな校庭を、俺は屋上から見つめていた。

絶賛戦闘中。普段と変わらない派手な戦闘の中、後ろの方から話しかけてきたのは涼野冷である。

「加勢しなくていいのか？　愛しの君が戦禍の中だぞ」

「あの人のことなら、心配ないからねー」

今回は私も見学しよっと、と俺の隣に来る彼女の目線は、どこか悲しげにも見える。

冷は超努力家だ。一般的に考えれば、彼女は能力者というよりは、ちょっと能力の使える剣士と言ったところだろう。

俺や「彼」みたいに、能力主体で戦うには到底かなわない。

しかし、彼女はそれを剣の技術で同じステージに立っている。

人間離れした人間のことを、俗称で「化け物」とかって呼ぶが、彼女はまさにそうなのかもしれない。

なにより、そんなことを除いても、彼女は美しすぎる。

男なら初対面なら……いや初対面でなくてもその姿を視認すれば目で追いたくなる。

隣に立っていれば、その目をずっと見つめたくなるほど煌めいた瞳。

肩までつく長い髪の毛と、ツインテールのように括られた2本の横髪。

それだけ振りかざしていながら、よく戦闘ができるものだと感心せざるを得ない。

華琉みたいに遠距離ならともかく、相手と肉薄しながらあれだけの距離は、俺には無理だな。

「お前がこんなところにいたら、あいつ怒るんじゃないか？」

「確かに、独占欲は強いかも。だから私は裏切らないし、裏切るつもりはない」

だけれども、他人に信用を寄せるのは別だと思う、と銀髪の剣聖ははっきりと口にした。

恋人を信用するのは勿論。でも、それだけでは足りないことが必ず出てくる、と。

「俺にはわからないな」

「それは、貴方が一番自分を信用しているからでしょう」

その言葉を聞いて、はっとせざるを得なかった。

自分で今まで、何もかも遣ってきていたから、俺はこうなってし

まったのかと強く自覚する。

「華琉ちゃんとはもう復縁しないの？」

「……俺は彼女のことも、婚約者のことも裏切ったからな。……そんな権利ないだろ」

「なにそれ、全然華琉ちゃんのこと分かってない」

ここで、初めて俺の前で彼女は怒ったような気がした。

「……あれ？」

目の前の視界がボヤけ、俺は自分が寝室にいることに、気づく。

いつのまにか夢を見ていたらしい。懐かしい夢だ。最後に彼女と2人で話をしたのは、この世界にいた時期のことも考えると4年ぶりくらいだろうか。

「あ、おきたー」

横を向くと、笑顔をこちらに向けているリンセルの姿があった。

良く見れば、寝室ではあるのだが自分の寝室でないことに気付く。

ここは、リンセルの部屋だ。

「おはよう、シルバ君。心配したんだよ」

俺の顔をじっとみつめ、顔色が悪くないことをうけて安堵した表情を浮かべる彼女に、俺は手を伸ばして頭をなでる。
今は何時なんだろう。時計をちらりと見ると、深夜2時であった。

「リンセルがここに？」
「ううん、ヒョウリが」

力持ちなんだね、やっぱりと驚いた様子のリンセルに、俺は笑いかけて腕をつかみ、そのまま引っ張り込む。
はわわ、とかあわてた感じの声を上げた少女に、俺は無言での圧力を加えると、そのまま布団の中で抱きしめた。

「あー柔らかい」
「……どこ触ってるの、まったく」

どこって胸だが、とは流石にいえず。
まあ良いではないか的に彼女の体を反転させこちらに向ける。

夜はこれからだからな。まだ時間はたっぷり、ある。

# 280　才能と運

「アンセル、最近の調子はどう？」
「目立った功績はありませんが、少しでも卒業後にシルバ君のお手伝いがしたいなっておもって」

最近は、魔力さえ封じ込めれば作り出せる魔武具について勉強をしているらしい。
そんなものですら、だれでも作ることができるというわけではないというのがひどいところで。
魔法は、技術だけではどうにもならず才能に頼らなければならないというのが一番。

技術も前提として必要なことが多いのだが、その次に必要な物が才能っていう時点でできる人は限られるのだ。
さらに、魔剣なら俺以外の場合、常人から大きく離れた運も必要となる。

そういう関係からすると、俺の持っている魔武具生成の能力というのは、存在するだけでもイレギュラーを与え続ける物なんだなと認識できた。
そのことをアンセルは分かっているのだろうか。まあ、アンセルなら大丈夫だと少しくらいなら確信することくらいできるのだが。

「なんていうか、シルバ君の様子を見ていたら簡単なのかなとも思うのですが」
「俺の方法は、正直……見様見真似であろうとも、逆に技術がしめすものの逆をしてもできあがるからな」

それが正しいことなのかどうか、俺にはよく分からないけれど。
正しくないとしても、結果的にそれは「成功」になるわけだ。
真っ当な技術者や鍛冶師からはどうやって見ても異端であるが……。

まあ、それは仕方がないと言うことで。

「才能の話はされた？」
「教授たちが、そんな直接的な言い方をするわけがないじゃないですか。【運】も実力のうちだと言われましたよ」

まあ、つまりはそういうことなんだろうけれど。
ただ、魔剣と違ってたいていの魔武具は、本当に才能があれば必ず作り上げることが出来るという利点がある。だから魔剣と比べて安い。
選ばれる人も多いしな。そこまで高い才能は必要ないから、アンセルだって作ることくらいは出来るはずだ。

「シルバさん、帰っていたのですね」

アンセルと話をしていると、話しかけてきたのはエスペランサだ。
最近、何かこの世界でやりたいことが出来たらしい。前よりは俺との接触が少なくなってきたが、毎日が楽しそうではある。

なんていうか、神の力を魔力換算すると、それはもうとんでもないことになるし。だからこそ、押さえなくてもいいようなそれこそ「神器」を作っているのかもしれないと考えると、胸が熱くなってくるな。

「もう、男の人ってロマンばっかり」

にやにや顔が表にでていたのだろうか、あきれたように両手を振るエスペランサに苦笑して、俺は息を吐いた。

「人の希望を形にするのがロマンの固まりである魔剣鍛冶の神髄だし」

「……ううむ」

エスペランサは「希望」というワードによわい気がする。

自分が希望神だからだろうな、うん。

## ２８１　狩る者と刈る者

その日は突然で、何が始まるとかっていうことはまったくなくて。ただ、俺は目の前で傷ついていくヒョウリを、呆然と見つめていた。

気付いたら身体が動いていた。

彼女はヒョウリ・レイカーの名前を得て。そもそもその前に俺の女である。

だからこそ、俺が守る義務があると言うべきなのだろうとは思っているのだが。

俺は無意識に魔剣を亜空間から抜き取っていた。

１本でもじゅうぶんだったそれは、しかし俺の心を読み取ってか読みとらずか６本すべてを抜き出して飛び出している。

ヒョウリを痛めつけていた攻撃をすべて守りきり、彼女をこちらへ引き寄せる。

「なぜこんなことをするんだ」

自分の声が、怒りによって震えているのが明確に判断できた。

尋常ではない怒り。それは炎焔の如く、吹き上がっているような感じがする。

ヒョウリを襲っていたのは１組の男女だった。俺が来るのを予定していなかったらしく、少々うろたえている。

しかし、すぐににやりと笑った。

……俺のことを、分かっていないようだな。

「ヒョウリ、大丈夫か？」
「このくらいの傷、大丈夫よ」

二の腕に抉るような切り傷が、一筋走っていた。
いったい何が起こったのか、よく分からないが普通の剣ではないはずだ。
抉る、ということはチェーンソーみたいなものが傷つけたのか、ソードブレイカーの裏側でやったのか……。
それとも魔剣か、そんなところだろう。

俺は彼女に軽く処置を施すと、相手側に向き直った。
少なくとも、一目で分かるのは男の方が魔剣を所持しているということ。

といっても、俺はすでに6本が空中で待機しているのだが。

「君が龍眼族（レザール）かぁ。この学園で1人しかいない存在」
「そこの醒眼族（ウェイカー）は私達よりも弱かった。目立った魔剣持ちは、あと君だけだね」

そこの醒眼族（ウェイカー）というのは、ヒョウリのことだろう。
俺が渡した魔剣は、その剣と相応に強さを発揮するというわけではない。
特殊なのだ。例えば俺がヒョウリに渡したときと、エスペランサに渡した時では能力が異なる。

「どこから買ったか分からないけれど、年期が浅いね。魔剣は成長する物なんだよ」
「君も、年期は浅く見える。でも、私達の攻撃を防御しきった」

「つまり、魔剣のスペックはいいというわけだね」

まあ、俺が作った俺自身の魔剣なんだからな。
この6本、どれも他の人には俺の意志がなければ使えないようになっているし。

「魔剣使い狩りかな？」
「まあ、解釈は間違ってないね」

男はふふんと鼻で俺を笑った。
それには動じず、とりあえずヒョウリをのぞき込む。

ほかに怪我はない。精神的にも……ああ、問題はないだろう。

「ヒョウリ、取りあえず逃げてくれる？」
「……うん」

渋々、と言った感じだが口答えせずに彼女は頷いた。
すこし前だったら、私はまだ戦えるとか言ってきそうだ。
こんな風に従順になったヒョウリも愛らしいが、反抗的な彼女も悪くはなかった。

すくなくとも、こちらに殺意を向けない程度であれば、の話ではあるのだが。

「魔剣使い狩り、か」
「そうだよ？」
「なら、おとなしく狩られるって言うわけには行かないな」

むしろ、2人を刈ってやるよ。

## 282　絶龍個体

「自分は今、おそらく最高に気が立っているからな」

自分でも、自分自身がどれだけ怒っているのか。

俺はまだわかっていなかった。

ただ、声に出したのは声に出せればそれが測れるような気がして。

結局、口から出たのは普段よりも何倍も低い、深淵の主のような不気味な音であった。

相手の2人はせせら笑っている。

俺が何を言っても、無駄だと思っているのだろうが、それはちがう。

「2対1で何ができる？」

「なに勘違いしているのかわからないが……」

少なくとも、2対1なんていう圧倒的に不利な状態で俺は戦おうとはしない。

人間で換算すると確かに2対1なのかもしれないが。俺は武器妖精という仲間がいる。

「馬鹿言うな、2対8の間違いだろ」

全員、発現。

宣言すると、俺が持つ魔剣全てから武器妖精がひとりずつ現れる。

どれも属性が違うため、髪の毛の色や肌の色がそれに準じているものになっていた。

全員が殺気満々で2人を睨みつけ、オレの意思と同等の怒りを持っているようにも見える。

これには相手も度肝を抜かれたようで、こちらを震えた手で指差していた。

「な、なんだこれは……」

「すべて武器妖精憑きの魔剣だ」

「ありえない！　そんな価値があるものを、合計7本も所持している人など学生ではありえないのだ！」

そのくらいは分かっている。アガグ教授に話を聴いたとき、武器妖精憑きの魔剣は1本の相場が、どれだけ質の悪い魔剣であっても２０億を超えることはわかっていた。

人間は3億で一生分の暮らしを、贅沢さえしなければできるという。

レイカー家の場合、少しはねあがっても１０億程度。

つまり、俺はレイカー家の人1人が一生を遂げる価格の2倍を有した魔剣を、さらに7本。

１４０億の価値を持っていると思われる、らしい。

しかも、これが最低価格なのだから恐ろしいものだ。

自分の作った魔剣を、過大評価するわけではないが……。

でも、自分の作った魔剣は運ではない。すべて俺の意思で作り上げて、好きな能力をもたせたものだ。

その価値、1度戦争が起こるときにかかる費用だと考えている。

公にすれば、世界中の大金持ちが大金を積んで欲しいと言ってく

れると、確信しているからな。

「それがありえるかも」

俺は武器妖精一人ひとりと、思考を結合（リンク）させて支持を出した。

武器妖精を扱っている人にとってはなれた感覚だ。

相手とテレパシーを送っているように、頭のなかに彼女たちの声が響き、こちらも心のなかで話しかければ相手に届く。

彼女たち、としたのは。俺が作った武器妖精すべてが、女性もしくは雌であるからである。

女性形が、ローリス合わせて４人。不死鳥型が２体と、龍が１体。

すべてが俺の最高傑作であり、俺のものだ。

「ヒョウリを散々傷めつけてくれた代わり、ゆっくりと嬲ってやる」

【龍化（ドラコフォーゼ）】を使うか使わまいか、考えながら俺は２人を睨みつけたのだった。

龍眼族は何度も言うが、膂力が全種族最強である。

それは、秘めたる力を発揮した醒眼族に、ほとんどのケースでこ

ちらが覚醒しなくても勝てる。

最近は、おかげで無意識に手加減することができるようになった。

だが、今回はその制限を外そう。

相手が女性だろうと、男性だろうと。

しかも知勉族か。普通に握り込めばそのままぽっきり行きそうだ。

「種族的アドバンテージを考えないから」

「魔力最強は知勉族だ。そのくらい簡単だろうが」

そうやって、考えているからダメなんだ。

龍眼族は、ほとんどが力龍（リキリュウ）。

魔力に頼らず、その膂力とタフさ、身体能力を最大に発揮して戦う。

一部……約３０％ほどが魔龍（マリュウ）。

膂力は腕獣族レベルまで落ちるが、魔力は知勉族に匹敵する。

そして１％にも満たない、特別な龍が存在する。

殆どが伝説や、言い伝えにしか出てこない「絶龍個体」というものが存在するのだ。

エスペランサに教えてもらった、この世界の摂理だ。

この摂理は簡単に、種族どころか魔剣に強化された個体すらを凌駕しているという。

それが俺、というわけにも行かないが。

彼女によると、「絶龍個体」というのは天性のものではなく、龍眼族の何かによって引き金が引かれ、進化するものなのだと。

まだ俺ではない。

しかも、使わなさすぎたせいで【引斥制御（グラビシオンコントロール）】を俺は、失ってしまった。

使えないのだ。使わなさすぎたせいでっていうのは間違いかもしれないが、自分の能力がなくなることはかなり異質なことらしく、エスペランサもわからないという。

「簡単、か」

その考え方はとても危険だ。

だから、もう少しだけ。

少しだけ、本気を出そう。

「進め」

## 283　生きる影

魔剣が乱舞する姿は、端から見ればとても美しく、幻想的なものだ。

『武器妖精（アームド・フェアリー）』が空中を舞い踊るようにして、統率のとれたタイミングで相手に襲いかかる。

彼らははて、なんと言ったかな。

「魔剣の性能は勝利に直結しない」だったかな。とにかく、それはどうかなと返したいところではある。

どうしても、この力。魔剣を自分で勝手に作り出すというものは、その正論かもしれない説を真っ向から打ち壊せる程度の影響力は有しているだろう。

「最初の威勢は、どこへいったかな？」

そういいながら、【極光（アクイローリス・ルミナリア）】をキャッチして槍投げの要領で投げつける。

ねらったのは女の方。彼女に到達する前に、ローリスが出現してはじこうとする敵側の剣をすり抜けた。

魔剣に自我がある場合、純粋に戦闘能力的には人間1人と考えて差し支えないだろう。

魔剣の能力も勘定に入れれば、魔剣を持っていない人換算で３００人くらいになるかもしれない。

とはいえ、この世界には魔剣に頼らずとも己の力を強化している人もいるから、それは例外とするけれど。

そんなひと、世界でも滅多にいないのだから。

「ちなみに、魔力最強は知勉族（エリシュ）ではないぞ」

俺はそう宣言しながら、自分の拳が黄緑色のオーラにとりつかれていくのを確認し、詠唱を開始。

「【ウォリアガイレム・ズィクラス・キッカ】」

同時に、ちょうど真上で俺を守護するように飛び回っていた水色の、不死鳥型『武器妖精（アームド・フェアリー）』が憑いた魔剣を掴む。

詠唱の意味は、現代魔法に訳せば「【風】属性上級・遠距離魔法」。

魔剣の力を使って、斬撃を増大させ、遠くへ発動させる。

「【ウェントゥス・アドヴェルス】」

最後の言葉とともに、思い切り剣を相手の方向へ突きつける。

魔剣が哮吼し、轟音とともに斬撃を2人に向かって向かわせた。

俺は同時にその魔剣を放つと、次の魔剣を手にして再び詠唱。

「【スキアガイレム・ズィクラス・キッカ】」

次は闇属性だ。コンセプトは「闇夜」で、取りあえずは相手の精神をいたぶるために作り出した。

傷を付ければつけるほど、相手に絶望を見せることが出来る。

普通なら感覚として捉えるべきその「絶望」を、この魔剣は映像化させてより明確にすることが出来るのだ。

「【リビング・シャドウ】」

生きる影は、女の方にすっ飛ぶとそのまますり抜けるようにしてこちらに戻ってきた。

そう、実体を持たない魔剣。

「消えろ」

途端、絶叫があたりに反響した。

精神攻撃が聞いたのだろう、絶望の、声にならない声が大きく響く。

呼吸音が弱くなり、女が倒れたところで男は狼狽え、そちらに向かおうとした、のだが。

「おっと」

もちろん、そんなことはさせない。

ヒョウリをやってくれたぶん、全身全霊を持っていくらでも復讐してやる。

「そこの女、楽しかったか？」

「ぇ……？」

心底怯えたような顔の彼女に、俺は第2撃を与えながら聞いた。

見る見るうちにゆがむ顔、にじむ涙。

しかし、それらすべてがさらに俺を苛立たせる。

「ヒョウリにやった分では足りない」

男の方は魔剣たちが、勝手にやってくれる。
魔剣狩り。ヒョウリに勝利したと思ったら、ただそれは数で押しただけだった。
俺も数で押しただけだって？　でも、７本の魔剣だからね。
「汚いぞ」
男は何かをつぶやいていたが、いったい俺のどこが汚いというのだろう？
心が汚れているということは否定できないけど。

## 284　トドメ

「どの口が言うのかな、汚いなんてさ」

俺は、恐ろしく低い声でそう言った。

こちらから仕掛けたのならともかく、今回先手を打ってきたのは相手である。

ヒョウリを傷つけた。この少女が少年にとって大切な人なのかもしれないが、俺にとって大切な人を傷つけて自分たちはＮＯリスクで居られるはずが無いことを証明する。

「先に手を出したのはそっちだよな？」

３撃目。リンセルたちがみたら、止めにくるだろう表情をしているのが自覚できた。

組み伏せていた少女の悲鳴が、どうも俺には興奮材料になっているらしい。

ただ、矯声としてはリンセルたちのほうが勿論優秀だ。

色気ないな。

まあ。俺に対して色気を使われても困るだけなんだけど！

「ほれ」

俺は力の入らない少女の肩を掴むと、極力潰さないように力を加減して少年の目の前へ転がした。

相手はヒョウリの体を「魔剣」で抉った。

だから俺は、君たちの精神を「魔剣」で抉ることにしよう。

勿論、身体を傷つけないとは一言も言っていない。

「俺の創造した魔剣に告ぐ」

魔剣が集まってきた。さすがにリンセルたちに譲渡した、魔剣まではこないが。

俺の作った魔剣はすべて亜空間の中に貯蔵されている。

亜空間自体、俺の作りだした一つの魔神武具。

正しくはエスペランサと合同で創ったもので、計１００個。

それぞれ、魔剣なら１２本。魔神武具なら１本貯蔵できるものだ。

無限に、っていうのは今の段階では無理だったけれど、今はこれで十分だ。

面で飛びかからんとする魔剣の数は、今のところ２４本。

毎月造ってたら、いつのまにかこんなものになってしまった。

「なんだよ、それ」

少年は、呆然とその光景を見つめていた。

だろうな、とはおもう。俺でも、こういういかにも「絶望」な状況に落とされたら、普通の人間なら呆気にとられる。

でも、手加減はしない。

剣の先端を一点に集め、ビームを収束させるようにしてそのまま射出。

丁度、前進入してきた自称勇者と攻撃方法は同じで、威力が何倍へも強化されたバージョンを彼に打ち続ける。

殺すつもりはないため、あくまでも半殺し程度だ。
それでも、相手を吹き飛ばした上で壁に押しつける程度の出力はある。

「このくらいで勘弁してやるよ」

両方ともぐったりしている。服だけ焼き尽くすビームとか、今度開発するのもいいかもしれない。
でも、皮膚がどうしても灼けるか。

「ヒョウリ、終わったぞ」
「アレはどうするの？」
「放置する」

ヒョウリの手を取って、取りあえず帰路につく。
白い手だ。元傭兵だから傷がないわけではないけど、それでも女性的な魅力は失われていない。

やっぱり、美しい。

「今日は一緒に寝よっか」
「うん」

ヒョウリは、もう前と比べる必要がないほど、俺への態度は素晴らしいものになっていた。
ちゃんと甘えるときは甘えてくれる、ちゃんと共闘してくれるときは共闘してくれる。
特に、目線だけでこちらが何をしたいのか理解してくれるのが一番ありがたい。

「記憶は消していた方がいいかも」
「犯人の特徴だけ消せばいいか」

俺としては、ヒョウリを傷つけた人だからこのままミンチでいいんだけれど。
やっぱり、みんなの前で死体を転がすのは後々面倒だし、この前みたいに処理するにしても人が消えすぎるのは問題だ。
実際、あの事件だって、アガグ教授がもみ消さなければ大問題になっていたところだったし。

どうも、あの時俺が殺したのはカエシウスの資産家の御子息だったらしい。
……それにしてはゲスなことをする人だった。むしろ、親の金だからこそ威張り腐れるのかな。
俺に何かしたらパパに言いつけてやるー的な意味で。

「そろそろ、龍眼族（レザール）の集落にいくべきか」
「やっぱり、いくの？」
「いくよ？」

# 285　異変

「ヒョウリ、ちょっと離れて」
「や」

幼児退行でもしたのかと思うほど、健気な否定の文字を使って、ヒョウリはべったりと俺の体に寄り添っていた。
高身長ではあるが、胸がそこまで目立たないのがよかったところ、と思いたいのだがどうも着やせするタイプらしい。
いや、サラシで押さえていたというほうが正確なのだろうか、こうやってみると、……うーん艶めかしい。

あれだ。他の人が言い寄るのもわかる。
だからこそ、今日のように傷つける意味が分からないのだが、よく考えれば今日のあの人たちは「魔剣使い狩り」っていっていたな。目的が違うのならば仕方がない、とも思ったが温情というものはないのかね。

放っておくよりも、監禁して本当の目的でも聞き出すべきだったかな、と少し後悔する。
まあ、いいか。今こうしていられるのは、カノジョたちのおかげでもあるんだし。

「ヒョウリ、無理してる？」
「大丈夫」
「……傷の痕見せて。応急処置だったから、もしかしたらちゃんと治せていないかもしれない」

そういうと、彼女は下着姿になるというおまけ付きで傷を見せて

くれた。
やはり、右手をバッサリとやられている。あのとき応急処置でもしなかったら、今頃どうなっていたか。
とりあえず、いったんヒョウリから離れて救急箱を取りに行く。
中身は魔導具一式。俺が作った、傷を治すことに特化したものばかりで、その傷は身体だけにとどまらない。

「このくらいの傷、どうってことない」
「傭兵時代のヒョウリならば、の条件付きだけどな。たとえばリンセルやアンセルに傷一つ付けたらレイカー家が黙っていないように、ヒョウリも『レイカー』を得てからは同じ処遇になる」

もちろん、俺はヒョウリ・アンセル・リンセルを守る存在である。
しかも、こちらにはそれを実行できる「力」というものを持っている。一人で全世界を敵に回せることだって、魔剣を貯蓄すれば可能だろう。

しかも、希望神ホープの加護まで受けている。
だからこそ、大口をたたいても許されると思っているのだ。

「コノ世界って本当に便利」
「ん？」
「力が全てっていう考え方、俺は嫌いじゃない」
「心の強さも力の一種だよ」

それもっともなことをいうヒョウリに、俺は頷いた。
手当完了。そのまま、俺は後ろから彼女を抱きしめる。

「んっ……、ちょっと、くるしい」

妖艶な響きのある声で息を飲み込み、ヒョウリは俺の方を向いた。

「鱗がちょっと痛い」
「ちくちくする？」
「うん、特にここら辺」

腹の方から足にかけてかな？
あの、鱗の下には直接神経があるんで、そうやってなでられると敏感になるんですがそれは。

人差し指でこねくり回すように鱗を撫でていたヒョウリが、はっとして俺の方を見つめる。

「無意識に、【龍化（ドラコフォーゼ）】してない？」
「えっ……。えっ？」

そう言えば。
あれ？　どうなってるんだ？
よく考えれば、【人化（ニュートフォーゼ）】しているときはこんなふうにならない。

いつの間にかそうなってる？

「……ちょっと戻ってみる」
「うん」
「……ええと、戻らない」

心の中で唱えるのは引き金ではないのか、と思い声に出したが、それでもどうにもならない。
……うーん、完全な【龍化（ドラコフォーゼ）】ではないことは判明している。
尻尾は生えていないし、背中からトゲもない。

ヒョウリに後ろ側を調べてもらったが、やっぱり脚辺りだけか……。

問題としては、あまりないようにも見える。

「この世界にきてから何年？」

「2年目」

「龍眼族（レザール）のデータが少なすぎるから、エスペランサさんに聞くしかないのかも」

正直、龍神に聞いた方がいいかもしれないけれども。

直接話をする権利を、俺は持っていないんだし。

困ったな。……いや、別に対した問題はないんだけれどもさ。

やっぱり怖いよね。

## 286　龍神不在

「問題なことに、アグレスは最近……神界にいないのですよね」

エスペランサは、俺の異変を原因不明、彼女の知識では分からないとして神界の状況を伝えてくれた。

神界の転生担当者は4柱。そのうちエスペランサが俺に、運命神スロッ＝トールがラン・ロキアスに肩入れしてこの世界にやってきている。

武器鍛冶神のヘーハイスはあちらこちらの世界に肩入れして、世界の文明レベルやなんやを引き上げている。

で、通常は龍神が常駐し、転生先の指定などを担っているのだが最近、彼でさえいなくなってしまったという。

そのおかげでエスペランサは夜に転生会議、朝昼は俺たちとの生活で少々アレらしい。

最近は、この前みたいに姿をわざわざ変えていない分、神力の消費は押さえられているらしいが、24時間寝なくても神は疲れないとはいえ、人間態になっている間は疲れらしきものを感じないでもないらしい。

エスペランサは、それを「これが……疲れ！」なんて最初の方ははしゃいでいたのだが、最近になってまいり始めてきたようだ。

「最近、シルバさんの周りも充実してきたので、こういう時間が少なくなってきたような気がします」

今日はたまたま、1日中あいているということなので、学園が休日と言うこともあり一日中俺の部屋でごろごろしている。

添い寝を要求されているので、それに答えつつこうやって話をし

ているという状態だ。

それにしても、エスペランサと密着しているとどこか安心する。

これが神力なのか、それともほかの何かが作用しているのか分からないのだがそういうことはどうでもいいのだ。

今、重要なことではない。

それよりも、通常の状態から半分【龍化（ドラコフォーゼ）】しているこの現象を、どうにかしなきゃならない。

「ということは、龍神もコノ世界にきているとか？」

「アグレスの気配がまるでしないので、その可能性は限りなく少ないと思われます。すくなくとも、『都市国家ポラリス』をはじめ『オウラン帝国』『セリシト魔法国』『カエシウス聖王国』にはいません」

そこにいなければ、もうほぼこの世界にいる可能性はすくないか。

もしかしたら、『カエシウス聖王国』の龍眼族（レザール）自治区にいけば連絡が取れるのかもしれないと思ったのだが。

「自治区には、龍神を祀る祭壇があるはずなので、シルバさんがそれを伝って連絡すれば、返事くらいはくるかもしれませんね」

と、ここで希望到来。

さすが希望神ホープである。望む希望を、可能性をきちんと与えてくれるのだからさすがである。

「夏休みにはいったら、行くか」

「そうですね。……誰を連れていくのです？　少々閉鎖的な場所に、つれていける人数は限られると思いますが」

そうだな。……龍眼族（レザール）って、自分でいうのもなんだが荒っぽいイメージがあるし、女性を連れて行くのならちゃんと考えた方がいいだろう。

……元傭兵と傭兵は連れて行こうかな。

「ヒョウガ、ヒョウリ、エスペランサくらいじゃないか？　あとゼロ」

リンセルアンセルの護衛はアガグ教授とカレルさんに任せよう。

いや、夏休みだから彼女たちも帰省するか。なら一度レイカー領によってから向かうのも一つの選択肢として、良いのかもしれん。

アガグ教授もレイカーについたってきいたし、顔合わせはするのだろう。

「ゼロ＝オールさんはまた改修を始めたらしいですね」

「えっ？　もう充分じゃね？」

「次は魔武具を組み込むらしいですよ」

……そうかぁ。

なら、こちらもゼロ専用の魔武具を作製してもいいかもしれない。

同時に、レオへのアレも、プロトタイプから第弐式（イチ）にバージョンアップさせつつある。

夏休みにさしかかる頃には、万全にしておこうかな。

## 287　夏休みの予定

「とりあえず、計画としては夏休み中に向かう予定です」

夏休みもあと、1週間の授業を残すだけで到達と言うことになった。

今、俺はある人と通話中である。

『そうか。分かったよ』

「ありがとうございます」

夏休みの予定を通話先へ伝え、返事をもらって礼をする。

相手には見えていないだろうが、礼儀としてだ。周りの人に、そう言う人と現在通話しているということも知らせられるし。

通話を切って一息つくと、先ほどから話しかけたそうにしていた少女が近づいてきた。

輝くような銀髪。リンセルだ。

こちらを心配そうな顔で見つめ、てくてくといった表現の合いそうなヨウスで近づいてきている。

「誰と電話？」

「ルークエルリダスさんだよ。夏休みの予定を連絡したんだ」

「今年の夏休みは、宿泊で旅行に行きたいかな、と思ったんだけど……」

……そういえば、最近リンセルやアンセルと一緒にいる時間が少ないような気がする。

出来れば夏休みに行きたかったが、夏休みは龍眼族（レザール）集落にいって、

龍神と話をしてこないといけないし。

「ごめん、用事があってヒョウリ達と龍眼族（レザール）集落に向かう予定だ」

「……危険なのかな。……ええと、……冬休みは、一緒にいける？」

「おう」

しゅん、となったリンセルをみて、とてつもない罪悪感がわき出すのを感じた。

いますぐ集落いきをキャンセルしたいが、自分の異変がもしこの世界にきた影響ならば、例えば俺の龍のぶぶんが暴走したら、と思うともう時間がないようにも思える。

この身体をくれたのは龍神なのだから、本人（本神？）に詳しいことを聞くべきなのだ。

周りの、安全のためにも。

「いや、明日明後日授業はないだろ？」

「ないけど、どうかしたの？」

「1泊2日の旅行に行こう。リンセルと俺と、アンセルだけで」

そう伝えれば、彼女は次に輝きださんばかりの笑顔を顔に浮かべた。

テンションが最高潮に達したらしい、わずかにだが彼女の身体が揺れているのをみて、思わずクスリときてしまう。

「あのね。シルバ君って、私たちとつき合い始めた理由が特殊だったから、もしかして本当は好きじゃないのかなって思って」

「最初の方は、確かにそうだったな」

思い返せば、ラン・ロキアスに無視続けられて邪険に扱われている彼女たちを哀れんで、「それなら俺といたほうが幾分かマシだろ

う」と考えたからだった。
でも、別に今は本気で彼女たちを思っているし、俺も配慮したところが空回りしたというのもあるのかもしれない。
どうしても、彼女って言うのは心配になるものだから。

確実なる将来を約束したエスペランサはともかく、リンセルもアンセルも、ヒョウリも俺は心配している。

「でも、今は自身を持ってリンセルが好きだって言えるよ」
「……それなら、問題はないんだけれどもね？」

どこに行くのかはまだ決まっていないが、出来ればまったり出来るところがいい。
1泊2日の旅行だから、だからといってポラリスの外に出るわけにも行かないし。

「……オウラン風の旅館に泊まって、温泉とか行ってみたいものだな」
「それ、いいかも。この前エスペランサさんと一緒に行ったとき、結構うらやましかったんだよ？」
「あれも、結局はレイカー家関係ので中断されたけどな！」

愚痴にも近い何かだが、あのときはあのときで楽しかった。
上空を【龍化（ドラコフォーゼ）】で飛ぶって言うのは、普通ではすることのできない体験なのだから、それは当たり前と言えば当たり前なのだろうけれども。

「なにを準備したらいいかな？」
「決して安くはない旅館を考えてはいるから、正直財布以外何もいらないんじゃないかな」

「でも、これは持って行こうかな」

彼女が取りだしたのは、いつも身につけているであろう魔剣だった。

ちゃんともってくれているというのは、本当に創り手としては嬉しいものがある。

この魔剣が作動しないのが一番いいのだが。

# 288　指輪

現在の場所は旅館。
とりあえずリンセルとアンセルを無事にここまでつれてこれた俺は、大きくため息をはいて2人をみつめた。

「つまらないの？」
「疲れたの」

龍眼族（レザール）なのに、体力ないんだねえーとリンセルは煽り気味にそう言ったが、残念ながらそれに反抗できるほど体力も残っていなかった。
道行く人、何人がリンセル達に下心をはらみ、鼻の下伸ばして近づいてきたと思っている。
そして何人、間にさりげなく入った俺をみて顔を青くさせたと思ってるんだ。

体力的には疲れていないんだが。ちょっと精神的にかなりすり減らした感覚がする。
そもそも、レイカーの次代が決まったと全国ネットでニュースが流れているというのに。学園で見つけたと思っていないのか、ほとんどが知らないのか。

「この周りは何があるのかな、遊びにいこ」
「自然公園を、ゆっくり散歩したいです」

リンセルの提案に、答えたのはアンセルであった。
俺は今し方、今さっき、本当に今さっき2分ほど前におろした腰を上げて部屋の外に出た2人を追う。

彼女たちは、こうやってみればかなりカジュアルな服装をしている。

そこらへんにいる他の女の子と変わらない気もするし、服装からは彼女たちが準王族だなんて考える人はいないだろう。

いや、だからこそ「レイカー家の娘」ではなく別の意味で近づいてきたのかもしれないな。

そんなことどうでもいいか。とりあえず、アンセルの言っていた近くにある自然公園に向かうのと、その途中で2人はウィンドウショッピングでも楽しむのだろう。

なんだかんだ、この2人倹約したがる人なんだよな。ルークエルリダスさんも、思えば着飾ると言うことを余り好まなさそうな人であった。

買おうと思えば、その町の店ごと買えるのにな。

「今日はシルバ君に奢ってもらおっと」

「最初からそのつもりだよ」

とりあえずとして、レイカー家の金を俺は使わないとした。

レイカーの名前はもらったが、だからといってそれを使うほど金には困っていないし、魔剣鍛冶を本当に商売にするならそれ以上に稼ぐことも可能だろう。

お金は、ちゃんと次代に残す形でいこうと思っている。

俺の次代ってどうなるのかね、龍眼族（レザール）と異能族（サイコル）の混種族が出来るのなら、恐らくそれは全世界史上初だと思うんだが。

「そう言えば、アンセルもリンセルもー」

「ん？」
「いや、なんでもない」
あれ、２人に何を聞こうとしたんだったか。
もうボケ始めたらしい。
そんな俺をみて、アンセルはくすくすと笑っている。
……いやぁ、可愛い。
この子凄く可愛いぞ、どうなってるんだ。と少し悩んで、俺は２人が再度前を向いて歩き出すのについていっていった。

「リンセルって、アクセサリーとか余りつけないよな」
「つける必要がないっておもってるから」
いや、傲慢だとか絶対に思っちゃだめだよ？　とリンセルはあわてて弁解した。自分が充分すぎるほど美しいから、アクセサリーなんて必要ないといいたいのかなと思っていたんだが、どうやら俺の考えすぎらしい。
本気で一瞬だけそう思ったんだが、でもリンセルに限ってないかな。
ないと思いたい。

「たとえば正式なパーティとかはちゃんとつけるよ？　でもこういうときは変に飾りたくないなぁって感じ」
「アンセルでさえ、控えめだけどつけてるのに？」

アンセルは、今日はネックレスと指輪だけ。
指輪は婚約したときに渡したものだが、リンセルはそれすらもつけていないのか。
……彼女の考え方は理解したいけど、少し複雑な気分だな。

「そんなに悲しい顔しないで。ちゃんと付けるから」

といいながら、唯一付けていた時計から指輪を取り出すリンセル。
時計の裏側、肌に接する部分に仕込んでいたらしい。

「指に付けていると、いつの間にか無くしそうだったからこっちに入れておいたのだけれど、ちょっとその顔は私もみていて悲しいかな」

苦笑しながら、労うように此方を見つめるリンセル。
いろんな意味で泣きそうになりながら、俺は黙って彼女の額を指ではじいて、彼女が額を押さえているのを笑ってやった。

ちなみに、後でリンセルがアンセルに説教されたのは別の話である。

# 289　昼寝涙

「ちょっとだけ、ここで寝てもいいでしょうか」

だぁれもいない自然公園の中心地で、アンセルはもうすでに半分寝かけていた。

隣にはリンセル。こちらはアンセルから説教を食らってしょげているようだ。内容は知らない。

「ん、俺は起きてるから、ゆっくりやすみなよ」

リンセルも「いい？」と控えめに訊いてきたため、頷く。

彼女達の寝顔を見るのはいつぶりか。最近はエスペランサとも一緒にいてなくて、いつもヒョウリと一緒にいるからか。

自然公園、こんなに美しいとはおもわなんだ。

生前は、公園なんてなぜ行くのかと想っていたけれど。今日アンセルに誘われて言ってみれば、自然の驚異を直に感じることが出来て本当に嬉しい。

……そんなことよりも、あれだ。

山の奥から、他の人々は気づいていないようだが膨大な魔力が流れ出しているような気がする。

自然の風流として考えてはどうしても不自然だ。そちらのほうにいきたい気持ちはあるが、どうだろう？

２人を危険にさらすって言うのは論外だ。今回は傷つけにきたわけではないから、いくなら１人でいくべきなんだが。

今回、どのくらいの時間がかかるのか分からないしね。

……いやいや、こう言うときのために、『武器妖精（アームド・フェアリー）』付きの魔剣が役立つんじゃないか。

俺は1本の魔剣を亜空間からひっぱりだし、魔力の先に何があるのかを調べさせる。

アンセルとリンセルがどのくらい寝るつもりなのかは分からないが、まあそのころには帰ってきて。と命令を伝える。

我ながら適当すぎる。自分の魔剣は忠実にソレを守ってくれるからこそ、そういう無茶苦茶なことも出来るんだろうけれど。

「俺も、一眠りするか……？」

2人の寝顔を見ていると、ついつい自分も眠たくなってしまうのだから不思議だ。催眠効果があるのかもしれない。

でも、まだ寝るわけにはいかないか。寝るとしたら、護衛としてとりあえずは【極光（アクイローリス・ルミナリア）】を発動させよう。

『はい、ご主人』

「2人が起きたら、俺も起こしてくれ。あとは警戒態勢で」

『はい、ご主人』

同じことしか言っていないが、まあいいだろう。

最近、彼女は使ってくれないからってしょげているらしい。

魔剣に憑いた『武器妖精（アームド・フェアリー）』は、自分をつかってくれるのが至高の喜びなのだという。

別の意味でつかってもいいんですかね、と心の中でゲスな思考がよぎったがそれをつぶして俺は目を閉じた。

夢をみていた気がする。また数ヶ月ぶりに、俺はハルの夢を見ていた。

彼女が、こちらに手を伸ばしている夢を見た。顔は涙で濡れていて、でも悲しみと言うよりは喜びの涙。安堵の涙のようにみえる。ただ、声はすでに思い出せない。もう何年も立っているのだから、声が代わっていても不思議ではないと想うのだけれど。

……華琉。早く、会いたい。

エスペランサにあえると言われてから、俺の気持ちはだんだんと華琉の方へと傾きかけているのかもしれない。

でも、リンセルもアンセルも、ヒョウリも見捨てるわけにはいかないのだ。

前世では捨てすぎた、今世では拾いすぎ。

それでも、捨てるよりは拾った方がいい。

「あ、おきた」

無邪気な声がして、目を開けるとそこにはリンセルの顔が。

キスが出来そうなほど近くにあった。

「キスしてほしい？」
「外では、ちょっとね」

誰もいないよ？　と言ったところでアンセルとローリスが止めに入ってくるのだから、この2人はまったく。
してほしいのならローリスにも、アンセルにもするさ。

「何か夢見てたの？」
「泣いてる？　また？」
「うん、泣いてるよ」

……俺はここで、やっと頬を伝っている物質の正体に気づく。
また涙か。華琉の姿を思い浮かべると、自然と涙がこぼれたくなくてもこぼれるんだから、本当に困った。

「何か、思い出してるの？」
「時がきたら、話すよ」

この話も、何回目だろうな。

## 289　昼寝涙（後書き）

更新を放置して申し訳ありませんでした
新作の設定構想からなんやら、他のことをしたりしてました。

活動報告の宣言通り、1週間2話以上ということでこれからも続いていきますのでよろしくお願い致します。

## ２９０　寝る前（前書き）

遅くなってスミマセンでした。

# 290　寝る前

「ほぁ～。すぐに寝れそう」

夜。温泉に一緒に入ったあと、俺達は布団を敷いて就寝の準備に入っていた。リンセルとアンセルはもちろん、布団の敷き方を知らない。

もともとベッドで寝ていたのだし、それも殆ど侍女達が世話をしていたのだ。学園生活になって、ソレを自分たちでできるようになっただけでも充分な功績を上げていると思わないか？

リンセルは温泉から出たばかりだからか、頬を上気させて川の字に並んだ布団の右側に寝転んだ。

そうしたら、アンセルが真ん中なのかな？　そう思っていると、アンセルは左の方にすわり、「真ん中にどうぞ」と。

ああ、そういうことを求めているのかと考えつつ、俺は言葉に甘える事にした。

「ふかふかだぁ」

少なくとも安い素材で作られているわけではなさそうだ。まあ、ここ高級旅館だろうし。

ちなみに夕飯は見事な海鮮料理で、それもとても美味しかった。

リンセルは「ふかふかー」と何回か話をしたあと、すぐに眠りへと誘われた。

彼女に掛け布団をかぶせ、体勢を整えて一息つく。

「……夏、冬、くらいかな」

「どうしたのです？」
「アンセル、伝えたいことがあるんだ」
アンセルは、きょとんとした顔でこちらを見つめていた。
しかし、俺が真面目な顔をしているのを確認したのか、彼女も表情を引き締めて向き直る。
「はい。何でしょうか？」
首をかしげてはいるが、俺が何を言いたいかは分かっているらしい。
俺が、覚悟を決めたことも。
「とりあえず、この学園は2年終了とともに中退する。アンセルたちはそのまま卒業まで行ってくれ」
「やっぱり、行かれるのですね」
半分わかったような顔をして、彼女は頷く。でも、分かっているのは半分程度だろう。
少なくとも、俺が真に言いたいことはわかっていない。
それでも、彼女は笑っていた。少なくとも、泣いてはいないようだ。
「英雄本能っていうものですか？」
「いや、ちがう」
英雄（ヒーロー）は、俺よりも適任の人間がいるし、どちらかといえば野望を持っているほうの敵役のほうが適任だろう。
世界を救いたいというよりは、自分の生活を守りたいだけなんだ

から。

「私には男の考え方がわからないのです。このままどこかに隠居して、死まで穏やかに暮らしていても問題はないと思うのですよ、私は」

その考え方もちょっとおかしいと思うけれども。

歳相応じゃないぞすくなくとも。なんていうか、少なくとも老齢の考えだろうそれは。

俺は首を振って、彼女の肩を掴んだ。華奢な身体だ。これ以上力を入れたら、簡単に折れる。

決してそんなことはしないが、彼女の身体を触っていたら、やはり思うことがあるのだ。

「アンセルやリンセルには、ちゃんと生きてほしい。だから、危険を侵すのは俺だけでいいと想ってるんだけど」

それは、一緒に生きたくないという意味なのですか。

アンセルは、ここで初めて顔を曇らせる。

首を振って、彼女を見つめる。やっぱり美しい顔だ。初めてあった時は全く何も感じなかったというのに、なぜ月明かりに照らされると、美しさが何十倍にも跳ね上がったように感じられるのだろう？

月明かりの加護って、本当に不可解で、不思議なものだな。

「アンセル？」

と、なんかうとうとしていたアンセル。

ていうか半分以上寝ていたため、彼女を寝かせて戸締まりだけ確認する。

まだ、寝る気にはなれないな。

## ２９１　赤い髪の君

２人が完全に寝たことを確認して、俺はとりあえず部屋から脱出するように飛び出した。
少し一人っきりになりたかったのだ。まあ、ソレを考えるとやっぱり自分の心が揺れ動いているような気もするけれど。

夏休みに入ったら、ヒョウリたちと龍眼族の集落に向かわなければならない。そこに何が待ち受けているのか俺にはよくわからないし、正直不安ではあるものの、でもやっぱりこの身体が今どうなっているのか、知りたいからね。

「お兄さんお兄さん、お悩みのことでもあるの？」

宿泊施設街の真夜中は、もちろんのこと闇が蔓延る。売春婦がやはり目立つか、際どい服装で身体を十二分に主張している彼女たちは、自分たちの体を売って金を得る。

俺は彼女たちを忌み嫌うようなことはしないし、職人もみんなも、汚い言い方をすれば自分たちの何かを売っているのだ。高尚な仕事だとは思わないが、だからといって何か特別なことがないわけではない。
もしかしたら、彼女たちが何か。貧困などの特別な事情でおこっているのかもしれないし。

「１時間だけでもどうかな？」
「いや、今日は連れがいるんで遠慮しておくよ」

えぇ～と残念そうな顔をしてその少女は大人しく引き下がった。

いい子だな、何人かは必ずしつこい人がいるのだが、この娘は大人しい。

「名前は？」

「リリィだよ、あそこの店で働いてるからまた来てね」

ばいばい、と手を振って別の客に声をかける少女、リリィを横目に街を進んでゆく。

今探しているのはその女の子じゃないんだよなぁ。ハルがここにいてくれれば本当にいいんだが。

いるわけはないと考えつつも、心のなかの何処かでは彼女を求めている自分がいる。

この世界であったあの瞬間、俺は自分が夢を見ていたのかそれとも現実なのかよくわからない。ほんとうによくわかっていないのだが、やっぱり現実だと思いたいのだ。

「ハル」

何人婚約者がいようともずっと彼女を求めている。この世にいないかもしれないということ、というよりもこの世にいない可能性のほうが高い。

なのに、普通に考えて不可能なことを、俺はずっと求めている。特に最近、彼女を考えない方が少ないような気がしてきた。

「ハル、いないかね」

「ここにいるけど、どうしたのダウンファールくん」

はっ？　となって声のした方向へ……上の方へ首を回す。

そこには、確かにハルがいた。

業火のように赤い、ツーサイドアップの髪の毛。
金色に輝く猫のような瞳。出る場所が出た完璧な身体のプロポーションと。

彼女を象徴するように担いでいる巨大な塊のような火器。

前の世界では、彼女はこのように呼ばれていた。
銃撃の精霊。その銃撃は未来を予測し、必中。

学園にいた時代、防がれることはあったものの「あの人」以外にはすべて外さなかった天才少女。

そんな彼女と、俺が知るそれと全く同じ容姿を持った少女がそこにいた。

「本当に、俺の求めているハルなのか？」
「さあ？　貴方が何を考えているのかよくわかるけれど、抱いたことのある貴方なら触ればいいんじゃない？」

彼女は、そうやって俺の方に近づくと、両手を広げた。

「ほら、飛び込んできてもいいんだよ」

不思議な事に、俺の覚えている彼女と何も変わらない。
俺は彼女の、言葉に甘えることにした。

## 292　ハル・ナグモ

「何故ハルがここに？」

彼女はそのまま「ハル・ナグモ」と名乗った。
俺の記憶をちゃんと持っていて、でも彼女が言うに俺の知っている彼女ではないといった。

「私は確かに貴方の知るハルだけど、違う世界にいる人だからね」

ハルは俺にしっかりと釘を差した。しかし、そういうことは彼女はオウガと結婚していないことになる。
俺は、ただソレが嬉しいことに感じた。

「複雑な存在であることはわかった。でも、それなら何故俺の目の前に現れたんだ？」
「ダウンファールくん、じゃなくて今はシルバくんかな？　貴方がしぬ直前に、ネクストくんに何かを祈ったでしょう」
「……いや、覚えてない」

それなら、貴方の、心の深層でそれを願ったのよと彼女は言った。
どうやら、その願いをあの人はちゃんと叶えてくれたということだ。

「前世で貴方が何をやったか、私はすべて知ってる。ちゃんと反省したことも知ってるし、好きになった人でもちゃんと守っていることも、ずっとみてたよ」

彼女の言葉が胸にしみる。

もしかしたら、それは彼女の言葉ではなく彼女の声に反応したのかもしれない。
ずっと聞きたかった人の発する言葉がそこにはあった。

一生会えないと想って、でもずっと彼女を考えてきたこの1年間が無駄ではなかったことが、たかが1年だと思われるかもしれなかったけれどそれが永遠にも感じられたのだから。

「きいてる？　シルバくん」
「単刀直入に言ってもいいかな？」
「うん？」

彼女は首を傾げた。俺の頭を抱えながら、胸に押し付けたまま。
泣いた小さな子供をあやすようにしたまま、そっと甘く甘美な声で囁く。

「何かな？」
「君は、俺のことを今でも好きかね？」

俺の言葉を聞いて、ハルは少々難しい顔をした。
口を開いて何かを発しかけ、息を吸ってそれを閉じるということが何回も起こる。

しかし、それもすぐになくなり、彼女は意を決したように口を開く。

「好きだよ。ずっと好き」
「俺もだ。君と別れたあとも、一度も君のことを忘れたことはない」

ハルが、顔を赤くてうつむいた。

俺の頬に、何か落ちてくるのを感じて俺は顔をあげる。
涙だ。彼女は泣いていた。
「別個体だけど、私の事好きでいてくれる？」
「別個体でも、君はハルなんだろう？」
俺が問いかけると、ハルは頷いた。
眼から落ちた涙が、俺の頬に容赦なく滴ってくる。
しかし彼女はそれを受け止めようとも、拭おうともせずそのままにこちらをまっすぐ見つめていた。
「これからは、私たちを裏切らないでいてくれる？」
「この生命にかけて誓うよ」
あまりにもキザで調子に乗ったセリフだった。
やっぱり、あの人……ネクストの性格が俺にも反映されているのかもしれない。
俺には到底似合わないセリフだな。ああいうカリスマ性溢れている人がつかうからこそ、女性というのは惚れるものだ。
だめだね、俺にはまったくもって似合わなさすぎる言葉だ。
「そう、ならまた一緒に歩みましょうか。でも、この人生では誰も裏切らないこと、ね」
ああ、と俺はうなずいて、立ち上がり彼女を見つめた。
もう、彼女を裏切ることはないだろうし、彼女を手放すこともないのだろう。

一回死んで、2回めの人生でもう一度手に入れた女性なのだから、今度は神界まで連れて行く覚悟で接してやろう。

「次は話さないでね、約束だからね」

「……わかってるよ」

ちゃんとそのくらいは分かっているのだけれど、今はどうすればいいんだろう？

リンセルとアンセルに、ヒョウリにどうやって説明すればいいんだろう？

こういう時小説の主人公とかは後で考えればいいやとか決断するのだろうか。

でも、俺にはそう時間が残されていない。すくなくとも彼女たちの前に、2人が朝起きる前までには言い訳を考えなければならない。

いや、……言い訳なんて考えなくてもいいのだ。ただ、ハルのことを説明すればいい。

前世から彼女のことが好きで、わけあってこの世界でも巡り合えることが出来たのだと。

リンセルたちなら、それできちんと納得してくれるのだろう。

## ２９２　ハル・ナグモ（後書き）

やっとここまでこれましたが、真ヒロインが彼女だからとはいえリンセル・アンセル・希望神ホープ・ヒョウリの４人が放って置かれるわけではありません。

## 293　半人前の再認識

次の日の朝、俺は2人が起きるまでまでハルと段取りを考えた。別に考えなくても良かったのかもしれない。でも、やっぱり少し不安だったから、ハルともっと一緒に話をしたいという理由もあったからなのかもしれないけれど。

部屋に忍びこむようにして帰ってからは、2人の寝顔をずっと見つめていた。ああ、この2人もきちんと俺の彼女だということは理解できている。今でも大切に思っている。大丈夫、むしろハルに出会ってからこそ、2人の大切さが二割増しになった。

「リンセル、アンセル……すまんな」

彼女たちには今まで沢山の迷惑をかけたのだ。そしてこれからも迷惑を確実に掛けることになるだろう。少し覚悟を決めねばならない時が俺にも来たのかもしれない。

「というより、　今回に関しては完全に俺のせいだからな」

部屋のそとでは彼女が待機している。何時迄も待っていると彼女はいつもの笑顔で言っていた。本当に彼女の心は広く、深い。だからこそ、俺という人間は彼女に甘えてしまうのだ。

まさかこんなときになってまで、彼女に頼る形になろうとは思わなかった。

「リンセル、アンセル。朝だぞ」

「……シルバくん」

最初に起きたのは、朝が弱いリンセルではもちろんなく、アンセルの方だった。
俺を見つめ、甘えるように手を伸ばす。その手を離さず、俺は彼女を抱き寄せた。

「こういうの、久し振りですね……」
「そうか？」
「最近は魔剣のことでいっぱいいっぱいだったので、私たちはあまり邪魔をしないようにしようって決めてたんです」

彼女の声は慈悲にあふれていた。ああ、やっぱり俺の周りの人ってこんな人が多いんだ。
だから、俺はいつまでも甘えてしまう。甘えることによって、俺はいつまでも半人前から脱出できない。

一人前になり、自分で全てを抱え込むためには彼女たちに頼らないようシなければならない。そのためにも、だからこそたびに出なければならないような気がする。

「リンセルも起きたら、大切な話があるんだ」
「それは、昨日の深夜に部屋にいなかったことと関係があるのですか？」

全部バレてた。まあ、間接的に関係があるくらいだ。
あの時会えるとは思わなかったけれど、でも結果的におそらく深夜、あの時1人で思いにふけっていなければ彼女と再会するのはもっとあと担っていたのかもしれないのだから。

「ああ、関係あるよ」

「はい、ではリンセルを起こしましょう」

リンセルはしかし起きないんだよなぁ、普通の方法では1時間以上かかる。ハルにこれ以上待たせるわけにも行かないし、と俺は決意を決めて彼女をそっとキスをした。

唇が合わさって、眠り姫覚醒のようにりんセルが目を開ける。

「あぅ、おはよう」

「ん、やっぱりすぐに起きたな」

この起こし方であれば、とりあえず10秒程度でなんとかなる。人前でしたらおもいっきり引かれるのが落ちだが、まあここなら問題はないだろう。

「ちょっと、お話があるんだ」

「……ほー？」

リンセルは何やら感づいたような顔でこちらを見つめている。いや、確信できる。もう感づかれているだろうな、とは。

「新しい彼女さんでも出来た？」

「……新しいかどうかは別として、いやこの世界に転生してということであれば新しいことなんだろうけれど」

なんていうか、ちゃんと説明ができない。

でも、リンセルたちには簡単に説明できている。察しのいい彼女たちのことだ。やっぱり分かっているのか2人とも柔らかい笑顔を浮かべているが、その顔には期待のものが多い。

「はやく、会わせて！」

## 294　前世の約束

「ハルだよ、よろしくね」

凛とした女性、と言うよりは男勝りな女性といった雰囲気を醸し出しながら、ハルは2人に挨拶をした。

彼女のことはすべてを説明した。前世のことから説明をして、俺が彼女を一度裏切ったことや彼女が関係する重要なところはすべて話す。

その中で2人が口を挟むことはなかったし、ハルもツッコミを入れなかった。そのすべてが事実であり、俺が言い訳をして曖昧に暈しているわけでもないということである。

「ええと、私が理解したことをここで話しをしてもいい？」

「どうぞ」

「つまり、ハルさんは前世でシルバくんとお付き合いをしていたその人って言うこと？　ずっとシルバくんが探していた人って言うことなの？」

それは少し違う、とハルは言った。

ハルはあの世界でのハルと全く同じ性格、まったく同じ考え方、容姿を持つ。が、それは別個体であると断言した。

つまりはあの人が俺のためにやったということになるのかな。

俺の予想をハルに話すと、彼女は「当たりだよ♪　成長してるね偉い偉い」と嬉しそうに顔をほころばせる。

「そうだね、私は人神に作られたクローンっていう考え方でいいよ」

「人神……ネクストか」
「そうだね」
ネクストっていうのは、前世で俺たちの友人だった人だ。ハルが本当に好きだった人でもあるらしい。俺にそれはわかっていたけれど、彼には絶対に、何人が彼を好きになろうとも手放さない少女を彼女にしていた。
自分の彼女を護るためには、本気で世界を敵に回し、勝利できるような男。ソレがネクストという男であったから、ハルは諦めるしかなかった。
「ということてゃ、人神に作られたハルは神の力をある程度あつかえるということにならないのか？」
「さぁ？」
彼女は首を傾げる。試したことがないのだろうと考えることができる。
ハルは前世で、能力を殆ど使うことがなかったのだ。能力を直接使って戦うのではなく、銃の弾丸やエネルギー源として扱うものである。
「そんなことはどうでもいいとして、リンセルさん、アンセルさん。あなた達は私を受け入れてくれるの？」
その質問に対して、2人は顔を見合わせた。
迷っているようにも見えるし、決意を確かめ合っているようにも見える。
俺には、双子の中で何が起こっているのかよくわからないけれど。
双子には、特別なつながりっていうものがあるらしくて、それは

科学や医学では解明できないものがあるらしい。

「そうですね、貴女がシルバくんの望んでいた人なのでしたら、私たちにはそれを拒否する理由はありませんよ。しかしですね」

そういって、アンセルが問題として掲げたのはレイカー家についてであった。

レイカー家の名前を俺は次ぐ予定である。そのため、将来のことも考えていったいこの人はどうするのかとアンセルは聞いた。

ハルもがレイカー家の名前を継ぐと宣言したのなら、彼女はルークエルリダスさんの許可を得るためにおそらく、試練を受けなければならない。

それを受ける覚悟はあるのか、と。

「ええ。ダウンファールくん、じゃなくてシルバくんが私を求めるのなら、この世界でよく知る人がシルバくんしかいないこの世で、私はなんだってしてみせるけれど」

ハルが何を考えているのか、俺にはよくわからないけれど。

彼女の頭のなかで、俺への気持ちがかなり前世よりも強くなっているような気がする。

彼女は俺を嫌いになっていなかったようだ。

よかった、本当によかった。

「俺の分も、頼んだぞ。世界を、変えろ。そして俺たちの名前を永遠に刻め」

ハルの発した言葉は、俺が前世で発した最後の言葉だった。

「あの世界の私は、ちゃんと言いつけ通りに世界を変えたよ。そしてシルバくんの名前はあの世界で、永遠に語り継がれる」

ちゃんと約束は守った、と彼女はそっと俺を抱きしめた。

「だから、今回は私との約束を守って」

俺はハルと何か約束をしたのか……？

ああ……あの時か。

「今世ではダメだったけれど、来世で一緒に生きよう、だったか」

たしか俺が、世界大戦に向かう前彼女に約束したことだ。

最後に、最後の最後にあの地で強調された言葉、やっと思い出した。

違う。ずっと俺はそれを覚えていて、でも表面では忘れていたことにしていたのだろう。

だから、彼女のことをずっと思っていたのだ。

「そ。約束、守ってね」

「……わかったよ」

## 295　保身的決心

華琉（ハル）は、前世にいたときよりもどこか落ち着きを持った女性のように感じられた。俺が知っていたときのように優しさは変わっていないようだし朝日のように柔らかい明るさを持っている。

しかし、注意してその表情を眺めれば、いろいろ変わっていることが分かる。彼女が華琉というわけではなく、個体としてのハルが生まれた時がいつだったのか、俺には分からないけれど。

すくなくとも、彼女はそもそも色気を発散する少女ではなかった。出るところは出ているし、引っ込むところは引っ込んでいるそれこそ男を魅惑する体つきをしているが、彼女はそれを主張することは一切なかったし、逆にそれを何とか見つからないように偽装していた節すらあったと思う。

しかし、今目の前にいるハルは落ち着いている。

俺が今までみた中でも、言い方を変えれば成熟していると称するべきなんだろうか。

今の方がいいとか、昔の方が良かっただとかそういうことは言わないけれど、ただ印象としてそう思っただけなのだ。

「ん？　どうしたの？」

ハルの声を聞いて、はっと我に返る。

思えば、ずっと彼女の方を見つめていた。

今、俺たちはショッピング中で、女の子3人が並んできゃっきゃ

っとショッピングを楽しんでいる。
ハルはこの世界に来て、娯楽としての買い物をまだやっていなかったらしく一層楽しんでいるようだ。

「いや、なんだか夢みたいだなって思ってさ」

今世と前世の彼女が一緒にこうやって交流してるって言うのは、本当に不思議なものだ。
俺としては奇跡にも近い何かを感じるのだが、どうなんだろう？

ハルはそんな俺を見て、なにも言わずに2人に連れられて行ってしまった。
俺は店の前で待機。普通の女性用アクセサリーは見てもわからないし、リンセルもよく分かっていないようでアンセルが説明している姿が見て取れる。

「ちょっと電話してくるよ」
「どなたにですか？」

俺は3人にそう伝えて、首を傾げるアンセルに片目をつぶって見せた。

「ルークエルリダスさんにだよ」

『ふむ。そうだね、夏休みの間にそのハルっていう娘(コ)をよこしてくれないかな。試験を受けさせたいしね』

ルークエルリダスさんに華琉のことを説明すると、さすがにもうやりすぎたか唸られた。

もう3人目だからね、しかたないね！

なんていうことを自分の頭の中で考えつつ、自分の中で考え方を整理する。

試験って言うのは、レイカー家の名前を継ぐのに相応しいかどうか判断するもののことだ。それは戦闘であったり、また身だしなみのチェックだったりするけれど、今回の場合はなんなんだろうな。

少なくとも、護衛の最強と戦うという部分で考えればゼロ＝オールはこっちにいるわけだから、帰省するとしても裏で帳尻あわせることは簡単だろうし、それなら意味がない。

じゃあどうするのか、俺にはよく分からないけれど承諾した。

さすがに女性に交通手段を使うなとは言えなかったらしく、ルークエルリダスさんはアンセルリンセルと一緒でいいと。

『まあ、シルバ君のことだからなぁ。私は君の選ぶ女性に落胆したことは一度もないが、突拍子もない人をよく呼んでくる』

たしかに、一人目はエスペランサ。いきなり神である。

その次が傭兵のヒョウリで、今回は……。

まだルークエルリダスさんに聞かれていないので自分からは言わないが、異世界人のクローンだからね。

「そのかわり、今年中には討伐に向かいますよ」
『……そうか。まだ早いかもしれないが、絶対にかえってくるんだ』
ルークエルリダスさんの、声のトーンが変わったのが感じ取れる。
特に最後の言葉は、真に迫った様子のものである。
『リンセルとアンセルが悲しむ。私たちも折角納得できる跡取りが出来たのに居なくなる。そして2人を政略結婚させなければならなくなる。いいことが一つもない』
あー、うん。
それを聞くと、やはり帰ってくることが必要なのだなと考えてしまう。
世界を守るために、救うために戦いに向かうわけではなく、大切な人たちとの生活を守るために戦うんだなと実感できた。
まあ、確かに世界救世よりも保身的な考えの方が現実味を帯びて俺もやりやすい。
こんなことといったら、英雄願望のあるひとにブン殴られそうだが。
「やっぱり……今年度の生活が終わったら行きます」
『分かった。そのときは1度レイカー家に帰ってきてくれ。渡したいものがある』
そういって電話を切り、俺はちょうど何かを買って店から出てきた3人の方に戻った。
どうやら、ブレスレットを買ったらしい。同じデザインだが、配色が違うもの。リンセルは水色基調、アンセルは赤基調、ハルは橙

基調となっている。

「シルバ君の分も買ったんだよ。つけてー」

あまりアクセサリーはいらない、と言っていたリンセルがつけているのだから、何か特別な意味でもあるのだろう。

俺は礼を言って受け取ると、それを早速つけてみる。

黒……ではなく濡れ羽色かな。少しだけ茶色がかっていて、どこか神秘さも感じ取れる色をしていた。

「ありがとう、大切にするよ」

俺は彼女たちを見つめた。一人一人の目を見て、彼女たちが困惑するのも構わない。

「大切に、するよ」

## ２９６　オチた傭兵の不安（前書き）

一方その頃ヒョウガとヒョウリは、というお話。

## 296　オチた傭兵の不安

「なんだか、本当にいやぁな予感がするんだけれど」

ヒョウリははぁとため息をついて、空を仰いだ。

今、ふたりは何をやっているのかといえば、夏休みのために着々と準備をしているところだ。

主に必要なものは武器である。途中迄交通機関は使用可能ではあるが、龍眼族の集落に向かうためには道なき道を歩く必要が必ずある。

整備されていない場所を歩き回らなければならないのだ。防寒具や防具はシルバが魔武具で用意してくれると言っている故、残りは自分たちの身を守るための何かが必要ということだろう。

そんな中、やはりと言うべきか傭兵。小道具ですら暗殺時には武器にしなければならない彼女たちは、自分たちの彼氏から支給された高級品の数々に眼を見張る。剣1本にしたって、それらは全て魔剣鍛冶師「シルバ・レイカー・エクアトゥール」が創った完全なる逸品である。

「何が嫌な予感なのか、ヒョウガには脳が足りないのかわかりませんけれど」

ヒョウリの言葉を受けて、妹分でもあるヒョウガは首をかしげた。

そんな彼女を見つめて、ヒョウガは首を振った。

「帰ってきたシルバくんに、新しい彼女ができていないか、っていうこと」

「失礼ですが、そこまで彼が女好きだとは思いませんけれど」

女性1人をきちんと女性として、特にヒョウガやヒョウリのように傭兵という汚れ仕事をしている人々のことも対等に扱おうとする人間というのはこの世界かなり珍しい存在だ。
ヒョウリはそれをわかっていたし、わかっていたからこそなんだかなぁと考えてしまうのだ。

「シルバくん、好みが広すぎるんだよね……。私が見た限り、美少女であれば誰でもいいって感じがする」
「ヒョウリ姉には、自分が美少女にみえると？」
「ええ、そうだけど」

次はヒョウリではなく、ヒョウガがため息をつく番であった。
ヒョウリは自分の容姿について、十分すぎるほど理解できている。だからこそ、それを知っているからこそ自分の容姿を気にかけるし、だからこそ自意識はとても高い。
女は自分に向けられた視線の意味を理解できているのだ。とくに、相手の顔や声色で判断する必要が大いにある傭兵の仕事。それがさらに彼女の意識を高めていく結果になっている。
さらに、彼女には相互に守りあえる男が出来てしまった。最初は大嫌いだったはずなのに、自分は彼の何に惚れてしまったのだろうか、とヒョウリは自分でも頭をかしげるが答えは出ないし、これからも出なかった。

ただ、彼の暖かさに自分が心を許してしまったのだろうと予測することしかできなかった。

「ヒョウガは、彼が美少女なら誰でもいいと思っているとは思いません」
「ほー」

「そうですね、言い方はアレですが……。少し心に闇を抱えている人を好んでいるかな、と考えてしまいます」

ヒョウリは、アンセルとリンセルからシルバがなぜ彼女たちと同時に付き合い始めたのか、訊いたことがある。

そのとき、彼女が聞いたのは全く恋愛感情と関係ない始まりである。もともとはヒョウリはシルバが大嫌いだったし、事あれば殺そうと考えていた時期もあった。

でもいつからなのだろう、彼に心を許したのは。

ヒョウガは、難しい顔をしているヒョウリをじっと見つめていた。

「私がもし強くなることを諦めたら、私は捨てられるのかな」

そう考えてしまうほど、彼女の精神はシルバに依存し始めていたのだ。

もちろん、シルバがそんなことをすることはほぼない。シルバは前世から反省して見捨てないことを心がけているし、またどうしてもという時は命を差し出す覚悟でいるのだ。

シルバに限ってそんなことはない。そう思いたかったヒョウガだが、もともとそういうのに疎い彼女、考えれば考えるほど深みにハマってしまうものである。

「ヒョウリ姉、なんだか丸くなりましたね」

「……そんなことない。もん」

もん、だなんて今まで言わなかったのに、と。

ヒョウガは内心吹き出しそうになりつつ、自分の姉貴分が頭を悩ませている姿をみて、どうも微笑ましく想ってしまったのであった。

# 297　帰宅

「ほらね、私の言ったとおりになったでしょ」

ヒョウリは、俺をみて隣りにいるヒョウガに苦い顔をした。

ヒョウガは「ちょっと雰囲気が違いますけど」などといってなんだか違うということを考えたのだが、姉貴分が苦虫を噛み潰したような顔をしているのを見て、頷くしかなかったようである。

俺は、帰ってきて最初にハルの紹介をした。後回しにしていたって仕方がないし、クインやレオは俺の隣りにいる人が一体誰なのか、ずっと知りたがっていたようではあったから。

「つまり、そのハル・ナグモという女性は。もともとこの世界の人間じゃないってことでいいんだな？」

クインがそんなことを言っていたが、正直「もともとこの世界の人間じゃない」人間なんて、この場では結構いるでしょうし。

俺もそうだし、少なくとも予測だがヒョウガとレオも違う。

根本的に俺たちと違うのは、この世界に適した姿に作り変えられていないという部分だけだな。

さらに、彼には人神ネクストの加護もあるのだろうし、それをも考えるとアレだよなぁ。

「まあ、そういうことかな？」

ハルはうなずいて、クインの方に向き直った。

彼女にクインの身分は明かしていないが、ハルもそんなことでい

ちいち物怖じしたり、へりくだったりしないひとだから別に問題はないのだけれど。
　というか、ソレもクインは望んでいる。クインは自分を普通の人として扱ってくれる人を求めているのだから、逆にハルには真実を教えないほうがいいのかもしれない。

「うーん、失礼だけど、貴女は普通の出じゃないわよね？」
「……私はカエシウス聖王国の現国王だ」
「やっぱり」

　……こうやって、ハルっていうのはとんでもなく勘が鋭い人なのだ。
　こちらが考えているよりも遥かに勘のセンスが上だから、どうしても隠すことなんて出来ない。
　そもそも、ハルに対しては何かを隠せる方が難しいだろう。

「済まないが、変にへりくだったりしてほしくないというか」
「ふふ、そんなことしないよ。私は前の世界でも、こういう人に囲まれていたからね」

　ふぅ、と安堵するように息を付くクイン。レオもその姿を見て安心したのか顔が緩んでいる。
　まあ、俺としても知り合いがギスギスしているのはあまり見たくないものだ。

　別に全世界のみんなが仲良くなればいいなんて思っていないけれど、せめてコミュニティーの中でくらいはって感じてしまうのは普通だろうと考えているけれど？

「彼女のことは、これからどうするつもりなんです？　シルバさん」

「とりあえず、レイカー家が根回ししてくれるそうだから戸籍を所得して、それからだなって」

少なくとも、ルークエルリダスさんの気にいるように彼女が今後どうしていくかが問題なのだろうけれどもね。ルークエルリダスさんがどんな試験をしてくるのか、本当は一緒に対策を考えたいところだが、正直夏休みはもうすぐで。

俺も龍眼族の集落に行くための準備はしなければならないわけだ。リンセルやアンセルにこのことは任せるとしなければ。

「ハルが良ければ、私の国から正式に出そうか？」

「本当？　嬉しいなぁ」

実に、実にぽわぽわとした雰囲気のお話だなと思う。平和っていうのは本当、こういうことを指すのだ。変に争ったり、憎みあったりしないほうがいいに決まっている。

俺がそんなことを言うなって一部の人からは言われそうだが、少なくとも相手がこちらにちょっかいをかけなければ狩りの時以外は獅子王だって噛みつかないだろう？

「ルークエルリダスには私から話をつけておこう。試験を受けるらしいが、その前に王城へおいで」

「うん、わかったよー」

やっぱり、このコミュニティーは暖かいなぁ。

ここを護るためにも、俺は努力しないと。簡単につき崩せるようなものではないとは思うが、それでもなんとかしないとなって。

「さて本当に準備を進めないと。何か不備はあったかな、ヒョウリ」

## 297　帰宅（後書き）

この章はこれでおわり。幾つか小話書いて、次は集落編ですね

## 298　小話　華琉はハルになる。

眼が覚めたとき、目の前にはもう一人の私がいた。
こちらを心配そうな眼で見つめているもう一人の自分。その隣には至極真面目な顔をした男……現人神の姿も会って、私は自分が何故ここにいるのか、今から何をすべきなのかを瞬時に理解することが出来た。

「成功したようね、ネクサス君」
「南雲華琉という少女から、ダウンファール・デスムーンを今でも受け入れたく思っている部分を抜き出した」

その後も、男は私に説明をしてくれる。私は南雲華琉という存在から、幾つかの要素を取り出したクローンのようなものだと。
それなら問題はないんじゃないかなと想って、私は用意された備品を見つめる。
なるほど、異世界に対応させるためのものとしては充分なものが揃っている。

……私の新しい相棒になる銃。世界に適した通貨。
そして、そちらで万が一の時に使う加護としての幾つかの道具。

私は、これから世界を離脱し、ダウンファール君が存在している世界へ旅立つのだ。
この世界に存在する結婚するべき人はもう決まっているけれど、それは別の私がその未来を担えばいいのだ。私はあくまでも別個体で、あちらの世界では私が本体となる。

「何か他に必要な物はないか？」

「いいえ。もう少しだけ、明確な目的がほしいところだけれど」
「いや、俺からは何もない。華琉は華琉として、ダウンファール…
…じゃなくてあの世界ではシルバだったかな、彼と暮らしていけれ
ばいい。特に制約はもうけないし、設けるつもりはない」

つまり、私は自由にしてもいいってことなんだね。自由っていう
のは正直かなり難しいことだけれど、頑張ってみて何も問題はない。
私は、この世界でこれからも生きていくもう一人の私を見つめた。

「この世界のことは任せた、よ？」
「そちらこそ、ダウンファールくんによろしくね」

お互いに、何を言うかはわかっていた。だって私は貴女で、貴女
は私なのだから。
自分がもう一人いるなんて不思議な気分だ。でも、それはこの世
界でもまだ許されていない。

だから、私は一刻も早くこの世界からいなくならなければならな
い。
南雲華琉としてではなく、これからはハル・ナグモとして生きて
いくのだ。

「じゃあ、いってくるねネクストくん」

私は、自分を創りだした現人神にそうやって声をかけた。
彼は何も言わず、ただ頷いている。
どういう意味なのか、私にはわからなかったけれど。なんとなく
言いたいことは感じ取れる。

「開くぞ」

異世界へのゲートは、今開かれた。
私はこの先の世界を知らない。でも、不思議と不安はなかったし、もう一回彼と会えるというのがどうしても楽しみで仕方がない。
もしかしたら姿形も変わっているのかもしれないけれど、私になら彼がどんな存在になっていたとしてもわかるだろうから。

「まっててね」

# 299　前世今世

失ってからよく分かるのは、大切な人がそばにいる間はどうしても、それが大切な人だったとは感じられないということだった。

私は天王子学園に入学して、1年生の間にダウンファール君と出会い、恋人になった。

本当はネクストくんが好きだったのだけれど、それは冷ちゃんに譲って、妥協での恋人関係であった。

でも、時間がすぎるに連れてやっぱり一緒にいると情が移る。私はいつのまにか、ネクストくんのことを好きでいながらもダウンファール君のことを好きになっていた。

破局というのは突然で、ダウンファール君の正式な婚約者という存在が出てきて、私達の関係は終わりを告げた。

本当にあっけなかったな、ッて思う。すくなくともそれから、ダウンファールくんは誰とも交際をすることなく、ずっと何か思いつめたように口数も少なくなっていたような気がする。

それでも、ネクスト君の近くには絶対にいたし、話をする分には問題のない距離だったから良き友人でいた、はずなのに。

大戦で、私をかばいながら戦った彼の姿を、私は忘れることが出来ない。

忘れようとしてたまたま近くにいたなんて言ったけど、それは嘘で。

ただ、私に向かってくる脅威をすべて彼の身体で受け止めた彼が、

本当はずっと私の事を好きでいたなんて思いたくなかったのだ。
それを考えてしまうと、それにきづけなかった自分がとんでもない罪人のように見えてしまうから。

もういいから離して、と何回叫んだのかな。
でも、彼はそれを承諾しなかったし、首をふるばかりで一言も声を発しなかった。

最期の時まで。

「……シルバ君」

私は、隣で難しい顔をしている今世の彼を見つめた。彼は今、姿と形を変えて私の隣にいる。

竜と人間の間のような人である、顔と身体にいくつかのウロコが付着しているし。
でも、全然怖いと思わない、相手は性格が少々変わっていようとも、ダウンファール君に変わりはないのだから。

「ハルに何か作ってやりたいけど、銃はどうやって作ればいいのかわからない」

ソレになんだそのゴツい銃は、と彼は手にした私の銃を見てため息を付いた。
正直、かなり重いと思う。思うけれど、いつもこういうのを担いでいるわけだから、もう慣れっこだ。

これは、私の世界で使っていた、簡単にいえば自分の魔力を注入して増幅、射出する装置。
例えれば、私は魔力を自分の手から放出することが苦手だ。出来ないことはないけれど、明後日の方向に飛んで行ったり、フレンドリーファイアしたりってろくな事にならない。

だから、銃を使ってきた。暴発することはないし、少々かさばるけれど私の大切なものだ。

「ハルは、魔法は使えるの？」
「詠唱方法分からないからわからんない」

そういうと、彼はきちんと日本語でそれを書いてくれた。
最初に属性を唱えて、次に性質を唱えて、そして魔法名、ね。

「自分の属性ってどうやって知るのかしら」
「まあ、普通に考えてハルは火属性だろ」

まあ、調べる方法はあるけれど、とシルバくんは水晶球のようなものを私に渡した。
それに触れると、水晶球の中で燃えるように赤く揺らめき始めた。

なるほど、やっぱりシルバ君の予想はあたっていたわけだ。

「これは、なに？」

「名前は決めてないけど、俺が作ったものだ」

……シルバくんは、私の知らない技術を持っているらしい。

と、この世界にずっといたというのに、シルバくんのことを何も知らない自分に気づく。

外で、遠くからタイミングを見計らうことしか出来なかったから。

そう、考えれば考える程、自分の中で彼の存在が大切になる。

もう一度、あえて良かったんだ。

「……あのね、シルバくん」

「ん」

「……もう一度あえて、良かった」

彼にそう伝えると、シルバくんは何も言わず、固まっていた。

「あえて良かったよ」

聞こえなかったのかなと思い、もう一度話しかける。

でも、それが私の勘違いだと判明するのに少しの時間もかからなくて。

彼は、泣いていたのだ。

「……どうしたの？」

「なんでもないよ、華琉」

そういって私を抱きしめたシルバくんは、私の知っている、寡黙に学園生活を送っていた彼と何処か雰囲気が似通っていた。

## ２９９　前世今世（後書き）

次で３００話なので、ちょうど新しい章を始めようかなって思います。
次章は華琉とシルバの２人で物語が別々に始まります。

## 300　解散の時　（シルバ）

「さて、準備もできたしいきますか」

今から、俺とリンセルたちは別行動になる。
俺は俺で傭兵と神とで一緒に龍眼族の集落に向かう。
ハルはこちらではなく、今から分岐してクインやレオと共に王城へ、アンセルとリンセルはレイカー城へ向かうことになるだろう。

ハルはなんだか、ちょっと楽しそうに浮き浮き顔で2人を見つめている。この世界に興味が有るのだろうか、本当はよくわからないけれど。
でも、やっぱり少し考えて彼女と一緒に居られた時間は1週間ほどしかなかったと感じてしまった。
もし、集落に行くということが決まっていなければ、俺の身体に異変が起きていなければ。
もっと長い時間、彼女と一緒に入られたのだろうか。

あそこまで思いつめた人に、やっと会えたというのに。
気づけば俺は、目の前にハルがいることにすら眼で捉えることが出来なかった。

「また、レイカーさんのお城でね」

それは、つまり彼女が試験を合格してみせるとそういう意味だったのだろうか。
しかし、俺は彼女に何も声をかける事ができなかった。

やっぱりダメだった。あの時、彼女に「あえて良かった」と言わ

れて思わず涙がこぼれてしまった時以外、俺は彼女に触れられずにいる。
ここにいるのはもしかしたら俺の妄想が創りだした夢で、彼女に触れるとソレが霞のように消えていくのかと考えてしまったから。
やっぱり、俺は誰が考えるよりも脆い存在なのだと、何度も考えることが出来た。強がっていたとしても、寂しさやそれらをすべてきちんと封印していたとしても、それはやはりなんというか、自分に嘘を付いているという感覚だな。

「そんなに心配そうな顔をしないで。……ほら、アンセルさんたちにもさようならは言わなくていいの？」
「ああ、そうだな」

リンセルとアンセル、それぞれに別れを告げて俺はもう一度ハルの方を向いた。
双子を乗せたデルエクスはすでに出発しており、視界から消えようとしている。もう夕暮れだし、それもそうなんだろうなと考える。
レイカー城はここから更に3時間有する。渋滞はほぼないと思うけれど、それでもつくのは夜遅くなってしまうだろう。

「クイン。ハルのこと、頼む」
「いつかシルバにそうやって言われたいものだな」

クレインクインは、そう皮肉を言って舌を出すと運転手に出発を命じた。
ハルはこちらにしばらく手をふっていたが、それも視界から消えるか消えないか程度の当たりで前を向いて、景色を確かめているように感じられる。

「私達も、集落に近い街で宿を探しましょう」

エスペランサの声にはっとして、俺は自分が今やるべきことを思い出した。

そうだな、彼女たちに体の異変の意味をきちんと伝えてやるべきだな。今はそちらを先に優先するべきだろう。

彼女たちを安心させるという意味でも、それは必要なのだから。

「ヒョウリ、ヒョウガ。一応野営の予定も考えたいのだけれど、野営でもいい？」

少なくとも、こういう時のために魔武具でテントは創り出してある。

何回か実験で使ったことはある。何か特別な事はないけれど、とりあえず人が5人ほど軽く生活できるほどの亜空間を作り出せてはいる。

魔剣貯蔵庫の亜種と考えてもいいだろう。とにかく、あとは野営でもいいかを……。

あ、そういえばこの2人は傭兵だったな。

「問題無いわよ」

「こちらも問題ありません」

「キャンプなんて初めてなのですもの」

エスペランサは、むしろ野営を喜んでいるようにも感じてしまう。

ま、こんな少女たちなら問題はないか、と考えてしまう自分がいる。

とりあえず、目的地に向かおう。そこから考えても、問題はない

のだから。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8865bw/

龍眼族の異世界魔剣鍛冶

2015年11月6日05時00分発行